THE CENTRAL REVIEW

中央公論

七月號

第四十年　第八號　第四百五十號

此廣告を見て御申込の方は中央公論愛讀者なる旨御申添を乞ふ



卑猥なる廣告の申込みは謝絶す 中央公論社

頭が涼しく
澄み渡る

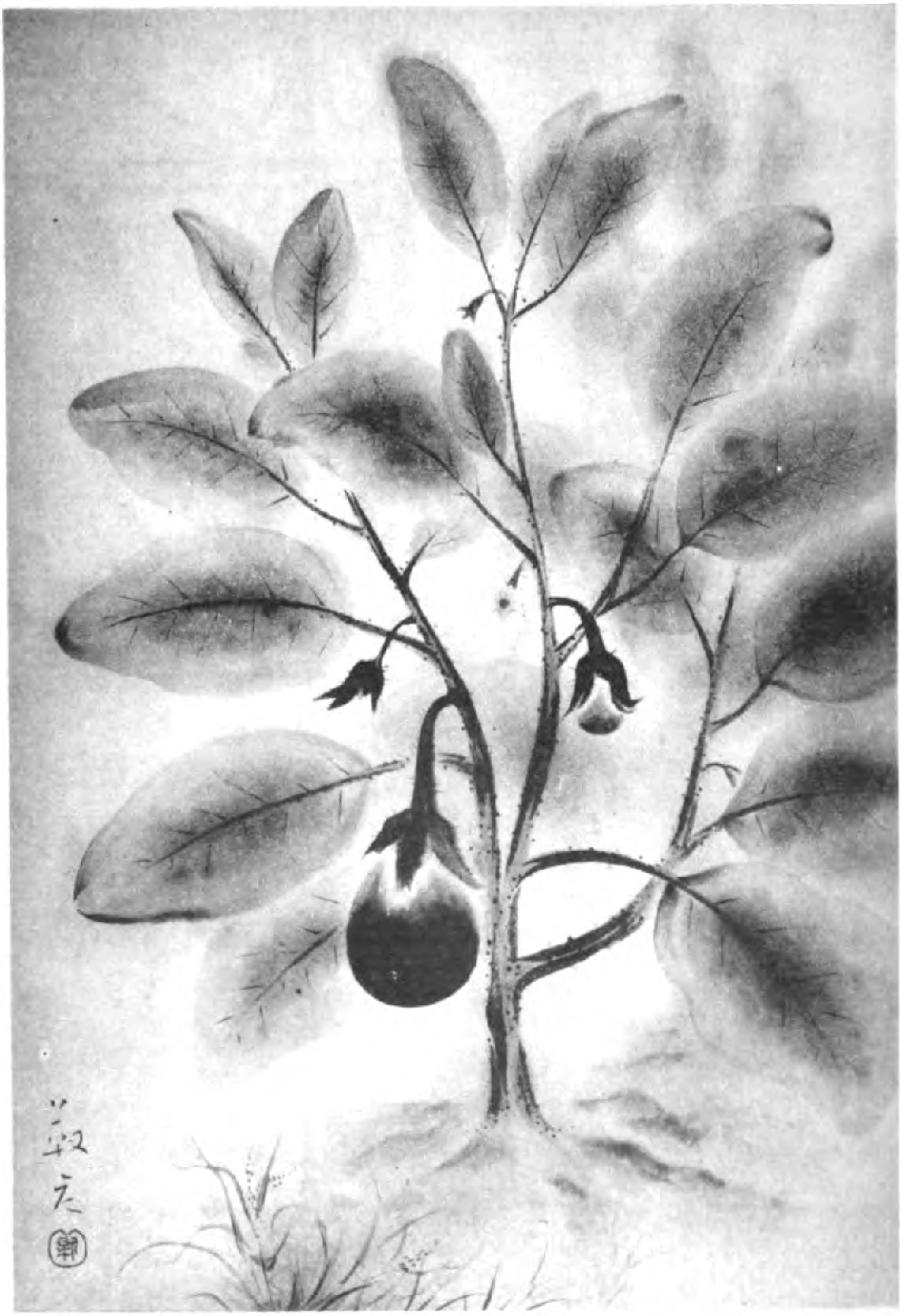
鷹(タカ)印麥稈帽子



純品質主義の……純国産品

東京
大阪
株式會社 高橋製帽所


クラブ煉歯磨
優良な技師に依て
作られた船來品に
優るクラブ煉歯磨
一日の能率
を増す朝の
クラブ歯磨
含嗽用 クラブ水歯磨



墨茄圖　安田靫彦筆

虚弱者を强健化す

ブルトーゼ

ブルトーゼは八大醫學博士の御推奬と且帝國大學病院、赤十字社病院其他各府縣立病院等に於て盛んに御採用を蒙りつゝある最も理想的補血强壯增進劑にして人體肝臟中に含まるゝ鐵白蛋酸と同性同態の人工集成したる液狀製劑なり併して左記特長を有す。

一、芳香美味にして我國民固有の嗜好に適し口に快く婦人子供も好愛す。

二、絕對に副作用なく能く造血機能を亢進し新陳代謝を旺盛ならしめ食慾を增進す。

三、速かに同化吸收され赤血球を增加し精力を旺盛ならしめ身體榮養上强力なる作用を呈す

故に急性慢性貧血病、萎黃病、腺病及肺結核其他諸疾患より來る榮養不良並に衰弱、神經衰弱、病後快復期姙婦、授乳婦、產後、虛弱羸瘦者等に顯著なる効を奏す。

種類及賣價

補血强壯榮養增進劑	單味 ブルトーゼ	小瓶 半月分 金二圓	大瓶 一月分 金三圓
神經性疾患特効劑	アルゼンブルトーゼ	小瓶 半月分 金二圓三十錢	大瓶 一月分 金三圓八十錢
腺病質特効補血强壯劑	ヨードブルトーゼ	小瓶 半月分 金二圓三十錢	大瓶 一月分 金三圓八十錢
健胃補血强壯劑	キナブルトーゼ	小瓶 半月分 金二圓三十錢	大瓶 一月分 金三圓八十錢
呼吸器系疾患特効劑	グアヤコールブルトーゼ	小瓶 半月分 金三圓五十錢	大瓶 一月分 金五圓五十錢

賣捌各地藥店

說明書進呈

發賣元 本舖 藤澤友吉商店

大阪市東區道修町二丁目（振替大阪一七四一番）

東京支店 東京日本橋區本町四丁目

京城支店 京城府西小門町四十二

大正十四年

中央公論

七月一日發行

七月號

第四十年第八號

第四百五十號

小題小言錄

○暴力團の徹底的掃蕩

凡そ立憲治下に於て、何が最も恥づべく、何が最も憤ほろしき事柄であるかと問はれるならば、僕は何の躊躇する所なく言下に、それは暴力團の存在の默認であり、暴力團の横行の放任であると答へる。

政治は權力によつて運用される。而して權力とは統制せられたる、若くは合理化せられたる力である。單なる力と、暴力とは、事實上、若くは哲學上、寧ろ之を區別するを難んずる程であるが、權力と暴力とは、法理上截然たる二つのものであつて、之を混同することは斷じて許されない。而して現今の世界に於て、權力を行使し得る單位は、國家であつて、國家以上の國際團體は未だ一致して之を共同目的に使用する程度に到らず、國家以內の諸種の團體も、國家の命令なくしては之を行使することを許されない。而して國家が權力を行使するの形式は、平常にあつては警察權として、非常時にあつては陸海軍の兵馬の權としてあらはるゝを常とする。若し此外に權力發動の機會ありとすれば、それは國際關係がもつと進歩發達したる曉か、又は未だ近世國家の形體實質を備へざる非文明國內に於ける出來事であるに相違はない。

若槻內相も第五十議會開會中、暴力團を掃蕩すべしと誓つた筈だ。太田總監も議會後暴力團を絕滅すべしと宣言した筈だ。其後內田良平氏等の拘束などあつて、內相總監の宣言と關係が有るやら無いやらハッキリせぬやうの程度に止つてゐたが、六月二十二三の兩日に亘り、警視廳管下の七十七ケ所の警察署長を召集して、いよ〱暴力團と曖昧カフエーとの取締に徹底的に着手すべしとの事だ。どうか形式的でなく、根本的に、精神的に、徹

底的に、掃蕩絶滅して貰ひたいものだ。

凡そ物其平を得ざれば即ち鳴るで、世に不平團體が在り、暴力團の存するが如きも、其根本を正せば個人の受けた不正不幸やら、社會組織の缺陥やら、其處に何等か恕すべき、同情すべき事由はあるだらう。あるだらう所ではない。今の社會は寧ろさう云ふ不平不滿の醱酵醞釀すべき酵母所たるかの如き觀さへある。然しさう云ふ不平不滿を洩らすべき手段方法は、何所までも立憲國、法治國たる範疇内に於て見出すべきであつて、斷じて、暴力に訴ふるを許さゞることは自他共に深く心に銘せざるべからざる所である。

立憲國として耻づべく、愼ほろしき事は、今の日本の國内に數限りなくある。而かも帝都の眞中に於て、警視廳の直轄管内に於て、暴力團の存在を默認し、其横行に放任するが如きは、最も法治國の精神に背反する事項であつて、今初めて之に着手するが如きは、日三竿にして曉鐘を撞くの譏を免れざるも、後れたりと雖も爲さゞるには勝る。どうぞ徹底的にやつて、後れたる罪の取返しとせられんことを希望する。

○支那擾亂に善處せよ

對支方策は何時でも二つに分れ得る。既成勢力に重きを措くもの一つ。新興勢力に眼を着くるもの他の一つ。今回の上海其他に於ける擾亂も、歸する所は、支那新興勢力の、在來の外國人横暴に對する爆發に外ならぬやうである。支那人にも固より自業自得といはるべき幾多の非難缺點はあつたであらう。併し支那にも徐々として、而かも確實に成長しつゝある新興勢力の存することを認め、之れに善處するを謬らざることが、日本初め列國の對支方策であらねばならぬと信ずる。

○「合同」「分離」「御意のまゝに」

憲・政遂に分裂の運命に在りといひ、政・本再び昔日の腐れ縁を繫ぐべしともいふ。所謂政治屋なるものの個人〲の利害浮沈、精々で黨派〲の盛衰大小を目標とする、我國の政治なるものは、我等一般國民の生活とは殆んど沒交渉に近きものと云つてい〻。だから喜んだり悲んだり、笑つたり泣いたりは、總て彼等仲間同志丈けの事で、我等は『どうでも勝手になされ！』と御挨拶する丈けだ。全く以て「As You like it」だ！

○青春を樂しまんか、老後の爲めに計らんか

青春再び來らず、萬事を抛擲して、ひたすら春青時の快活を逐はんか。之も一つの人生觀であらう。青春夢の如し。夢覺むれば長き老後の現實あり。此時悔めども詮なし。寧ろ短き春の夜の夢を結ばずとも、永き秋の夜の涼しき寢覺めを樂まんか。之れも亦一つの人生觀であらう。

年若き人の思ひ惑ふ人生の行路は數限りなくある。併し青春を樂まんか、老後の計をなさんかなども其中の最も主もなる題目であらう。併し此答は六つかしい。何人も納得するやうに答へ得るものは恐らくは少いであらう。

「更に一層大きな不幸を持ち來さゞる快樂は善であつて、更に一層大きな幸福を持ち來さゞる苦痛は惡である」と云ふ意味の誰やらの言葉などは此問題に對して、非常に參考になるものと思ふけれども、果して更に一層大きな不幸が來るやら、幸福が來るやらは、銘々の運命にも、叡智にも依るべきことを思へば、依然として五里霧中に彷徨するの譏を免れぬ。而し其處に大體の見込を立て、見切りを附け、青春には青春の樂みを取り逃がさす、老後には老後の樂みを味ふの途を講ずるこそ、人間通、若くは達人といふべきだらう。」

○大町桂月翁逝く

大正十四年六月十日、大町桂月翁胃潰瘍を疾んで青森縣蔦温泉に逝く。享年五十七才。蔦温泉は翁晩年の最愛の地にして、最後の二三年は此温泉に在り、村人翁を崇むること神の如く、村人の懇請によつて、今年に入りて籍を此處に移せる程なり。之をその遺言及び辭世の歌等に看るも、翁は此世に思ひ遺すこと最早や多からず、且つ此温泉に身を淨めて極樂淨土に首途せんことに滿足せられ、臨終に近く、全くの佛顔となられ、世俗の所謂大往生を遂げられたるものに似たり。

余等中學生たりし時代は「花紅葉」「黄菊白菊」「文學小觀」を愛讀し、翁は一個の「文學者」として余等に感化を及ぼせり。其後翁は專ら「學生訓」其他によつて、年々文弱に流れんとする學生に向つて古武士的、維新志士的、日本男子的精神を鼓吹する「青年教育者」として貢獻する所最も多く、晩年に至つては專ら前人未踏の高山大嶽、深潭幽谷を跋渉し、日本の山水を天下に向つて紹介するを以て自己の天職と信ぜられたるものの如し。

翁の文縱横自在にして、意のある所文自ら從ふの趣あれども、時として平俗に流れ、時としてマンネリズムに陷る。俳句、和歌は多く志を言ふに止り、高適神往の詩趣に缺くるも、漢詩は日本人ならでは、殊に翁ならでは詠じ得ざる沖澹快潤の作少からず。書は晩年揮灑大いに努められたるも未だ一流大家の域には到らざるが如し。約していへば道藝の士としては天下第一人を以て許し難きも、其人物の光明無我にして神性を帶びたる、其行動の飄逸洒脱にして仙骨を具へたる、明治中年より大正の今日に掛けて最も珍しき一人たりと稱するを得べし。

翁常に曰く「山は富士、湖は十和田」と。今夏八月十日前後、夫人、令息、知己、朋友の手によつて、其遺骨は十和田湖畔に埋葬せらるべしと。今後十和田の勝を探る者翁の墓に詣でざるものあらざるべし。眞の涙ある者の手によつて葬られ、今后幾百年未見の同志によつて弔せらる。翁も亦多幸なる哉。翁以て瞑せよ。（T・T生）

中央公論



第四十年第八號
七月號
第四百五十號

寺院及び國家の社會性と反社會性

長谷川如是閑

一　生存過程に於ける行動と意識との作用

人間の集團生活とは、或る一定の集團的行動狀態である。人間が二人以上集まれば、そこに特殊の行動が起る。多數の人間が集まれば、その集團關係は互に交錯して、例へばA・B・C・Dといふ四人だけの集團生活に於ても、Aの生活

は、B・C・Dの各とそれぞれ異なる關係を生じ、從つてAの行動はその各の異なる關係に應じて異なり、その異なる行動が、その關係に於て働き出される系統に於て、それぞれ所謂集團生活が成り立つのである。Aがその妻や子に對する關係に於て、一系の行動系統が存在するが――家族といふ集團の生活――それと同時に、友人達との關係に於てはまた別種の行動系統が存在し、更らにAと彼れのいろいろ異なる業務上の關係をもつ人々との間に於ては、また別の行動系統が成り立ち、なほ友人との間柄も、種々の異なる關係があつて、社交的の關係もあれば射利的のそれもあり、協同的の關係もあれば對立的のそれもあり、一時的の關係もあれば永久的のそれもあるといふやうに、その關係の異るに應じて、その間に成立する生活の行動の系統も異るのである。それが所謂集團的生活なのである。故に集團生活とは畢竟、一定の關係的生活に於ける一定の行動の系統である。

行動は、人間の場合には、それが働き出す時に一定の意識狀態を伴ふのであるが、他の生物の場合には、それが甚だ曖昧である。記憶や聯合の作用それ自體が意識狀態であるとすれば、昆蟲にも意識はあるといはねばならず、高等の動物例へば犬・猫・猿・猴類等は可なり複雜な意識狀態を持つとも考へられるが、然し意識狀態の存在が明らかに認められるのは、意識が啻に內部の現象として存在せずに、それが一定の形式で表示されることに依るのである。而して意識狀態を表示する形式は『言語』である。(『行動』は寧ろ潜意識的又は無意識運動である場合が多い。)言語は、或る特別の場合を除けば、必ず意識的である。さうして言語は意識を行動的に表示せずに、單なる意識狀態として表示するので、言語のあることが、意識の存在狀態を殊に明確にすることになるのである。而して言語の完全なものは、ただ人間だけが持つてゐるので、意識狀態も、人間のそれだけがやや確かに認められるのである。その結果、人間に於ては、一定の意識狀態が、一定の行動を目的づけることとなる。すべての行動――殊に生存に直接的な行動――に於ては、意識的に目

中央公論



第四十年第八號
七月號
第四百五十號

寺院及び國家の社會性と反社會性

長谷川如是閑

一 生存過程に於ける行動と意識との作用

人間の集團生活とは、或る一定の集團的行動狀態である。人間が二人以上集まれば、そこに特殊の行動が起る。多數の人間が集まれば、その集團關係は互に交錯して、例へばA・B・C・Dといふ四人だけの集團生活に於ても、Aの生活

は、B・C・Dの各とそれぞれ異なる關係を生じ、從つてAの行動はその各の異なる關係に應じて異なり、その異なる行動が、その關係に於て働き出される系統に於て、それぞれ所謂集團生活が成り立つのである。Aがその妻や子に對する關係に於て、一系の行動系統が存在するが——家族といふ集團の生活——それと同時に、友人達との關係に於てはまた別種の行動系統が存在し、更らにAと彼れのいろいろ異なる業務上の關係をもつ人々との間に於ては、また別の行動系統が成り立ち、なほ友人との間柄も、種々の異なる關係があつて、社交的の關係もあれば射利的のそれもあり、協同的の關係もあれば對立的のそれもあり、一時的の關係もあれば永久的のそれもあるといふやうに、その關係の異るに應じて、その間に成立する生活の行動の系統も異るのである。それが所謂集團的生活なのである。故に集團生活とは畢竟、一定の關係的生活に於ける一定の行動の系統である。

行動は、人間の場合には、それが働き出す時に一定の意識狀態を伴ふのであるが、他の生物の場合には、それが甚だ曖昧である。記憶や聯合の作用それ自體が意識狀態であるとすれば、昆蟲にも意識はあるといはねばならず、高等の動物例へば犬・猫・猿・猴類等は可なり複雜な意識狀態を持つとも考へられるが、然し意識狀態の存在が明らかに認められるのは、意識が啻に內部の現象として存在せずに、それが一定の形式で表示されることに依るのである。而して意識狀態を表示する形式は『言語』である。(『行動』は寧ろ潛意識的又は無意識運動である場合が多い。)言語は、或る特別の場合を除けば、必ず意識的である。さうして言語は意識を行動的に表示せずに、單なる意識狀態として表示するので、言語のあることが、意識の存在狀態を殊に明確にすることになるのである。而して言語の完全なものは、ただ人間だけが持つてゐるので、意識狀態も、人間のそれだけがやや確かに認められるのである。その結果、人間に於ては、一定の意識狀態が、一定の行動を目的づけることとなる。すべての行動——殊に生存に直接的な行動——に於ては、意識的に目的

中央公論



第四十年第八號
七月號
第四百五十號

寺院及び國家の社會性と反社會性

長谷川如是閑

一　生存過程に於ける行動と意識との作用

人間の集團生活とは、或る一定の集團的行動狀態である。人間が二人以上集まれば、そこに特殊の行動が起る。多數の人間が集まれば、その集團關係は互に交錯して、例へばＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄといふ四人だけの集團生活に於ても、Ａの生活

は、B・C・Dの各とそれぞれ異なる關係を生じ、從つてAの行動はその各の異なる關係に應じて異なり、その異なる行動が、その關係に於て働き出される系統に於て、それぞれ所謂集團生活が成り立つのである。Aがその妻や子に對する關係に於て、一系の行動系統が存在するが——家族といふ集團の生活——それと同時に、友人達との關係に於てはまた別種の行動系統が存在し、更にAと彼れのいろいろ異なる業務上の關係をもつ人々との間に於ては、また別の行動系統が成り立ち、なほ友人との間柄も、種々の異なる關係があつて、社交的の關係もあれば射利的のそれもあり、協同的の關係もあれば對立的のそれもあり、一時的の關係もあれば永久的のそれもあるといふやうに、その關係の異るに應じて、その間に成立する生活の行動の系統も異るのである。それが所謂集團的生活なのである。故に集團生活とは畢竟、一定の關係的生活に於ける一定の行動の系統である。

行動は、人間の場合には、それが働き出す時に一定の意識狀態を伴ふのであるが、他の生物の場合には、それが甚だ曖昧である。記憶や聯合の作用それ自體が意識狀態であるとすれば、昆蟲にも意識はあるといはねばならず、高等の動物例へば犬・猫・猿・猴類等は可なり複雜な意識狀態を持つとも考へられるが、然し意識狀態の存在が明らかに認められるのは、意識が啻に內部の現象として存在せずに、それが一定の形式で表示されることに依るのである。而して意識狀態を表示する形式は『言語』である。(『行動』は寧ろ潛意識的又は無意識運動である場合が多い。) 言語は、或る特別の場合を除けば、必ず意識的である。さうして言語は意識を行動的に表示せずに、單なる意識狀態として表示するので、言語のあることが、意識の存在狀態を殊に明確にすることになるのである。而して言語の完全なものは、ただ人間だけが持つてゐるので、意識狀態も、人間のそれだけがやや確かに認められるのである。その結果、人間に於ては、一定の意識狀態が、一定の行動を目的づけることとなる。すべての行動——殊に生存に直接的な行動——に於ては、意識的に目的

づけられるといふことは案外少ないのであるが、その行動の手段としての意識が、行動を目的づけることは多いのである。例へば、戀愛の行動は、意識によつて目的づけられたのではないが、その行動の働き出す場合に、意識がそれを調節し、又は刺戟することはある。さうしてさういふ過程が人間的戀愛行動の特徴を形作る。ただに戀愛に限らず、人間の行動は悉く、その行動の働き出す過程に意識が加はるのを特徴とするのである。

人間的行動は、それ故に、『意識的』となるほど『人間的』であるといふ風に考へられてゐる。然し、行動と意識との關係を究めるに從つて、人間の場合でも、意識と行動との聯絡が、昔の人の考へてゐたほど精確でないといふことが分つて來た。行動は行動の過程自體に於て進行し、意識の過程はまたそれ自體の過程に於て進行して、この二つが密接することもあり、離れ切ることもあるのである。例へば群集の行動の如きは、人間の意識の過程を全く離れ切つてゐるといふやうに云はれて居る。そこでこの群集の心理及び行動を無意識的心理及び行動であるといふ。群集を研究してゐる學者は、從來の哲學によつて、それ故に、群集の行動は出來るだけこれを意識的にすることが人間的生活の目的であるといふ風に視察する。

意識が行動を目的づけるといふことは、或る意味に於ては人間的生活を說明してゐるものであることは疑ひない。人間は彼れ自身の行動がどう進んでゐるかを意識することによつて、これを修正することを得るのであつて、所謂盲目的行動は、人間の生活を危險に陷れる場合のあることは確かである。然し人間の行動の大部分は、所謂『意識的』ではなく、さうしてその意識的でないことが必ずしも行動の本來の性質を妨げない。行動の本來の性質とは、行動が元來生存の過程を働いてゐるものであるといふ性質である。行動は、さういふ性質を持つ限り、それが生存の過程と一致するのであつて、それに反する行動は生存を危くするものである。意識は常に必ずしも人間をその行動の本質に於て働かせる

ものとは限らない。場合によつては、人間は『意識』するが爲めに行動を過つこともある。無意識行動が却つてその場合、行動をその意識の錯誤から引戻すことになるのである。群的行動の無意識的性質も、それ故に、それが人間の生存過程に於ける行動であるといふ場合には、その無意識性を尊重せねばならぬのである。反射運動といふやうな極端な無意識的行動が、いつまでたつても人間に必要な働きであるのも同じことで、人間は、さういふ無意識行動を働く力を失へば、亡びてしまはねばならぬ。群集心理には、それ故に、人間的生存の行動を働き出す潜意識が含まれてゐることを認めねばならぬ。一概に群集行動を『非人間的』といふことは出來ない。

意識はそれが最も正しく働く場合に於ても、畢竟『行動の意識』である。『行動あつての意識』で、『意識あつての行動』ではない。意識があつてそこに行動があるのではなく、行動があつてそこに意識があるのである。從つて行動そのものの無意識的性質は、どんな人間的行動の根柢にも潜んでゐると思はねばならぬ。即ち群集心理學者が發見したやうな行動の無意識性といふものは、人間の集團的生活に於けるあらゆる行動の根柢に潜むでゐると思はねばならぬ。苟くも二人以上の人が集まれば、必ずさういふ場合に特別の行動が起るのであるが、その行動の根柢に於ける無意識心理が、その行動に對して最も重大な地位を占めてゐると考へねばならぬ。さうして意識狀態は、この場合に、その無意識行動に對して起るのであるが、それは必ずしも一樣の性質を以ては起つて來ない。行動に對して意識がどういふ風に起るかといふことは大問題であるが、玆に必要な範圍でそれを考察するならば、二つの狀態で起る。一つは行動の盲目性に依存する狀態に於て起り、他の一つは行動の生存過程に於ける地位を認識する作用として起る。前者を假りに信仰的意識と呼び、後者を科學的意識と呼ぶことが出來ると思ふ。

信仰的意識と科學的意識との本質を見定めることも容易でなく、今玆でそれを詳說する譯には行かないが、要するに

前者は行動自體が生存の過程を働いてゐるとゐないとに拘らず、行動の或る一定の組織的發展を、それ自體、絶對性として意識するのである。後者はこれに反し、行動が組織的に進行しつつある時に、それが行動の本來の目的、即ち生存過程を働き出す關係、又はそれを妨げてゐる關係を認識するのである。行動は、集團的生存過程に於て、それを促進せしめてゐるか、妨げてゐるかの二つの關係に在る外はないが、信仰的意識は、行動が右のどちらであるかを問はず、その行動の組織を堅くする意識として現はれ、科學的意識は、その行動の組織が、生存過程に於て右の二つのどちらの關係を働いてゐるかを見定めようとする意識である。されば科學的意識は、行動が生存過程に於ける本來の役目を果さんが爲めに、その行動が進行する場合の意識である。譬へて言ふなら、若し水に意識があつたとすると、水は自然又は人間の爲めに壓縮されたり、堰き止められたり、高い所へ上げられたりするが、それこれに拘らず、水は一定の物理的性質を固執する。それは水の生存行動であつて、それが水の生存過程に於ける本來の行動なのである。ところが水の意識は、その時々に、水がいろいろの地位に置かれてゐるその各の狀態を絶對的と考へることがあるとすれば、それは水の信仰的意識である。これに反して、水の生活が不自然の狀態に置かれた時に、水がそれに反抗して行動し、その流動性を固執して、それが一定の水の行動を惹き起す時に、――水車を廻したり、洪水を起したりする――その水自體の生存に伴ふ行動を意識することが、水の科學的意識である。水はその信仰的意識によつて一定の一時的狀態に安住することが出來るが、さうしてそれは必ずしも常に水の生存過程に反した場合とも限らないが、それが生存過程に逆である場合にも、信仰的意識はやはりその狀態に一致した意識として現はれる。その時々に、水はさういふ一時的の場合をそれぞれ絶對的と考へる爲めに、水がその生存に逆ふ狀態から回復しやうとする行動を起す場合に、信仰的意識はその新たな行動を壓迫する働きをつとめる。これに反して、壓迫に對して水の流動性に從ふ運動を認識する意識狀態が即ち科學的

意識である。單にこの二つの意識同士の關係から云へば、科學的意識は、信仰的意識が生存過程に反する一時的固定狀態を固執する時に、その意識を打破して生存行動の發展を認識するのが科學的意識である。

行動の生存過程に於ける一定狀態を、固定的に又絕對的に意識すれば、そこに信仰が起るのである。その靜態が破られて生存的行動が進展する場合に、信仰的意識は、その行動に反對に働かうとするが、科學的意識は、その生存行動と一致して働く。無論人間には信仰的意識は必要でなく、科學的意識だけが必要であると、斷定することが出來ない。前者は人間の本能的行動と同じく、何時までも人間に固着し、さうして反覆される意識狀態であつて、人間のさういふ意識の作用は、如何に人間が科學的に發展しても、全然喪失されるものではない。謂はば人間心理の本能的性質ともいふべきものである。如何に人間が科學的になつても、信仰狀態の本質には殆ど變化がない。例へば言語でも、それぞれ民族的迷信と結びついて、民族的神秘主義がそれぞれ特別の民族的言語を固執してゐるが、さういふことは人類の共同生活に反する迷信であるといふので、言語の法則の科學的組立ての下に、エスペラントといふやうなものが作られた。ところがさういふ科學的意識から出來たエスペラントの使用者は、いくばくもなくして、自然の言語が働いた神秘的性質を承け繼いで、丁度各民族が自國の言語に對して持つと同じやうな信仰意識を、エスペラントといふ言語について持つやうになつた。各國民が自國語信者であるやうに、エスペランチストも亦エスペラント信者であるやうになつた。科學的意識によつて人間の共同符號としての言語を發明し使用する人々でさへも、一種の信仰狀態を持つやうになるといふのを見ても、人間生活の事實として、信仰的意識を無視することは出來ない。それは譬へば、科學が盲腸を無用であるとして、それを切り取り切り取りしても、恐らく次ぎに生れた人間は、依然として盲腸を持つてゐるといふ事實に似てゐるのである。猿のやうな耳をもつてゐた人間が、今の耳を持つやうになつた位の長い年月を經たら知れぬこと、所謂有史

時代位の短年月では、人間の本質的の性能は變化しないと考へねばならぬ。それが今日の進化論の定說でもある。

そこで人間は何處まで行つても、科學的意識に對立する信仰的意識を持つて進むと思はねばならぬ。その信仰的意識が生存過程の動態に反して働くと、もつと生存的の行動がそれに反抗し、同時にその行動の意識作用として科學的意識が起るに相違ないのであるが、一方で行動の盲目的性質が生存過程に反して進行するやうになると、それに依存した信仰的意識が成立することはどうする譯にも行かないが、他方に、必ず同じく盲目的であつて、而かも生存過程を働き出す本質的の行動が起り、さうしてそれを意識する作用が起る。人間の意識的生活とは、それ故に、右のやうな生存過程の意識として始めて意味があるのである。

科學的意識は、生存過程を働き出す行動の意識なのであるから、盲目的行動がさういふ生存的の意義をもつ時には、その盲目的行動に一致する意識として現はれる。例へば所謂群集行動は盲目的であるが、然し常に必ずしも生存過程に反するものではなく、時にはそれが集團生活の生存に必然的の行動である場合もある。（多くの群的行動が動機に於て『生存的』であることは、それが『反射的』であることによつて證據立てられる。反射運動は生存運動である。）その場合には、群的行動に一致する意識として、その行動を組織立てるものは科學的意識である。それは本來群の盲目的動機に反對するものではなく、一致するものである。

前に言つたやうに群集の行動についても、心理學者は群集の盲目的行動を分析して、その盲目性がどの程度まで社會的生存の現在の過程に危險であるかを見極めやうとするのである。然し今日の群集心理の研究は、この危險性だけを主として見出さうとして、群集的盲目行動の社會性を見落してゐる傾がある。群集はいつも愚であるとか、獸的であるとか、反社會的であるとかいふ結論を見出すに力めてゐる傾がある。それも一つの科學的努力ではあるが、しかしそれは

動もすれば群集に動かされる古來からの支配階級の意識を中心とする努力となる處がある。もつと群的行動の社會性を見出す努力をせねばならぬ。群集も無論反社會的に盲動するが、その場合は一定の社會組織の下に、群集が特に反社會的に敎化された場合——反社會的の支配意識で敎化された場合——であつて、全く野放しの群集が盲動する場合は、寧ろ彼等の社會性を壓迫する支配狀態に對する社會群の行動として表はれる場合が多いのである。軍國主義に敎育された明治の中頃の日本人は、日露戰爭の終りに、政府の平和手段に慊らないで燒打ちを行つたが、——それは確かに反社會的の盲動であつたが——然しそれは數百年來日本人が軍國的敎化を受けた結果であつて、その敎化の反社會性が、一時的に群集を支配したのである。だからさういふ軍國主義に反對の敎化が行はれかかつた今日では、群集はもはやああいふ盲動を起すことをしない。が、米騷動を起す危險性は持つてゐる。これは常識で判斷しても社會性の群集的發動であるが故に、誰れもそんな風に云つてゐる。無論その行動の盲目的性質は、もつと意識的に目的づけられねばならぬ。さうしてそれを組織的に目的づけるのが科學的意識である。心理學者は、その反社會性ばかりを高調せずに、群が社會的に行動する過程をもつと科學的に分析せねばならぬ。

群的行動の性質は、それ故に、無意識的即ち所謂盲動的であるが、この盲動が自ら一定の約束を持つところに、その群的行動たる性質即ち社會的性質がある。それは盲目的ではあるが、群的であり、從つて集團生活の一樣式である。即ちAとBとは群に於て必然に同一行動を取る。丁度蟻の群または蜂の群が、今の知識では十分說明できない狀態で、完全に群的に動いてゐるやうに、人間の群も群的に動くことによつて、ただそれだけで、社會的であり得る。それが一時的の行動に終るべき性質のものであつた時には、所謂群的行動たるに止まるが、連續的性質を持つに至ると、そこに制度が發生する。その行動が一定の社會的約束となるのである。その約束の下に、一定の行動が系統づけられる。例へば、親

子兄弟の群的行動が連續性を持つて持續されると、そこに家族制度が生れる。制度はそれ故に、一定の系統を持つ群的行動が社會的の約束となつたものである。

從つてそれは決して意識的行動であることを必要としないばかりでなく、意識的行動は群的行動の盲目的性質を缺くので、群の生活の約束としては持續性に乏しい。言ひ換へれば、制度となる性質に乏しい。故に制度は盲目的行動が無意識的に系統立てられたものであるといふのが普通である。

この盲目的性質を持つが故に制度は丁度心理學者の所謂群的行動と同じ性質を持つことになる。制度が發生し進展する場合は、群の行動が發生し進行する場合と同じやうに、生存過程に對して或は積極的であることがあり、又、消極的であることもある。或る制度は生存行動を壓迫する。つまり約束は、本來、生存行動として起るものでありながら、約束自身が生存を拘束する性質のものであるといふところから、自らさういふ變質狀態を生ずる。人間の行動はその場合に、前に言つたやうに、二つの態度を執る。一つは制度に對する盲目的服從の信仰的態度であり、一つは制度に對する反抗的態度である。而して前者が信仰的意識を產み、後者が科學的意識を產む。

二　群生活の意識としての宗敎

國家も寺院も一つの制度である。從つて上に述べたやうなことが、すつかりそれに當て嵌められる。國家も寺院も群的行動の無意識的發展から產まれ、それを組立てる約束である。而して人間がそれを意識する場合は、その意識が全然その制度の靜態に合致する場合があり、またその動態に合致する場合もある。本論の態度がその後者に屬することは言ふまでもない。

制度は人間の群的生活の約束であるが、前に言つた如く、社會群はいろいろの群的關係から成つて居るので、その群生活の約束である制度といふものも、種々の群行動に關係する。即ちその群の性質や種類に限定されると同時に、その行動の種類や性質に限定される。全群の關係を規定するそれもあり、群の一部の關係を規定するそれもあるといふ風に、群の範圍で制度の範圍が限定されると同時に、群の行動が部分的である爲めに、制度も部分的となる場合もある。多くの制度殊に風俗習慣は、制度の範圍は全群的であるが、その行動の性質は生活の局部に關係する。然るに全群の範圍に亘ると同時に、行動の最も廣い部分を支配する制度もある。それは宗教といふ制度である。通常宗教はいろいろに分れてゐて、決して全社會群が一つ宗教の下に統一されてはゐない。殊に複雜な進歩を遂げた社會に於いては宗教は細かに分割される。信教の自由といふことが唱へられ、宗教は必ずしも一つの社會群には一つの宗教といふ必要はないと信じられる。然しながら宗教がさういふ風に分割されたのは、後に起つた社會事情によるのであつて、發生的には宗教は一つの社會群には一つの宗教といふことが絕對的であつた。言ひ換れば、宗教的意識は群生活の統一意識そのものであつた。同一群に屬するといふことは、即ち同一宗教に屬するといふことであつた。宗教を異にするといふことは、即ち群を異にするといふ意味であつた。

この根本的の事實は今日は成立たないかの如くに考へられてゐるが、然し宗教的意識の統一が群的意識の統一であるといふ事實は、今日尙ほ或る程度まで群の生活を支配してゐるのである。文明國といはれる國國も、今尙ほさういふ傳統的意識の下に、宗教と群との一致を同持してゐるのである。イギリス人は新教を國教としてゐるが、それはイギリス人全體が皆プロテスタントであるといふことではなく、イギリス人の內にはいろいろの宗教團が雜然と並存してゐるが、然し今日でも何等かの宗教上の統一がイギリス國民といふ群の群意識に於て——假令形式的にでも——要求されて

ゐる。從つて、何人も特にイギリス人たることを主張しようとすれば、同時にその宗教上の統一を證明せねばならないといふ制度が今も殘つてゐる。聖書に對する宣誓を肯じない者は、イギリスの議會の議員となることが出來ないといふやうな習慣のあるのもその一例である。ただ今日は宗教的集團が國民的集團と一致しないが爲めに二つが互に交錯して、頗る複雜な關係になつてゐる。各國に散在する各國の宗教團は、國家的集團を超越して別に宗教的集團を形造つてゐる。カトリツク教徒は何處へ行つてもそのカトリツク的集團を彼等が屬する國家的集團よりも力强い集團として固持してゐる。プロテスタントは又彼自身の集團を、國家といふ集團以外の集團として形造り、これを以つて國家その他の集團に對立しようとする。國家と宗教團とが一致してゐるのは比較的文明の遲れた國國であつて、文明國はいかにも宗教團と國家的集團とが食ひ違つてゐる。がそのいづれが集團として鞏固であるかといへば、寧ろ宗教的集團の方が堅いのである。その昔清教徒が自分の屬するイギリスの國家よりも、自己の宗教的統一による集團を重しとして、國家を離れ、國家に反抗し、遂に國家から獨立したが、それは決して特別の例ではない。すべての宗教的集團は、多少とも、さういふ意識の下に統一されてゐる。それは宗教的集團が群生活の集團的形式に於て殆ど絕對的なものであつたといふ發生的の事情が、その後の人類の社會生活を支配してゐる證據である。

群生活が同時に宗教群の生活であるといふことは、最も原始的の宗教即ち種族的の宗教の本質であるが、然し宗教的意識は同時に群の意識であつたといふ原始的事實は、後に起つた宗教の集團的意識にも伴ふ性質であつて、どんな新らしい宗教でも、やはりその宗教的集團を特定の群生活に絕對的な信仰的統一とすることになる。

一つの種族が統一される時に、それが統一的の宗教を持つたやうに、種族が集つて國民を形成するに至ると、その國民はやはり統一的の民族宗教を持つといふことになる。されば征服が行はれて種族の合同が起る時には、その征服國家は、

一つの宗教的集團となつてゐるのである。さういふ事實は、今度は逆に、ある宗教的集團が出來ると、その集團を中心とする群意識を構成するといふことになる。日本の例でも、大和民族の宗教は、大和民族が原住民族を統一した時に出來上つたのであるが、——それが日本の民族宗教である——その後入つて來た佛教は、その信仰集團を中心として一種の群意識を構成し、日本固有の民族的宗教による集團と同じやうな、或はそれよりも强固な集團を形作るに至つたのである。それは畢竟、群生活と宗教的信仰との一致が、本能的に人間の社會群に必然の現象だからである。いろいろに群が混交し、宗教が混交した後に於ても、群と信仰との統一といふことは、人間社會に永久につき纏ふものと想はねばならぬ。即ち一定の群意識は、共同の信仰的態度を伴ふのである。

一定の群が一定の宗教を持つたといふ事實は、つまり群生活の本質から導き出された現象である。人間の群生活は、その群を構成する人々の共同生存の機構である。つまり、人類が協同して生活の作用を働き出す關係の特に密接なものが、或る限られた範圍で成立するのが集團の生活であつて、社會は畢竟さういふ集團の綜合關係である。人間は決してその群から離れて生存することは出來ないが、群そのものもその中の一人からも離れてはならないといふ關係が社會群の生活である。事實がさうである如く、意識に於て、人間は殊にその關係を强調する。親と子とが現實離るべからざる關係にあるに相違ないが、言ひ換れば無意識的にも決して引離された生活行動は取らないが、更にその關係を親子同士が意識した場合には、それが强烈に離れ難い感情となり道徳となる。社會生活の意識はすべて社會生活の事實を反映するものであるが、生活の密接な協同關係を反映したものが、原始的の宗教意識なのである。すべての原始的宗教が悉く群發生の生物學的素因又は心的素因として現はれてゐるのはその理由である。實際の生活に於て離るべからざる關係といへば、第一には生物學的關係である。即ち生殖關係に基く連結である。種が保存される爲めには、いろいろの協同關

係が必要であるが。――共に獲物を漁るとか、移動を行ふとか、敵を防ぐとかいふことは皆群の協同を必要とする事情であるが――その最も根本的の關係は、種を產出し保存する關係であつて、生殖的のそれである。故にその關係に在るものが最も生活の鞏固の群を形造る。家族群の集團がいかなる群にもまして鞏固な群であつたのはその故である。而して宗教的意識は比較的老大な群を、この生物學的關係のそれと同じほどの密接さと鞏固さとをもつた群に形り上げるのである。宗教的意識は群の協同關係を所謂生活上のいろいろの協同關係以上の發生的の關係にまで押進めるのである。

無論、宗教意識が作り上げてゐる群の關係は、所謂迷信的であつて、決して事實と合致してはゐない。大和民族は同一祖先を持つといふのは、一つの宗教的意識であつて、民族の群生活を鞏固にする働きをもつた意識であるが、然しその實大和民族は他の民族と同じく、混合的である。ただ群の生活關係に於て特に密接してゐる種族間に、さういふ同一の生物學的關係の信仰を生じたのである。群生活の密接な關係がその信仰を生み出したのである。今日の家族關係でも養子といふ制度があるが、これは即ち生物學的に存在してゐない關係を所謂擬制によつて作り上げるのであつて、それは即ちその養子となつた人間は、生活關係に於て家族群と全く同一の地位に置かれるものであるといふところから、これを血族關係のそれと見做すのである。宗教的信仰もそれと同じく、或る群が生活の密接な關係に於て家族群のそれと同じやうな地位にあるところから、全群が一つの宗教群のやうに意識されるのである。

宗教的意識はそれ故に、群を構成する個人同士を生物學的關係と近似した關係に結びつける意識である。原始的宗教は群の各員を文字通りの生物學的關係に結びつけたのであつたが、發達した宗教は次第にその意識の錯誤を矯正することとなる。さうして同一宗教群が同じ祖先をもつといふ代りに、協同の基礎を種々なる觀念構成に求め、成るべくその時代に於ける科學的意識と衝突しないやうな、心的結合の基礎を見出さうとする。然し、祖先神が家族神から民族神に變じ

ても、その作用はやはり群統一の意識である如く、さういふ神が次第に精靈的乃至觀念的の神に變つても、やはり群意識の楔子としての作用を働く性質に變りはない。殊に人格神の性質は、進化した宗教の多くに、そのまゝ殘在するのであつて、それは宗教的群意識が、今いつた生物學的關係に關聯したものであつたことの名殘りである。

宗教的意識は、それ故に、生活關係の意識である。生活關係といへば自然と人間との關係及び人間と人間との關係であつて、この關係の意識としては、初めに云つた如く、信仰的意識と科學的意識とがある。科學的意識としては、自然と人間との關係は、更に自然自體の關係として意識され、それが自然科學を構成し、人間同士の關係は、社會に關する一般又は特殊の科學となつて意識される。信仰的意識としては、自然と人間との關係及び人間と人間との關係の二つの關係は、渾然同じものとして意識され、それが宗教及び形而上學の基礎觀念となる。その場合、自然と人間との關係は、人間と人間との關係によつて理解される。即ち人間は人間を以つて一切を解釋するのである。宗教的意識はこの人間と人間との關係を以て、自然自體の關係並びに自然と人間との關係を意識するところにその特徴がある。言ひ換れば、人間はそれが群生活をなすや、直ちに相互關係を生活するのであつて、前にも云つた如く、行動はそれ自體群的となる。されば人間とは、群的行動を行動してゐる人間である。この社會的生存の實際は、やがて社會的生存の意識又は潜意識として一つの心理現象を形作る。この心理現象は人間と人間との關係から發生したものであるが、同時に人間と自然との關係の意識として現はれる。人間は自然を、自分と群的生活を共にしてゐる他の人間であるかの如く意識する。人間は隣人に協同する如く、彼が耕してゐる土地と協同してゐるのである。土地が彼に果實を得へるのは、彼に取つては隣人から何かを與へられたと同じ關係である。從つて人間と人間との關係についての意識が、人間と自然との關係についての意識を支配することとなるのである。

そこから意識構成の單純な時代に於ては、人間の生活は同時に自然の生活であり、人間の意志感情は同時に自然の意志感情であるといふことになる。人間が喜び怒り泣くやうに、自然も喜び怒り泣く。從つて群意識は人間生活の意識であると同時に、自然自體の意識であると考へられる。そこで群生活の意識である宗教意識は、やはり自然自體の意識として人間の意識に反映する。このことは如何なる簡單な宗教にも、如何なる複雜な宗教にも、一樣に云ふことが出來る。何が宗教であるかを決定しようとする場合にも、この條件を持つものが宗教であり、それを持たないものは宗教でないと言へば、決して過またないと思ふ。自然がそれ自體、一系の意識過程であるといふ信仰がないところには、宗教はない。

三　生活管理の組織としての寺院と國家

自然と人間とを包括した群生活の意識が宗教的意識であるといふことは、偶然にも社會生存の最も具體的の事實を如實に反映せしめたものである。實際人間と人間とが協同的に生存する場合には、つまり自然の環境のうちに生存するのであつて、自然の外の何處にも生きることではない。それは言ひ換れば、人間と自然との協同關係である。しかも近代科學の言ふ通り、人間も亦一つの自然物である。從つて人間と自然との協同は、それ自體『自然』そのものの過程である。されば人間の生活は、實は自然自體の生存關係に人間が參加したのであるとも考へられる。自然がそれ自體生存の過程を所謂森羅萬象の協同關係に於て生存してゐると假定するならば、その自然の生存過程を完成せしむる爲めに、人間がそれに參加してゆくのが即ち人間の社會的生存である。

然らば自然の生存過程とは本來どういふ過程であるかと云へば、これを人間生活の場合に比べて云へば、自然の生

産過程であるといはねばならない。動植物を繁殖せしめ、土壤や水を構成せしめ、移動せしむる自然の物理的化學的の諸般の働きは畢竟一種の生産過程である。人間の場合の『生産行動』と同じ作用である。而して人間が社會的生存過程に入るといふことは、取りも直さずこの自然の生産行動に人間が參加すること、即ちそれに人間的努力を加へることである。人間の社會生活は生産行動に基くものであるが、その生産行動とは、自然の生産過程に加はるといふことの外の行爲ではあり得ないのである。自然の生産過程と反する社會的生活は成り立たないし、自然の生産過程に反する人間的行動は成り立たない。

宗教はこの人間の社會的生存の意識であるといふ意味からいへば、これを要するに宗教的意識は、人間群が『自然』の生産過程に參加する場合の信仰的意識であるといふことになる。これを言ひ換へれば、宗教は『人間』の群的生産過程の意識である。宗教をかやうに見ることは、あらゆる宗教の研究家が全く見落したか、若しくは暗に指適したかに過ぎないことを、特に重大視するのであつて、さうする理由は、宗教の制度としての發達を研究する場合に、特にそれが必要だからである。

宗教を群生活を統一する意識であるとすると、その信仰の形式がどういふものであらうとも、それが群の行動に於てもつ効果は、一樣であらねばならぬ。言ひ換へれば、宗教の意識が群生活の協同を破るものであることは考へられない。宗教意識が進化する場合には、往々その新たな宗教意識は、群生活の協同を破るかの如く見える場合がある。即ち舊信仰による統一を破壞することによつて、群生活に分裂を來たさしめることがある。新舊の宗教意識の衝突の爲めに、群は從來の統一的協同を不可能ならしめ、まるで敵國同士のやうな關係が群生活の内部に發生することは歴史の示す通りである。然しこの場合は宗教意識がその古い形式に於ては、群生活の行動を統一する力を失つたが爲めに、新た

な統一意識を構成しようとして、一種の内部闘爭を起すのであつて、それはつまり失はれた統一力を、新たな宗教意識によつて取戻さうとする運動に外ならない。宗教意識も畢竟群的生存行動の意識なのであるから、群行動が進化するに從つて、その新たな行動の意識に反して舊態を支持する譯には行かない。從つてその形式が變化するのである。けれども宗教意識の根本の性質即ち群行動の統一形式であるといふ性質は、永久に失はれない。科學的意識が如何に發達しても、群行動の統一意識としての宗教的意識はそれと併行して進展する。科學的意識も一つの信仰狀態であつて、それが宗教的信仰と異なる點は、その『知覺的』察知を基礎とする點にある。宗教的信仰は『想像的』基礎によるのであつて知覺的察知と一致しないが、科學的信仰はどこまでも知覺的根據を失はない。が、その科學的意識も群意識をそれで統一する働きをする時には、信仰的意識と同じ性質をもつて人間の行動を支配するのである。ただ科學的意識は前述の如く、群生活の現實の有機關係を反映せしめるものであるから、知覺的事實に即して働く結果、宗教の迷信的統一を破る結果になるのである。けれども科學がさうして迷信を破壞するのは、畢竟迷信によつて損はれた群の協同生活を、それによつて生存過程に引戻さうとするのであつて、協同が新らたな基礎の上に築き上げられるのである。自然の生產過程は、之れを人間の立場からいへば生活の環境そのものであるが、人間はこの環境に一致する生活を營むことによつてのみ、生存を持續することが出來るのである。而して自然の生產過程は今日所謂自然科學が研究の對象としてゐる、あの廣大無邊の範圍をもつた現象であつて、それが極めて規律的の進行を取つてゐる。今日の科學的知識は、この自然の規律的進行狀態を法則化して、自然の世界に對する最も錯誤の少い信仰狀態を保つてゐるのである。この自然の規律に對する科學的信仰は、今日人間が群的行動をするに當つて根本信念として支持されてゐるものであつて、それなしにはどんな生活行動でも安んじて取ることは出來ない。然し、人間が今日のやうな錯誤の少ない科學的信仰によつて生活するに至る

までの人間社會は、かなり復雜な、範圍の廣い、程度の高い生活を組立てゝゐたに拘らず、その根本信念として、近代人の持つてゐるやうな科學的信仰を持つてはゐなかつたのである。自然の律動的運動に對する人間の信仰は、何等かの形の宗教的迷信を借りて成立せしめられてゐたので、そこから『自然』にも人格的意志感情があることとなつたのである。故に宗教的信仰の統一は、今日の科學的信念と同じく、生産行動の統一的規律的組織を支持する群行動の約束として役立つものに外ならないのである

此宗教意識は本來全社會的であつて、社會の全員が平等に普遍的に持つところのものであるが、然し、社會進化の過程に於て自然とそれが、殊に少數者の間に獨占される——少くとも指導される——やうな事情を生じたのである。而してその事情は、『支配』の發生に伴つて生じてゐるのである。

『支配』は人類學上の問題としても、いろいろの關係から生じてゐるのであるが、大體に於て年齢・貧富・征服の三つの原因によつてゐる。最も原始的の支配は年齢のそれで、即ち老年者の支配であつたが、それが同時に宗教的意識を老人が獨占又は指導する制度となつて現はれたのである。而かも老人がさういふ地位を占めることを得たのは、老年による容知的優越に因つたのである。原始社會の智識階級は老人の外にはなかつた。それはその後の社會に於けるが如く、知的生活を年を積んだ經驗から引離して、誰れでもそれを學ぶことの出來るやうな組織がなかつたので、容知的優越は一に年齢による經驗の蓄積に待つ外はなかつたのである。そこから老人の支配が實現したが、然しそれと同時に、貧富又は征服による支配が發生したことは、歴史の示す通りである。老人はその宗教意識の獨占による支配を開始する時は、それが不平均の富を得る時であつて、群の生産行動を管理することによつて、特に宗教的に集積され富は、老人の個的所有として發展したのである。又その間に種族間に征服關係が起ると、征服者は、一種の强制をもつて宗教統一を行

ひ、同時に生產の强制管理を行つて、群の生產行動の果實を收得したのである。

かくして發生したのが『寺院』及『國家』である。即ち寺院も國家も、信仰的統一に基いて群の生產行動を管理することによつてその生產果實を收得して、そこに發生した一つの財團なのである。經濟的見地からいへば、寺院も國家も、生產群に對して、その生產果實を支配行爲によつて收得する階級的構成である。

宗教の組織は、今日では無論のこと、古代から寺院の制度となつて現はれてゐるが、寺院は決して單純な宗教意識の產物ではない。又決して宗教に必然的の制度でもない。宗教意識は、上に述べ來つたやうな統一事業を、殊に寺院といふやうなものなしに立派に遂げてゐたのである。群の宗教意識は、上述の如く一部少數者の意識ではなく、群全體が同じ信仰作用、同じ察知作用の下に、普遍的にもつてゐた信仰である。この意識を支配することが、群の生存行動を圓滿に發展せしむる道だつたので、殊に季節的な行動、即ち生殖行動と生產行動とに於いて、群は最も具體的に統一されねばならなかつたのである。そこで無意識的にこの自然の生產過程に協同する方法が、靑春期の男女に對する嚴重な宗教的拘束となつて現はれ、又農工牧畜等に關するいろいろの迷信的習慣となつて現はれ、生活の統一がそれによつて保たれたのである。群がいろいろの迷信的な儀式をもつたのはそのためであつた。そこに特に群の宗教的儀式を司宰する特定の人間を必要とすることも亦すべての社會群の常態だつたのである。而して群の祭祀が特に少數者によつて司宰されなければならぬといふことは、その後の文明社會に於ても、或る群には必ず少數の指導者があるといふのと同じ現象であつて、特に群意識を强く感じる理由をもつものが、その少數者の地位を占めるのである。原始的宗教意識の場合には、前節に述べた理由によつて、それが必ず老人だつたのである。そこから老人は、一種の神秘的傾向を帶びるに至り、神との交

通者となり、自然現象を左右する力をもつ人間となり、その神秘的性質によつて、神的支配の代理人となつたのである。この老人の支配は、その發生事情に於ては、右のやうに社會的必然性をもつてゐたのである。けれどもこの支配狀態は、すべての制度がもつ固定的性質をもつこととなつて、次第に原始的の社會的性質を失ふに至つた。即ち原始群の無意識狀態が生み出した社會管理の形式たる長老の支配は、次第に長老の個人的又は階級的生活利害の發達を惹き起し、群を群生活の爲めに管理するといふことが、自ら支配階級の個人的乃至階級的利害に惹きつけられた支配狀態に轉化したのである。そこから支配者の階級的利害による社會管理が始まつたのである。それが即ち『政治』の起原である。

政治はそれ故に社會管理が階級的管理となつた時に起つた支配狀態である。この性質はその後幾千年間を通じての政治の性質に固有してゐるのである。政治がどう進化しても、それが階級的支配であることに變りはない。言ひ換へれば、原始社會に於けるやうな、社會群そのものの爲めの管理狀態ではない。また長老の個人的支配の性質にも止まつてゐない。さうして階級の支配まで進んだのである。而かも古代に於ては、この宗教的の階級的支配が群生活の支配に必然の政治狀態であつたので、征服による支配も亦この宗教的支配を混交せしめることによつて始めて可能だつたのである。それは所謂祭政一致の狀態である。宗教の首長は同時に政治上の元首であつた。而してこの二つが後に至つて分離するに至つた事情についてはいろいろの說もあるが、恐らくそれは軍國的征服による強制管理の性質及び區域と、宗教的統一による管理の性質及び範圍の差違に基いたものであらうと思はれる。(この問題はやはり人類學的硏究に俟つべきもので『所謂』政治學は與らないのであるが、今ここにはそれを詳說する遑がない、)而してこの分離の結果、群的意識はその管理の分裂に應じて二重的となつた。一つは宗教を中心とするそれ、他の一つは政治を中心とするそれとなつたのである。而して『寺院』は前者の組織であり、『國家』は後者の組織である。

ひ、同時に生産の强制管理を行つて、群の生産行動の果實を收得したのである。

かくして發生したのが『寺院』及『國家』である。即ち寺院も國家も、信仰的統一に基いて群の生産行動を管理することによつてその生産果實を收得して、そこに發生した一つの財團なのである。經濟的見地からいへば、寺院も國家も、生産群に對して、その生産果實を支配行爲によつて收得する階級的構成である。

宗教の組織は、今日では無論のこと、古代から寺院の制度となつて現はれてゐるが、寺院は決して單純な宗教意識の産物ではない。又決して宗教に必然的の制度でもない。宗教意識は、上に述べ來つたやうな統一事業を、殊に寺院といふやうなものなしに立派に遂げてゐたのである。群の宗教意識は、上述の如く一部少數者の意識ではなく、群全體が同じ信仰作用、同じ察知作用の下に、普遍的にもつてゐた信仰である。この意識を支配することが、群の生存行動を圓滿に發展せしむる道だつたので、殊に季節的な行動、即ち生殖行動と生産行動とに於いて、群は最も具體的に統一されねばならなかつたのである。そこで無意識的にこの自然の生産過程に協同する方法が、青春期の男女に對する嚴重な宗教的拘束となつて現はれ、又農工牧畜等に關するいろいろの迷信的習慣となつて現はれ、生活の統一がそれによつて保たれたのである。群がいろいろの迷信的な儀式をもつたのはそのためであつた。そこに特に群の宗教的儀式を司宰する特定の人間を必要とすることも亦すべての社會群の常態だつたのである。而して群の祭祀が特に少數者によつて司宰されなければならぬといふことは、その後の文明社會に於ても、或る群には必ず少數の指導者があるといふのと同じ現象であつて、特に群意識を强く感じる理由をもつものが、その少數者の地位を占めるのである。原始的宗教意識の場合には、前節に述べた理由によつて、それが必ず老人だつたのである。そこから老人は、一種の神秘的傾向を帶びるに至り、神との交

通者となり、自然現象を左右する力をもつ人間となり、その神秘的性質によつて、神的支配の代理人となつたのである。この老人の支配は、その發生事情に於ては、右のやうに社會的必然性をもつてゐたのである。けれどもこの支配狀態は、すべての制度がもつ固定的性質をもつこととなつて、次第に原始的の社會的性質を失ふに至つた。即ち原始群の無意識狀態が生み出した社會管理の形式たる長老の支配は、次第に長老の個人的又は階級的生活利害の發達を惹き起し、群を群生活の爲めに管理するといふことが、自ら支配階級の個人的乃至階級的利害に惹きつけられた支配狀態に轉化したのである。そこから支配者の階級的利害による社會管理が始まつたのである。それが即ち『政治』の起原である。

政治はそれ故に社會管理が階級的管理となつた時に起つた支配狀態である。この性質はその後幾千年間を通じての政治の性質に固有してゐるのである。政治がどう進化しても、それが階級的支配であることに變りはない。言ひ換へれば、原始社會に於けるやうな、社會群そのものの爲めの管理狀態ではない。また長老の個人的支配の性質にも止まつてゐない。さうして階級の支配まで進んだのである。而かも古代に於ては、この宗教的の階級的支配が群生活の支配に必然の政治狀態であつたので、征服による支配も亦この宗教的支配を混交せしめることによつて始めて可能だつたのである。それは所謂祭政一致の狀態である。宗教の首長は同時に政治上の元首であつた。而してこの二つが後に至つて分離するに至つた事情についてはいろいろの說もあるが、恐らくそれは軍國的征服による強制管理の性質及び區域と、宗教的統一による管理の性質及び範圍の差違に基いたものであらうと思はれる。(この問題はやはり人類學的硏究に俟つべきもので『所謂』政治學は與らないのであるが、今ここにはそれを詳說する遑がない。)而してこの分離の結果、群的意識はその管理の分裂に應じて二重的となつた。一つは宗教を中心とするそれ、他の一つは政治を中心とするそれとなつたのである。而して『寺院』は前者の組織であり、『國家』は後者の組織である。

四　寺院と國家との經濟的根柢

經濟的解釋に基けば、寺院も國家も生産管理の組織である。發生的には寺院は自發的の生産管理であり、國家は强制的の生産管理である。群行動の生産過程に働く意識が宗教的意識であり、寺院はそれが組織化したものであるとすると、寺院による生産管理は自然の群行動がさういふ組織を産み出したに外ならない。これに反してそれが政治化した場合には、特に支配階級が迷信又は軍事的征服に原因して發生し、支配群と被支配群とが對立的の社會關係を生じたのであつて、その一方の利害は他方の利害と相反するといふ非協同的の群生活が成立つたのである。殊に政治國家は征服事實に起原をもつ時には――すべて今日現在する國家は征服的起原をもつそれである――國家の組織は、自然の生産過程に人間群が參加する場合の組織ではなく、人間群の生産過程に他の人間群が寄生する組織である。即ち武力による生産管理である。その武力が崩れれば、その管理狀態も崩れるといふ組織である。これに反して宗教的意識による生産管理は、群の生産行動がその意識に統一されてゐるのであつて、そこに外部からの武力的强制はない。あり得るのは心理的强制である。一種の强迫觀念が群を生産行動に押しやるやうに、その生産果實を寺院に捧げるのである。統一的生産行動を取らざるを得ざる脅迫を感ぜしむるものがその宗教意識であつた如く、その果實も信仰的脅迫によつて寺院に集積されるのである。故に寺院はその本來の性質に於て人間の社會的生存の衝動に基き、それを强め、それを支へる組織として役立つ機關である。そこに心理的强制即ち衝動の作用以外には、外部的の强制はもたないのである。

然しながら、寺院制度の成立するに至る事情は、前にも云つた如く、無論複雜な事情によるものであつて、單純にさういふ社會的動機だけが働いてゐるものではない。人間の生活に特有な意識の作用や複雜な生活の機械やが、各個人を平等な

生活環境に於てさへもそれぞれ特殊の地位に置くのであつて、殊に僅かの環境の差違も重大な影響を人間の群生活に與へるものである。單純な社會に於ては、やや腕力の强いもの、やや智力の秀れたものは、同一群の間に忽ち特殊の地位を占むるに至る。するとそこに異つた環境が生れ、異つた生活狀態が作り出される。環境はその異つた生活の雰圍氣それ自體であつて、その空氣の內に生きる人間を特殊の生理的、心理的、信仰的狀態に導くのである。老年であるといふことが、その老人を特殊の狀態に置くと、やがてそこに老人の支配が發生し、そしてその支配者に特別の環境が生れる。從つて彼の意志感情が、その案知狀態信仰狀態と共に特殊のものとなる。そこから一般社會の利害とは異る特殊の利害が、その支配者の生活に於て發生する。寺院は原始的宗教意識がそれ自體論理的に發展したわけではなく、人間的生活の特殊の關係に於いて、少數者の特別の關係が發生したところから生れた制度である。宗教司宰者と群の生活者との間に、この環境の差違が發生したが爲めに、司宰者側の生活利害が必ずしも常に群の生活利害と一致するものでないといふその關係から、宗教的支配に特別の群意識が生れるのである。だから社會群そのものの生活意識を最も社會的な意識であるとするならば、司宰者側の意識は特殊の階級意識であるといふことになる。意識がさうなるのは即ち生活環境が異なるからであつて、環境が異るために生活衝動の現はれ方が異なることとなり、その結果、意識の性質が異つて來るのである。寺院は元來社會群の意識の基礎の上に成立つ組織であるが、そこに寺院が出來、特定の人間群がその寺院を構成することになると、自ら社會群を構成する人間群の生活と、寺院を構成する人間群の生活とが、二つの異つた性質をもつことになる。寺院も亦一の階級となるのである。僧侶はこの特殊の階級生活を營むものであつて、その生活樣式は全然群生活のそれとは異るものとなるのである。

而かもすべての階級的構成は具體的な生活構成であつて、その特別の生活の構造から特殊の階級的心理が生れるので

ある。寺院制度はその生活の特別の組立てを意味するのであるが、すべての生活構造には、物質的の根據がなければならぬ。寺院に特別に構造を與へたその物質的根柢は、寺院の經濟的基礎である。その點では寺院は國家と同樣である。『政治』を發生せしめた過程卽ち國家發生の過程にも亦經濟的の根柢のあることは云ふまでもない。征服關係は征服者が被征服者の生產に寄生する組織を成立せしむる過程であるが、それはつまり强制的生產管理によつて政治する階級が、生產階級の經濟的自主を奪ひ、その經濟力で自己の階級的生活を完成せしめやうとする組織である。寺院はさういふ武力的强制は用ゐないが、やはり生產群に寄生してその階級生活を完成せしめる組織である。卽ち寺院も國家も、一方は自然的の、他方は强制的の生產管理によつて、階級的生活を構成せしめてゐるのである。そこから群の生活意識は寺院と國家とのいづれに於ても一種の變態的作用をもつに至るのである。

元來群の生產行動は集團的に行はれ、その單純な形に於ては、個人的の意識を容れる餘地がない。すべて行動は群的であつて、何一つが個的には行はれてゐないといふのが、原始的社會狀態である。從つて生產行動は、行動のさういふ特性を保持し、その行動の系統は、初めより終りに至るまで群的に終始する。或る物資を生產するといふ行動は、本來、個的所有を豐富にするが爲めの行動ではなく、群の生存を持續する過程として行はれる行動である。從つて生產された物資は、群の產物である。言ひ換へれば、群の生存を保障する物資として消費される。體力や智知の不平均、年齡の差等は、初めから生產上に有能者と無能者とを生じたに相違ないが、生產が群行動である限り、有能者無能者の個人的差別なしに、生產物は社會群そのものの生存支持に消費される。宗敎的信仰は卽ちその群的生活を堅固に支持する人間群の生活意識である。甲の生產した物を乙が消費し、乙の生產した物を甲が消費するといふことは、群生活の條件

として保障されねばならぬ。宗教的信仰は本來それを保障する意識であつた。

而してこの生産物の群的性質を有機的に、具體的に分配制度の上に實現する方法は、即ち古代の原始的な宗教上の儀式であつた。生産物が群に歸屬するといふことは即ち統一された宗教團に歸屬するといふことであつた。社會群はそれ自身一個の宗教團となつて、生産物の分配管理を宗教的に實行したのである。さういふ實行的の組織を生じないまでも、すべての宗教には生産物の個的所有を否定する意識を伴つてゐるのである。個人的衝動が發達した後の社會に於ても、宗教的意識は何程か個的所有の否定と結びついてゐることとでも分る。これは原始的の群生活の本能が、後の社會事情によつて到底撲滅されないことを證明するものであつて、人間の生活の本能の力強さを示してゐるものである。

寺院はこの群生活の本能と關聯した宗教意識の上に成り立つものである。故に社會群は、宗教群としては、寺院にその社會財を蓄積せしめることによつて、群の生産行動の系統を完成せしむると意識するのである。これが即ち『喜捨』である。喜捨は寺院の私有のために捧げるのではなく、財の社會的蓄積として捧げられる性質のものである。それは群の生産行動に於ては毫も個人的意欲が加はらなかつたといふ原始的生活の延長である。而かもそれが群的本能の正常（ノーマル）の作用なのである。所謂所有欲は個的所有の制度の發達に伴つて今日のやうな有力な衝動となつたのである。

ところが寺院は、それがいかに社會的の起原を持つにせよ、現に寺院を組成してをるものはやはり人間である。そしてその人間は、私有制度の下にあれば所有の衝動を發達せしめるといふやうに、環境によつて異なる意慾をもつ生物である。寺院制度も亦そこに生活する人間——僧侶——を、その寺院的環境に於て生存する人間たらしめ、それに特別の生活意識を持たしめるのである。殊に後の僧侶は社會群の生活から隔離されて群の生活利害と沒交渉に、寺院それ自體の生活利害に支配され易い境地に置かれてゐるのである。終ひに僧侶は、社會的群意識の組織たる寺院を、彼自身の個人

的生活利害の組織として、そのうちに生存する特殊の群生活者となるのである。つまり僧侶は、群の社會的衝動に依存する機關のうちに在つて、自個の階級的生活を生活するに至るのである。而してさういふ階級的生活の衝動は、その生活者の階級が、社會的生活を離れれば離れるほど高級に發達する。征服者は生活群を離るる度合に應じて、軍國的階級生活者の生活衝動を發展せしめたが、それと同じく、寺院の生活者も一般生活群を離れれば離るるほど衝動が個人的となり、階級的となる。

そこから寺院の變態的性質が發展するのである。

五 生産財と寺院及び國家

今日に至るまで寺院が武力的强制なしに財を集めることを得てゐるのは、社會がその群的生活の當然の過程であつた原始的組織を、宗教的集團だけに於て繼承してゐる譯である。然るにこれを寺院側から見ると、その成立に於て既に寺院に集められた財が、所有の觀念に結びつけられてゐることを發見する。原始人が社會的生存持續のための財を生産蓄積せしむる場合には、今日の人間が考ふるやうに、所謂社會觀念といふやうなものによつてゐたのではなく、宗教觀念によつてゐたのである。即ち生活を司宰する人格の――神的――個的所有に於いて、群の財が生産され又蓄積されたのである。群のうちのどの個人の所有でもないといふことは、社會の所有であると意識したのではなく、群を超越してさうして群を支配する神的人格の私有財として蓄積されたのである。この超越的人格の私有財を保管する者が僧侶であり、保管する機關が寺院である。故に寺院財も、『觀念』的には個人的所有である。ただその個人が超越的である爲めに、いかなる人間の私有でもあり得ないといふ結果になるのである。群生活者はこの觀念の下に自己の生産物の私有を否定

したのであるが、寺院の生活者は、この群的に否定された私有を寺院そのものが占めることによつて、一種の私有狀態を取戻すのである。同じ神的所有が、社會群にあつては私有の否定となり、寺院にあつては私有の創設となつたのである。無論さうして蓄積された財がそのまま僧侶の私有となるといふことは、いかに變質した寺院制度の下にも行はれてはゐないのであつて、今日でも寺院財の大部分は公共的に費されるべきものであるといふ觀念だけは立派に保存され、事實又さうなつてゐる。けれども個人的衝動は、前にも云つた如く、群生活の生產行動から離れれば離れるほど發達するのであつて、生產生活をしないものは、所有を生產から引離して觀念する傾きをもつに至る。その點は僧侶階級も亦武力的征服者と似たものである。生產群は、所有と生產とを密接に結びつけ、決して生產なしに所有があり得るといふやうな意識をもち得ない。これに反して、僧侶や支配者は、所有と生產とを必然的に結びつけずに、支配と所有とを結びつけ、生產なしに所有があり得ると意識する。從つて彼等は、支配行爲そのものを、恰も生產群の生產行爲のやうに所有を生ずる行爲であると考へる。支配は、それが政治的支配たると宗教的支配たるを問はず、生產財收得の原因となつたのは、一方で社會群が迷信的に支配群と生產財とを結びつけた關係もあるが、他方、支配群が、生產行爲なしに所有があり得るといふ、彼れ自等の階級意識を有效に發揮したことにもよるのである。

殊に寺院に於ては、古代の宗教意識が次第に衰へて、生產群が無意識的に寺院に生產財を運び込むことがそれに應じて衰退すると、寺院はその經濟上の根柢に動搖を來す結果、國家と同じやうな強制的方法でなく、もつと心理的強制の方法で、寺院財を蓄積する『政策』をとらねばならぬこととなる。而してこれは幸ひに成功する。何となれば、寺院は原始的の社會的勢力として群の生存行動を指導する機能は衰退したが、然し、人間の群本能が宗教意識に結びつくといふ人間本來の傾向は、いかに發達した社會にも依然として殘存する。苟も群統一の意識に宗教的信仰が強く作用すると

的生活利害の組織として、そのうちに生存する特殊の群生活者となるのである。つまり僧侶は、群の社會的衝動に依存する機關のうちに在つて、自個の階級的生活を生活するに至るのである。而してさういふ階級的生活の衝動は、その生活者の階級が、社會的生活を離れれば離れるほど高級に發達する。征服者は生活群を離るる度合に應じて、軍國的階級生活者の生活衝動を發展せしめたが、それと同じく、寺院の生活者も一般生活群を離れれば離るるほど衝動が個人的となり、階級的となる。

そこから寺院の變態的性質が發展するのである。

五　生産財と寺院及び國家

今日に至るまで寺院が武力的强制なしに財を集めることを得てゐるのは、社會がその群的生活の當然の過程であつた原始的組織を、宗教的集團だけに於て繼承してゐる譯である。然るにこれを寺院側から見ると、その成立に於て既に寺院に集められた財が、所有の觀念に結びつけられてゐることを發見する。原始人が社會的生存持續のための財を生産蓄積せしむる場合には、今日の人間が考ふるやうに、所謂社會觀念といふやうなものによつてゐたのではなく、宗教觀念によつてゐたのである。即ち生活を司宰する人格の——神的——個的所有に於いて、群の財が生産され又蓄積されたのである。群のうちのどの個人の所有でもないといふことは、社會の所有であると意識したのではなく、群を超越してさうして群を支配する神的人格の私有財として蓄積されたのである。この超越的人格の私有財を保管する者が僧侶であり、保管する機關が寺院である。故に寺院財も、『觀念』的には個人的所有である。ただその個人が超越的である爲めに、いかなる人間の私有でもあり得ないといふ結果になるのである。群生活者はこの觀念の下に自己の生産物の私有を否定

したのであるが、寺院の生活者は、この群的に否定された私有を寺院そのものが占めることによつて、一種の私有狀態を取戻すのである。同じ神的所有が、社會群にあつては私有の否定となり、寺院にあつては私有の創設となつたのである。無論さうして蓄積された財がそのまゝ僧侶の私有となるといふことは、いかに變質した寺院制度の下にも行はれてはゐないのであつて、今日でも寺院財の大部分は公共的に費されるべきものであるといふ觀念だけは立派に保存され、事實又さうなつてゐる。けれども個人的衝動は、前にも云つた如く、群生活の生産行動から離れれば離れるほど發達するのであつて、生産生活をしないものは、所有を生産から引離して觀念する傾きをもつに至る。その點は僧侶階級も亦武力的征服者と似たものである。生産群は、所有と生産とを密接に結びつけ、決して生産なしに所有があり得るといふやうな意識をもち得ない。これに反して、僧侶や支配者は、所有と生産とを必然的に結びつけずに、支配と所有とを結びつけ、生産なしに所有があり得ると意識する。從つて彼等は、支配行爲そのものを、恰も生産群の生産行爲のやうに所有を生ずる行爲であると考へる。支配は、それが政治的支配たると宗教的支配たるを問はず、生産財收得の原因となつたのは、一方で社會群が迷信的に支配群と生産財とを結びつけた關係もあるが、他方、支配群が、生産行爲なしに所有があり得るといふ、彼れ自等の階級意識を有效に發揮したことにもよるのである。

殊に寺院に於ては、古代の宗教意識が次第に衰へて、生産群が無意識的に寺院に生産財を運び込むことがそれに應じて衰退すると、寺院はその經濟上の根柢に動搖を來す結果、國家と同じやうな強制的方法でなく、もつと心理的強制の方法で、寺院財を蓄積する『政策』をとらねばならぬこととなる。而してこれは幸ひに成功する。何となれば、寺院は原始的の社會的勢力として群の生存行動を指導する機能は衰退したが、然し、人間の群本能が宗教意識に結びつくといふ人間本來の傾向は、いかに發達した社會にも依然として殘存する。苟も群統一の意識に宗教的信仰が強く作用すると

いふ人間の本能的の事情の存する限り、寺院は群生活の機關として、その社會的存在理由をもつのである。さうしてさういふ事情が存する限り、宗教意識によつて、生産財が權力的に强迫されずに寺院に蓄積されるといふ作用も滅びないのである。さうしてその蓄積された生産財は、やはり幾分社會的に散布されるのである。それが今日の狀態である。

社會がさういふ傾向を殘存せしめ、寺院がさういふ働きを持つ限り、寺院財の蓄積は可能である。然し一方に於てその寺院の社會的性質が保存されながら、他方に於て僧侶階級の個人的階級的生活が寺院財の膨脹と比例して發達することは、武力による經濟的豐富が生み出した軍國階級のそれと同じやうな狀態となるのである。從つて一種の階級文化が僧侶の間に成立し、それと社會群の生活とが甚だしい懸隔を持つこととなるのである。而かも此の僧侶の文化獨占は、古代の僧侶の宗教的特權の獨占の延長であることはいふまでもない。

生産管理の今一つの組織である國家の成立を、右の寺院のそれと對比すると、發生的にそれほど異つた二つの組織が次第に近接して來ることを發見するのである。

國家もその成立に於て全然宗教的根柢を離れたものではない。祭政分離といふことは國家の發達に伴ふ一般の傾向ではあるが、信仰の上に於ては、多くの國家に於て二つが尙ほ結びついてゐる。元來國家成立の過程であるところの征服は、一種の種族の合同であつて、それはいかに武力的征服の場合でも、必ず宗教的征服の意味をもつてゐないものはない。大和民族の征服の如きはその顯著な例である。けれどもそれは武力に信仰がつけ加へられたのであつて、從つて征服國家の生産管理は、武力的强制に基いたものであることはいふまでもない。そこから、群の生産財の收得に於て、寺院のそれに反し、國家のそれは强制的であつた。軍國的掠奪に始まり、次第にそれが物理的の暴力關係を離れ、所謂

行政關係に於ける財の收得となつたのであるが、その場合の財物を提供する群の意識には、國家の場合と寺院の場合とに於いて、明かな相違があり、その相違は今日まで持續してゐる。寺院の場合の喜捨の心理と、國家の場合の租稅の心理とは、今日でも甚しい懸隔をもつ。租稅は征服的掠奪が、群の統一によりて暴力關係から協同關係に移り、支配群に對する被支配群の協同行爲の現はれとなつたものであるが、それでもその性質に於て依然として强制的である。國家は元來、生産群の生活目的と背馳する階級的生活目的を有する支配群として生産群の上に臨んだものであつて、從つてそこに集積される生産財は、寺院に集積されるそれのやうに、生産群の生活に返つて來る性質のものではない。勿論、事實上は支配群に收められた生産財の幾分は、今日の意味でいふ社會政策的にも使用されるのであつて――即ち生産群の生活に戻つて來るのであるが――しかしそれは附隨的で、その社會政策なるものも、元來は、一般生産群が入つて行くことの出來ない國家生活を完成せしめる手段として、生産群から收得する果實を豐富ならしめるため、生産群の生産能力を支持しやうとする政策に外ならなかつたのである。つまり租稅は、全社會群の心理によつて理解されないで、どうしても支配群と被支配群との對立する關係に就て理解されたのである。これが租稅の喜捨と異なる所以であつて、さういふ性質は今日までも殘存してゐるのである。(後世には、租稅を徵收するについて、それを收める被支配群の同意を求むる形式が生じ、それが今日の議會制度となつたのであるが、しかし、承諾を求めるといふことは、それをしなければ被支配者が反抗して納稅を澁滯せしむるからであつて、つまり徵收方法の進歩に過ぎない。)

國家の經濟的基礎は、群の生活行動をこの租稅能力を增進せしめるやうに管理することによつて鞏固にされるのである。言ひ換へれば、支配群を經濟的に豐富にすることは、必ずしも一般生活群を豐富にすることとはならないのである。寧ろその正反對に、支配群を豐富にしようとすればするほど、それだけ生活群を貧しくして置かなければならなか

いふ人間の本能的の事情の存する限り、寺院は群生活の機關として、その社會的存在理由をもつのである。さうしてさういふ事情が存する限り、宗教意識によつて、生産財が權力的に强迫されずに寺院に蓄積されるといふ作用も滅びないのである。さうしてその蓄積された生産財は、やはり幾分社會的に散布されるのである。それが今日の狀態である。

社會がさういふ傾向を殘存せしめ、寺院がさういふ働きを持つ限り、寺院財の蓄積は可能である。然し一方に於てその寺院の社會的性質が保存されながら、他方に於て僧侶階級の個人的階級的生活が寺院財の膨脹と比例して發達することは、武力による經濟的豐富が生み出した軍國階級のそれと同じやうな狀態となるのである。從つて一種の階級文化が僧侶の間に成立し、それと社會群の生活とが甚だしい懸隔を持つこととなるのである。而かも此の僧侶の文化獨占は、古代の僧侶の宗教的特權の獨占の延長であることはいふまでもない。

生産管理の今一つの組織である國家の成立を、右の寺院のそれと對比すると、發生的にそれほど異つた二つの組織が次第に近接して來ることを發見するのである。

國家もその成立に於て全然宗教的根柢を離れたものではない。祭政分離といふことは國家の發達に伴ふ一般の傾向ではあるが、信仰の上に於ては、多くの國家に於て二つが尙ほ結びついてゐる。元來國家成立の過程であるところの征服は、一種の種族の合同であつて、それはいかに武力的征服の場合でも、必ず宗教的征服の意味をもつてゐないものはない。大和民族の征服の如きはその顯著な例である。けれどもそれは武力に信仰がつけ加へられたのであつて、從つて征服國家の生産管理は、武力的强制に基いたものであることはいふまでもない。そこから、群の生産財の收得に於て、寺院のそれに反し、國家のそれは强制的であつた。軍國的掠奪に始まり、次第にそれが物理的の暴力關係を離れ、所謂

行政關係に於ける財の收得となつたのであるが、その場合の財物を提供する群の意識には、國家の場合と寺院の場合とに於いて、明かな相違があり、その相違は今日まで持續してゐる。寺院の場合の喜捨の心理と、國家の場合の租税の心理とは、今日でも甚しい懸隔をもつ。租税は征服的掠奪が、群の統一によりて暴力關係から協同關係に移り、支配群に對する被支配群の協同行爲の現はれとなつたものであるが、それでもその性質に於て依然として强制的である。國家は元來、生產群の生活目的と背馳する階級的生活目的を有する支配群として生產群の上に臨んだものであつて、從つてそこに集積される生產財は、寺院に集積されるそれのやうに、生產群の生活に返つて來る性質のものではない。勿論、事實上は支配群に收められた生產財の幾分は、今日の意味でいふ社會政策的にも使用されるのであつて——即ち生產群の生活に戻つて來るのであるが——しかしそれは附隨的で、その社會政策なるものも、元來は、一般生產群が入つて行くことの出來ない國家生活を完成せしめる手段として、生產群から收得する果實を豐富ならしめるため、生產群の生產能力を支持しやうとする政策に外ならなかつたのである。つまり租税は、全社會群の心理によつて理解されないで、どうしても支配群と被支配群との對立する關係に就て理解されたのである。これが租税の喜捨と異なる所以であつて、さういふ性質は今日までも殘存してゐるのである。後世には、租税を徴收するについて、それを收める被支配群の同意を求むる形式が生じ、それが今日の議會制度となつたのであるが、しかし、承諾を求めるといふことは、それをしなければ被支配者が反抗して納税を澁滯せしむるからであつて、つまり徴收方法の進歩に過ぎない。

國家の經濟的基礎は、群の生活行動をこの租税能力を增進せしめるやうに管理することによつて鞏固にされるのである。言ひ換へれば、支配群を經濟的に豐富にすることは、必ずしも一般生活群を豐富にすることとはならないのである。寧ろその正反對に、支配群を豐富にしようとすればするほど、それだけ生活群を貧しくして置かなければならなか

いふ人間の本能的の事情の存する限り、寺院は群生活の機關として、その社會的存在理由をもつのである。さうしてさういふ事情が存する限り、宗教意識によつて、生産財が權力的に强迫されずに寺院に蓄積されるといふ作用も滅びないのである。さうしてその蓄積された生産財は、やはり幾分社會的に散布されるのである。それが今日の狀態である。

社會がさういふ傾向を殘存せしめ、寺院がさういふ働きを持つ限り、寺院財の蓄積は可能である。然し一方に於てその寺院の社會的性質が保存されながら、他方に於て僧侶階級の個人的階級的生活が寺院財の膨脹と比例して發達することは、武力による經濟的豐富が生み出した軍國階級のそれと同じやうな狀態となるのである。從つて一種の階級文化が僧侶の間に成立し、それと社會群の生活とが甚だしい懸隔を持つこととなるのである。而かも此の僧侶の文化獨占は、古代の僧侶の宗教的特權の獨占の延長であることはいふまでもない。

生産管理の今一つの組織である國家の成立を、右の寺院のそれと對比すると、發生的にそれほど異つた二つの組織が次第に近接して來ることを發見するのである。

國家もその成立に於て全然宗教的根柢を離れたものではない。祭政分離といふことは國家の發達に伴ふ一般の傾向ではあるが、信仰の上に於ては、多くの國家に於て二つが尙ほ結びついてゐる。元來國家成立の過程であるところの征服は、二種の種族の合同であつて、それはいかに武力的征服の場合でも、必ず宗教的征服の意味をもつてゐないものはない。太和民族の征服の如きはその顯著な例である。けれどもそれは武力に信仰がつけ加へられたのであつて、從つて征服國家の生産管理は、武力的强制に基いたものであることはいふまでもない。そこから、群の生産財の收得に於て、寺院のそれに反し、國家のそれは强制的であつた。軍國的掠奪に始まり、次第にそれが物理的の暴力關係を離れ、所謂

行政關係に於ける財の收得となつたのであるが、その場合の財物を提供する群の意識には、國家の場合と寺院の場合とに於いて、明かな相違があり、その相違は今日まで持續してゐる。寺院の場合の喜捨の心理と、國家の場合の租税の心理とは、今日でも甚しい懸隔をもつ。租税は征服的掠奪が、群の統一によりて暴力關係から協同關係に移り、支配群に對する被支配群の協同行爲の現はれとなつたものであるが、それでもその性質に於て依然として强制的である。國家は元來、生産群の生活目的と背馳する階級的生活目的を有する支配群として生産群の上に臨んだものであつて、從つてそこに集積される生産財は、寺院に集積されるそれのやうに、生産群の生活に返つて來る性質のものではない。勿論、事實上は支配群に收められた生産財の幾分は、今日の意味でいふ社會政策的にも使用されるのであつて——即ち生産群の生活に戻つて來るのであるが——しかしそれは附隨的で、その社會政策なるものも、元來は、一般生産群が入つて行くことの出來ない國家生活を完成せしめる手段として、生産群から收得する果實を豐富ならしめるため、生産群の生産能力を支持しやうとする政策に外ならなかつたのである。つまり租税は、全社會群の心理によつて理解されないで、どうしても支配群と被支配群との對立する關係に就て理解されたのである。これが租税の喜捨と異なる所以であつて、さういふ性質は今日までも殘存してゐるのである。(後世には、租税を徴收するについて、それを收める被支配群の同意を求むる形式が生じ、それが今日の議會制度となつたのであるが、しかし、承諾を求めるといふことは、それをしなければ被支配者が反抗して納税を澁滯せしむるからであつて、つまり徴收方法の進歩に過ぎない。)

國家の經濟的基礎は、群の生活行動をこの租税能力を增進せしめるやうに管理することによつて鞏固にされるのである。言ひ換へれば、支配群を經濟的に豐富にすることは、必ずしも一般生活群を豐富にすることとはならないのである。寧ろその正反對に、支配群を豐富にしようとすればするほど、それだけ生活群を貧しくして置かなければならなか

つたのである。無論それは原始的の種族的管理に近い支配狀態の意識ではない。從つて種族的管理に近い支配意識は、生產群を貧しくするといふことは、全群的に貧しいことであると意識する。日本の古代の支配に、そのやうな種族的管理の意識が殘つてゐたゝめに仁德帝の故事のやうな傳說が生じたわけである。然し、多くの國家に於ては、歷史を見てもわかる通り、豐富な生活群を廣大な範圍に亙つて征服することによつて、極めて有力な支配群――國家――が出來上り、それが古代の軍國的國家で、それは大なる濫費國家だつたのである。凡そ政治狀態の成立つたところには、この對立關係の成立しないところはなく、この對立關係の成立した場合には、多少の程度で濫費的國家の文化狀態の成立しないところはなかつたのである。さういふ狀態は自然の群生活からは決して發生しない。一方に物理的の征服力があり、他方に豐富な生產群があつて、それが互に關係するところから發生した狀態である。從つて生產群から收得する階級は、生產群に對して、その生產群をも包括する群意識を有つことは出來ない。彼等は、生產群をばまるで別な生活群と見る。生產群も亦さういふ支配群を同一群意識の內に包含せしめないで、自分の群に對立する別な群と見る。つまり兩者の原始的敵對關係がさういふ形で持續されるのである。かやうな間柄に於て、生產群がその生產物を自分の群意識によつて支配群に差上ぐることの出來ないのはいふまでもない。即ち生產群は原始的の征服關係を持續してゐるやうな心理で、租稅を納めてゐるのである。

寺院の場合は、これに反して、生產群は、自個の群生活の組織として宗教的集團をもち、生產物は元來がその宗教的集團の所有として、觀念されるのである。從つて喜捨行爲は生產群の彼自身の群行動の自然の延長である。今日の個人的意識によれば、生產は生產行動に始まり、個人的所有――私有――に終る一系の行動のやうに意識されてゐるが、然し實際の社會的生產行動は今日でも、そんな風な個人的行動としては意識されない。今日でもすべての生產行動は隣人の消

費の爲めに行はれてゐるのである。大工は非常に好い家を作ることによつて生産衝動を滿足せしめてゐるが、その家が大工自身の享樂の滿足を目的とするものでないことは、決して大工の生産衝動を防げてはゐない。生産行動は、生産に始つて社會的享樂に終るところの一系の行動である。そこで生産群は寺院に對する喜捨に於いて——それが寺院財となることによつて社會財となる——群行動が滿足せしめられると意識する。今日の人間にも、粒粒辛苦の結果蓄積した財を寺院に喜捨することによつて、始めて自分の生活が終つたと安心して死んで行くものがあるのは、この本能の作用である。ただそれが、前に云つた如く變質して、寺院を構成する階級人——僧侶——の私有に轉化したのであるが、この轉化も決して絶對ではなく、今日と雖も寺院財の性質として、私有を否定する根本觀念は決して消滅してゐないこと、前にいつた如くである。喜捨を勸誘する僧侶も、いかに墮落した僧侶であつても、全然自己の所有物だけを要請してゐるとは感じまい。やはり一種の社會財を集めてゐるといふ氣持ちが殘存してゐるのである。

國家と寺院との經濟的地位がかく異るところから、その寺院財と國家財との消費する過程が自ら異つて來る。寺院財は僧侶階級の個的享樂財に轉化せしめられたとはいへ、僧侶階級の享樂は、それが頗る階級的に發展した場合にも、本來の公共的性質を幾分殘存せしめて居る。宗教文化は所謂民族的であつて、僧侶の生活が絶對にそれを獨占することはない。無論後に至つて嚴格な意味の階級文化として發達し、全く生産群の享受することの出來ない文化狀態に達したが、さうなつてもどの邊にか社會群の協同の享樂的性質を申譯的にも殘存せしめてゐる。例へば寺院の如きは、軍國國家の建造物の規模に劣らない——場合によつてはそれを凌駕する、——大濫費文化の結晶として表はれるに至つたが、それでも寺院は人民に開放された建造物になつてゐる。實際都會や村落に於て、社會群の生活狀態からは飛び離れた文化內容を具體化せしめたものが寺院であるが、然し一般人民はそれを殆んど自分達の共同の建造物のやうに感じ、

それを共同で享樂してゐる。事實貧弱な村の人も、廣大な寺院の殿堂や庭園を今の公園のやうな意味で享樂してゐたのである。僧侶階級は無論この公共的な寺院財の外に、私有的な寺院財を蓄積せしめ、軍國貴族と同じやうに、一般生産群を拒絶した私有的文化狀態を享樂してゐるのであるが、しかし今日でも寺院財の一部分が公共的享樂に向けられてゐるといふことは拒めない。そこで宗教的意識のやゝ濃厚に殘存してゐる僧侶階級に於ては、出來るだけ文化の私有的狀態、即ち軍國貴族のそれのやうな、全く生産群を拒絶した生活を組立てないことが宗教家の本來の性質であることを、認めない譯に行かないのである。

それは即ち政治國家と宗教集團とが、その文化構成の上で本質上異つた性質を持つ證據である。即ち軍國文化は本來が生産群と沒交渉に進展すべき性質のものであり、寺院文化はこれに反して、本來が生産群の群意識に即して進展すべき筈のものである。

然るにこの相異る二つの組織は、社會組織の微妙な性質によつて自らおのおのその異つた特徴を失ひかけたことによつて、互に接近するやうに進むのである。その事情を次に少しく考察して見る。

六　寺院と國家との相異と類似

寺院と國家とが異つた發生事情をもちながら、そこに幾分の共通點をもつことは疑ひない事實である。今までの國家觀念は、この共通點を極度に誇張して、國家成立の事情を無視して國家の社會的性質即ち國家が社會生活に於て絕對的であるといふ觀念を支持したのであるが、それは錯誤であるにせよ、然しさういふ錯誤を生ぜしめる無理もない事情もあるのである。

先づ軍國的征服の社會的動因ともいふべきものを考へて見る必要がある。今日の軍國主義と雖も、全然社會生活の本質に反した動機のみによつてゐるとは見えない。或る國家に於ける人口の過剩及び、自然資源又は生産原料の枯渇その他の經濟關係等が軍國的征服を惹き起すのであつて、その動因としては社會的生存の競爭狀態が存在せねばならぬのである。元來鬪爭は生存の群的現象につきまとふものであつて、鬪爭の必然性は、群の生存過程そのもののうちに存すると思はねばならぬ。しかもそれによつて群は、他の群との協同關係に入り込むのである。この事情は軍國國家の成立にも當て嵌まるのであつて、群と群とが征服關係を生ずるに至るのは、その二つの群を包括するより大きい群生活を組織する過程である。それはつまり群が膨脹する過程に外ならない。この群の膨脹の過程は、次第に鬪爭によらないで、人間共存の協同關係自體の機構によることになるが、然し今日の程度では未だ民族間の協同が戰鬪によつて誘導される場合が多い。この事情は小さな群同士が混同して一つの大きい群意識を生ずる過程なのであるが、それと同じ作用を武力的征服關係によらずに、又は武力と協同しても別の方法で働いたものが宗教なのである。

宗教は一つの群が密接の生物學的關係に近い關係に一括されることを信仰とせしむる意識であつて、それは實は生物學的には關係のない異つた群同士を協同せしむる意識に外ならないのである。その信仰によるといふ點が軍事的征服の武力によるのとは違ふが、結果に於ては、やはり一つの協同關係——寧ろ支配關係——を生み出すのである。そこに國家と寺院との間に共通要素がある。原始的に兩者の混同されたのもその故である。たゞ征服關係はそれに宗教意識の加味された場合にも、畢竟武力中心の組織であるといふ性質から、政治國家は寺院と別れるに至つたが、それが宗教的征服を加味した場合には、敵對關係そのものが幾分協同關係の性質を帶びるのである。即ちさういふ國家の強制的生産管理は信仰狀態の強制によつて、その武力的強迫に代るに、心理的強迫を以てするやうになるのである。軍國國家もある

程度までは、社會的の意義をもつた生産分配の管理を行ふに至つたことは、古代の歴史を見れば明かである。

國家がさういふ風に進むだのは、政治的管理が、社會的の意味の生産管理に一致すればするほど、その政治國家の鞏固を持ち來たし、その經濟的効果をも増すためであるが、それは自づから國家目的を社會的の目的に近けるのである。國家の生産管理が社會的の性質を失ふと、それに應じて政治的權力が減退したことは、古代國家のすべてを通じて見ることの出來る現象であつて、日本の例もそれに洩れない。我が王朝の衰へたことは、その生産管理が社會的性質を失つて、單純の搾取制度となつた爲めであつた。中世紀の封建國家が倒れたのも、それが生産群に對する管理能力を失つて、原始的掠奪に近い狀態に陷つたが爲めであつた。即ち政治群もその生産管理の社會性を失はず、それによつて群の對立關係が協同性質を帶びれば帶びるほど、鞏固な組織となるのである。この事情は國家の進化に重大な影響を與へて、國家意識を社會的道德意識に近かづける結果となつたのである。即ち國家を單純な掠奪者、消費者たらしめずに、群生活に於ける生活過程の組織に協同するやうにと變化せしめた。奴隷群を驅使してその生産果實を掠奪する軍國國家の組織は、すべての國家が始めにもつた組織であるが、後の國家は皆奴隷群から機械的に掠奪することをせずに、生産管理の方法で有機的に果實を收得する組織にまで進んだ。

この進化は政治群を敵對的對立關係から協同的管理關係に轉化せしめる動きをもつたものである。すべての階級國家は、皆何ほどかの程度でさういふ進化を取らなかつたものはない。無論その場合にも、生産群が政治群の生活構成のうちに入つて行けないといふ組織は依然として持續された。いかに支配群が政治を軍國的掠奪から管理的收得に押進めても、それは畢竟支配群の享樂財を豐富にし、それによつてその階級生活を發達向上せしむる爲めであつて、事實また支配群は全く生産群を除外した、自分達の階級だけの文化組織を完成せしめたのである。だからさういふ進化によつて政

治的支配が原始社會の宗教的支配のやうな社會的性質をもつものとなつた譯ではない。どこまでもその原始的發生事情であつた對立關係が持續されることは脫れない。

然しその對立關係が、殊に近代に至つて一轉化を見たのは、政治群の特別な構成が生產群の組織を取り入れるに至つた事情である。無論今日でも支配群が特別の階級的構成を支持してゐるが、然し生產群の群意識が政治群に對抗して、國家構成の上に具體的に表はれやうとしてゐる。本論はその目下の形勢について詳說する譯には行かないが、この傾向も亦國家が敵對的對立關係であるといふ性質を社會的協同關係の方へと移動せしむる過程の一つであることを指摘せねばならぬ。

一方に於て國家がさういふ進化を取ると同時に、他方に於て寺院が次第にその本來の性質を失つて行くのである。寺院はそれ自身の社會的意義によつて生產群から任意的の給付を受ける結果、その組織が寺院財を中心とする階級的集團となることは前に云つた通りであるが、この寺院財は一方に於て尙ほ原始的の性質を保つてゐると同時に、他方に於て軍國國家の財の集積と同じく、それによつて僧侶階級が全く宗教の社會的性質を離れた階級文化の構成に役立たしめることとなる。寺院財產がさういふ目的に消費されるに及んで、僧侶階級は、生產群の生活から全く隔離した生活樣式に於て、文化的に發展することによつて自己の階級的生活を完成せしむることとなるのは既述の如くである。無論この階級文化はその成長發達が宗教意識の本來の性質によつて影響されることはある。それが爲めに軍國國家の階級文化とは、その所謂精神內容を異にするものであることはいふまでもないが、それはやはり特殊の消費及び獨占となつて現はれる。而してその文化の精神內容は所謂教養の發達である。生產群は寺院階級の物質的生活に參加することが出來ないと同時

に、その精神生活にも入り込むことは出來ない。即ち宗教の高遠な教義と生産群とは全く沒交渉である。宗教的意義は本來が生産群の統一的群意識であるが、然しそれが教義として發達したものは、僧侶階級の獨占となり、その特殊文化を構成するものであつて、生産群の精神內容と密接な交渉をもつことは出來ない。教義はそれが僧侶階級に於て高遠に發達すれば發達するほど、生産群の生活の意識內容と沒交渉の度合を增すのである。その點は軍國文化の精神內容が生産群の意識內容と沒交渉であるのと異らない。

ただ教義は宗教的意識が、その原始的の群意識の性質を保存する限り、その群意識の論理的發展であるといふ特徴を保存することはある。複雜な形而上學化した教義も、これを要するに、その中心に原始的の群意識を潛めてゐることを見出さうとすれば、見出せないこともないであらう。例へば、靈魂・生命等に關する原始的信仰が、極めて高級に發達した教義の根柢にその原素的性質を以つて横はつてゐるやうに、個的所有を否定し、群生活の意識を、その社會的生産關係に於て支持する群の生存行動を統一する原始的宗教意識は、進歩した宗教の教義のうちにも影を止めてゐるに違ひないのである。

殊に宗教意識はその教義としての發展に於て、生活の具體的な約束から離れて、抽象的、概念的に發展することを得る。その結果、具體的な、限定的な群意識を、無限に擴大せしめるに至るのである。具體的の群生活は、必ず限られたる範圍をもつ。今日では、『民族』がその最も擴大された群生活の範圍を構成してゐ、民族意識が群意識に決定的の限界を與へられてゐるのである。從て具體的の群生活も亦、この範圍に限定されてゐる。所謂民族宗教は即ちこの具體的の群生活の範圍に一致してゐる宗教意識である。それは古代のトーテム信仰と性質を同じうした限定的の群意識である。その統一には限りがある。決して全人類を包括しない。それはつまり具體的の群生活に限りがあるからである。

ところが教義として論理的に發展した宗教意識は、必ずその具體的な範圍を超越する宗教的統一意識として發達する。民族宗教でさへもが、世界的宗教と同じ性質をもつて、人類統一を空想するに至るのであるが、宗教の教義は論理的にさういふ意識を完成せしめる。すべての宗教の教義は特殊の群意識から起つて、その群意識を超越する全人類意識として發展する。

このことは抑も何を意味するかと云へば、宗教的意識が人類の群的意識であるといふことを説明してゐるのである。人間は事實上限られた群生活を生活する。併しながら各の小群は、生物學的事實として、互ひ互の協同關係に進むべき傾向をもつ。或は一方の犧牲に於て他方の生存を支持するといふやうな不公平な關係であることもあるが、又一方の生存と他方のそれが依存關係に進むこともある。いづれにしても、生存が群的に孤立せずに、群と群との關係に於て發展するのが生物學的必然である。言ひ換れば、全人類は結局協同關係に於て一大社會群となるべき生物學的運命にあると云へる。不思議にも、又當然にも、群生活の意識である宗教意識は、具體的な特定の群を支持する所謂種族的乃至民族群意識と密接に關係すると同時に、その特殊の群意識を超越して、全人類を一群とするやうな群意識にまで發展するのである。それが爲めに有力な宗教的集團は、或る程度まで發達すると、必ず民族を超越した萬國的乃至人類的のそれに發展する傾向をもつに至るのである。

この事から宗教集團及び宗教意識は國家集團及び國家意識との分離を生ずるのである。宗教意識が民族群の意識である程度に於いては、精確に國家意識と一致するのであるが、それが次第にその群生活を膨脹せしむるに從つて、教團そのものが超國家的となる。國家はいつまでもその民族的群生活を超越することが出來ないに反し、宗教はやがてその具體的の群生活を超越する。そこまで行くと宗教は遂ひに國家と一致しない集團及び群意識を組立てることになる。國家

が今日でも、依然としてその孤立的な群意識を支持するに對し、寺院は國際的の群意識を以つて國家意識に反抗する。その性質が寺院と國家とを古代の一致狀態から現時の相背馳した狀態に押進めたのである。

進化した寺院と國家とが、右のやうな背反狀態を呈してゐるが、然しそれは政治群と宗教群との群の範圍及び群意識の差違であつて、兩者の制度的構成の機構に於いては、それにも拘らず類似的現象を呈するに至るのである。

寺院はその敎義に於てどういふ風に發達しやうとも、制度としての寺院生活は、僧侶の階級文化を完成せしむる機構を以つて進んでゐるのである。寺院は一種の國際的國家又は國內的小國家のやうな組織を以つてその經濟的根柢を培養し、喜捨によつて集積せられた寺院財産は、全く國家經濟と同じ組織によつて消費される。一方で僧侶の階級生活を盛り立て、他方に於ては社會群の協同の目的に消費される。而して宗敎的群意識が尙ほ強く群生活に働てゐる間は全くの喜捨として故障なく蓄積されるが、文化が複雜となるに從ひ、群意識はいろいろに分化して宗敎的群意識だけが強く働く譯に行かなくなる。それに從つて、群生活に對する財政的奉仕はいろいろの方向に分割される。それだけ寺院に對する喜捨が困難となる。さうなつた後までも寺院に對する喜捨のみが有力に行はれるならば、今度は他の群生活に對する財政的奉仕が怠られることとなる。そこで例へば軍國國家の如きは、寺院に對する喜捨を財政上の强敵と考ふるに至るのである。新たな宗敎が起つて、喜捨が盛んに生産群の零細な資金を收得すると、軍國國家はその稅源を奪はれる結果となるので、勢ひ宗敎團と國家とが敎權と政治的權力との優越を爭はなければならぬはめとなる。國家の敎權壓迫は、一方では、さういふ經濟國の事情に基いてゐるのである。

これは即ち寺院が財團として國家と同じ性質を持つに至つた結果である。それが極端になると、喜捨は恰も租稅と同じく、一定の割當てを以つて徵收されねばならぬ性質に變化し、寺院の財政はこの租稅を基として組たてられた國家經

濟と全然同じものとなる。そこで恰も國家が租税增收の手段を講ずると同じやうな意味で、常に政策的に喜捨の增收を圖ることが、寺院の主たる行政事務となる。現在の世界の大きい宗教團の財政組織は、即ち悉くさういふ性質に變化してゐるのである。かくて寺院は財政的には國家と同じものであるといふ事になる。

而かも國家及び寺院の主なる仕事はその財政事務である。この點に於て、寺院行政は國家行政と似た組織を持つこととなり、その行政組織は次第に、國家のそれと似た形で定成されることとなる。國家は強制的の租税徴收に於て數千年の經驗を積み、その點に於て國家の組織は甚だ完備してゐる。寺院の受ける喜捨が次第に租税と同じやうな強制的の性質を備へるに至ると、寺院は自ら國家の行政組織を模倣することとなる。すべての尨大な宗教團が、いづれも國家組織に似た組織をもつ所以はそこにある。わが兩本願寺院始めその他の大本山に於ては、大抵日本の行政官府の組織並びに議院制度を模倣し、位階制度や教育制度に至るまで、悉く國家の制度に倣つてゐる。その意味で教團は國家内の國家又は國家を超越した國家である。

七　寺院と國家との逆轉

寺院と國家とは、上述の如くに、或は離れ或は近づくのであるが、その上にこの兩者の地位を逆轉せしむる事情は、兩者の生産管理に於ける關係である。寺院は既に言つた如く、群を生産行動に於て統一せしむる宗教意識に發程し、原始的には宗教家そのものが現實に生産管理者であつた。宗教的支配がそれ自體生産の支配であつた。而かもそれが寺院の組織をもつに至つて、もはや具體的の生産關係から離れ、寺院はただ形式的に、今日でも生殖と生産に關する儀式を司るに過ぎないものとなつた。多くの文明國に於ても、結婚・元服・田植・建築その他生殖と生産とに關係する諸の行

動は宗教的儀式を作つてゐる。が、これは宗教が生殖生産に關連する群的行動を統一してゐたといふ古代の宗教生活の名殘に過ぎないのであつて、現實の行動の管理としては、寺院はもはや實際的の地位を保つてはゐない。而してその實際上の管理は、全く國家の手に移されてゐるのである。生產管理が國家的管理に統一されたことは、國家の歷史と共に可なり古いことである。

この國家管理は勿論、屢々云つたやうに、階級的であつて、社會的ではなかつた。從つて宗教意識による社會的の管理とは甚だしく違つた性質のもので、一は生產群の意識を中心とし、他は征服群の意識を中心した管理だつたのである。けれども、寺院の生活が次第に階級化するのと反比例に、國家の生活は軍國階級の純然たる征服關係から次第に協同關係に移り、中世紀の封建國家が又それを逆轉せしめたが、久しからずして近代國家は一層協同的精神を增進せしめつつある。軍國國家の階級的對立から市民國家の經濟的對立關係に移り、そこに依然として國家生活の階級的對立を持續してゐるが、併しこの進步した市民的支配は、昔の軍國的支配に比ぶれば、その强制的性質から協同的性質に移つた程度の甚しきことを認めない譯に行かない。近代的搾取關係は昔の掠奪關係が純然たる敵對的組織であつたのに比べれば、甚だ協同的の組織となつてゐるのである。同じことでも、武力組織によらず、法律組織により、協同組織によつて行はれるだけでも、變化が認められるのである。國家生活はその意味に於て、絕えず生產管理に深入りするやうにと進んで來つつある。

これは確かに寺院と國家との逆轉である。群意識に基く寺院が生產關係から隔離して單純な搾取關係に這入り込み、國家が軍國的掠奪關係から出立して、次第に生產關係に入り込むといふことは、いかに人間生活の制度といふものが、人間の意識を超越した現象であるを伺はしめるに足るのである。

そこで寺院と國家との財政上の基礎についても一種の逆轉となる。即ち喜捨は次第に租稅化し、租稅は次第に喜捨化する。租稅は本來强制徵收であり、生産群の群意識と沒交渉に支配群に召し上げられる損害であつた。支配群はそれによつて生産部が永久に入り込むことの出來ない排他的階級文化を造り上げたのであつた。一言でいへば、租稅は全く奪はれるものであつた。ところが今日では國民として租稅をさういふ風に觀念するものは殆どない。數千年來の軍國的、階級的支配は、傳統的に租稅を『奪はれもの』と觀念せしむることになつてゐるが、然しさういふ遺傳的の心持ちは、次第に現在の事實によつて打ち消されつゝある。租稅は、今日の觀念に於ては、吾々の生活管理の費用である。生活群と雖も、國家が或程度まで生活管理の機關であることを認めてゐるので、全然租稅を『奪はれもの』とは感じない。ただ政治階級が明かに生産群を除外する階級的構成をもつてゐるといふ事實があるために、租稅は昔の軍國國家の場合と同じやうに、『奪はれもの』との感じを、除外された生産群に與へることはある。然し國家の――少くとも自治團の――租稅に於ては、さういふ觀念も大部分打消されてゐる。それは即ち自治團が市民階級の階級的組織であるにせよ、直接に吾々の生活管理に當面する組織であるが故に、その租稅を吾々の群意識に結びつけて考へるのである。吾々はそこで自分自身の費用を提供してゐると感じる。因襲的の觀念では依然として、それを納めることに於て損害を感じないわけに行かないが、それでも幾分は自分の生活費用として觀念するのである。これは實に一種の喜捨心理である。喜捨は生産物を群に提供することによつて、それが自分達の生活に戻つて來ることを無意識に意識する給付行爲である。租稅は最も發達した觀念に於ては、それと同じものでなければならぬと考へられるに至つた。即ち喜捨の心理と入れ代つたのである。

寺院と國家とが右のやうに逆轉的になつた結果、寺院は恰も昔の生產群が國家を沒交涉と感じたやうな意味で、今の生產群から沒交涉と見られる虞れがあることとなつた。これに反して、昔は生產群から沒交涉な敵對關係の群であつて、到底生產群の生產に持ち來されないと思はれた國家は、今は反對に、生產群がそれを自分達の生活管理に密接な關係をもつ機關として持ち來たさねばならぬといふ風に感ずるやうになつた。その反對に、寺院は次第に、生產群からただ徒らに搾取するだけの集團のやうに思はれることとなつた。これは大きな顚倒である。

八　結論

然しそれが爲めに寺院はもはや群生活に於ける存在理由を失つたと斷定することは出來ない。前にも云つた如く、人間の本能は所謂合理的の察知作用を以つて、それを如何ともすることの出來るものではない、原始的宗教感情はいろいろに異つた意識狀態をもつて、依然として今日の群生活に作用してゐるのである。それは嚴然たる事實であつて、有用とか無用とかいふ判斷で動かされるものではない。群がその協同行爲を最も密接に關係せしむる場合は、その集團が何等かの信仰的統一の下にある場合である。その信仰とは必ずしも昔の通りの種族的宗教意識又は民族的宗教意識であるとは限らないが、然し、一定の群がその協同を殆ど絕對的とする信仰的態度を以つてゐることは、今日の人間と雖も脫れない。それは殆んど本能的である。さういふ本能的の作用は必ずしも現實の生活の協同關係と一致するものでないから、具體的生活の協同關係が進化するに從つて、さういふ本能もその具體的の關係と撞着する場合には、自然壓迫されて、原始的の作用を保つことは出來なくなるが、さうしてそこから今日は生活の有機關係に基づく群意識が發達しつつあるのだが、實際の社會を見渡すと、殆どそれと沒交涉である如くに、原始的の宗教意識そのまゝの本能的作用をもつた群意識が數

屈してゐる。ユデア人はいかにヨーロッパの生活の協同關係に織り込まれても、その群意識が原始的な民族感情と一致した宗教感情で統一されてゐる。それは不思議なことであり、又不都合なことであるかも知れないが、然しどうすることも出來ない事實である。又アメリカの清教徒は、今日では全く國際的な集まりとなつたアメリカ文化の生活組織の中にありながら、依然として傳來の宗教的意識によつて團結し、その一部は凝り固つてかのK・K・K團のやうなものを組織するに至つた。この事實を觀察するものは、現代の生活組織に於ても、尙ほ依然として原始的宗教觀念に依る結合の存することを知らねばならない。

屢云つた如く、宗教的意識は、特定の群生活があつて然る後に發生した意識であつて、初めに宗教的意識があり、然る後群生活が出來たのではない。そのことは現代にさういふ宗教的意識が殘存する場合にも、亦考へねばならぬことである。つまり宗教意識が殘存するが故に、その意識による群生活が保存されるのではなく、さういふ意識が殘存せねばならぬ群生活が保存されてゐるが故に、——例へばユデア人の特殊の群生活が存在してゐるやうに——さういふ特殊の宗教的意義が自然に殘つてゐるのである。アメリカの清教徒にしても、清教徒の傳統を有する南部のアメリカ人はアメリカ建國當時の農民的生活の根柢の上に今なほ地方的集團を形成つてゐるので、その集團生活の群意識として、清教徒的宗教意識が頑固に保存されてゐるのである。ユデヤ人の場合もさうであつて、なるほど彼等の生活はヨーロッパの文明生活に織り込まれてゐるやうであるが、然し、群生活として常に壓迫されること、アメリカのモルモン教徒のやうな事情があるので、ユデア人の群意識は、特にその原始的の形態を保たざるを得ないのである。即ちその群生活に於ては生活事情が孤立的な群を形成し、その群意識として孤立的な宗教的意識がつきまとふのである。

國家意識としても、現在に於ては尙ほ昔の通りであつて、嚴重な民族意識に固着してゐる。一方に於て近代資本主義

が民族的群意識を攪亂せしめ、資本と勞働との大きい群意識を國際的に成立せしめつつあるか、それにもかかはらず民族的對立が偉大の力を以つて現狀を支配してゐる。生活の有機關係による群意識は常にその民族意識と撞着したために、いろいろの危險狀態を呈出してゐる。けれども現に人類の群意識を支配してゐる事實そのものを無視しては生活の科學的意識は成立ち得ない。この群意識が現在いかなる地位を生活組織の上で占めてゐるかを知ることは、それが將來どう變化するかを見定むる先決問題である。宗教的群意識はそれと結びついて研究されなければならぬものであつて、寺院と國家とに關する現在の事實を明かにすることが、その將來をトする所以である。

地租移讓問題を論ず

中澤辨次郎

第一 地租移讓問題の政治的展開性

一 従來の地租移讓問題經緯

嘗つて原内閣當時、其の直前の内閣に依つて組織された「國民經濟調査會」が廢止され、それに代つて「財政經濟調査會」が組織されたことがあつた。而して同會に於いてはその重要調査項目の一として、税制の根本的整理案なるものが議題に供せられ、其の内でも取り分け地租及び營業税の移讓（各半額を地方に）問題が論議の焦點となつた 然し乍ら「地租及營業税の地方移讓を斷行するには、それに代る可き國庫の財源を求めなければならぬ、それには新たに財産税を興してそれに代らしむる可きである」と云ふ論樣が會内に於いて可なり有力に主張され、大體その主張に基いて相當具體的成案が出來上つたと云ふことを私はその當時聞いて居た。所が新たに財産税を起こされると云ふことに不都合を感じた時の資本閥干係筋から、強硬なる反對の意を表された干係上、折角出來上つた調査會成案に對して、原内閣は結局調査未了と云ふ一句を遺して之れを葬つて了ひ、終に何等税制整理に着手する所がなかつた。以上には單に地租移讓に干する問題計りでなく營業税問題も包含されて居るが、兎も角我が國最近に於ける地租委讓の問題には斯くの如き經緯があつたと云ふことを我々は此の際、記憶から呼び起こす必要がある。

地租委讓問題は斯くの如くして一應原内閣に握り潰されて次の次の内閣たる加藤（友）内閣へと持ち越した。然かるに這の間一般財界には、偉大なる變遷が行はれた。歐洲戰後の好況を承繼したサシモの黄金時代も大正九年三月を一期劃として急激に惡變し、所謂財界の極端なる不況時代に陷入した。此處に於いてか問題は更らに再轉し、與黨たると野黨たるの區別なく、

が民族的群意識を撹亂せしめ、資本と勞働との大きい群意識を國際的に成立せしめつゝあるが、それにもかかはらず、民族的對立が偉大の力を以つて現狀を支配してゐる。生活の有機關係による群意識は常にその民族意識と撞着するが爲めに、いろいろの危險狀態を呈出してゐる。けれども現に人類の群意識を支配してゐる事實そのものを無視しては、生活の科學的意識は成立ち得ない。この群意識が現在いかなる地位を生活組織の上で占めてゐるかを知ることは、それが將來どう變化するかを見定むる先決問題である。宗教的群意識はそれと結びついて研究されなければならぬものであつて、寺院と國家とに關する現在の事實を明かにすることが、その將來をトする所以である。

地租移讓問題を論ず

中澤辨次郎

第一　地租移讓問題の政治的展開性

一　從來の地租移讓問題經緯

嘗つて原内閣當時、其の直前の内閣に依つて組織された「國民經濟調査會」が廢止され、それに代つて「財政經濟調査會」が組織されたことがあつた。而して同會に於いてはその重要調査項目の一として、税制の根本的整理案なるものが議題に供せられ、其の内でも取り分け地租及び營業税の移讓（各半額を地方に）問題が論議の焦點となつた　然し乍ら「地租及營業税の地方移讓を斷行するには、それに代る可き國庫の財源を求めなければならず、それには新たに財産税を興してそれに代らしむる可きである」と云ふ論様が會内に於いて可なり有力に主張され、大體その主張に基いて相當具體的成案が出來上つたと云ふことを私はその當時聞いて居た。所が新たに財産税を起こされると云ふことに不都合を感じた時の資本閥干係筋から、強硬なる反對の意を表された干係上、折角出來上つた調査會成案に對して、原内閣は結局調査未了と云ふ一句を冠して之れを葬つて了ひ、終に何等税制整理に着手する所がなかつた。以上には單に地租移讓に干する問題計りでなく營業税問題も包含されて居るが、兎も角我が國最近に於ける地租委讓の問題には斯くの如き經緯があつたと云ふことを我々は此の際、記憶から呼び起こす必要がある。

地租委讓問題は斯くの如くして一應原内閣に握り潰されて次の次の内閣たる加藤（友）内閣へと持ち越した。然かるに這の間一般財界には、偉大なる變遷が行はれた。歐洲戰後の好況を承繼したサシモの黄金時代も大正九年三月を一期劃として急激に惡變し、所謂財界の極端なる不況時代に陷入した。此處に於いてか問題は更らに再轉し、與黨たると野黨たるの區別なく、

具さに此の問題に當面せざるを得ざるに到つた。之れより其の間の事情を略述して見やう

好況時代に潤ふことの極めて遲く、極めて僅少であつた農村は、一度び財界不況に直面すれば反對に、其の影響を蒙る速度は最も敏速であり、最も甚大（其の理由は拙稿「農業の經濟的革命」參照のこと）であつた。此處に於いてか農村は年を次いで疲弊し窮乏して行つた、俄然農村窮迫、農民疲弊の叫びは全國津々浦々の農村から擧げられるに到つた。殊に帝國農會を中心とする各級農會や農事協會若くは農政協會に立て籠れる地主階級は、此の機會を逸せず團體的活動を初め、表面不偏不黨を標榜し「農村振興」「農民救濟」を振り翳して各諸政黨に肉薄した

時恰かも十五回總選擧は明年に迫つて居た。從つて各諸政黨は當面に於ける此の農民の要望を一手に引き受けて、中原に鹿を追ふ可き戰略を巡らすことの必要に迫られて居た。少くともこの機會に農民の要望を入れて政黨的約束手形（空手形）を濫發して、農民團體に興望を繋いで置くことの必要を感じて居た。

政治的無責任の地位にあつた當時の革新俱樂部が、逸ち早く地租全廢案なるものを急造して農民に媚びたのも即ちそれである。折あらば廟堂に立たうとして熟柿の落ちて來るのを切望して居た憲政會が地租の二分減案を提げて農民に諂らつたのもそれである。歐戰後景氣に魅惑されて極端なる放漫政策を取り、必要以上の土木事業を起こしたり、鐵道を敷いたりして此の時代まで、兎も角地方民の興望を繋いで居た政友會が昨日までの主義政綱を一擲して俄に地租の地方移讓案を提唱せざるを得なくなかつたのも即ちそれである。而して當時、時の政府に與黨干係にあつたものは、最後の政友會だけであつた干係上三案中地租の地方移讓案なるものが、最も農民の信頼する所となり、農民側はこれを十三年度より實行すべきことを迫り、政友會に於いても幹部階級は兎も角、次の總選擧に於いて後顧の憂の多少でもある多數の陣笠は一齊にそれを承引する空手形を濫發して、農民の要望通り十三年度より地租は府縣に移讓されるのか、市町村に移讓されるのか、或は亦地租を地方に移讓するとしても、その收入と徵收權丈けを移讓して、地租事務の方は元の儘國家擔當として置くのか、そうした具體的問題は一切顧みられる所なく、只だ徒らに地租は大正十三年度より地方に移讓すると云ふ氣運が醸成されて終つた。然かるに俄然大正十二年九月一日に起つた關東地方の大地震は、恰かも政友會幹部の政治的立場を救濟するかの如く、降つて湧いて起つて、所謂帝都復興の大なる聲に壓せられ、地租移讓問題は其の儘跡形もなく立ち消えとなり、彼等が農民に濫發した約束手形は、美事空手

形に歸して終つた。

二　政友會の黨略的立ち場

其の後一ヶ年を待たない裡に、內閣の首は再度スゲ代つた。山本內閣が虎の門頭に起つた不敬事件の爲に幻の如く立ち消えると、鵺的淸浦超然內閣が成立し、此處に俄然政界には一大旋回運動が起つた。即ち數年來絕對多數黨を以つて任じ、腐敗橫暴の限りを盡して居た政友會が、恰かも驕慢し切つた平家が、一敗地に塗みれて再び起つ能はなかつたやうに、脆くも內因的に崩壞して政友本黨なる畸形兒を生み、之れを鵺的內閣の爲に懷柔されて終つた。而して其の身は忽ち第三黨にして而も野黨たるの悲哀を痛感せざるを得ざるに到つた。然し乍ら此の場合政界の場面は更らに一廻轉して、昨日まで犬と猿の啀ひ合ひ干係にあつた憲政會と殘留組政友會とは憲政擁護の名目の下に妥協し、脊仲合せの干係にあつた革新俱樂部と折り合ひ、此處に世に言ふ三派協調が成立し、議會解散後の總選擧に臨むことゝなつた。言ふ迄もなく此の場合の選擧に於ける旗印は、地震に依つて立ち消えになつた地租の地方移讓問題の如きは、完全に放擲して亦顧みる所がなかつた。「護憲」と「普選」之れが對總選擧の旗印であり、兼ねて淸浦內閣倒閣の手段であつた。

斯くの如く目間苦しい迂餘曲折を經て、偶然の動機から協調した三派は終に淸浦內閣に勝つて所謂聯立內閣を組織した。そうして彼等の言ふ護憲の目的を達成した。普通選擧法を公布した。と、同時に他面に於いては之れが爲め一年を經過せざるうちに早くも共同の目的を達した疲勞を感じ初めた。協調に依つて拘束される苦痛さへも少感し出した。殊に最近革新俱樂部を併合して少しく小太りした政友會としては、憲政會に對し比率上の不滿さへも抱くやうになつた。機會さへあるならば憲政會と手を切り、內閣引責の場合に於ける共同責任を避けて、次の內閣を單獨組織しやうとする野心さへも少しは抱藏するやうになつた。此の一端が世に現はれては政本合同の啀となり、亦は政黨の內部確執として傳へられるやうになつた。

斯くの如き成り行きの下にある政局に於いて、近頃政友會が往年反古にした「地租の地方移讓」と云ふ空手形を拾ひ上げて、之れを財源干係上餘り喜ばない憲政會と協調の下に重要政策の一として實現しやうとする。蓋し政局は之れよりして妙味ある紛糾に其の端を開かうとして居る。

言ふ迄もなく地租の地方移讓と云ふことは、普通選擧法實施の前後の差異に依つて大いに政略上の意味を異にする。普選實施以前ならば、地租の地方移讓そのことが、殆むど全部の有

者に對して渇望的に期待されることである。少くとも之れに依つて七千四百萬圓餘の地租丈けは國税としてその負擔を直接免かるれからである。然し乍ら普選實施後の今日に於いては、新たに増加した一千萬有餘の新有權者に對して必ずしも悉く直接利益を齎す結果とはならない。從つて此の新有權者は地租の地方移譲に對しては大體に於いて舊有權者の如き熱意は持たない。故に舊有權者の要望往年の如きものがあるからと言つて、政略上の意味を往年の如く重要視して此の問題に處するならば、政友會の失敗は期して待つ可きものがあるであらう。然し乍ら地方前述の如き對憲政會との黨略干係から、此の問題を提げて折衝することが目的であるならば、其の效果は亦別種の意味に於いて、相當の興味がある。別言すれば當面の政局に對して可なり大なる展開性を持つた重大なる問題と見ることが出來やう。

三　中央集權か地方分權かの問題

惟ふに我が國今日の政黨間には地租問題を中心として相異つた二つの思想系統があることを見逃すことは出來ない。其の一つは地租は飽く迄も國税として存置して置き、若しも其の税率が高きに過ぎると云ふことであるならば國家自ら之れを輕減しやうとする中央集權的思想態様がそれであり、他の一つは地租を地方に移譲し、その收入と徴收權とを完全に地方移譲(但し地租事務に就いては今の所何等論議されて居らないから、從來の如く國家がそれを擔當することであるらしい)しやうとする所謂地方分權的思想態様がそれである。而して今日までの經過から言へば前者は憲政會、後者は政友會が各々それを代表して居る。

而して此の兩政黨とも今の所その根柢に斯くの如き重大なる意義を持つた思想系統のある問題であると眞に氣付いて居るものは極めて尠ない。唯だ漫然、黨略上の懸引きや一部農民に對する政略關係に動かされて或は輕減と云ひ、或は移譲と云つて居るのに過ぎない。然し乍ら此の問題は輕減と云ひ移譲と云ひ左様な輕卒なる動機に依つて決定され可き問題ではない。一國の行政的見地から、大所高處より其の影響が那邊にまで及ぶかを見極めて而して後に決定すべき重大問題である。殊に此の場合地租輕減で行かうとするには大なる問題もないが、地租を地方に移譲せんとする所謂徴税上の地方分權を一部分認めて行かうとする場合には、大なる考慮を要する問題が幾多發生するに相違はない。例へば地租を移譲するからには、之れに匹敵する確乎たる税源を新たに他方に於いて求出しなければならないで

みらうし、亦今日までの如く總ゆる行政を從來の如く中央集權の下に統一して行くことは恐らく不可能な問題となるであらう。地租輕減が農民負擔の輕減に手厚くなく、地租移讓がそれに手厚い等と言つて論爭し合ふのは蓋し末の末である。問題は税制の上に於いて、從來の如く中央集權で行くか地方分權で行くかの問題である

由來我が國の行政は從來極めて長い間餘りに各方面に對して中央集權的に流れ過ぎて居た。其の地方地方に於ける特殊事情を除りに見殺し過ぎて居た。此の方針は各地方の財政經濟が極めて初期の時代に於いては適當の方法であつたかも知れない。亦中央に於いても國家の地步が極めて幼稚であつて國外の種々なる脅威に備へなければならなかつた時代には相當國家の存立用件として必要であつたに相違はない。然し乍ら今日は國の內外共に事情が一變して居る。國外に對する脅威が全然除去されて終つたとは言はないが、それに對する備へは昔日の如く强度の必要を感じなくなつて居る。尠くとも政治的經濟的國家の地步の向上に依つて、亦國內の事情から言へば最早今日に於いては地方自治體は中央集權的政治の下に總ゆる開發が行はれ盡されて既に立派に一人步みが出來るやうになつて居り、進むでは中央よりの指導監督を不必要として居る。亦財政的には確定强固の財源さへあるならば中央の補助を必要とせず、財政的に自給自立し得られる狀態にまで進むで居る。從つて此の際今迄の中央集權的弊害を匡正する意味に於いて稅制上の一部地方分權を認め、暫く地方財源の涵養を行ひ、而してその地方獨特の文化を開發することに努力し、官僚の所謂民力を根本的に充實しなければならない。斯くの如き曉には必然に中央より巨額の補助費（大正十四年度豫算には八千八百萬圓、特別會計三千萬圓）を歲々交附して居るが、斯くの如き補助費は勿論地方自辨の途が立ち、從來の如く地方から一旦徵收して中央に收め、再び之れを地方に再交附すると云ふやうな重複事務は廢止されるのであらうし、地方が中央に當面的立場にある財政上の不便も除かれるであらうし、亦中央に於いては地方監督に關する中央政務の大半を廢止し得るであらうし、中央直轄事務の大半をも地方をして之れを行はせることが可能となるであらう。

地租の地方移讓は尠くとも前述の如き種々なる政務の重大改革を促す核心となるものである。之れに次いで營業稅の地方移讓が行はれるならば、更に之の改革は加速度の勢を以つて行はれるや必然である。從つて此の問題は政友會や憲政會の黨略や政略に依つて左右され可き不眞面目の問題ではない。國家の將來に於ける行政方針が決定される大問題であるから、須く此の

際政黨者流の手から此の問題を國民の手に奪ひ返して、眞面目に眞劍に討議しなければならない。此の見地から言へば地租の地方移讓を行ふと行はざるとが舊有權者に對する負擔增減に重大干係があるかの如く解釋して今尚ほ選舉民に對して居る政黨員の態度如きは、蓋し噴飯の至りだ。

第二　農民公課負擔と地租委讓

一　農民と商工業者との負擔比較

去り乍ら今日の多數細小農が、收益の割合に過大の公課負擔を荷重されて居つて、經濟的に大なる苦痛に陷つて居ることは見逃すことは出來ない。從つて今日の農村の七割を占めて居る細小農の經濟的立場から觀察して、地租移讓問題が何う影響するかを知ることは、既述の如き政黨の黨略や政略的見地から全然立ち離れて、此處に愼重なる考慮を拂ふ必要がある。即ち農民の內のホンの一部階級である舊有權者の公課負擔問題でなく、全體の農民の公課負擔問題として、此の問題を考へると一國の行政的見地から論じたと同樣に、速かに地租の地方移讓を斷行するの必要を認める。即ち農民の負擔を其の他の商工業者の負擔と平均せしめ、所謂國民の負擔の平等を期する上から特に然るのである。

、今農民と商工業者の所得を比較して見るに、大正四年に於いて兩者ともその所得を一〇〇の指數と假定し、六年後の大正十年に於いて其の指數を比較して見ると、前者は三〇四なるに比し後者は四一二に進んで居る。即ち此指數に依つて見ると商工業者は農民より此の期間に於いて約一割〇八厘の增加所得を得て居る。即ち左の如し

年次	農民田畑所得（千圓）	同上指數	商工業者所得（千圓）	同上指數
大正四年	二三六、五三六	一〇〇	一七七、七八八	一〇〇
同五年	一九九、七二一	八四	一九八、七一三	一一一
同六年	一八六、五九八	七八	三〇三、二九一	一七〇
同七年	二一九、四六三	九二	四三八、五七四	二四六
同八年	三九二、二六七	一六五	五七一、五七〇	三二一
同九年	六二五、三五八	二六四	五三八、〇八五	三〇二
同十年	七一九、一五八	三〇四	七三三、一九一	四一二

斯くの如く今日の農民はその所得の根本に於いて他の商工業者より極めて不利の干係にある。商工業者の所得は大戰中たる大正五六年と雖も、極めて漸進的にその所得を增進して居るのである。然かるに農民は大正七年までその所得が減少し僅かに大正八年に到りて六分五厘の增收を示し、初めて前述の如き割合になつて居るのに過ぎない。然かるに翻つて收益に對する公

課負擔の場合になると、此の干係は全然一變して終ひ、收益の少い農民が收益の多い商工業者よりも遙かに多い負擔をなして居る。例へば今左表に依つて收益百圓當りの兩者の公課負擔割合を調べて見ると、

種別		國稅	地方稅	合計	備考
農業者	A	圓 三、五七	圓 七、六〇	圓 一一、一七	一、本表は大正十一年度の大藏省調査による。
	B	三、三二	七、〇五	一〇、三七	一、商工業者中Aは物品販賣業Bは製造業者の負擔なり
	C	三、三五	七、一二	一〇、四七	
商工業者	A	四、七三	四、四七	九、二〇	
	B	三、五一	三、三二	六、八二	

製造業者の公課は農業者最高の公課の約二分の一強であるに過ない。而して此の際注意すべきことは國稅に於いて農民負擔比較的に輕く、地方稅に於いて倍加されて居る事實である。即ち知る農民の過重なる公課負擔の輕減策としての地租移讓は、地租を移讓するとに依つて地方稅の整理を行ひ、全體としての農民の公課負擔を輕減することにあらねばならない、更らに此の際附け加へて置かねばならないことは、商工業者は本來の所得乃至收益を隱蔽し得る立場にあるから、收益百圓當りの國稅割合ひが比較的高率に上つて居つても、實際の收益に對比すれば、必ずや農民的以下の負擔割合が、算定出來るであらうし、反對に農民は土地と云ふ隱すことも詐ることも出來ない明確なる實在物に向つてその收益に依り算定されると云ふ點を考慮して此の調査表に對する必要がある。（本項は拙稿「農村振興の社會的新基準」中「農民問題」の項參照のこと本年四月號中央公論）

二　細小農保護政策と地租移讓

中央集權的稅制體系が今日まで如何に多大なる犧牲を細小農階級に强いて居つたかは、實際に彼等と大中地主との公課負擔割合を調査したならば、何人にも容易に首肯出來る所であらう。大正十年帝國農會に於いては、一府十八縣の農家三十二戶に就き租稅公課の負擔額を調べた。それに據ると田畑宅地一町步內外を所有する者の反當り公課負擔額は十三圓六十三錢四厘であるにも拘らず、同一町步以上二町步以下を所有する者の反當り公課負擔額は十圓十一錢九厘に低下し、更らに進むで二町步以上三町步以下の所有者は反當り九圓四十錢一厘となり、三町步以上五町步以下の地主になると七圓九錢三厘に低減し、五町步以上七町步以下の地主に對しては反當り五圓七十一錢三厘と云ふ極めて低廉なる公課負擔に遞減されて居る。之れ以上の大地主に對しては何等調査されて居らないから、此處に確定的なことは言へないが恐らく更らに遞減された負擔額であるに

違はない。左表はその一般を示すものである。

所有者土地面積別	田畑所有面積（反）	同上公課負擔總額	所有地反當負擔額
一町歩内外の所有者	一四、二二五	八九、八五〇	一三、六三四
一町以上二町以下同	一六、一二四	一四〇、九九〇	一〇、一一九
二町以上三町以下同	二〇、一三六	一九五、八三〇	九、四〇一
三町以上五町以下同	二三、七二七	二五九、四一六	七、〇九三
五町以上七町以下同	三二、〇〇一	三二〇、五三七	五、七一三

由來租税公課は絶對收益の多い者から、累進的遞增課税をなすのがその本旨であらねばならない、然かるに我が農村に於ては前掲の如く此の本旨に相反した課税が行はれて居る。而も此の場合注意しなければならないことは基本國税たる地租に對しては累進税ではなく、定率課税が行はれ、地方税並に町村附加税に對しても本税一圓に對し幾らと一定の課税率が決定されて居るのである。從つて本來此の課税率で行くならば一町歩の所有者も七町歩の所有者も、絶對負擔額は兎も角、反當り負擔額は同一でなければならないのである。然かるに實際に於いては前述の如く、一町歩内外の所有者とそれ以上の所有者の反當負擔額を比較して見ると反比例をなして遞減して居るではないか。抑々此の不公平は何んに由來するか、我々は少しく此の點を突き究めねばならぬ。

一言にして盡せば之れは前述した如く中央集權的税制體系を今の地主階級から逆に利用された産物である。何んとなれば從來の課税方針は中央政府の長い間の方針として、總ゆる税源に對して定率課税を以つてして居た。僅かに最近所得税に對してのみ累進課税が行はれ初めた位ひのものである。從つて既に此の課税の基本方針が中小産階級に對して不公平を强ひて居るにも拘らず、他方地方附加税に對する制限法が凡べて定率であり其の上に地方税中の大宗である戸數割が、時の自治體の政權掌握者に殆むど勝手な課税率（大正十年十月勅令四二四號を以つて之れに多少の制限が加つた）を以つて決定された。即ち財產所得者に對する課税を疎かにし、勤勞所得者に對しては、農閑期に際し、天ビン一打を肩にして行商する人の果てにまで極めて鋭敏なる課税方針が立てられた。換言すれば細小農階級の最も苦痛とし、亦その相對的負擔額の最も大なる戸數割が、財產額に比例した累進税を以つてせられず、大體一戸一戸に對する課税定率を決定して行き、之れに可なり不都合極まる見立て割りが働いて飽く迄も勤勞所得者に對して不利なる課税が行はれて居る。斯樣な事情を基礎としてなり立つた地方税戸數割が軈がて前述の如き、細小農に對して反當り負擔額を重くし、大地主に對して反當負擔額を輕るくする所の課税となつて現はれ

るのである。

故に此農民負擔の對內的不公平を是正して、農民負擔の眞の公平を期することは我が今日の農村の現狀から推して一日も忽諸に附することは出來ない。況んや普選法の實施前ならば兎も角、既に普選法も實施せられ、亦大正十年改正された町村制に依つて、今春より行はれつゝある町村會議員選擧等の成績に照合して見ると今日まで行はれて居た各種の不公平なる課稅方法の如きは忽ち重大なる問題となるは當然であるから、此の際進むで中央集權的稅制上の一體系を頹して地租の如きは速かに地方に移讓し、地租を基本とする附加稅に大革新を加へ、今日までの課稅方針とは全然反對に、財產所得に對して累進的附加稅を課し、亦勤勞所得に對しては、所得に比例した遞減附加稅を課し、以つて眞の負擔能力を斟酌した社會的見地から見て公正なる課稅をなすならば、此處に初めて前揭統計に依つて示されて居るやうな不公平なる課稅の標本は取り除かれるであらう。然し乍ら此處に注意すべきことは地租の地方移讓に依つて廢されやうとする地租の從來の府縣附加稅の廢止方法如何は、軈がて大地主對細小農の負擔輕減率に大なる影響を齎すものであることを見逃してはならない。

第三　地方財政の整理と地租委讓

一　地方財政膨脹の現狀

歐洲戰後に於ける經濟界の不況と震災に依る巨億の財貨の毀滅とは我が國の財政をして極めて危險なる地位に立たしめた。從つて此の際中央政府として財政及び行政の大整理を實行するの必要あるは言を待たない。然し乍ら此處で問題とする地租の地方移讓は、中央國家の財政整理の爲と言ふよりも、寧ろ極度に膨脹した地方財政の整理であり救濟策としての問題である。

今內務省地方局が調査した最近十ケ年間に於ける國庫歳出と地方歳出とを比較して見るに大正二年に於ける國庫歳出五億七千三百六十三萬四千圓を一〇〇とすれば同十一年の十四億六千六百〇五萬七千圓は二五五即ち約二倍半の增加であるに對し、地方歳出は大正二年の歳出三億二千七百十七萬七千圓を一〇〇とすれば同十一年度の歳出十一億七千六百四十一萬八千圓は三五九即ち約三倍六割の激增である。

年次	國庫歳出	同上指數	地方歳出	同上指數
大正二年	五七三、六三四千圓	一〇〇	三二七、一七七千圓	一〇〇

同三年	六四八、四二〇	一一三	三二七、六三九	一〇〇
同四年	五八三、二六九	一〇一	三一七、八七二	九七
同五年	五九〇、七九五	一〇三	三三四、六〇六	一〇二
同六年	七三五、〇二四	一二八	三八七、八〇二	一一八
同七年	一、〇一七、〇三五	一七七	五〇四、六八八	一五四
同八年	一、一七二、三二八	二〇四	六六二、五七八	二〇二
同九年	一、三九六、二八三	二四三	九六二、八七二	二九四
同十年	一、五八四、二二五	二七六	一、〇四二、八五九	三一九
同十一年	一、四六六、〇五七	二五五	一、一七六、四一八	三五九

勿論斯くの如き地方歳出の大膨脹した原因には、時局以來著しい物價の騰貴並に俸給若くは賃銀增加等必要避く可からざる經費の膨脹に依るもの多々あることは言ふまでもない。けれども他面に於いては地方自治體が中央政府の意嚮を迎へんとして民度不相應なる施設をやつたり、或は亦政黨員の喰ひ物たる可く不急不用の事業等を起した結果に基くものが決して尠くはない。而もその結果は直ちに地方税の荷重となつて國民各自の負擔に反映して居る。例へば今此處で問題となつて居る地租にその一例を取つて見ても、その附加税が大正二年には總計四千六百九十萬一千圓であつたものが、大正十一年度豫算に於いては一億二千二百五十九萬圓となり、本税たる地租總額七千四百萬圓より多きこと實に四千八百五十九萬圓の多きに上つて居る。其の他の附加税と雖も之に比例して夫れ〳〵荷重されて居る結果、國民各自の負擔額は今より十年前に比較して約三倍の增加である。例へば大正二年に於ける一戸當りの地方税は十八圓七十九錢四厘(一人當三圓三十四錢二厘)であつたものが大正十一年に於いては五十三圓二十九錢二厘(一人當り十圓六十八錢六厘)に激增して居る。斯くの如くして今や國税負擔と地方税負擔とは其の額に於いて較々伯仲するの現狀となつて居る。從つて若し中央政府が此の際更らに一歩進んで軍備の大縮少と徹底的行政整理を斷行して國費の緊縮を計らむか、地方税は國税額よりも過重となつて地方民を誅求するに到るであらう。此處に於いてか地方財政の整理は、中央政府の財政整理にもまして喫緊の問題となつて現はれるのである。

二　地方財政の整理と地租委讓

中央財政の整理固より必要である。國税負擔の減免固より國民多衆の翹望する所である。然し乍らそれと同時に整理し減免することの必要であるものに前項で論じた如く地方財政並に地方税の問題がある。元來地方財政は何等有力なる財源の上に立てられて居るものではない。故にその求源の大半は附加税に求めて居るの狀態である。即ち大正十一年度の豫算に徴して見て

も、地方歳入十一億九千七百十三萬五千三百六十一圓中、その五割三分七厘の六億四千三百十二萬一千百二十七圓は租稅收入であり、後の四割六分三厘たる五億五千四百一萬四千二百三十四圓が稅外收入である。從つて最近數年來の間に急激に膨脹した歳出は、勢ひ地方稅の賦課率に苛斂誅求を加へるより外に有力なる方法を持たない。此處に於いてか、上は國稅たる地租、營業稅、所得稅の附加稅より、下は雜種稅たる死畜取扱人稅、貸席稅の末に到るまでそれぞれ附加稅を設け新稅を漁つて居る。這の間負擔の公平であるとか、納稅力薄弱なる貧民階級であるとかを殊更庇ひ立てはして居ない。名目さへ立てば片つ端から誅求し、可なり反社會的徵稅を行つて居る。今之れ等各種の地方稅の課目と稅額とを示せば左の如し。

	大正二年度決算（千圓）	大正十一年度豫算（千圓）
地租附加稅	四六、九〇一	一二二、五九〇
國稅營業稅附加稅	八、二二三	五二、七七一
所得稅附加稅	六、三一六	二四、〇三八
鑛業稅附加稅	三五三	一、〇一四
賣藥營業稅附加稅	一六	二五
取引所營業稅附加稅	一二七	三四八
戶數割及同附加稅	七六、一〇七	二三六、一一六
家屋稅及同附加稅	九、〇六八	二九、〇四七
道府縣營業稅及同附加稅	六、一八六	一八、四八九
雜種稅及同附加稅	一七、二一一	七七、九一二
其の他諸稅	九、六二二	三三、三九一
夫役現品換算額	九一七	二、三〇〇
市町村分賦額	八、八七三	四五、〇七五
計	一八九、九二六	六四三、一一二

斯くの如く今日の地方稅は附加稅が中樞をなして日雇業、諸店、木賃宿業の末に到るまで誅求して尙ほ足れりとして居らない。甚しきに到りては稅額が餘りに零細、（案內業稅の總額四圓であるが如きその一例）である結果、徵稅上の手數と費用の方が之れに優ると云ふやうな稅目さへある。斯くの如き窮乏狀態の下に推移せんか、其處に地方自治體の向上はなく、其處に地方產業の隆盛は見られない。況むや將來益々人口は增加せんとして居るし、それに伴ふ各種の文化施設は愈々益々多く必要とされる趨勢に鑑みなば、何人か地方財政を此の儘に放任して置き得るものぞ。一日も早く不用無益なる政黨道路や、政黨學校の大整理を斷行して地方財政の緊縮を計ると共に、他方有力なる新財源を求めて自治體として時代の進運に伴ひ當然行ふ可き文化施設と產業の開發に努めねばならぬ。此處に於いてか前者に對しては私が既に本誌四月號に於いて述べた程度に、地方行政の

大整理（府縣の併合、町村の併合を行ふこと）を行ふて、經費の節減を計ると共に、後者に對しては地租の地方移讓を斷行して、有力にして而も殆んど確定的なる財産となさしめねばならぬ。（此の外枯渇せる地方財源を培ふ手段として、土地の增加税並に閑地税を新設する餘地があり、皇室財産並に官有財産乃至官業收入に課税するか若くはそれに相當する交付金制度を求める餘地もあるが、當面の問題とはなつて居ないから、それは他日の機會に讓る）

第四　財政上に於ける地租の地位

一　地租は歳入總額に對し僅かに五分五厘

財政上に於ける地租の地位は經濟の發達、國運の進步に伴ふて各國共に漸次變化しつゝある。往昔に於ける地租の地位は各國何れを問はず、國家歳入の極めて最重要部分を占めて居た。特にその初期時代に於いては國家歳入の大部分は地租の單税に待つと云ふ狀態であた。然し乍ら今日に於いては國家歳入に於ける地租の地位は何れも著しく低下し、國税としての重要性を極めて薄弱ならしめて居る。從つて普佛西の如きは一八九三年既に税制改革を行ひ、國税より地方税に移した。近くは伊太利の如きも一九一九年税制改革を行ひ、地租の税目を廢して一般所得税中の不動産所得に包括して終つた。

顧つて我が國に於ける國家歳入上に於ける地租の地位を考察して見るに、他國に洩れず他の一般租税收入顯著に增大した爲め、地租の地位は著しく低下しつゝある。例へば明治三十年に於ける歳入總額は二億六千三百九十萬百二十三圓にして之れに對し地租收入は三千七百九十六萬四千七百二十七圓即ち總歳入の一割四分二厘を占めて居たが、大正十二年度豫算に於いて總歳入十三億四千六百十一萬六千五百十圓に對し七千四百三十萬二千二百八十二圓即ち約一割低下して五分五厘になつて終つた。更らに之れを明治三十年に於ける經常收入に比較すると、一億二千四百二十二萬二千九百六十四圓に對し、三割〇五厘を占めて居つたが大正十二年に於いては十二億五千二百九十三萬六千三百五十九圓の經常收入に對し、僅々五分九厘に低下して居る。次に之れを租税收入丈けに比較して見ても、明治三十年九千四百九十一萬二千八百五十圓の總租税收入に對し、三割九分九厘を占めて居つたが、同大正十二年に至りては、七億四千三百五十九萬七千五百九十三圓（總租税收入）に對し、總かに九分九厘を占めて居るのに過ぎない。即ち左の如し。

種別	明治三十年現計	明治四十年	大正三年	大正十二年
稅總額	二六六、三九〇、一二三	八五七、〇八三、八一七	七三四、六四八、〇五一	一、三四六、一一六、三二〇
地租額	三七、九六四、七二七	八四、九七五、九一七	七四、九三五、八四五	七四、三〇三、二八三
同上百分比	一四・二%	九・九%	一〇・一%	五・五%
經常收入	一二四、二二三、九六[illegible]	四九二、二八七、〇三七	五三六、五四三、五〇三	一、二五三、九一六、五五九
地租額	前揭に同じ	同上	同上	同上
同上百分比	三〇・五%	一七・二%	一三・九%	五・九%
租稅收入	九四、九二三、八五〇	三一五、九八三、四一六	三四三、七〇八、四一六	七四三、五九七、三九三
地租額	前揭に同じ	同上	同上	同上
同上百分比	三九・九%	二六・八%	二一・七%	九・九%

斯くの如く財政上に於ける地租の地位は年々逐次低下し、最早今日に於いては地租必ずしも國庫の重要なる收入ではなくなつて居る。從つて他に適當の財源があるか、若しくは之れを償ひ得る行政整理が斷行出來るならば、之れを地方に委讓しても、國庫の受くる影響は必ずしも往昔のそれの如く大ではない。從つて此の點にも亦地租移讓の可能性が發見される。

二　地租と土地臺帳制度の得失

地租は土地を課稅の目的物とし、其の土地より生ずる收益を稅源として課して居るものであることは今更ら言を待たない。然し乍らその稅源たる收益の內容は一定しては居らない。我が國に於いては極めて達觀的企業收益を一定利率にて還元した資本價格即ち地價を設定して課稅標準として居るが　佛蘭西及び獨逸に於いては自作地主が企業收入より企業經營費及勞賃を控除した純收益を課稅標準として居り、英國に於いては純地主の收得する地代を課稅標準として居るが如く　それぞれ或る一定標準地に依り推定する收益稅たるを免かれない。此處に於いては地租は所得稅と同じく收益所得に課するものであるが、現實收益に課せず主として臺帳制度に依つて居る。若し此の場合地租が現實の收益に課されるならば、現實の收益は即ち現實の所得であるから、此の場合の地租は收益稅ではなく所得稅たらねばならない。次に地租は純收益と謂ひ地價と稱するも實際課稅の場合は、前述の如く或る一定時期に於ける總收益より企業經營費を控除したる標準的純收益を算出するか、亦はそれを基準として還元した標準的地價であるから、事實に於いて收益を生ぜざる土地例へば庭園の如きに對しても、收益を生じ得可き土地と看做して課稅標準を類地の等級に求めて課稅し得るから、此の點に於いて地租は一種の財產稅に類似して來る。斯くの如く今日の地租を今日の學究者の顰みに習つて理論的に推及して行くと、地租の實質は收益稅なるにも拘らず、所得稅に類推され易く、亦財產稅に分課され易い性質を持つて居る。此の煩雜

を最も容易に區分する方法であるかの如く、地租には前述した如く土地臺帳制度なるものがある。然し乍ら此の臺帳制度は一度び確立して終へば甚だ簡便なる課税方法ではあるが、他方に於いて大なる缺點を伴つて居る。時の土地收益に順應した課税に改正することは極めて困難である。一々臺帳に準據しなければならぬ必要上、課税標準を改正せんとせば遡源的に土地台帳の地價修正を行はねばならぬ。之を行ふには多大の日子と巨額の經費を要する。從つて地價修正の行はれるのは十年に一度か二十年目に一回と云ふことになる。我が國の如きは極端であつて、既に明治二十年代に一部改正が行はれた丈けで今日に及むで居る。斯くの如き狀態で其處に負擔の公平や課税の適正を期し得られないのは寧ろ當然である。況んや之れを一國の財政的見地から斷じても、税の屈伸力が甚だ缺乏して居り、其歲入は殆んど停滯して容易に増加し得る見込みが立たない。然かるに土地そのもの丶收益は經濟狀態の進化に伴れて、次第にその利用價値が變動しつ丶ある。此處に收益と課税率に大なる矛盾を發生する。更らに亦他方各種の税目例へば直接税中の所得税の如きも間接税中の消費税の如き、國民經濟の發展並に人口の増加、生活の向上等に伴れて著しき増收を期することが出來る税目に比較して、地租は著しく時代遲れな一國の財政收入として極て其價値が低下した租税となつて終つた。從つて之を地方に移讓しても國庫の受くる影響は極めて少なりと言ふことが出來る。

第五　各國に於ける地租制度

一　一八九三年普國の地租移讓

地租は各國共に最も古るく最も長い歷史を有する税目の一種であつて、その間可なり多くの變化を遂げて今日の形式に進むで居る。

今之れより歐米數ケ國に於ける最近の地租制度を簡單に概說して參考に供し度いと思ふが、其尤に此處では前項に既に一例として擧げた普魯西に於ける一八九三年の地租委讓に就て述て見度い。

普國に於ける地租は、從來配賦税であつて、各縣毎に設備してある土地臺帳に依り純收益を標準として定額を賦課して來たものであつたが、臺帳制度に依る地租が不公平、不完全であるは勿論、他面所得税に對する地方團體の附加税が過重となつた結果、終に一八九三年七月十四日法律に依り次の如き理由書を發して、國税としての地租を廢止して、之れを市町村に委讓した。

普魯西王國收益税の性質は只歷史的發達によりてのみ之れを說明し得るものとす。之れを現代の學的見地より觀察する

ときは主として地租より成立する收益稅の不完全且つ偏重なる殆んど論ずるの要なし。

收益稅は財産使用によりて直接生ずべき收益に課稅するを目的とし勤勞收益に課稅するは、その目的にあらず、換言すれば物的標準によるものにして人的標準に依るものにあらず、從つて各人の人的負擔を基調とする直接國稅の本質に矛盾す。普魯西の地租は收益稅制度の一にして國稅として妥當なるものにあらず、然れども之れを地方公共團體に委讓して課稅せるものとせば、必ずしも不公平なるにあらず、何となれば各公共團體は其の團體內に於ける住民の經濟事情生産狀態及收益程度を知悉するを得ればなり。

更らに地租の如きはその課稅物件たる土地は全國一樣に收益を生ずるものにあらず、各地各人その收益事情を異にするを以つて一般的普遍的國稅としては不適當なるも、地方公共團體に於いて地方的特別的租稅たらしむる場合には比較的良稅たるを失はず、何んとなれば地方公共團體は各地の收益狀態、義務者の負擔の狀態等を斟酌して便宜の處置を採り得ればなり。(以上)

當時普魯西に於ける都市の發展漸く著しく、市街地の地價は甚しく騰貴するに到つた。又地方によりてその收益狀態にも變化が多く、十五年目毎に改正する地租は勢ひ此の實情に適應しなくなり、爲に負擔偏重の聲が甚しくなつた。更らに亦當時普國に於ける地方制度には何等の統一的規定がなかつた。從つて地方團體はその費用が增加するに從ひ、國稅に對し無制限的附加稅を課した。殊にその附加稅は所得稅に於いて甚しく、人口一萬以上の都市二〇五を調査した結果に依ると、所得稅に對する附加稅の割合五〇%以下のものは殆んどなく、五〇%乃至一〇〇%のの都市が廿二、一〇〇%乃至二〇〇%の都市が百十二、二〇〇%乃至三〇〇%の都市が五十八、三〇〇%以上の都市が十三に及んで居た。

斯くの如き狀態であるから國稅の大宗たる所得稅を國家の必要に適應せしむるには大なる支障を生ずるに至つた。此處に於いてか地方に獨立財源を與へてその財政の確立を期すると共に、國家收入に充分なる伸縮性と確實性とを保たしめんが爲に、地租委讓の大改革を決行するに到つた。

二　伊、英、佛、米、外諸國の地租制度

之れに次で地租改革を行つた國は伊太利である。即ち伊太利に於いては一九一九年の所得稅法の大改正に伴ひ、地租を所得稅中に包含せしめて終つた。今その經過を概述すれば伊太利

帝國の統一當時、統一的地租法を制定すること困難であつた干係上、從來各州に於いて徴收して居た地租の合計額を各州の徴收額に應じて配賦するが如き不徹底なる方法に訴へて居た。然かるに此の税法は一八九六年の法律に依りて廢止され、之れに代ふるに全國を通じて土地臺帳を定め、一定の税率によりて課税するの制度を以つてした。然れども新法實施に要する臺帳調製事業は遲々として進まず、當初の目的を達成することが不可能であつた結果、終に前記の如く地租を所得税に合併して、終に名目上の地税は全廢した。

英國に於ける地租制度も近世以來可なり變化した。英國には一六九二年以來地租制度は存置して居つたが、多聞に洩れず經濟上の變動に伴ひ、課税の基礎を改正することが出來なかつた干係上、極めて不公平なる結果を生じ、早くより之れが批難起り、改正に努力して居つたが、一七九八年地租賠償法なるものを作成して以來、漸次その批難を免れ今日に到つて居る。地租賠償法とは地租年額の四十倍(約)に相當する國債を政府に提供するときは、之れにより永久に地租を免除するの制度である。該法を施行して將來地租は漸次賠償法に依るもの多く、今日に於いては僅かに其の未賠償地に於いて其の殘骸を止めて居るに過ぎない。而して地租年額六百萬圓は漸く收益税たるの性質を失ひ、土地收益に對する課税は所得税中に含まるゝに到つた。

佛蘭西に於ける地租は元來配賦税であつて、土地總收入中より耕作費、種子費、及び維持費を控除したるものを以つて課税標準とし、之れを臺帳に登錄して課税の基礎として居つた。然かるに一八九七年以來、小土地所有者に對する斟酌の規定を設け、且つ各縣に對する配賦は臺帳面の課税價格のみに依らず、其の納税者の擔税能力を加味して評定して居つた。所が一九一四年の法律に依つて土地の平常賃貸收益より五分の一を減じたるものを以つて課税の標準となし、該課税標準に對する百分の四の定率税として終つた。

米國に於いては元々國税としての地租は設けられず、地方税の一種として存する許りである。墺國に於いては從來地租は定率税であつたが一八八一年の法律改正に依つて配賦税に變更した。其の他之れと同種税となつて居る國に諾國と西班牙があり、バルカン諸國は概して土地の純收益を基準とする定率税であり、バーデン國に於いては一九〇六年他の收益税と共に財産税法に依りて廢止されて以來部分的財産税となり、最後にヘツセム國に於いては從來地租は定率税なりしが、一八九九年の法律に依り、國税としての地租は廢止され、市町村に委讓せら

ろゝに到つた。

斯くの如く國に依り夫れ〳〵事情は異るが現在地租を國稅として居ない國に、米國、伊太利、普國、ヘツセムがあり、地租は存するもその大部分は地租賠償法に依つて、その收益稅たるの性質を失はしめて居る國に英國があるが如く、地租を地方稅とするとは、決して各國稅制の大勢に逆行する改革ではない。

三　我が國に於ける地租制度

我が國に於ける地租制度は孝德紀に「大化元年乙巳東國の國司を任じて戶籍を造り田畝を校へしむ」亦「大化二年丙午改新の詔ありて曰く、凡そ田は長さ三十步廣さ十二步を段とし、十段を町とし段の租稻は二束二把、町の租稻は二十二束とす」とあるが如く、此處に地租制度の濫觴を見る。當時地積を測量して今日の土地臺帳たる「御圖帳」に錄して地籍を設けそれを基準として一町二十二束の定率租稻を徵した。爾來今日に到るまでの御圖帳が田文（鎌倉時代）となり檢地帳（太閤時代）となり、水帳（德川時代）となり、地券臺帳（明治二十二年以前）となり、土地臺帳（明治二十二年以後）と變遷して來たが、地籍干係には大差なく、たゞ地籍を基礎とする課稅方法に變遷があつた丈けであつた。例へば戰國時代、太閤時代並に德川時代に於ける檢見制度が、每年の收穫を標準とし、實際收穫を基礎とせるが如き特有制度がこれであるが、大體御圖帳乃至土地臺帳に錄されて居る地積乃至地價を課稅基準として來た。而して前述の檢見制度以外の課稅は總べて一定の定率課稅であつた。

今明治改新以後に於ける地租制度並にその稅率變遷の有り樣を略記すれば左の如くである。

一、明治元年八月諸國の租法は舊慣に依らしむることゝし、租稅收納法等の手續きを定めた。

一、明治四年十二月東京府下武家地、町地の稱を廢し地券を發行し地租を課收した。

一、明治五年二月地所賣買を公許し大藏省達を以つて地券下附規則を創定した。

一、明治五年八月第二百二十二號布告を以つて田畑貢米は勿論雜稅米に至る迄金納を許した。

一、明治六年七月第二百七十二號布告を以つて地租改正條例及施行規則を定め、地券調査濟次第地券記載の地價百分の三を以つて地租と定めた。

一、明治八年八月第百五十四號達を以つて一般地租改正の期限を來九年と定めた。

一、明治九年十二月太政官布告第百六十一號を以つて北海道の

地租は當分地價の百分の三と定めた。

一、明治十年一月第一號布告を以つて地租を地價百分の二箇半と定めた。

一、明治十年十一月第八十號布告を以つて地租の內田方に限り當分人民の情願に任かせ、半額代米納を許した。

一、明治十七年三月第七號布告を以つて地租條例を制定し（地租は地價百分の二箇半を以つて一年の定率とす）第二百七十二號布告及地租改正に干する條規其の他地租條例に牴觸する諸法規を廢止した。

一、明治二十二年十一月法律第三十號を以つて地租條例中に改正を加へ且つ土地臺帳に揭げたる價格を同條例の地價と稱する旨を定めた。

一、明治三十一年十二月法律第三十二號を以つて地租條例を改正し明治三十二年分より明治三十六年分迄市街宅地以外の地租に於いて地價千分の八、市街宅地租に於いて地價百分の二半を增徵した。

一、明治三十四年四月法律第二十七號を以つて水害地方田畑地租免除に干する件を定めた。

一、明治三十五年十二月勅令第二百七十五號を以つて明治三十六年一月一日より沖繩縣宮古郡八重山郡に地租條例を施行した。

一、明治三十六年十二月勅令第二百七十八號を以つて明治三十七年一月一日より沖繩縣島尻郡、中頭郡、國頭郡、及那覇區、首里區に地租條例を施行す、是に於て同縣全郡に地租條例を施行ずるに至つた。

一、明治三十七年三月法律第十六號を以つて渡良瀨川沿岸地方特別地價修正の件を定む（現在地價低減割合一等八割、二等六割、三等五割、以下四等四割五分より每等五分を減じ十等一割五分に至つて止む

一、明治三十七年四月法律第三號非常特別稅法を以つて市街宅地に地價百分の五・五、郡村宅地に同百分の三・五其の他の土地に同百分の一・八を同三十七年分より增徵した。

一、明治三十八年一月法律第一號を以つて非常特別稅法中地租の增徵率を下の如く改む、市街宅地地價百分の十七箇五、郡村宅地同百分の五箇五、其他の土地百分の三箇

一、明治三十九年四月法律第三十三號を以つて北海道に地租條例を施行す（但し地租は當分の內地價百分の一とした）

一、明治四十三年三月法律第二號を以つて地租條例中稅率及納期を改正し、（四十四年一月より施行）並に非常特別稅法中地租に干する規定は宅地は四十三年分地租其の他は四十二年分、地租限り廢止した。

一、明治四十三年三月法律第三號を以つて宅地地價修正法を定め明治四十四年分地租より修正地價に依り地租を徴收す（宅地の修正地價は本法に依り定めたる賃貸價格の十倍とす、但し賃貸價格の十倍が市街宅地に在りては現在地價の十八倍、郡村宅地に在りては現在地價の七倍二割を超ゆるときは市街宅地にありては現在地價の十八倍、郡村宅地に在りては現在地價の七倍二割を以つてその地價とした。）

一、明治四十四年二月法律第一號を以つて東京府管內八丈島の地租は黃紬一反に付金一圓七十二錢五厘の割合の現金と定めた。

一、大正二年七月皇室令第八號を以つて地租、地租附加稅及段別割に干する法規は皇族賜邸を除くの外皇族所有の土地に之れを適用すと定めた。

一、大正三年二月法律第一號を以つて災害地地租免除法を制定し（同年四月一日より施行）同時に明治三十四年法律第二十七號を廢止した。

一、大正三年三月法律第十七號を以つて大嘗祭の齋田に指定せられたる土地の地租は大正三年分に限り之れを免除した。

一、大正三年十二月法律第四十五號を以つて大嘗祭の齋田に指定せられたる土地に付ては大正四年分地租を免除した。

一、大正三年三月法律第十八號を以つて地租條例中稅率一般の分田畑地價の百分の四箇七を四箇五に北海道の田畑地價百分の三箇四を三箇二に改め、大正四年分地租より適用した。

一、大正四年十二月法律第二十八號を以つて大正四年分田租第一期分に限り大正五年六月十五日迄延納の件を定めた。

斯くて我が國に於ける明治改新後の地租に對しては、物納が金納制に改正されたこと以外には單なる稅率乃至納期の改正があつた丈けであつて、その本質に觸れるやうな大改正は全然行はれては居ない。而して現行稅率は

宅地租……地價百分の二箇半
田畑地租……地價百分の四箇半
其他の土地々租……地價百分の五箇半
北海道（田畑……地價百分の三箇二
北海道（其他の土地（宅地を除く）……地價百分の四箇

となつて居る。果して然らば此の地價並に地租は如何にして算出するか、序であるから此の點を一應說明して置かう。地價は言ふ迄もなく賣買價格ではなく、地租を徴收する爲に設けられた法制上の特定土地の位價である。地租は此の位價に對して一定の稅率を乘じて算出する。

例へば此處に一反の田があり此の田の收穫米が一石六斗であ

り、此の米價は一石に付き四圓（地價設定當時の明治三年より七年に至る五ケ年平均の米價は四圓）であつたとする。すると此の收穫米一石六斗の代價は六圓四十錢である。此の內から種子肥料代として一割五分即ち九十六錢を引き去りたる殘數を實とし、利子の步合へ百を乘じ稅率三と村費の一とを加へて法となし、法を以つて實を除し、得たる數を村入費とし、之れに稅率三を乘ずると地租が出て來る。即ちその例左の如し

一、田一反步

此收穫米　一石六斗

此代價金六圓四十錢　但米一石代金四圓

內

一、金九十六錢　種子肥料代（收穫の一割五分）

一、金五十四錢四厘　村入費（地租の三分の一）

一、金一圓六十三錢二厘　地租（地價の百分の三）

殘金三圓二十六錢四厘但六分の利子とす（地主の收益）

此の地價金五十四圓四十錢

此の百分の三、地租金一圓六十三錢二厘

我が國の地租なるものは、根本に於て斯くの如く極めて米價の低廉なる時代に於ける算定を基準として決定して居るものであるから、地租の地方移讓は別問題としても地價修正を行ふて、その後に於ける土地利用價値の變動に備え、以つて負擔の公平を期するの必要あるは、此の點から觀察して一點の疑議を容れるの餘地はない。

第六　地租移讓の實際問題

一　地租移讓の準備

前項に於いて既に一言した如く地租課稅の一基準となる可き地價が今日より約五十年前の明治初年に於ける經濟事情を斟酌して設定してあるものである以上、これが今日の課稅基準として適正を缺く所大なるは今更ら贅言を要しない。世運はその後甚しく進步し、經濟事情は激變を來し、農業技術の向上等も著しきものがあり、且つ當時交通不便にして土地の位價甚しく底級であつた所も、今日は反つて交通至便となり、土地の質の位價著しく騰騰して居つたり、當時山林であり、荒蕪地であり池沼であつた所も、今日は立派なる美田となつたり、市街地となつたりして居る。從つて、此不都合を是正する方法として地價の修正と地目の整理とは、各地方地租の適正を期し均衡を得さしめる上に於いて此の際地租の地方移讓とは別箇に切り離しても是非とも斷行しなければならない中央稅制上の大問題である。

況むや地租の地方移讓を行ふ場合、各地に横はる此の不均

衡と此の不都合を其の儘に移讓すると云ふとは、地租移讓の効果に對して大なる制限と支障を强ゆるものである。課税の基本地價を全國的に大觀して公平に改定し得る機能は中央政府の力を置いて外にはない。一度び公平に改定せられた地價を基準として、其の地方の經濟事情に適應した課税をなし得るものは地方團體であると同一理由に依つて、全國的に均衡を得た地價修正を實行し得るものは再言する迄もなく中央國家の手にある。故に地租の地方移讓を行ふて、一面に於いては地方財政の整理に當らしめ、他面に於いては負擔荷重に苦しむ地方民の課税輕減を行はんとせば、何うしても其の準備として此處に地價修正と地目整理の必要がある。今我が國の地價が如何に不均衡であり、亦實際の賣買價格と如何に懸け放れたものであるかの參考として左にその一表を示さう。

府縣別	田一反平均地價格	同賣買價格	府縣別	田一反平均地價	同賣買地價
大阪	五一、六二三圓	七〇五圓	岡山	四一、〇八三圓	五五九圓
奈良	四七、八四九	六二二	靜岡	四〇、三七八	四九四
滋賀	四五、九九八	四五六	群馬	四〇、二九六	四七五
香川	四五、二三二	五四一	神奈川	四〇、〇六六	四八六
佐賀	四三、二三四	四四〇	石川	三八、一三二	五四一
埼玉	四三、一六九	三二二	京都	三八、一二四	四九〇
和歌山	四三、一四三	六四八	福井	三七、四五〇	六二九
愛知	四三、〇〇七	六五九	福岡	三七、三六六	四四五
三重	四二、八一九	四三九	廣島	三七、三三八	五七一
兵庫	四二、八〇三	五九一	高知	三七、二一八	五二一
東京	四二、〇七二	四三二	愛媛	三六、六四五	五二[illegible]
山梨	四一、六六六	四七九	富山	三六、一一二	四七四
德島	四一、五七七	四五二	熊本	三五、九一一	五二九
岐阜	三五、七一八	六二八	福島	二八、七〇四	三二〇
鳥取	三四、九七三	五一二	宮崎	二六、四八三	二八九
島根	三三、三五一	四七六	山口	二五、三二八	四八〇
大分	三二、〇五一	三八四	鹿兒島	二四、七〇一	四四三
長崎	三一、九二九	四四五	岩手	二三、八六四	三三四
長野	三一、八六八	五一二	秋田	二二、七一八	三七一
茨城	三一、八二七	三七四	青森	二二、五三七	三一二
千葉	三一、六七三	三三五	宮城	二〇、五五九	三一四
新潟	三一、二七一	三〇〇	北海道	一三、八二八	
栃木	三〇、三五八	三九七	沖繩	一三、二一〇	三〇七
山形	二九、三二六	四六八			

勿論土地には地勢並に肥瘠の別があり、中國四國九州方面と東北北海道方面の地方とを一同に見ることは出來ない。即ち一毛作の土地と二毛作の土地には自らその地價に高低のある可きは當然である。然かるに實際には高かる可き中國九州方面の地價が、關東地方のそれに比して低く、特に山口縣の地價が東北

方面の地價と匹適し得る迄に低くあるが如き不均衡は見逃す譯には行かない。從つて之れ等の點から觀察しても地價並に地目の修正を此の際全國的に急いで實行し、其の改定の均衡を得さしめねばならぬ。

二　賛否兩論ある地租移譲

次に翻つて地租移譲に對する政黨者以外の世論の趨嚮を觀ふに、今の所賛否兩論に分れて居り、之れを否とする論者は大體左の如き點を力説反對して居る。

地租は我が國太古より存したる制度であつて、實に我が國建國の基本をなす家長制度より來るものであつて、地租を納むるとは家長たる皇室に家の子たる臣民が家長の財産たる土地より生ずる利益の一端を納入することに基因し、此の觀念は今日まで殆んど傳統的に傳へられた美風であつて、若し今日此の美風たる地租制度を地方に委譲するとせば、家長と家の子即ち皇室と臣民との干係が此處に斷絶することになり、歐米のそれに比し我が國の美風たり特長たる國民思想を破壊するもので、これ畢竟するに國家組織の破壊である。

と論及して居る。而して此の種の反對論に反駁を加へ乍ら地租移譲に賛する側の論據は大體左の如く纒めることが出來る。

我が國の地租制度は大體國民思想と或る程度までの干係を有することは事實には相違ないが、然も此の地租制度を地方に委譲したからと言つて、それが爲め直接乃至間接我が國民思想に影響するが如きことはあり得ない。我が國民思想は地租の委譲に依つて破壊せられるやうな左様な羸弱なものではない。殊に地租は往昔こそ我が國の主要なる租税であつたが今日に於いては國税收入の十分の一にも充たないものとなつて終つて居るから、今は國税としての地租は左様に重要なものとはなつて居ない。(大正十二年七月十一日税利調査會に於ける黒田委員の説明參照)

と、亦一昨年大藏省に於ける税制調査會等に於いても、各委員の意嚮は大體地租委譲論に傾き、假りに地租移譲を行ふとせばその場合に於ける直接國税の體系を如何にすべきかに就き諮議され、基礎案として「一、地租を地方に委譲したる場合所得税の補完税として特別所得税を新設すること　二、地租を地方に委譲したる場合所得税の補完税として財産税を新設すること、三、地租を地方に委譲したる場合に於いても別に新税を設置せず、租税體系は現狀のまゝに所得税營業税を基幹とするに止むること。」の三案が提出され　第一、第二案は税制の統一地方財政の整理等の本旨に戻る嫌ひありとされ　主として第三

案を議題としてその實行案が討議されて居たが、震災後沓として其れ以來の命の成り行きを知り得られないのを遺憾とする。

三　最後に殘るは委讓技術の問題

斯くの如く各種の方面より地租の地方委讓に對する可否を討尋して來ると、之れを否とする理由より、之れを可とする理由により多くの妥當性が認められるから、這の間に政黨者流の黨略關係が惡るく働かないならば、結局地租は近い將來に於いて必ずや地方に移讓され可き運命にある。然し乍ら此處に移讓すると前提して此の問題に對しても、移讓そのことに附隨する技術的重大問題が殘される。例へば地租を地方に委讓するとしても、地租の課税權は依然として中央政府に於いて之を保持し、地方に對しては單に地租の徵收權を委任し、その財源を取得させるに止まるのか、或は亦全く財源も課税權も全く地方に委讓して終つて、國税としての地租は全廢するのか、先づ第一に此の點を決定して置く必要がある。次には地租を地方に委讓するとしても、それを何れの地方團體に委讓するのか、例へば道府縣へ委讓するのか、市町村へ委讓するのか第二には此の點をハツキリさせねばならない。

先づ第一の點から考へて見るに、地租を財源として之れに課税權を有して居る國家には、其の背面に地租事務を專門に擔當して居る税務署が控へて居つて現在左の如き事務を取り扱つて居る。

一、地目變換、地類變換及土地分合筆に干する申請、申告又は官廳の告示通知に對する處置
一、地價の設定及修正處分
一、有租地成若くは免租地成に干する申請、申告又は官廳の告示通知に對する處理
一、土地臺帳及び地圖誤謬の訂正に對する處理
一、土地臺帳面住所氏名異動申告に對する處理
一、災害地々租免除申請に對する處理
一、土地檢査及無申告地調査
一、地盤丈量並に耕地整理地々價配賦處分
一、開墾、鍬下年期、開拓鍬下年期、新開免租年期、耕地整理地々價据置年期、耕地整理新開免租年期、荒地免租年期、免租繼年期及低價年期申請に對する處理
一、以上の各處分に伴ふ土地臺帳整理
一、各市町村に對し地租納期通知書の發布
一、土地臺帳謄本の下付
一、登錄税の徵收

等であつて地租を地方へ移讓する場合に、國家が飽く迄もその課税權を保持するとせば勿論此の地租事務は現在の如く中央國家が負擔して居つて之れに要する經費は地方をして負擔せしめれば宜しいが、課税權までも全く地方に委讓するとせば、此の地租事務までも當然地方に委讓すべきものである。從つて要は國家が、地課の課税權を保持するか放棄するかの問題となる。

第二は地租を市町村へ委讓すべきか、道府縣へ委讓すべきかの委讓技術問題であるが、目下市町村へ委讓すべしと論ずる者の理由には

一、各國に於いて地租を地方に委讓したる實例は何れも市町村である。

二、地租を地方に委讓する主要なる目的の一は現行地租の不公正を改むるに在る。而して地租の課税標準を適當に且つ容易に修訂するには成る可く小區域に於いて行ふに如かず、此の點に於いて市町村に委讓するを最も適當とする

三、道府縣は地租以外に他税收入並に税外收入を得る途比較的多きに市町村に於ては尠し、故に地租の如き有力なる確定財源を市町村に賦與するは自治の發達を期するに適切なる方法である

四、道府縣は國の代表者なるを以つて收税に關し權力と技術とを有し、動的物件を捕捉し得るも、市町村に於いては然らず、故に土地の如きは不動的物件を市町村の税源となすは適當である。

五、市町村は土地と密接なる干係を有し且つ土地の事情に精通するを以つて將來地租の課税標準を改正するに當り市町村をして之れを行はしめなば、其の經費は比較的少額にして且つ適當なることを得られやう

六、地方税の整理は一に戸數割に在り、地租の農村委讓は特に過重なる農村の戸數割を整理し不在地主の負擔を矯正し在村農家の負擔を輕減する

七、地租の市委讓は市の社會政策事業に對し最も確實公平なる財源を賦與する

八、地租の市町村委讓と地租事務の委讓とは切離して行ふも差し支へなし、依つて地租を市町村に委讓するも必ずしも地租事務をも同時に委讓しなくてはならぬといふ理由はない。

九、地租を道府縣税とせば動もすれば道府縣の積極的政策の財源として利用せられ、農家負擔輕減の資とならぬ虞がある。

之れに對し地租を道府縣に對して委讓すべしと論じて居る者の理由とする所は次の如く五項に分かつて居る。

一、市町村をして戸數割家屋税等の課税標準の決定を爲さしむ

る上に、地租の課稅標準の決定をも爲さしむるは餘りに市町村の事務を過多ならしむる嫌ひがある。

二、土地の表現したるものは稍や大なる地方團體たる道府縣に於いても其狀況を知り得るのみならず、道府縣にて調査を行へば管内各小地區の比較の行はるゝにより、市町村にて行ふよりも一層客觀的一般的の標準を見出すことを得、且つ小地區に特殊なる事情を緩和し得て一層公平なものを得らる。

三、地租に伴ふ地籍事務は市町村にて當るよりも半ば國家的なる道府縣にて行ふが一層適當なら、又從來地租事務に從事したる國の稅務官吏は之を市町村に分布するよりは道府縣に分屬せしむる方が一層適切である。

四、地租を市町村稅として道府縣から之れに附加稅を課することゝせば、動もすれば市町村が其の附加稅負擔を輕からしめんとして課稅標準を過少にせんとするの弊を生じ、各市町村間に其程度の異なる間に不公平を生ずるに至る可し。

五、地租を市町村稅とせば其の課稅標準を調定するに當り市町村長中には地方有力者の牽制を受けて公平なる調査を行ひ難きものなきを保せない。

今兩論を公平なる立場から比較して論ずれば、道府縣へ委讓することを主張する論據は少しく薄弱であり、亦消極的で受け身である。之れに反し市町村へ委讓すべしと云ふ論據には較々有力にして而も積極的であり、發動的であると云ふ點が見出される。

從つて今後地租を地方委讓するとせば、結局自治體の最低根幹たる市町村に向つて委讓され可きであらう。

結　言

之れを要するに地租の地方委讓の問題は、最早議論の時は過ぎて之れを實行に急がしむる可き時である。たゞ問題は如何なる形式で地方委讓を行ふ可きか、亦移讓するとせば道府縣へか市町村へかの問題を研究し確定すれば足りる問題である。而もことは之れに依つて今後に於ける地方財政の死活的運命が決せられ可き極めて重大な而して極めて眞劍な問題となつて居るのである。然かるに最近或る種の野望を遂げんとして事を構へこ居る政黨者流が、此の問題を政爭の具に供して、頻みに妄動を試みて居るが、我々は此の際彼等の手から此の問題を奪ひ返へし、地方自治體永遠の繁榮の爲に、其の適當する所を充分檢覈して、何日何時之れを實行に移さうとしても移し得る具體案を確立して置かねばならない。ことは唯だに當面の地方財政問題のみには止まらない。今後無產階級が政治的に一勢力を爲して國政並に自治政に携はる場合にも殘つて行く重大問題である。從つて我々は此の問題を今の政黨員や或る種の御用學者が力說して居る點とは全然別個な立場から、地租の地方移讓論を爲すものであることを最後に一言附け加へて此の論の筆を置く。

（六月十四日靜岡の藤枝へ講演に立つ朝記す）

産業の振興

工學博士　大河内正敏

一　産業の窮迫

世界戰爭の中頃から休戰後暫くの間へかけて非常な殷盛を極めて居つた日本の産業界は今や輸入品の脅威を受けて窮迫の極にある。年々五億六億と謂ふ巨額の入超は經濟界を極度の不景氣に陷らしめて失業者は増加する一方であり延いては國民の生計も此先き如何に成り行くかと怪しまれて何人の胸中にも今日は一種の不安が漂ふて居る。吾々は如何にして此窮境から脫出すべきか。消極の方面からは行財整理の如き消費の節約であり積極の方面からは生産の増加より外に途のあるべき筈が無い事は申す迄もない。

消費の節約を圖る事は直に効果が現はれて、一番早途であるが不幸にして吾々國民は一般に不得意である。無頓着である。一種の二重生活を營みつゝある爲めでもあるが國民の生活には非常な無駄がある。少しも釣り合ひの取れない點が多くある。何人もそれを自覺して居りながら眞面目になつて實行するとなると殆失敗に終つて消費節約の効果は擧がらない。例へ多少擧がつたとしても到底始めに期待した程の結果はないと謂ふ場合が多い。併し近來此方面の努力や施設が漸々に認められて來たから今後は無駄の生活も追々に改善され一般施設の上にも消費の節約は着々に實行される事と思ふ。

生産の増加を如何にして圖るか、積極的施設として此際どう云ふ事をすれば宜しいか吾々はそれを考究して見たいのである。費用最少くして成果の確實に擧がるものは何んであるかを眞面目に研究しなければならない。國民が此窮境から脫出して生活の安定を得る爲めに最有効の積極的施設は産業發展を圖る事である。産業立國隨分舊くから稱へられた語であるが是等國民の實生活に離れて而も積極的な標語はない。稅制の整理も宜しい。移民の獎勵も大に可であるが、それよりも更に大きな積極的施設は産業發展を企圖する事である。是によりて國民を此窮境から脫出せしめ失業者は救濟せられ國の財政は安固となるのである。社會政策も是によりて始めて實行が可能になり國民

の生活も安定になる。生産の増加是が積極的施設の目標であらねばならぬ。

生産の増加は産業が經濟的に成り立たなければ望まれない。然るに日本の産業界は世界戰爭中より延て休戰後間もなくは非常の殷盛を極たのであるが、今日は殆寂として譬なく外國の産業に壓倒され生産物の輸入によつて脅かされて居る。何故産業が今日の樣に窮迫の状態にあるか。それには幾多の理由があらう。例へば事業の經營が放漫であつたとか、或は戰時中急に起つた事業に就ては少しの經驗もなかつたとか、企業に際して十分の調査が無かつたとか、或は事業其物に於ては別に批難の點もなく欠陷もないが金融其他四圍の狀況が惡くなつた爲に如何に孤軍奮鬪の努力を續けても唯窮迫する許りであると云ふ同情す可き事情もあらう。併し根本の原因としてどうしても吾々の忘れてならぬ事は從來の産業が悉く外國から移し植へた丈けのものであつて、獨創的發明改良が殆全く加味されて居なかつた事である。輸入でない在來からの固有のものは近代産業の基礎と爲す科學から全く取り殘されて居た爲めに年々歳々衰微の傾向を辿つて居たものである。原料の撰定方─甚しきは日本で産出するに係はらず態々外國から取り寄せて居た處さへある─から製造の機械器具は勿論の事其製造方法仕上げの方法もそつくり外國のものを移し植へ始めて生産品が市場に現はれると謂、第であつた。此の如き産業が世界の經濟狀態が平靜に復した後にどうして外國の産業に壓迫されずに居られるであらうか。況してや經濟界が疲弊困憊の今日に窮迫を告げるのは當然の事に歸着する。工場の經營管理に就ても科學的考慮が加へられず技術上の方面に於ても發明改良の如き獨創的施設が怠られて居た事が今日の産業界の窮迫を將來する最大原因であつたと申して差支へないと思ふ。少くとも其根本の原因と謂ふて宜しいと考へる。而して在來の産業中の最主要なる農業は純然たる古しながらの農業であつて社會の進歩からは全く取り殘され科學と殆沒交涉の姿にある。農村振興が天下の輿論になつて居るのは明かに日本の農業が産業として經濟上成立ち得ない一面を語るものであつて其處に到つた最大の原因は昔ながらの非科學的の産業は到底科學を基礎とした近代産業の敵ではない事である。

二　生産費の低下

産業の興ると興らないとは生産費の廉不廉にある事は申す迄もない。即ち問題は一に懸つて生産費を如何にして低廉にするか、若し生産費を低廉にし得ずとせば同じ生産費を以てより優秀なる物を如何にして造るかと謂ふことになる。それには一方には産業の組織及經營に關する研究と他方には生産に關する技

術との發明改良及科學的研究に依らなければならない。從來は此二方面の努力が頗る欠けて居て唯外國の產業を其儘日本に寫し取つて來たに過ぎない。それも內地に原料や動力が豐富で廉價であると謂ふならば外國品と競爭して行く事も出來るが事實は其逆である。唯僅かに勞銀が外國と比べて廉價であつたから原料を外國に仰ぐ工業でも成立したのである。例へば紡績業の如き印度や米國の綿を輸入して加工しても尙世界の市場で製品の競爭を爲し得たのである。紡績機械全部は外國からの輸入であるから、機械を造る本國で一つの紡績工場を設立するに要する固定資本と日本のそれとを比較すると丸で比較にならない位多額の資金を要し而も資金の金利は高いのであるから何の方面から見るも日本の紡績業は其製品を世界の市場へ出して競爭し得る筈がないのであるが唯一つ勞銀關係に於て頗る有利な立場に居た事と勞働問題が矢ケ間敷なかつた爲めに一年を通じての機械の運轉時間は外國と比べて非常に長いつまり機械の運轉を休止する時間が少い結果多量生產が行はれた爲めに生產費を低廉にし先きに擧げた樣な不利な點があるに係はらず此產業が成功したのである。併し今日は勞銀の騰貴其他の事情で生產費が高くなつて來た關係で中々困難である。英國の樣に自國で消費する綿糸の數倍を輸出すると謂ふ譯に行かない。僅かに國內消費の數割を辛ふじて輸出し得るに過ぎないのである。

日本の產業が從來は主として勞銀關係に於て生產費を低下し得たのであつたのが今日は最早それが出來なくなつたのである。否從來とてもそれを望んで居たのが無理であり間違ひであつたのである。生產費の低下を唯勞銀の廉なる事によりてのみ企圖し樣と云ふのは全くの資本橫暴であつてそんな根性で產業の發展する筈がない。頗る不安な自信のない他人だよりの產業である。もつと確固たる基礎の上に立つ可き筈である。

產業の種類によりては戰前と雖必しも日本の勞銀が廉いと云ふのではなかつた。一人當りの能率の點でも機械的諸設備の整つて居て人手を多く要しない點でも流石日本は遲れて居たから一つの物を作り上げるのに外國では五人で濟むものを日本は八人も十人も要する。であるから一人の得る勞銀は安くても全體に於ては反つて高くなる。著者は嘗て小形の鐵鑄物個々に就いて獨逸の工賃と日本のそれとを比較して見た事があつた。と云ふのは他の大工業と異り比較的勞働節約設備を爲し得ない種類の工業であるから是なら恐らく日本の方が廉いであらうと考へたのである。事實は全く豫想の逆であつて日本の方が二割乃至三割許り高うなつて居た。であるから同じ機械工業でも大型の發動機とか工作機械類となるとより以上工賃が高くなつて居る。

思はれる。勞銀は外國も騰貴して居るが日本は更に騰貴率が多いと謂ふ次第では多くの產業は殆ど其立脚地を失つたと申して宜しい。

吾々は如何にして生產費の低下を企圖するか。以上の如く勞銀關係では到底不可能であるとすると殘る處先重なるものは原料の安價供給が問題である。それが不幸にして日本は一般に高い。天然資源に乏しいと云ふか或る意味に於ては尙未十分に開發する努力が足りない爲めと謂ふか何れにしても外國と比べては一般に產業の原料となる可きものは高價である。紡績に於ける棉花は無論輸入であり製紙工業にしてもパルプは一部分輸入である。セメント等の窯業に於ては硝子に於ける曹達灰を除いては大部分內地產のもので間に合ふとしても是に要する石炭は近來漸く高價になつて從來輸出國であつたものが輸入國とならんとして居る。機械工業に就いて見ても又は造船業も其原料たる鐵鋼は外國よりも遙かに高價である。化學工業に於ても其主要原料たる酸類と鹽とに就いて見ても鹽は專賣局が損をして工業鹽を賣るに係はらず尙倍以上の高價であり硝酸鹽酸なども又高い。唯僅かに硫酸が從來は廉であつたのが近來は米國に於ける市價と比べるとこれも殘念ながら高價になつて來た。產業中の最主要なる農業は其原料と申しても差支へない肥料は是又日本は遙かに高價であつて年々一億數千萬圓を輸入して居ると云ふ狀態である。

生產費低下の爲めに原料方面を考へると以上の樣な狀況である。而して勞銀に就いても先きに述べた通り是を低下する事を期待しては宜しくない。勞銀を節約するのは宜しいが個人當りの勞銀は今後出來る丈の增加が望ましい。であるから今日爰處で產業の發展を企圖するには如何に考へても二途より外無い。一は原料を廉價に得る爲めに鑛山や山林の如き天然資源の開展であつて夫れには交通運輸の問題も入つて來る。併し天然資源には限りがあるから今更未知の寶庫を採り當てるのも容易の術でないとすると結局殘る處の最有効な確實な方法は產業組織及生產方法の改良改善にある。是が生產費を低下する最良の途であると考へる。

三　多量生產と分業制度

人類の要求する凡ての物資を廉價に生產し而も優良一定の品質のものを造るには多量生產主義の產業に依らなければならない。而してそれの一要素を爲すものは分業制度である。歐米の產業が今日の如く大發展を遂げたのは此分業制度を巧みに應用した事が慥かに其一原因である。產業革命を起した大工業組織の二大要素は科學の應用と分業制度にある。前者は生產方法の

改良改善であつて後者は生産組織上の改良改善である。資本は多量生産組織に伴つて來るものではあるが決して其威力によつて產業が成立つ可き筈のものではない。如何に大資本を擁しても方法と組織とに於て劣つて居ては產業は萎微するの外ない。如何に金を注ぎ込んでも決して成功する筈のものではない。資本を擁するのみと云ふ一事を以て產業支配權を掌握する如きは產業を衰退せしむる因であつて直接生産に提はつて居る者からは資本は一つの道具に過ぎない。農具であり工作機械であり製造装置であり而して是を巧みに使ひこなす事によつて始めて生產費の節約となる。使はれる爲めの資本であつて使ふ爲めの資本ではない。產業發展の大要素は其組織と生産方法との改善にあり工夫にある。

　分業制度が何故に生産を增加するか其原因を考へて見ると大略次の三要點に歸する樣である。第一は作業に要する時間の浪費を除き且單時間に同一の品物を多數に仕上げる事が出來る。分業によつて一つ一つの作業は全く單純化されて仕舞ふから容易に機械力を應用し得られ作業場内の組織設備も又能く整理し得られる。若し一つの作業から他の作業へと同一の人の仕事が移つて行くならば其間に道具も變へなければならぬし考察も變へて行く必要があつて時間の浪費は爰處に胚胎して來る。第二には作業が簡單である爲めに多く頭腦を要さないで早く熟練する。從つて生産が均一になり優秀になる。第三は適材を適所に置く上に多大の便宜がある。特に最近發達して來た能率增進等の應用が容易になるのであつて若し地方的の事項を考察に入れるならば人に對する適材適所と云ふ語を地方地方に應じて用ふる事が出來る。例へば冬期が永くして其間は野外の勞働等に適せざる地方には人手の多く入用な一部の作業を與へ交通便利で動力の比較的廉價な地方は原料を多く要し且生産品の量の多くなるやうな作業を持つて行くとか或は其他原料の配給等に地理的考察を加味して夫れ〳〵種々な分業を案出する事が出來る。此考へを更に押し廣めて行くならば全世界人類の要求する凡ての物資を最廉價に生産し而も其品質を能くする爲めには國際的の分業が理想である。而して此理想が實現されゝば世界は永久の平和を樂しむ事が出來る。

　生産費低下の他の方面の進路は生産方法の發明改良にある。夫れは主に十九世紀末から今日迄に示した科學の貢獻の跡を尋ねると如何に科學が產業の生産費低下の基礎を爲して居るかゞ明かになる。物理學及化學の研究進歩が實に今日のあらゆる產業の基礎を成して居ると謂ふ事を深く吾人の腦裡に刻まなければならない。

外交の民衆化

吉澤不比等

一　外交といふこと

國と國との關係は廿世紀の今日に於ても尙法律秩序の無い野蠻人同志の關係と大差ない狀態にある。獨立した一つの國が他國に對する關係は權利を有せず、義務を負はず、又「力の法則」以外には何等の法則に拘束せられてゐないと云つても法律的には少しも間違ではない。それにも拘らず世界の人類は互に國境を越えて次第に頻繁に相交通し、互に有無相通じ、同情と親愛の情を以て相接觸するやうになつた。即ち國と國との間には互に相反する利害關係が存在してゐるにも拘らず、他方に於て經濟上社會上の各種の利害が次第に廣く共通するやうになつたことも爭へない事實である。例へば經濟資源が開發せられ、物資が廉價に供給せられ、交通が迅速に、安全に行はれるといふ如き事實は世界の凡ての人類に幸福を増す所以であり、又國の秩序が治まり、自由が認められるといふ如き事態も世界全般にとつて有利な影響を及ぼすこと云ふまでもない事實である。

かやうに國際關係は未だ社會的正義を基礎とする程度に達しないが爲めに、常に戰爭の危險を作つてゐるけれども、他方では國利民福の爲めには人類全般の利益を考慮しなければならない機運にあることも明瞭である。若し國際關係が力の法則に依つてのみ支配せられると云ふことが正當であるならば、國內に於て治者と被治者との關係も同じく力の關係である。國內の政治に正義の觀念が嚴存してゐると云ひ得るならば國際間の政治に於ても同樣に正義の念が嚴存してゐると云ふことも出來る。唯國內政治と國際政治とに於ては「正義の法則」の適用に於て相違がある。國內政治の主なる問題は租稅、地方政治、選擧制度等の題目であり、外交政策に於ては專ら關稅、條約、航海等に關する事項を司るものである。

時運の進步につれて國內の法制や政治習慣の進步した如く、國際間に於ても、國家の關係を規律する慣例や法則は次第に整

つて來た。於是外交に一定の形式を備へ、國際關係に種々の思想と背景をもつことになつた。

遲れて世界と交通を始めた東洋諸國に於ては勿論、歐洲に於ても外交といふ言葉は左程古い言葉ではない。第十八世紀の終頃にヂプロマシーといふ文字が表れて來た。近世國際法の大家であるマルテンスの「外交提要」には「外交とは國の外部關係又は外國關係事務に關する學問である、もつと狹義に云へば交渉に關する學問若くは技術をいふ」と書いてある。又キユツシーの下した定義に從へば「外交とは國家間の事件を處理するに必要な知識及法則の全體をいふ」とある。夫故に此說によれば外交は手際と智識とを必要とする技術である耳ならず、同時に一の學問である。

外交は從來世間に知られてゐる國際法又は國際慣例にあてはまる事件のみを取扱ふものでなく、國家間の事件には屢々國際法にも、又先例にも無いものが出て來る。又問題の重大なる場合には相手國は國際法や慣例の存すると否とに論なく之を無視して自己の主張を貫徹しやうとする場合もある。そこで刻々に變化して行く新しい局面に臨んで、機に應じ、相手に從ひ國の紛爭を處理して行くのは專ら外交の範圍に屬するものである。

外交の本務は正義を主張することであつて爭を避けることではない。唯其爭を戰爭に導かずして平和的の紛爭とすることが眼目である。然し現在の世界に於ては互に相容れない爭の起つた場合には最後に力に訴へるとの思想はまだ容易に根絕しない。國際聯盟は國家間の紛爭を力に依つて決せずして、正義と公平との觀念に依つて決することを主眼として居るが、然し現在に於ては戰爭の機會を少くしたのみで、之を絕滅するまでには至らない。クローゼウイツツの云つた如く戰爭は政治的目的を遂行する一の新しい階段であるとの思想も今尙殘つてゐるのである。

外交には德義上の基準はないものと思はれた時代もあつた。苟しくも國家の爲めに必要とあらば如何なる外交手段も正當である、との觀念は可なり古くから存在してゐる。然し外交といふことの觀念は時代の環境に應じて變化して行くものである。中世の封建時代に於ける國際關係と、現在の國際關係との間には實際上大なる變化を認めることが出來る。近世國家の外交は國際法の原則と、條約の明文と、道義の法則の上に立つてゐるものであつて、中世の外交の如く單に我利と欺瞞との觀念にのみ立脚するものではない。

歐羅巴の國家が國際關係を開くに至つたのは文藝復興の時代である。此時代の國際關係は戰爭又は戰爭の準備と云つても妨

げないものであつた。戰爭は「力」と「欺瞞」である、從つて外交の職に當る者は間諜に非んば嘘吐きの人間であつた。かういふ時代は第十七世紀の國際法學者フーゴー・グロチウス等が國際間の法則を提唱する頃まで續いた。

第十七世紀の末に至つて、近世國家の基礎が漸く鞏固になつた。スペインの國運が傾いて佛蘭西の力が強くなり、墺太利、英吉利の威力が次第に他國を威壓し、露國も歐洲國家の仲間入りをするやうになつた。此時代に入つてから國際貿易が重を措かれるやうになり、各國の商業政策は武力を背景とすることになつた、然るに世界は一八一五年の維納會議を以て全然新しい時期を劃するに至つたのである。

第十九世紀の國際關係は國民主義と經濟發展とを以て特長とする。殊に科學と生產の發達は世界に於ける資本主義の發達を促進し全世界到る處に列强の利益が衝突するやうになつた。この資本主義的帝國主義は第廿世紀の初に入つて世界大戰爭を生んだものである。

世界大戰は政治、經濟、社會問題、凡ての人間の生活に一大變革を與へたが、外交方面に於ても、單に國際政局の變局のみならず國際關係に對する根本觀念に於て一新紀元を劃することとなつた

二　外交官といふもの

國家に於て外交を擔任するものは外交部又は外務省と稱する中樞機關と、外國に駐在して職務をとる外交官及び領事官とに區別されてゐる。然しこれ等の機關が制度として認められるに至つたのは比較的近世のことであつて、英國に外務省の置かれたのは一七八一年以來である。

外交官の濫觴は中世の文藝復興時代に遡る、この頃相對立してゐた伊太利の諸公國に於ては事になれた役人を必要としたので、初めて玆に外交官に近い職業が生れた。然しこれは近世の外交官とは全然異つたものであつた。何となれば未だ外交官と稱する程の組織もなく、傳統もなく又はつきりとした地位も認められてなかつたからである。

中世の諸侯が、大使を選ぶには門地や、階級よりも其人の手腕を主としたものであつた。從つて外交官を供給する特別の階級があつた譯でも無かつた。ルイ十一世は自分の髮床の主人オリヴイエ・ル・ダイムを外交官に登用したといふ記錄もある。

第十五世紀に入つて外交官と稱する一の訓練せられたる階級が出來て來ると、外交官たるに必要なる資質、地位及び特權機能、並に法則等に關する議論が起つて來た。之に就ては二樣の

論があつた。理想論者は大使たるべき人は門地が高く、金持ちで、人品が良くて、其上に哲學者で、神學者で、古典學に通じて、文藝の素養の深い、そして地理歷史戰術等にも明るい人であることを要すると主張した。また其外に雄辯家で、希臘語、フランス語、スペイン語、伊太利語、トルコ語を話し、ラテン語を解することも必要であると云つてゐる。

實際論を主張する人は學問や智識よりも、大使としての仕事に適した材能をもつことが第一であると云つた。然し例へばエリザベス女王の時代には風采の立派なことやラテン語に長ずることは大使として大なる利益であつた、何となれば女王は美男子を尊重せられたし、御自身にラテン學者たることを誇とせられて居たからである。

露國のエリザベツタ皇后も美男子を尊重せられた。然しこの方はラテン語を知らなくても美男子でありさへすれば充分に大使としての任務を盡すことが出來た。又酒を飲むことも外交官の一の資格として數へられた事があつた。酒を飲めば氣がゆるむ、舌がのびて本音を吐く、從つて酒の強い者が利益を占める、かう云ふ考である。第十五世紀に伊太利人の書いた本に『殊に獨逸、端西、波蘭、丁抹其他の北の國では、大使たるものは酒を以てお客をもてなす術を心得なければならない、但し、昔ボノススと稱する皇帝は外國の使臣を盛りつぶして、秘密を吐かしたといふ故事を忘れないで居れ』と書いてある。

第十六世紀に於て外交官に必要な資格といふのは、斯樣に議論の岐れた問題であつた。然るに最近に公にされたサー・エルネスト・サトウ氏の外交提要によると近世の外交官の資格として必要なことは「上機嫌、健康、品位、それに天才でなくとも十人並み以上の智慧、眞直ぐな性格、利己的野心のないこと、文學と歷史に依つて錬へられたる心、判斷力、之を一言にして云へば外交官たる人は educated gentleman である事」だとある。

中世紀に於ては伊太利にマキアヴエリーなる人があつてマキアベリズムなる一の方針を主張した、それは恰も蘇秦張儀の縱横論に比すべきものであつて、目的の爲めには手段を擇ばず、口先きで誤魔化して、相手をたぶら化すことが外交であると心得たものである。目的は手段を神聖にするとの信條は第十五世紀から第十八世紀の終末迄廣く行はれた思想であつた。從つて組織立つた國際間の外交關係でさへも、政治家并に理論者より不信任の眼を以つ見られたのは無理もない。又外交使臣は間諜と目されて居た。例へば國際法の始祖と稱せらるゝグロチウスでさへも、大使を交換して置くのは無用であるばかりでなく有

害であると云つたのに見ても其一端は窺ひ得る。

近世に至つても此等の思想は勿論その痕跡を殘してゐる。然し外交官の任務に對する者は一變して來た。唯職務の性質上、比較的に登用の範圍が限局せられてゐる傾向はある。例へば英國の外交官が多く貴族階級から採用せられてゐることは一九〇八年から一九一三年までの間に外交官補に任用せられた青年の六割七分がイートン校の出身であつたのに見ても明白である。佛國の外交官は多く財閥に關係があり、米國では上院議員の緣故ある者より採用せられると風聞せられてゐる。斯くの如く特殊の階級又は特別のタイプの人々を外交官に任用するのは外交の職務を行ふ場合に於他の官廳の場合よりも一層多く其人の人柄によつて影響があるからである。

歐洲では十七世紀に入つて初めて諸國の君主が他國の首都へ使臣を送る慣例が出來た。これは歐洲諸國間の交通が漸次に頻繁となつて來た爲めに自然の必要に迫られたものである。

然るに第十九世紀の中葉以降、世界の交通及び通信機關の發達は外交界に大なる變化を與へた。昔は國と國との交通が不便である爲めに外國にある使臣と本國との交通は緩慢であつて、之が爲めに外にある大公使の裁量により事件を裁斷すべきことは可なり屢々起つた。然に今日に於ては本國の外務大臣は速に外國の情報を詳細に受取り又直に必要な訓令を外國にある使臣に發送することが出來る。従つて一方には外國にある外交官の裁量に依つて決定する事件の範圍が減少したから外交官の責任が輕減せられたとも云ひ得る。之によつて國家の外交は統一を保持し、又繼續性を濃厚にすることが出來たのである。

國際交通の頻繁となるに從ひ外交官の司守する事務の範圍は益々廣くなつた。言葉をかへて云へば外交官が代表すべき利益及び外交官の觀察の對象が一層復雜になつたとも云ひ得る。陸海軍の事務の爲めには古くより武官を派遣したのであるが晩近經濟關係の緊密となるに從つて各國ともに商務官、又は財務官を派遣し、又芬蘭、瑞典等は社會問題の調査の爲めにソーシアル、アツタツシエと稱する專門家を公使官に駐在せしめてゐる。獨逸とロシアは通信部を外國の大使官に設けて特殊の技能ある者を派遣し、專ら外國の輿論の趨向に注意せしめ、外國の輿論を有利に轉換することに努めてゐる。

外交の民衆化に從ひ、外交の中心は一國の輿論に依つて動くのであるから、各國政府が外交政策の遂行に際して、自國の民論を指導し、外國の輿論を吾に有利に導かんとするのは誠に當然の努力であつて、最近外交の仕事は重を宣傳事業に置くこととなつたのも專ら此理由によるものである。

三　外交の民衆化

近世の歷史に於て政治と外交の中心は明かに三段の變化を遂げた、第十九世紀中葉までの歐洲諸國の外交は凡て宮廷を中心としたものであつた。外交の衝に當るものは宮廷を圍繞する重臣であつて、この外交の背後には常に軍隊の力が潛んでゐた。通常これを宮廷外交又は舊時代の外交と呼んでゐる。前に述べたエリザベス女王の宮廷へ美男子にしてラテン語の素養ある者を大使に送つたといふ如きは其適例である。

第十九世紀の中葉以降に於ては國際交通の發達、產業革命の影響等に依つて近世の國家競爭の激しくなつた、貿易市場の競爭、殖民地の獲得等に腐心するやうになつて、外交の中心は經濟利益を代表する大銀行家及び商工業者の手に移るようになつた。所謂帝國主義の外交と稱せられるものである。

所謂資本主義の擁護者である帝國主義的外交の行詰りは大正三年以來の歐洲大戰爭を產んだ世界大戰爭は有史以來の悲慘なる出來事であつた。この慘事を見て戰爭の末期以來世界の政治家、思想家は新しき國際關係の基調を發見することを苦慮し、第十九世紀以降の極端な利己主義的外交、陰險にして術策の多い外交に飽きて、一層直截にして明白な外交を求めるようになつた。

ウイルソン大統領は十四ケ條の綱領の中に秘密外交の打破といふ文字を揭げた。秘密外交の打破とは、外交を民衆の手に引渡すといふ意味である。即ち外交の民衆化である。

民衆を代表する議會が多數を以て是認した政策を以て國民的外交方針を定める時代が來た。今日に於ては民論に依つて批評せられ、檢討せられ、民衆が之に共鳴する如き外交方針でなければ力の強い政策として之を遂行することは不可能である。此點が第十九世紀の外交と歐洲戰爭の外交とに一大變化ある所以である。

所謂宮廷外交と最近の民衆外交とを比較する爲めに茲に伯林會議（一八七八年）と巴里の講和會議（一九一九年）とを比較して見たい。伯林會議は舊式外交の絕頂に達した時代であり巴里會議は舊式外交が新しい外交に移る・新時期を劃した會議である。勿論、世界歷史に對する重要の程度に於ては伯林會議と巴里の講和會議とは比較にならない相違がある。然しこの點は關係の少いことであるから暫く別として第一に述べたいことは伯林會議に出席した各國政治家――獨逸のビスマルク、露國のゴルチヤコフ、匈牙利のアンドラシー伯等はいづれも其君主の信任を擔つた政治家であつたけれども其國民の意思を代表して

ゐる人々ではなかつた。英國の宰相ヂスレリーでさへもヴイクトリア女王の御信任に依つて其地位を鞏固ならしめてゐたと稱せられる程である。

此等の政治家は一樣に保守主義に屬する人であつた、そして其外交の目的は歐洲の現狀維持といふことであつた、が當時の歐洲の民衆は外交の事に殆んど無頓着であつた。露國以外の諸國の政治家が考へたことは、一樣にトルコの領土保全といふことで露國がトルコに押しつけたサン・ステフアノ條約からトルコを救濟することであつた。英國は東洋に於ける植民地保全の爲めに露國の膨脹を歡迎しなかつた。普佛戰爭の傷痍から癒えない佛國と、國民的統一の日淺い伊太利とは消極的の態度を取つてゐたが、ロシアが地中海に勢力を得ることは勿論佛伊兩國の好む處でなかつたから此會議で常に英國を支持したのは當然であつた。

伯林會議以後四十年にして巴里の講和會議が開かれた。然し世界戰爭當時の列强の利害關係は殆んど伯林會議以來一變してゐた。その變動の最も大なるものは經濟的條件の増大したことである。勿論、第十七世紀及十八世紀の戰爭は葡萄牙、西班牙、和蘭等の殖民地爭奪及び海上權力の抗爭にあつたのであるから、經濟的爭鬪と云へないではないが、第十九世紀末期に於ける各國の經濟戰は、科學の進歩に伴ふ生産の過剩に伴ひ貨物の市場を求め、原料品の獲得を競ふものであつて、同時に又國際的に資本市場を獨占する爭であつた。殊に獨逸が世界の競爭に參加したのは伯林會議以後であつて、其急激な進歩發展は英國の地位を脅威する形勢となつた。最近の世界戰爭はこの資本主義的帝國主義の競爭が惹起した當然の歸結である。そして此大戰爭の最中に多數民衆の協力を得る爲めに、各國の政治家は民衆に自由を與へ、民族自裁權を認める外なかつた。戰爭前に民衆の自由の要求を滿足せしめなかつたロシア、獨逸等に於ては舊王朝は革命に依つて顚覆して了つた。自由主義の國内に於ても四ケ年の大戰爭は一層社會的嫉妬心を强からしめ、勞働と資本との爭を激しくした。

此等の狀況は第十九世紀の外交家が毫も繼續しなかつた現象である。從來の外交は歐洲を中心とし、歐洲内の事件を主として取扱つたものであつたが、世界戰爭は世界各地の利害關係を渾然として歸一せしめる如き狀況に陷れた。

巴里會議では主要聯合國と稱する五大國の外に二十二ケ國の小國があつた。日本と米國とは初めて歐洲問題に關する外交舞臺に表れて來た。印度、濠洲其の自治領殖民地も代表者を出した。此等はいづれも世界の新しい局面に伴ふ變化であつた。

此等の形式上の變化と共に外交を支配する動力に於ても所謂民衆外交の思想が次第に地歩を占めて來た。米國大統領は一九一七年三月五日の演説の中に、「平和條約は公然に之を締結し、之を公表す、其後には如何なる、種類の秘密條約をも結ばず、外交は常に公明に且つ天下環視の裡に之を行ふべし」と聲明した。これはウイルソンの十四ケ條の綱領の一である。

この運動は近年のデモクラシーの勃興と、歐洲戰後に於ける民衆の自覺とに影響せられたもので、第十九世紀の資本主義的外交政策に代つて新に世界に勃興した思想である。新しき外交の基調は國民生活の欲求と、人類の共存共榮の理想である。獨占に代ふるに分配(シェアー)を以てする生活理想の表現である。

外交方針の繼續性といふことはこの新しき外交を理解して始めて充分の説明を與へることが出來る。外交政策に終始一貫した方策のあるのは、その外交が國民生活の欲求を基礎として立つからである。例へば英國の外交政策は數世紀を通じて一貫してゐる。商工業を以て國民を養ひ、工業の原料と食料品とを海外に求め、其製造品と石炭とを外國に賣り、之が爲めに多數の商船を擁し、海上交通の安全の爲めに優勢な海軍を有ち、かくして世界に跨る大帝國を磐石の安きに置いてゐる。故に勞働黨と保守黨とは勞働賃銀の高低に就て相爭ふけれども、其外交方針の根本に於ては殆んど同一である。それは英國の外交政策が國民各自のもつてゐる自己防衛の衝動の上に立つてゐるからである。

四　外交を監督する方法

民衆が外交を監督するといふ思想は比較的近代の問題である。佛蘭西革命以來最近の世界戰爭の終末まで歐洲に於ける内政上の爭は專制政治に對する民衆主義の鬪爭であつた。この民衆主義は議會政治の方針を確立し、普通選擧を實行した許りでなく、裁判にさへも民衆の自治を認めて陪審制度を創設した。それにも拘らず、外交方面に於て民衆的制度を採用することは甚しく遲れてゐた。

其理由は民衆化した政治組織に於ても議員政治家が外交の局に當ることに躊躇したのも一の原因であらう、同時に社會問題や、司法權の獨立や、乃至は自由平等の權利擁護の問題に比べて外交事件が比較的、民衆の生活に縁遠い感を抱かれて居たことも其民衆化を遲からしめた原因である。此等の理由から歐洲の憲法に於ても最近まで外交權といふ特別の名稱の下に外交を君主の手に一任したものが多い。

一九一三年にサー・ヘリー・ジョンストンといふ英國人が

『外交政策の常識』と稱する小冊子を發表してゐる。此人は當時の重要なる國際問題を批判して其中にかういふことを書いてゐる。

現今、國と國との關係を處理するには國の元首と之に隸屬する大臣との手に依つて處理せられてゐる。新聞紙は外交を批評し、屢々政策を讃嘆してゐるが、多くの場合には既に事件が出來上つた後に之を見て、出來る丈け體裁よくこれを辯明して行く有樣である。英國では在野黨に屬する不平政治家が田舍を巡回して政談演說に政府の外交を批評して行く――その批評が當つてゐるか、當らないか、未だ現在では分明しないが、いづれにしても大なる成功を收めてはゐない。然し一旦此等の政治家が政局に立つと君主と屬僚との外交意見に同意して、依然今日の英國外交は君主と二人の國務大臣と外務次官と、それから時として大資本家の代表者との相談に依つて決定せられてゆく……

英國の新聞紙でも、タイムスは獨立した外國からの報道をもつてゐたが、然し多くは政府と密接な關係をもつてゐた。タイムスが政府に反對したのはグラドストーンに反對したのと、後にノースクリッフ卿の時代にロイド・ジョージに楯ついた位のものである。

憲法政治の母とも云ふべき英國の議院政治に於ては外交の權限は內閣大臣に委任せられてゐたが、それでも皇帝の勢力が之に及んだ事は決して稀ではない。サー・ヘーリーの記す處に依ればヴィクトリア女皇并に其の夫ウェリントン大公の外交上に於ける勢力は侮る可らざるものであつた。殊にウェリトン大公は女皇の秘書官、常設大臣兼政治顧問であつた。

ヴィクトリア女皇時代に女皇と尤も意見の合はなかつたのはパーマーストーンであつて、一八五一年にパーマーストーン內閣の倒れたのは其外交政策が女皇に容れられなかつた爲めである。議會と君主との間に外交上の意見に相異ある場合には常に君主の勝利に歸した。即ち君主は其大臣を任免することが絕對に自由であつたのである。

一八七四年に面白い事件が起つた。倫敦でロシア皇帝の皇女とエヂンバラ大公との結婚式があつて、ツアールが倫敦に來られた。ツァールが倫敦を發たれる以前にヴィクトリア女皇はバルモラルへ旅行すると云はれ出した。そこで大臣達はそれがロシア皇帝に對する不作法であること、もし之を敢行せられたら大事件が起ることを奏上したが女皇は聽かれない。ロード・ダービー、ロード・サリスベリーや、遂には皇太子までが忠言を與へられたが聽入れがない。やつとヂスレリー卿の諫言に依つて

女皇が旅行を思止まられた。チスレリー卿の書いたものに曰く、『サリスベリー卿の云ふには自分がアフガン戰爭を防止したと、それからダービー卿も自分の比類なき成功を祝つて呉れた』と。ヴィクトリア女皇もこの事件を告白してから書かれて居る、『チスレリーは親切な人であつたから、之が御禮の意味であの人の忠告を聽入れた。』と。

斯の如くヴィクトリア女皇の時代に於ては時々の外務大臣は一方には議會に對して責任を負ひ、他方には女皇から絶えざる監督をうけてゐた。

エドワード七世が未だ皇太子の頃ハラムといふ人の書いたものに、『才能があり活動家で人氣もので野心家である王様が出て來たら其結果は云ふまでもなく明白である。其御代は英國憲法の均衡の爲めに危險であるだらう』とある。

ヴィクトリア女皇は大臣を通じて外交政策に干與せられたのであるが、エドワード七世は直接に自分で働かれた。この活動はランスダウン卿の外相時代に始まるのであるが、エドワード七世は大臣を引つれずして伊太利皇帝、獨逸皇帝、フランス大統領、並にロシア皇帝を訪問せられたことがある。この皇帝外交はエドワード・グレーの外相時代まで繼續したものである。

斯の如き外交上の專制政治主義は秘密外交の形式をとつて歐洲大戰の間際まで維持せられてゐたが、四年四ケ月の大戰爭は、秘密外交を打破し、外交上の民衆主義を確立するに大なる貢獻を爲したものである。殊に英國に於て外交を民衆化するに與つて力あつた人はロイド・ジョージであつて、彼の政治に對する毀譽は相半してゐるに拘らず、何人も彼が外交の中心を外務省より議會に移した點を承認せざるを得ないであらう。

現在多數の國に於ては議會の外交監督は極めて間接の方法に依つて行はれてゐる。英國の議會に於ては大體左の三個の方法によるものである。

一、內閣の政治上の責任

二、豫算に對する監督權

三、外務大臣又は總理大臣に對する外交上の質問、

これ等の方法はいづれも餘り有効ではない。第一については、政府は多くの場合に議會に過半數の議員を率ゐてゐるから責任問題として內閣を攻擊することも先づ輿論の多數を動かさない限り有効でない。豫算を否決することは立法府として危險な行爲である許りでなく其責任も重大である。從つて外交に關する討論を行はずして閉會した議會も決して少くない。

英國の憲法は條約の批准に際しても議會の權限を認めてゐない。條約の批准權を大皇に一任してゐる。然し米佛兩國の有す

『外交政策の常識』と稱する小冊子を發表してゐる。此人は當時の重要なる國際問題を批判して其中にかういふことを書いてゐる。

現今、國と國との關係を處理するには國の元首と之に隷屬する大臣との手に依つて處理せられてゐる。新聞紙は外交を批評し、屢々政策を譏嘆してゐるが、多くの場合には既に事件が出來上つた後に之を見て、出來る丈け體裁よくこれを辯明して行く有様である。英國では在野黨に屬する不平政治家が田舍を巡回して政談演說に政府の外交を批評して行く――その批評が當つてゐるか、當らないか、未だ現在では分明しないが、いづれにしても大なる成功を收めてはゐない。然し一旦此等の政治家が政局に立つと君主と屬僚との外交意見に同意して、依然今日の英國外交は君主と二人の國務大臣と外務次官と、それから時として大資本家の代表者との相談に依つて決定せられてゆく……

英國の新聞紙でも、タイムスは獨立した外國からの報道をもつてゐたが、然し多くは政府と密接な關係をもつてゐた。タイムスが政府に反對したのはグラドストーンに反對したのと、後にノースクリッフ卿の時代にロイド・ジョージに楯ついた位のものである。

憲法政治の母とも云ふべき英國の議院政治に於ては外交の權限は内閣大臣に委任せられてゐたが、それでも皇帝の勢力が之に及んだ事は決して稀ではない。サー・ヘーリーの記す處に依ればヴィクトリア女皇并に其の夫ウェリントン大公の外交上に於ける勢力は侮る可らざるものであつた。殊にウェリトン大公は女皇の秘書官、常設大臣兼政治顧問であつた。

ヴィクトリア女皇時代に女皇と尤も意見の合はなかつたのはパーマーストーンであつて、一八五一年にパーマーストーン内閣の倒れたのは其外交政策が女皇に容れられなかつた爲めである。議會と君主との間に外交上の意見に相異ある場合には常に君主の勝利に歸した。即ち君主は其大臣を任免することが絶對に自由であつたのである。

一八七四年に面白い事件が起つた。倫敦でロシア皇帝の皇女とエヂンバラ大公との結婚式があつて、ツアールが倫敦に來られた。ツァールが倫敦を發たれる以前にヴィクトリア女皇はバルモラルへ旅行すると云はれ出した。そこで大臣達はそれがロシア皇帝に對する不作法であること、もし之を敢行せられたら大事件が起ることを奏上したが女皇は聽かれない。ロード・ダービー、ロード・サリスベリーや、遂には皇太子までが忠言を與へられたが聽入れがない。やつとヂスレリー卿の諫言に依つて

女皇が旅行を思止まられた。ヂスレリー卿の書いたものに日く、『サリスベリー卿の云ふには自分がアフガン戰爭を防止したと、それからダービー卿も自分の比類なき成功を祝つて呉れた』と。ヴィクトリア女皇もこの事件を告白してから書かれて居る、『ヂスレリーは親切な人であつたから、之が御禮の意味であの人の忠告を聽入れた。』と。

斯の如くヴィクトリア女皇の時代に於ては時々の外務大臣は一方には議會に對して責任を負ひ、他方には女皇から絶えざる監督をうけてゐた。

エドワード七世が未だ皇太子の頃ハラムといふ人の書いたものに、『才能があり活動家で人氣もので野心家である王樣が出て來たら其結果は云ふまでもなく明白である。其御代は英國憲法の均衡の爲めに危險であるだらう』とある。

ヴィクトリア女皇は大臣を通じて外交政策に干與せられたのであるが、エドワード七世は直接に自分で働かれた。この活動はランスダウン卿の外相時代に始まるのであるが、エドワード七世は大臣を引つれずして伊太利皇帝、獨逸皇帝、フランス大統領、並にロシア皇帝を訪問せられたことがある。この皇帝外交はエドワード・グレーの外相時代まで繼續したものである。

斯の如き外交上の專制政治主義は秘密外交の形式をとつて歐洲大戰の間際まで維持せられてゐたが、四年四ケ月の大戰爭は、秘密外交を打破し、外交上の民衆主義を確立するに大なる貢獻を爲したものである。殊に英國に於て外交を民衆化するに與つて力あつた人はロイド・ジョージであつて、彼の政治に對する毀譽は相半してゐるに拘らず、何人も彼が外交の中心を外務省より議會に移した點を承認せざるを得ないであらう。

現在多數の國に於ては議會の外交監督は極めて間接の方法に依つて行はれてゐる。英國の議會に於ては大體左の三個の方法によるものである。

一、内閣の政治上の責任

二、豫算に對する監督權

三、外務大臣又は總理大臣に對する外交上の質問、

これ等の方法はいづれも餘り有効ではない。第一については、政府は多くの場合に議會に過半數の議員を率ゐてゐるから責任問題として內閣を攻擊することも先づ輿論の多數を動かさない限り有効でない。豫算を否決することは立法府として危險な行爲である許りでなく其責任も重大である。從つて外交に關する討論を行はずして閉會した議會も決して少くない。

英國の憲法は條約の批准に際しても議會の權限を認めてゐない。條約の批准權を大皇に一任してゐる。然し米佛兩國の有す

る如き外交委員會を議會に特設しようとの提案は屢々議會に表れた。又條約の批准に議會の協贊を必要とする趣旨の法律案も提出せられた。殊に一八八六年グラッドストーン内閣の時にはこの法案は僅に四票の差を以て破れた有樣であつた。

ヴエルサイユの平和條約は大多數の國に於て議會に附議せられた。英國に於てもロイド・ジョージは「陛下と諸外國との間に結ばれた平和條約を有効とする法案」を議會に出した。これは憲法上に意義ある先例を爲すものである。

英國の議會は世界戰爭以後、外交監督に就ての權限を擴張したことは事實上疑を容れない。又英帝國の法律上の地位には變更ないが、英國外交方針の決定に就ては其自治領即ちドミニオンが有力な發言權を有するようになつた事も政治上の著しい變化と云ふことが出來る。

佛國議會には外交委員會と稱するものが構成せられてゐて何人でも之に召喚して意見を聽取することが出來る。下院の外交委員會は議會が新に成立した際に四ケ年の任期を以て撰任せられ四十四名の委員から成立する。この四十四名は各黨派から大體人員に比例して選ばれる慣習である。外交委員會は豫算の審議には關係ない、豫算は凡て豫算委員會に附托せられるのである。此委員會の任務は凡ての外交問題について議會に報告を提出する事である。佛國上院は一九一五年に初めて外交委員會なるものを構成し三十六名の委員を選任することとした。

歐洲の新興國又は革命政府は多く佛國の例を採用した、そして批准を要する條約を列記し、又は平和講和を決するには必ず議會の同意を要すと書いてゐる。憲法を以て外交委員會の構成を規定しないものでも多くは議院法を以て之を設けてゐる。

獨逸憲法に於ても佛國の外交委員會の制度を認めて、ライヒスタッハの開會中と否とに論なく開會し得ることになつた。ワイマールの憲法議會に於ては此點に就て色々の反對論が出で、委員會が行動することは既に政府に對する不信任を表示するものである、委員會の爲めに行政府の行動を制肘することは喜ぶべきことでないといふ反對があつた。然し之を辯護するものは、外交委員會の制度を採用してゐる國々で不良な結果を示してゐないと主張した。

米國に於ては條約締結權は大統領と上院とに兩分せられてゐる。條約の交渉權は大統領にあり其批准に就ては上院議員の三分の二以上の協贊を必要としてゐる。尤も條約に非ざる executive agreement（エキユーチヴ　アグリーメント）を結ぶには上院の同意を必要としないことになつてゐるが、然しこの間の分境に就ては充分明瞭にせられてゐない。例へば一九〇五年一月に當時の大統領ルーズヴェルト

はサント・ドミンゴと保約を結んで、(イ)米國は同國の領土保全を尊重し(ロ)行政及財政を管理し、(ハ)外債を整理し(ニ)全般の秩序保持に努力することを約束した。然るに米國上院はこの條約を拒否して了つたので、ルーズヴェルトはサント・ドミンゴ國政府をして米國人を財政顧問に任命せしめ、米國の軍艦を其地に派遣した。約言すれば上院の同意なくして其約束の大部分を實行したのである。

如此く、外交監督の困難な事情は多々あるけれども、近事の趨勢は次第に議會をして有効に國の外交を監督せしめる方法をとらしめつゝある。例令へ議會の監督を法規の上に、制度の形を以て嚴密にしない迄も、少くも內閣の政治的責任として、外交に對する成敗の批判を明白にすることは近世に於ける議院政治の常道である。此憲政の常道あるが故に英國議會は今日まで外交委員會の案を斥け批准權を求めずして終つた。

五 國民外交の樹立

國民外交といふ叫は近來の日本に於ても屢々耳にする處であるが、其內容實質は充分明白にせられてゐない。或者は山王台に野外の集會を催し、又は旗を立てゝ外國の使館に押寄せることを國民外交であると考へてゐる。私見によれば國民外交とは外政の民衆化といふことである。國民多數の輿論に從ひ、民衆的政治機關によつて外交を行ふといふことである。

國民多數の輿論が支持する外交でなければ國內に於て强い外交方針となり得ない、國民外交によらなければ相手國をして敬意を拂はしめることは困難である。即ち國民外交は現在の國際生活に於て最も進歩した、最も力强い外交の形式である。

然しこの外交の形式を採用するには國內に健全な輿論の存在することを要し、輿論を代表する議院政治の行はれることを要し、民衆的政治機關の樹立せられることを必要とするものである。

日本の現狀は果してどの程度まで外交を民衆化してゐるであらうか。政府は時として議會の多數黨に依つて組織せられたが然しそれは云はゞ偶然の出來事であつて、憲政の常道と稱せらるゝ多數黨政治、或は議院政治の形式は必ずしも實行せられてゐない。從つて民意を代表する者が外交を監督する方法は確立せられてゐないのであつて、政府の外交と國民の多數の意志との間には法律的にも政治的にも何等の連鎖が存在してゐない狀態である。然し民衆外交又は國民外交を實現する第一の階梯は民衆と外交との政治的連絡を保つ爲めで議院政治主義を確立することにあると云はなければならない。

る如き外交委員會を議會に特設しようとの提案は屢々議會に表れた。又條約の批准に議會の協賛を必要とする趣旨の法律案も提出せられた。殊に一八八六年グラッドストーン内閣の時にはこの法案は僅に四票の差を以て破れた有樣であつた。

ヴェルサイユの平和條約は大多數の國に於て議會に附議せられた。英國に於てもロイド・ジョージは「陛下と諸外國との間に結ばれた平和條約を有効とする法案」を議會に出した。これは憲法上に意義ある先例を爲すものである。

英國の議會は世界戰爭以後、外交監督に就ての權限を擴張したことは事實上疑を容れない。又英帝國の法律上の地位には變更ないが、英國外交方針の決定に就ては其自治領即ちドミニオンが有力な發言權を有するようになつた事も政治上の著しい變化と云ふことが出來る。

佛國議會には外交委員會と稱するものが構成せられてゐて何人でも之に召喚して意見を聽取することが出來る。下院の外交委員會は議會が新に成立した際に四ケ年の任期を以て撰任せられ四十四名の委員から成立する。この四十四名は各黨派から大體人員に比例して選ばれる慣習である。外交委員會は豫算の審議には關係ない、豫算は凡て豫算委員會に附托せられるのである。此委員會の任務は凡ての外交問題について議會に報告を提出する事である。佛國上院は一九一五年に初めて外交委員會なるものを構成し三十六名の委員を選任することとした。

歐洲の新興國又は革命政府は多く佛國の例を採用した、たして批准を要する條約を列記し、又は平和講和を決するには必ず議會の同意を要すと書いてゐる。憲法を以て外交委員會の構成を規定しないものでも多くは議院法を以て之を設けてゐる。

獨逸憲法に於ても佛國の外交委員會の制度を認めて、ライヒスタッハの開會中と否とに論なく開會し得ることになつた。ワイマールの憲法議會に於ては此點に就て色々の反對論が出て、委員會が行動することは既に政府に對する不信任を表示するものである、委員會の爲めに行政府の行動を制肘することは喜ぶべきことでないといふ反對があつた。然し之を辯護するものは、外交委員會の制度を採用してゐる國々で不良な結果を示してゐないと主張した。

米國に於ては條約締結權は大統領と上院とに兩分せられてゐる。條約の交渉權は大統領にあり其批准に就ては上院議員の三分の二以上の協贊を必要としてゐる。尤も條約に非ざる executive agreement（エキユーチヴ アグリーメント）を結ぶには上院の同意を必要としないことになつてゐるが、然しこの間の分境に就ては充分明瞭にせられてゐない。例へば一九〇五年一月に當時の大統領ルーズヴェルト

はサント・ドミンゴと條約を結んで、(イ)米國は同國の領土保全を尊重し(ロ)行政及財政を管理し、(ハ)外債を整理し(ニ)全般の秩序保持に努力することを約束した。然るに米國上院はこの條約を拒否して了つたので、ルーズヴェルトはサント・ドミンゴ國政府をして米國人を財政顧問に任命せしめ、米國の軍艦を其地に派遣した。約言すれば上院の同意なくして其約束の大部分を實行したのである。

如此く、外交監督の困難な事情は多々あるけれども、近事の趨勢は次第に議會をして有効に國の外交を監督せしめる方法をとらしめつゝある。例令へ議會の監督を法規の上に、制度の形を以て嚴密にしない迄も、少くも内閣の政治的責任として、外交に對する成敗の批判を明白にすることは近世に於ける議院政治の常道である。此憲政の常道あるが故に英國議會は今日まで外交委員會の案を斥け批准權を求めずして終つた。

五　國民外交の樹立

國民外交といふ叫は近來の日本に於ても屢々耳にする處であるが、其内容實質は充分明白にせられてゐない。或者は山王台に野外の集會を催し、又は旗を立てゝ外國の使館に押寄せることを國民外交であると考へてゐる。私見によれば國民外交とは外政の民衆化といふことである。國民多數の輿論に從ひ、民衆的政治機關によつて外交を行ふといふことである。

國民多數の輿論が支持する外交でなければ國内に於て強い外交方針となり得ない、國民外交によらなければ相手國をして敬意を拂はしめることは困難である。即ち國民外交は現在の國際生活に於て最も進歩した、最も力強い外交の形式である。

然しこの外交の形式を採用するには國内に健全な輿論の存在することを要し、輿論を代表する議院政治の行はれることを要し、民衆的政治機關の樹立せられることを必要とするものである。

日本の現狀は果してどの程度まで外交を民衆化してゐるであらうか。政府は時として議會の多數黨に依つて組織せられたが然しそれは云はゞ偶然の出來事であつて、憲政の常道と稱せらるゝ多數黨政治、或は議院政治の形式は必ずしも實行せられてゐない。從つて民意を代表する者が外交を監督する方法は確立せられてゐないのであつて、政府の外交と國民の多數の意志との間には法律的にも政治的にも何等の連鎖が存在してゐない狀態である。然し民衆外交又は國民外交を實現する第一の階程は民衆と外交との政治的連絡を保つ爲めで議院政治主義を確立することにあると云はなければならない。

尤も憲法を有し議會制度を持つ國が必ずしも直ちに國民的外交を行ひ得るといふ譯ではない。實際に於ては國民が外交を理解し、政治に熱心と興味を持つに非れば議會をして外交を監督せしめることは困難である。現に英國の如く議院政治の發達した國に於ても、議會が有効に政府の外交を監督するやうになつたのは極めて近年の事である。

日本に於て外交政策を定めるものは外務大臣及び内閣である。然るに議院政治の習慣が確立してゐない日本ではその外交方針は數名の政治家が頭でこね上げた外交方針であつて國民の多數が之を贊成してゐるや否やは知る方法がない。從つて重要なる問題に逢着して政治家は屢々責任をとることを躊躇する、外國に對しても其所信を遂行することを憚り勝である。其根本の理由は外交政策が國民の多數の支持を得たものであるとの證據を得べき機關が無いことである。議會は厳存してゐ乍ら、外交に關する民意代表の實を備へてゐると云ひ得ないからである。

これ即議院政治が政治上の慣習として認められても、國民外交は直ちに行はれ得るものと即斷することが出來ないといふ所以であつて第一に政黨が外交に關する經綸を有し、第二には一般民衆が外交的常識と外交に對する健全なる批判とを有することが國民外交を樹立する先決問題である。

日本の現状に於て欠くる所は整備した制度に非ずして、民衆化した政治的慣習である。又如何に議會に智勇辯力の士ありとも、國民の多數が外交に關する常識を有せず、外交問題に對して健全な批判力を持たないならば議院政治を完全に運用することも、力強き國民外交を行ふことも不可能である。國民外交は素人の外交である。故に外交家と稱する専門家の手から一般民衆の手に外交を奪ひかへすことが民衆政治の必然の趨勢である。

日本の外交刷新には種々の綱目を數へることが出來るであらうが其第一義は日本に民衆的な政治習慣を確立し、議會政治を基礎とする外交の策源地を作ることである。而して日本の一般民衆が外交に興味をもち、外交常識を具有することが根本の要訣でなければならぬ。

科學と道德

理學博士　石原純

一

科學と道德とは一見餘りに緣のない二つの題目であると人は云ふかも知れません。併しそれは單なる外觀であつて、例へば火星上の人間の話す言葉が私たち地上の人間と緣のないやうにそれ程懸け隔つたものでは決してありますまい。火星人がどんな言葉でお互に話してゐるか、若し火星に、屢々想像せられてゐるやうに、十分の智能をもつたさう云ふ生物が現在してゐるとするならば、彼が或る強力な電波をもつてその言葉で私たちに話しかけないとも限りません。さうして之が私たちに或る理解を持ち來したとするならば、かやうな言葉さへもはや私たちに全く緣のない音聲であるとは云はれなくなるでもありませう。私たちの周圍を取りかこむ空間即ちエーテルは之を傳へる媒質としてそこに存在するからです。ましてや同じ人間の所産たる科學と道德とは人間そのものを媒質として相關聯する點に於てもつと密接につながつてゐるのです。若し私たちがこゝに思慮ぶかく究めるならば、極めて多くの問題が私たちを待つてゐることでせう。

「緣なき衆生は度し難し」と云ふことがたとへ眞理であつても、私たちはすべての人間のすべての所爲の間に何等かの所緣を見出すことは必ずしも可能でないとは云はれません。人間に普遍的な科學が等しく之に普遍的であるべき道德と多くの關係をもつことは云ふまでもないと思ひます。

佛國近代に於て最も卓越せる科學者であり、又科學批判者であつたアンリ・ポアンカレはその晩年の論作のなかにこの問題を取り扱ひ、科學と道德との交渉する種々の點を私たちのために論じました。彼の說く處は恐らく私たちのその儘肯定し得るものであり私がここに云ひ及ぼさうとする處も亦大體に於て

その範圍を等しくするのであるから、或はその趣旨を反復するに過ぎないかも知れませんが若しそれがこの偉人の思索せる處を紹介して新たに世人の參考となることができたでもあらうならば、私の望みは亦それで達せられたと云はなければなりません。

私は即ち科學と道德とに同時に關聯する問題として次の諸項を數へ擧げたいのです。

一、科學と道德とはそれぞれの本質上お互に關係するかどうか。

二、科學に於ける眞理探究はどんな道德性（倫理的價値）をもつてゐるか。

三、科學的對象としての人間性、及び之と道德との關係。

四、科學研究手段と道德とは常に一致し得るかどうか。

五、科學の方法が人間性に及ぼす影響、特にその道德的弊害。

六、科學が非倫理的行爲の手段として用ひられる場合の問題。

私は之等に對して順次考察を費して見たいと思ひます。たとへここには既に特に云ふ必要のない程明らかなものがあらうとも、併し又之等を思ひ浮べることによつて人生の眞實を考へることに資しないでもなからうと思ふからです。

二

科學はその本質上單に私たち人間の種々の認識を論理的に整序して或る體系を構成するものであり、特に經驗化學にあつては經驗的事實の記載がその主眼であることは既に論ぜられた處でありますが、道德は之と異つて人間の行爲を規範制御しようとする命令若くは勸告に外ならないのです。ポアンカレが云うてゐる通りに、「或る論理的論斷の前提が二つとも直說法の形を取るならば、その歸結も亦直說法となるでせう。歸結が或る命令の形を取るためには、兩前提のうち少くとも一つがそれ自身命令法でなければなりますまい。ところが科學の法則や幾何學の公準は純粹に直說法のものであり、又さうでしかあり得ないものです。科學的實驗の經驗事實も同樣であつて、あらゆる科學の基礎にはそれ以外のものはなく、又あり得ないのです。或る巧者な辯證家はその發見する前提をすつかりと攪きまはし、之を結合し、さうして論斷を築き上げるかも知れませんが、でも、彼が獲得するところのものは、いつもやはり直說法であるのでせう。彼は決して、かう爲せよとか、斯うするなとか云ふやうな法則、即ち道德的法則に一致するか若しくは之に背反し得るであらうやうな命題には到着しないでありませう。」

ですから科學をいかに研究しやうとも、それ自身から私たちはどんな道德的法則をも引き出すわけにはゆきません。科學は私たちを常に完全な教養へと導くことは出來ます。そして世界の眞理なるものを私たちに示してくれます。けれども之は何等の意味に於ても私たちの行爲を指導若くは命令制御するものではなく、即ち道德的眞理とは全く異なつたものです。科學の教へるところのものは一つの絶對な必然であつて、それは相對的な道德的法則のやうに私たちの意志によつて之に背くことをも敢てなし得るところのものではなく、私たちがこの世界に存在する以上いかにしても之に從ふべく餘儀なく運命づけられてゐる筈のものです。こゝに科學の眞理の絶對性が存するわけです。

固より現に知られた形に於ける科學的法則が必ずしも眞ではなく、之に背反するものが見出され、又は實際に行爲せられるかも知れません。例へば物質科學の法則に矛盾するかのやうに見える心靈現象の如きものがそこに指摘せられるでもありませう。けれども之等は科學が漸次の發展を遂ぐべきものであることを考慮するならば、現實に可能であるあらゆる現象は科學的法則に背反するものではなく、少なくとも究竟的な科學の眞理の絶對性は否定することのできないものです。ともかくも私たち人間はこの意味での科學的眞理に背く何等の權利も、又可能性も與へられてはゐないのです。即ち科學は道德への一致若くは矛盾について云爲すべき何ものをも私たちに示しはしません。

科學と道德とはその本質上に於てかやうな判然とした相違をもつてゐますけれども、併しそれにも拘らず私たちは曾て兩者の間に二重の意味で或る關係が想察されたことを經驗したのでした。第一には或る倫理學者たちが道德的法則の眞理性を科學的法則のそれと同樣に論理的に證明しようと試みたことであり第二には科學が人間に取つての或る許すべからざる不德を結果するとして科學者の迫害さへもが屢々行はれたことであります前者の考へたやうに、道德は果して科學とこの點に於て相似するでせうか、又後者の解したやうに、科學研究は果して嫌忌すべきものであつたでせうか。

私はこゝに道德の本質を詳論するだけの遑をもちませんが、只ポアンカレと共に、道德律が單に論理的に證明せらるべきものでないことを明らかにすれば足りると思ひます。

ポアンカレはかう云ふのでした。「神が全能であり、且つ私たちを亡滅させることのできるものであると云ふ證明がなされたにしても、私たちが神に服從する義務があるとは證明することが

できません。この神が善者であつて、私たちが之に感謝する義務をもつてゐると證明し得たであらうときにさへ、やはり同樣であつたでせう。實際、忘恩の權利をば人間の權利のうちで最も價値あるものとして解する人たちもあるくらゐです。けれども私たちがこの神を愛するならば、その上ではどんな證明も無用になり、服從は全く自然的に見えるやうになります。そしてこれが、なぜ宗教が力あるものとして、又之に反して形而上學がさうでないものとして存するかといふことに對する理由です。」

「若し私たちに祖國への愛に對する根據を示せと云はれることがあつたなら、私たちはまさしく狼狽に陷るのではないかと思はれます。ですが、考へてもごらんなさい、我が軍隊が敗北して佛國が敵に蹂躪せられたとしたならば、そのとき私たちの全心は之に反抗し、涙が眼に漲つて、その外のすべてはどうでもよくなるでありませう。今日或る人たちがあらゆる詭辯をもつてこの感情の正鵠を得ないことを熱叫するならば、それは多分疑もなく彼等が十分に思考力を有しないからであり、災害をすべて心に現ずることができないからであります。けれども災害や天の所罰が彼等の眼前に下された場合には、彼等の心も亦私たちのと等しく激昂するでもありませう。」

畢竟すべての道德に於て、いかに行爲せよ、若くは何々をするなと云ふやうな律則は、決して之を或る必然として論理的に證明することはできないのであつて、却つて一つの自律的な當爲でなければならないのです。しかもこの自律なるものは私たちの理性によつて之に道德的價値を歸し得るやうなものでなければならないのは勿論ですが、之が普遍的であり得るためには、亦私たちの感情と或る根本的な關聯をもたなくてはならないこと、ポアンカレの說く如くであると思ひます。

「すべての獨斷的倫理學、並びに亦すべての論據的道德は最初から或る確かな失敗をもつてゐるのです。それらは一つの機械が單に運動傳達のための裝置を具へてゐだるけで、之を動かすエネルギーの存在しない場合にも似てゐます。道德的原動力、即ちその車輪を動かすことのできるところのものは、只一つの感情でしかあり得ません。私たちが不幸なるものへの同情をもたなくてはならないと云ふことは證明せられはしません。けれども私たちが謂はれもない不幸に對立するならば、それは余りに屢々ある事柄ですが、私たちは激昂の感情に捉はれるのを感じ、何の考慮にも耳を傾けず、又私たちの意志に逆つてまでも私たちを不可避的に奪ひ去るやうな不可思議なエネルギーが私たちのなかに眼覺めるでせう。」

道徳的行爲の原動力がかやうな純粹感情に於て見出されなくてはならないのはこの言葉の通りでありますが、そのいかなるものが私たちの道徳的理想に協ふかどうかは固より別に理性による判斷を必要とするのです。しかもこの判斷も亦單なる論理ではなく、自由意志に於ける一つの裁斷に外ならないのです。こゝに道徳が遂に科學と相似におかれ得ない特質が存するのであります。

　科學がそれ自身道徳律に背反する或る不徳を生ずるかどうかの問題は、科學の目的とする眞理探究が人生に對していかなる意味をもつかを考察することにより、おのづから解決せらるべきものです。私は次に之について說いてみませう。

三

　古昔の人たちは自然のなかに彼等のまだ解釋し得なかつた神秘を眺め、人間を威壓する絶大な力を感じ、そこに神の全能を想像し、宗教的崇拜の心を起しました。彼等の間にはいろ〳〵な神の奇蹟がもの語られ、あらゆる崇敬の念が之に歸せられたのでした。神の慈愛をもつて天空に輝く太陽が私たちの安住する大地と共に、單なる物質物、球體であり、神の御座として仰視せられた天上なるものが、單に之等を容れる空間であると云ふやうな事實が科學によつて說かれたときに、更にまた意味ぶかい神の行爲として語り傳へられた多くの奇蹟なるものが單なる物質現象として貶黜され、若くは科學の法則に背馳するとして否定されやうとさへするに至つたとき、「科學は天から光明を消失せしめ、又は少なくともその光明から神秘の面紗を奪ひ取つて之をあたりまへの瓦斯塊にしてしまひ、造物主の手段を露骨にして彼の威嚴を甚だしく損せしめるものである」と非難せられました。それは「子供たちに芝居の樂屋を覗かせて、彼等を恐がらせる妖怪の正體に疑問を起させるやうに、けしからぬことである」とも云はれました。そして科學者によつて道徳も亦失はれてしまふであらうことが虞れられたのでした。

　多くの偉大な科學者が宗教者等によつてどれ程迫害されたか、權力者又は民衆によつてどれ程脅威され若くは虐遇せられたか、私はこゝにそれらの史上の顯著なる事實を一々記すには及ぶまいと思ひます。コペルニクスやガリレイやテイヒョー・ブラーヘやコロムバスなどの名が思ひ浮べられるなら、既にそれで足りるでせう。併しながら之等の科學者の發見せるところのものは遂に必然な事實なのであつて、或る形而上學的原理から如何に之を否定しようとしても、それは單に一時を糊塗するに過ぎないのです。形而上學の建築物は華麗を極めるものでは

あつても、永續するものではなく、丁度石鹼泡球が一瞬を樂しんでやがては破滅するやうなものです。」私はこゝに眞の形而上學そのものへの批難の意味でこの言葉を引用したのではなく、それが往時信ぜられてゐたやうに、科學をも支配して、すべて或る先驗的原理に從はしめるべきであると解せられてゐたことに對して云ふのです。科學がかやうな原理に謀叛するやうに見えるのは、形而上學がその正當な領域を越えて妄りに權威を揮ひ過ぎたからであります。科學の認識が齎らすところの客觀的事實は決して私たちの意志によつて左右されるわけにはゆかないのです。科學が天文學的智識を私たちに供與し、又物理學的世界と、更に進んでは生物學並びに生理學的心理學等に於ける事實を明らかにすることはその當然の任務に外ならないのであり、そして之等が闡明する科學的心理に關しては何ものの干渉もあり得ない筈です。從つて之が道德に反するとかどうとかの少しの懸念もないことは、今日の人たちに取つて餘りに明瞭な事柄でなければなりません。

形而上學が若しその固有な領域に踏み止まる限りに於ては、なほ私たちの理性に依存すべき正當な理由をもつに反し、一方に宗教的信仰に至つては純粹に私たちの感情的意志に終始すべきものでもあります。神を信ずることは何々の故に信ずべきものではなくて、單に信ぜねばならない感情のもとに之を信ずべのです。これ宗教の力が絕大に私たちを捉へる所以でもあり、併し亦往々にして多くの迷信に陷るゆゑんでもあります。あり得べからざる事實をもあり得る如くに想像して之を信仰することにこの迷信成立の根據があるのです。それがたとへ神の偉大なる能力を示すのに役立つたとは云へ、かやうな能力の價値は遂に一つの夢想的なるものであつたので、一度び科學が事實の眞態をあばくに至つて、その塗沫せられた箔は忽ちにして剝落の運命におとし入れられなければならなかつたのです。古昔の宗教者たちは之をもつて神のために築かれた殿堂を打ち壞す反逆行爲であると解し、依つて科學者への迫害が結果したのでした。かくて長い間、科學と宗教との鬪爭が行はれました。科學はすべての神秘をあらはにすることによつて人間からあらゆる崇敬の念を奪ひ取る不德者であると誣ひられもしました。

併しながら科學に於ける事實探究は決してそのいづれの點に於てもかやうな宗教背反の意志目的をもつてなされるのではなく、却つて宗教が科學を敵視する所以はそこに妄りに偶像を作成して神を人間に近接せしめようとした處に存しなければならなかつたのです。神を顯現する一つの手段としてかやうな宗教的企圖は原始的には或はゆるされ得たかも知れません。けれど

も之れが事實の眞を謬ふるに及んでは、宗教はまたその正當な領域を逸脱するものとして一つの誤つた途に踏み入つてゐるのです。神は眞なるものの本源に一致する以上、科學こそ最も明らかに神を顯現するものでなければならないのです。神はすべての偶像や迷信を超越した、もつと遙かな究竟に安住するのであり、そして科學はこの安住の境域をあらゆる事物の眞に於て示すのであると云つてもよいでせう。かやうに解するならば、科學は宗教の本當の味方であつて、決して之と相爭ふべきものではありません。實際に事實に於ける最も嚴粛なる。且つ絶妙極まりなき眞理を發見することに於て、科學者は最も如實に造物者としての神を體驗することができるのです。あらゆる贊美は科學の眞理と、之に從ふ世界の存在とに歸せられなくてはならないでせう。

この意味に於て實に科學に於ける眞理探究の道德性の根源が成立するのです。科學者は先づその眞理の一端に觸れることによつて、最も敬虔なる心を養はれなければなりません。いかなる事象に於ても一定不變の律則が行はれるといふこと、いかなる事物も悉く之に從つて一絲も亂れない整然さを保つといふこと、それらは何と云ふ嚴粛な世界の姿ではありますまいか。私たちが之に對立して敬虔の感情を湧かし得ないとすれば、どこに再び之を求めることができるでせうか。私は更に之に附隨する種々の點を次に擧げてみませう。

四

「科學は私たちを絶えず私たち自身よりもより偉大なものと接觸させます。それは私たちを日毎に新らしい且つ日毎に擴げられた展望に保たせ、終極的にそれがどんな偉大さを示さうとも、常にもつとより偉大なものを想像するやうに私たちを刺戟します。この觀望は私たちに取つて一つの歡喜であり、私たちが自らをも忘れるばかりの歡喜であつて、それこそ道德的の善であります。」

「自然法則の嚴かしい調和を自らに體驗するところの誰でもは、他の何びとよりも寧ろ彼の小さな個人的利益を氣にとめないやうな傾向をもつでありませう。彼は自分自らよりももつと愛すべき高目標をもつのであつて、この根柢の上にのみ私たちは倫理學を建設することができるのです。彼の目的のために研究者は働いて、しかも彼の勞を多とすることなく、又或る人たちに取つては全部を意味するところの之に對する報酬を大きく見積もることもしないでありませう。そして彼が一度個人的利益を輕視することに慣れたなら、この習慣はどこでも彼に伴ふ

でせう。彼の全生涯は之によつて浄福されるのです。」

「この外に研究者が鼓吹する熱情は眞理への切望であります。かやうな切望こそ既にそれ自身道徳的ではないでせうか。何ものも虚僞ほどに斥けられてはならないのです。なぜなら虚僞は素朴な人間のうちに最も擴まつてゐる過誤の一つであり、又同時に最も恥づべきものの一つであるからです。ところで私たちは一度び科學的研究方法に際してその苦しい程な精密さに慣れ、少しの不當な詭計をも嫌忌したならば、私たちは結果を、たとへ僅かばかりでも、まちがはせたと云ふやうな非難を最大の不面目と見なすでありませう。なぜなら之は私たちに取つて拭はれない職務上の汚點を意味するからです。私たちはそこで絶對的公正へのこの努力を私たちのあらゆる行爲に於ても實行し、他の人間が虚僞を行ふやうになる處のものを最早まるで理解しない程になりはしないでせうか。そしてこれこそあらゆる公正さのうちの最も稀有な最も困難なもの、即ち自分自らを欺かないと云ふことを獲得する最良の手段ではないでせうか。」

「アリストテレスの云ふやうに、科學は一般なるものをその對象にもつてゐます。個々の事實に對してそれは一般的法則を知らうと望み、この一般化をもつと先へ押し進めやうと務めます。ちよつと見ればこゝには只思考習性が存在するに過ぎないとも見られるでせう。ですが、思考習性といへども亦その的反作用をもつてゐるのです。特殊の場合や個々の出來事なは私たちの思考をそれ以上刺戟しないためにそれらを輕んずるやうに私たちが習慣づけられたとすれば、私たちは自然に亦、そこに何等特別に努力する價値のある對象をも見ないと云ふことに對して僅かの價値をしか置かないやうになり、之を無視しても悔いないやうになるでせう。包括的に思考すると云ふ强制によつて謂はゆる『高められ』、もはや些小なるものを見ることなく、そして之を見ないために之を彼の生涯の目的にするやうな危險に置かれることはありません。ですから亦自然に個人の欲求を一般者の欲求の下位に置くやうになるのであつて、それはやはり一つの道徳なのであります。」

「この外に自然探究は私たちにもう一つの他の役目をもなします。それは一つの綜合建築物であり、その外の何ものでもないのです。それは丁度、建設に數世紀を要し、各人がその石材を運んで來るところの記念碑のやうなものです。そしてこの石材を創るために多くは全生涯を費さしめるのです。ですから研究は私たちに共同作業の必要さを感ぜしめ、私たちの個々の努力を同時代の人々並に先驅及び後繼者のそれらと連帶ならしめるやうに感じさせます。彼は只一人の些末な兵卒であり、偉大な

る全部隊の一小部分でしかないことを感ずるのです。之は軍隊意識の基礎を育成し、又百姓の朴訥な心や若くは蠻勇者の無謀な精神を矯めて彼があらゆる服從と獻身とに赴き得るやうにする訓練と同じ感情なのであります。たとへ事情は幾分か異なつてゐるにしても研究者には[illegible]有利な効果を及ぼすことができます。私たちは人道のためにはたらくのであり、又人道はそれによつて私たちに貴重になることを感じます。」

ポアンカレの以上の説明に對して私はこの點でもはや言葉を重ねる必要はないでせう。偉大なるものに對する敬意、個人的利益からの超越、眞理及び公正への希求と虚僞の排斥、一般的觀念の尊重、共同精神の養成、之等はまことに正當な科學研究に附隨してあらはれる道德的効果でなければなりません。科學者がその人格を自らの研究によつて高め得たとすれば、私たちはそこに必ず之等の効果を見出すことができるでありませう。

五

科學が闡明すべき眞理なるものが果して何であるかを私はここで説明してゐる餘裕ももちませんし、亦恐らくその必要もないでせう。ともかくも併し科學が謂はゆる眞理を求むるものである限りにおいて、そこに上に述べたやうな道德性がそれ自身に存するものであると云ふことはできます。

私は更に科學があらゆる物質と共に生物乃至は人間そのものをもその科學的研究の對象となし得るものであることを認めなければなりません。さうすれば人間の性情特に道德をも亦その對象とするところの科學の一部が成立し得るわけであります。「自然科學は蟻や蜂の社會を觀察することに自らを沈潛しこの研究を多くの嚴肅さをもつて行ひます。同樣に研究者は人間に關して或る判斷を形づくらうとし、恰も彼れ自身が一人の人間でなかつたでもあらうやうに之をなすのです。彼は自分を或る遠方のシリウスの一住民の位置において考へるのであつて、それに取つては私たち都市は單に蟻丘としか見られないでもありませう。それは彼の權利であり、又研究者の職務に屬するのです。」

「道德の科學はそれ故最初は純粹に記載的でありませう。それは私たちに人間の習性の認識を與へ、この習性がいかにして創られたかを教へますが、どうして之等が創らるべきものであつたかについては何もを云はないでせう。その上でこの科學は比較的になるでせう。それは種々の民族の習性について、又野蠻人と文明人との習性について比較を行はしめるやうに、私たちを種々の國土に導き、尙ほまた過去と現時との習性の間に時代

的比較を行はしめるでせう。最後にそれは説明を與へようと試みるのであつて。之ぞ各の科學の自然的發展なのです。」

こゝに説明と云ふのは勿論種々の記載的事實を整序して之等に共通内在せる原理を歸納し、之によつて個々の事實間の關係を明らかにすると云ふことに外ならないでせう。「ダーウィン學者は私たちに、なぜすべての既知の民族が唯一の道德的法則に自らを屈するかを説明しようと試みて、自然淘汰が久しい間にこの法則に從ふやうに適應しなかつた民族を消滅に歸せしめたと云ふでありませう。心理學者はなに故に道德の規範が一般者の利益と常に一致しないかを私たちに説明するでありませう。彼等は即ち、人間が生涯の過流のなかに、彼の行爲のあらゆる結果を熟考するだけの時間をもつことなく、却つて只或る一般的な掟規に從ひ得るに過ぎないと云ふのでありませう。この一般的掟規は、それが簡單であればある程誤解の虞れが少ないのであつて、之が有用にはたらき、從つて又自然淘汰が之を有力にするためには、この掟規が單に大多數の場合に於てのみ一般者の欲求と一致するなら、それで十分であるのです。歷史家は、道德の兩傾向、即ちその一つは個人を一般者に屈從せしめるもの、もう一つは個人に同情し且つ人間同志の幸福を生活目的とするものとの兩者のうちで、後者がいかに絶えず進展し、大きな人間聯盟を益々擴張せしめ且つ複雜ならしめ、大體に於て〃害を少なからしめるやうになるかを私たちに告知するでせう。」

倘ほまたすべての道德性の淵源となつてゐる私たちの種々の感情に關して心理學は多くの分析的研究を遂げるでありませう。なぜ、或る人たちは特に同情の念に富んでゐるのであらうか、他の人たちはすべてを社會秩序の調和並びに一般者の幸福のために犧牲にしやうとするのであらうか、又何故に或るものはその祖國を强大にしようと努めるのであるか、又他のものは自己を完成することを最高の義務と感ずるのであらうか、若くは美の理想に追隨しようとするのであらうか、その外あらゆる道德が惹き起され得る心理的狀態、並びに之の内的及び外的素因、條件等が恐らくは或る程度までやがて明らかにせられるでもありませう。

更に一歩を進めては、人間の之等の心理性が各個人の生理的狀態にどう關係してゐるであらうか、それは固より現在の狀態ばかりではなく、その發育變化の過程が取られた間の環境條件に密接に關聯し、又そのなかには遺傳的要素の存在によつて前時代の祖先の同樣の狀態並びに經過等にも或る關係におかれるものがあると云ふ點で、極めて複雜なものであるには違ひないのですが、併し私たちはそれでも倘ほ之等の關係の或るものか

ら解剖分析的に研究することの可能性を想像することはできるでもありませう。

道徳の科學は即ち生物學、人類及び人種學、生理學、心理學並びに歴史學及びその他の人文科學と密接に相俟つて、始めて人間の道徳性の存在、變化等について私たちに十分の知識を與へることのできるものではありませうけれども、併しこの科學はそれ自身道徳ではないのであつて、又いかにしても然うあるわけにはゆかないのです。「これが道徳に代へられ得ないのは、丁度、消化に關する生理學的研究が結構な賛餐に代へられ得ないのと同樣です。」いかに道徳が科學的に分析されようとも、それによつて人間の行爲は少しでも道徳的に高められることはないでせう。

けれども消化に關する生理學的研究は、どんな食事を私たちが採るべきかについて有力な助言を與へることができるのと同樣に、亦この道徳の科學は私たちがどんな道徳を選ぶべきかに關して最も重要に役立つことは否定することができますまい。なぜなら、之れなしには私たちは道徳に對して遂に盲目的でなければならないからです。カントが道徳の形式說を立てゝ、道徳的に意志すると云ふことは即ち「汝の意志の格率が普遍妥當的にして必然的な法則となるやうに行動せよ」と云ふことより外にはないとなしたのは、道徳なるものの本質的の意味を最も適切に云ひあらはしたものでもありませう。併しながら私たちが一度び道徳的に意志行動しようとして、その具體的內容を求むる場合に於ては、私たちはその道徳性について道徳の科學が示し教へるところのものを審らかに考慮しなくてはならないのではありますまいか。之れなしには道徳は遂に理性的に空虛に終らなくてはなりません。「汝の肉體に滋養なるものを食せよ」と云ふことが食物衛生の本旨であるとしても、滋養なるものの生理學的研究が缺けてゐたなら、私たちはどうして食然的に食物を採るより外に衛生的に食することができるでありませうか。道徳が一つの感情行爲としてより、より進まうとする場合にその科學が必要であることは之れ以上にもはや言葉を要しないでありませう。

六

私は上に道徳の科學の成立とその必要とを述べましたが、之について一つの重要な興味ある問題をこゝに補論しなくてはならないのを感じます。それは即ち科學がその本質上常に對象の必然的關係のみを取り扱ふものであるにも拘らず、道徳は決して一つの必然的現象ではなく却つて人間の自由意志によるもの

であると云ふことに關してです　私は先づ之についてポアンカレの論じた處をその儘記しませう。

「科學は定命論的であり、且つ先天的に然うであります。この要請なしにはそれは成立し得なかつたでもあらうと云ふ理由で、科學はこの要請を立てゝゐるのです。けれども科學は亦後天的にも定命論的です。それはこの公準をそれの成立のための一つの必要條件として先頭においた上で、その歸結に於てこの原理の正常成立に對し嚴格な證明を與へ、そしてその爭論の各は定命論の勝利をもつて終結するのです。恐らく或る調停的な見解も可能であるかも知れません。即ち定命論の勝利は無制限に押し進み、打ち負かし得ないやうな障礙はないとしても、それでも數學者の云ふやうな極限に達して絕對的定命論を結論すると云ふ權利を私たちはもたないと考へることも出來ませう。なぜなら、極限到達に際して定命論は一つの同義異語反復若くは一つの矛盾に陷るかも知れないからです。そしてそれは人間年代を通じて終極的解決への望みなしに研究せられた問題であつて、私はこの許された數分時間で之に觸れることはできません。」

「私たちは併し一つの事實に對立してゐてます。科學は正しく定命論的であるにしろ、若くはさうでないにしろそれが侵入する處のどこにでも、それは定命論に扉を開いてゐるのです、物理學に關する限り、若くは生物學に關してさへも、この事は重大ではありません、意識の領域には觸れずにゐるからです。けれども一度び道德が研究の對象になつて之に連なるやうな日が來るならば、どうでせうか。其場合にはこれも亦定命論の精神に充たされるのであつて、之こそ疑ひもなく道德の滅亡であるでせう。」

「ところで、一旦道德が定命論に屈しなければならない限り、實際にすべては失はれるでありませうか、若くはそれは滅亡することなしに自らを定命論に適應せしめることができるでせうか。疑もなく私たちの世界觀のかやうな深刻な變革も道德に對しては存外影響の尠ないものでもあつたでせう。その場合に刑罰的報復と云ふことはもはや何の權利をももたなかつたであらうことは云ふまでもありません。罪過と云ひ、贖罪と名づけたところのものを、そのとき人は疾病と呼び、又その防止と名づけるでもありませう。人間社會はそれでもその權利を保存することを意識するではありませう。ですが、刑罰の權利ではなくて、却つて全く簡單に自己防衛の權利をです。もつと重要な事柄は、報酬及びその反對の觀念が消滅し、若くは全く變更されなくてはならなかつたであらうと云ふことです。けれども、いゝ人間を愛すると云ふやうことは止みはしますまい。例へば

美であるものをすべて愛するといふやうな風に。又不德な人間を憎惡する權利はもはやもたないでせう。さう云ふ人間は私たちにたかだか嫌厭を感ぜしめるに過ぎないからでもあらうからです。ですが、この權利はやはりどこまでも必要なのでせうか。否、罪惡そのものを憎むことを止めないなら、それで十分なわけです。」

「この意味ですべては以前の通りにゆくでせう。本能はあらゆる世界觀よりも强いのであつて、研究の解剖刀をもつて之を捉むときでさへも、即ち私たちがその力の秘密を見徹したであらうときでさへも、その權力はそれで破られはしなかつたでせう。萬有引力はニウトン以後、より僅か抵抗し難いものとなつたでありませうか。私たちを導く道德力はやはり同樣にその指導を止めないでありませう。」

「フイエーの云ふやうに、若し自由の思想そのものが一つの權力であるならば、この力は、たとへそれが幻想に過ぎないことを科學者が證明したとしても、恐らく弱められはしないでせう。この幻想は何等かの考察によつて破壞せられ得るには餘り强く根づいてゐるのです。最も嚴格な定命論者でもやはり長い間日常の談話のなかで、私が思ふとか、私はかうすべきであるとか云ふのを續けるでせうし、そしてもはや意識もなく又判斷もないところの彼の精神の最も力强い泉からは丁度かやうな感覺が流れ出るでありませう。ですから、自由意志をもつた人間としてでなく行爲することは恐らく不可能であり、哲學者といへども、彼が彼の科學に從事するときの外は、定命論者として考へることはできますまい。」

「それ故に妖怪は人が考へる程怖ろしいものではなく、又確かにそれを恐れずに濟む他の理由もあるのです。即ち、より高い立場から見ればすべては一致するでもありませうし、そしてどんな範圍にも束縛されない心に取つては、自由意志をもつてゐるかのやうに行爲する人間の見解と、自由な自己裁定なるものは存在し得ないと云ふ結論に達する哲學者の見解とは、どちらでもよいやうに思はれるでもありませう。」

以上のポアンカレの考察は極めて興味あるものであると私は思ひます。道德の科學が成立するでもあらう場合に、私たちの意志が果して自由ではなく、定命論的に支配されることが證明せられるであらうかどうか、私たちは誰も豫め之を確言することができないのは、丁度私たちが前世紀に於て今日の原子構造論に於ける量子則の如きものを豫察し得なかつたのと同樣です
たとへ私たちの心理作用の各がそれ以前の心理的過程との間に或る科學的連結をもつことが闡明せられたとしても、それは單

時定命論的であるとしてのみ知られてゐる論理的必然關係の唯一性をどこまでも保持するものであるか、又はこゝに云はれたやうに、その極限に於て科學はもはや定命論を守ることができずに、自由意志に相當する或る範圍の偶然性を何等かの原理的要請に基づいて獲得するかも知れません。併しまた反省すればかやうな偶然性は單に外見的にのみ偶然なのであり、若くは少なくとも之を意志するところの主觀者にとつて自由裁定を意味するものではあつても、事實上、外見的にあらはれない又は主觀的に意識せられ得ない或る何等かの隱れた原因的連結によつて定命論的の運命に變へられるものであるかも知れません。けれどもこの疑問がどう結論せられるかは暫らく措いて、ともかくもその何れにしても自由意志なる意識が私たちに存在することは、既に現在に於て事實である通りに、いつになつても然うであるに違ひありません。そしてポアンカレの鋭く觀察したやうに、たとへ定命論が最後の勝利を得たにしても、道德は尙ほ決して消滅することなく、その存在の權利と價値とを保つでありませう。

七

科學は眞理を闡明すると云ふ點で既にそれ自身絶大な價値をもつてゐるばかりでなく、亦他の人間文化としての道德、宗敎、藝術の發展に關しても必要なものとして示されるのです。即ちそれは人間文化に取つて決して缺くことのできない重要者であつて、從つて科學研究なるものはあらゆる意味に於て奬勵されなければならないのです。併しながら科學者がこの研究に際して取るところのどんな手段行爲もこの科學の重要さのために許さるべきでありませうか。そこに果して道德的に論議せられなくてはならないやうなものが存在しはしないでせうか。

科學がいかに貴重なものであつても、又眞理への愛がいかに尊いものであつても、私たちが人格的存在である以上、之がために他のすべての道德的行爲、例へば仁慈、同情、近隣愛の如きものを悉く犧牲に供するわけにはゆきますまい。

ポアンカレは「こゝにぜひとも考ふべき一つの例を引用」するとして次のやうに云つてゐます。「生理學者は何の躊躇もなく人體解剖を行ひますが、之は多くの老婦人の眼に一種の罪惡と見られ、過去及び未來の科學の功績も之を償ふに足らないとせられるところのものです。この婦人たちの言葉を信じようとしたならば、生物學者は動物に對して慈悲心をもたない故に、人間に對してもやはり殘虐的でなければならなかつたのでせう。その婦人たちは確かにまちがつてゐます。私は少なくとも生物

學者のうちにも甚だ善良な人たちのあるのを知つてゐるのでした。」

「こゝには日常生活にたくさんに存在する義務衝突の一つがあらはれるのです。人間は自分自らを貶し賤めずには研究を斷念するわけにはゆかないのであつて、これは研究とその欲求とがなぜ侵し難いものであるかと云ふ理由であります。それらは併し亦見渡し得ないやうな疾病に關しても、之を癒し若くは少なくとも之を豫防することができるのです。他方に苦痛はまづ厭ふべきものです。私は殊更に死と云はないで苦痛と云ひませう。たとへ下等生物は人間よりも鈍い感覺をもつてゐるとしても、亦私たちの同情に値ひするものであつて、只表面的な觀察だけで之を見遁がし得るに過ぎないのです。ですから生物學者は全く下等な生物に於てさへも、實際に有用であるやうな實驗をしか行つてはならないのです。その外多くは苦痛をできるだけ減ずる手段がありますから、之を用ひる義務をもつわけです。この事に關しては併し研究者の良心に待たなければならないのであつて、法律によるどんな干渉も不當であり、又幾らか笑ふべきでありませう。議會は女子から男子をつくることの外何ごとでも出來ると英國では云ひますが、私はかう云ひたいのです。議會は何ごとでも出來るが、只科學上の事項に一定の柵をおいてはならないと。實際、或る何かの實驗が研究に對していつ有用と見做さるべきかを判斷するための基本律を立て得られるやうな裁判所は決してありません。」

法律上のことは論外として、この問題は道德的には極めて機微に觸れるところのものであると私は思ひます。生物學者が研究に有用であるのは解剖そのものであつて、その他の何ものではないとしても、彼はその機會を得るために敢て生物を殺し、若くは生きながら之を傷けなくてはならないのです。即ちその有用な實驗に伴ふところの必然的な若くは之を避けるに甚だ不便な、併し彼の希望するところではないやうなあらゆる非道德的な結果に關しては、彼は最も道德的にでき得る限りの手段を盡さなくてはならないこと勿論です。人間そのものを對象として行ふ生理學又は心理學的實驗に於ては更に一層の愼重さをもつて豫め之を考慮しなくてはなりません。只人間の場合に於ては、その實驗に供せられる自覺若くは希望によつて自らを科學的に奉仕せしめると云ふ諒解のもとに、よろこんで苦痛を忍ぶことができます。かやうな際に於ても尚ほ科學者はそこに豫期されなかつたでもあらう結果の起ることに對し、常に最も注意ぶかく虞れ戒めなければならないのでせう。私は科學者がその研究に對する當然の義務として之等の道德的思慮を致す必要の

あることを深く感じます。

八

私は既に科學研究の道德性に關してポアンカレの言葉を引用しながら之を說明しました。それは道德的に甚だ好ましい種々の効果を私たちに持ち來すものではありますが、併し他面に於てそれは亦有害な影響によつて附隨せられ得ることを忘れてはなりません。

科學研究のために科學者は異常な努力を必要となし、殆どその全生涯を費さなくてはならないことは、他の專門學と共に漸次著しくなつて來ました。彼は之がために多く他を顧みる遑のないやうに餘儀なくせられます。科學研究への熱中それ自身は決して咎むべきことではありませんが、併し彼は、自分が實驗裝置の一部をなす高尙な器械ではなくて、亦一人の人間であることを自覺しなくてはならないのでした。例へば大地震の報告に接して、彼は地震波の方向や振幅以外の何ものをも考へることなく、更にまた之が地震學の或る未知の法則をも私たちに示すことが出來たであらうなら、彼はこの出來事を尙ほ一つの幸福と見ることができたでもありませう。けれども彼は科學者としてではなく、人間としてそれ以前に被害者の苦難を想はなくてはならなかつたのです。

科學者の最も陷り易い弊害はその研究對象の科學的分析にのみ熱中して、自他の人間性を無視することにあります。私はポアンカレの論文に次の言葉を見出すことができます。「科學は感情を涸渇せしめ、私たちを物質に結びつけ、あらゆる尊い感情の唯一の源泉たるすべての詩を滅ぼすものであると主張する人たちがあります。自らを研究に捧げた魂は衰頽し、その誇らしい活氣や、しなやかな氣分や、感受性を悉く失つてしまふとも云ひます。だが、それを私は信じません。私自身は丁度この反對を主張しましたが、併しこの意見は甚だ擴がつてゐるので、何かしらそれに對する根據が存在しなくてはならない程です。同じ食物もすべての人に適するわけにゆかないのが丁度これで判りませう。」

ポアンカレと同樣に、私も亦固よりこゝに引かれた主張者の言葉が科學研究に與へられるには甚だ不當なものであることを强調したいのですが、併し同時に多くの科學者のうちにかやうな弊に陷るもののある事實が世人に科學に對するこの誤解を抱かしめた所以であることを私は認めないわけにゆきません。若し科學的認識を普遍ならしめるために科學は私たち人間の個性的感覺から離脱することに努め、又之が精確嚴正を期するため

に論理的過程が少しでも忽がせにせられてはならないのです。嚴に科學の方法のかやうな性質は之に從事する人たちをして、感情の混入を警戒せしめ、すべての判斷に對して理性的に最も冷靜ならしめる必要を起させます。科學者のかやうに習慣づけられることが一方で彼に科學研究以外の場合にまで感情の抑壓を結果することのあるのは必ずしも無理でないかも知れません。けれどもそこに彼は再び自分が一人の人間であることを忘れてゐるのです。科學研究がいかに彼れの天職であらうとも彼自身が一つの器械でない限りに於て、私たちは科學者にどんな場合に於ても人間性の無視を許容するわけにはゆきません。

上に說いたやうな科學者の傾向は亦やゝもすれば彼の心を「物質に結び付ける」ことがないではありません。この事は特にその研究が物質を對象とする場合に於て起り易いのであつて、又かやうな物質科學の著しい發達が人間の日常生活に非常な恩惠を齎ち來して謂はゆる物質的文明の華麗な狀態をそこに現ぜしめたことと相待つて、科學が物質萬能の讃美を結果するかのやうな誤解を生ぜしめました。この思想は固より誤まつたものであり、科學の大なる所以は即ち私たちの精神能力たる理性の作用がこの科學的認識に於てかくも絕妙にあらはれることを示すものである點に於て、決しくそれが物質に終始するものでないのを悟ることができるでせう。

なほまた科學者が論理的理性にのみ走つて、感情に依存する藝術や宗敎の如きものを全く無視するに至るでもあらうならば　それはやはり一つの悲むべき人格缺陷であると云はなければなりますまい。人間の一生を費してもなほ十分であるとは云はれない科學研究の外に、更に私たちは藝術宗敎などに立ち入ることを必要とすると、私はこゝで云ふのでは決してありません。之等のものに對して、科學者といへども　少なくとも正しい理解をもたなくてはならないと私は主張するのです。さうでなかつたなら　彼は自らが從事する科學研究の價値をさへ本當に知り味ふことも恐らくできなかつたでありませう。科學の與へる世界觀がいかに美であり、又いかに眞であり　且つ聖でさへあるかをどうして彼は悟ることができませうか。徒らに實驗室のなかに座して、すべての窓を閉ぢることは彼をして決して一人の人間たらしめる所以ではないのです。そこに道德の欠けることも亦當然でなければなりません。

多くの科學者がかやうな人間性無視の弊害に墮しようとする間に、ひとり科學研究に附隨して屢々あらはれるところの人間的欲求は即ちその名譽欲であります。少なくとも純正科學の範圍に於ては利欲を求めても、之を得ることは殆ど不可能です。

只名譽欲に至りては、往々にして之を充たすために科學者の間に强ひて創見の爭ひが起されるのを見ないでもありません。名譽欲は恐らく種々の本能欲のうちで最も高尚なものに屬するのであり、又仰も人間の本能欲は單にそれ自身では善惡の埒外に立つべきものであるばかりでなく、更に眞に創見に係るものに對して之を主張することは當然の權利でもありませうけれども、併し之がために相互に論爭を醸すことは、少くともその當事者にとつて譽むべき處ではないと思はれます。偉大な發見を遂げた人たちに名譽と感謝とが歸せらるべきことは至當であります。併しながらそれは發見者自身が要求すべきものではありますまい。科學者が自ら希求してもよい唯一の精神的報酬は、眞理の發見に對する至大な歡喜そのものです。アルキメデスは彼の名に於て私たちに知られてゐる原理を偶々入浴中に發見して、湯槽からとび出しながら裸體の儘「我れ之を發見せり」と叫んだと傳へられてゐますが、この歡喜は恐らく彼にとつて、今日までに彼に與へられたあらゆる名譽よりも、より尊いものであると云つてもよいでせう。

科學者はその研究に際して特に愼重周密なることをたつとぶのであります。従つてかやうな研究の結果として得られた法則に對し、何ごとにも讓らない十分の確心をもつことができるわけです。けれども多くの法則は之が成立すべき一定の範圍と條件とを備へてゐるのであつて、之を超えて尙ほ適用せられるかどうかは更に精細な研究を經なければならないわけです。ところが一方で私たちの甚だ有利的に採用し慣れてゐる研究方法は、私たちがまだ解釋することのできない現象に接した場合に、之に類似すると思はれる現象に於て成り立つ既知の法則をこゝに當て篏めて之を類推することであります。實際多くの場合にこの類推法が成功せることを私たちは經驗してゐるのです。この事情は科學者をして屢々既知の法則をその固有な成立範圍を超えて、より廣く適用しようとする早計に陷らせました。科學者の世界觀が或る意味に於て偏狹に失する例の多いことは之に依るのでありませう。

かやうにして物質に關して比較的精細に知られた種々の法則を科學者はその儘生命現象や特殊の精神現象に關してまで成立つでもあらうことを想像します。單なる想像を私は咎めようとするわけではありませんが、之を一つの科學的理論とするにはそこに多少の證明を必要とするのでありませう。之れなしにはそれが物質偏重に失するといふ非難も免がれないわけです。すべての生理現象を物質法則に從ふとする如き理論は之に屬すると云はなければなりません。

古來、科學者と宗教者との間に多くの爭論を醸した靈魂問題の如きその最も著しいものであります。固より科學によつて確實に證明せられた事柄は誰しも否定することのできないものであつて、いかなる宗教もその立場から之を云爲することはできませんが、又一方に科學はその對象以外のものについて何を要求するわけにもにゆかず、從つて宗教的信仰に立ち入ることはゆるされません。只私は科學と宗教とが等しく人間精神の所產である以上、科學的に陶冶せられた頭腦に適應する宗教的信仰がなくてはならないと思ふのです。

ポアンカレの言葉を私はもう一度引用しませう。「眞の科學は早計な一般化や純粹に想像的な演繹に對して自らを恐れるものです。」「眞に經驗的な精神を吹きこまれてゐる科學に對して、道德は何も恐れることはありません。かやうな科學は既に存在せるものを尊重し、又新奇の刺戟をもつやうなあらゆるものに容易く眼を眩ぜしめるところの科學的衒學主義に反抗するのです。研究は只一歩一歩しか進みはしませんが、それでもいつも同じ方向に、且ついつも正しい方向に進みます。半可通の科學に抵抗する最上の防禦は眞の科學の進歩といふことです。」

最後に殘された問題、即ち科學が非倫理的行爲の手段として用ひられることに關しては、私はもはや多くを論ずる必要はありますまい。なぜなら、いかなる良藥も之を誤用し若くは惡用すれば毒物となることはできるのであつて、しかも之は決してその藥の存在を呪ふ理由とはすることができないのは、既に餘りに明らかであるからです。

科學の齎らした物質文明は私たちに偉大なる恩惠を與へたと同時に、又種々の豫期しない弊害をも結果しました。あらゆる機械器具の發明、交通運輸の發達、乃至は科學的文明そのものがいかに私たちの生活を繁雜逼迫ならしめ、若くは經濟的爭鬪のなかに混亂せしめ、沈靜なるべき精神的生活を沮害してゐるかは云ふまでもないことであり、又武力的戰爭を大規模に且つ殘忍ならしめ、多くの犯罪手段をも巧妙ならしめるが如き、屢々この文明に對する深刻なる疑問と呪詛とをさへ懷かしめるやうになりました。

併しながら之等の弊害のうちで、戰爭及び犯罪に關する如きものは科學の存否如何に拘はらずそれ自身非なる人間的行爲であることは勿論であつて、科學が必ずしも之を助成するのであるとは云ふことはできません。只その手段として科學が惡用せられることに對して私たちが悲しまねばならない所以は、之等

の非道德的行爲を敢てする人たちの存在と、彼等に對しても科學が解放せられてゐると云ふことです。道德的に論ずれば、恐らく進歩せる科學的知識は人格的により高尙な人間にのみ委ねらるべきものであること、丁度醫學的敎養のない人たちに藥物の濫りな使用が禁ぜられなければならないのや、未熟な子供に弊害の嫌ある讀書が戒められなければならないのと同樣であると思はれます。即ち科學それ自身は、より敎養ある、そして道德的により高い階段に於る人間的社會に於て始めてその本當の光輝ある價値を發揮することができるのであつて、この意味で科學の進歩は亦道德の進歩と相伴はなくてはならないものであることを悟らなければなりません。

物質文明が私たちの精神生活に對して必ずしも幸福なものでないと云ふ批難は相當の理由をもつと思ひます。併し之に關しては私たちは科學の本質についてもつと深く考へなければなりません。かやうな文明を由來する科學の應用的方面は實際人間にとつて切實に要望せられたところのものであり、この要望によつて純粹の科學そのものの研究も甚だ多く刺戟せられ奬勵せられて來た點で、云はゞ科學の恩人に比せられるものではありますけれども、併し科學の純粹の價値は、たとへこのやうな應用が全然生れなかつたとしても、少しも減損せられるものでないことは、こゝに特に詳しく說明するに及びますまい。即ち物質文明の弊を科學そのものに歸するのはこの意味に於て抑も誤つた議論でなければなりません。そればかりでなく他方に於て、かやうな弊害が何故に存立するかを考へるならば、科學のためにその寃をそゝぐに餘りあるであらうと思はれます。

若し文明の弊として數へ擧げられるところのものを私たちが一々審かに考察する餘裕をもつであらうならば、恐らく私たちはそこに常に自然の調和の缺除を見出すことができたでもありませう。私たちは一つの科學的應用が仕遂げられた場合に、例へば一つの機械が新たに發明せられた場合に、そこに從來得られなかつた或る便宜が感ぜられるならば、直ちにその恩惠に與からうとすることに餘りに急であつて、殆どその他の一切を考慮する遑をもたないのです。之は果して正當な行爲でありませうか。一つの他方面の例を引くことがゆるされるならば、私はあなたがたに尋ねませう。若し或る人があなたがたに大金を與へると云つたならば、若くはあなたがたが或る場處に遺失された大金を偶然に拾つたならば、あなたがたは之を受け取る當然の權利があるものとして直ぐに之を自分に收め、その大金がどんな由來をもつか、又はなぜ自分に與へられるやうになつたかと云ふやうな他の事情を少しも考慮する遑をつくらないことは

果して適切でありませうか。私は之と同様にすべての科學應用に對しても單にその便宜に眩惑されることなく、之に關聯して生ずるでもあらうところの種々の事情を愼重に考究する必要のあることを思ふのです。勿論この場合には、かやうな考究が果された後でなければ應用の使途に赴いてはならないと云ふのではありません。けれどもその以前に於て應用が偶々私たちの生活に豫期されない弊害を持ち來したとしても、之によつてその科學應用そのものを責めてはならないと私は云はうとするのです。云ひ換へれば、科學應用による物質文明の弊害なるものは之が使用に對する不十分な考究によつて生れたのであつて、之は恐らく再び科學應用によつて救はるべきものであるでせう。私たちはこゝに亦科學のより完全な發展を期望するより外に途をもたないのです。

科學が無限の發展を續ける途上にあつては、この種の弊害は恐らく絶えることがないばかりでなく、今日以後尚ほ一層増大するでもあらうと思はれないでもありません。それにも拘らず私たちに取つては物質文明の發達は望ましいことであるにちがいないと私は信じます。この科學應用の重要なる産物によつて科學そのものが亦より以上の完全さに進むことのできるのは、特に實驗科學者の痛切に感ずるところでありませう。その他の一切の文化もやはり之に伴つて進むことができるのです。そして之が人間の歩むべき唯一の方向でなければならないことは確かです。之を否定するものは人間への反逆者であり、若くは人間の永遠への歩みに伍することのできない怯弱者であるとしないわけにゆきません。併しながら、私は同時に、この物質文明の發達が、より以上の精神的文化の發展によつて必ず伴はれなくてはならないことを強要するのです。道徳も、純粋の科學それ自身も亦この後者に屬するものであつて、之が前者の弊害を救ふことに力あるでありませう。そして之れなしには物質文明の價値は恐らく存在しなかつたに相違ないからです。

私は最後に、科學の或る特殊な研究が國際的共同の必要さを感ぜしめる點で、引いて國際道徳の上にも多少の好影響をもつであらうことを指摘しておきませう。そしてこの長い一篇の結論を私たちの尊敬するポアンカレの言葉に譲つて筆を擱きましよう。

「狭義での科學的道徳なるものは存在しないし、又決してそれが成立することはないでせう。けれども科學は道徳に或る間接な補助を與へることはできます。只最も深い意味での科學だけが道徳に入用であり得るのであつて、半可通の科學は危險であります。一方では亦科學のみでは十分であるわけにゆきませ

ん。なぜなら、科學は單に人間の一部分を理解するに過ぎないものでありますし、又よしそれがすべてを理解すると見るにしても、單に全く限られた一方面のすべてなのであるからです。最後に又少しの科學的素養をもたない人のあることをも考へなければなりません。より以上の恐怖も並びに期望も私には併し同樣に根據のないやうに思はれます。科學と道德とは、それらが進歩するに應じて、お互に亦相待つて適合するのでありませう。」

凶作時に於ける食糧政策と國民各自の覺悟

農村産業化の必要

清澤洌

一　凶年を喜ぶ階級

凶作と聞いて喜ぶ階級が、日本に少なくとも二つある。一つは政黨屋であつて、他は百姓である。

政治家が喜ぶのは（恐らくは無意識的に）お題目の種が盡きないからである。『農村振興』とか『産業立國』とか、まるで六根清浄の山伏かなにかのやうな文句をさへ繰り返して居れば、それで國民も承知し、政敵も『いゝ看板をとりやがつたな』ぐらゐで感心してゐる。その内に『天氣快晴』『氣候順良』と云つたやうな政綱が飛び出すかも知れぬが、どうせお題目にするなら語呂のいゝ方がいゝ。

犬養木堂が政友會に投じたのは、政友會との主張が合致したからだといふ。如何にも田中總裁は、その就任式の時に、一二の號令でもかけるやうな調子で『産業立國』などと云つてゐた。木堂の『産業立國』は十何年來の看板だから、これと意氣の合つたといふ政友會は、どんな立派な具體案があるかと見てゐると、二三日前の新聞では、政務調査會の意嚮として、之れから愈々富源の調査に取りかゝるのだとある。その政務調査會の幹部には、木堂の連れつ子も居る筈だから、國民黨以來の『産業立國』も要するに中味無しの懸け聲だけで、政黨の政綱

などといふものは、大きな弊さへしてゐれば、それで結構世の中が渡れるものだといふことを知るには充分だ。凶年にでもなれば又『農村振興』といふ文句が光つて來る。どうせお題目は澤山並べた方が有難い。凶年出現をも喜ぼうといふもの。

農家が凶年を喜ぶのは（これは多くの場合意識的に）金が儲かるからである。凶年が續いて農村から佐倉宗五郎や、中菅嘉助を出したのは昔の事、今では『凶年』といふ聲だけでも米價は五割も六割も飛びあがつてしまふ。これに對し凶年による減收は精々一割か二割に過ぎないのであるから、今時の智慧のある農業家は、産土樣に『五穀が實りますやうに』と禱る代りに『度のいゝ凶年でありますやうに』と、お願ひしてゐるかも知れぬ。この事は數字で見れば直ぐ判る。たとへば大正四年は米の收穫高が、五千八百四十萬石で、この總價格が八億二千六百六十萬圓であつたのが、その翌年の大正五年には、收穫が減じて五千四百五十七萬石、即ち四百萬石からの減收であるのに、價格は十一億四百萬圓に上り、略三億圓からの餘分の金が農家の手に落ちてゐる。また大正十年は收穫量が五千五百十八萬石といふ平作で、この値段が二十億一千八百萬圓であつたが、その翌年の大正十一年は大豐作で、六千〇六十九萬石獲れたのに、この價格は十六億二千百萬圓に落ちてゐる。即ち收穫に於て五百五十萬石を増し、一般社會が『豐年ぢや萬作ぢや』などと手拍子で喜んで居る時に、農家の懐に這入つた紙幣束はといふと、四億圓近くの減少を來たして居る有樣なのだ。（農商務統計表による）

政治家や農業家は、凶年を歡迎すべき理由があるとしても、一般の國民は困るだらうといふと、豈それ然らんやで、東北の凶年は九州の米で間に合ひ、日本全體の凶年は、西貢の米で埋め合せがつく。需要の窪みのあるところには、世界の涯からでも供給の波が押し寄せて來る。われ等は凶年の故に、恐らく米一粒の食ひはぐれもありはしまい。

凶年の恐ろしさと、凶年から得る教訓は、凶年それ自身の外にある。

二　一人歩きの出來ぬ工業

お題目を集めることを好きな政黨も、『産業立國』といつて、『農業立國』とは云はない。そこいらの古道具屋のやうに、古いものなら何でも一手に引き受けたがる床次さんでさへ、農業原瑞穂國を楯に、飽くまで農業國で押し通そうとは申されない。土地が狭まくつて、人がかう多くつては、『農業では』と躊躇するのである。

いかにも農業は決して割のいゝ商賣ではない。內閣統計局の統計でみると、農家が諸種の農產物から得る一年の收入は一人頭平均四十五圓五十錢(大正十一度)で、一家が五人あるとすると一家一年の收入は二百二十七圓五十錢にしかならない。尤も此外副業からの收入はあるけれども、彼等の生活が如何に低いかは大體分る。併し乍らかう農業の現狀を悲觀する人々でも、この悲慘な農業によつてこそ、日本の國運が支えられて居るといふ事實に氣がつかない者が多い。即ち世界の一等國といふ身に不似合な看板を荷負つてゐるものは、工業でもなければ、無論軍備でもない。それは農業である。試みにこれを數字に見るがいゝ。日本の產業といへば組織からいつても、資本から云つても、纖維工業—主に紡績工業に止めをさすが、之等に要する原料は棉花だけで一年に約六億圓である。この輸入に對し之れから出來る製品を幾ら輸出するかといふと一年約四億圓に過ぎない。即ち輸入した原料に加工する結果、僅に二倍位の値段にはならうが、それでも輸入原料額の三分の二しか輸出できぬのが目下の現狀である。併し綿工業は流石にまだいゝ。鐵工業其他の產業になると、政府の厚い保護を受けながら食ひ込んで計り居る。之等の工業で食ひ込んで居る穴を、埋めてゐるのが、農業家の汗の產物たる生絲である。日本の輸出總額は十八億圓(大正十三年)であるが、此內七億圓までは生絲なのだ。つまり日本の工業は、まだ一人步きが出來ない。體裁のいゝスーパーストラクチュアーではあるけれども、この殿堂の基礎は依然として、貧弱な農業にある。もつと詳しくいへば生絲といふものが、たつた一つ足で大きな日本の屋台骨の勝手許を引き受けて居るといふことなのである。或ひは『工業といふものは單に一國の輸出機關ではない、農家が生絲を輸出できるといふことが、既に工業の恩惠にもよる次第であつて、農工をさう區別するのは間違ひだ』といふ者があるかも知れない。かういふ人は、日本の工業が、自分で使用する機械一つを自國で造り得るかどうかを考へて見ると、日本工業の有する位置が、やゝ明瞭に頭に映つて來ると思ふ。

……かう工業をけなして、農業や生絲の提灯を持つのは、何も私が信州の百姓の子に生れたからではない。これだけ說明しないと、日本に於ける農業の位置、從つて『凶年』が意味する重大さを諒解されない恐れがあるからである。若し產業(インダストリー)が繁榮して居つて、國の基礎がその上にあれば、農產物の凶年は必らずしも、さう恐れるに足らない。產業で賣つた百圓は、穀物を買ふ百圓に通用する。始めに書いたやうに需要のあるところ供給は何處からでも押しかけて來る。併し一國

の產業が全く振はず「農業」といふ肩を借りなければ、一人歩きもできない狀態にある際に、その農業に凶年が來たとすれば、問題のシリアスネスは言はずして明らかではないか。

三　價格の變動と米穀の事實

世の中が不景氣で、國民が火の車のやうになつて居る時に、『農務省獨立』と云ひ出すと、誰もかれもが贊成した。『農村振興』といふ夢のやうな看板だけさへ掲げてゐれば、かつて其內容なり、具體案なりを聞かうともしない日本人の特性が、農林省を獨立することにより、農村問題が解決でもすると思つて居るのであらう。そしてこの大切な農林省へは岡崎といふ選擧事務に明るい人が飛び込んで、『私は何にも知らないが、何れ研究して……』と大臣就任挨拶をした。これから研究する人を、その長官に持つて來て、それでこの大問題解決の任に當らせやうとするところに日本政治界の面目が見られる。けれども『農務省獨立』に殆んど何等の反對がなかつた一事にも、私は國民がこの問題に對して、如何に焦慮して居るかを觀取し得たのである。

問題は自から二つに分れる。當面の問題と根本的な問題である。

當面の問題は專ら價格の問題に歸着する。私は此文の始めに於て凶年が必らずしも、農家に取つて不幸でない計りでなく、收入の增加に歸すると述べて、その實例を引いた。けれども生產が多きが故に損をし、生產が少なくて却つて得をするといふ事實その事に、重大な缺陷が潛むのは明らかである。資本主義制度の下に於て、或點までは此事も避くべからざるものではあるけれども、併しそれが我等の生活の基礎をなす食糧問題であり、しかもかうした不合理な事實が餘りに極端なるに於て、われ等はまづ此點を顧みねばならぬ。

歐米の主食穀物は小麥である。試みにこの小麥の價格と、わが國の米のそれとを比較してみると、世界戰爭の前八ケ年、即ち明治卅九年から大正二年までに、英國の小麥相場の年平均の開きは三割に過ぎない。然るに同期間の我が米價はといふと、東京の年平均正米相場で、最高最低の差は六割を超えて居る。世界戰爭後、この傾向は益々甚だしくて、大正三年から戰後の大正十年までを見ると、英國の小麥の價格は年平均で、最低の年に對し、最高の年は十三割の騰貴を示してゐて、非常な變動であるが、之に對しわが國の東京正米は同じ期間に、平均價格で二十五割の騰貴になつて居る。即ち戰前も戰時中も英國の小麥價格に比し二倍の變動があつたわけである。しかもこれは一年

平均價格を、他の年のそれと比較したから、この程度に止つてゐるのだが、實際に現はれた東京正米相場の最安値と、最高値とを比較してみると

最安値　十圓八十錢　大正四年九月
最高値　五十五圓二十錢　大正九年一月

と其差四十一割餘の亂暴な動き方をして居るのである。

この價格の變動が如何に生産者と消費者を脅かして居るかは申すまでもない。生産者は一定の豫算を以て、その生業に從事する能はず、一方消費者の生活は少しも安定しない。國民生活に必須の米を中心にする農業は、全く一個の投機事業と化し去る外はない。高ければ高く、安ければ安いのならば、方策は自づから立つ。堪へ難いのは價格に殆んど標準といふものがないことである。

これを救はんがためには、議論は既に論じ盡された程の古い問題であるけれども、米穀專賣法、即ち米穀の配給について國家が一手に之を管理する制度を立つることが、最も有効なる方策のやうである。英國においても最近食糧問題が喧しくなつて食糧委員會を設立し、討議研究されたが、その報告が五月八日に發表された。報告書は三つあつて、一つは多數報告、二つは少數報告であるが、多數報告には食糧の價格の安定を監督するために食糧局（フードカンシル）を設けることを勸告してある。他の二つの少數報告は、多數案を中心に左右兩翼に分れるのであつて、一は食糧局の設立が國家社會主義に一歩を進めるものであるとて反對し、他は政府が糧食の供給と價格について公然責任を負ふべきことを主張する純社會主義的方策である。何れにしても英國人の保守個人の自由尊重の國民的性格を以てして、食糧管理の方向に赴きつゝあるを知るべきである。

けれども私のこの文を草する任務は、米穀專賣法案の細目を研究するためではない。それには自づから人がある。私は更に根本的な問題に突き進んで、それから更に米穀專賣制度をも顧みなければならない。

四　人間が增して土地は增さぬ

多くは口を開けば日本は人口過剩だといふ。總べての行詰り、總べての難問題を、悉くこの『人口過剩』に蔽ひ被せんとしてしまふ。

如何にも人口は過剩である。大正九年の國勢調査によると、一平方里の人口密度は二千二百二十五人で、ベルヂュムとオランダと共に最大人口密度を持つて居る。英國よりは二割多く、フランスの約二倍、北米合衆國の約十二倍半といふ繁昌振りで

ある。

この人口を有する日本が、また農耕に適する平原耕地や、牧場となすべき草原傾斜地が極めて少ないと來て居る。試みに日本とやゝ匹敵する英、佛、獨三國と比較すると左のやうになる

日英獨佛土地利用面積比較

	國土總面積	農耕地 面積	農耕地 割合	牧場及び牧草地 面積	牧場及び牧草地 割合
日本	千ヘクタール 三八、五四一	六、〇三〇	割 一・五七	千ヘクタール 三、五五五	割 〇・九一
英國	三〇、九九〇	七、五一二	二・四三	一七、五九五	五・六八
ドイツ	五四、一一〇	二五、五五三	四・七二	八、五八四	一・五九
フランス	五三、九五三	二一、三三五	四・〇三	一〇、〇五五	一・九〇

備考（一）一ヘクタールは我約一町歩に當る
（二）割合とは國土總面積に對する割合である
（三）調査年度は日本は一九一八年、英國一九一七年、ドイツ一九一三年、フランス一九一六年度の調査にかゝる。

即ち右の表で分るやうに日本の國土總面積に對する農耕地の割合は、僅かに一割五分七厘に過ぎず、ドイツが國土總面積の四割七分二厘の農耕地を有つて居るのに比すると、その三分の一にも充たない。國土の大半が牧場または牧草地で占められて居る英國すら、なほ國土總面積の二割四分二厘が農耕地で、日本に比して六割方多い。

併し問題は單に人口の密度において世界一高い日本が、その耕作地の比例において世界一貧弱だといふ點だけではない。現に毎年六十萬乃至七十萬も增加しつゝある人口を養ふためには、毎年約三萬九千町歩の水田を開拓して行かねば間に合はぬ勘定であるのに、食糧局新設だ、開墾助成法だと騷いで、漸く一ケ年一萬三四千町歩内外の擴張しか出來て居らぬ、即ち生み出して居る食糧は所要の數量の三分の一だけで、他の三分の二は毎年食ひ込んで行つて居る勘定であつて、これ等の不足額が積つて毎年の米輸入額約三百萬石といふ數字になつて現はれるのだ。

五　人口增加恐るゝに足らず

人口が多くて、土地が狹い事、これは我等の力でどうにもならない冷かな事實だ。今後生れて來る者は制限するにしても（そして私は適當の產兒制限は已むを得ない方策だと思ふ）現に在るものは生きねばならぬ。それにはどうするか。

われ等はまづ日本人が普通抱く人口問題に對する迷信から醒

めねばならぬ。一定の土地に對し最大數の制度は無論あるけれども、併し日本に於ける人口が最早各自幸福に住み得ない程度であるかどうかは、尙ほ吟味の餘地がある。クロポトキンは『Fields, Factories and Workshops』において、餘りに過重視される人口問題を論じて

今日の實驗は明日の實行である。我等が科學の力によつて開發される富源を考へる時に、與へられた一定の土地から作り出すもので、最大限何人の人間を養ひ得るか、また如何なる種類の穀物を有利に生產し得るかは、現今に於て全く豫見することは出來ぬ。日々限度は廣げられ、毎日新しく廣い水平線は開かれつゝある。今に於て一平方マイルに六百人は安樂に生活が出來、また現に用ひられつゝある耕作法に依り一千英町(エーカー)には一千人の人が、過度の勞働をせず、その地域から得る野菜、家畜の肉、生絲、皮等によつて立派に生活出來ることを斷言する。

といつてゐる。彼が之を書いたのは約三十五年以前であつて、日本が今現に有する人口は一平方マイルに三百九十三名であるから、彼の勸告に從つて農業を經營して居れば、人口問題も今程騷がなくてもいゝといふことにもなる。

かれは此理由として『人口稠密は、人間がその勞働による生產力を增す必須の條件である。高率なる生產的勞働は、人間が少なくて、廣い土地に分散して居る以上は不可能であり、從つて、より高い文明のために協力することは出來ないのである。』とて、協力による生產が却つて良結果なるを說いて居る。

けれども常に人間が多ければ、それだけ生產が多いといふのでは無論ない。この點についてハーバート大學敎授カーバーの說は最も明快である。同敎授はその The Distribution of Wealth に說いていふ——

報酬漸減の法則によつて、かういふ結論が得られる。文明を有し產業的技術を有する、ある國家に於て、若し勞力の供給が、人口の增加によつて增加しながら、しかも土地と資本が同じである場合には、或は又勞力の供給が土地と資本のそれよりも早くある場合には、一人頭の富の平均生產は減ずる譯である。……併し乍ら若し勞働力の增加と共に、生產の方法を改善し、資本及び土地（交通機關の發達により）の供給を增加するならば、勞働者の一人頭の富の生產は增す譯であつて、これは報酬漸減の法則に合致するのは勿論である。

カーバー敎授はかう論じて、人口の密度が深くなれば從つて文明と生產的技術が停止するとの說を駁し、却つて西洋諸國の如く人口の稠密なる事が進步を刺激するとて、（一）產業的組織

ある。

この人口を有する日本が、また農耕に適する平原耕地や、牧場となすべき草原傾斜地が極めて少ないと來て居る。試みに日本とやゝ匹敵する英、佛、獨三國と比較すると左のやうになる

日英獨佛土地利用面積比較

	國土總面積	農耕地 面積	農耕地 割合	牧場及び牧草地 面積	牧場及び牧草地 割合
日本	三八、五四一（千ヘクタール）	六、〇三〇	一・五七（割）	三、五三五（千ヘクタール）	〇・九一（割）
英國	二〇、九九〇	七、五二二	二・四三	一七、五九五	五・六八
ドイツ	五四、一一〇	二五、五三三	四・七二	八、五八四	一・五九
フランス	五三、九五三	二一、三三五	四・〇三	一〇、〇五五	一・九〇

備考（一）一ヘクターは我約一町歩に當る
（二）割合とは國土總面積に對する割合である
（三）調査年度は日本は一九一八年、英國一九一七年、ドイツ一九一三年、フランス一九一六年度の調査にかゝる。

即ち右の表で分るやうに日本の國土總面積に對する農耕地の割合は、僅かに一割五分七厘に過ぎず、ドイツが國土總面積の四割七分二厘の農耕地を有つて居るのに比すると、その三分の一にも充たない。國土の大半が牧場または牧草地で占められて居る英國すら、なほ國土總面積の二割四分二厘が農耕地で、日本に比して六割方多い。

併し問題は單に人口の密度において世界一高い日本が、その耕作地の比例において世界一貧弱だといふ點だけではない。現に毎年六十萬乃至七十萬も増加しつゝある人口を養（やしな）ふためには、毎年約三萬九千町歩の水田を開拓して行かねば間に合はぬ勘定であるのに、食糧局新設だ、開墾助成法だと騒いで、漸く一ケ年一萬三四千町歩内外の擴張しか出來て居らぬ。即ち生み出して居る食糧は所要の數量の三分の一だけで、他の三分の二は毎年食ひ込んで行つて居る勘定であつて、これ等の不足額が積つて毎年の米輸入額約三百萬石といふ數字になつて現はれるのだ。

五　人口増加恐るゝに足らず

人口が多くて、土地が狹い事、これは我等の力でどうにもならない冷かな事實（コールド・ファクト）だ。今後生れて來る者は制限するにしても（そして私は適當の産兒制限は已むを得ない方策だと思ふ）現に在るものは生きねばならぬ。それにはどうするか。

われ等はまづ日本人が普通抱く人口問題に對する迷信から醒

めねばならぬ。一定の土地に對し最大數の制度は無論あるけれども、併し日本に於ける人口が最早各自幸福に住み得ない程度であるかどうかは、尙ほ吟味の餘地がある。クロポトキンは『Fields, Factories and Workshops』において、餘りに過重視される人口問題を論じて

今日の實驗は明日の實行である。我等が科學の力によつて開發される富源を考へる時に、與へられた一定の土地から作り出すもので、最大限何人の人間を養ひ得るか、また如何なる種類の穀物を有利に生産し得るかは、現今に於て全く豫見することは出來ぬ。日々限度は廣げられ、毎日新しく廣い水平線は開かれつゝある。今に於て一平方マイルに六百人は安樂に生活が出來、また現に用ひられつゝある耕作法に依り一千英町（エーカー）には一千人の人が、過度の勞働をせず、その地域から得る野菜、家畜の肉、生絲、皮等によつて立派に生活出來ることを斷言する。

といつてゐる。彼が之を書いたのは約三十五年以前であつて、日本が今現に有する人口は一平方マイルに三百九十三名であるから、彼の勸告に從つて農業を經營して居れば、人口問題も今程騷がなくてもいゝといふことにもなる。

かれは此理由として『人口稠密は、人間がその勞働による生産力を增す必須の條件である。高率なる生産的勞働は、人間が少なくて、廣い土地に分散して居る以上は不可能であり、從つて、より高い文明のために協力することは出來ないのである。』とて、協力による生産が却つて良結果なるを說いて居る。

けれども常に人間が多ければ、それだけ生産が多いといふのでは無論ない。この點についてハーバート大學教授カーバーの說は最も明快である。同教授はその The Distribution of Wealth に說いていふ——

報酬漸減の法則によつて、かういふ結論が得られる。文明を有し産業的技術を有する、ある國家に於て、若し勞力の供給が、人口の增加によつて增加しながら、しかも土地と資本が同じである場合には、或は又勞力の供給が土地と資本のそれよりも早くある場合には、一人頭の富の平均生産は減ずる譯である。……併し乍ら若し勞働力の增加と共に、生産の方法を改善し、資本及び土地（交通機關の發達により）の供給を增加するならば、勞働者の一人頭の富の生産は增す譯であつて、これは報酬漸減の法則に合致するのは勿論である。

カーバー教授はかう論じて、人口の密度が深くなれば從つて文明と生産的技術が停止するとの說を駁し、却つて西洋諸國の如く人口の稠密なる事が進歩を刺激するとて、（一）産業的組織

の完成と勞働の分擔が生產の能率を高める事、(二)人間が多ければ、お互ひに智慧づけられ智識的活動を盛んにならしめる事を理由にあげ、更に文明が停止して人口だけが增加すれば、東洋の如く『習慣の像』に包まれ、却つて受くべき幸福が反對に働く旨を說いてゐる。

即ち人口問題が必ずしも、惡き結果をのみ生むものに非ざるは以上の諸說に見るも明らかである。たゞ憂ふべきは人口の增加に並行して、この勞力を有用に利用する何等の施設もなく、人口が徒らに從來の富の負擔になりつゝある點にある。この解決はまづ政治と教育の改良によらねばならぬのは勿論である。

六　町村を經濟的單位とせよ

道草をくつて、大分長くなつたから、結論に急ぐが、われ等は第一に農村の工業化を主張する。農村の工業化といふ意味は必らずしも農村に大工業を起せといふのではない。町村を經濟的機關にせよ、といふ程の意味である。日本の町村のなす總べての事業は、今のところ單に教育と徵稅の事のみである。町村に農會といふやうなものはあるけれども、それは單に從屬機關であつて、到底今後の農村問題を解決するに足らない。故に若し各町村が經濟的單位になり、一方コーポレーチヴの役目をつとめて、販賣、購買の任に當ると同時に、他方教育事業に當る程の熱心さで村民を誘導し、その土地に適當する作物、牧畜、小產業を起し、協同して機具を、使ひ、協同して電氣を使用する如き方針をとらば、農村問題の解決は今より遙かに進むことになるに違ひない。

この經驗は、日本よりも早く農村問題に打ち當つた歐洲諸國で試驗されたところである。たとへばベルヂウムの如きも、一八七〇年から始めて十ケ年間ばかりは、米國小麥の競爭を受けたが、同國は之を禦ぐに保護關稅の方法を以てせずして、內部の改革によつて此難境を切り拔けた。ラウントリーの『Land and Labour』によると『一時は非常な打擊を受けたけれども、直ちに新しい境遇に適應するやうになつた。彼等は實に耕作し、實に各方面に協同的(コーポレーション)方法をとるやうにした。そして新らしい農業——特に家畜及び野菜を作つた。彼等は人造肥料と、科學の力が如何に彼等を助けるかを知つた』とある。

同じ頃の佛國も同樣である。佛國は『農業のシンヂケートが急に增加し、協同經營の應用が盛んになり、輸出のため冷藏庫、高熱車等の新機關が生れ、特別な新種類の作物が發達し』農界の危機は却つて、その進步を促がしたのである。更にデンマークの農業の發達は何人も知つてゐる。同國は一八六四年に

戰爭に敗けて領土を失なつたが、外に失なつたものを内に得んとし、農業教育を盛んにした結果都會の人は農村に入り、農業國として非常な成効を得、デンマーク製のバータはロンドンの市場を左右してゐる。たゞ其顧客たるドイツの購買力が減じたので、最近商況漸さか不況であるが、かく農業に成功した原因は（一）農業教育が盛んである事、（二）生産者は直接に市町の市場に近づき得る事（三）それ等よりも、もつと重大なる理由は農民の協力組織（コーポレーション）が完全であることである。

即ち之等の經驗によるも、農村の危機は却つて經驗に敎へられて、その發達を促してゐる。たゞ問題は日本の政治家が大勢を導き得るか否かである。何れにしても農業の發達と振興に最も必要なのは協同經營機關（コーポレーチヴソサイチー）である。農業の失敗は生産方面よりも、之を有利に賣捌き得ない點にあつた。若しわが國の町村は郡市と、郡市は縣と相聯絡して、まづ販賣の市場を設定し、確實なる取引の道を開けば、農業家は安心して耕作に從事することが出來ると思ふ。

第二に必要な事は、既にこの協同機關が出來る以上は、其土地に適當な小工業を起すことである。たとへば埼玉縣の忍町行田は足袋を名産として、信州の諏訪附近からは寒天を出だすといふやうに、その土地の先覺者の誘導さへあれば容易に工業が起り得るのである。たとへ其場所に特殊な産物がなくても、特長とする工藝者を造り得るのは、士族の女房の内職が行田の足袋工業を生む動機を造り、全く海のないスイツツルから汽船の機關等が造り出される事實などからも知ることが出來る。かくせば、勞働者は農繁期は農園に働き、閑散期に、その工業に携はり得る次第であつて、勞力の浪費を避け得ると同時に、その收入を增して附近全體が恩惠に浴するのは說明を要しないところである。事業の大資本化は近來の傾向で、副業による小工業が之と競爭し得ないことを說く者もあらうが、併し少資本家の協力的集合は即ち大資本に外ならない。スイツツルの時計業や、ベルヂウムの工業や、更に最近自働車王フォードが、其工場設立に田舍を目がける等の事實から見ても、農業家も資本家も、農業を工業と結びつける事から得る利益が甚大だと信ずる。即ち農業の産業化と、産業の農業化こそ日本の將來進むべき道ではないであらうか。

七　敎育改善から自由貿易へ

併し乍ら以上を合せたよりも、もつと大切な問題は敎育の改善である。それは啻に農業敎育の充實を意味する計りでなく、國民敎育の根本的な改善をも意味する。内容が御當人達に

も明瞭でないにせよ、政黨は既に『産業立國』と云つて、『武力立國』とはいはぬではないか。今の如き中央集權的教育を施して居つては、百の慷慨家、千の理想家は生れても、一人の眞面目なる生産的人物を生むのに難からう。軍事豫備教育に二百萬圓の金を支出するに何等の苦痛を示さざる政府が、農事教育に厘毛を惜む事によつても、『農村振興』『産業立國』などといふ言葉が、彼等の單なる形容詞に過ぎないことを知るであらう。

われ等は學校の農業化、工業化を主張する。英語、漢文、圖畫、修身、體操といふやうなものは、たとへ廢すにしても、その代りに實驗科學を加へ、かつ農學校の普及を計るべきである。農具の發明も、農種の改良も、科學教育の基礎なくして出來るものでない。學校の門が直ちに農園なり、工場なりに續いて居るのでなければ、農工何れの發達をも期することは不可能である。

これだけの方針が立つて、偖てわれ等は自由貿易主義に進むことが出來る。政治家は漫然と『産業立國』『農村振興』と二つを並べて、居るが、しかも彼等はこの二つが有する思想的背景の矛盾に氣がつかないでゐる。産業で立國せんがためには、日本の如き國柄では原則として自由貿易主義によるの外はない。併し乍ら自由貿易主義は結局農村の疲弊を招くべき虞が充分にある。これは英國の例によるも明らかである。即ち普通の意味においては産業立國は農村を振興せず、又農村振興は保護貿易主義によらざるを得ざる結果、産業立國とは相反するといふことになる。しかもわが國を大觀して、その地理的位置、狹少なる國土等の關係から、將來立國の大方針は産業を基礎とするの外はないとするならば、一面出來るだけ農業の近代化を盡し、食糧の自給となし得るやうな方策を講じながら、他面今の如き保護關税の撤廢をし、自由貿易主義による新時代の到來を期するの外はない。私がこの文の始めに『根本的問題から米穀專賣法を顧みる』といつたのは、この國策の變化による農民の損失乃至は動搖に對し、國家が責任を負ふべきは當然であることを指したのである。日本の食糧問題は結局産業問題に歸着する。

この外食糧問題、從つて凶年の對策としては、之を外にしては支那と交渉して

（一）土地商租問題の解決により滿洲邊に移民或は投資するか

（二）防穀令の更改により、支那の米穀を輸入するの方法をとるか

は重大なる問題であり、更に之を内にしては、小作爭議の解

決、ひいては土地國有問題の可否等にも論及する必要あり、殊に最近世界各國とも農業問題に行詰りを感じ Back to the Farm movement が起りつゝあり、バルチック諸國の内エストニア國の如きは四百エーカー（一エーカーは四段二十四歩に相當す）以上の土地は名のみの賠償を以て政府の所有として居るなど、興味ある事實があるけれども、長くなるから今は一切之を省略する。

食糧的に其の日暮しの國家と國民

中澤辨次郎

一

今年は凶作であるかも知れないと云ふ風聞が何處からともなく傳つて居る。風聞の根據は兩參年前も一度騒がれたやうに、最近太陽が、活動し初めてその表面に大きな渦卷きを起して居る。それを約三千八百萬里離れた遠い地球上から天文學者が觀測して、太陽面に黑點が現はれた。その黑點が地球上へ種々なる影響を及す、就中氣象上に大なる影響を與へる。例へば太陽面に黑點が多くなれば太陽の熱が高くなり　其の熱を受ける地球上の海面からは水の蒸發が盛となる。特に夏になると我が國の如きはインド洋から襲來する颶風が多量の雨氣を伴ふて來るから例年より降雨が多くなり、從つて濕度も低下して來るから不作乃至凶作になり勝であると云ふのである。此の説は現在の科學の程度に於いて、多少の異論はあるが、較々肯定され得る説であるから、滿更之れを否定することは出來ない。殊に我々國民の主要食糧となつて居る米、即ち稻作は、今日如何に科學が、進歩した人智が發達して居ると申しても、やはりその豐凶の鍵は天候に握られて居る。天候が重要なる生産要素となつて居る。少くとも天候に支配されて居る部分が大部分である。例へば如何に適當な耕作をやり　如何に適當な肥料を投下

しても一朝天候が不良であつて、特に七八月に於ける日照時間が平常以下に低下するか、若しくは開花期に於いて一朝大暴風雨でも襲來するならば、其の年の稻作は大不作を來さなければならないと云ふ現狀に於いて、太陽の黑點說を干支に因むだ申歲には凶作（天保七年と明治十七年の申歲に於ける凶作を古老が牽强附會して）であると云ふ誤つた想像と一般に取り扱ひ我々は決して荒唐無稽な說として一笑に附して終ふ譯には行かないのである。然し乍ら我々は如何に天文學者の說に敬意を表するからと言つて、此の說を全然その儘受け入れ、之れに恐怖して何等施す可き手段のないものかの如く過信する必要もないのである。

何んとなれば太陽面の黑點が多くなる少なくなると言ふことは、地球上に前述の如き影響を大體に於いて與へるとは言へ、現在の科學では太陽その物の本體さへ未だ明確にハッキリしては居らず、亦その黑點さへも何故に起こるか、其の說明には二三の異論がある位ひであり、且つ其の黑點が地球面に及す影響に於いても、唯だ大體に於いて太陽面にそうした變化が起れば斯う云ふ影響があるであらうと云ふ程度に於ける推定であつて、之れに對し、確定不變の調査研究を行ひ、一種の鐵則を發見した者は未だ嘗つて一人もなく、從つて別說を立てる研究者に言はせれば太陽面に黑點の多い年は植物の成長が盛んで有ると云ふ者もある位ひであるから、我々は必ずしも此の說の前に悲觀するを要しない。要は七八月中に於ける日照時間の長短と開花期に於ける天候の良否に依つて我が國の米作の豐凶の如何は決定されるから……。

二

然し乍ら翻つて考へるに、全食糧の六割五分を米に依食して居る我々日本人は、其の年に於ける米の作柄如何が、その生活上洵に重大關係を有する。今日交通運輸の途は至便となり、我が國に於いて米が不足を告げれば、何國からでも無限的に輸入を仰ぐことが出來ると考へるのは誤りである。今日世界の市場に上る米の數量は全部で約三千五六百萬石に過ぎない。然かるに我が國に於ける米の總需要量は大體に於いて一ケ年平均六千二三百萬石である。從つて一旦凶作に襲はれ萬一五割減の作柄を來すとすれば、今日世界の市場に上程される米の全量を買占めて輸入しなければならないが、之れが我々國民の希望するが如く、容易に全量輸入し得るが如く考へるのは愚の骨頂である。五百萬石乃至一千萬石の範圍內なれば相當高價なる負擔をすることに依つて買ひ入れられもしやうが、外米にはそれ

く平時に於ける大體の需要先きが決定して居つて、其の全部を輸入せんとすることは、例へ如何なる高價を支拂ふても、それを期することは出來ない。斯く考へて來ると我が國に於ける米の作柄が凶作であると言ふことは、我々の生活に直ちに反映して來て、大なる脅威を齎すであらう。特に凶作に於ける米價は過去の史實に於いても暴騰は必然的附隨物であるから、量の不足と共に更らに價格の上から、生活の基礎を極度に動搖される恐れがあることを顧ねばならない。此の點から斷じて米を主食として居る日本人に天候の不良は一大禁物であり、同時に米作の凶作は最も呪ふ可き不祥事である。殊に此の點は國民の九割を占めて居る「手より口へ」の階級、即ち無産階級に對して呪咀すべき事件であるのだ。然かるに我が國に於いては古來から數々凶作が襲來して居る。小不作ならば殆んど三ケ年に一回平均で起こり、普通の凶作程度のものは十三年に一回、大凶作は三十五年平均位ひに一回の割合で我が國の米作の上に起つて居る。今我が國の此の種史實を調査して見ると、欽明帝の二十八年より今日に及ぶ一千三百五十餘年間に於いて、大正二年の凶作をも數へると大小凶作が五百有餘回に及むで居る（拙著「農民生活と小作問題」一〇頁參照のこと）斯くの如く從來我が國に於いては幾度びかの凶作が起つて、我々祖先の生活を脅威して來て居るのである。特に近世に於ける凶作は極めて頻々と起つて德川幕府の食糧政策を動搖せしめた。亦此の爲に發生した米騷動の如きも數回に渉つて居ると云ふ狀態である。

三

最近に於いては不作の程度が一割内外即ち平年作以下五六萬石程度であるならば、交通關係から數量的に平年作たらしめることが、決して至難ではない。即ち朝鮮方面より年々三百萬石は移入し得るし、臺灣より百萬石は輸入される。亦國外より常に三百萬石の輸入を受けてゐる關係上、五百萬石内外までの輸入を計ることは可能であるから、之れ等の點から不作を平年作程度に數的に平均することは不可能ではない。然し乍ら三割以上に及ぶ凶作が若し今年來るものとするならば如何に交通運輸の途が至便となつても、之れを數的に平均して平年作たらしめる見込みは立つまい。若し果してそうであるとすれば最近二三年の作柄は決して良好ではなく、且つ國民の米に對する需要も可なり向上して居る際であるから、數的に考察して可なり考慮を要する問題が發生する。況むや昨今經濟界は近來稀有なる不景氣風が吹き捲くり、失業者街頭に充つると言ふ狀態なるにも拘らず、米價は益々高騰して四十三四圓台を上下して居る矢

先きである。此の際萬一今年が天文學者の豫測の如く凶作にでも陷つて米が絶對數量に於いて大なる不足を生じ、亦その價格之れ以上大暴騰を來すと云ふことであるならば、此處に如何なる由々しき大事が勃發するかも知れない。我々はその斯くの如からざることを神に懸けても萬望するものであるが、既述の如く米作はその主要部分が天候任かせであつて見れば、之れを絕對的に防止する方法を持ち合はせては居ない。たゞ纔かに姑息な相對的方法を之れに加ふるより外に對策はない。

其の相對的手段としては、生産者たる農業者が凶作懸念のある年には稻の品種を努めて早稻に求めることであり、肥料の如きも速効的ならしめ天候を多少でも人爲的に緩和することであり、一般消費階級は、最低榮養量の許るす範圍に於いて、大食を避けることであり、更らに進むでは米を節して米に劣らぬ混食手段を今から講究して着手するより外に方法はない。

由來我が國に於いては、政府と言はず、國民と言はず、食糧問題に對しては、極端なる其日暮しである。明日を如何にすべきかと言ふ方針が立てられて居ない。既に米を中心として其他一般食糧に對する完全なる研究調査が遂げられて居ない。例へば米が一ケ年何千萬石生産されると言つた所で、それは一種の推定であつて實數ではない。亦その米が何れの地方に何の位ひ過剩であり、亦何の位ひ不足して居るかもハツキリしては居ない。從つて同一米俵が極端の例になると東海道線を三十五六回も往復すると言ふ浪費が此處に行はれて居る。或は亦現在生産される米の何割が直接我々の飯に炊かれ、何割が菓子亦は餅となり、飴となり、糊となつて居るか、その用途別さへ明確にはなつて居ない。更らに一步進むで言へばその調理に當つて、一升の米を炊ぐに何升の水を用ひるかと言ふことさへも特別の研究者以外には明かにされて居らず、亦その分量が、應用されては居ない。一般には皆其の時々に依つて好い加減に手のクルブシ等に依つてその水準が計られて居る狀態である。主食既に斯くの通り、況んや之れに配す可き副食物の如き、何れの品が何れの方面に何の位で生産され、亦それが何の位で需要されて居るかゞ大略の測定さへ立つて居ない。從つて或る時は大根一本が三十錢するかと思へば反對に一錢を以つて數本が購へたり、亦此の種副食品を主食に對し如何なる分量に配すべきかと言ふことさへもハツキリ研究されては居ない。言はゞ全然無計畫的生産であり、無計畫的消費が行はれて居るのである。斯くの如く國家も國民も無計畫的生産消費に墮するとき、その生活、その政策が總べて其の日暮しであつて、明日の計がないと言ふのは、蓋し餘りに當然過ぎる程當然の成り行きだ。

四

由來凶作に際して最も必要となるのは、不足する食糧を如何にして補ふ可きかを、然らざる其の他の年に於いて完全に調査して置くことが必要である。數量の不足する場合に第一に必要なる點は、絶對發熱量の大なる作物にして、而も豐凶の支配を受くることの最も尠ない作物は何んであるかを知るの必要がある。例へば一段當りの收量に於いて最も多く發熱量があり、亦豐凶の作柄關係が餘り變動しないものは、我が國に於いては甘藷に優るものはない。之れに次ぐものは（發熱量は米より稍々尠ないが）馬鈴薯である。例へば米の一段當り收量に依る發熱量は一石八斗八合と見て九〇、〇〇〇〇カロリーであるが、甘藷は三三五貫で一三二、一七〇〇カロリーを出し、馬鈴薯は二七二貫で八七、二〇〇〇カロリーであり、即ち米を一〇〇の指數で示せば甘藷は一四六、八であり、馬鈴薯は九六、九である。小麥の如きは米の一〇〇に對し僅かに五五、五即ち米が百人を養ふ力ありとすれば小麥では五十五人五分しか同一面積で養へないのに、甘藷ならば一四六人八分を養ふことが出來る。

勿論我々は平常時に於いて甘藷を常食せよと云ふのではない。然し乍ら一朝凶作に際した時、何れの作物が最も發熱量大きかを知つて置き、そうした場合に於いて非常政策を施こそうとするには、その凶年に於いて斯くの如き生産政策上の數字を基礎として、國民各自の胃の腑の中を最も迅速に充實する方法を知つて置くことの便宜であることを信じて述べた迄に過ぎない。要するに我が國に於いて一旦凶作に見舞れゝば斯くの如き方法と雖も、見捨てる所なく採用して、その急を救濟しないならば、人口は次第に增加し最近に於いては石川若くは福井に相當する一縣下の人口と同數位ひの增加を示して居る現狀に於いて、極めて危險なる狀態に陷るであらうことが想像される。從つて此の點は國家も國民各自も強く肝に銘して記憶して置かねばならない。

五

最後に凶作に際會した場合に於ける非常政策に就いて一言しやう。我が國が若し今日に於いて凶作に襲はれた場合には、斷乎として穀物一般に對し專賣を施すより外に方法はない。僅かに二億圓の範圍に於いて運用せんとしつゝある米穀法の如きは此の場合速かに廢止して穀物專賣法を實施し、之れが配給並に分配を政府の手に收め、這の間に跋扈せんとする奸商跳梁の餘地なからしめ、同時に國民各自に對して主要食糧の公平なる分

先きである。此の際萬一今年が天文學者の豫測の如く凶作にでも陷つて米が絕對數量に於いて大なる不足を生じ、亦その價格之れ以上大暴騰を來すと云ふことであるならば、此處に如何なる由々しき大事が勃發するかも知れない。我々はその斯くの如からざることを神に懸けても萬望するものであるが、既述の如く米作はその主要部分が天候任かせであつて見れば、之れを絕對的に防止する方法を持ち合はせては居ない。たゞ纔かに姑息な相對的方法を之れに加ふるより外に對策はない。

其の相對的手段としては、生產者たる農業者が凶作懸念のある年には稻の品種を努めて早稻に求めることであり、肥料の如きも速効的ならしめ天候を多少でも人爲的に緩和することであり、一般消費階級は、最低榮養量の許るす圍範に於いて、大食を避けることであり、更らに進むでは米を節して米に劣らぬ混食手段を今から講究して着手するより外に方法はない。

由來我が國に於いては、政府と言はず、國民と言はず、食糧問題に對しては、極端なる其日暮しである。明日を如何にすべきかと言ふ方針が立てられて居ない。既に米を中心として其他一般食糧に對する完全なる研究調査が遂げられて居ない。例へば米が一ケ年何千萬石生產されると言つた所で、それは一種の推定であつて實數ではない。亦その米が何れの地方に何の位ひ過剩であり、亦何の位ひ不足して居るかもハツキリしては居ない。從つて同一米俵が極端の例になると東海道線を三十五六回も往復すると言ふ浪費が此處に行はれて居る。或は亦現在生產される米の何割が直接我々の飯に炊かれ、何割が菓子亦は餅となり、飴となり、糊となつて居るか、その用途別さへ明確にはなつて居ない。更らに一步進むで言へばその調理に當つて、一升の米を炊ぐに何升の水を用ひるかと言ふことさへも特別の研究者以外には明かにされて居らず、亦その分量が、應用されては居ない。一般には皆其の時々に依つて好い加減に手のクルブシ等に依つてその水準が計られて居る狀態である。主食既に斯くの通り、況んや之れに配す可き副食物の如き、何れの品が何れの方面に何の位で生產され、亦それが何の位で需要されて居るかゞ大略の測定さへ立つて居ない。從つて或る時は大根一本が三十錢するかと思へば反對に一錢を以つて數本が購へたり、亦此の種副食品を主食に對し如何なる分量に配すべきかと言ふことさへもハツキリ研究されては居ない。言はゞ全然無計畫的生產であり、無計畫的消費が行はれて居るのである。斯くの如く國家も國民も無計畫的生產消費に墮するとき、その生活、その政策が總べて其の日暮しであつて、明日の計がないと言ふのは、蓋し餘りに當然過ぎる程當然の成り行きだ。

四

由來凶作に際して最も必要となるのは、不足する食糧を如何にして補ふ可きかを、然らざる其の他の年に於いて完全に調査して置くことが必要である。數量の不足する場合に第一に必要なる點は、絶對發熱量の大なる作物にして、而も豐凶の支配を受くることの最も尠ない作物は何んであるかを知るの必要がある。例へば一段當りの收量に於いて最も多く發熱量があり、亦豐凶の作柄關係が餘り變動しないものは、我が國に於いては甘藷に優るものはない。之れに次ぐものは(發熱量は米より稍々尠ないが)馬鈴薯である。例へば米の一段當り收量に依る發熱量は一石八斗八合と見て九〇、〇〇〇〇カロリーであるが、甘藷は三三五貫で一三二、一七〇〇カロリーを出し、馬鈴薯は二七二貫で八七、二〇〇〇カロリーであり、即ち米を一〇〇の指數で示せば甘藷は一四六、八であり、馬鈴薯は九六、九である。小麥の如きは米の一〇〇に對し僅かに五五、五即ち米が百人を養ふ力ありとすれば小麥では五十五人五分しか同一面積で養へないのに、甘藷ならば一四六人八分を養ふことが出來る。

勿論我々は平常時に於いて甘藷を常食せよと云ふのではない。然し乍ら一朝凶作に際した時、何れの作物が最も發熱量大きかを知つて置き、そうした場合に於いて非常政策を施こさうとするには、その翌年に於いて斯くの如き生産政策上の數字を基礎として、國民各自の胃の腑の中を最も迅速に充實する方法を知つて置くことの便宜であることを信じて述べた迄に過ぎない。要するに我が國に於いて一旦凶作に見舞れゝば斯くの如き方法と雖も、見捨てる所なく採用して、その急を救濟しないならば、人口は次第に增加し最近に於いては石川若くは福井に相當する一縣下の人口と同數位ひの增加を示して居る現狀に於いて、極めて危險なる狀態に陷るであらうことが想像される。從つて此の點は國家も國民各自も強く肝に銘して記憶して置かねばならない。

五

最後に凶作に際會した場合に於ける非常政策に就いて一言しやう。我が國が若し今日に於いて凶作に襲はれた場合には、斷乎として穀物一般に對し專賣を施すより外に方法はない。僅かに二億圓の範圍に於いて運用せんとしつゝある米穀法の如きは此の場合速かに廢止して穀物專賣法を實施し、之れが配給並に分配を政府の手に收め、這の間に跋扈せんとする奸商跳梁の餘地なからしめ、同時に國民各自に對して主要食糧の公平なる分

配をなす可きである。

勿論穀物專賣法を實施するからには、單に消費者階級の保護のみに終始せず、須からく生產者側の生產經濟の立ち場も充分考慮に入れ、此の場合には、直ちに肥料農具等の管理をも斷行して、生產者たる農民がその生產資本に對して事缺くやうな、所謂角を矯めんとして牛を殺すが如き誤つた政策に陷つてはならぬ。要するに斯くの如き非常時に於いては生產者あつての消費者であるのだから、飽く迄も生產者の經濟的立場を考慮し、凶作と專賣に依つて蒙る農民の不利を補償し、一日も早く生產に安心して從事し得る途を立てねばならない。然らざれば凶作に依つて蒙つた創痍は容易に癒やされないであらう。更に他方國民各自は政府の此の方針に添ふ可く努力すると共に、一般には食糧上の其の日暮しを一日も早く廢し、生產、配給、消費の總ゆる過程に於いて計畫的行動を取り、其の間に何等の浪費なきよう、完全なる食糧經濟の途を日頃から涵養して置き、非常時には萬人悉く一糸亂れずその方法に依據して、速かに凶作の脅威から解放されねばならない。その爲には米に要する水の分量が手加減であつたり、偏食して日本特有病たる脚氣に冒されたり、徒らに大食して胃擴張を起こしたりする者を國民の中に一人も起さぬ程度に平常から完全なる食糧智識を體得せしめて置かねばならない。其の準備として最も有効であると思ふ方法は小學教育である。即ち每日通學兒童が携帶する自家製辨當等を廢せしめ、理科の時間を以つて各自共炊の方法を立てるのも一方策であると信ずる。亦校庭の一部に農場を準備し、兒童をして幼少より生產に親ましめ、所謂生產、消費の全過程に積極的教養を與ふ可きである。從來我が國の教育制度は餘りに智育教育に偏し過ぎて居た。日常生活とは餘りに懸け放れた教育をやつて來た。其の結果は最も大切なる生活上の問題が其の日暮しである。特に此の傾向が日常食糧品の智識に於いて甚しい。之れを是正すると共に、既述の如き時々襲ふ凶作に備ふる爲めにも、尠くとも基礎教育の根本方針を此の點に鑑みて樹て直し、平常不斷の準備を積まねばならない。之れ以外に凶作に對する絕對的對策はないと言ふことを最後に一言國民各自に警告して置かざるを得ない。

非常時に於ける食糧問題

安部磯雄

現在の我國に於ける食糧問題は單に食物が足りないといふ問題ではない。現在に於ては朝鮮米、臺灣米、其他外國米を輸入すれば我國は特に食糧に差支を來すとはないのであつて、今日の交通狀態からいへば其點に關する懸念は殆んどないと云つても好い位である。乍併食糧問題の眞に懸念すべき點は、結局此問題を突き詰めて考へる時に、それが戰爭とか、凶年を豫想した場合に在るのである。平時に於ては自國に於ける食糧の不足は之れを寧ろ外國から補ふ方が便利な場合があり、將來我國の商工業が發達すれば却つて不得意な農業は餘り顧る必要がないのであるから、食糧の不足といふことは此場合大した問題ではないが、只戰爭の場合に於ける交通の杜絶に依る食糧の窮乏は、天災に因る同一の事情を生じた場合と共に我々國民にとつて重大問題である。更に他の一の問題として、我國が將來永く外國の食糧をあてにして居る時に、若し外國の經濟界の變動に依つて食糧品の價格が騰貴した爲めに、それが直ちに我國民の生活に影響する場合のあることも豫め考慮すべき問題であるが、私は以上の諸點に基いて食糧政策の樹立といふことを考へて見たいと思ふ。

戰爭が起るといふことは今日に於ても猶豫想され得ることである。此點に關しては我々は未だ安心することが出來ないのである。戰爭が起つたとしても自ら二つの場合がある。それは軍備が十分でなかつた爲めに、一朝外國と戰端を開いた際に、日本がアジア大陸との交通を絕たれるといふやうな場合が其一つであるが、此場合には日本は勿論全然外國から食糧の供給を仰ぐとが不可能である。併しこれは主として海軍に關する事柄であつて、敵の飛行機が自由に內地に飛んで來るやうな場合を想像すれば其時は最早食糧の問題ではなく、日本の都會や人間の滅亡に關する問題であるから、それは計算に入れないとして、更

に他の一つの場合は、從來の如く海軍の力を以て日本を防禦し、對島海峽を通じ、朝鮮を通じてアジア大陸との連絡を維持し得るならば、此場合には日本は戰爭に依る食糧問題の困難な立場から免れることが可能である。それは恰も歐洲戰爭の際に於ける英國と同一の立場に日本が立つことになる。歐洲戰爭の時には英國は食糧問題に關して不安の念に驅られたが、併し戰時中兎に角米國との連絡が保たれて居たゝめに、此難問題に遭遇することがなかつた。併し陸上の飛行機襲撃の場合を除いた、海軍だけの場合を考へても、若し日本が對島海峽の連絡を維持することが危險であれば、此場合日本は勿論食糧問題に對しては自給自足の政策を樹てねばならぬ。以上は戰爭の可能を考へた場合であるが、更に立場を變へて日本が將來絕對的平和主義を以て世界に立つ方針をとれば、食糧問題に關する心配は全く無くなると云つても好い。絕對的平和主義が維持されるといふとは、日本と、支那、暹羅、安南、印度との交通が飽く迄も維持されることを意味するのであるから、其時は日本は今の英國と恰も同一の地位に立つことになる。日本は決して米を作るのに惠まれたる國ではない。米を作るといふ點から云へば日本は到底暹羅、安南、印度と競爭することは出來ない。元來自然に惠まれて居ない者が自然に逆つてまでも、不利益な穀物競爭を他國とする必要はないのである。英國に於ても時々農業を盛にしなければ國が立たぬといふ議論が起ることもあるが、何と云つても英國は自國に幾倍する穀物を產する植民地を有して居るのであるから、自國に不利な穀物を作る理由がないのである。從つて經濟上の必要から農業よりも商工業が益々盛になつて行く傾向がある。若し世界平和が絕對に維持される場合には日本は英國の如く自國以外に食糧の供給を仰ぐ途が保障されるのであるから、必しも日本は農業の衰微を望む譯ではないが、兎に角農業は現狀維持の程度を以て滿足し、それ以上に農業のために土地を開墾する必要を認めないのであつて、寧ろ其力を商工業の發展のために效した方が得策である。但し之は平和といふとを前提としての日本の執るべき政策である。乍併未だ平和主義の徹底して居ない今日の世界の狀態に於ては、少くも今後數十年間は日本も戰爭の場合を豫想しての軍備をしなければならない時期があるであらうから、茲では先づ主として戰爭の場合を前提としての我國の食糧政策を定めなければならぬ。凶年は戰爭の場合と同じく食糧問題の上から云つて大なる恐慌であるが、戰時に於ても對島海峽の連絡が完全に維持されて居る場合には海外から食糧の供給を保障され得る如く、凶年の場合と雖も、それが日本內地丈けに限られて居るならば、現在の完

備せる交通狀態に於ては、一通の電報に依つて海外から食糧を取寄せることが可能なのであるから、それは此場合重大な問題ではないが、然し戰爭の危險に伴ふ萬一の場合と、先き述べた外國の經濟事情に因る穀價の變動の場合等は食糧政策を考へるに當つて我々の常に豫想しなければならない處である。

戰爭を前提として考へれば、勿論此場合には我國は外國に產物を輸出する必要はないが、兎に角國民の必要とする食糧は內地に於て作る、所謂自給自足の原則に從つて食糧政策を樹てなければならぬ。而もそれは決して自由放任主義に依る政策ではなく、出來得る限り、言論、教育の力、其他種々の方法に依つて、農業を奬勵することが必要なのであるが、單にそれ丈けでは効果を擧げることが出來ない。農業を盛にするには、其方面に對する投資が旺んにならなければならぬ。乍併資本は常に利益の多い處に向つて流入するが、それの少い處に動かない原則に從つて、都會の工業などに比して最も利廻りの薄い今日の農業の狀態に於いては、其方面に對する投資は殆んど期待することが出來ぬと云つても好い。然らば現在の米のみに就いても毎年五六百萬石より千萬石近くの不足に對して、それを補ふために耕地面積の開墾を企てゝも、其資本を得ることに困難を感じるのであるから、假りにそれを民間の事業として開墾をやらせるのも好いが、それにしても米價が今日よりも高くならなければ開墾を引受ける考はない譯である。今日政府の政策が多少其處に顧る處あつて農家の利益を保護するために米價の下落を防ぐことが必要になり、以前から米價調節が其方針となつて現在も實行されて居るのであるが、勿論それの或程度迄の成功が、農家の或程度までの利益となつて居るには相違ない。米價調節の目的は、豐年に於ける、市場の米の潤澤に因る米價下落の際に、政府が一時に何百石の米を買上げ、それの反對の場合に於ける米價騰貴の際に政府の持米を市場に賣出すことに依つて米價の變動を少くすることにあるのであるが、勿論私共はそれに對して反對する者ではない。併し世間では政府の此遣り方に對して、其敏速を缺き、効能の薄い事を非難する者もあるが、それにも拘はらず此政策は大體に於て多少の効果を擧げて居ることは疑はないのである。而も之れを食糧政策として見た時に猶未だ十分であると云ふことが出來ない。換言すれば此程度の政策に依つては農業の利益を保障することが不可能である故、開墾事業に對する投資を促すことの至難な事情が存在するために從つて我國は將來も永く外國米の輸入に頼らずに自給自足の方針を樹てるのに多大の困難を感ぜざるを得ない。米價調節は猶ほ姑息の手段たるを免れないのであつて、此趣意を徹底せしな

れば結局米官營にまで行かなければならないのである。それが實行されゝば殆んど絶對的に米價の變動を防ぎ止めることが可能であつて、其効果は米價調節策よりも遙かに偉大である。米官營が實現されることになれば猶其他に副産物として種々の利益がある。其一つとして、米が投機師に依つて投機の道具とされる弊害を一掃することが出來る。現在米相場のために少からぬ金が投ぜられて居ることは國家經濟の上から云つても大なる不利益であり、國民精神の上から見て投機といふことは少からぬ悪影響を與へるものである。更に他の一つの利益は從來の仲買、卸し、小賣等の賣買機關の廢止に伴ふ、それに要せし冗費を省き得ることに依つて、それ丈け米の生産者から米を高く買ふことが出來るために、農家に利益を與へられることである。又米の官營に伴ふ別の利益は、それが實行され得れば、凶作に對して備へ得られることであつて豐年の際に政府が別に餘分の米を畜へて置くことが出來れば、凶年の場合それに依つて半年や一年位は支へ得られるのである。又現在の米の收穫高六千萬石とすると、其五分に當る三百萬石は農家に於て貯藏が不完全のために鼠や蛇に食はれて了ふのであるが、米が官營になれば農家から直ぐに政府の倉庫に預けられるために、政府はそれを籾にして畜へる時には、鼠や蛇の被害を免かれ得るのみならず、その免かれ得ただけを餘分に貯藏し得て、延いては非常時に對する備へと爲し得る譯である。米が官營になれば以上の諸點に於て種々の利益が擧げられるのであるが、併し現在に於いて直ちに之れを實行することは容易の業ではない。で、差當り政府の行はんとする政策は、國家が補助を與へて新らしき土地を開墾することであつて、先年開墾助成法が通過して、其結果土地開墾會社が出來た。先づ其手初めに三十萬町歩位の土地を開墾することになり、政府は之れに對して相當の補助を與へて居る。元來日本は土地が狹いと云ふが開墾すべき土地面積は猶三百萬町歩位あり、現に開墾に着手しつゝある三十萬町歩は其一割に過ぎない。併し新らしき土地の開墾といふことは、現在の經濟組織の下に於いては、其事が直ちに食糧問題の解決に効果があるかどうかは甚だ疑問である。從來開墾せられなかつた土地は大體米を作るに適當して居なかつたので、それは他の方面の事に使用されて居たか、或は全然放任されて居たものと見るとが出來るので、現在の三十萬町歩から將來三百萬町歩迄開墾せられることになつても、それは良好な土地でないことを考へなければならぬ。然らば此比較的劣等の土地を耕すことになると、經濟上の原則に從つて米の價が騰貴することになる。即ちそれは劣等なる土地を耕さねばならぬ程食糧が不足して居るこ

とを意味するために、それを耕すことが却つて米價騰貴の原因となるのである。又劣等地や耕作に伴ふ米價の騰貴に從ひ、從來優良地を持つて居た者は以前よりも其處から餘計に地代を擧げることが出來るやうになる。それは明白な事柄であるが、それを數字的に説明すれば、玆に一等地と二等地の二種類の土地があり、前者は一反歩に就き百圓の收入を生じ、後者は一反歩に就き八十圓の收入を生ずるとすれば、一等地は二十圓の地代を取ることが出來る。然るに人口增加の結果、三等地を耕さねばならぬやうになつたとすると、假りに其處からの收入を三十圓とすれば、他に比して其收入の少い丈け生產物を高く賣らなければならぬ。從つて生產物の値は、三等地の其處で出來たものゝ値段が標準價格となることは經濟上の原則である。然らば物價は其爲めに益々騰貴することは勿論であるが、其結果一等地二十圓の地代が四十圓となり、二等地は今迄地代のなかつたものが新に二十圓の地代を生ずることになる。之れに依つて見ると三等地、四等地の劣等地の開墾を企てることは、其結果それを耕すに要する勞力と肥料の割合に、生產物がそれに伴はないために、それを高く賣る必要が生じ、米價騰貴の趨勢を促すことになつて、それが延いては從來の一等地、二等地の地代、小作料を引き上げる結果となり、結局劣等地の開墾が地主に對する奉公に終ることになるのである。玆に於いて最後の問題が起るのである。それは即ち此不合理を矯正する方法は唯だ土地國有に依るよりは他に途がないといふことである。土地國有が實行されゝば、從來の土地の開墾のために米價が騰貴する事情が或程度まで防ぐことが出來るし、理由なくして地主の懷を肥やす不合理を除くことが出來る。何故ならば國家が土地を所有すれば、如何なる劣等地を開墾しても、土地に課する小作料は個人たる地主の懷に入らずして、直接國家の手に入ることゝなり、小作料の低廉は生產物の價格の低下を來すからである。現在政府が補助金を與へて私立會社に土地の開墾をせしめる位ならば、寧ろ國家は進んで土地國有を斷行して劣等地の開墾をやつた方が經濟的であり、且つ公平な遣り方である。現在の遣り方は理由なくして一等地、二等地の利益を增さしめる不公平な遣り方である。食糧政策の根本的解決は結局土地國有の斷行に依るより他に方法はない。

　最後に如上の趣旨を徹底せしめる意味に於て、我々は結局人口問題まで行かなければならぬ。如何に食糧問題に就て國家が完全なる政策を考へ得たとしても、一方に於て人口問題に對して何等省みる處がなかつたならば、それは結局行詰らざるを得ないのである。人口問題は殊に我國に於ては現在眞面目に考究

を要する題目である。恐らく日本のやうに驚くべき率を以て人口の増加して行く國は他に其の比を見ないであらう。諺にも貧乏人の兒澤山といふが、それは一國内の貧乏階級の眞理ではなく、國際的に見ても貧乏な國程人口の増加率が多いのである。之れを反對に云へば今日世界の文明國に於いては、國家が人口問題に對しては人爲的制限を加へて居る結果、日本などに比すると貧乏の程度が甚しくないのである。然るに日本は貧乏人の場合と同じく、國家が貧乏に對して、其原因である人口問題に就いて反省する處がない。假りに今日の如く我國に於て毎年六十萬、七十萬の割合を以て人口が増加して行くとすると、結局三十萬町歩の開墾が出來ても、十年間の中にはそれを耕さないのと同一の結果となり、更に此勢を以て進めば、三百萬町歩を全部開墾しても、五六十年の中には元の木阿彌となる譯である。斯くの如く考へ來れば現在日本人は重要なる人口問題に直面してゐることを自覺しなければならぬ。從來人口問題解決の方法として漠然と海外植民といふことを考へて來たが其効果は殆んど見るべきものがなかつた。滿洲が日本の勢力範圍となつてから二十年、臺灣が三十年、朝鮮が併合されてから十五年を經て居るが、其間それ等の土地に移民を送り得たもの僅かに七十二萬人であつて、其數字は殆んど我國一年の人口増加率に稍々多いことを示して居るに過ぎない。今や我國の政治家も漸く此點に留意し、從來の如く單に海外の植民のみに頼らず、此度は北海道や樺太等に内地人を移住せしめる方針を執るやうになつた。それは一つの進歩である。それを退嬰的と考へる者もあるが、形の上では退嬰的でも思想の上では漠然とした考から明瞭な考に移つたことであり、實行不可能から實行可能にまで進歩したのである。乍然實際問題としては北海道樺太に百萬乃至二百萬の人間を移住せしめたのでは未だ十分に問題を解決し得たものといふことは出來ないのであつて、當然其次に來る問題は人口の制限といふことであらねばならぬ。我々は我國の食糧問題を考へるに當つて永久的なる人口問題の解決に深く留意する處がなければならないのである。

心配し過ぎるは愚

文學博士　三宅雪嶺

禍の來た時大騷ぎになり、その去つた後に早く忘れるのが普通であつて、さしもの大震火災も、記憶より遠ざかり、饑饉の如き、餘り人の頭に浮かばない。禍として頗る恐るべきであつても、忘れ易いものに屬する。今は食糧で自給自足を要せず、何處からでも取寄せ得ると知られて居る。鎖國時代でも、全國一樣に不作とならず、關東と關西と互ひ違ひになつたりし、世界と交通する時代、饑饉の心配御無用と言へぬでない。

然し近年日本にこそ甚だしき凶年がなけれ、支那や印度や、隨分凶年に襲はれた。地廣く人多いだけ、食糧の供給が難しく、印度の如き、鐵道の便ありながら、百萬人位の餓死が怪しまれない。英國政府でも何處から何うと、手を着けるに困るのに由る。日本は相應に人口が多いにせよ、之れに比べて處置し易く、延いて特に心配せぬ事に成つて居る。凶年よりも平年に心配し、平年の食糧問題を解決し得れば、凶年とて狼狽するに及ばぬと思はれる。

人口が一年に約六十萬増加し、それほど内地の食糧が増さず、何程か他より供給するを要し、その道を拓くのが急務になつて居る。平時別段の事なく、必要に應じて輸入するとし、戰役又は或る出來事でその輸入が止まつた曉、奈何にすべき乎との疑問が起る。成らう事なら自給自足、事の缺けないやうに心りたいけれど、さう行かねばそれ相應の事を圖らねばならぬ。戰爭がなくても、大陸に防穀令を施いたりする。我が内地で田畑を増す事が出來、肥料關係で收穫を多くし得るにしても、自給自足に至るを望み難く。新領土を得ようとか、殖民地を得ようとかいふのは、皆多少之れに關連して居り、食糧問題の解決を望む。その爲めに前よりも領土の廣まつたに相違ないけれど、その割に食糧が潤澤になつたと云へない。三十萬人外に出ても、毎年六十萬人増加するに對して、云ふに足らず、その上朝鮮人及び支那人が少くとも十五萬人入り込み、内地はいよいよ他から食糧の供給を求めずに居れぬ。

大約內地人の移住し得る所は、何處でも移住するに若くはないとし、墨西哥や伯剌西爾や、有望の地でないとせず、それよりも滿蒙に、西伯利に、佛領印度支那に、足場を作るが可いといひ、いづれも將來に希望があり、唯何程實現し得るかが判らぬ。西伯利に水田が出來るなど、前に考へられず、それが肥料無しに出來るとあつては、勿怪の幸とせねばなるまい。

希望を囑し過ぎれば、失望に終るの常であつて、失望の餘りに憤る者がないと言へぬが、案じるより産むが易い事も、屢々經驗する所に懸かる。日本の食糧問題に關し、相應に希望があるといふ事は、斷定し得られる。海外より輸入する以上は、敵國の軍艦で遮斷せられたならば干乾しになる者が多からうといふが、其所は遮斷されぬものと極めねばならぬ。華盛頓會議の海軍協定は、不滿足至極でも、大陸との連絡を保つに差支へない。心配すれば際限なく、軍艦で遮斷されなくても、航空機で安全を失ふやうな事もあらう。其處は日本で敵を撃破するの設備を具へ得るものと信ぜねばならぬ。海外で何程まで食糧を造り得るか。農産物は餘つても仕方なく、幾何か貯藏し得るものも、需要を見計らはねばならず、假りに水田を盛んにし得ると見做し、無暗と開墾する譯にも行かぬ。無暗と開墾すれば、內地の米價を狂はさうが、さういふ物好きも居らない。奈何なる故障が起らぬと限らぬけれど、今の所、必要なる食糧を得るの途は次第に開け行くとして可からう。

海外で食糧を得るの途が開ければ、內地で深く凶年を憂ふるに及ぶまい。取らぬ狸の皮算用すべきでなく、未だ相當の水田を得ないで、之れを得たと同樣に思つてはならず、只さへ米價の高いのに、少しでも凶年の兆候あれば天井知らずになり、米騷動が起るのであつて、それ相當の準備せずに置けぬ。政府でも幾許か準備して居り、餘り廉ければ買上げ、餘り高ければ賣拂ふといふ位の事はある。それが機宜の宜しきを得るや否やは保障し難くても、突發の事件ない限り、心配する程の事はない。

憂ふ可きは、食糧を得るの希望があつても、未だ具體的に調査が屆かず、農村を如何にすべきかが判らなくなつて居る。農村の疲弊を救はねばならぬと言ひ、救はねばならぬに極つて居ても、現狀のまゝで救はねばならぬか何うか。今は農村で耕して割が合はず、壯丁が都會に出かけ、益々荒廢を來すと云ふも、農村に從來の人數を要するか。もつと少くて差支へないか。耕作法を改めれば、幾割か人數を減じ得よう。關係人が、少ければ、收入の割合が多くなる順序である。問題は餘つた人が都會で職を求め得るかと云ふにあつて、之れを求め得れば世

話がない。求め得らうもないので農村から出てならぬといふが、農村に居つても好い事がない。産業立國とは農村から出掛けて來た者に、商工業の職を與へ、商工業を盛んにすべきであつて、之れを措いて問はねば産業立國の意義は無い。英國は人口の七割が都市に住み、田畑は片々から牧場に變じた。安い石炭と鐵とで盛んに工業品を製造し、之れを世界に供給し、金が有り餘つて食糧は何處からでも取寄せる。國内に麥が一粒も出來なくても構はぬといふ意氣込みになつた。金で軍艦を造り海上權を制すれば何の心配が無い。農村問題なんか餘計なことにかゝづらつて居れぬとした。それで世界に雄飛し來つた所を見れば、食糧が何うならうと心配が無いと云へぬでない。ただ、愛蘭は馬鈴薯を主食にし、馬鈴薯の不作の年に騷ぎが起るとなつて居た。

所がその英國が前ほど石炭と鐵とで幅が利かず、都市から農村に逆戻りするの傾向がないでもない。再び農業國となることが萬々ないにせよ、思はぬ變化あるを察するを要する。

日本は英國ほど石炭及び鐵が自由でなく、工業を盛にし、大陸に擴めやうとしても、思ふに任せぬ所がある。農村が疲弊したとて都會に出掛け、より多く利益を得ると云へぬ。農村に居れば、僅かの收入しか得られず、一朝凶年に見舞はれては、何うすることも出來ない。海外の廣い原野より農産物を安く作り出し、内地で商工業を主にする案を立てるものの、それで基礎を確實にするのが容易でなく、いざとなつて、理想が次第に遠ざかつて行く。凶年なんか未開國の心配とし得るやうで、その心配を脱する譯に行かぬ。大陸ほど大きな凶年がないので狼狽しなくても可いが、一方に商工業を以つて飛躍するの想像を逞くしつつ、一方に國内の食糧問題を考へ、凶年の心配せねばならず、洋服に下駄穿きで雨傘を持たねばならぬ。不格構に苦笑ひしながら、此處に發展の餘地がある。何れかにと定めやうとするが、定まつては先が見え透ひてしまふ。さすがに日本は亞細亞大陸を控へ、中にも圖り知られぬ北亞細亞を控へ、將來の世界に莅んで居る。憂慮ある處に希望がある。他日西藏が大瑞西となるを考へよ。日本は是れからぢや。

食糧問題と產業組合運動

有元英夫

政府の政策たのむに足らず

凶作の原因にも色々の種類があり、例へば風害、水害、蟲害、病害等のものが時々農作物に損害を與へるけれども、是等は多くは一局部に限られ、非常に廣い區域にわたつて、害をなす如きは珍らしいが、氣候不順のために起る收穫減少は最も著大な損害を與へ、國民の食糧供給を危殆に瀕せしめることが數次ある。過去における著名な凶作は、多くは氣候不順に原因するものであつて、本年の如き氣候に於ては兎角、收穫減少を來しやすい傾向を有するのである。殊に農作物のうちで稻といふ植物は低溫の害を蒙むりやすい傾向を持つてゐる。何れの國とも、その主農作物減收のために時々凶年に見舞はれるのを免れないが、我國の如く稻作を主とする農業に於ては非常に收穫が不安定で、從つて殆んど周期的に凶作が來るものと覺悟して置かねばならない狀態であるから、昔しから三年に小凶、五年に中凶、十年に大凶來るものとすら通俗に流說されてゐる如く、凶作は一種の不可抗力的災厄として取扱はれ、當事者は常に備荒儲蓄その他の救恤方策に腐心するのであつた。科學が發達し、農學の進步した今日と雖も、天候を人爲的に左右する技能の發明されない限り、この氣候不順による災害は、依然不可抗的のものであるから、凶年を無くする譯には行かぬけれども、平常に於て凶作の對策、即ち食糧問題の解決方法は立てゝ置かねばならぬ。

然るに我國の食糧政策なるものは、その時々によつて當事者の力の入れ方が違ひ、ある時は非常にやかましく論議され、或は當局は種々の施設を行ふこともあるが、またある時は一般は一向に頭に浮べないで、當局もまたこの方面の仕事を輕視し終るのが如き有樣である。かくの如く食糧政策が一種の流行の如くはやりすたりのあるのは、全く國民が未だ十分食糧問題の眞相を解せず、食糧政策に確固たる根本方針が樹立してゐないた

めであると思ふ。

政府の所謂食糧政策なるものに就ても吾人の考察しなければならぬ幾多の問題があるが、要するに、少くとも過去に於ける當局の執つた諸政策は殆んど失敗に終つたといつても差支ない。例へば食糧問題の一局面たる米價政策についても、政府の取つた米價調節策なるものが如何に劣惡なる結果を持來したかは世人周知の事實であつて、是等の點に就て考へると、吾々國民は政府の政策たのむに足らずと泌々感ぜざるを得ないのである。

國民は自ら之が解決に努力せよ

惟ふに、食糧問題の如き國民の生活に直面した問題は、國民自らが之を解決せねばならぬのであつて、政府の政策が必ずしも無効であるとは云はぬが、國民は餘りに多くの期待を持つが故に、結果を見て失望するのであるから、國民たるものは徒に當局にばかりたよらないで、國民的運動によつて解決することに就て講究し努力する覺悟が無ければならぬ。

いふ迄もなく食糧問題の解決には消極、積極の二方面があるが、積極方面については食糧生産の増加に於ける耕地の擴張、農業技術の發達等の問題に於ても、政府の指導奬勵に待たねばならないけれども、さうした他動的の方法に待つばかりでなく、國民の民衆的運動によつて之が振興を圖るべき手段の存することを閑却してはならない。また消極的方面、即ち食糧の消費節約策についても、過去に行はれた如き節米宣傳とか代用食奬勵とかの下らぬ拙策にお役人が徒らに經費ばかり費つて見たところで、大した効果のある筈が無い。如何に當局の方で苦心したところで國民がそれに付いて行かなければ何にもならぬ。即ち民衆力といふ巨きな力に喰ひ込まなければ國民の消費慣習を動かす如き術策が決して徹底するものではない。

食糧問題が昔の如く生産消費の單なる量の問題で解決付くものならば、事は比較的簡單であるが、國民經濟の復雜した今日の社會に於ては、更に價格といふ問題が加はつて、非常に込み入つたものになり、凶年の意義も昔と今とは違つて來て、今では量の凶年よりも寧ろ價格の凶年、即ち米價の騰貴の方が重大なる關係を國民生活に與へるやうになつた。勿論、價格の基準は量の上に置かれ、食糧の供給不足すれば價格昂り、潤澤なれば價格下落するのは一般原則であるから、價格の問題は量の問題で解決付くやうに思はれるけれども、それが事實は、却々さう簡單に片付けることが出來ない。しかも資本といふ力が經濟界をすみ〳〵まで支配するやうになつて、凶年の災害は一層各方

面に激甚の度を加へることになる。量の上の凶年は交通貿易の發達によつて昔の如き悲慘な饑餓を招く憂は少くなつたけれども、凶年の複產物たる米價騰貴なぞといふ問題は、國民生活に非常なる不安を與へるのである。斯の如く經濟的關係が國民生活の間に複雜にからまるやうになれば、益々以て政府の政策なぞでは解決が困難となり、遂に國民自ら立つて民衆的運動によつて解決せねばならぬ必要が起つて來る。まして價格を左右する資本力に對抗するのは民衆の協力を措いては外に無いのであるから資本主義國家に於て國民自らが生活の安定を保つには、共心協力の民衆運動によるより外に道がないのである。

食糧問題と產業組合

經濟方面に於ける民衆運動のうちで最も發達したものは產業組合運動である。產業組合の運動は主として中小產者の經濟運動であつて、食糧問題の國民的解決は之を置いて他に適當の方法は見出し能はぬ。何となれば、凶年による食糧問題は最も多くの脅威を受くるものは、實は中小產者であつて、上流階級に於ては豐富なる資本力を擁してゐるが故に、大して痛痒を感じない。これは凶年が量的から價格的に變遷した一結果であつて、金力萬能の今日では、昔しのやうに金を懷ろにして餓死するといふ如き現象は絕對に無い、從つて金力の持合がなくしかも金力の壓迫を受けることの甚だしい中小產者はどうしても金力に代ふるに協力を以て食糧問題を解決しなければならぬことになる。

斯の如く資本主義經濟組織の下に於ける凶年は中小產者のみの問題であるから、組合運動といふ民衆經濟運動によつて彼等はその災害から免るべく努むべきであるが今日の經濟組織は、主として富める者が一層富まんが爲めに利用する機關ばかりが主要部を占めて、隨分いろ〱の經濟機關はあつても、貧乏人には殆んど一も之を利用することは出來ないで大資本家に獨占されゐるが故に、食糧問題の危機は益々貧乏人にせまつて來るのである。農業が資本主義的營利生產本位に發達するに從つて益々食糧問題は危險の度を多くする。商業組織の發達は益々生產者と消費者との距離を遠くして、中間に幾多の搾取者を介在せしめ、生產者も消費者も共に苦痛を增すことになる。玆に於て中小產者の生活安定の爲には如何にして富まんよりは、如何にして貧乏人をこの世の中から無くすべきかに就て彼等自ら組合運動の發達を圖らなければならぬのである。

都會には消費組合を起せ

現時わが國には法律によつて設立されたる一萬四千の各種産業組合がある。けれどもその大部分は農村に設立され、しかもその八割以上は信用組合である。併し、ほんとうに今後興味のある問題は、都會に於ける消費組合運動であらうと思ふ。都會に於ては最も資本主義經濟組織が發達してゐるがために組合主義の經濟組織の進歩に幾多困難が伴ふ。けれども消費組合運動の最も盛んな英國は、資本主義經濟が最も古くから發達してゐる。一八四四年、資本主義經濟の壓迫によつて貧困のどん底に衝き落された二十八人の紡績職工がロッチデールに於て最初に消費組合運動を起して以來、八十年間に驚くべき發展を示し、今日では英國の卸賣組合の一ケ年の賣上高だけでも五十億圓に達してゐるといふ盛況であるのに、顧つて我國に於ける都會の消費組合運動を見ると如何にその幼稚なるかに驚くのである。都會人が資本主義の大きな魔の手から救はれて生活の安定を得るには、都會人自らの民衆運動たる消費組合によるより外に道が無い。まして時々米價騰貴の襲來を避けるには消費組合の徹底的發達の必要を痛切に認むるのである。米國のハーチングが云つたやうに、今日の生活難を救ふには生産者と消費者との間に架せられた橋の渡し税を出來るだけ少なくするにある。食糧問題の解釋もまた一面之と同意味に於て消費組合に持たねばならぬ點が多々あると思ふ。

農村には販賣組合を起せ

食糧の價格が安いといふことは消費者側にとつては、その大なれば大なるほど益があるのであるが、反之餘りに食糧の安いのは生産者側たる農村にとつては大なる苦痛である。農産物の下落は農村を疲弊せしめ、從つて食糧の生産能率を低減し、農民が苦しむばかりでなく、都會消費者も結局食糧の供給不足に苦しまねばならぬことになる。米作は年に一度の大ばくちだと稱せらるゝ如く、第一に天候によつて豐凶の分るものとはいへ、農村が疲弊し、農民が困憊しては益々以て食糧生産は危機を告げることになる。然るに資本主義の經濟組織の下に於ては資本力の豐富なる都會が常に資本力の貧弱なる農村を搾り取るのは顯著なる事實であつて、それは資本家が勞働者を搾取する如く、都會は農村を搾取してゐるが故に、農民がこの搾取から免れるには、産業組合運動によつて、及ぶだけ中間商人の介在を少くする必要がある。そのためには、農村には販賣組合をもつと發達せしめ、一方都會の消費組合と連絡を取つて兩者が提携して經濟運動を行つたならば、必ず生産者も消費者も共存共榮の悦びを分つことが出來るであらう。都會は決して農村の敵

ではない組合主義の經濟組織に於ては相携へて共同の利益に向つて進むことが出來るのである。封建時代に於ては凶年のために國民は非常な物質的な苦しみを受けた。資本主義の時代に於ても同じく經濟的苦痛を舐めつゝある。けれども組合主義の經濟組織に於ては、恐らく殆んど凶年の慘害から國民が免れることを得るものと信ずる。

政治社會運動から經濟運動に進め

食糧問題、米價問題が高調に達する時は常に國民は政治運動によつて之を解決せんとし、或は建議案を提出するとか、運動者を派して當局にせまるとかの手段を取り、其間政治家たるものが活躍して之の問題を人氣取策の目的物に供せんとする。そして國民は徒に騷ぐばかりで自らなすべき事を顧みない。それか或は所謂米騷動の如く直接行動によつて暴力を以て示威運動を試み、幾多の社會混亂を發生するのが常である。是等は決して食糧問題の民衆的解決策として當を得たるものではない。國民として取るべき手段は組合運動といふ經濟的運動で、この運動さへ徹底すれば、當局の政策を俟つまでもなく、米騷動の不祥事を勃發することなく、迅速に有効に成功し得るのである。

産業組合運動は、現代の經濟組織の缺陷を認め、資本主義經濟の弊害から免れんとする目的に於ては社會主義運動と同じ道を進んで行きつゝある。けれども、特に我國の社會主義者の多くが爲す如く、運動の基礎を經濟問題に置かないで、主として思想的に走り、社會運動を主とするに至つて、産業組合運動と次第に距離が遠ざかつて來る。殊に我國の勞働運動者、社會主義者が消費組合運動にあまり興味を持たぬことは頗る遺憾とする所である。また地方の青年に於ても政治運動については隨分熱中するけれども、産業組合の如き經濟運動には甚だ冷淡である。故に若し都會に於ける社會運動、地方に於ける政治運動が進んで實際的の經濟運動に向ふに至つたならば、食糧問題の如きは民衆的運動によつて解決することが出來る。是等の點については國民は平常に於て十分の覺悟と用意が無ければならぬものと思ふ。



富岡鐵齋

—本朝畫人傳の十三—

村松梢風

一

京都三條通衣棚といふ處に、屋號を十一屋と呼ぶ古い法衣商があつた。代々曹洞宗大本山越前永平寺の御用達をしてゐて、間口數十間の大きな屋敷を構へ、澤山の奉公人を使つて盛大に暮してゐた。天保の頃の十一屋の當主を富岡傳兵衛と云つた。

傳兵衛は、さうした大家の主にふさはしい寛厚な性格と、慈悲深い心を有つてゐた。その上彼は學問が好きだつた。町内の人達から青表紙といふ渾名を付けられたくらゐ讀書が好きで、各地のお寺へ商用で出張した時でも、必ずお寺の藏書を借り集めて寫して置くといふ風だつた。彼が人に對していかに深切で、さうして世話好きであるかといふことは、往來で遊んでゐる他家の子供の鼻汁まで拭いて遣るといふので大概想像されることだが、だから十一屋傳兵衛の名前を知らない者はなく、同時に人々から慈善家として非常に慕はれてゐた。

一體この十一屋といふ家はどういふ家柄かといふと、其の先祖は元播州姫路の藩士で、後故あつて浪人して河内國に移り住んだ。當時河内國は所謂河内木綿の産地として其の商賣が盛んに行はれてゐたので、富岡家の先祖も何時しか其の商賣で渡世をするやうになつたが、田舎で朽ち果てるのを殘念と思つたのであらう、やがて一家を京都へ移して、何時頃からか法衣屋を始めて遂にさうした身代を作り上げたのだつた。

元祿の頃、京都に石田梅巖といふ心學者があつた。其の高弟に手島堵庵、富岡准直の二人があつて、寶暦安永の頃京阪近畿地方の町人百姓に心學道話を說いて大いに世に行はれたものだつた。其の准直は富岡家即ち十一屋の先祖の一人だつた。准直には一人の娘があつたが、それに當時の學者大江玄圃の息を迎へて養子とした。此の頃から富岡家の基礎は益々固くなつた。仙兵衛の族祖父に當る准德といふ人は歌學を小澤蘆庵に受けて其の堂に達し、兼て畫に巧だつた。かういふ風で十一屋は町人とは云ひ乍ら、立派な家柄であり同時に學者的の血統をも多分に傳へてゐるのだつた。

天保七年は、春の終りから降り續いた霖雨が、入梅を通り過ぎて秋の初め頃までやまなかつた。氣候は極度に不順で土用のなかばに綿入を出して著るやうな日が幾日もあつた。此の異常な天候のために世を擧げて不安の空氣に包まれてゐると、果して其の秋は國中の大饑饉となつた。其の年も慌しく暮れようとする十二月の十九日に、十一屋では出産があつた。末の男の子で、猶輔と命名した。

翌天保八年になると天下が騒然として人心險惡の色彩を帶びて來たが、やがて大阪では大鹽平八郎の亂が生じた。

三都の市中も暗澹たる不景氣の風に吹き荒されてゐた。京都の大通で店を閉ぢる商人が澤山あつた。十一屋も近年は商道が傾いてゐた。元來仙兵衛といふ人は前に云つたやうな篤實の長者である代りに、商賣の掛引などは至つて不得手だつた。其の上古來隆盛を極めた佛教も天保年代に入つてからは年一年と衰へるばかりで、信仰の衰へるに從つて十一屋の家運も段々左前になつて行くのは當然であつた。そこへ此の饑饉の打擊を受けたゝめに流石の十一屋の暖簾も維持することが困難な程の狀態に陷つた。

其の上仙兵衛は家運の衰頽を見乍ら死んでしまつた。長男が家督を相續した。けれども十一屋の經營は代替りと共に一層悲境に陷つて、間もなく衣佛の家屋敷も人手に渡し、一家は淋しい夷川の邊りに逼塞しなければならぬやうな境涯になつた。

末子の猶輔はよく父の性質を受け繼いでゐて、四つ五つの頃から字を覺えて讀書をした。非常に讀書が好きで明け暮れ本ばかり讀んでゐた。しかし彼の母はどういふものだか學問を嫌つて、其の子が讀書に熱中してゐると大變機嫌がわるく、「本ばかり讀んでゐると御飯を遣らない」と云つて叱つた。處が、妙な事情から、此の子は學問でもさせるのが一番適してゐると思はれるやうになつた。それは、猶輔は生れながらに胎毒があつて幼少の頃顏に大變くさけが出來た。それでいろ〳〵と纒た伏

ませたところが、今度は其の藥が內昂して耳を犯されて到頭しまひに聾になつてしまつた。元來父祖の血を受け繼いで學問が好きな上に、家道の榮枯盛衰をまのあたりに見て猶輔は子供心にも一層商人の生活が嫌ひになつた。そして此のやうに耳が遠くなつてしまつては到底商法に從事することは不可能でもあるので、周圍の人々もつひに此の子に學問をさせやうと考へるやうになつたのだつた。しかし、此の時は最早富岡家は零落のどん底に沈んでゐたので、彼に對して裕なる學資を掛けるといふことは出來なかつた。猶輔が西八條の六孫王神社の稚兒になつたのは八歲の時だつた。

さうして神社に奉仕する傍ら彼は學問に勵んだ。

十二歲の時、猶輔は其の頃有名な蓮月尼の手許へ預けられて、其の薰陶を受けることになつた。

二

蓮月尼は其の頃京都の片田舍の白川村に隱棲して、自身で陶器を燒きながら、悠々として淸貧を樂しんでゐた。しかし、彼女は聞えた女丈夫だつた。もと彼女は藤堂家の血脈を受けて生れ、八歲の時から龜山侯に奧勤めをした。十八歲の時一旦良緣があつて嫁したが、故あつて離別して後は全く世を捨て、知恩院に入つて佛門に歸した。彼女は劍道の達人で、また靜流の長刀の名人だつた。其の他武道は鎖鎌や柔術まで極意に達してゐた。學識があつて殊に和歌に堪能だつた。彼女の武名と風流の名は遠近に聞えて、當時の文人墨客は皆爭つて彼女に交りを求めたのだつた。殊に彼女は熱烈なる勤王思想の有ち主だつたので、當時京都で策動しつゝあつた勤王の志士は殆んど皆蓮月と交際してゐた。また其の頃天下の名流と云はれる人々も、京都に入れば必ず蓮月を訪問するのが不文律のやうになつてゐた。蓮月自身は世捨人の積りだが、そんな人達が訪ねて來るので幕府の監視が嚴しくなつた。蓮月はそれが蒼蠅いので度び〱人に隱れて引越しをしたが、引越し先へ〱と探し出しては訪ねて來るので、一年に十三度び移つたといふくらゐで、屋越しやの蓮月はんといふ綽名が出來た。

蓮月が岡崎聖護院村にゐた時分のこと、或夜丑三つ頃、大の男が戶を外して入つて來て「尼さん金を出せ」と云つた。蓮月は臥したまゝで「お前は門違へをして入つて來たのぢやないか、しかし、金でも何でも好きな物があつたらみんな持つて行きなさるがよい」と云つて、それからそろ〱自分も起き上つて火鉢の火を搔き乍ら、强盜のする處を見てゐると、押入れの中から衣類などを取り出す。蓮月は大風呂敷を出して遣つた。

「お前は定めてお腹が空いてゐるだらう、湯を沸して上げるから茶漬でも食べて行きなさい」「いや、そんな悠長な事はしてゐられん」「それなら昨日他所から貰つたハッタイの粉があるが、あれをぬる湯でまぜて食べてはどうかへ」「うん、それなら暇も入るまい、よばれて行かう」蓮月は貰つた儘の麥香煎（ムギコガシ）を重箱から茶碗に移して、鐵瓶のぬる湯でまぜ〱して三杯まで泥棒に食べさせて遣つた。賊は食べるなり早々出て行つた。蓮月は元の座へ戻つて

　白浪のあとは見えねど岡崎に寄せきし脊は猶のこりけり

などと口吟んで其の儘臥戸へ入つた。うと〱したところを戸を叩かれて眼をさますと最早夜が明けてゐた。戸を明けて見ると、南禪寺の知合ひの百姓だつた。

「お早う御座います。大變早く何御用です」すると百姓は「いや私が今朝早く畑へ小便を撒いで行くと、蹴上へ出る道に人が倒れてゐるから、これはしたりと荷を卸して側へ寄つて見ると、一人の男が大きな風呂敷包を背負つた儘死んでゐる、處が其の風呂敷包の端に蓮月と書いてあるので、これはあんたの使の人に相違ないと思ふたから直ぐにお報せに來たので御座います。お宅で大津へでも使をお出しになりましたか」と云ふ。蓮月も少しく駭いたが「それは御苦勞樣でした。私は別に使を出したのではありませんが、昨夜々更けに顔も知らぬ客人が來て、いろ〱と困るやうなお話しでしたから、わたしの詰まらぬ物をいろ〱取り出して、風呂敷も一しよに進ぜたのです。それでは其の人が倒れて居なさるのでせうか」「それではお前樣は盜人に入られたのぢやありませんか、屹度其の盜人にきまつてゐる、とにかくあんたも關り合ひだから來て見て下さい」と云ふので蓮月も據ろなく往つて見ると、昨夜の賊が大變吐血して死んでゐるので流石の蓮月も駭いた。

　其のうち役人が出張して檢死の結果愈々毒殺といふことに極まつた。蓮月は此の事件のため數回役所へ喚問された。が、麥香煎の出所については、何遍詰問を受けても「私は獨身者でハッタイの粉は便利で御座います處から、諸方から頂きますので一向覺えが御座いません」の一點張りで通した。さうして此の事件は終に有耶無耶で葬られてしまつた。何者かがハッタイの粉に毒を混ぜて、近所の老婆を使つて蓮月の許へ運ばしたのだつた。

　文久三年九月十三日、其の日は篠つくばかりの豪雨だつたが、其の雨を冒して七卿は長州の武士に衞られながら密かに西へ向つて落ちて行くのだつた。其の時途中の武田街道に待ち受けてゐて、よそ乍ら七卿に袂別をなし、一葉の短冊に心盡しを

のべて見送りをした一人の尼があつた。それが蓮月尼だつた。

蓮月の許へ出入する名士には、賴三樹、梁川星巖、江馬天香、神山鳳陽等があり、また、久我家の諸太夫春日讃岐守や、梅田雲濱等とも深交があり、勤王の傑僧として聞えた東山建仁寺の梧庵和尚とは殊に水魚もたゞならぬ交遊があつた。梧庵は七卿の一人大原重德の帷幄に參じてゐた。

少年の猷輔は、晝の間は多く尼の手傳ひをして陶器の土を採るのを仕事とした。それから日暮れ前に油壺を提げては町の方へ油を買ひに行くのも毎日の勤めの一つだつた。蓮月の生活はいつでも非常に窮乏してゐるので、油を一時に買ひ溜めて置くことが出來ず、毎日日暮れ前に一文か二文の錢をこしらへてそれだけづつ買つて來た。猷輔は其の大切な金を途中で落してしまつて空の油壺を提げて泣き乍ら戻つて來たりしたこともあつた。しかし、そんな中でも蓮月は乏しい生活費を割いて猷輔に讀ませる本を買つて與へ〳〵した。

猷輔は、一番初めは當時の漢學者山本味園について漢籍を習ひ、次ぎに野口正隆に就いて國學を學んだ。又、叡山の碩學深恵慈本に就いて詩文並びに佛學を享けた。かうして彼の學問は日に月に進步した。其の後彼は春日讃岐守の門に入つて陽明學の講義を聽いた。讃岐守は前に云つた久我家の諸太夫で、名は襄、潜庵と號し、夙に尊王の大義を高唱して、當代一流の人材と目されてゐる人物だつた。また猷輔は梅田雲濱の家にも親しく出入した。猷輔は、時代の空氣や、かうした環境の影響を受けて少年の頃から熱烈なる勤王思想の所有者となつた。

三

猷輔は長じて名を百錬と改め、無倦又は鐵齋と號した。彼は飽く迄も學問を以て身を立てる決心だつた。彼は繪を描くことも好きだつた。しかしそれはまつたくの娯樂で、講學の餘暇のすさびに過ぎなかつた。勿論畫の師といふものはなかつたが、娯みに畫き〳〵してゐるうちに追ひ〳〵畫の事が解つて來るにつれて、自分の畫く繪について不滿足を感ずるやうになり、何等かの根柢を求めて見度いやうな氣持になつてきた。

すると其の頃偶然の機會から土佐派の大家浮田一蕙齋と知り合ひになつた。またほゞ同時に同じ派の名手である冷泉爲恭とも懇意になつた。それまで百錬が試みてゐた繪は極く自由な文人畫風の繪に過ぎなかつたが、彼は少しくそれに飽き足りなく覺えてゐた折だつたので、一蕙に就いて土佐派の設色法を尋ねたりして見た。餘技とは云へ進步が見えなくては興味がなかつた。

一惠と爲恭はどちらも古土佐復興の巨手だつた。其の時代は、日本の思想界に於て復興主義が非常なる勢を以て擡頭しかけた時だつた。それは社會の各方面に澎湃せる現象で、水戸學の精神が其の根本を成してゐた。形式に陥つて久しくもはや何等の生命を有つてゐぬ德川幕府の政策や、其の保護の下に發達して今はわずかに惰力に依つてのみ存在してゐるところの有らゆる文物に對して興つたところの反動思想であつた。賴山陽、梁川星巖等はその最も先覺者で、且つ華やかな方面の代表者だつた。勤王思想もこれに依つて興つた。古學復興は一代の潮流だつた。繪畫の方面では　狩野家が覇權を握ること二百年、其の勢力は牢として抜くことができなかつた。此の間に、浮世繪だの文人畫だの或ひは寫生派だの、新らしい流派が興つたけれども、それらは社會の一部若しくは中流以下の観賞を得るに止まつてゐて、未だ以て狩野派にとつて代るだけの實力もなければさうした野望を抱くに適しい立場でもなかつた。然るに、土佐派は平安朝以來傳來の繪所で、我が邦に於ける最も古い繪畫の流派であり、同時に唯一無二の純粹なる日本畫と云ふべきものである。其の土佐派も久しく狩野の爲めに壓倒されて萎靡して振はず畫風も堕落して古土佐の遒勁なる筆力は失はれてしまつてゐた。爰に於て、古法を復興して、狩野派と對抗せんとする一派が、土佐家の人々の中から現はれて來た。田中訥言が其先達で、一惠、爲恭等がそれを繼承したのだつた。

浮田一惠齋は訥言の門人で、後に藤原信實の法を慕つて有職故實を深く究めて畫に應用した。彼は好んで和歌を詠じた。一時江戸に下つて隅田川のほとりに僑居し、其の庵を昔男精舍と號した。當時摺物を作り題して曰く

わが宿の軒端の梅に鳥が來て
　東なまりの初音をぞ聞く

彼が江戸人士を睥睨してゐる意氣を想見することができる。

畫道復古主義を唱へた一惠は同時に熱烈なる勤王思想の有ち主だつた。彼は門人を養成するに當つて、畫の手本を與へる代りに、先づ孝經を授けるのが例であつたほど道義の念の強い男だつた。しばしば孝經の圖を描いて朝廷に上つた。平常多く勤王の士と交はり、主義の爲めに剃髪し筆を捨てゝ東西に奔走した。それが爲めに安政戊午の獄が起つた時、子息の可成と倶に捕へられて江戸へ檻送された。翌年漸く放免されたが、獄中で獲た病のために出獄後間もなく死んだ。

冷泉爲恭（タメタカ）は一惠齋より少し後れて世に出た。爲恭は幕末古土佐復興の畫家中での第一人者であるとともに、古來の各派を通じたる第一流の畫師であつた。其の構想、筆力いづれも同時代

に嶄然として頭角を拔いてゐた。爲恭は本姓岡田氏、後外戚冷泉氏を冒して、畫を以て朝廷に仕へて近江守に任ぜられた。然るに、爲恭は、彼の友人浮田一蕙齋とは反對に、幕府方の走狗と見なされて同じく非命の最後を遂げてゐる。それは彼が常に皇族公卿に愛せられてそれらの邸に出入してゐるにも係はらず、同時に所司代酒井若狹守が古畫を愛し鑑識を有するところから、趣味が一致してしば／＼所司代のもとへも出入してゐたために、世人は爲恭の行動の跡を見て渠は幕府の内命を受けて勤王方の機密を漏す者であるといふ風說を立てた。此の結果彼は過激な浪士のために狙はれて、紀伊、大和の方面に遁れたが、遂に大和の丹波市で斬殺されてしまつたのは悲慘な出來事であつた。それは元治元年のことで爲恭は年四十を過ぎたるばかりだつた。おもふに彼は純粹の藝術家肌であつて、藝術と趣味の前には敵も味方もなく、朝廷方にも幕府方にも差別を置かなかつたところの其の一本調子の性格が、過つてこんな傷ましい最後に導いたものであつたに相違ない。

百錬はこれらの人々との交遊に依つて大いに畫技の進歩を遂げた。が、彼の目的とする處は依然として學問に在つた。そして、百も錬他人に讓らぬ勤王思想の有ち主であつたが、それにも係はらず彼が青年壯年の危險時代を通じて遂に一身の安泰を保ち得たといふのについては一つの理由があることだつた。それは前に記したやうに彼は幼年の頃から耳の爲めに聾になつた。老後晩年ほどに甚だしくはなかつたが、それでも彼と談話をするには相手が餘程大きな聲をしなければならなかつた。秘密の運動を專らにした志士の會合の席に聾者は禁物だつた。そんなわけから彼は知らぬ間に同志の仲間から除外されてしまつて、重大なる事柄に參劃したことはなかつたので、反つて危難を蒙ることもなくして濟んだのは天の賜物と云ふべきだつた。

四

安政六年は鐵齋は廿五歲だつた。其の年の初め彼は長崎遊學の途に上つた。長崎へ行つて新しい文物を研究し、其の上都合が宜くいけば支那迄渡る考だつた。當時長崎遊學者に對する幕府の取締が頗る嚴重だつたので、鐵齋は長崎土御門家の家來といふことにして貰ひ、土御門家へ毎年支那から送つて來る暦を受取り旁々天文學を研究するといふのを理由にして行つた。も一つ更に困難だつたことは旅費や滯在費の算段だつたが、是れは自分でも一生懸命工面したが、不足の處は蓮月が骨を折つて調達して呉れた。其の頃は百錬も蓮月尼の手許には居なかつた。

いよ／＼長崎へ出立するといふ前に百錬は白川村の蓮月の庵

を訪ねてしばしの別を告げた。甚月は彼の前途を祝福して、歌一首を作つて餞けした。

もろこしの月の桂のひともとも
　折りもてかへれわが家づとに

長崎へ着くと、鐵齋は小曾根乾堂の許に身を寄せた。乾堂は長崎の商人であつたが、風流の道を解し、篆刻なども工みだつた。鐵齋は引續いて其處に厄介になつてゐた。

鐵齋の長崎行は、西洋の事情や、支那の學問藝術を研究するのが目的だつた。其の頃から彼は天文學や地理學に對しても強い興味を有して研究してゐた。しかし長崎へ來て見ると、此の土地獨特の繪畫の空氣が彼の心を囚へずにはゐなかつた。それは恰も長崎畫壇の全盛時代で、春德寺の僧鐵翁や、木下逸雲、つゞいて三浦梧門等の南宗の大家が各々門戶を張り子弟を養成してゐた。苟くも畫を學ぶものは一度は長崎の空氣を吸はなければならぬものゝやうに思はれてゐた時代だつた。百錬は素より好きな繪のことだから、學問研究の餘暇にはそれらの大家を訪問したりして繪畫の鑑識を養つた。しかし、どちらかといふと彼は長崎の畫風に對しては餘り共鳴しなかつた。其の土地の畫人といはれる大家に對しても實は感心してゐなかつた。名聲嘖き渡つてゐた鐵翁に初めて見えて、そして其の門を辭し去る時の彼の率直な感想を云ふと可成り失望的氣分に近かつた。翁といふ人は思つたより俗人ではないか――？と彼は考へた。それきり彼は鐵翁を訪問しなかつた。全體百錬の畫は餘技である。講學の暇を偷んで筆墨を弄するのに過ぎぬ。さういふ境遇にあつて畫技を樂しむ人は、一定の規矩に繩縛されることのない自由なる繪畫、即ち南宗文人畫の風を好むに至るのは多くの場合當然の傾向である。百錬が一惠齋等に問ふて土佐派を研究したとは云へ、それは單に技巧を學んだゝけで、彼の筆墨の精神は自から他にあることは勿論だつた。長崎は其の南宗の本場である。が、百錬の眼に映じた長崎畫の傾向なるものは、餘りに露骨なる支那の輸入であつた。それには江稼圃や費晴湖等の直接の影響が目立つて現はれてゐた。要するにそれらの畫は、彼が私かに對照として望んでゐるところの繪畫の世界とは可成り距離のあるものだつた。彼は畫筆を握るよりもむしろ舶載の書籍を漁つて日を暮す方が多かつた。

鐵齋の目的では此處から更に足を延ばして支那に渡りたかつたのだが、旅費も出來ず手蔓も得られなかつたので其の方は斷念して、半歳ほどの長崎滯在の後行李を收めて京都へ歸つて來た。けれども、此の半歳の長崎遊學は種々なる意味に於て彼の思想を肥した處が少くなかつた。

長崎から歸ると間も無く、鐵齋は聖護院村に私塾を開いて、學者としての旗幟を都の一隅に立てたのだつた。此の年幕府は横濱、神奈川、箱館の三港を開いて露佛二國と條約を締結した。尊王攘夷の聲は囂々として國内に沸騰し、京都の市中は、幕府を倒さんとする諸藩の志士や勤王の浪士の活躍と、それに對する幕府の暗中飛躍に依つて暗澹たる殺氣が瀰漫してゐた。鐵齋は學塾を開いたけれども、初めのうちは大して門人も附かなかつた。が、そのうちにぽつ〳〵入門する者も出來てどうやら生計も立つやうになつた。勤王家である鐵齋の塾生には、紀州藩の子弟が多かつた。これらの青年は何れも血氣の荒武者なので大概醉つぱらつて塾に出入するといふ風だつた。一方佐幕黨たる會津の藩士はつひ近くの黒谷に本據があつて、常に勤王方の動靜を探つてゐた。鐵齋の身を限りなく心配してゐる蓮月尼は

「あんたは學問で身を立てる人だから、必ず過激な行動は謹まねばいけない」

と常に忠告してゐた。鐵齋自身も今では徒らに事を起すの愚であることを覺つてゐたから、蓮月の忠言に從つて門人に對しても時事などは一切口にせず、ことさらに詩文の話にのみ耽つてゐた。

安政六年十二月五日のことだつた。鐵齋は其の日外出先で偶然數挺の軍鷄籠（とうまるかご）に行き遇つた。その軍鷄籠に入れられて江戸へ送られて行く人々の中に浮田一惠齋父子が居たのだつた。間も無く賴三樹や梅田雲濱も捕縛せられた。其の時鐵齋は、軍鷄籠の中に白木綿で縛されてゐる友人の姿を密かに寫生して生涯の形見として遺したのだつた。

矢張り其の頃のこと、豐前岡の藩主が參勤交替で江戸へ行く途中、大阪から京都への道中で浪士に襲撃されて、やむなく淀の城内へ逃げ込んだ。此の一行の中に田能村竹田の養子であつた小虎が加はつてゐた。小虎は浪士の襲撃を受けて身の處置に窮し、京都へ來て人を賴つて鐵齋の家に隱まふて貰ふことになつた。小虎は後の直入であつた。鐵齋と直入とが知り合ふやうになつた初めにはかうした不思議な機縁があつた。

五

家を持つと間も無く鐵齋は世話する者があつて妻を迎へた。が其の妻は、女の兒を一人生んだ後で若死してしまつた。其のあとへ後妻を貰つた。處がこの二度目の妻は鐵齋の母との折合が惡くてほど無く離縁になつた。母は、鐵齋の兄の家に居るべきだつたけれども、其の時分兄の方はます〳〵生計困難に陥つ

てゐたので、事實上母を奉養する責任が鐵齋の肩にかゝつてゐたのだ。ところが此の母はなか／＼やかましい人だつた。

鐵齋は、山中靜逸とは特に親交があつた。靜逸は信天翁と號し、元來は三河の百姓の出身だが、幕末より明治初期に於ける一代の碩學だつた。且つ風流を解し書畫共によくして、京都に住して交遊が頗る廣かつた。信天翁の書は、藤本鐵石に近かつた。

鐵齋と信天翁の交遊は兄弟もたゞならぬ程親しかつた。信天翁の墓は南禪寺の天授院にあるが、鐵齋も死んだなら其處へ葬らうとまで生前約束した程の仲だつた。信天翁は、鐵齋の南畫の神韻縹緲たる風趣と非凡なる筆力に對して以前から大いに傾倒して止まなかつた。其の信天翁が或る時つく／＼鐵齋に向つて「君が學者として立つてゐることは誠に結構である。私もそれに異存はないが、しかし私としては今ではむしろ君の畫の方に一層多くの尊敬と期待を拂つてゐる。畫家として立つことが學者となるよりも卑むべきものでないことは勿論である。殊に南宗に於ては學問と書畫との一致を夙くから唱へてゐる。足下も爾今學問を捨てずとも、繪畫に一層努力してその方で名を揚げることを考へては如何」と云つて頻りに畫家として立つことを慫慂した。

これに動かされて鐵齋も爾來は畫筆に重きを置くやうになつた。それは萬延文久頃のことだつた。此の頃から鐵齋は岩倉公に愛せられて屢々其の第に出入した。又、久邇宮家からも眷顧を蒙つた。宮家へも繁々伺候した。當時久邇宮家は薩摩の系統であつて、薩摩の志士が多く宮家を中心に集まつて劃策してゐた。そして宮家の家來山田筑後といふ人の夫人は梅田雲濱の姫だつた。こんな關係から鐵齋は薩摩の志士の間に多くの知己が出來、殊に山田筑後とは深交を結ぶやうになつた。

とかくするうち世は王政維新となつた。明治元年鐵齋は卅四歲だつた。其の年八月江戸は東京と改稱された。秋、鐵齋は岩倉公に隨從して初めて東京の土を踏んだ。翌二年三月は天皇東京行幸となつて、江戸城は皇居と定められた。

鐵齋は此の盛事を目擊して無限の感慨にうたれた。當時岩倉公は鐵齋に向つて官途に就いてはどうかと云つたが、役人になることは鐵齋の志でもなかつたので、辭して間もなく京都へ歸つた。

京都へ歸ると鐵齋は聖護院村を引拂つて御幸町に移つた。其の家は玄關が二疊、臺所が二疊、奥の間が二疊といふ合せて六疊の見るから貧しい住居だつた。

彼が三度目の結婚をしたのは明治四年卅七歲の時だつた。

妻の名は春子と云つて、年齢は廿二歳だつた。彼女は伊豫大洲藩で八百石を取つてゐた武士の娘だが、若い時から女丈夫的の素質があつたので、普通の娘のやうに手藝や針仕事を習ふよりも、劍道薙刀の稽古に娘時代を過した。郷里に居た頃四里八丁の道を毎日劍術の稽古に通つたといふ程熱心だつた。さういふ性質だつたから田舎で稼付いて平凡な女の生涯に入るのが面白くないとあつて、兩親の許しを得て京都へ出て來て、或る人の世話で五條家へ奥勤めをしてゐた。そのうちさる人の世話で鐵齋の許へ稼付いたのだつた。

しかし、此の結婚の成り立ちについては餘程面白い話があつた。全體、春子といふ婦人はもとよりさういふ風の性質だから彼女自身には結婚の意志などは少しもなかつた。が、故郷の双親や兄などは彼女の身を案じて、京都の知邊の人にあてゝ「娘に適當の緣談があつたら、其地でかたづけて貰ひ度い」と云つて賴んで來てゐた。てうど賴まれた其の人は鐵齋と懇意だつたので、或日鐵齋の處へ來て

「貴下もいつ迄も獨身では居られまい、ついてはよそに斯く斯くの娘があるが貰ふ氣はないか」と話し込んだ。

「それは大變よさゝうなお話だが、何分御承知の通り私の處は貧乏だから」と云ふと、

「いや何、貧乏は元より承知の上です、本人も親も是非學者の妻になることを望んでゐるのですから」

と云ふので鐵齋も乘り氣になつて、それではとにかく一應見合ひをといふはなしになつた。

春子はかね〴〵其の人に向つて

「わたしはこれまで女だてらに武藝の稽古に浮身をやつして來ましたが、世の中も靜かになつて見ればことに女の武藝なぞは不必要だといふことを悟りましたから、今後は良い先生に就いて學問をしたいと思ひます」と云つてゐた。

そこで、其の人は春子に向つて

「あなたから賴まれてゐた學問の師匠のことだが、聞いても居るだらうが富岡鐵齋といふ人がある。此の人は漢學國學共に出來て其の上繪も上手に描き、且つ頗る人格者である。あなたの入門の事を依賴して置いたから私と一緒においでなさい」

と云ふので自身で鐵齋の處へ連れて行つた。鐵齋も春子もそんな話とは互ひに知りやうもない。鐵齋は晴れの見合ひと思ふので些か固くなつたりし乍らもつく〴〵觀察すると、態度應對なか〳〵確かりしてゐて申し分はないので、頃合ひを見て

「それでは、愈々私の家へ來て下さいますか」

と云つたやうな話を切り出した。すると話が急に頓珍漢にな

りかけたので兩方で變な顔をしてゐると、中へ立つた人が到頭笑ひ出して「實はからかうだ」と云つて話したので、鐵齋も呆れたが、一層駭いたのは娘だつた。眞紅になつて急には返事も出來ないが、とにかくよく考へて返事をするといふことで其の日は立ち歸つたが、仲介の人が說き聞かせたのか、それとも前世からの因緣があつたのか知らないが、とにかく此の緣談はすら／＼と成立して、春子は鐵齋の生涯の妻となつた。

結婚の儀式といつてもほんの型ばかりで濟ませた。鐵齋は奥の二疊で讀書をしたり繪をかいたりしてゐた。其の頃鐵齋の家に三幅の掛物があつた。日本武尊の尊像が一幅、神代の系圖が一幅、筆者のわからない山水が一幅とそれだけだつた。鐵齋は多くは畫を賣つて生活費を得てゐた。が其の收入の大部分が古本屋へ拂はれてしまふので家計はいつでも苦しかつた。

此の頃から鐵齋の畫は追ひ／＼世間に知られるやうになつたけれども、當時彼の受けた畫料の標準と云へば、畫帳が一朱、駱落十枚で二圓五十錢位であつたから、物價の安い當時でも生活を立てることは容易でなかつた。けれども鐵齋は勿論妻の春子も貧を苦にせぬ性だから、無ければ無いやうに暮して行くので家庭に不和の起きた例はなかつた。

新婚後十日ばかり經つた頃だつた。或る日鐵齋は臺所で働いてゐた妻の方へ向つて突然

「私は先達てから旅行をしたいと思つてゐたが、幸ひお前が來て與れて留守番も出來たから一寸行つてくる」

と云ひ出した。妻は驚いたけれども、大概夫の氣風を呑み込めてゐるので

「左樣ですか、それでは行つて入らつしやいまし」

と答へた。鐵齋はいそ／＼と直ぐ樣旅仕度をして家を出たが、それから何處を歩いたかと云ふと、先づ山陽道から九州に渡り、日向の高千穗峰へ登つたのを手初めに、各地の名山大川を跋渉して數ケ月後にブラリと歸つて來た。彼の旅行は、山水を寫生することゝ、も一つは地方の地誌の研究が目的だつた。彼は天文と地誌の學問に對しては殊に深い興味を持つてゐた。

六

間もなく妻は身重になつた。二人でさへ狹苦しい此の家で出產があつてはとても暮せないので何處か恰好な家を探して移り度いと思つてゐると、丁度其の頃三本木の山紫水明處、即ち賴山陽の舊居の跡が空家になつてゐて、それを借りてはどうかと云つて勸めた人があつたので、鐵齋は非常に喜んで早速其處を借りて引き移ることになつた。

山紫水明處へ移り住んでから春子は一子を擧げた。男の子で謙藏と名付けた。

其の子がまだ腹にある時、春子は所謂胎敎の必要を覺つて、懷姙中常に四書五經の素讀を怠らなかつた。其の効は空しからず、謙藏は二歳の時書物を讀みかけて父母を駭かせた。

山紫水明處へ移つて後も依然として赤貧洗ふが如くで、謙藏が三歳になつた時春子は始めて其の子を連れて伊豫の生家へ歸ることになつたが、我が子に着せて行く晴れ衣が一枚もない。そこで止むを得ず鐵齋の一張羅のよそいき、白茶の唐縮緬の衣類を解きほぐしてそれで子供の着物を拵らへて間に合せたといふやうなこともあつた。

すると、明治八年に至つて、圖らずも鐵齋は湊川神社の神官に任命された。其の以前から、鐵齋の神社復古に關する意見が漸く識者の間にも識られかけてはゐたのだつた。幕末動亂以來社會全般の信仰心が薄れてしまつた結果として、日本全國に亙る數々の神社は久しい間荒廢するに委せられてあつた。鐵齋は常にこれを見て慨いて、神社復古の必要を大いに力說したのだつた。神社が荒廢するのは民心の荒廢する所以である。我邦の國民道德は神社崇拜から生れてくる崇高な觀念の凝結したものであつて、是れを一日も忽せにすることは出來ない、一日忽せにすればそれだけ士風は廢り、神國としての面目を保つて行くことは出來ないといふのが鐵齋の神社復古論の要旨で、彼は常に會ふ人ごとに向つて此の意見を吐いて、熱心に神社復古を唱へてゐた。やがて時の政府も此の點に留意するに至り、明治五年の官制の改革と同時に文部省内に神社局を設けて、神社復興に着手し、國民をして祖先崇拜の念を涵養せしむることゝなつた。かういふ際であつたから、鐵齋の熱烈なる主張は自然要路の人の耳にも入つて、さてこそ今度の任命を見たのだつた。鐵齋は、役人にはなりたくなかつたが、神官となつて自己の理想を實現することが出來るならば何よりも喜ばしいことなので、直ちに拜命をして湊川神社へ行つた。

處が、赴任して見ると、其の時の湊川神社の宮司なる人は思ひの外の俗人で、鐵齋は一度會つたばかりですつかり失望してしまつて、宮司がこんな人では到底自分の意見は用ゐられないと覺つたので、たつた一日で任を辭して京都へ歸つてしまつた。

處が、湊川神社から歸ると間もなく、大和の石上神社から聘せられて權宮司になつた。次いで其の頃堺縣の縣令であつた稅所篤の知遇を受け、明治九年に和泉の官幣大社大鳥神社の大宮司を拜命した。稅所篤は一個の官吏ではあつたがよく趣味を解

する人で、平素から鐵齋の國士として高潔なる人格に敬服してゐたばかりでなく、彼の丹青の技に優れてゐることも認めて居り、殊に其の熱烈な神社復古論に共鳴した結果特に大鳥神社に聘したのだつた。

其の頃は、鐵齋の母は兄の家に居て、また鐵齋の先妻の生んだ娘も其の方に引き取られてゐた。兄の家はます／＼ひどい苦境にあつたので、それまでも鐵齋は常に乏しい生活費を割いては兄の方を助け／＼してゐたが、今度大鳥神社の大宮司を拜命して月俸二十五圓を受けることになつたので、彼は赴任の前に母を訪ねて

「お母さん喜んで下さい、私もお宮に仕へて二十五圓の月給を戴く身分になりましたから、今後は毎月缺かさず十圓づゝお母さんへ仕送りを致しませう」と云つて、赴任後は約束通り十圓づゝ京都へ送つた。

大鳥神社へ赴任して見ると、それは想像以上の荒廢しかたゞつた。其の少し前までの日本は神佛混交の時代で、神社には多く宮寺が附從してゐた。それが最近神社と寺とが分離したばかりで、大鳥神社もこの宮寺分離の際にあらゆる器物まで宮寺の方へ持つて行かれてしまつたので、神社には神饌を捧げる臺すら殘つてゐない有様だつた。境内の樹木は勝手に伐採せられ、神殿には鳥が巣を喰つてゐた。

鐵齋はこの見る影もなく荒廢してゐる神社を拜した時、反つて自分の使命の重いことを感じて、其の復古を固く神前に誓つたのだつた。

廿五圓の月給のうち十圓を母の許へ送つて殘りの十五圓でもつて生活をすることはさう困難なことでないとしても、それでは自分達が辛うじて生きて行くだけのことで、神社に奉仕する意義がなくなるのだつた。彼は第一に神社の修復を思ひ立つたけれ共、其の費用が得られない。當時は内外多端の折で、政府でも神社の復古に手を付け始めたとは云へ、未だ國費を投じて神社の修理復興を圖るといふやうな時期には至らなかつた。其の上民心が信仰から離れてゐるので殆んど神に詣でて賽錢を上げる者も無かつた。それも立派な社殿でも有つてゐれば格別、荒れ果てゝゐる神社などは顧みる者もなかつた。爰に於て社殿の修理は益々急務であることを鐵齋は感じた。

いろ／＼と考へた揚句に鐵齋は不圖ある案を思ひ付いた。或る日彼は氏子の主立つた者を呼び集めてから云つて相談した。

「私は神樣に一身を捧げてゐるのだが、人間は誰れでも神樣を拜まなければならないものだ。それにしてもこの神社の姿は何としても勿體ない、どうかして修理をしたいと思ふがお上でも

手が屆かない。そこで、私は道楽で覺えた繪の薬がある。今迄は多少買つて呉れた人もあつたが、今度は此の繪を賣つて神社修復の費用を作らうと思ふ。どうか皆さんも私の心を汲んで下すつてお賽錢を上げる積りで私の繪を買つて頂き度い、お賽錢のことだから畫料などは幾許でも宜しい、私も一生懸命骨を折つて描くから、どうか此の趣旨を御懇意な方々にも傳へて頂き度い」

鐵齋の獻身的な申し出に氏子の人々も感動して彼の趣旨を出來るだけ廣く傳へやうといふことになつた。間もなく人々は爭つて畫を依頼して來た。鐵齋は非常に喜んで毎日毎夜筆をとつた。作畫の動機と目的とが神に奉仕するためであるだけに、出來上つた畫には何れも神韻掬すべき趣があつた。

はいつて來る畫料は悉く修復費に積み立てる上に、十五圓の生活費の中からでも餘裕があれば賽錢金に投じるのだつたから、鐵齋夫婦は着物一枚作れなかつた。神官の職服は自給しなければならなかつたが鐵齋のこの生活では職服を作ることが出來なかつた。しかしどうしても必要な物であるから、これは春子の白無垢を解いて作つた。白無垢だけは出來たが淺黄の袴がない。そこで此の方は氏子の一人から機織機を借りて來て、妻が手づから淺黄の布を織り上げた。其の頃伜の謙藏は五六歳になつてゐた。春子は仕事の餘暇があると、大學と中庸とを謙藏に教へた。

鐵齋夫妻のこの獻心的奉仕の効は追ひ〳〵現はれて來て、二三年の間に大鳥神社の外觀は見違へるやうに立派になつた。明治十三年頃には大鳥神社は近郷に類のない莊嚴な社となつて、同時に近所近在の人々の信心も深くなり、春秋二期の祭典も盛大に行はれるやうになつた。此の間に鐵齋夫婦が此の地方の人々に與へた感化は偉大であつた。

ひと年、久邇宮朝彦親王が突然大鳥神社へ臺臨になつた。そして、鐵齋に謁を許されて神社復興の功勞を厚く賞せられた。

明治十四年の初めに、鐵齋はこの思ひ出多い大鳥神社を辭し京都へ歸らねばならぬ事情となつたそれは京都にあつた彼の家兄が歿したからだつた。其の結果鐵齋は母を引き取つて奉養しなければならなくなり、又兄の遺族の世話も彼の雙肩に掛つて來た。それらの事情から愈々京都へ歸へるといふことになつた時、氏子の人々は慈父に別れるやうに其の訣別を惜んだ。其春鐵齋は四年振りで京都へ歸つた。此の年彼の誠忠は天聽に達し正七位に叙せられた。

辭任して京都へ歸つた鐵齋は兄の歿後の富岡家の家政を

すると共に母を引き取つた。兄には子がなかつたので、鐵齋が先妻が生んだ女の子に養子を取つて兄の家を相續させるとに兄の存生中から決つてゐた。しかし此の娘は早世してしまつた。其の後は鐵齋は仕官の望を絶つて、專ら畫を以て世に立つ決心をした。其の當時彼は自己の心懷を詩に賦して人に示した。

人笑吾書癖。吾耽讀書樂。
恰如南面王。萬卷享天爵。

筆墨場中爲逸民。賣書鬻畫養閑身。
天公賜我眞淸福。不列縉紳列隱倫。

其の頃から、日本の國情も漸く、一定して、民心が泰平を樂むやうになつた。明治十四年七月には、明治天皇東北御巡幸があり、十月を以て東京へ還幸された。二月には第二回內國勸業博覽會が東京に開設され、十月には國會開設の詔書が下つた。

鐵齋は自由の境地を得ると同時に又もや性來の旅行癖が欝勃として禁じ難く、其の年の夏飄然として京都を立つて東へ向つて旅立つた。先づ東海道を經て東京を通過し更に足を東北地方に向つて伸した。往く／＼旺んに畫囊を肥し乍ら更に進んで津輕海峽を越え、北海道を縱斷して、千島擇捉に迄足跡を印した。

彼の此の旅行は、諸國の名山大澤を跋渉し或ひは人情風俗を探つて畫囊を肥さんがためであると同時に、彼の地理學的趣味の現れでもあつた。且つ當時は未だ幕末以來の北邊國防の論が朝野にやかましかつた時代で、北海道の研究は多くの識者によつて重大視されてゐた。北海道研究は或る意味に於て一つの流行でもあつた。頼三樹三郎などもかつて北海道を視察に行つたことがあつた。其の中でも、北海道研究の第一人者と稱されてゐたのは伊勢の人松浦武四郎だつた。松浦はしば／＼、北海に足を入れて精密な地圖まで作つて、北邊の事情には頗る精通してゐた。一方風俗や考古學の趣味もあり、北海道開拓ならびに北邊の國防に關する當時の先覺者だつた。鐵齋はこの松浦と親しくしてゐたゝめ其の感化を受けたことも少くなかつた。

北海道に入つて尤も鐵齋の興味を惹いたものはアイヌの生活だつた。初めて接したアイヌの風俗や生活狀態の全般に亘つて研究して彼は是れを精密に寫生した。其の頃のアイヌは今日に比して更に餘程原始的であつたから、彼のこの寫生は寫生畫としての名品であるばかりでなく、當時のアイヌの生活狀態を知る好箇の參考品として研究に貢獻する處のあるものである。

アイヌ風俗の中特に鐵齋が興味を以て寫生したのは熊祭りの

圖だつた。彼の寫生帖の一冊はこの熊祭りの寫生のみで埋つてしまつた。のち鐵齋は此の寫生を整理して、熊祭りの屏風一双を畫いた。

彼は千島擇捉を極めた時次ぎの一詩を賦した。」

北門鎖鑰近如何。獨抱杞憂訴向誰。
欲試千洲開拓策。單身孤劍入蝦夷。

以て彼の國士的風懷をうかゞふことが出來る。

歸途は北陸を經て信濃路に入つたが、信州では落合で暫く足を留め、次いで甲州に入り、天目山に上つて武田の末路を弔ひ、更に富嶽の山頂を極めて歸京した。

當時の富士登山は現今と違つて非常に困難なものだつたが、鐵齋は其の後も數回登山して山嶺に畫筆を揮つた。彼は單に山嶺の風光を稱するばかりでなく、富嶽の四周を廻つてあらゆる研究を重ねた。殊に彼が數回の登山の際、心血を注いで作つたところの山嶺から瞰觀した大地圖は其の後も彼の手許にあつて有名な物の一つであつた。

鐵齋の地理研究は老後迄衰へなかつた。明治三十年頃から彼の生活も安定して來たので、彼は閑があれば好きな旅行に出ることにした。

明治三十四年には丹波丹後の山川を跋渉した。其の時大江山に入つて洞窟を探つたりした。

北海道からの歸途信州落合に足を留めた縁故から、鐵齋は井良親王の碑文を揮毫したので、明治三十六年建碑の式に招かれて落合へ行つた。其の碑は東久世通禧の篆額、熱田神宮の宮司角忠行の撰文で、それを鐵齋が揮毫したのであつた。

落合からの歸途駒ヶ岳に登り、諏訪に出て湖上から富士の寫生をなし、更に鹽尻から善光寺に詣で姨捨山に仲秋の明月を賞し、妙義の險を踏んで東京に入つた。

東京では時の大藏大臣曾根荒助の官邸に滯留した。其の時曾根は鐵齋の來遊を機として東都の文人墨客を招いで一日の清宴を張つた。當日其の席に招かれた人々は、荒木寬畝、川端玉章、下條桂谷、大槻如電、今泉雄作の名流だつた。鐵齋は其の席に大壁紙に十六羅漢の圖一幅を描いて曾根に酬ひた。

東都に留ること旬日、更に東に向つて鹿取鹿島に詣で、水戸に出で、進んで陸奧に足を入れ、仙台から金華山に渡り、平泉を尋ねて、心ゆくばかり畫囊を肥して京都へ歸つた。

其の後も彼は暇さへあれば旅行をして、四國、山陰、山陽を踏破し、九州を巡ること前後三度に及び、今や本土のうち彼の足跡を印せざるの地はないまでになつた。

後年内務省に地理局が設置された時、鐵齋は數十年を費して

蒐め得た處の地理の研究資料を整理し、佐々木總四郎と相謀つて地誌數百冊を内務省に献納したが、此の地誌も先年の内務省燒失に依つて灰燼に歸してしまつた。

駿州清水港の波止場にある俠客次郎長の家では、次郎長の死後遺族の人達が小さな宿屋を營んでゐた。或る年のこと、此の次郎長の家へブラリとやつて來て泊り込んだ會體の知れない老人があつた。

「富士の見える座敷へ泊めて貰ひ度い」

と云ふので奥二階の富士を眞正面に見る座敷へ入れると、客は廊下へ出て頻りに感嘆の聲を發してゐたが、やがて食事も濟んだ後で下女に向つて

「餘り富士が美しいから繪を一枚描きたくなつた。主人にさう云つて紙があらば貰つて來て呉れ」と命けた。

下女が下へ行つてさう云ふと、主人は心中「また乞食繪かきが泊りやがつた」と思ふので、唐紙の裁ち屑が二枚ばかりあつたのを出して來て

「怎んな紙でも宜しければと云つて持つて行きなよ」

と云つて下女に持たせてやつた。すると二階の老畫師は別に厭な顔もせず、自分で墨をすつて、一枚へ三保の松原と富士を描いて、

こゝはしもふじをみるべき家居かな
　　松原遠く波しづかにて

と賛をした。それからもう一枚の細長い紙へ横に

　　一杯不可無

と草書で書いて、名前へ印をして

「これを御主人に上げてお呉れ」と云つた。

下女が其の二枚の書畫を主人の處へ持つて行くと、主人は小馬鹿にしながら展げて見たが、「鐵齋」といふ落款を見て喫驚りした。當時は既に鐵齋の名は國中に知られてゐた。

「さあ大變だ、これあ京都の鐵齋先生だ。おい、誰か早く唐紙を十枚ばかり買つて來い」

大急ぎで人を走らせて唐紙を買つて來て、今度は主人が羽織を着て挨拶に行つて「どうかもう一枚」と云つて紙を出したところが、鐵齋はもはや笑つてゐて描かなかつた。

次郎長の家では、それを二面の額に仕立てて大切に保存してゐる。

八

鐵齋が室町中立賣に家を求めて移つたのは大宮御所を辭してから數年後のことで、彼の生活に些か餘裕の出來た證據だつ

た。其の頃恰好の家を欲しいと云つて探してゐたが、或る時此の家を見に來ると、家は古いが庭が相當にあつて、其の荒れ果てた庭の有様だの、玄關前の松の木の具合などが彼の心に適つたので早速買ひ求めて引き移つた。其の家は以前小川可眞といふ茶人の住んだ跡だつた。其の頃其の南隣には畫家の横山華山が住んでゐた。此の二人が隣合つて住んでた頃こんな話があつた。元來小川可眞は醫者だつた。が醫術は餘り上手でなかつた。或る時隣家の横山華山の娘が病氣になつて小川に掛つてゐたが、到頭其の病氣が癒らずに娘は死んでしまつた。華山の家では大層力を落してゐると、可眞が冗談に町内の人に向つて「横山の娘も到頭俺の匙加減で殺してしまつた」と云つた。

此の事が華山の耳に入つたから溜らない。小川を殺して娘の敵を討つといふので大騒ぎになつた。大勢人が入つて漸く納めることは納めたが、こんな事から小川も醫者をやつてをられなくなつて、其の前からもしてゐた茶道の方を專門にして、つひには小川流の一派を開くに至つたのだつた。

後に鐵齋は華山の住んだ南隣の家も買ひ潰して其處へ書庫を建てた。

明治卅年頃京都府美術學校が開設されると、鐵齋も招かれて教鞭を執つたが、彼の擔任學科は主として修身を說くとだつた。

壯年時代の鐵齋は狷介卓犖、談論森嚴を極め、峻辣で少しも假借せざる風があつた。當時の京都には、頼支峰、谷如意、神山鳳陽、江馬天香等の文人が互ひに詩文を競ひ、畫家には直入、鐵山、春塘、竹堂、棋嶺、寛齋等各々門戸を張り頗る賑やかだつた。其の中で鐵齋は、學者であり畫家であり、且つ一箇の國士として嶷然として重きを成してゐた。

今の聖國寺管長橋本獨山老師は、其の頃から鐵齋の人格を聞き及び是非六法の教を乞ひ度いものと思つて、或る日鐵齋を訪れた。其の時獨山は二十一歲だつた。

書齋に通されると、鐵齋は書物から眼を離して、初對面の口上を云ふ獨山の顏を睨んでゐたが、

「俺に繪を教はりたいと云ふのか」

「是非畫法の御教授を願ひ度いと思つて參りました」

「さうか、では、まあ之を讀んで御覽」

鐵齋は机の上にあつた資治通鑑を取り上げて獨山の前に出した、それは白文の漢籍だつたのでまだ其の頃の獨山としては讀むことは可成り六ケ敷いことだつた。が、とにかく仕方がないので本を手に取つて讀み上げた。すると、凡そ半枚も讀んだ頃

「お前は無學ぢやな」と鐵齋は一喝した。

「そんな誤つた讀方でどうなる」

獨山は威壓されてしまつて一言も出なかつた。それ以來獨山は益々鐵齋の偉大に敬服して、鐵齋の家の玄關番をしてゐながら、熱心に畫道を學んだ。獨山の畫技は逐年進步して現今では道念と並び稱される程有名になつた。遙かに後年の事、獨山が非常に立派な廣い畫室を建てた。すると或日鐵齋は和尙を自分の家へ連れて來てわざ〳〵自分の畫室へ案內した。其の畫室は餘り廣くもない室だが、そこへ數千卷の書籍やら繪畫の粉本やらが雜然と積みあげてあつて足も踏み入れることさへ容易でない。

「畫室などは紙を展べる場所さへあれば澤山だ」と鐵齋は云つた。

鐵齋の畫は初めは餘技から出たものであるけれども、彼の飽く處なき研究心の結果と、讀破したる萬卷の書卷の氣と、萬里の路を踏破して得たる自然に對する深い觀方とに因つて、晩年に近づく頃からの其の作品は玲瓏珠の如く澄んで行つて、何人も追縱出來ない高い處に達してゐた。彼は眞個の意味に於ける南畫の殿將であるといふ批評は既に餘程前から多くの人の間に言はれてゐた言葉である。彼の畫は勿論師承する處はないが、先哲の何人に最も私淑してゐたかといふことも明かでない。が、石濤の畫には常に敬服してゐた。或る時騰泉といふ支那人が、石濤の描いた東坡の十二ケ月の詩の心を寫した畫帳を持て來たことがあつた。鐵齋は非常に賞めて、それを借りて寫して置いた。其の畫帳は現在安部房次郞の手に入つてゐる。明の除大地、淸朝の高鳳翰、金冬心あたりの畫にも私淑して、それらの人々の傳記なども鐵齋はよく知つてゐた。事實上餘程感化を受けたものと見えて、畫風にもそれらの影響が可成りに多く見られる。日本の南畫家の中ではと問はれると大雅、竹田、記南海等を擧げてゐた。そして人物では竹洞を稱揚した。

「竹田は畫はうまいといふではないが、學識が深く、見識も高い。先達て草果の畫帳を手に入れたが、それに題贊があるが、さすが竹田だ。竹田でなければ書けない詩だ。そして篆書を竹田はあの時代では、一番深く極めてゐた。しかし俺も學問で竹田に敗けるつもりはない。大雅は奇人で學問もあつたが或る點に止まつてゐたゝめに後年の畫には進境が見えない。渡邊華山は銳敏であつた」

或る人と座談のはしに鐵齋はさう云つて先哲を評した。彼自身は恐らく古今の第一人者を以て任じてゐたのだらう。大雅も若い頃は土佐繪を學んだ。竹田も學んだ。が鐵齋の土佐繪に對する硏究は大雅竹田の上にあつた。それは前にも述べた一惠齋や爲恭の影響からだつたが、殊に爲恭には敬服して其の眞筆や

粉本を數々蒐めて秘藏してゐた。

鐵齋の書は明かに黄檗の獨立から出たものだつた。彼は若い時叡山の碩學羅溪慈本に就いて佛典と詩文を學んだが　其の弟子の願海阿闍梨とも交りが深かつた。願海はまた冷泉爲恭と懇意だつた。其の關係から鐵齋は爲恭とも交るやうになつたのだつた。

詩文については彼も書畫に於けるやうな自信は有つてゐなかつた、だから詩文を書く場合には必ず一應專門家に見せて相談をした上で書いた。古い頃は長尾雨山や片山精堂等に見せてゐたが、中途からはもつぱら内藤湖南あたりに相談してゐた。

或る若い畫家が鐵齋を訪ねると、鐵齋は西園寺公からお茶を貰つたから上げようと云つて、金の湯沸しで湯を沸して、其の畫家にお茶を出した。其の時鐵齋は竹田が漆で書き入れた小さな絹物を見せて

「是れを直入が欲しかつたけれども、俺はあの人物を好かなかつたので遣らなかつた」と云つた。

矢張り其の時、乾山の和蘭陀燒うつしの菊碗を出して見せた。畫家は

「畫でも光琳より乾山の方がよくはありませんか」と云ふと鐵齋は頭を振つて

「否そんなことはない、光琳には光琳で豪い處がある」と答へた。

鐵齋は光琳畫の臨摹などもやつた。時には光琳風の畫も描いて見たりした。彼の研究は非常に多岐に亘つてゐた。

九

鐵齋は非常なる藏書家だつた。現今恐らく支那日本を通じて是れ程の藏書家はあるまいと云はれてゐる。彼の唯一の娯みは讀書であつた。そして古本屋を漁ることも晩年迄離らぬ道樂だつた。老後に及んで滅多に外出しなくなつてからでも、月の一日には氏神の祇園神社へ缺かさず參詣したが、其の歸途には必ず寺町通の古本屋を軒別漁つて來るのを樂みにしてゐた。そして彼は頗る手まめで、他人が珍らしい書物を持つてゐれば、直ぐに借りて手寫して置き又珍らしい話があれば必ず書き取つて置いた。其の趣味の廣いことゝ博覽强記は知人間に有名な話だが、先づ專門の書畫に關する藏書に至つては價を論ぜず購入したので殆んど餘す處なく和漢の珍籍を網羅してゐる。有名な蕭尺木の大平三山圖や離騷圖の如きは今日世界を通じての珍寶である。彼は蘇東坡と同日に生れた故を以て東坡を殊に崇拜し、東坡の著書は殆んど盡く集めてゐる。其の外繪畫の粉本の類に

「そんな誤つた讀方でどうなる」

獨山は威壓されてしまつて一言も出なかつた。それ以來獨山は益々鐵齋の偉大に敬服して、鐵齋の家の玄關番をしてゐながら、熱心に畫道を學んだ。獨山の畫技は逐年進步して現今では道念と並び稱される程有名になつた。遙かに後年の事、獨山が非常に立派な廣い畫室を建てた。すると或日鐵齋は和尚を自分の家へ連れて來てわざ〳〵自分の畫室へ案內した。其の畫室は餘り廣くもない室だが、そこへ數千卷の書籍やら繪畫の粉本やらが雜然と積みあげてあつて足も踏み入れることさへ容易でない。「畫室などは紙を展べる場所さへあれば澤山だ」と鐵齋は云つた。

鐵齋の畫は初めは餘技から出たものであるけれども、彼の飽く處なき研究心の結果と、讀破したる萬卷の書卷の氣と、萬里の路を踏破して得たる自然に對する深い觀方とに因つて、晩年に近づく頃からの其の作品は玲瓏珠の如く澄んで行つて、何人も追縱出來ない高い處に達してゐた。彼は眞個の意味に於ける南畫の殿將であるといふ批評は既に餘程前から多くの人の間に肯かれてゐた言葉である。彼の畫は勿論師承する處はないが、先哲の何人に最も私淑してゐたかといふことも明かでない。が、石濤の畫には常に敬服してゐた。或る時聯泉といふ支那人が、石濤の描いた東坡の十二ケ月の詩の心を寫した畫帳を持つて來たことがあつた。鐵齋は非常に賞めて、それを借りて寫して置いた。其の畫帳は現在安部房次郎の手に入つてゐる。明の徐天地、淸朝の高鳳翰、金冬心あたりの畫にも私淑して、それらの人々の傳記なども鐵齋はよく知つてゐた。事實上餘程感化を受けたものと見えて、畫風にもそれらの影響が可成りに多く見られる。日本の南畫家の中ではと問はれると大雅、竹田、記南海等を擧げてゐた。そして人物では竹洞を稱揚した。

「竹田は畫はうまいといふではないが、學識が深く、見識も高い。先達て草巣の畫帳を手に入れたが、それに題贊があるが、さすが竹田だ。竹田でなければ書けない詩だ。そして篆書を竹田はあの時代では、一番深く極めてゐた。しかし俺も學問で竹田に敗けるつもりはない。大雅は奇人で學問もあつたが或る點に止まつてゐたゝめに後年の畫には進境が見えない。渡邊華山は鋭敏であつた」

或る人と座談のはしに鐵齋はさう云つて先哲を評した。彼自身は恐らく古今の第一人者を以て任じてゐたのだらう。大雅も若い頃は土佐繪を學んだ。竹田も學んだ。が鐵齋の土佐繪に對する研究は大雅竹田の上にあつた。それは前にも述べた一惠齋や爲恭の影響からだつたが、殊に爲恭には敬服して其の眞筆や

粉本を數々蒐めて秘藏してゐた。

鐵齋の書は明かに黄蘗の獨立から出たものだつた。彼は若い時叡山の碩學羅溪慈本に就いて佛典と詩文を學んだが　其の弟子の願海阿闍梨とも交りが深かつた。願海はまた冷泉爲恭と懇意だつた。其の關係から鐵齋は爲恭とも交るやうになつたのだつた。

詩文については彼も書畫に於けるやうな自信は有つてゐなかつた、だから詩文を書く場合には必ず一應專門家に見せて相談をした上で書いた。古い頃は長尾雨山や片山精堂等に見せてゐたが、中途からはもつぱら内藤湖南あたりに相談してゐた。

或る若い畫家が鐵齋を訪ねると、鐵齋は西園寺公からお茶を貰つたから上げようと云つて、金の湯沸しで湯を沸して、其の畫家にお茶を出した。其の時鐵齋は竹田が漆で書き入れた小さな絽物を見せて

「是れを直入が欲しかつたけれども、俺はあの人物を好かなかつたので遣らなかつた」と云つた。

矢張り其の時、乾山の和蘭陀燒うつしの菊碗を出して見せた。畫家は

「畫でも光琳より乾山の方がよくはありませんか」と云ふと鐵齋は頭を振つて

「否そんなことはない、光琳には光琳で豪い處がある」と答へた。

鐵齋は光琳畫の臨摹などもやつた。時には光琳風の畫も描いて見たりした。彼の研究は非常に多岐に亘つてゐた。

九

鐵齋は非常なる藏書家だつた。現今恐らく支那日本を通じて是れ程の藏書家はあるまいと云はれてゐる。彼の唯一の娯みは讀書であつた。そして古本屋を漁ることも晩年迄變らぬ道樂だつた。老後に及んで滅多に外出しなくなつてからでも、月の一日には氏神の祇園神社へ缺かさず參詣したが、其の歸途には必ず寺町通の古本屋を軒別漁つて來るのを樂みにしてゐた。そして彼は頗る手まめで、他人が珍らしい書物を持つてゐれば、直ぐに借りて手寫して置き又珍らしい話があれば必ず書き取つて置いた。其の趣味の廣いことゝ博覽强記は知人間に有名な話だが、先づ專門の書畫に關する藏書に至つては價を論ぜず購入したので殆んど餘す處なく和漢の珍籍を網羅してゐる。有名な蕭尺木の大平三山圖や離騷圖の如きは今日世界を通じての珍寶である。彼は蘇東坡と同日に生れた故を以て東坡を殊に崇拜し、東坡の著書は殆んど盡く集めてゐる。其の外繪畫の粉本の類に

至つては枚擧に遑がない。或ひは經世經國に關する書籍から、天文地厯に關するもの、其の數々萬卷に達したゝめ、火災の難を恐れて晩年邸內に煉瓦造りの堅牢無比の大きな書庫を建てゝ收藏した。

彼の博覽强記に關する逸話は澤山ある。が殊に德川中期以後の京都を中心にした文人墨客の逸事傳記などは殆んど皆暗記してゐたくらゐで、それは書物に載つてゐたことばかりでなく彼自身が親しく見聞した事柄も多く混つてゐた。

或る時伊勢の宮崎文庫の寳物で黄蘗の僧高泉和尙の碑文の拓本が出たのを、京都大學の內藤湖南が手に入れた。此の碑文は近衞豫樂院公の書で、銅鑄の碑だつたが、其の碑が何處にあるのか判らない。湖南博士もいろ〳〵調べたが一向に判らない。鐵齋の子で京都大學の講師をしてゐた謙藏に其の事を話すと、

「私も知らないが、父に聞いて見たら或ひは知つてゐるかも知れない」と云つて鐵齋に尋ねて見た。すると

「其の碑の在場なら俺はよく知つてゐる。つひ二三年前に態々行つて見て來た」

と鐵齋は答へた。それは伏見の佛國寺だつた。かうして鐵齋のお蔭で碑の所在が判明したのでいろ〳〵に騷ぎ出し、近衞公爵も見に來たりして、續いて原本の所在も知れ、原本は國寶になつてしまつた。

明治になつてから歷代の御陵の調査に着手したが、何分久しい間の朝廷衰微のあとなので各地の御陵も多く山林桑田の間に隱滅してしまつて其の調査は頗る困難だつた。鐵齋は其の勤王思想から大いにこれを恐懼して自から骨身を惜まず此の調査を心掛けた結果、大和から河內邊へかけての御陵は大概彼が發見考證して、彼自筆の石標を建てた。

鐵齋の御陵研究は隨分古くからの話で、彼がまだ御幸町に住んでゐた頃のこと、暇さへあれば古本を探しに出たが、多くは御陵に關係した事を調べるためだつた。それについてこんな話がある。

或る日も鐵齋は何か一册求めて歸つて來たが、歸つて來るなり例の二階の書齋でそれを讀み始めて、細君が食事を知らせても「うん、うん」と應へをするばかりで起たうとしない。其のうち彼は何と思つたか急に驚いたやうに立ち上つて、其の本を懷ろへ入れた儘、玄關へ下りて下駄を突つ掛けて何處かへ出掛ける風なので「どちらへお出掛けで御座います」と細君が尋ねると「ウン、一寸其處迄行つて來る」と云つた儘鐵齋は出掛けてしまつて、さて待てど暮せど歸らない。日が暮れても歸つて來ず、到頭其の夜も歸つて來ない。翌日も一日待つたが矢つ張

り歸つて來ないので、鐵齋の氣心をよく呑み込んでゐる細君もさすがに少々心配になり出した。心當りをあちこち尋ねたが分らないので其の日も一日待ち暮してしまふと二日目の夜半頃に鐵齋はブラリと歸つて來た。

「何處を歩いておいでになつたのです」と尋ねると

「一寸其處迄の積りだつたが、急に思ひ立つて河内の御陵を調べに行つて來た。それはとにかく腹がへつて溜らない　早く飯を食はせて呉れ」

鐵齋が一生を通じて、京都附近の名所舊蹟を修復したり　或ひは先哲や孝子節婦などの遺跡表彰等に力を盡した例は枚擧に遑がないくらゐだつた。それは一面に於ては彼の考古趣味の發現でもあつたが、併し彼の根本觀念はさうして陰徳を施すことにあつたらしかつた。廢滅したり世話をするものもなくなつた故人の墓を修繕して遣るほど功徳になることはないと鐵齋は考へてゐたらしかつた。さういふ思想は、心學を重んじた彼の父祖以來傳來の家學の影響に因るものであつたらうと思はれる。

大和國高市郡高市村なる栢森といふ處の、加夜奈留美命（カヤナルミノミコト）神社が廢滅して其の所在すら喪つてゐたのを　鐵齋は百方苦心捜索して探り得て、縣廳へ建議し有志と協力して一社を建立した。こは大國主命の御子におはして日本に只一社よりない神社であつた。

京都の太秦（ウヅマサ）の牛祭と云へば著名な年中行事の一つで、風俗畫の手本にもあるやうな華やかな祭典である。それが幕末から明治初年に亘る騷亂に累はされて何時の間にか舊風を失つてしまつてゐた。鐵齋はそれを惜んで、大いに奔走した結果十三年頃から再び此の祭が復活することになつた。現今でもこの牛祭は京都の名物の一つになつてゐる。

嵯峨の車折（クルマザキ）神社が其の頃全く跡方もない程荒廢してゐるのを發見して其の復興に與つたり、修學院村に石川丈山の詩仙堂があつたが是れも幕末の頃廢墟同樣になつたのを修理復興して、自ら信徒總代となつて一切の世話をしたりした。

狩野探幽の墓が北野にあることを聞いて鐵齋は其の所在を尋ねた。すると、一代の大家であつた探幽の墓も哀れ雜草の中に埋れて香華を手向けるものもない。鐵齋は私財を投じて墓の大修理をした。

其の後橋本雅邦が京都へ來た時探幽の墓に詣で度いと思つて人に聞いたが判らない。鐵齋に尋ねたら判るかも知れんといふので尋ねると鐵齋が教へて呉れた。で行つて見ると意外にも立派に修復されてゐる。段々聞いて見ると鐵齋が修復したといふ

ことが判つたので雅邦も驚いて、重ねて鐵齋を訪ふて其の好意を感謝して引き取つた。

鐵齋の趣味の範圍は頗る廣かつたので、其の藏書の中には珍奇なものが澤山あつた。殊に寶暦あたりに出版された菓子の製法を書いた本などが澤山あつて、京都名代の菓子屋である「とらや」の主人は、よく鐵齋の藏書を借りては昔の製法を試みた。

大正六年鐵齋が帝室技藝員になつた時、此の慶びを紀念する爲めに彼獨特の考案になる菓子を作らして知人に配つたが、それは古い記錄を調べて、慶長年間に豐臣秀吉が北野で茶會を催した時用ゐたといふもので、其の事は北野緣起に載つてゐる。其の頃今のとらやの先祖が太閤殿下へ調進したといふ記錄に依つて、とらやへ命じて其の時と同じ型の菓子を作らせた。とらやの主人は命ぜられた菓子の型を、いろ〱と探した結果漸く見つけ出したが、何しろ古い時代の物で大分損じてゐて用をなさない。そこで同じ型を新たに拵へて調進した。

それは長さ一尺位、幅五寸もある、大手な桃山式の松と竹、それへ鶴と龜をあしらつた押し物で、流石は太閤の命じさうなもので一個の目方四百匁を超えるといふ立派な物だつた、最初に出來たのをとらやの主人が持つて行くと鐵齋は非常に喜んで、其の折箱の蓋に太閤茶事の圖を描いて主人に與へた。

其の他鐵齋の知識の該博なることは驚くばかりで、京都の學者や文人は鐵齋を訪問して談話を聞くと何かしら利益を得て來ると云つたくらゐだつた。例へば先年の關東大震災の時など、鐵齋は直ぐに書庫から德川時代に於ける地震に關係した書物を數十卷取り出して來て對照して研究するといふ風だつた、さうして其の時代に既に考案されてゐた地震計の話や、或ひは耐震家屋に關する學說などを紹介して聽き手を驚かせた。

鐵齋の藏書中で、清朝の人阮元の著「石畫記」なども珍中の珍である。此の石畫といふ物は大理石の紋を山水に見立てゝ題を附け額などにするもので、支那の人が多くこれを愛好する。そして此の大理石は雲南が産地である。阮元は雲南の總督をしてゐた人で、石畫に就いて深く研究して、其の本には石畫の圖を入れこれに阮元の詩が書いてある。鐵齋の藏本は原本の寫しで、阮元は今より凡そ八十年ばかり前に死んだ人だが、現在では支那にも此の本があるかどうか分らないのである。

京都の學者猪飼敬所は先年贈位の恩命に接したが、これは全く鐵齋のお蔭だつた。元來敬所といふ人は、北朝を推したといふので山陽の如きは大いに排斥した。其の爲めに後まで贈位の

御沙汰がなかつた。處が、實は敬所には「操觚正名」の書があり、これは遂に刊行に至らずして終つたが、皇統に對する彼の正しい解釋が判明する著述だつた。鐵齋は豫々敬所の人物學識を尊んでゐたが、偶然この操觚正名の草稿を手に入れることが出來た。彼は大いに喜び、友人内藤湖南と謀つて其筋へ建議し敬所の人格識見を説いたので、それが動機となつてついに贈位となつたのだつた。「操觚正名」の稿本は、鐵齋自身では出版が出來ないからと云つてそれを湖南に贈つた。

十

鐵齋は維新前より久邇宮家の眷顧を蒙つてゐた關係上、故久邇宮朝彦親王御在世中は屢々拜謁を許されて恩命に接した。かくして鐵齋の人格は畏くも天聽に達し、明治四十一年彼が七十三歳の時、東園侍從は明治天皇の御内命を傳達して鐵齋に畫の揮毫を命ぜられた。鐵齋は聖慮を拜し、齋戒沐浴、筆硯を淨め、三尺絹本に「安部仲麻呂明州望月圖」並びに「群仙高會圖」を謹寫して獻上した。陛下は殊の外御嘉賞になり、三百金を下賜された。

今上陛下東宮に在せる時、京都行啓の砌り、久邇宮家の命に依つて盆踊りの圖を獻上し、加陽宮御取立の際は群仙圖六曲一双を獻上した。更に大正四年には伏見宮の御命によつて「帝舜耕歴陶河濱圖」を獻上した。

大正六年六月には帝室技藝員に任命された。

かうして鐵齋の晩年の生活は益々光輝に滿ち何等遺憾のない平和な生活の中に悠々として筆硯を樂しんでゐた。處が、大正八年に及んで、非常に大きな不幸が突如として彼を襲つた。それは一人息子の謙藏が其の年四十七歳を一期として忽然として逝つてしまつたことであつた。鐵齋の悲傷は喩へるものもなかつた。

謙藏は明治六年三本木の山紫水明處で生れ、幼少の時から父母の感化を受けて學問を勵み、學校には殆んど行かなかつたが、只其の頃平安義公といや所で、漢學を伊藤介夫に、國學を大阪の敷田年治に學んだのみで、其の他は多く父翁の教訓を受け乍ら獨學獨行で押し通した。其の後英語を内村鑑三に學び、或ひは重野安繹、島田重禮兩大家の門を叩いて教へを受けたこともあつたが、大概の事は殆んど獨學で研究した。長じて京都同志社中學並に女學校の教師となり、文部省の國語漢文の檢定試驗に合格した。明治四十一年には京都大學の講師に招聘され、東洋史と金石學を講じてゐた。彼は家翁の性質を遺傳して非常なる學問好きで研究に熱心なること驚くばかりだつた、少

此の頃に奈良正倉院の鏡鑑を全部通覽し、尊勝院の聖語藏（東大寺寫經の藏）をも殆んど研究し盡して此の方面では他に比肩する者が無かつた。晩年には專ら古鏡の研究に沒頭してゐたが、此の研究に於ても他の追從を許さぬ造詣が深かつた。世界の學界に於ても、彼の發表によつて初めて古鏡の研究の方針が立つたと云はれてゐる。彼の古鏡に關する著述は現に西洋諸國の學界に於ても著名のものになつてゐる。

鐵齋老夫婦はそれより後は嫁と孫達を相手に淋しく暮さなければならなかつた。しかし、飽く迄も精神の强倔な鐵齋はこの大きな不幸に遇つても決して意氣銷沈はしなかつた。依然として壯者を凌ぐやうな精力を以て作畫に從事した。古來大概の畫家は晩年に至ると、粗放に流れ、壯年期の作に比べて見劣りのするものだが、生涯讀書と研究とを怠らなかつた鐵齋の作品は、老後に及んでも一年々々進境を示して、むしろ晩年の作ほど光輝を添へてゐる。

大正八年には帝國美術院會員となり、正五位に叙せられた。

彼はいかなる日でも筆を執らない日はなかつた。病氣をしても少し快くなると床の上に起きて何か描いてゐた。描くことが好きで描くのであるから、人から賴まれゝば勿論喜んで直ぐに筆を執つた。

晩年に近付くと鐵齋の畫は極度に聲價を發して、斷簡零墨と雖も人は容易にこれを得難く、市場賣買の相場は當時第一位に置かれてゐた。併し、鐵齋自身は殆んどこれを知らぬものゝやうで、依賴を受ければ喜んで描いた。畫料を持つて來るか來ないかも尋ねないのだから、況んや畫料の多少などは問題でなかつた。で餘り氣根を詰めて描き過ぎるものだから折り折り健康を損ねることがあつた。息子の謙藏が存生中の頃、父の體を心配して

「これと云ふのも畢竟依賴が多過ぎるからだ。依賴者を少くする爲めに畫料を極めて見たらよからう」

と云ふので、父に相談の上で可成り高額の畫料の規則を作つて見た。處が、依賴者は少しも減らなかつた。畫料が極ると賴みいゝと云ふので反つて以前よりも多く註文が殺到するやうになつた。それでは何にもならぬ上に、家翁の素志に反することにもなるので、間も無く其の規則は撤廢してしまつた。

鐵齋は小兒の時から聾になり、其の聾のお蔭で反つて青年時代に一身の安全を得ることが出來たといふ話は前に記した通りだが、老年に及んでは耳はいよ／＼遠くなるので、座談の不自由は極度で、大概相手の云ふことは聞えないのだから、しかも彼は非常なる話し好きと來てゐるので、對談中大概自分ばかり

喋つてゐた。非常に大きな聲で、熱をもつて、話し出すと所謂談論風發して聽者も煙に卷いてしまふのだつた。

それでも相手の話も聞く爲めに聽音器を耳に當てたりした。聽音器はいろ／＼なのを使つて見た。久邇宮家からも聽音器を賜はつたことがあつた。

獨逸の博物館の日本部の主任グラーゼルといふ人が十四五年前に來朝したことがあつたが、此の人は大變鐵齋の畫を稱揚して「私は現在の日本の繪畫の中では鐵齋先生の物が一番好きだ」と常に云つてゐたくらゐで、滯在中に度び／＼鐵齋を訪問して談話を交換した。が、其の時も鐵齋が耳の遠いのが氣の毒だと云つてゐたが、歸國すると直ぐに獨逸製の聽音器を送つて呉れた。鐵齋がそれを耳に當てゝ見ると大層よく聞き取れた。彼は譬へん方なく喜んで、此の器械が一番具合がよいと云つて、生涯それを側から離さなかつた。

祇園に松本さだといふ老妓がある。片山派の舞では第一の舞ひ手で京都では古くから人に知られてゐる。このさだは曾て深く兒玉大將の贔屓を受けてゐたところから、大將歿後其の七回忌を營み度いといふので、其の時配る扇の繪を鐵齋に賴みに來た。さだは面白い氣風の女なので、それ以來大層懇意になつてちよい／＼鐵齋の家へ遊びに來た。さだは今の市川左團次を贔屓にしてゐるので、左團次が何か鐵齋に畫いて貰ひ度いと云ふのを「宜しい、妾が賴んで上げよう」と引き受けたが、普通の繪ではどうも面白くないといふので、花活の繪を鐵齋に描いて貰つて、それを諏訪蘇山に燒いて貰はふといふはなしになつて、鐵齋の處へ來て賴んだ。鐵齋は快く承知して

「では恁んな恰好の花活を拵へて貰つて來なさい、直ぐに繪は描いて上げるから」

と云つて筆を取つて花活の形を圖に認めてやつた。間も無く花活が出來てきた。二個出來てきた。鐵齋は直ぐに繪を描いてやつた。それが美事に燒き上つた。其の花活の形はふくらみが三味線の胴に似た形だつた。早速さだから左團次の處へ知らせて遣ると、左團次は丁度輕井澤へ行つてゐる時だつたが、其の知らせがあると直ぐさま京都へやつて來て、花活を受け取つて大喜びで東京へ歸つた。左團次は非常に之れを愛玩して、來る人ごとに見せて自慢してゐた。すると、間も無くかの大地震で、彼の家も燒けてしまつたが、家財道具は一物も出すことが出來なかつた。其の騷ぎの中でも左團次は花活を灰にしてしまつたことを悔んでゐると、意外にもこれだけが一つ助かつてゐた。と云ふのは其の時家にゐた六十幾歲かの男衆が、逃げ出す時何か持つて逃げようと思つて突嗟の間に考へ付いたのは其の

花活で、主人が日夜愛玩して人に誇つてゐたところを見ると餘程大切な品に違いないと考へ、花活を風呂敷にひつくるんで引つ負つた儘、火から火にと追はれて逃げ廻つた末、漸く自身の命も花活も兩方共助かつてゐることがわかつたので、左團次は涙を流して喜んだ。

鐵齋は八十九歳といふ稀に見るの長壽を保ち得たが、平常別段これといふ養生法も行はなかつた。酒は若い頃には少しは呑んだが、晩年は絶對に用ゐなかつた。大して食物の好みを云ふでもなく、たゞ常食は粥だつた。これは數十年來の習慣で、粥に茶を掛けて食べてゐた。

朝は非常に早起きだつた。夜が明けると同時にいつも起きるので、大概家內の者も誰もそれを知らなかつた。自身で書齋の雨戶を明けて庭に下り、庭祀の祭神を禮拜して表門へ來て靜かに戶を明けると、表に野良犬が二三匹寢てゐるのが、鐵齋の顏を見ると喜んでみんなで飛び付いて來る。これが每朝の事だつた。晝の間は大概筆を執り、夜は讀書をした。

或る時下婢が手洗水を投げやりに捨てたのを見て鐵齋は下婢を戒めて

「水といふものは草や木を養ふもので、一滴でも大切なものだ。使ひ捨ての水でも捨てるなら木の根に注いで遣るがよい」

と云つた。

鐵齋は餘程前から持病の膽石病があつた。折り／＼それが發した。大正十一年八十七歳の年も一度其の病が出て可成り重態に陷つたが、其の後石塊が出て健康も常態に復し、相變らず繪を描いてゐた。そして大正十三年の秋になつた。

洋畫家正宗得三郎は、多年鐵齋を崇拜してゐて、折に觸れては京都へ行つて鐵齋を訪問し、家族の人達とも非常に親しく交はつてゐた。或る日も正宗が鐵齋に會つていろ／＼談のうちに

「畫家も長生きしなければ佳い作は出來ない。俺も此の頃になつてどうやら思ふやうに描ける」と鐵齋が云つた。

そこで正宗が、何か長生きの秘術はありませんかと云ふと、それから談が仙人の事になつて行つた。

「仙人の話なら俺が最も得意だよ」

鐵齋は頻りに仙人の話をして、丹僊鍊丹の略圖などまで描いて見せ乍ら、大いに長生の祕術を說き明かした。

それから二三ヶ月後のこと、十二月卅一日の朝、いつものやうに朝起きをし、庭の祭神を拜し、食事もいつものやうに粥等ですませて、畫室に入り書籍を開き、筆を執つた。處が午後の三時頃俄然持病が起つて、一時間ばかり後ついに永眠した。越えて正月三日初めて喪を發し、四日に葬儀を行ひ、西條寺

町大雲院の墓所に埋葬された。法名無量壽院鐵齋居士。
鐵齋の絶筆は歿する五日前、廿七日に描いた榮啓期の圖だつた。これは紙本半折の、榮啓期が牛に乘つてゐる圖で、淡彩に僅か緑青が使つてあつた。此の畫は蒼然古古の風韻があつた。そして次ぎの畫賛がしてあつた。

九十行年榮啓期
太平多樂幸男子
揮毫萬象皆財易
八卦變多爲我師

鐵齋翁の詩歌數首を左に掲げる。

○
我愛畫山何擇師。但師眞景學其奇。
援筆最到會心境。茶熟香酬樂不疲。

○
一年三百六旬餘。日々揮毫展畫圖。
四海泰平皆有象。天應偏免硯田租。

○
手挈一瓢過鴨涯。優遊獨酌對潺顏。
忽看雲漫際々闇。現出米家煙雨山。

○
欲展梅溪好畫圖。幾何輕杖訪仙區。
再三塗抹無成效。人咲徒勞我自樂。

○
八十六年又遇春。採兒循酒咲顛新。
泰平有象君看取。我是熙朝詩老人。

○
耳積眼眠腕有神。援毫猶掃硯田塵。
八旬加六貪遊戲。不愁泰平徒食民。

和歌

身をいるゝわづかばかりの家ながらすめば事たるかたつむりみよ
人心富士の高峰を登りつめ雲よりほかに見るものもなし
吾と吾心まかせの筆なれどおもふまゝにはゆかぬなりけり
文字をかき畫を寫すも諸人のしりへをあゆむ筆の跡か那
から文字の介字の形をつみかさね竹は高くも生ひいでにけり
筆の毛のほさきをおのが命にて八十八年をつなぎつるかな
神の島と稲の風に吹きあれて見るめわびしき筆の跡かな

追記

鐵齋先生の傳記を書いて見たいといふことは、私が先年「近世名匠傳」の筆を執り始めた頃からの願望だつたが、種々の事情で遷延してゐるうち、昨大正十三年十二月晦日、鐵齋先生は八十九歳の高齢をもつて其の光彩ある生涯を終へられた。古來の畫人の中でも先生ほどの長命を保たれた人は稀らしい。狩野探幽は長生きしたはふだが七十三。常信が七十八。文晁も同じく七十八だ。北齋は九十まで生きた。だが北齋も九十の歳を迎へると間もなく其の春のうちに歿してゐる。鐵齋先生ももう一日で九十になられるところだつたのに惜しいことをした。それはとにかくあれ程の高齢に達し乍ら筆力が毫も衰へなかつたのは不思議である。云ふまでもなく藝道には底といふものはない。限りなく奥深いものだ。鐵齋翁が歿せる少し前に「畫家も長生きしたい、俺も此の年になつてどうやら思ふやうに描ける」と云はれたので見てもわかる。丁度北齋が同じやうな事を云つてゐる。彼は臨終の間際に「天がもし俺に十年……五年でも壽命を藉して吳れるなら、俺も本當の繪かきになれるのだが」と云つて永久に瞑目した。これらの人達が生の最後の瞬間迄如何に藝道に對する強い執着を有つてゐたかといふことが證明される。さうかと思ふと世には早熟の天才といふもある。しかし、早熟の天才の仕事は多く、一つの方向、世界に向つての暗示であつて、それの完成を示してゐるものは少ない。落ちついた完成された美しさは矢張りかうした多年の研究努力の最後に到達した境地であらねばならぬ。此の意味に於て鐵齋先生の藝術は我國現代の畫壇が有つ唯一の至寶だつた。八十九歳は人間としての天壽を全うしてゐるには相違ないが、優れたる藝術を一つでも多く望む心から云へばまだ〳〵惜しい齢だつた。

鐵齋先生が歿せられたについて私も是非共先生の傳記を書かうと思ひ立つた。そこで或る日正宗得三郎氏を訪問した。正宗氏は鐵齋翁を崇拜すること神の如く、或る意味に於て當代隨一の鐵齋翁の知己とも云へる人だが、私の問ひに答へて、

「實は僕も、鐵齋翁の藝術や人格に就いてなら多少は知つてゐるつもりだが、傳記的の方面に就いては殆んど何も知つてゐない。さういふ方面の事は大阪の高島屋吳服店の谷上揺山氏が詳しく知つて居られるさうだから、大阪へ行つて同氏を訪ねて見てはどうか」

といふお話だつた。それから猶氏は

「君が鐵齋の傳記を書くなら、僕もかね〲翁に對する自分の感想を書いて見たいと思つてゐた處だから、成るべく一緒に雜

へ載せるやうにしようではないか」

といふお話で、其の約束をして歸つた。谷上氏に會ふ前に文獻によつて一通り資料を蒐めようと思つて着手した處が、鐵齋に就いて纏つて書かれたものとしては、大正十三年の四月五月に亘つて中央美術に連載された横川毅一郎氏の「鐵齋翁生立ちの記」の外には別段見當らなかつた。其の代り唯一である横川氏の記述は、表題は「生立の記」としてあるが内容は立派な傳記で、主なる材料は矢張り谷上氏から出たもので、生立より始めて晩年に至る迄の一生涯の事が餘す處なく書かれてゐる。これは一昨年鐵齋翁御夫婦が米壽喜壽を一時に迎へた其の喜びを祝福する爲めに、中央美術社より特に横川氏に依囑して執筆を乞ふたものだといふことを聞いた。横川氏は新進の美術史家として近時大いに識者間に認められて來た人だが、和漢兩學に亘り造詣頗る廣く文章また流達である。同氏も亦人後に落ぬ鐵齋崇拜者であつて、殊に此の一篇は熱をこめた力作と窺はれる、鐵齋の高潔なる人格を描寫し得て人を動かすものがある。これある以上最早拙いわが篇など不必要とも考へたが、行掛り上さうもならず、思ひ立つたゞけの事をやることにした。

四月初め關西へ旅行した時、朝早く京都驛に下車した。此の朝空は曇り、冬の如く冷え／＼して、やがて小雨さへ降り出で都の春とも思はれぬ佗しさである。驛前の小さき旅舍に入つて朝餉したゝめたる後、淋しき旅舍の背後に佇みて電話帳を探り、電話を掛けること二通。一回は富岡家に、二度目は内藤湖南博士のお宅へ掛ける。來意を述べるとどちらでも待つてゐるから來いといふ御返事。直ぐに俥を走らせて先づ富岡家の方から訪問する。其處は室町中立賣上るといふ處で、立派な構へだから尋ねるまでもなく直ぐそれと知れた。玄關で刺を通じると、立派な西洋間へ通される。鐵齋翁の子息謙藏氏の未亡人にお目に掛り、改めて來意を申し述べると、快くいろ／＼とお話をされた。

「しかし、父は自身の昔噺しは滅多にしない人でした。老後になつても、先へ先へと進む人でしたから、過去の事には心を留めてゐなかつたのかも知れません。よく人樣がよそで話を聞いて來て、怎んな事があつたさうですがありませんかなぞと仰しやると、さうか、そんな事もあつたかも知れないなあといつた調子でした」と未亡人は云はれた。

お話を伺つた後で、先生の畫室を拜見させて頂いた。それは一番奥の十疊の座敷で、直ぐ其の續きに佛間がある。佛間の襖には冷泉爲恭の繪が貼つてある。一行阿闍梨の圖だ。其の上の欄間に「無量壽佛堂」と西園寺公望公の筆になる額が懸つてゐ

追記

鐵齋先生の傳記を書いて見たいといふことは、私が先年「近世名匠傳」の筆を執り始めた頃からの願望だつたが、種々の事情で遷延してゐるうち、昨大正十三年十二月晦日、鐵齋先生は八十九歳の高齢をもつて其の光彩ある生涯を終へられた。古來の畫人の中でも先生ほどの長命を保たれた人は稀らしい。狩野探幽は長生きしたはふだが七十三。常信が七十八。文晁も同じく七十八だ。北齋は九十まで生きた。だが北齋も九十の歳を迎へると間もなく其の春のうちに歿してゐる。鐵齋先生ももう一日で九十になられるところだつたのに惜しいことをした。それはとにかくあれ程の高齢に達し乍ら筆力が毫も衰へなかつたのは不思議である。云ふまでもなく藝道には底といふものはない。限りなく奥深いものだ。鐵齋翁が沒せる少し前に「畫家も長生きしたい、俺も此の年になつてどうやら思ふやうに描ける」と云はれたので見てもわかる。丁度北齋が同じやうな事を云つてゐる。彼は臨終の間際に「天がもし俺に十年……五年でも壽命を藉して呉れるなら、俺も本當の繪かきになれるのだが」と云つて永久に瞑目した。これらの人達が生の最後の瞬間迄如何に藝道に對する強い執着を有つてゐたかといふことが證明される。さうかと思ふと世には早熟の天才といふもある。しかし、早熟の天才の仕事は多く、一つの方向、世界に向つての暗示であつて、それの完成を示してゐるものは少ない。落ちついた完成された美しさは矢張りかうした多年の研究努力の最後に到達した境地であらねばならぬ。此の意味に於て鐵齋先生の藝術は我國現代の畫壇が有つ唯一の至寶だつた。八十九歳は人間としての天壽を全うしてゐるには相違ないが、優れたる藝術を一つでも多く望む心から云へばまだ〳〵惜しい齢だつた。

鐵齋先生が歿せられたについて私も是非共先生の傳記を書かうと思ひ立つた。そこで或る日正宗得三郎氏を訪問した。正宗氏は鐵齋翁を崇拜すること神の如く、或る意味に於て當代隨一の鐵齋翁の知己とも云へる人だが、私の問ひに答へて、

「實は僕も、鐵齋翁の藝術や人格に就いてなら多少は知つてゐるつもりだが、傳記的の方面に就いては殆んど何も知つてゐない。さういふ方面の事は大阪の高島屋呉服店の谷上擁山氏が詳しく知つて居られるさうだから、大阪へ行つて同氏を訪ねて見てはどうか」

といふお話だつた。それから猶氏は

「君が鐵齋の傳記を書くなら、僕もかね〴〵翁に對する自分の感想を書いて見たいと思つてゐた處だから、成るべく一緒に雜

へ載せるやうにしようではないか」

といふお話で、其の約束をして歸つた。谷上氏に會ふ前に文獻によつて一通り資料を蒐めようと思つて着手した處が、鐵齋に就いて纏つて書かれたものとしては、大正十三年の四月五月に亘つて中央美術に連載された横川毅一郎氏の「鐵齋翁生立ちの記」の外には別段見當らなかつた。其の代り唯一である横川氏の記述は、表題は「生立の記」としてあるが内容は立派な傳記で、主なる材料は矢張り谷上氏から出たもので、生立より始めて晩年に至る迄の一生涯の事が餘す處なく書かれてゐる。これは一昨年鐵齋翁御夫婦が米壽喜壽を一時に迎へた其の喜びを祝福する爲めに、中央美術社より特に横川氏に依囑して執筆を乞ふたものだといふことを聞いた。横川氏は新進の美術史家として近時大いに識者間に認められて來た人だが、和漢兩學に亘り造詣頗る廣く文章また流達である。同氏も亦人後に落ぬ鐵齋崇拜者であつて、殊に此の一篇は熱をこめた力作と窺はれる、鐵齋の高潔なる人格を描寫し得て人を動かすものがある。これある以上最早私のらび食など不必要とも考へたが、行掛り上さうもならず、思ひ立つたゞけの事をやることにした。

四月初め關西へ旅行した時、朝早く京都驛に下車した。此の朝容は曇り、冬の如く冷え／＼して、やがて小雨さへ降り出で都の春とも思はれぬ佗しさである。驛前の小さき旅舍に入つて朝飯したゝめたる後、狹苦しき帳場の背後に佇みて電話帳を繰り、電話を掛けること二通。一回は富岡家に、二度目は内藤湖南博士のお宅へ掛ける。來意を述べるとどちらでも待つてゐるから來いといふ御返事。直ぐに俥を走らせて先づ富岡家の方から訪問する。其處は室町中立賣上るといふ處で、立派な構へだから尋ねるまでもなく直ぐそれと知れた。玄關で刺を通じると、立派な西洋間へ通される。鐵齋翁の子息謙藏氏の未亡人にお目に掛り、改めて來意を申し述べると、快くいろ／＼とお話をされた。

「しかし、父は自身の昔噺しは滅多にしない人でした。老後になつても、先へ先へと進む人でしたから、過去の事には心を留めてゐなかつたのかも知れません。よく人様がよそで話を聞いて來て、そんな事があつたさうぢやありませんかなぞと仰しやると、さうか、そんな事もあつたかも知れないなあといつた調子でした」と未亡人は云はれた。

お話を伺つた後で、先生の畫室を拜見させて頂いた。それは一番奥の十疊の座敷で、直ぐ其の續きに佛間がある。佛間の襖には冷泉爲恭の繪が貼つてある。一行阿闍梨の圖だ。其の上の欄間に「無量壽佛堂」と西園寺公望公の筆になる額が懸つて、

追　記

鐵齋先生の傳記を書いて見たいといふことは、私が先年「近世名匠傳」の筆を執り始めた頃からの願望だつたが、種々の事情で遷延してゐるうち、昨大正十三年十二月晦日、鐵齋先生は八十九歳の高齢をもつて其の光彩ある生涯を終へられた。古來の畫人の中でも先生ほどの長命を保たれた人は稀らしい。狩野探幽は長生きしたはふだが七十三。常信が七十八。文晁も同じく七十八だ。北齋は九十まで生きた。だが北齋も九十の歳を迎へると間もなく其の春のうちに歿してゐる。鐵齋先生ももう一日で九十になられるところだつたのに惜しいことをした。それはとにかくあれ程の高齢に達し乍ら筆力が毫も衰へなかつたのは不思議である。云ふまでもなく藝道には底といふものはない。限りなく奥深いものだ。鐵齋翁が歿せる少し前に「畫家も長生きしたい、俺も此の年になつてどうやら思ふやうに描ける」と云はれたので見てもわかる。丁度北齋が同じやうな事を云つてゐる。彼は臨終の間際に「天がもし俺に十年……五年でも壽命を藉して吳れるなら、俺も本當の繪かきになれるのだが」と云つて永久に瞑目した。これらの人達が生の最後の瞬間迄如何に藝道に對する強い執着を有つてゐたかといふことが證明される。さうかと思ふと世には早熟の天才といふもある。しかし、早熟の天才の仕事は多く、一つの方向、世界に向つての暗示であつて、それの完成を示してゐるものは少ない。落ちついた完成された美しさは矢張りかうした多年の研究努力の最後に到達した境地であらねばならぬ。此の意味に於て鐵齋先生の藝術は我國現代の畫境が有つ唯一の至寶だつた。八十九歳は人間としての天壽を全うしてゐるには相違ないが、優れたる藝術を一つでも多く望む心から云へばまだ／＼惜しい齢だつた。

鐵齋先生が歿せられたについて私も是非共先生の傳記を書かうと思ひ立つた。そこで或る日正宗得三郎氏を訪問した。正宗氏は鐵齋翁を崇拜すること神の如く、或る意味に於て當代隨一の鐵齋翁の知己とも云へる人だが、私の問ひに答へて、

「實は僕も、鐵齋翁の藝術や人格に就いてなら多少は知つてゐるつもりだが、傳記的の方面に就いては殆んど何も知つてゐない。さういふ方面の事は大阪の高島屋吳服店の谷上擁山氏が詳しく知つて居られるさうだから、大阪へ行つて同氏を訪ねて見てはどうか」

といふお話だつた、それから猶氏は

「君が鐵齋の傳記を書くなら、僕もかね／＼翁に對する自分の感想を書いて見たいと思つてゐた處だから、成るべく一緒に雜

へ載せるやうにしようではないか」

といふお話で、其の約束をして歸つた。谷上氏に會ふ前に文獻によつて一通り資料を蒐めようと思つて着手した處が、鐵齋に就いて纏つて書かれたものとしては、大正十三年の四月五月に亘つて中央美術に連載された横川毅一郎氏の「鐵齋翁生立ちの記」の外には別段見當らなかつた。其の代り唯一である横川氏の記述は、表題は「生立の記」としてあるが内容は立派な傳記で、主なる材料は矢張り谷上氏から出たもので、生立より始めて晩年に至る迄の一生涯の事が餘す處なく書かれてゐる。これは一昨年鐵齋翁御夫婦が米壽喜壽を一時に迎へた其の喜びを祝福する爲めに、中央美術社より特に横川氏に依囑して執筆を乞ふたものだといふことを聞いた。横川氏は新進の美術史家として近時大いに識者間に認められて來た人だが、和漢兩學に亘り造詣頗る廣く文章また流達である。同氏も亦人後に落ぬ鐵齋崇拜者であつて、殊に此の一篇は熱をこめた力作と稱はれる、鐵齋の高潔なる人格を描寫し得て人を動かすものがある。これある以上最早私のちび筆など不必要とも考へたが、行掛り上さうもならず、思ひ立つただけの事をやることにした。

四月初め關西へ旅行した時、朝早く京都驛に下車した。此の朝空は曇り、冬の如く冷え〴〵して、やがて小雨さへ降り出で都の春とも思はれぬ佗しさである。驛前の小さき旅舍に入つて朝餉したゝめたる後、狹苦しき帳場の背後に佇みて電話帳を繰り、電話を掛けること二通。一回は富岡家に、二度目は内藤湖南博士のお宅へ掛ける。來意を述べるとどちらでも待つてゐるから來いといふ御返事。直ぐに俥を走らせて先づ富岡家の方から訪問する。其處は室町中立賣上るといふ處で、立派な構へだから尋ねるまでもなく直ぐそれと知れた。玄關で刺を通じると、立派な西洋間へ通される。鐵齋翁の子息謙藏氏の未亡人にお目に掛り、改めて來意を申し述べると、快くいろ〳〵とお話をされた。

「しかし、父は自身の昔噺しは滅多にしない人でした。老後になつても、先へ先へと進む人でしたから、過去の事には心を留めてゐなかつたのかも知れません。よく人樣がよそで話を聞いて來て、怎んな事があつたさうぢやありませんかなぞと仰しやると、さうか、そんな事もあつたかも知れないなあといつた調子でした」と未亡人は云はれた。

お話を伺つた後で、先生の畫室を拜見させて頂いた。それは一番奥の十疊の座敷で、直ぐ其の續きに佛間がある。佛間の襖には冷泉爲恭の繪が貼つてある。一行阿闍梨の圖だ。其の上の欄間に「無量壽佛堂」と西園寺公望公の筆になる額が懸つてゐ

る。

板敷の處で、鐵齋翁の未亡人と思はれる老婦人がお盆の上へ大きな白い團子を盛つてゐる。今日は丁度百ヶ日に當るといふお話だつた。丁度其の日にお訪ねしてかうしてお位牌を拜むといふのも何かの因縁のやうな氣持がした。

庭園は廣く、大木が多くて、非常にさびてゐる。奧さんは庭の石燈籠と手水鉢を指さして、それが八幡の松花堂にあつた物だと云つて説明された。庭園の彼方に煉瓦造りの頗る宏大な倉庫が立つてゐる。これは書庫だつた。

正午近くに、前の宿俥を雇つて頂いてお暇を告げた。

内藤博士のお宅は洛外田中村にある。が勿論まだ行つたことはない。御所の内を走り乍ら俥夫が番地を聞くから番地は知らないと云ふと、田中村はやゝこしい處で番地が分つてゐてすら中々探しにくい、ましてや番地が分らないでは尋ねやうがないが、名前は何と云ふ人ですかと尋ねるので、内藤湖南といふ人だと答へると、あゝ湖南先生でしたら知つてますと云ふ。流石は王城の地で車夫馬丁と雖も學者の名前を心得てゐる、と私が感心してゐると、其の俥夫は廿二三のいなせな男で、旦那は東京のお方でせうが、東京は宜しうおますな、私も地震前から先先月邊りまで東京は柳橋で働いて居りました、京都へ歸つて來ると何だか眠たうなつたやうな氣持であきまへんと云ふ。柳橋ぢやあ綺麗なお客を乘せたことだネ、君なぞは若くていゝ男だから騷がれたらうと云へば、へへへへへ、旦那の前やが面白い事もありましたと次第に車の運びが遲くなるのである。通りすがりのカフエーに立寄り、車夫と共にライスカレーを食し、再び、車上の客となつて洛東田中村へ行く、村とは云へど町續きである。

内藤博士のお宅は、いかにも博士にふさはしい、そして京都らしい造りだつた。玄關まで書物が一杯積みあげてある、奧の方の座敷から見ると、庭の向ふは一面に大きな竹の籔になつてゐる。主人は小作りな體で、頭髮は半ば白く、無髯の柔和な顏立ちだが、眼光だけが一と際鋭い。

「鐵齋老人とは僕が昔朝日新聞に居た時分からの知合ひだが、其の後僕が京都へ來るやうになつてから晩年まで大變懇意にしてゐた」

と云はれて、博士はいろ／＼話して下すつた。就中、鐵齋翁の學問系統に關する事柄などは殆んど皆博士から伺つた話である。

餘談に亘り、二時間近くもお邪魔をして辭去した。

待たせて置いた俥で停車場へと向ふ途中、四條下る寺町を通

つたから序でに大雲院へ立ち寄つて富岡家の墓所に詣で、白木の墨痕鮮やかなる鐵齋先生の墓標の前に額づいた。毛のやうな雨が私の顔を曇らせる。

其の日のうちに大阪へ行き、翌日谷上氏を訪問すると谷憫同氏は旅行中でお目に掛れなかつた。其の後私は一ケ月餘り支那を旅行し、五月半ば過ぎに歸國した。爾來匆卒の間に筆を執つて本傳を草したのである。

追記の筆を擱くにあたつて、富岡家、内藤博士、横川氏、正宗氏、以上の方々の御好意と御援助に對して深く謝意を表する次第である。

附錄第一 鐵齋先生（見聞敍記）

正宗得三郎

人に逢ひ、接し知り合ふと云ふ事も一つの緣である。私の富岡先生に會ひ得た事も亦不思議にも想はれるが自分が前から非常に先生の作品に憧憬してゐた爲めに先生に逢へたとも言へる。

大正八年の晩秋や、寒い日であつた、私は二科京都展覧會の爲めに入洛してその後ずつと滯留してゐた。私の宿つてゐた處は先生も嘗つて住まつてゐられた事のある賴山陽の舊栖、山紫水明處の隣で同じく東三本木であつた、そこから先生の御宅は餘り遠くはない。寺町から御所の廣庭を通り抜けて、蛤御門をくぐつて、交番のある角から中立賣に出るとすぐと黄土色の土塀、古風な門に竹の戸が閉つてゐる。それが翁の御宅である。何んでも先生が三十年前の昔、この家の前を通つてゐると、門の處の楓が紅葉して風情が佳かつた。それが第一の緣となつて購なはれたとの事だ。それからずつとそこに居られた。床の下い玄關であつた。

私はその數年前から、令息謙藏氏のゐられた時に先生の作品

を御願ひしてあつた、それが出來たので、表裝して箱書きの御願ひ傍々先生に會へるとは豫想しないで、若奥樣（藤藏氏夫人壽子）を訪ふた。通された座敷は薄暗い古ぼけた感じの室であつた。私は待つてゐる間にそこに立てゝあつた小屏風を覗いてみると、「一惠老人の扇面草花、爲恭の短冊、又無落疑の土佐繪、官女の畫、それには「一惠老人余に談り田中納言の筆なりといふ鐵齋」と書いてある。一惠なども知つてゐられたのかと思つた、床に支那、明畫小幅山水が掛つてゐる。古風の感じがして來た、そのうち、とし子夫人が出て來られた。

その年はルノアル翁の亡くなつた時で、私の京都に滯在してゐた緣故から大阪朝日新聞にルノアル翁の事を談つた、その時の談話に日本で謂へば鐵齋翁の樣な晩年生活であらうと云つた、そしたらその記事の見出にびつくりする程大きく佛國の富岡鐵齋などと書いてあつた。

夫人とその記事の事だの先生の日常生活など訊ねてゐた。父が御目にかゝると言つてゐますと云はれたので、これは會へるのだ、いゝ事だと自らよろこんだ。

今でもその時の記憶は判然としてゐる。翁八十四歲の時である。翁は息をハアハアとはづませつゝ出て來られた。黑目の十德を着て首に何か裂を捲いてゐられた。着物は茶微塵と云つた風のものであつた。私は先生の筆太い作品から想像して大きな人かと想つてゐたら翁は小柄でどちらかと云へば華奢であつた。然し白髪赭顏、仙客の樣であつた。非常な高齡の爲め言葉はハツキリとは聽き取り兼ねたが、音聲は何處か強く肺腑に滲み込む樣な處があつた。何か書いてゐられたのであらう、指先きや手が墨で汚れてゐた。

「これを、あなたに上げる」と云つて持つて來られた紙包を下さつた。その上包には「おかしき筆」と書いてあつた、中を開けると、繪短冊で上部に蝸牛が青い木の葉に宿つてゐる。歌は「身をいるるはすかばかりの家ながら住めば事足るかたつふりみよ」　教訓の歌であつた。上の蝸牛がよく寫生してあると思ひつゝ眺めてゐた。

翁はやゝ笑顏に「この歌は蝸牛によつて世の戒めに作つたものじや――、私の書室も小さなものだが、それでも用は足りる。蝸牛の事は事文類聚にある」と言はれた。その後、此の短冊を表裝して持つて行つた時、その函蓋の裏面に事文類聚、隱者宜作圓舍形如蝸牛名之曰蝸牛廬、我邦にて蝸牛の歌をよめる者寂蓮法海「牛の子にふまるな野べのかたつむり角あれはとて身をはたのみそ」先生の函書は天下一品である。

私は常つて翁の呂僊鍊丹圖の極彩色を惚れ〳〵見た記憶があ

る。山の岩窟の中で閑居してゐるのは面白い圖だと思つてゐた。巖穴で丹を錬ると云ふのは何んだらうかと思つてゐた。

それで、先生錬丹とは何を錬つたのですかと問ふと、翁は「とし子、硯と紙を出して貰ひ度い」と云はれた。夫人が硯と紙を出すと、その半紙に歌と略圖を書いて示された。先生は總て教訓的に解釋される習慣がある樣で。

「その丹を錬る心はこれだ」

それは桃水和尙が四條河原で乞食に藥を煎じてやる圖である。

始め半紙の一方に「うき事の猶もこの身につもれかし捨てし心の信ためさん」その下に白隱と書かれた。左側に乞食が寢て、その傍で桃水和尙が焚火して藥を煎じてゐる。乞食の上に蒲團を描きそへ、蒲團と字を書かれた。それは物語り畫だ。

この歌は白隱が桃水の心を詠つた歌である。丈夫はこれ位の覺悟がなからねばならん。

これも教訓である。(その後その略畫の傍に「眞實慈愛之圖」と書かれた。)

先生は更に、この白隱と云ふのは、そ――れは豪い坊主である。六十年この方白隱程の禪師はゐない。今時の坊主には見る事は出來ん。

白隱の書いたものは、東京の細川侯が澤山藏してゐる。私の處にもある。あなたの云ふ仙崖より畫に於ても、禪に於てもずつと上だ。坊主で畫の描けたのは、白隱、仙崖、○○(忘却した)の三人だ。あの勝安房はめつたに床に軸は掛けぬ。掛ける程の人物はゐない。然し白隱のものなら掛けると云つてゐる。

白隱の著したものの中に「夜船閑話」と云ふ書物がある。その中に白隱が白河の岩窟に白幽子を訪ふて教を乞ふた記事が出てゐる。私はそれを讀んで、その岩窟を探して碑を建てた、書物を見ると天下の事は皆分る。そこへ何日か案内してあげてもよいのだがと云つてゐられた。

昨年の秋、富岡さんのお宅の人達と、その白河の岩窟を見に行つた。白河村から左手に這入つて山に登り、暫くしてから雜草の小路を分けて左手に登ると、成程岩窟がある。よくこんな處に住んでゐたものだと想はす處である。そこに先生の建てた碑がある。正面に「白幽子巖居之蹟」裏面に

白幽子名慈俊石川丈山之弟子石川克之弟也晩年隱居此處嘗爲
白隱禪師說內觀修養之法矣往年余與同志相謀修其墓而今亦恐
其巖窟及淸之煙滅再議建石以謀不朽

明治三十九年十月　鐵齋

富岡百錬識幷建

この白幽子の書幅も二つ翁の處で拜見した。

先生は、

「繪は金にす可きものではないが、私はこれ達の女子供を養はねばならぬ」と言つてゐられた。

私の考へでは先生は丁度渡邊崋山の樣な立場であつて、寧ろ畫で急を救われた點が多い。例へば一家の沒落、神社復興、佛閣保護、遺族の生活、そこは大雅、竹田、蕪村と行き方が違ふ、志士となり儒者となつて、風流三昧にひたつたのとは少し異つてゐる。

先生は又「私は元來畫家ではない、儒者だ、畫は丈夫のやる物ではない、然し歳とつて五背が損つてゐる。何の用にもたたない老人だ、それで餘技に畫は描いてゐるが意味のないものは描かぬ。何か世の戒めになるものを畫く。然し一度畫にも志したからには天下に名を成す丈の畫は書くつもりじや――。畫に於ても、己の趣味を追つて徹すれば天下敵なしだ。」

翁はよく天下と云ふ言葉を使はれた。豪氣の風にきこえてゐた。

翁に言葉を通ずるには、聽信器を使ふのであるが仲々分り憎い、きゝ間違へられる事もある。翁は聽信器を嫌つて、多くは先生の話しを聞くか筆談するのである。それでも翁は出て人に會はれる時は必ず聽信器を山女の籠に入れて持つて來られる。

「この聽信器は獨逸のグラゼ博士が贈つて呉れた、グラセ博士が日本に來た時、私を訪ねて來た、私の耳聾を診て、最少し若いと獨逸に連れて行つて治してやるが、餘り老體でおえんと云つて、獨逸に歸つてからこれを贈つて來てくれた、獨逸は豪いものじや」私はその御禮に畫を贈つたが今どうなつてゐるか。と言はれてゐた。

私は今度の歐洲旅行の時伯林に行つた、その記憶のグラゼ氏に逢ひ度い興味があつた。そしたら偶然同伴の太田正雄君がよく知つてゐる、又兒島喜久雄君も知つてゐた、それで同氏を共に訪問した。

グラゼ氏は近代の佛蘭西畫家、マネー、ルノアル、セザンヌ、又マチスは澤山藏してゐる。

マダム、グラゼは「キョトのテツサイは、ジョブカ」と訊かれた。未だ丈夫で盛んに畫を描いてゐられる、この頃の作品は實に佳い作が出來てゐます。巴里に來られたら御覧に入れるものがある。御宅の鐵齋の軸を覽せて下さい。

一幅は絹に青綠山水、一幅は紙本の水墨山水、又扇面が二つある。軸は翁の話しのもので、グラゼ博士に贈ると函に書いてある。扇面は、代赭と藍の淡彩山水であつた。グ氏の所有の中

のセザンヌの畫は水彩畫の淡彩で、その畫の趣が東西似てゐるではないかと云つて、セザンヌの畫と鐵齋の扇面を列べてどちらが佳いかなどと話した事であつた。先生の藏書中レンブラントの素描の畫集は同氏の贈つたもので、その畫集は桐の函入りになつて、和蘭陀畫家レンブランド畫集と書いてあるのを一度拜見した事がある。

○

其後再び先生を訪問した時、蝸牛の宿の樣な畫室を見せて貰つた。室は十疊敷位の粗末なもので室の中は書籍が一ぱい積まれて、翁の居られる處は疊一疊敷位明いてゐる。そこに汚れた白毛氈が敷かれて、筆洗、硯箱がある。その畫室に連なつて、書籍庫がある。そこの界に藤原爲恭の描いた弘法大師、支那遊歴圖が貼つてある。書棚でも硯函でも至極有合せの粗末なものがあるかと思ふと、先生の謂はれる、世界の珍書、珍器がある。木米の火鉢などが放り出されてある。先生の說では寶もしまい込んで置いてはなににもならぬと謂われてゐた相だ。

夫人の話しに、父は餘り片づけると本が分らなくなると云つて、この足場もない書籍の間をぴよんぴよん飛んで歩いてゐますと話された。

翁は人に談話される時、話に連關してよくいろいろの書籍や珍品を見せて考證的說明をして下さる。その日は日記帳風のものを出して見せられた、それにはいろいろの事が細大漏らさず記入され又貼附されてある。中には新聞の切拔まで貼つてある。どんなものが切り拔かれてあるかと思つて見ると、新聞に出てゐる人の傳記でも、或人が支那に漫遊した記事でも僅かのものも貼つてある。翁は每朝數種の新聞を通覽して、その中で一寸した記事でも自分の必要のものはすぐ切り拔かれた相だ、或新聞に翁の畫と吳昌碩と對比した評があつた。

先生は家人に吳昌碩と儂の畫と同一に見られては困ると云われた相だ。私には「吳昌碩は畫は拙いが、篆刻がよい、又字の方が未だよい」と言つてゐられた。

その日見た二三冊には、表紙に「無用の用」と書かれたのもあつた。中には賴三樹三郎の捕へられた時先生は、護送される三樹三郎を粟田口まで送つた、三樹三郎が白木綿で全身を包まれ後手に縛られ軍鷄籠に乘せられてゐる。その軍鷄籠は網がかゝつてゐる圖と下にその記事が書かれてある。象形文字、奇字が澤山書留めてある。

支那の西湖の三枚續き色繪葉書もあつた。斯して畫材の研究を爲されるのかと想つた。特に珍らしく感じた事は西洋の小供の顏の石版繪葉書である。それは極つまらないものであつた

が、先生に何か、明暗とか、生き生きしてゐるとか、肉色がよいとかの興味を持たれたのであらう。セザンヌが流行雑誌の挿畫を手本に描いてゐたことが考へられた。

長崎で寫された、いろ〳〵の寫生もあつた。又亞歐堂田善の銅版畫がある。

「これは西洋の版畫のやり方で大變手間のかゝるものだ」と云はれた。

大鹽平八郎の動亂の時の瓦版を見せて、

「大鹽は陽明學を間違つた方面に解してゐる。然し大鹽と云ふ男は仲々の奴だ。京都におみつと云ふ女で耶蘇の魔法で世人を騙くらかしてゐた、それを大鹽が見破つたのじや。」

薄紙に柿だの栗などの菓物寫生圖があつた。

「これは應擧の寫生だ、應擧はよく寫生してゐる。然し景色の寫生は文晁の方が上だ。人物は崋山が西洋醫術の解剖學によつて、よく寫生をしてゐる。私の處にも人體解剖圖がある。」

探幽の縮寫圖も貼つてあつた。

「探幽は豪いものじや、探幽は眼がきく、眞贋が分る。各所の大名などが畫を購入する時、探幽の處に鑑定に持つて來る。探幽はそれを一々縮寫して研究した。」

椿椿山の色彩法も寫されてある。それは草汁、藍色をつくる、やり方である。

翁は小函から青黛を出されて、

「これは日本には他にない品だ。私もこの藍はめつたに使はない、大切にしてゐる。古渡波斯の國産青黛で、原木草學士、兒島氏から傳來したものだ、あなたに少し上げ様と云はれて、その由來まで書いて指頭位の小塊を下さつた。

西洋畫は繪具で描くが、日本畫は墨と、藍と代赭があれば何んでも描ける。日本にも代赭がなくつてはならんと想つて探してゐたら、果して伊豆國下狩村にあつた。(函の中に一々作處を記入されてある)

翁は又古詩箋を出された。

「これは西洋畫風に色で描いたのだが、よく寫してある。」

それは嘗つて見た事のない立派の大詩箋で種々の草花が沒骨描法で色で寫いてある。先生の草花描法にはこの調色が見受けられる。

畫室の隣の室はもと、小川宗匠の茶室のあつた蹟でその時は先生の居間になつてゐた。香の薫が馥郁と漂ふてゐた。そこに先生の描かれた、青緑、樓閣の蓬萊山があつた。それは函書に持つて來てゐるのである。

先生は常に絹に描く事を嫌つてゐられた。又蓬萊山で、金を

とるのはいやだといつて、依頼されても暫くそのまゝにしてゐられたが愈々描かれる時は古墳から發掘した朱で塗られた相だ。それを掛けて自分で看てゐられた。この趣味のある室で、金の湯沸で湯をたぎらし、翁手づから、西園寺公から贈られた茶だで御馳走すると云つて、玉露を入れて頂戴した。

翁は函から、印を出されて、

「これは木米の造つた印だ、この上薬の乳は木米があの時代に研究したものだ、篆刻も木米が彫つた。篠崎小竹が、知字木米と謂つてゐる。あなたはその意味が分るか。陶工に文字の讀める人は少ない、その中で木米丈は書が讀めた。そ――れは木米は豪いものぢや、支那の陶器に關する書物は皆讀んでゐた。陶工になるからには天下の陶工になる覺悟でやつた。あの學者の竹田が、我天下書無レ不レ讀。天下事無レ不レ記而翁讀二吾未レ讀之書。又記二吾未レ記之事一と云つてゐる」

先生の一面に書を書いた袋から小さい絹物を出されて、

「これは竹田が漆で書いたものだ、山で酒など飲む時さいを入れるものだ。これをあの直入が慾しがつて、私にくれいと云つたが、私は直入の人物を好まなかつたのでやらなかつた。直入と云ふ男は、どうもならんのじや。」乾山の和蘭燒のうつしの茶碗を取り出して、「この燒つけの色には苦心の跡がある」と云はれた。

私は、先生、畫でも乾山は、光琳よりはよくありませんかと云ふと、

「そんな事は言へない、光琳は光琳で豪いものだ、光琳は畫の爲めに財産まで皆失くした、金や銀、高價な繪具を惜氣もなくつかつて、大名を驚かした。私は光琳の居た蹟も知つてゐる。寫生して置いた。」

先生は竹田を御知りですか。

「私は知らない、然し竹田の書いた本は皆藏してゐるつもりじや、竹田は豪いものだ、詩に於ても賴山陽の上じや、たゞし詠史はこりや――山陽獨特のものだ、竹田は賢者になる可きものが、學問に志して、藩の許しを得て學問をした、又畫を學んだ、一度畫に志したからには天下に名を成す覺悟でやつた、竹田は畫はうまいと云ふのではないが、學問がある。何んでも精い、天下のものは皆知つてゐる。而して意味のないものは描かぬ。第一風韻がある。畫に風韻があると云ふ事は、そこをよくきゝなさい、學問が深い爲めじや、學問があると見識が出來る、先日手に入れた野菜の畫帳に題賛があるが流石竹田だ、竹田でないとあんな賛は書けぬ、竹田は何んでも知つてゐた」然し私も學問に於て竹田に敗けるとは思はない。

竹田が山陽と、あの大鹽平八郎の處に招かれた事がある。大鹽の處に支那の趙之璧の描いた「月下蘆雁圖」と云ふ大した軸があつた、山陽は一見、心竊に欲しがつた。大鹽はすぐとその心をよんだのじや、大鹽は與力をする位の男だつたのですぐその意を悟つた。後日その軸を京都の山陽の處に贈つて來た、流石の山陽も驚いた、然し竹田は眼がある。山陽にあの大鹽と云ふ人物は必ず何か企んでゐる、餘り近づいてはならぬと忠告した、果してあの陰謀を企てゝゐた、竹田の方が眼が鋭い。

私も支那と、日本の事なら何んでも知つてゐる　訊ねて貰ひ度い。東京に歸られたら書面で御答する。」

もう御晝になつた、あちらで一ぱい上つて下さい。と云はれた。

私は元の座敷で晝飯を頂いた。その時老奥樣（先生夫人春子）の手造、先生の畫を描かれた合作の盃で一二杯酒を頂いて、その盃を頂いた。

先生は自ら書癖と書いてゐられる。書籍についてはまるで書狂であつた相だ。富田溪仙君が私に話したのに、六角堂に毎月書籍の市が立つ、自分（溪仙）もその日は朝早く出懸けるのだが何日も鐵齋さんは先きに來てゐる。そしてまるで書籍の上を獸の樣に這つてゐる。そして本を見てはぽん／＼投げ出してゐる。どんな本を探し集めてゐるのかと思つて見ると、何んでもない本なのだが、何か一字でも眼を惹くものがあれば買つてゐる。

夫人に訊くと、翁は書籍を讀まれるのが實に早い相で、あの老眼で、どんどんめくつて見られる。つまり何か集めてゐられるのだらう。さうして中の必要の事は拔書きするか、本に記入されてゐる。他の本と照り合せた事が本に記入されてある。又その本が函に入れてあると、その函の蓋さへ見れば中にどんな事が書いてある本か解る樣になつてゐる。その函書きが仲々振つてゐる、畫まで描かれてある。後年は多く畫に關する書物を集めてゐられたと大阪の鹿田書店の主人が話してゐたが、兎に角本は非常に好きで、老年生活の樂しみは新らたな書物を得らるる事であつたらしい。あの藏書庫は、先生の一大事業である。

先生は本屋が本を持つて來ると、慾しくはない本でも買つてやる。買はないと持つて來なくなる、と私に話してゐられた。

私が翌年支那の器局を得て、茶碗と共に持つて行つた。

翁は有難いが然し今は器局は無くつても下女がちやんと茶を持つて來る。私の處にも器局はあるが今は本函代りにしてゐる

る。然し後でこれに朱漆で何か書いて置かう。又翁は茶碗の字(禪師指南方)を見て、

「支那は文化の國じや、こんなものにも字義がある。文字に皆意味がある、それは世界に支那丈だ。」

「支那の北京にゐる羅振玉から立派な詩箋(石濤和尙畫東坡時序詩意、畫帳中の畫を印刷したもの)を澤山贈つて來たが、何か返禮にこちらから贈り度いと思ふが、日本から支那に贈るものは何にもない、支那には何んでもある。しかたがない、私の畫いた畫でも贈るつもりじや——。」

先生の御宅は三百坪位ある。庭はさ程も人工は加はつてゐないが、支那風の亭がある。その亭には先生の描かれた、黑漆塗に朱漆で風竹の額などが掛つてゐて、その前に小流が造られ水道から水が憤出する樣になつてゐる。その傍、巽の隅に石の祠があつて、前に朱の鳥居がある。翁は毎朝未明に起き洗面含嗽し髪を櫛けづりて、この祠に詣で天神地祇に禮拜せられる。今一つ艮の隅大木の近くに木造りの祠がある。庭の中央に井があつて、こゝには支那西湖の小梅を移し植へられたのが丈餘に延びてゐる。乾の處に書籍庫が二つある。以前は木造であつたが、數年前鐵筋煉瓦に改造せられてある。それが魁星閣で入口の處に魁星の圖と、字が緑靑と朱で刻してある。中には書籍、軸、謙藏氏蒐集の古鏡が陳列してある。書籍は帙があつて中の本が出てゐるもの背丈になつたもの先生が毎日こゝを逍つてゐられる事が分る。

書庫と居間に續く長廊下がある、下は瓦敷きで、支那の提燈、書額が飾つてある。門近く椿の木が高く聳えてゐる、この樹は翁の度々畫の材料となる樹で、これは長壽を意味する樹だ相だ。「蓬萊山」「古石長椿」などの圖に描き込まれてゐる。先生は甘草を好んでよく寫かれてゐる。「甘草一名宜男草」又忠孝になぞらへてある。

大正十年私の入洛した時は、翁八十五歲であつた、大阪高島屋美術部で先生の第一回作品展覽會があつた、その時は畫が四十點餘、畫幅、茶器、十數點あつた。私は伊澤三辰君(孫女婿生子の夫)ととし子夫人に携はれ大阪に觀に行つた。畫は大抵紙本で、五點丈絹本があつた。今想つても先生の作品はこの前後より熟達せられた樣である。翁の畫家として自任せられてから二三十年になられる。そして生活の樂になられたのもこの十數年からだとの話しであつた。從つて先生の作品の世に認められたのも多くこの十數年來である。

その時の展覽會場は、同店が燒けた後で、江戸堀の美術部で、座敷に陳んでゐて近づいて見る事が出來て都合がよかつ

た。第一に作品の層重さと明晦と觀らる可き調子の好果がこれ迄の輕い南畫と異つた働きを以つて眼に接した。題材が、又各方面に渡り描法も變化してゐる。

この會の中で大作の部で、「南極壽星」は玉版箋全紙に描かれたもので油畫の様な彩色だつた。この構圖は支那の石刷りから作られたのだ相だ。翁の口から「あれは色彩に苦心した」と云つてゐられた。朱の衣に袖口は群青又綠青の模様がある。朱が紙に滲した味ひ、壽星の顏が赤い代赭で、口は紅、齒が胡粉でまるで柘榴の口を開いた様である。鬚が墨と白粉で針を植えた様である。節の先きに桃と枇杷。何處となく太古の如く蠱惑の不思議な感じを受けた。墨畫「蓬萊山群仙」その樓閣は、立體、幾何畫的、直線の構差力と最も在來の日本畫に乏しい、第三線たる奥行き線がある。運筆は走りもせず、停滯もせず、建築物が定木で引いた様な直線で引かれてゐる。仙人は芋蟲の様であるが、手足がその方向、存在を强く示してゐる。翁は昔し地圖、地理の實地測量をやられた關係からであらう、山水だけでなく人物畫にも妙に意識力が働いてゐる事を感ずる。「東坡三養圖」は最も長大幅であるが全面墨色で、筆は太い、家の中の東坡と侍女丈が細毫で描かれてある。そして侍女の頰丈淡い臙脂を流して墨色の中に一點花を映せてあつた。水墨畫であるが、大和繪式の「花櫻人武士」と云ふ、大石とおかるの物語繪は、朧月の櫻花の下に大石がうたたねをしてゐる。おかるが訪ねて來てゐる。「あの圖を描くには本を大變調べた」と云つてゐられたが、畫の餘白に一面に和文が書かれてある。大石の寢そべつた形がよく出來てゐる。

山水畫中、「山居隱俗」「看山隱俗」前のは秋景で王叔明の皴法、螺旋形の岩が積み重なつてゐる。山の峰は紙の外に出て、飛瀑が上から幾段にも隱見して落下してゐる。茅屋二三軒、橋上に遊子が憩つて山煙を看てゐる。理想境で、相阿彌とか小堀遠州が庭を築く様な構圖である。全面代赭と墨で、濃く淡く塗り、橋上の人物の衣丈僅かの綠青が施してある。岩が如何にも積み重なつて立體の層重がある。そして深遠の感じがしてゐる。「看山隱俗」は墨と藍の山水で、溪澗松柏圖である。山亭中の君子にこれは代赭が僅かに使つてあつた。

「江邨煙雨」水墨畫の眞黑い方の畫で、幾度も墨を重ねた様に見える。竹田山人が玉堂の畫の坪中三可中一可として烘染皴擦深透「紙背」と云つてゐるが、これは更に深く透つてゐる。隔たつて見る時雲煙中、山が聳え立ち、重みがある。「天保九如章」「山居適意」の方は線の方だが、山の凹凸が引き出てゐる。絹本は先生が嫌つてゐられたが、絹本にも佳い作もあるが、翁の塗抹法に絹本に不適當の點があつた様だ。絹本は紙本より手綺麗を要求

してゐる爲めであらう。

然し「福祿壽會」「呂巖學仙」は仲々美くしい。色彩は派手で總て太古の雅趣をたゝへてゐる。「呂巖學仙」圖は三角形の構圖で、線が三角形の中心に向つて集まつてゐる。こんな構圖法と描寫法は何處から學ばれたのか、鐵齋を研究する人は注目するとよい。

この展覽會を見て來た後で、私は翁に連れられて高田と云ふ書畫屋に行つた。そこには澤山翁の作品を藏してゐる。その日は先生の作品を室一ぱいに陳列してあつた。中で桐の四曲半双は珍らしいものであつた。それには四君子が畫いてある。菊などは眞黑い菊で花粉脈葉が金で描いてある。南畫、琳派描法が混じた樣な描法である。蘭は綠青、竹は朱竹である。其下塗は桐の目をつぶす爲に、黃金末、藍、代赭で押へてある。裏面には瓢などの形を描いて、一面に文字が書かれてあつた。又煎茶の道具が一揃へあつたが總て翁の筆になつたもので、南畫とも土佐とも云へる樣な綺麗のものだ。器局には宇治の鳳凰堂が赤く描かれて、その裏面に、山陽の煮茶の詩がある。

翁はこの詩は山陽の御茶の詩だ。若い時は女郎買ひなどするが、人は歲をとると茶などの味がよくなると云ふ事を詠つたのだ。

其時私は先生の展覽會を大阪に行つて拜見しましたが、どの作品が先生の特意な作なのでせうか。

「私にも高島屋から是非見に來て、貰ひ度いと招かれたが、自分の作品を観には恥しくつて行けない。あなたは見たかどうか、あの會の畫を立派の本に仕立てて、それに私に題を書いて貰ひ度いと云ふのであつたが、自分の畫集に題を書くのは六ケ敷い。それで考へた上「掃心圖畫」と書いた。

「私の畫を見て下さるなら、第一に畫讃から讀んで貰ひ度い、私は意味のないものは描いてゐないつもりじや、展覽するに花鳥畫がないと寂しいといふので、二三點畫いた。然しあれは婦女子に見せるものじや。私は畫家ではない儒者だ、それでこの畫集の序文を知人諸子が書いてゐるが、皆それに苦心してゐる。私を畫家と謂ふと私の不滿の事を知つてゐる、それで皆んなが學者と書いてゐる」と云つて破顔してゐられた。

翁は白の葡萄酒、一二杯で眞赤になられた、御粥と鰻の這入つた茶碗蒸を上がられた。

「先日狩野芳崖の展覽會が博物館にあつたので覽に行つた、あなたは西洋畫家であるでどうか知らないが、畫は風韻が第一だ、芳崖の畫には風韻と云ふものがない、あれは時間さへかけ

れば出來る畫だ。」

私は床に掛つてゐる軸を眺めてゐた。

翁は、「私は斯んな畫が好きだ。これは沒骨畫法だ、支那の宋時代からあつた描法だ。こゝの主人が毎日私の處に小芋を持つて來てくれる。其ぁ小芋と代へたのだ。この畫の意は支那の〇〇が貧乏して食に飢えてゐた。百姓があなたは將來必ず宰相になる相があると云つて、芋を馳走した、果して後に宰相になつた其の圖である。

今日では畫家は仕合だ、昔は畫では金はとれなかつた、豪い畫家でも皆苦勞した。今何萬圓と云ふ竹田の畫も人に贈つたものだ。畫が出來ると山陽に贈つた。竹田の畫に山陽の贊のあるものは特別に高價だ。それは、その筈で、竹田は自分の畫の分る人は山陽一人だと思つてゐた。畫が出來ると山陽の贊を求めた。除山陽外不容他人著一語と云つてゐる。今は私の畫でも何千圓もする。この頃は坊主まで畫を描いて金をとる。坊主では金にならぬ、それでお寺のことはそつちにのけて畫を賣る」と談られた。

私はその日晝飯を他に招かれてゐたので先に失禮する事にした。

先生は外を視かれて、「ほー皆んなが美くしい風をして通つてゐる」その日は御祭であつた。翁は、「私もこれから本屋に寄つて歸つて晝眠しないと遲くなる。」と云つてゐられた。

先生は晝飯後十分か二十分位晝眠してゐられた相だ。

〇

少しく先生の畫を描かれる順序を述べる。

翁は書を讀んでゐるうちに畫題を得られる又、古畫を觀てその遺法を傳へられる場合が多いらしい。從て先生自ら儒者にして畫を描く謂はれであらう。普通翁の樣な意味の教訓的觀念で畫を描くと概念的になつて畫面の面白味が失なはれるのであるが、先生は畫術に於て先天的の天稟と、畫道に精通し概念丈に捕へられず寧ろ面白く生かしてある。そして表現法が單一でない。又畫題と描法に意味をもたせてある。例へば芳野山、櫻花、日本の宮人等は大和繪式の畫に和風の書體で贊が書いてある。從て印もそれに適したものを選んであると云ふ風で、俗に云ふ、いはれいんねんがある。翁が、私しは意味のないものは書かぬ」又家人に「僕の畫は一見無造作の樣だが悉く意を注いで描いてある。それを注意して見れば眞價が見分けられる」と云はれた所以である。

先生は紙本の時は下圖なしに、大抵上部から紙を捲きつゝ畫

かれる。淡墨で最初描かれて、漸次重淵而染、焦墨、宿墨を重ねて行かれる。絹の時は略畫の下畫があるが、それは至極簡略のもので、山の位置、人物、屋家がしるしてある位だ。僕は出來上つた畫と下圖とくらべて見たが、その位置迄異つてゐた下圖はほんの當りなのだ。翁は老年になつて絹の枠張りの上に乘られる事も困難であつただらうし、目が不自由で、近くを描いてゐると上部が見えない相だつた。それで紙なら、捲きながら染んで書いてゐられたのだ。

一度描かれて暫く乾くのを待つので、一度に二枚書き始められる時がある。冬季は仲々乾かない、紙面に手で觸つて乾いた上に上にと畫き加へられる。絹の時も二三枚一處に列べて彩色される相だ。

何日か繪具屋の話しに、鐵齋さん位むちやの先生はない。繪具を一つ一つ撰んで仲々六ケ敷事を云はれる。それに汚れた筆でぐさ／＼と繪具をかき廻して着けて見られる。あれなら何もあんなに六ケ敷く撰ばなくてもよさ相なものでしよ。と云つたので、私はそれがいゝんだよ、と云つてやつたらさうですかなと云つてゐた。

先生の書かれた色彩論があるとの事で、一度拜見したいと想つてゐるが、未だ見てゐないが、南畫、土佐、狩野の三方法が書かれてある想だ。繪具は南畫の爲めであらふ。繪具は一つ一つ湯煎して洗つてはゐないで、時には使殘りなども使はれてゐた相だが、それにあの色が美しく見えるのと、僅かの色が、墨との關係で全面に施してある樣な効果を呈してゐる。

山下、湯淺君、佛國のオダン氏と平野家に先生の作品を觀た時オダン氏が、水墨でも淡彩でもこの人の畫は、コロリスト（色彩家）と云つてゐたが、コロリストとも言へる。

翁は大書を書かれる時、盃に半分位酒を飲んで紙に向はれる時がある。畫を書くには數日に隔つて休みつゝ出來るが書は一氣に書くので疲れるとの話だ。大書の時墨を筆にたつぷりと含ませて、皿で受けて紙に臨まれる。私は先生の中字を書かれる處を見たが、顏が運筆中ぽつと赤くなつてゐる。

先生附きの女中さんに訊くと毎朝硯に墨を磨るのだ相だ。

この年は一乘寺村詩仙堂の開祖、石川丈山の二百五十回の忌辰を迎ふので、先生もそれには盡力せられた。頽敗せる堂宇を繕ふた。翁もその會忌に行かれるとの事であつたので、私は未だ見た事がなかつたので御伴さして貰つた。高田老人が自動車で迎へに來た。翁は支那竹の仙人の持つてゐるやうな節、桐下駄を履き冠をつけて出られた。途中である神社に參拜せられ、一封納められた、一乘寺村の詩仙寺に着くと、尼さんが出て挨

拶せられる。翁は、「これはこれは御久しう」と云はれてお金と書額を納められて、佛間に下りて、禮拜して香を薫べられてゐた。

その日は各所から人が集つてゐる。若葉が目を眩する樣であつた。私はこの自然も懷古もよい紀念のこの日、蘭亭の遊びの樣な風流事があつたら愉快だらうと思つたがそんな事はなく、何んだかがや〱してゐた。

この堂には探幽の寫した丈山の畫像がある。その寫しを先生が描いてゐられる。翁は丈山の扁額を指して、「この隸書は大變手間のかゝる書風で、輪廓を書いて中を塗り込むのだ。厠の『旋』と云ふ額、これは小便がまはるそれで『旋』と云ふのだ。

丈山の歌に「わたらじな瀨見の小河の淺くとも、老の波そふ影もはづかし、」丈山は閑居して出ない、板倉重宗は茲に來て學問を丈山に問ふたのだ、この時代には西に光悅が鷹峰に隱れ、東に丈山が隱栖してゐた。

庭の筧から水を引いて、竹杵が絕えず石を敲いてゐる。「これも丈山が楽しみに考へたものだ。」庭の梅林の處で書[illegible]が始まつた。多くの人が翁の處に集つたが、その人達はこの會の世話人である。歸途は金福寺に寄られた、やはり一封の包みを納められて、芭蕉の墓に詣でた、この寺に蕪村の寫した素敵な芭蕉の畫像がある。恐らくこの種のものでは最もよい畫像であらう。

その年は又翁のお伴で、高川老人の處に畫を見に行つた　その時は陶工諏訪蘇山も來てゐられた。蘇山翁は先生と同期に帝室技藝員になられた關係から先生には藝術家として唯一の友であつた。その時は 前見た煎茶器の外に、一組あつた梅亭の畫の器局もある。蘇山翁は大變面白がられたが、然し先生は「私はこんなものは好かない、これは婦女子の玩具で何の戒にもならん」と云つてゐられた。その日は木米の爲に先生の書かれた碑が建つ日で、そこに廻はられた。

私は大正十年九月渡歐する事になつて、神戶港から出帆する途次、京都に先生を訪ふた、私は心では先生は私の歸國するまで、丈夫でゐられるか、いくら丈夫でも八十六歲の老人であると想つて、御別に行つた。翁は幾年位行くのだと言はれたので、二年位ですと御話しすると、「ほー！又會えるかどうか分らない、然し充分勉强して御出なさい」

私が[illegible]てゐた時、先生の書面を拜見した、又伊澤君から先生の模樣を傳えられた。蘇山翁が亡くなられた時先生が行かれて弔文を讀まれた、その聲が誰れのよりも大きかつたと云ふ事があつた。先生の壯健の事を知り得たが、その

翌年御病氣だと云ふ事を聞き大に氣遣つた。

八十七歳の年の秋同じく高島屋で東坡會の展覽があり、長尾雨山氏の主催で、宇治川で東坡に因んで既望の日曲水の催しがあつた相だ。翁は作品を二枚提供してその數千金をその費に當てられたと云ふ噂だつた。盛んな會合であつたらしい。その時の展覽會の畫は東坡百圖と云ふ畫集になつてゐる。總て東坡に關するものである。翁は何日頃から「東坡生同日」と云ふ印を用ひられたか今判明しないが、その印は呉昌碩の篆刻したものである。東坡に就いて以來興味を持たれて、函書の裏面などに、余藏蘇東坡遺書者殆至數百卷可謂夥矣などと書かれてゐる。東坡に關する畫題も私の記憶する丈で

東坡安燕　(東坡食芋)　蠕山
東坡三養　黄洲
東坡閑居
東坡茶品
東坡煎茶
東坡遊山　(鶴見山)
田家喜雨　(喜雨亭)
東坡談鬼
東坡靜居
蘇文忠公　(東坡畫像)
東坡石銚
東坡擷菜
東坡遇雨
東坡愛雨
前赤壁
後赤壁
東坡遊西湖　杭州
東銚畫竹
放翁村居
東坡[illegible]寂
東坡祈神夢蓬萊
東坡捧腹　(三養圖と同じ)　黄洲
東坡捫腹　(同上)
東坡謁佛印　(天竺)

その外「普陀落山觀音菩薩相照」「蒼龍」「黄龍」「漁樂」山水等東坡その人、又作品より題材を得られたものは實に多い。

先生八十八歳米壽の時同じく高島屋に展覽會があり、その時の作品は米壽遊戲と云ふ本になつてゐる。この歳に成つた作品

も歸朝後拜見したが、一層深刻に又味ひを益してゐられる。この留守中私の妻に半切を贈られた。「閑窓賢竹圖」で讃に「獨憐修竹山窓下不政清陰待我歸」正宗々洲氏遊學於歐洲未歸偶此圖贈護家夫人」この微洲の雅號は渡歐の時吉備の古字微よりとつてつけて下さつたものである。

私は滯歐中、山下新太郎君が私の二科會出品畫「セーヌ川」を御宅に屆けて與れた。その時山下君が先生に逢つた時の話しを後日聽いたのであるが、

其の私の畫を見られて、畫には粗にして惡い畫と、粗にして良い畫がある。この畫は拙づくつて良い畫だと云はれた相だ。

山下君が、柳堤眺望圖の半切を高島屋の展覽會で買つたと話すと「あの畫は錢の爲めに畫いた畫だ。この鐵齋も錢の爲めに畫を描く樣では駄目だ」又山下君が先生は支那に漫遊せられましたかと問ふと、翁は「自分の代りに謙藏を見せにやつた」と云はれ、又野口幽谷を大變賞めてゐられたとの事だ。

翁は紙に巾着の略圖を描かれ、金は七分目、餘りメめてもいけず、開き過ぎてもいけない、その事は易にあると、八卦圖と易の文句を書いてゐられる。それは軸になつて山下君の處にあるがこんな談話の說明圖が妙に面白く纏まつてゐる。

この八十七歳と八十八歳の時、持病が膀石病で、夫人の話しに、その時丈けはもう駄目だと思はれた相だ。隨分先生は苦しまれた模樣である。然し石塊が出て、その後大變快くなられた。その病中高熱にうかされて「僕の描いた畫が天井に寫つてゐる」などと口走られた相である。

某君の話に、病中床の中にゐられて、畫を描かれた模樣を話してゐた。老先生は紙を床の横に延して、溪流に、上部から東坡の竹を橫向きで描かれた。先生は仲々畫を描く事がすきであつたのだ。

この二ヶ年間の中は私は知る事が乏しい。

○

私は足懸け三年目に歸朝したが、震災の爲めに自宅がふさがつてゐたので、暫く妻と子供もと六甲山に居た。その歸途七月京都に立寄つて、妻丈連れて先生の御宅を訪ふた。

先生の御宅は通信でも知つてゐたが、米壽の年改築して一洸されてゐた。先生は私の顏の記憶は朧になつてゐられた樣だつた。話してゐるうちにやつと浮び出された。翁はこの時代はそんな事は大分頭が朧になつてゐられたらしい。後で私の處に下さつた書面にも春秋二度歸朝の祝ひの文字がある。耳も殆んど通じ兼ねてゐたが、仲々話しは盛んであつた。昔の話しが出て

て、「先達、支那の書家が來て、展觀するで私に見に來て貰ひ度いと言つて來たので、私は行つて見たが、まるで書になつてゐない、その後私の處に御禮に來た、その時菓子と書を持つ來たが、私は菓子は貰つたが、書の方は明けても見ない。なげかはしいことには今日、日本でも書の書ける人がゐない事だ。假名を書いてもたゞ綺麗な丈で風韻がない。第一字義を知つてゐる人が少ない。小野鵞堂と云ふ假名書きがあつたがたゞ綺麗な丈だ。」

新らしくなつた畫室も見せて貰た。前よりは廣くはなつてゐるが、相不變書籍に埋まつてゐる。夫人の話にこん度は少し廣くなつてゐると思ふと、それは一週間位でやつぱり同じ事ですと云つてゐられた。それでも以前よりは座る處が明いてゐた。その時六半切に「歲寒三友圖」が出來てゐた。「これは踊の師匠が老年の祝に描いて貰ひ度いと云ふので描いたのだ。この頃は目が見えないが、目鏡など器械をかりて書くのはいやな爲め手探ぐりで描く、それでも畫は描ける樣になつた。畫家は歲をとらねば佳い作は出來ないこの頃の若い人は自分勝手で突拍子もない畫を描くと、世間では持て囃すが、畫は古人の法を倣ひ摹擬して心理を得ねばならぬ、自分で勝手に創めて塗抹しても畫にはならぬ。」

先生は立つて行かれて一枚の短冊を持つて來られて、これをあなたに上げると妻に下さつた。何か歌意についてぶつぶつ言つてゐられた。これは南畫の歌だ。

「繪の島も南の風に吹き荒れて、みるめはびしき筆の跡哉」私は硯函を覗いて膠の塊と、藍の古墨の棒墨を見てゐた。先生はこれは昔醫者が使つてゐた膠で、今の膠の樣に腐る事はない。この墨でこの頃、試してゐる私もこの年になつて思ふ樣に描ける。畫家は老年にならねば畫けるものではない。

先生の作で棒墨を使つてゐられるのは、この八十七年の後期からで前期にはない。又私の知つてゐる範圍では他の人の畫には見ない描法である。

昨年の秋又二科會と共に入洛した。この時が先生に會つた最終になつたのである。どう云ふ理かその時は今想像しても若く見えた。その時散髮してゐられた爲めでもあらう一層若く見えた。

この頃は生れ變つた樣だと云つてゐられた。

こん度は宿はどこにゐられるかと私に訊ねられたので、蔦屋にゐますと云ふと、「あそこには風の治らぬ風藥と云ふ額を大雅堂が書いてゐる。私も西洋の藥は飮まぬ。あそこの煎藥が一

番よくきく。」

　夫人は傍で、そんな事はないんですよと云つて笑つてゐられた。先生の趣味と意氣の言葉だと聽いてゐた。

　これは私の直接聽いてゐた話ではないが、先生の處に裸體畫の可否に就いて質問に來た風流人がある。先生は一言にして裸體畫など第一に禁ぜねばならぬ、政府はなぜ取締らないのであらうとも云はれてゐた相だ。

　私はその言葉を家人から聞いて、先生はいゝ事を言はれたと獨りうれしがつた。家人は才人は自分で裸體の樣な畫など描いてゐますのに、時々こんな矛盾した事を申しますと言はれてゐた。成程先生は觀瀑圖でも裸體になつて觝ころんで觀瀑してゐる。仙人でも御臍まで出してゐる、實に樂し相で自由勝手に描かれてゐる。日本の神話中の女神まで裸體に描いてゐられる。一體に先生は僕の考へでは雅俗を一つとして超越してゐられるのだが、然し翁は西洋傳統の日本に傳播しつゝある所謂裸體畫は醜惡と思つてゐられたのであらう。裸體繪葉書趣味なるものは下等だと解してゐられたのだらう、先生は自分の描かれる裸體とも見る可きものは、雅趣であると思つてゐられたに違ひない。私はその爲め日本魂で鍛た翁の口から裸體は神聖だなどと云ふ事を聽いたよりどの位愉快であつたか分らない、先生はこれ丈でなく、西洋の事物は好まれなくつて、支那文化を賞讃されるこの矛盾も私には好きな矛盾で、先生は支那文化を憧憬してゐられた、支那を見物せられない爲め、更に淨土の如く聯いてゐた。私自分の考へでは、先生が實際の支那を見物せられなかつた方が、イルウジョンがよかつたと思つてゐる方だ。實際支那を寫生した人の畫より、支那文化の不思議の美が、宿つてゐる。セザンヌが伊太利に行かずに雜馬を寫したのともそれは違つた意味である。「書物を見ると、支那の事は皆分ると云つてゐられた」

　然し先生は西洋事情を知り度い意志もあつた事は長崎に行かれた時、いろんなものを寫生してゐられる。後年でも先生自ら一度自分で西洋のものを味はれたものは別扱ひの觀がある。先生のたゞ一枚木炭紙に西洋木炭で富士山を寫したのがあるが、その調子が實によく出來てゐる。

　この日は牛祭の日で、この應接室には大雅堂の牛祭のおどけた畫が掛つてゐた。翁はそれを指して、大雅は奇人でこんな奇拔の畫を描く爲め當時誰にも相手にせられず、買ふ人もなかつた。大雅堂は元來土佐畫を學んだ人だ。私はその師匠も知つてゐる。又大雅の土佐繪も見た。何日か大雅の畫に就いて外の人は疑つてゐたが、それは大雅に間違ひない。土佐の描法が違

入つてゐた爲め疑つてゐた。
私は、「先生ももと土佐畫を御畫きでしたのですか。」と云ふと、それを少し意味をとり違へられて、
「私は元から畫家ではない儒者だ」と艴然として云はれた。そして「私もこの頃土佐の描法で一枚描いてみ度いと考へてゐる。」そして高久隆古の軸を見せて下さつた。「私の處にあるものだからには惡いものはない」と云つて、
「南畫では、大雅堂、竹田、祇園南海の三人がよい。(先生の書かれたこの三氏に就いて南畫論がある相だがそれは未だ見てゐない)崋山は鋭敏であつた。竹田はめつたに人の畫を賞めないが、玉堂丈は讃めてゐる。私の處にも玉堂の作がある何日か出して御見せする。あすは蓮月ばあさんの忌日で行かなければならぬ、明後日ならゐる。玉堂は畫より更に琴が上手であつた、あれ程の琴の名人はゐなかつた。私の處に玉堂の持つてゐた琴の模し(うつ)が今ある。稀らしい詩集もある。
私は翁の耳がよく通ずるなら、私は蕪村に就いて質問し度いと思つてゐた。竹田が南畫中から大雅と蕪村を第一に上げてゐる事から訊き度かつた。先生の南畫論はどんな風に論じてあるか見たいものだ。遂ひ先日、波多野氏の入札の時、蕪村の作の「春林茅屋」の軸があつた、その函と袱紗に先生が書かれて一段蕪村が働いて見えた、袱紗には竹田の蕪村の特色を論じ賞讃した處が書いてあつたが、その軸とその文は最も適評で、嵌(はま)つてゐて愉快だつた。
その日も仙人の話しが出たら、先生は仙人の話は私の最も得意のものだと云はれ、「唐仙人今尙在人間界」などと書いて話された。こんな話しをきいてゐると、何んだか翁は現在と未來との中に生活してゐられる樣な感じがして來て、「山似蓬萊人似僊」などと云ふ先生の畫があるがその仙中に遊んだ感じであつた。
京都を出發する二日前御別れに行つた。畫室には蓮月の軸が掛つてゐた。鶴の畫に和歌の讃がある。これは蓮月ばあさんが模寫した畫だ。
私は爲恭の軸を平田氏から滯京中借りてゐた、それを返すので持つてゐた、それを先生に御見せすると、翁は蟲目鏡でずつと見られてから、爲恭は有職古實に明るい。又模寫がうまかつた、然しこの種の畫は先日御目に懸けた隆古の方が上だ。私もこの頃一枚土佐の描法で描き度いと想つてゐる。
私は晝飯の時間が近づいたと思つて御暇しようとすると、まあお話して行け。この頃は私は朝四時には目が醒める、ばゝも(夫人)五時に目を醒ましてゐるが、誰れも起きてゐないの

で、床の中に一時間程ゐる。玆に家康公が訓示を書いた掛があるが、これに書いてゐる事は人の世に處する事が皆書いてある。あなたすきなら持つて行け、なにかきはない。あなたにはもう逢へないかも知れん、私は老年だ。私は愈々御別れして次の間の出口をとち迷つてゐたら、先生は、こゝだと云つて開けて下さつたのがこの世の最後の御別れであつた。

○

富岡鐵齋先生の藝術に就いては未だ、未知の價値となつてゐて、確論せられない點が多い。又餘り近い爲めに未だ正史の年譜すらも知り得てゐない。まして藝術に就いての批評も紹介も復た深く研究された人もゐない。いゝのか惡いのか、漠然としてゐる感じがある。一部の人は賞讃し憧憬し、或一部の人は謗つてゐるが、讃美者の所論も判然たる名論もない。又謗る人も多く鑑賞すらも乏しい。例へば大雅堂、蕪村の作品を見ずして評する徒が多い樣なものだ。又見てもその人の傑作に接せねば駄目である。僕にしても大雅堂の作品は數十幅見たが、寫眞で想像してゐる「十便」の樣な名作に出くわした事がない。多くは駄作で、未だ飛上る樣な作に接し得ない。蕪村のものは卒が少ない爲めのか割合佳作に接してゐる。その爲め大雅堂に就いて竹田の說に同意するか否か「十便」なり又他の佳作に接する

時の檢案になつてゐる。

由來藝術の價値判斷は十人十色何日になつても定まるものはないが、翁の作に對しては更に時が餘り近い爲め隔つた所に於てよく鑒賞する事が出來てゐない。

然し名人にして名畫を解し、竹田にして大雅、蕪村を眞に理解する事はたゞに古人丈でなからう。

私は翁の死去の模樣、その通夜の時各處から集つた人から聞いた、先生の逸事、言葉又作品についても私の感じた事を加へ度いと思つてゐたが、拙文且つ餘り長くなるので、以上の見聞、教、の一端を書いたに過ぎん、たゞ私の筆記中幾分でも、從來鐵齋翁を研究する人が出たら、參考になるものが少しはある事丈信じてゐる。

附記

先生は詩人風ではない、從而作詩も少ない上私はそれ程、詩としては好きでないが、たゞ翁と聯關した意味で詩、歌を興味あつて見てゐる。然し最後の詩は一番振つてゐると思ふ。

九十行年榮啓期、太平多樂幸男兒
揮毫萬象皆周易、八卦變多我師

この詩の榮啓期のことは私は知らなかつた。過日金石索の中

に次のやうに記してあるので意味がよく分つた。

孔子遊于泰山、榮啓期行乎郕之野、鹿裘索琴而歌。孔子問曰先生所以爲樂者何也、答曰吾樂甚多而至者三、天生萬物吾得爲人一樂也、男尊女卑吾得爲男二樂也、人生有不見日月不免襁褓吾既行年九十矣是三樂也、處常得終當何憂哉孔子曰善哉能自寛者也、

これに因ると樂が三つゐる。即ち天が萬物を生じたのに自分は人になつたことが一樂、男尊女卑であるに、自分が男子に生れたとこがその二樂、人生日月をみず、赤子のうちに死ぬものもあるのに自分は九十歳であるこれが三樂だ。

先生は九十になられるのでその三樂の一たる長詩に因んで、榮啓期からひかれて作くられ、來る巳歳の試筆として榮啓期の牛に乘つて、ゐるのに讃をせられてある。

この詩の聯詩が今一つゐる相だ。

先生は、八十九歳の十二月三十一日に亡くなられたが、八月より九十歳と書入されてある。それも後學の爲めつけ加へて置く。

中野ニテ微洲生

附錄第二

私の見た富岡鐵齋

西川一草亭

つい此間亡くなつた南宗畫壇の大家、富岡鐵齋翁とは夙くから知合つて居た。初めて翁を知つてからもふ廿年の餘になると思ふ。併し逢つても只書物を借りたり、話をきく丈けで、自分から進んで考を述べたり、意見を呈して敎を乞ふと云樣な事はしなかつた。夫は餘りに年齡が違ひ過ぎて居て、翁から見たら孫の樣な自分が、議論がましい事を云つたり、意見らしい事を述べたりするのは、翁から見たら嘸生意氣にきこへて、小面憎く思へるだらうし、又私から云つても、夫を云つて見た處で、所謂時代の相違年齡の差違でぴつたり合はないに極まつて居るから、只老大家として、個々其知遇を受けた事に敬意を表して

おとなしく話をきいて居る丈けだつた。だから私は今故人を思ひ出して何か書ふと思つても、其交遊の痕には書く程の種は何も殘つて居ないのである。只多少とも其人を識り、其平素の生活を見て居るので、其藝術に對しても特別な興味が湧く。夫を少し許り書いて見樣と思ふ。

鐵齋の家は京の室町一條だつた。京都の町でも特別に靜かな通りで、御所が近く、近所は塀造りの家が多かつた。鐵齋の家も矢張り低い土塀を廻らして、庭は可なり廣く、塀の上に恰好のよい松の樹が枝を張つて居て、夫に郁子の蔓が纏ひ付いたり、菩提樹だの、大松だのと云ふ珍木異草が欝蒼として、如何にも文人の住居らしい家だつた。玄關にはいつも龜田窮樂の「福内鬼外」の四字を朽ちかけた板に白字で彫付たのが懸つて居て、最近は當分面會をお斷すると云意味の張札が家人の手で書かれてしげ戸の上に張り出して有つた。

建物は隨分古び切つて居た。敷居や鴨居が多少曲つて居るものと見へて、襖障子の建付が惡く、夜訪問すると本箱の背ろから能く鼠が出入りして居た。此家はもと小川流の煎茶を創めた、小川可信と云人の住居だつたのを、鐵齋翁が買取つた物で、其當時は地價が安くて、一坪の値段が四錢とか何とか云樣な噓の樣な話だつた。

「可信と云ふ人はそら貧棒で、私が此處へ引越した當座は八百屋でも肴屋でも、可信の家だと云へば、あすこの家は錢を與れないから厭だと云つて賣つて與れなんだ物ですよ」と能く老夫人が話して居られた。此可信に煎茶を敎つたと云老人を私は一人二人知つて居た。其人はもう四五年あとに亡くなつて仕舞つたが、此可信と云ふのは元お醫者で相當な暮しを立てゝ居たのであるが、同じ町内に畫家の横山華山が住んで居て、其娘の病氣の時に此可信を賴んで診て貰つて居た。夫がとふ〳〵亡くなつてやつと月日が經つてからである。或日町内の者が四五人寄り集まつて酒を飲み合つた席で、可信が何か話の續きで不圖、「華山の娘も可愛想な事を仕た、わしの匙加減でつい死なして仕舞つた」と酒の機嫌で何の氣なしに云つたのが、華山の耳に入つたから溜らない。不埒な奴だ、手討にすると云つて一刀を提げて可信の家に躍り込んだので、可信が靑くなつて、近所の誰れ彼れを中に入つてもらつて、醫者をやめるからと云條件付きでやつと華山が納得して其怒が解けた。

そんな口禍の爲めに可信は俄かに肝心な生計の道を失つて、仕方が無いから夫迄自分の好きで樂にして居た煎茶の道を、人に敎へて生計の助けにしたのが、當時文人畫や煎茶の流行る最

中だつたので、可なり世間に擴まつて、小川流と云一流を立てたのである。併し一坪の地面が四錢位にしか賣れない時代だから、そんな事では生計の道が充分に立たなかつたと見へて、貧窮の中に一生を終つたらしい。

其可信の住古した儘、餘り手入れも仕ないで、翁は平氣で住まつて居た。翁の畫名は近年殊に高くなつて、隨分高い潤料を持つて揮毫を頼みに來る者が雲集して居たけれども、家は相變らず古びた儘で鼠の跳梁に任して有つた。夫でも其落着いた樣子は京都の街で無ければ見られないなつかしい物の一つで有つた。

翁は博多の禪僧仙厓の畫を愛して、いつか餘の畫を一幅もらつた事がある。其軸をあけて見たら餘り汚い表具だつたので、是れは早速表具を替へさせ樣と思つて、翁の添手紙を開いて見たら、兼好の螺鈿の軸は貝の落ちたるこそいみじけれと云文句を書いて、これを此儘お懸けなさいと書いて有つたので、仕立直す事も出來ず、今でもボロ〳〵の儘掛けて居るが、翁の住居は、不都合だ不都合だと云ふ家人の不平に翁もとふ〳〵我が通せなくなつて、亡くなるつい前の年に其ぼろ家を改築された。

鐵齋の畫は非常に好く人もあるが、又嫌ひだと云ふ人もある。好きだと云者は美醜の見境も無く、何でも只墨がなすり付けて有れば有難がつて、夫を愛藏すると云信仰の仕方で有るが、鐵齋の畫はぢよむさいから嫌ひだと云ふ人がある。死んだ夏目漱石氏も、鐵齋の畫は嫌ひだつた。夏目さんが鐵齋の畫を好かなかつたのは、ぢよむさい爲めかどふか、夫は閑却したが、好惡は其人の性質に依る事だから、夫に向つて何共云ひ樣は無いが、鐵齋の畫は慥かに萬人に好かれる畫では無い。食物で云へばこのわた見た樣な物で、其特別な風味は是を好く者から云へば、世に是程の珍味は無いと云へるが、好かぬ者から見たら、どふしてこんな無氣味な物が好いのか譯がわからないのと一般であらう。私も慥かに其このわた黨の一人である。そして斷簡零墨を大事に仕舞込んで愛藏して居る。尤も夫れは藝術的見地から、翁を偉大な藝術家と見る信仰の念許りでは無い。半ば翁が人に親切で、こちらから何も翁を喜ばす程の事をしないのに、能く描いた物を惠まれた好意を喜ぶ心が大分手傳つて居ると思ふ。

日本に文人畫が創まつて以來、大家として數へられる者が大分ある。其中でも蕪村、大雅、竹田などの數人が殊に傑出した者として見られて居るのであるが、鐵齋が大等諸家の間に伍し

て將來果してどふ云地位を占める人であらう。夫は左程長い月日を經過しなくても、早晩定まる事と思ふが、其問題は暫くおいて、鐵齋の畫が大等古人の足跡を踏まずに、別に一格を爲し、鐵齋獨自の境地を開いて居る事丈けは、誰にでも認められるだらう。

鐵齋は若い時分小田海僊に畫を學んだと云ふ話が有る。これはつい四五日前にきいた話で、說の眞僞は知らないけれども、鐵齋の畫の師承に就ては、これ迄餘り世間にきこへて居ない。海僊に學んだと云事も實は初耳で、今迄ついにそんな話をきいた事が無かつた。又長崎に行つて勉強したと云話がある。是れは間違のない事實で、既に翁の家に、其時鐵齋に贈つた蓮月尼の歌が殘つて居る。併し夫れは畫の修行だつたのか、學問の勉強だつたのか能く解らないし、畫の修行だつたとしても、果して誰に學んだかと云事がはつきりしない。或は老夫人にでも問ひ質して見たら、解るかも知らぬが、よし誰に學んだとしても、鐵齋のあの畫は、所詮鐵齋其人の特殊な性格から流露したもので、師匠の風を眞似たり、人に教はつて初めて會得したものでは無い。だから鐵齋には當の先生は誰れも無かつたと云方が至當かも知れない。

一、鐵齋の畫には色々特徴があるが、其中でも特に目立つて著く感じられるのは、遊戯氣分の多い事である。遊び乍ら畫を描いて居る、戯れに畫を描いて居ると云氣分が餘程ある。鄭板橋の骨董行と云詩意を描いて、いかさま物をくさました骨董屋か何かゞ、閻魔廳の前に引き出されて其罪を糺彈されて居る圖や、大瓢のぶら〳〵下がつた中に百姓が素裸になつて、涼しさうな顏をして酒を含んで居る圖や、そんな戯ら描きの畫が大分あるが、眞面目な山水、眞面目な花鳥を描いた物でもどこかに遊戯氣分が除かない樣である。夫が觀者に一種のどかな氣持を起させるが、此遊戯氣分、遊びの積りで畫を描いて居たと云事が、責任を感じて重苦しい氣分で、苦しい努力や研究を續け乍ら畫を描いて居る專門家の畫よりも、どれ位鐵齋の畫を成長させたか知れないと思ふ。

鐵齋は本職の畫家では無かつた。畫は餘技で、本來は文人であつた。だから世間では畫家として認めて居り、鐵齋自身も畫に生命を托して、其半生を畫に終始したにも拘らず、自分は讀書人で畫は本業で無いと云事を始終周圍の人に洩らして居た。此本業で無い、餘技だと云考へがどれ位畫筆を取る上に安氣な氣分を與へたか知れないと思ふ。餘技だから責任が無い。どんな氣儘な事を描いても、どんな勝手な事をしても、誰一人咎める

者がない。すべてが自由で呑氣である。夫が畫人としての鐵齋を思ふ儘に成長させて、文人畫の上に鐵齋獨自の新數い境地を開拓させたのだらう。若し鐵齋が初めから專門の畫家で立つ積りだつたら、よし翁にどれ程の天分が有つたとしても、畫壇とか畫界とか云狹い世間の因襲に囚はれて、あれ程自由に延び得なかつたに違ひ無い。

夫に就て思ひ出すのは近年洋畫家の中に、山本鼎氏か誰かゞ自由畫を主唱して居た事である。自由畫に就ては洋畫家の中にも色々批評が起り、賛否まち／＼の說をきかされたが、鐵齋の畫は明かに其自由畫の偉大な物では無かつたらうか。尤も鐵齋の畫には支那畫を見たり、日本の南畫を見たりしてそふ云物の影響を可なり受けて居るのだから、あれを自由畫と云ふのは當らないと云人が有るかも知れぬ、がよし鐵齋が夫等の畫を參考にしたとしても、又夫等の畫の幾分を取入れたとしても、夫が少も鐵齋の自由な氣持を束縛して居ない、其點で鐵齋の畫は鐵齋の自由畫だと云事が云へるだらふ。

鐵齋は畫許りで無く、其書にも獨創的な處があつた。併書の方は、江馬天江の兄に當る誰れとかの書風を眞似たのだと云話があり、又支那の鄭板橋の風を學んだのだと云噂もある。私はまだその話をきかなかつた時分、鄭板橋の詩集を見て、何處か翁の書風に似た處があると思つて、問ひ質した事がある、が翁はそうだとも、違ふとも云はなかつた。或は翁は耳が遠いので、私の質問が能く聞へなかつたのかも知れぬ。

鄭板橋は最初王羲之を學んだけれども、どふしても旨く書けぬので、筆を投げ出して歎息して居ると、細君が夫を見て傍から「あなたは一體王羲之ですか」と云奇問を發した。「いやおれは王羲之ぢやない、鄭板橋だ」と答へると、細君はすかさず、「夫なら何故鄭板橋の字を書かないのです」と突込まれて、賢夫人に教へられて初めて豁然と悟りを開いて、夫からあゝ云一流の字を書き出したと云話がある。私は其後其詩集の外に鄭板橋の書幅を見たが、矢張鐵齋の學んだらしい一種の筆癖があつた。書道には古來專門的の色々むづかしい議論が有つて、其專門的見地から見て、鄭板橋と鐵齋の書にはどふ云批評が下せる物か知らないが、筆墨の妙味と云點から見ると、鄭板橋の書は生硬で、鐵齋程の妙味が無い。若し鐵齋が鄭板橋の書風に倣ひ得る處が有つたとしても、鄭板橋以上の境地に進んで居た事は確かだらう。鐵齋が私の質問に明答を與へなかつたのは、或は自分に此自信が有つた爲めに、態と答を避けたのかも知れないと思つて居る。

て將來果してどふ云地位を占める人であらう。夫は左程長い月日を經過しなくても、早晩定まる事と思ふが、其問題は暫くおいて、鐵齋の畫が大雅古人の足跡を踏まずに、別に一格を爲し、鐵齋獨自の境地を開いて居る事丈けは、誰にでも認められるだらう。

鐵齋は若い時分小田海僊に畫を學んだと云ふ話が有る。これはつい四五日前にきいた話で、說の眞僞は知らないけれども、鐵齋の畫の師承に就ては、これ迄餘り世間にきこへて居ない。海僊に學んだと云事も實は初耳で、今迄ついにそんな話をきいた事が無かつた。又長崎に行つて勉强したと云話がある。是れは間違のない事實で、旣に翁の家に、其時鐵齋に賻つた蓮月尼の歌が殘つて居る。併し夫れは畫の修行だつたのか、學問の勉强だつたのか能く解らないし、畫の修行だつたとしても、果して誰に學んだかと云事がはつきりしない。或は老夫人にでも問ひ質して見たら、解るかも知らぬが、よし誰に學んだとしても、鐵齋のあの畫は、所詮鐵齋其人の特殊な性格から流露したもので、師匠の風を眞似たり、人に敎はつて初めて會得したものでは無い。だから鐵齋には當の先生は誰れも無かつたと云方が至當かも知れない。

鐵齋の畫には色々特徴があるが、其中でも特に目立つ一感じられるのは、遊戯氣分の多い事である。遊び乍ら畫たて居る、戯れに畫を描いて居ると云氣分が餘程ある。鄭板橋か何か、閻魔廳の前に引き出されて其罪を糺彈されて居る圖や、骨董行と云詩意を描いて、いかさま物をくさました骨董屋大瓢のぶら〳〵下がつた中に百姓が素裸になつて、涼しさうな顏をして酒を含んで居る圖や、そんな戯ら描きの畫が大分あるが、眞面目な山水、眞面目な花鳥を描いた物でもどこかに遊戯氣分が除かない様である。夫が觀者に一種のどかな氣持を起させるが、此遊戯氣分、遊びの積りで畫を描いて居たと云事が、責任を感じて重苦しい氣分で、苦しい努力や研究を續け乍ら畫を描いて居る專門家の畫よりも、どれ位鐵齋の畫を成長させたか知れないと思ふ。

鐵齋は本職の畫家では無かつた。畫は餘技で、本來は文人である。だから世間では畫家として認めて居り、鐵齋自身も畫に生命を托して、其半生を畫に終始したにも拘らず、自分は讀書人で畫は本業で無いと云事を始終周圍の人に洩らして居た。此本業で無い、餘技だと云考へがどれ位畫筆を取る上に安氣な氣分を與へたか知れないと思ふ。餘技だから責任が無い。どんな氣儘な事を描いても、どんな勝手な事をしても、誰一人咎める

者がない。すべてが自由で呑氣である。夫が畫人としての鐵齋を思ふ儘に成長させて、文人畫の上に鐵齋獨自の新數い境地を開拓させたのだらう。若し鐵齋が初めから專門の畫家で立つ積りだつたら、よし翁にどれ程の天分が有つたとしても、畫壇とか畫界とか云狹い世間の因襲に囚はれて、あれ程自由に延び得なかつたに違ひ無い。

夫に就て思ひ出すのは近年洋畫家の中に、山本鼎氏か誰かゞ自由畫を主唱して居た事である。自由畫に就ては洋畫家の中にも色々批評が起り、贊否まち〳〵の説をきかされたが、鐵齋の畫は明かに其自由畫の偉大な物では無かつたらうか。尤も鐵齋の畫には支那畫を見たり、日本の南畫を見たりしてそふ云物の影響を可なり受けて居るのだから、あれを自由畫と云ふのは當らないと云人が有るかも知れぬ、がよし鐵齋が夫等の畫を參考にしたとしても、又夫等の畫の幾分を取入れたとしても、夫が少も鐵齋の自由な氣持を束縛して居ない、其點で鐵齋の畫は鐵齋の自由畫だと云事が云へるだらふ。

鐵齋は畫許りで無く、其書にも獨創的な處があつた。併書の方は、江馬天江の兄に當る誰れとかの書風を眞似たのだと云話があり、又支那の鄭板橋の風を學んだのだと云噂もある。私はまだその話をきかなかつた時分、鄭板橋の詩集を見て、何處か翁の書風に似た處があると思つて、問ひ質した事がある、が翁はそうだとも、違ふとも云はなかつた。或は翁は耳が遠いので、私の質問が能く聞へなかつたのかも知れぬ。

鄭板橋は最初王羲之を學んだけれども、どふしても旨く書けぬので、筆を投げ出して歎息して居ると、細君が夫を見て傍から「あなたは一體王羲之ですか」と云奇問を發した。「いやおれは王羲之ぢやない、鄭板橋だ」と答へると、細君はすかさず、「夫なら何故鄭板橋の字を書かないのです」と突込まれて、賢夫人に敎へられて初めて翻然と悟りを開いて、夫からあゝ云一流の字を書き出したと云話がある。私は其後其詩集の外に鄭板橋の書幅を見たが、矢張鐵齋の學んだらしい一種の筆癖があつた。書道には古來專門的の色々むづかしい議論が有つて、其專門的見地から見て、鄭板橋と鐵齋の書にはどふ云批評が下せる物か知らないが、筆墨の妙味と云點から見ると、鄭板橋の書は生硬で、鐵齋程の妙味が無い。若し鐵齋が鄭板橋の書風に最初は得る處が有つたとしても、鄭板橋以上の境地に進んで居た事は確かだらう。鐵齋が私の質問に明答を與へなかつたのは、或は自分に此自信が有つた爲めに、態と答を避けたのかも知れないと思つて居る。

世間では鐵齋を直入に比較する人が有る。時代が近いのと、年輩が同じ樣に高齢だつたから、先づ同等位な人物に見て居る樣であるが、直入は鐵齋よりももつと器用だつたらしい。併し直入の畫には非常な俗氣が有る。直入の家は私の小供の時分寺町の廣小路に有つて、私は能く其門前を通つた事が有る。門に支那めいた額だの聯だのがうるさく懸つて居て、而かも其建物は下宿屋見た樣な二階建の俗惡な住居だつたので、直入の畫を見ると私はいつも其家を思ひ出して畫迄つまらない物に極めて仕舞ふ僻がある。是は感情が餘程手傳つて居るかも知らぬが、單に感情許りで無く、けふ迄直入の畫と云物を隨分澤山見せられたけれども、未だ嘗て直入の畫に感服させられた例しが無い。どの畫もどの畫も無反省に一氣に描き流して有つて含蓄が無い。そして只徒らに怪奇な山や岩が陳列されて有る丈である。

夫から又鐵齋を大雅堂に比較する人が有る。大雅堂と鐵齋は其輪廓に何處か似た處が有る樣に思へる。名利の念が薄く、生涯を筆硯に沒頭して其以外に樂を餘り求め無つた事や、書畫を兼ねて居つた事や、其書畫に一種の風骨を帶びて居た事等、此二人の人物性行には何處か似た處が有る樣に思へるし、鐵齋自身も大雅の人物には餘程傾倒して居つた樣であつた。壯時好んで諸方を遊歴し、老境に入つてからも名山大澤を探求した事等も大雅の行爲に倣つた痕が有る。けれども仔細に二人の人物性行を比較すると鐵齋は大雅程呑氣で無い。大雅は餘程呑氣な人で世情に疎かつた事は、其室玉瀾を迎へた時に夫婦の交りを知らなかつたと云ふので略其人物が察せられる。人間が極穩かで丸味の有つた事も、畫面の上で想像が付く樣である。が鐵齋には何處か圭角が有つた樣に思ふ。尤も私が鐵齋を知つたのは、七十翁、八十翁としての鐵齋だつたから、談話の上で直接そんな事を感じさせられた事は一度も無かつた。けれども鐵齋の畫を見ると、何處かに氣骨の稜々とした物が有る樣に思へて仕方が無い。

いつか西園寺公が巴里の平和會議から歸られた當時、吳昌碩と鐵齋の話が出て、吳昌碩と云ふのは眞の好々爺で極穩やかな角の無い人物だけれども、鐵齋はあれで中々奇骨が有つて、維新當時は國事に奔走した事もあると云樣な批評が有つた。鐵齋は夙くから西園寺公を知つて居て、公がまだ京都に居られて、望一郎さんと云つた時分から知つて居ると云話だつた。だから公は翁の壯年時代の性行を能く知つて居られたのであらう。

此吳昌碩と云ふのは支那の篆刻の大家で、公は往路支那に寄

られたから、其時逢はれたであらうが、近頃其人の描いた畫を日本に持つて來て、無暗に珍重して居る人が有る。そうして是を鐵齋に比較したりする人も有る。翁の家にも二三幅有るものと見へて、いつか花鳥の双幅が懸つて居た事が有つた。其畫はとても粗雜な物でまだ鑑賞の領域に入る程の物で無い。私は其時「先生呉昌碩の畫が懸つて居ますね」と云つたら、翁は床の間を振り返つて見て、「はあこんな畫ならわしなら一日に十枚位は描ける、併しそんなに描くと金がもふかつて仕樣が無い」と云つて笑つて居つた。元より戯言であるが、其戯言の中に自づから其畫を認めて居ない事が察せられるだらう。

更に藝術の上から大雅と鐵齋を考察すると、私には書は大雅の方が優れて居り、畫は鐵齋の方が造詣が深かつた樣に思へる。

大雅の畫は專門家の間に特に重きを爲して居り、其素質には常人の企て及ばない點が有る樣である。さうして又鐵齋とは自ら其性格を異にして居るのだから、其優劣を考へたりするのは愚だと云人があるかも知れぬが、たとへば大雅蕪村の十便十宜帖の畫を見て、大雅より蕪村の方が優れて居ると云事が若し云へるならば、其意味で鐵齋の畫は大雅より優れて居ると云事が云へるだらう。尤も十便十宜も大雅の方が好きだとか、大雅の方が數等上だとか云人も有る。夫は色々な見方に依つてどふとも云へる事である、たとへば大雅が妻を迎へて夫婦の道を知らなかつたと云樣な話も、人間離れがして居て面白いと云へば、面白いと云へるが、丸で常識の無い愚かな事だと云へば、そふも云へるだらう

大雅が書畫三昧に入つて、夫程世態人情に通じなかつたと云事は尊い事の一つに違ひ無い。其點で大雅の藝術を特別に尊敬する人も少く無い。鐵齋も九十年の長い生涯を大半讀書と書畫の揮毫に費やして、他を顧みなかつた觀はあるが、鐵齋は大雅程世間の事情に迂遠では無かつた。晩年の翁は眞に白髮童顔、仙人の樣な風貌を備へて、殆んど世上の事を何一つ知らない人の樣に思へたけれども、話して見ると案外世情に通じて居て、すべての事に中々要領を得て居た。些細な事は意に介しない風だつたけれども、要點は實に能く知つて居た。是は畫の上にも能く現はれて居たと思へる。其大膽に無頓着に描き放した樣な中に、能く物の要領をつかんで夫を強く畫面の上に描き現はして居る點に鐵齋の畫の強味は有つたのである。若し鐵齋に世味が解らず、大雅程世間の事情に無頓着だつたら、よし其藝術がどれ程優れて居たとしても、今の樣な時代に生前あれ程人氣を博し、あれ程作品の價値を高める事はむつかしいと思ふ。鐵齋

の高名は一面其高齢にも依るが、案外人情の機微に通じて居つた事も其一因では無かつたらうか。

鐵齋は筆を持つて物を書くと云事が非常に好きだつたらしい。是は一面から見ると、鐵齋が精力絶倫の人で、其旺盛な生命力を筆硯の上に集中した結果だと見る事も出來るが、兎に角書く事が好きだつたと見へて、翁の家に有る物は何にでも翁自身に筆を採つて、まめに何とか書いて有る樣だつた。或時は外に履いて出る日和下駄に迄畫の描いて有るのを見た事が有る。其駒下駄は前田正名さんが貽つて吳れたと云ふので、桐の平たい表に黒漆で蘭の畫が一面に描いて有つた。鐵齋の畫には竹田の樣に一幅の中にほんの僅かな梅の一枝を描いて、あとはずつと餘白を見て居ると云樣な作品は少く、畫幅一ぱいに描き盡した物が多かつた。眞黒な山水を偶から偶迄一寸のすき間も無い程描き盡して、まだ夫でも描き足りなくて、其墨の上に濃い墨で贊の字が書いて有つたりする物が隨分ある。

竹田は筆墨を惜むと云氣分が餘程有つた。僅かな墨を小さい筆先に含ませて、左も惜そうにかすり〳〵畫を描いて居る。竹田に取つて其筆墨は寶石の樣に大事である。一點一劃も容易に筆を下せなかつた觀がある、が鐵齋は是に反して惜氣も無く筆一ぱいに墨を潑して、思ふ存分縱橫に描きなぐつて居る。描きなぐると云つては語弊があるかも知らぬが、恰も描きなぐつて居るかの如く見へる。竹田の畫は譬へて云へば、酒好きが一盃の酒を如何にも樂しそふにちびり〳〵嘗めて居る形があり、鐵齋の畫は大酒家が滿を引いて醉倒れる迄飲み明かす慨がある。

竹田も鐵齋も或意味の器用な人では無い。どちらかと云へば不器用な方であらう。其不器用なのを强いて押隱そふとしないで、平氣で其拙い線、不器用な筆を使つて生地の儘の自己を畫面の上に晒け出して居る。其處に正直な人に見る特別な親味があり、面白味が有る。

けれども竹田と鐵齋とは其性癖が悉く相反して居た樣に思へる。夫は竹田は神經質の人で其畫面が如何にも凡帳面で一毫の微も忽にしない嚴粛な心持があるが、鐵齋は磊落で一向關はない風がある。中には贊の字の行が曲つて居たり、印が逆まに押して有つたりする。夫は鐵齋にも畫面の整頓や構圖上の苦心と云事は夫れは有るだらう。そんなに無頓着に亂暴に描いて居る譯では無いだらうが、何處かに自由な氣持が有る。

鐵齋が畫筆を振つて畫面に向ふ心持を想像すると、お役人がお役所に出懸けて一日の勤めを果す心持でも無ければ、商人が店の間に座り込んで金もふけの算段をする心持でも無い。鐵齋

の畫面は鐵齋に取つては恰も我家に居るのと同樣である。否吾家よりももつと氣兼ねの要らない、もつと我儘の出來る獨舞台の觀がある。古往今來誰れの畫を見ても多少の遠慮や氣兼ねが有る。古人に氣兼ねをしたり、世間の目に氣兼ねをしたり、自然其物に氣兼をしたりして、そふ我儘に振舞へる物では無いが、鐵齋の畫にはそんな氣兼ねが無い。寢るも起きるも此畫面はおれの天下でおれの自由だと云氣持ちが有る。

だから畫面の上の鐵齋は素裸の鐵齋、普段の儘の鐵齋である。五ツ紋の羽織に仙台平の袴をはいて堂々と構へ込んだり、肩肱を張つて威張つて見せたりしない處に他人と思へない親味が有る。

竹田の畫面に對する心持は夫とは大分違ふ樣である。竹田の畫面は竹田に取つては恰も晴れの座敷に、自分が正賓として床の間の前に押し据へられた形がある。畫面に向つて竹田の念頭に去來する考は、如何にして自己の品位を高め得るかの問題である。だから竹田の畫には他人の前に威儀を正して上品に端然と座り込んだ他所行きの竹田があり、鐵齋の畫面には家族を前に行儀惡く足を投げ出したり、時には寢腹這つたりして居る、普段の儘の鐵齋がある。

竹田の畫面は物靜かで、清潔で凡帳面で、塵一つ散ばつて居ない、掃除の行届いた茶席で、心靜かに茶の煮へ音でもきいて居る樣な氣持があり、鐵齋の畫は道具市に雜然として好きな骨董品の轉がつて居る中をあれかこれかと見て步く樣な樂さが有る。

鐵齋は云ふまでもなく漢學者である、そして其趣味は支那趣味である。東坡と誕生日が同じだと云ふので東坡同日生と云印を彫らしたり、支那の道服を態々支那から取寄せたりして、可なり支那の文化に傾倒し、支那の文物に心醉して居つた事は、他の一般漢學者と違はないやうだつた。けれども、其一面には日本の文化を愛し、日本の文物を研究する事を怠らなかつた。是は翁が幼年時代に國學を修めて、大鳥神社其他二三の宮司を勤めた事があるので、畫も大和繪を研究したりして漢學一天張りの人ではなかつた事にも因るのであらうが、兎に角支那趣味を好む一面に日本趣味を愛し、特に各種の技藝に秀でた知名の人物の傳記や逸話を好んで、そふ云ふ方面の事は中々委敷かつた。そふして何事も熱心な翁は、其畫像迄探索して夫を模寫した物が隨分ある。それで風流好事に關した事なら翁は大抵知つて居た。茶の湯の話、表具の話、生花の話など何でも一通りは通じて居た。其點から云へば翁は漢學者と云ふよりも、寧ろ僻

の高名は一面其高齢にも依るが、案外人情の機微に通じて居つた事も其一因では無かつたらうか。

鐵齋は筆を持つて物を書くと云事が非常に好きだつたらしい。是は一面から見ると、鐵齋が精力絶倫の人で、其旺盛な生命力を筆硯の上に集中した結果だと見る事も出來るが、兎に角書く事が好きだつたと見へて、翁の家に有る物は何にでも翁自身に筆を採つて、まめに何とか書いて有る様だつた。或時は外に履いて出る日和下駄に迄畫の描いて有るのを見た事が有る。其駒下駄は前田正名さんが贈つて呉れたと云ふので、桐の平たい表に黒漆で蘭の畫が一面に描いて有つた。鐵齋の畫には竹田の様に一幅の中にほんの僅かな梅の一枝を描いて、あとはずつと餘白を見て居ると云様な作品は少く、畫幅一ぱいに描き盡した物が多かつた。眞黒な山水を偶から偶迄一寸のすき間も無い程描き盡して、まだ夫でも描き足りなくて、其畫の上に濃い墨で賛の字が書いて有つたりする物が隨分ある。

竹田は筆墨を惜むと云氣分が餘程有つた。僅かな墨を小さい筆先に含ませて、左も惜そうにかすり〳〵畫を描いて居る。竹田に取つて其筆墨は寶石の様に大事である。一點一劃も容易に筆を下せなかつた觀がある、が鐵齋は是に反して惜氣も無く筆一ぱいに墨を浸して、思ふ存分縱横に描きなぐつて居る。描きなぐると云つては語弊があるかも知らぬが、恰も描きなぐつて居るかの如く見へる。竹田の畫は譬へて云へば、酒好きが一盃の酒を如何にも樂しそふにちびり〳〵嘗めて居る形があり、鐵齋の畫は大酒家が滿を引いて醉倒れる迄飲み明かす慨がある。

竹田も鐵齋も或意味の器用な人では無い。どちらかと云へば不器用な方であらう。其不器用なのを強いて押隱そふとしないで、平氣で其拙い線、不器用な筆を使つて生地の儘の自己を畫面の上に晒け出して居る。其處に正直な人に見る特別な親味があり、面白味が有る。

けれども竹田と鐵齋とは其性癖が悉く相反して居た様に思へる。夫は竹田は神經質の人で其畫面が如何にも几帳面で一毫の微も忽にしない嚴肅な心持があるが、鐵齋は磊落で一向關はない風がある。中には賛の字の行が曲つて居たり、印が逆まに押して有つたりする。夫は鐵齋にも畫面の整頓や構圖上の苦心と云事は夫れは有るだらう。そんなに無頓着に亂暴に描いて居る譯では無いだらうが、何處かに自由な氣持が有る。

鐵齋が畫筆を振つて畫面に向ふ心持を想像すると、お役人がお役所に出懸けて一日の勤めを果す心持でも無ければ、商人が店の間に座り込んで金もふけの算段をする心持でも無い。鐵齋

の畫面は鐵齋に取つては恰も我家に居るのと同樣である。否寧家よりももつと氣兼ねの要らない、もつと我儘の出來る獨舞台の觀がある。古往今來誰れの畫を見ても多少の遠慮や氣兼ねが有る。古人に氣兼ねをしたり、世間の目に氣兼ねをしたり、自然其物に氣兼をしたりして、そふ我儘に振舞へる物では無いが、鐵齋の畫にはそんな氣兼ねが無い。寢るも起きるも此畫面はおれの天下でおれの自由だと云氣持ちが有る。

だから畫面の上の鐵齋は素裸の鐵齋、普段の儘の鐵齋である。五ツ紋の羽織に仙台平 の袴をはいて堂々と構へ込んだり、肩肱を張つて威張つて見せたりしない處に他人と思へない親味が有る。

竹田の畫面に對する心持は夫とは大分違ふ樣である。竹田の畫面は竹田に取つては恰も晴れの座敷に、自分が正賓として床の間の前に押し据へられた形がある。畫面に向つて竹田の念頭に去來する考は、如何にして自己の品位を高め得るかの問題である。だから竹田の畫には他人の前に威儀を正して上品に端然と座り込んだ他所行きの竹田があり、鐵齋の畫面には家族を前に行儀惡く足を投げ出したり、時には寢腹這つたりして居る、普段の儘の鐵齋がある。

竹田の畫面は物靜かで、清潔で凡帳面で、塵一つ散はつて居ない、掃除の行屆いた茶席で、心靜かに茶の煮へ音でもきいて居る樣な氣持があり、鐵齋の畫は道具市に雜然として好きな骨董品の轉がつて居る中をあれかこれかと見て歩く樣な樂さが有る。

鐵齋は云ふまでもなく漢學者である、そして其趣味は支那趣味である。東坡と誕生日が同じだと云ふので東坡同日生と云印を彫らしたり、支那の道服を態々支那から取寄せたりして、可なり支那の文化に傾倒し、支那の文物に心醉して居つた事は、他の一般漢學者と違はないやうだつた。けれども、其一面には日本の文化を愛し、日本の文物を研究する事を怠らなかつた。是は翁が幼年時代に國學を修めて、大鳥神社其他二三の宮司を勸めた事があるので、畫も大和繪を研究したりして漢學一天張りの人ではなかつた事にも因るのであらうが、兎に角支那趣味を好む一面に日本趣味を愛し、特に各種の技藝に秀でた知名の人物の傳記や逸話を好んで、そふ云ふ方面の事は中々委敷かつた。そふして何事も熱心な翁は、其畫像迄採集して夫を模寫した物が隨分ある。それで風流好事に關した事なら翁は大抵知つて居た。茶の湯の話、表具の話、生花の話など何でも一通りは通じて居た。其點から云へば翁は漢學者と云ふよりも、寧ろ俳

大な風流人、好事家だつたと云方がよいかも知れぬ。

私は最近翁から好事雅會の圖と云畫を貰つた。亡くなるつい二三ケ月前だつた。能因法師の井出の蛙と長柄の橋の鉋屑の話を描いた物で、上に日本史の其話の一節が書き拔いて有つた。考へて見ると翁自身も其井出の蛙の亜流ではなかつたらうか。いつか私は鐵齋の畫室を見た事がある。翁を訊ねた人は誰れでも見て居るかどふか知らないが、其畫室と云ふのは十疊敷かそこらの部屋で其亂雜な有樣はとても想像の付かない位だつた。疊の明いて居るのは僅かに翁の座蒲團の敷いて有る場所丈けで、其周圍には書物が積み重ねてあつたり、印材が轉つて居たり、壁には新聞の切拔や方々から來た手紙が狀袋の儘で貼り付けてあるかと思ふと、天井からも何だかぶらぶら下がつて居る。翁は一々そんな物を說明して、是れは誰れ夫れが吳れた何とかだとか、是は此間西園寺さんが支那から贈つて吳れた東坡の住居跡に生へてゐたびんろうじの實だとか、皆何とか因緣が付いて居、どれも井出の蛙の部類に屬する物許りだつた。恐らく場末の古道具屋でも是程汚くは無いだらうと思へる程混亂して居た。私が呆氣に取られてそこらを見廻して居ると、老夫人が傍から「鐵齋は是を片付けると氣にいらないので、手の付け樣がありません。疊でも此處だけは替へる事もどふする事も出來ないので、まあこの通り汚いのです。是を褒めて下さるのはあなた位のものだ」と云つてこぼして居られた。この亂雜な畫室から鐵齋のあの畫が生れるのである。だから鐵齋の畫はぢゝむさいと云批評の起るのも無理は無い。

此異彩を放つて居た、翁の趣味性格を如實に語つて居たかの如く見へた畫室も、翁の亡くなる前の年に家族達の住居と一緒に改築されて、暮の押し詰まつた卅一日の午後、翁がなくなつたと云ふ通知を受けて、元日の朝早く出掛けて行つたら、其新敷建代つた畫室の薄暗い中に翁の遺骸が横はつて、其枕元には靑竹の花筒に挿した白木蓮の花が一對寂しい色を見せて居た外には、もう天井からぶら下がつた物も、壁に張り付いた手紙も、積み上げられた書物も何もなかつた。

維新前後の遊蕩氣分

尾佐竹猛

蘇峰氏の國民史義士篇の一節に「我が維新前後の志士、若しくは所謂志士の名殘りたる、元勳諸氏中にも、良雄程ではないが、良雄に髣髴たる遊蕩氣分を、發揮したる人もあつた。若し彼等が美人の膝を枕にしても、天下國家を忘れなかつたと云はば、それは眞實だ。然も若し天下國家を懷ふが爲めに、美人の膝を枕としたと云はゞ、そは恐らくは餘りに辯護に失するであらう。」「好酒者が人を馳走せんが爲めに、酒を飲むを見て、彼は人を馳走せんが爲めに、故らに苦痛を忍んで、涙を流して、酒を飲むと云はゞ、其者に取りては、却て難有迷惑であらう。即ち餘りに大石の濫行を辯護するのも、亦た然りとする」とあるのは近頃面白く讀んだ。大石良雄のことは暫らく措き、維新前後の遊蕩氣分については是迄筆を染めたものは無かつた。只だ二三の書が所謂維新の志士が祇園、島原あたりに耽溺するのを叙して、これは幕府の探偵の目を避ける爲めであるとか、密事の謀議の爲めだとか尤もらしいが其實尤もらしからざることを書いたものがあるに過ぎない。然らばこれ等の志士が明治政府の大官となりて後、盛んに風紀を紊亂した行爲はどうかといふと、是は薩張り辯解がつかない。言論の自由の無かつた初期の新聞雜誌が、羨み半分、燒餅半分に所謂貴顯紳士の醜行を素破ぬき、これは維新の際に身命を拋つて國事に奔走した勞を慰する爲めだと厭味交りの皮肉を述べた位のことで、それよりは「之に就いては敢て辯護するのではないが、鳥渡ばかり察して遣るべき事情もある。維新の風雲に際會した田舍士が、扨て愈々朝廷のお役人に出世して、江戸に住ふことに爲ると、是まで夢にも見なかつた莫大な月給を頂戴する、一方に大江戸から殘された繁華は、彼等に樣々の魅惑を與へずには置かなかつた。柳橋の月、吉原の花は、血氣盛んな田舍士の魂を奪ふに餘りあつた。然るに此際彼等がおひ〳〵と田舍から呼寄せた女房共の態は如何であつたか。以前には左程にも思はなかつた拙い面や、無格好な姿を東京の粉白黛緑に比べて、御亭主たるも

の今更ウンザリせざるを得なかつたであらう、是れが抑も彼等の品行を惡くさせた有力な原因と思はれる、（日本人の心）と述べた某氏の說の方が幾分肯綮に當つて居る。しかしこれでは、維新前と後とは別々に辯護されたに止まり本來同一人なる其御本尊の前後相通じた行爲の辯護とはならぬ。これには其人の道德心の低下といふ主觀的方面の觀察もあらうが、これが、一人や二人では無いから、どうしても時勢といふ背景へ持つて行つて責任を押付けるより外に說明の仕樣が無い。今更時勢英雄を造るか、英雄時勢を造るかの議論でもあるまいが、蕩兒が遊蕩氣分を造るか、遊蕩氣分が蕩兒を造るかと書き直せば、ソレヤ遊蕩氣分が蕩兒を造るに極つて居る。此時勢といふ奴にかゝつては如何なる英雄でも頭が上らない。そんなことの無ささうな大隈侯の家庭だつて、當時は面白からぬ噂もある、眞面目な板垣伯だつて『新橋の双璧と稱せられた二名妓があつたが、一人は板垣さんに行き一人は陸奥さんに行つた。當時新橋邊での批評に、板垣さんは參議であるから、彼の妓も所を得たが、陸奥さんは神奈川縣知事だ、もそつとよい所に行けばよいのに、といふ樣な噂であつた』。（龍溪往事談）といふ艶種もある。西鄕の豚姬に至つては近頃何處かの劇場で演じた程の事蹟は無いのであるが、隨分お粗末な女と平氣で關係して居つた。これ抔は寧ろ御愛嬌の方であるが、時代は少し後となるが軍神乃木將軍にデカタン時代があつたことは何人も意外に驚くであらう。こんな例を擧げたらそれこそ枚擧に遑あらずで、日も亦足らぬが、幕末から明治へかけての大立物たる福澤諭吉先生は此惡氣流に超然として、そんな氣分は顯微鏡で搜しても無い、流石は福澤だとは是れ迄人々の嘆賞措かない處であつたが、時勢といふ奴は曲者だ、此先生の懷へも忍び込んで居るから驚く。そこでチョイとこれを素破ぬくと、斯うである。

それは成島柳北の『伊都滿底草』卷之二に

六月某日、桂晴蓑、福細衣、唐華陽等、會二于誰園之荷花池上一妓阿島有レ約不レ來、有二小藤者一至、其醜似レ猴、又似レ蟆、坐客皆不レ懌、因題二一絕一

晴蓑作蟆于細衣氏之扇　　武昌喫霞仙史

三鞭美酒幾杯傾　談レ志開レ襟到二三更一
只是今宵有二遺憾一　不レ聽二島語一聽レ蛙聲。

代二妓小藤一解レ嘲　　誰園主人

諸君呼レ妾作二獼猴一　妾面肖レ猴何足レ憂
請看堂々君子國　猴而冠者不二曾羞一

晴蓑漁隱の筆なる猴と蛙かきたる扇にかきつけける

河淮經略姑蘇監田唐通

此夜盛會。衆惜二福郎之歸一强留不可而去矣。

邦音歸與蛙通去與猴通

とある。これ丈けでは何の事やら解らぬから說明するが、成島柳北が文久三年蒙譴に觸れ閉門を命ぜられた。此蟄居の間に英書を勉强したのであるが、二十六歲の風流才子はジツト閉居しては居ない。柳北の號は家が柳原の北に在るから出たのであるが柳橋とは近いのであるから表門は閉門ではあるが柳橋に近い方へ小門を作りて、これから柳橋へ耽溺した。此頃が柳橋の全盛時代で、柳北一代の名作『柳橋新誌』が第一編既に出で、二編未だ稿を成さない時である。宅には常に妓を聘し、酒を置き當代の名流……新學を以て知られたる……神田孝平、桂川甫策、箕作秋坪、柳河春蔭、宇都宮三郞、等を招き、共に醉ひ又之に學んだ。これ等の諸士が醉餘、各筆を執りて、其の樂屋落を書いのが『伊都滿庭草』四卷である。當代文士の落書、珍の又珍なるものである。右に擧いた一節中に在る誰園とは柳北の庭園の名であるから誰園主人とは柳北である。唐華陽とあるは河淮經略姑蘇監田唐通とあると同一人で神田孝平の事である。六かしい支那の地名めきたものを氷々しく列ねてあるが、これは「可愛けりやこそ神田から通ふ」の當字である、從つて唐華陽も「から通ふ」で神田の隱語である。後には單に唐通丈けを取りて唐通居士杯と稱へて眞面目臭つて居たが、其雅號の由來は斯の如しである。桂晴蓑は桂川甫策で、武昌喫霞仙史は柳河春蔭で「何々節を聞かしやんせ」の當字らしい。最後に福細衣とあるのが福澤先生である。福澤先生は雅號などは大嫌ひで、已むを得ずんば世俗の字を崩して三十一谷人などと云つて居られたが、文久の頃迄は「子囲」といふ號があり、また通俗文の本家で漢文で書くことも排斥せられたが、先生の始めの出版たる「華英通語」には子囲の語にて、漢文で序を書いてある、後年の先生とは丸で別人の感がするのである。そこで此處には子囲に細衣を當て、福澤の一字を取つて福細衣と支那人めきた書き方をしたので名づけ親は勿論柳河である。そこで右の一節を翻譯すると、慶應元年六月某日、桂川甫策、神田孝平、福澤諭吉、柳河春三等が成島柳北の誰園に會し、藝者のお鳥を聘んだが、お鳥はお約束があつて來られぬとて、代りに小藤といふのが來た。其醜、猴に似たり又蝦蟇に似て居るので酒が不味くなつた……アンマリ形容が非道ひ……といふので桂川が福澤の持つて居る扇子に猴と蛙とを畫いた。福澤は宴の中途で强いて留めるのを聞かずに歸つた。そこで例の落書となつたのである。

柳河は「鳥語を聴かずして蛙聲を聴く」と罵倒したが、柳北はマアそんなに酷いことをいふな、とて小藤に代つて辯じ立て、「妾の顔は猿でも宜うござんす、世間の偉らい人だちも沐猴にして冠して居るではござんせんか」と辯護した。神田は「オイ福澤の野郎怒つて歸つたぜ、蛙は歸るで、猿は去るか、ハ、ア」といふた、といふのだ。これは福澤が斯様な藝者杯の來る席は汚しいとて怒つて歸つたのでは無かつた。

また桂川家に在る「随身巻子」慶應元年十月二日の條に

誰園、箕作、福澤、柳河、桐山來、梅、島倍從

とある。今度は、桂川の宅へ、柳北、秋坪、柳河等と共に福澤先生も行つたので、此時は藝妓のお島が來て、お梅といふのも來た。福澤先生は勿論お嫌でなかつたらしい。

此お島といふのは柳橋で有名な藝者で、『柳橋新誌』には

後進中名聲頗鳴者、推阿島爲首、阿島中 嗇其才、而外悶其行、事親孝順、接人温淑、未嘗見其發怒于聲色、亦良妓也。

と褒めちぎつてある。此仲間では彼獨と云つて女王であつたが柳北の物になつたらしい。お梅も柳北がチョツカイを出したらしいので此兩妓のことで一同から盛んに冷評されて居る。それに此兩妓の外、お竹 お蝶もどうやら怪しいとの噂も立つたが、これ等が皆柳橋新誌第二編の小話の材料となつて居るか可笑しい。

一書生學校ニ入リ頗ル英語ニ通ス、一夕柳光亭上ニ飲ム、妓ト言フ半ハ英語ヲ用ユ、妓曰ク郎君獨リ英語ヲ識ル、奴輩解セス是レ甚タ趣無シ、願クハ奴ニ教フルニ英語ヲ以テセヨ、書生意甚タ得曰ク卿才子、卿才子、若シ之ヲ學ヘハ數月必ス大家ト爲ラン、僕英語ニ於テ通セサル所無シ知ラス卿學フ所何ヲ先ニセント欲ス、妓曰フ酒錯相ヒ呼フ常ノ語ヲ用ユル風致無キニ似タリ、願クハ郎君先ツ教フルニ奴輩ノ名ヲ以テセヨ、書生曰フ妙々、妓阿竹ヲ問フ曰ク蠻浦、阿梅ヲ問フ曰ク岐咻、阿島ヲ問フ曰ク弗得、阿蝶ヲ問フ曰ク洒学、應答響ノ如シ云々（原漢文）

手近な處を小説の材料となす近頃の遣り方は、柳北先輩は疾くから心得て御坐る。それから猿や蝦蟇など非道ひ評をした小藤だとて『柳橋新誌』初編の小妓中に名を列して居る。ソウ馬鹿にしたものでは無い。

扨て斯う書いて來ると福澤先生には特にどうといふ事も無いが、彼の赤裸々の告白として自叙傳中の白眉たる『福翁自傳』に

江戸に桂川と云ふ幕府の蘭家の侍醫がある、其家は日本國

中蘭學醫の總本山とでも名を命けて宜しい名家であるから、江戸は扨て置き、日本國中蘭學社會の人で桂川と云ふ名前を知らない者はない。ソレ故私なども江戸に來れば何は扨て置き桂川の家には訪問するので、度々其の家に出入して居る云々

とあるは宜いとして。

私は豫て申す通り一體の性質が花柳に戯れるなどと云ふことは假初にも身に犯した事のないのみならず、口でもそんな如何はしい話をした事もない云々

とあるのは少しく訂正を要する。が兎にも角にも福澤先生には子閑時代とでもいふべき、後年の先生とは全然別箇な時代のあつたことは記憶して置いてもよろしい。

大部話が福澤先生の事ばかりに偏つたが、これは珍らしい例として擧げたに止まり、別に先生に對して、どうかふと云ふ譯は無いのである。が斯う云ふ風に文士間にも遊蕩の盛んであつたのを何と觀察するかといふ問題を出して見るのである。

先に擧げた所謂志士なるものは兎に角國事に奔走した。死生の衢にも往來したのであるから、探偵の目を避ける爲めとも、密事の相談の爲めとも表面上の理由は一應はつく。それから維新後の事情は前述の通りと說明しても、此の文士連にはこれが理由とならぬ、文臣として國事に盡くしたとしても武臣とは全然別な仕事である。中には新學即危險思想といふ風に解した何處やらの國の當局者の頭と同じ程度の考で、此徒を迫害したものもあつたが、これとて志士連中とは比較にならぬ。それに大部分は江戸住いの連中だから都珍らしさの田舍士とは同一に律する譯にはいかぬ。それに之等の連中が維新後もなか〳〵盛んに發展して居るから、全く以て遊蕩氣分の所産とよりしか說明は出來ぬ。甚だ比倫を失するとの御叱りを受くるかも知れぬが、近頃の文士諸君の發展振りと共通の心理から出たものと一應は推測して宜しい。

扨て之等の遊蕩の對象はいふ迄も無く第一が吉原で、それから柳橋や新橋などといふ風であつた。新橋や柳橋などに對する考は今日とは大差は無いが、吉原に對しては全然今日の考と異つて居るから少しく說明を要する。

吉原は江戸三百年の太平で、市民が作り上げた歡樂鄉である、理想鄉である。打續きたる太平は富の増殖とり、富の力はやがて士分階級に迄喰ひ入りて、後年實業家勃興の素を爲したが、表面社會の組織は飽く迄極端な階級制度である。此桎梏を脱して、四民平等の別天地を造りて氣を吐いたのが、吉原である。一度此境へ足を踏入るればそこには何等の階級も無い。

金さへあれば王侯貴人である。それは今から見れば恐るべき資本主義の階級戰ではあるが、政治的、社會的の階級の甚だしき時勢にはこれを脱する丈けで、夫れ丈けを理想とするのである、後に來るべき階級戰の如きは顧る遑は無かつたのである。一度樓に登れば武士の表榜たる双刀は預かられて、こゝには百姓町人と異る所は無い、否動すれば其無粹沒常識は、淺黄裏と罵られ、勤番者と嘲けられ、新五左と綽名される。威張れば威張る程馬鹿にされると來ては、武士たるものの權威も幻滅を感ぜざるを得ない。斯う云ふ氣風の間に在つては妓たるものゝ第一信條は意氣と張りとであり、俠客や鳶の者の活動舞臺となつて、イナセと粹の意氣比べとなり、此女性美に此男性美を加へて吉原藝者の手古舞姿といふものも出來た。所詮は庶民の歡樂を目標としてではあるが、なかには大名や貴族の客もあり、之を相手に茶の湯、生花、琴棋書畫等の諸藝に達した高級花魁も輩出したが、これとて貴族の平民化、惡くいへば歡樂には庶民級に頭を下げて其仲間入りとなつたともいへる。

既に理想の歡樂鄕である……それは單なる遊蕩の分子を除いても……から凡ての藝術趣味は此處を中心として發達したのである、歌舞音曲は固より、演劇とても此廓の爲めに發達したと謂ふべきである。文藝また然りである。文藝に携はるの形式丈けに於ては今日の文士の前驅ともいふべき戲作者が幇間の であつたのも、此地の爲めに發達したからである。これ德川時代の文藝、藝術は吉原を除いては意味を爲さぬが如く、大きく論ずれば德川文化史の中心は吉原であつたとも謂ふことが出來る、從つて江戸人が吉原を以て名所として誇つたのも怪しむに足らないのである。今日猶ほ下町士女が家庭教育として、長歌、常磐津等の音曲より手踊り仕舞の歌舞の教養を必要として居るのは、此時代の影響を受けた江戸人士の流風である。

こんな時勢にありては士風の砥礪、綱紀肅正を表榜せる武士階級だとて、指をくはえて見ては居ない、眞先に職務上の理由を主張して公然入り來つたのが留守居階級であつた。留守居とは各藩の外交官で、藩に依つては聞き番ともいつたところもあるが、之等の連中は意思の疎通、交際の圓滑といふ辭柄の下に吉原遊びを重要なる職務とした。今日の政治家、實業家も同樣の辭柄で待合入りをするのと異つたことは無いが、それなら凡てが辭柄丈けかといへば必らずしもそうばかりと斷定して攻擊するにもあたらぬ、幾分か本來の目的を達することもあるが、大部分其目的の範圍外に脫して居ることも拒み難い。春臺だつたか徂徠だつたかが、お留守居の弊を攻擊し、彼等の職務といへば箸の轉ろげた位のことで、主人の金を遊里に費消する

を能とするとて、ひどく腹を立てゝ居るが、所詮は太平の役人だ、大なり小なりみんなこんな氣風であつた。しかし斯うなつて來ると政治上の問題が吉原で議せらるゝこと、恰も今日の待合政治の如く、また利權漁りの政商の好舞臺ともなる。彼の紀國屋文左衛門の豪奢談として傳へらるゝ、吉原の大門を閉めたといふのも、其實當路の役人を籠絡する爲め吉原中を買切つて、一般庶民を遠ざけたのだといふ説もある。その説の當否は別としても、こんなことはありそうなことで、既に川柳にも

役人の骨つぽいのは猪牙に乘せ

との句がチャンと時弊を穿つて居る。此句は説明する迄も無いと思ふが、今の青年諸君の爲めに老婆心ながら講釋すると、猪牙とは山谷堀から吉原通ひの舟の名である。今なら差し當り、硬骨な役人を自動車に乘せて待合へしけ込むといふ寸法である。

こうなつて來ると其弊には堪へぬが、政治上の中心ともなつて來る。愈以て吉原全盛である。江戸人は吉原で無くては夜も日も明けぬこととなる。從つて客の種類も複雜となつて來る、當初は單に歡樂を追ふの蕩兒のみであつたものが、階級制度に不滿を抱く町民の氣の吐き處となり、政治上の發源地ともなつたのであるが、世が太平となるに從ひ各方面に行詰りが生じ、不平不滿の徒が何れの階級にも生じて、其不平の遣り場に困じ自暴自棄や、あきらめとなつては、刹那主義に走りて其足の向く所は此衢である。此徒のことに付いては別に取り立てゝ述ぶる處も無く吉原文藝は江戸時代に書き盡されて居るから、敢て事珍らしく書き立てる程のことも無いが、少し毛色の變つたのは幕末から勃興し來つた洋學者達の一團である。

其始め誤つたる宗教觀念から來る迫害と、對外思想の無智なりし當局の壓迫との間にあつて、悲慘なる努力の下に新學の研究を爲した斯道先輩の下した種子は、漸次に萠芽し來り、頑迷な當局も世界の大勢に促されて已む無く此新學者を認めざるべかざるに至つても、世間の白眼は依然たるものである、階級制度の儼なる時勢にあつては、拔擢採用といつたとて極の例外の場合に或る低い地位に任命さるゝ位のことで、如何に斯學の高材逸足でも其才を振ふの餘地が乏しい。然るに仰いで社會の上層を見れば凡骨愚腦累々として只だ威張りに威張つて居る、之を見ては多少の志あるものは憤慨せざるを得ない、況んや世界の大勢に通じ、新しき思潮に觸れては……ヨシそれが極めて幼稚なる智識にせよ……當時の世局は、餘りに馬鹿〳〵しく、あまりに苦々しい、さりとて言論文章の自由は絶對に無い。福澤先生と相對して、明治思想界の大立者たる加藤弘之先生

でさへ、其最初の著たる『鄰草』は

　西洋には立憲政體と云ふものがあつて、一國の君だとか、大臣だとか云ふ者が權を專らにする事をしないで、上院、下院と云ふ即ち議會があつて而して國の法律、財政等を議定すると言ふ制度が西洋に在る。其れは誠に人間の天から授つた權利を重んずる譯であつて、即ち其れが　間の平等と云ふ意味に適ふ。然るに西洋より外では。そう云ふ譯には行かぬ。一國の君とか政府とか云ふ者が權を專らにして居るといふは甚だ道理に背いた事であると云ふ主義に書いた者である。實は日本も、さう云ふ樣な鹽梅にしたいことであると云ふ意味であつたけれども、日本の事を明らさまに書くことは出來ない。日本が惡いから西洋に倣ふて、其制度を採つて政治を善くしやうと云ふ事を書く譯には行かぬから、そこで支那と云ふものを持つて來て、支那は昔け善い國であつたが、今は善くない、政治が公平でない、左ういふ譯である故、支那は衰へて仕舞ふから、西洋に摸倣して立憲政體にせねばならぬ、と云ふ事にして書いたのである、則ち隣の事を書いたのであると云ふので『鄰草』と名を付けたのであるが、意味は日本を改革する事であつたのである。併し其時分は中々言論の自由と云ふ樣なことはないから、假令支那の事にしても公にするは危い時で、西洋の事を書いと云ふは、政府のみならず、攘夷家は猶更嫌ふ時で、政府に對するのみで無く、攘夷家に對しても遠慮せねばならぬ場合で、出版する事も出來ず其儘に置いた云々（明治十二傑、文學博士加藤弘之君）

という譯で、單に議會の說明をするのにさへ、支那に假託して記述せねばならず、それさへ出版出來ない狀態であつた。若し之を出版したとすれば、ソレこそ治安維持法違反どころでは無かつた。

醫術の大家、伊東玄朴は、民法の書を讀めば狂人となる書だとて嚴秘して置いた。

此事に付ては伊藤玄朴傳に訓話隨錄を援き『玄朴先生は家に澤山藏して居る蘭學の書物の中で或る一部の書物は堅く風呂敷に包んで封印を施し決して人に見せず、是れは人が見ると狂人になる本だといふて居られたそうである。宇都宮先生（三郎、明治工學界の先進で化學といふ熟語を始めて用ひたる人）はよく私に此話をされて、其封印を附けた本は何だと思ふと、フォルクレヒト即ち民法の原本であつたのだ。何しろ其頃の社會は今日のやうなものでなく、中々以て權利の義務のと言ふことは考へられもしない以ての外の事であつた。上は將軍家それから大名、旗本、與力、家人、諸藩の士族、百姓、町人と頭から尻まで束縛で固まつてゐて誰も不公平とも思はねば不思議ともせぬ時代に民法等を擔き出したならば、全く狂人と思はれたであらう。單に狂人扱ひされた丈けで濟めばよいが、たゞでさへ蘭學を修めた者は六づかしい理窟許り言ひたがつて、國學者や漢學者側から烟たく思はれて居たのであるから、或は如何なる厄禍を蒙るかも知れぬ遂には其爲に蘭學が絕滅するやうにならぬとも限らぬ。そこに考へ及ばれた先生は、風呂敷に封印をして、見たものは氣狂となると云はれて見せなかつたものと思はれる。先生の用意周到にて蘭學の前途に對する用意の深かつたことは是れでもよく解ると嘆稱された』とある、この一節が近時眞山青果氏の力作といはれる脚本『玄朴と長英』の中に面白く脚色されてある。が全體此話の民法といふのは和蘭文の條文であるか註釋であるかは勿論不明であるが、醫師たる玄朴が何故に民法を必要としたのか解し

兼ねる。或はフエルケールレヒトでは無かつたかと思はれるが、これでは宇都宮三郎の發音を疑ふことになるから暫く傳說の儘として置く。

明治理學界の先進伊藤圭介先生が未だ名古屋在住中其門下の俊才西村良三（後ちの柳河春蔭）が蘭書を持つて居つた爲めに江戸町奉行より召喚された。

此事に付ては山川千曙の『安政錄』三年九月の部に

廿日晴今曉蘭醫西村良三江戸表へ發足右は蘭書之儀に付御尋之筋有之江戸町奉行井戸對馬守殿より被呼下候由委敷事は未聞す

とあるのみで、其蘭書の如何なる物であつたか判らないが、一說では伊藤圭介の家に種々の洋書を藏し嫌疑を招がんとしたから、良三が師の累を一身に荷ひて江戸へ出たのだといふものもある。

その他シーボルドに日本地圖を與へた丈けで賣國奴として處刑せられた高橋作左エ門や、さては高野長英、渡邊華山、小關三英の危禍等、こんな例は數へ上ぐれば枚擧に遑ないのである。新思想即危險思想といふ觀方寧ろ感じ方は、文化の進んだ國でも、どうかするとあり得ることであるから、此頃の當局者がこんな方針で臨んだのも大した無理積なりでは無かつたらうが、これを受ける側になつて見れば溜つたものでは無い。强い者は飽く迄反抗するが、それは結局無效と知つた多くの者……それに學徒は頭の進んだ割に强く無いものが多い……は一方に幾らヂタバタ騷いだところが此不合理な社會組織は二十年、三十年で改まるものでは無い。所詮は無駄な努力だとの弱音も出る、世の中を三分五厘と縊つて、享樂主義の誘惑が此心の虛につけ込んで來る、根が江戸氣分に浸つて太平の餘澤に育つたもの、斯の道は腹の底からお嫌ひでは無い。

それに本來の武士は頭は單純な丈けで、攘夷論の實行だとして、外人を斬り外館も燒く、要路の大官と主義が違へば暗殺もやれば襲撃もする、大きく出て討幕の企てもするといふ勢で、積極的の行動にも出るが、そこはお上品な洋學者はそんな野蠻なことはせない、否出來無い、せい／＼が國事に就いて建白する位のものである。それとて大した反響も無いから、見限り方も早い、世間のあまりに無智と、あまりに無識とに呆れて到底談ずべからずとして相手としやうともせぬ。世間もまた洋學杯を遣る者を目して變物か、狂人の仲間として相手にせない。こうなると自然集るのは同氣相求むる手合計りである。集まれば世を拗ねた連中のことゝて、ひとしきりは半可通な外國語を混へての世間話に倦き、はては皮肉や諷刺で世を茶化し、筆の立つのに任かせて落書となり、口に任かせて罵倒す、とどのつまりが吉原行といふのが落ちである。當時の事情は前述した『伊都滿庭草』に躍如として居る。それからマア吉原ばかりでもあるまい柳橋もオツで御座るとて柳橋嘆美の書を公にしたのが

『柳橋新誌』である。柳北もまさか彼の書があれ程の評判とならうとは思はなかつたらうが、後には柳北の代表的著作と迄目せらるゝに至つては、本人も聊か微苦笑を洩らしたことであらう。また柳北の遊び友達であつた柳河春蔭が『横濱繁昌記』を著はしたのも、舞臺を横濱に持つて行き……其實本人は横濱の地を踏まず……柳橋新誌を延長したものと見るべきである。其他柳河の「吉原グラムマチカ」「北國公法」「愛憎表考」「新慶遺訓」「新篇醫者風流解」などの著も此種樂屋落的の戯著である。之等はいづれも江戸繁昌記の流風ではあるが、明治初年の軟派雜誌、東京新誌や、鳳鳴新誌あたりの先驅を爲すもので、戯作者の吉原物とは別にその中間に於て文壇の地歩を占むるチヨイト珍らしい作物である。

こう撚りもつかずに、だら〳〵と吉原のこと計り書いて居ると、なんだか時節柄氣が變にでもなつたのではないかと思はれて、自分でも氣がさすが、もう少し我慢して貰ひたい。肝腎の事を書き殘したといふのは、花柳界唯一の要件たる財源論のことである。

お前のいふやうに、洋學者連は世に容れられない不平の餘り、耽溺したとしても、そんな連中なら、どうせ金は無いのに極つて居る。それを詰るが慣ひの廓の金をどうして算段するのだ。といふ疑問は第一に來る、これについては維新前の洋學者の生活に就いて少しく述べねばならぬ。

此頃の洋學者の中で地位と收入の宜いのは何といふても、蘭法醫である。普通の開業醫でも流行るとなると素破らしい。そして傍ら蘭學塾を開く生徒は雲集する。蘭學を遣るものは凡てが一度は醫者の門を潜らねばならなかつた。從つて蘭學者は常に醫者である。福澤先生が緒方塾で蘭學を學ばん爲め、藩へ願出たとき、砲術修業の爲めなら差許すといはれ、醫者の所へ砲術修業も可笑しいといへば、なんでもさうでなくてはいかぬと云はれその通り願出でて許されたといふ話は、蘭學は國防研究の爲め已むを得ず許すといふ當局の方針と、蘭學者は凡て醫者なりといふ當時の學界の狀況との間に生じた一場の挿話である。橋本左內や高野長英等の如き幕末に醫者で政治家となつたものの末路は惡いが、明治となつては醫者から大村益次郎や大鳥圭介等の如き軍人、寺島宗則、青木周藏の如き外交家を出して居るのは皆此故で、失禮ながら後藤子爵の如きまあその後輩と申すべきで御座らう。それから開業醫より一躍して御典醫となるとこれは偉ひ、蘭學者として第一の出世である。なにしろ將軍や御臺所の脈を診るのであるから、世人の想像するよりも地位は非常に高ひ、祿は少くても位階は、參議、納言にも匹敵す

る。前に述べた桂川家は代々蘭法醫で鳴らし、御典醫であつたが、その何代かのとき親戚の何某は若年寄格に出世し、これなら桂川の上になつたとて、柳營へ出仕して見ると、豈圖らんや桂川の方が遙か上席であつて驚いたといふ話がある。マア今でいへば内務の政務次官となつて得意になつて、宮中へ出て見ると侍醫の方がズット位階勳等共上であつたといふと同樣である。

醫者の外には幕府の外交方又は天文方砲術方の役人になるのと蕃書調所（洋書調所、開成所）の學職に就くのと。其他には各藩の同樣の地位に抱へらるゝので、以上の外に洋學者の就職口は無い。それでも戰國以來、新に召抱へらるゝといふやうな人材登庸の無かつたのに、時勢とはいひながら、武藝以外に立身の途は開かれたのであるから。『ガランマチカを一冊あげると先生顏にて蘭書の調の出版なぞとは片腹痛ひぞ』なんとかいふチヨボクレ迄出來て、時人は驚異の眼をみはつたのである。

しかし、なんといふても祿は少く知れたものであるが、その凡てに通じて收入の重なるものは、著書と飜譯とであつた。されど著書の出版は容易な業ではなかつたから、多くは非常な犧牲を拂つて、倒産に瀕したものもあつた位ではあつたが、それでも『坤輿圖識』『八紘通志』は箕作家の財政を立直したといはれ、辭書の出版をしたものは大抵成功して居る。福澤先生の著書の暴風的賣行は有名な話ではあるが、これは寧ろ維新後の賣行の事で、維新前は夫れ程でもなかつた。砲術に關するものや、軍隊に關するものは、多くは官版か藩版になつて居るから比較的多く出版されて居る割に直接著者の懷に入るものは少かつたらしい。

こんな風で著書には多く期望することは出來ぬが、誰れでも一番の收入としたのは飜譯であつた。これは醫者といはず、役人といはず、凡ての洋學者の內職といふよりは寧ろ表職とでもいふべきものであつた。

當局からも世人からも、あまり好遇はされて居なくても、外交や、軍事抔の重大問題が起きると、どうしても洋學者を煩はさなくてはならぬ。それでなくても外警が頻々あつては外國の事情も平素から知つて置かなくてはならぬ、單なる知識慾の渴望からも外國書の飜譯が必要となつて來る。どうしても洋學者で無くてはならぬと來るが、さて、其の數は極めて少い、勢ひ飜譯料は騰貴せざるを得ない。

福地源一郎の話に

或夜居士が寺隱へ行くとて、其所に在つた半紙を摑んで其儘行つたが、書物を了つて丁數を檢めて見ると、一枚足り無い、

其所等を捜したけれど何うしても知れ無い。翌朝居士雪隱へ行き出て來て曰く『あゝ惜しい事をした、昨夜は三兩の半紙で尻を拭た』。此時分の飜譯料は一枚三兩であつた。といふ珍話がある。福地櫻癡の飜譯料は明治初年には一ページむ圓で、ズツト後になつて『幕府衰亡論』の原稿料は一ページ一圓といふことで、時人は其高價なのに驚いたが、幕末には他から見れば安い方であつた。それでも物價の安い頃の三兩だから今から見れば五六十圓にも相當する。一ページ五六十圓では某々文壇の大家にも劣らぬ豪遊は出來る筈だから、其の頃の天才肌の靑年文士は吉原に浸つて居つたのも無理はない、柳河の如きは吉原から駕籠で開成所へ出勤するといふ徹底振りであつた。

それにまた、こんな一家を爲した先生株でなくとも、これに類した話はいくらでもある。緒方塾に居た何某といふ佐渡から來た書生は、飜譯料が入るので一ケ月の半ばは遊里に眠るの放蕩兒となり、終に身を持崩して成功せなかつた。といふ話のある位であるから以て其一斑を察すべきである。こうなつて來ると遊蕩の費用を得る爲めに飜譯するといふ弊風も出で、學問の爲めよりは酒色の爲めといふことになり、金が入るのが嬉しさに、粗製濫譯して、吉原へ駈けつけるといふ勢で、無我夢中になつて耽溺するといふ手合も尠くは無かつた。

嘗て明治の初年に中學校長を勤めたことのある老人から聞いたことがある。なまじつか少しく語學が出來た爲め、飜譯料や何か面白い程の收入のあつたのが、身の爲めにならず、遂に中學校長で終つた。も少し眞面目に考へたら出世も出來たらう、その頃の友人連は皆時めいて居る。とて、しみ〴〵述懷して居つた。が聞いて居る僕は、洋ひ時節もあつたものだと、羨ましく思つた位であつた。

當時の洋學者は大體斯ふいふ風であつたが、しかし御典醫にでもなつて居るものは、コウ奔放な擧動は出來ないから、自宅へ藝者を聘する、遊藝人が出入する。そこでまたこれ等を連れて友人の宅を訪問するといふ風で、前に述べた桂川の家などは、これが代表的のものであつた。從つてまた同氣相求むる洋學者連中が押しかけて來るといふ有樣で、こゝにも『伊都滿底草』の材料が豐富となる。がチヨツと聞くと家庭へ藝者や藝人が出入するといふのは不健全な家庭のやうに聞ゆるが、これも當時にあつては當り前の事で、太平の餘澤である。前にも述べたやうに下町の家庭では遊藝が教養の一種であつた風習は武士の家庭にも波及した。どだい吉原そのものが社會の中心たる時代には其風が家庭に及ぶのも當然であり、旗下御家人の主人公

夫れ自身が皆立派な藝人であつた。洗練された江戸紳士の典型はこれであり、何れの家庭にも音曲の音の絶へなかつたのは、今日蓄音器やラジオの器械が各家庭に供へてあるのと大した相違は無かつた。藝人の方でも善い家庭へ出入すれば名譽でもあり、利益でもあるから競つて出入するといふ風であつた。それに本來の武人の家では如何に士氣は衰へたりと雖、まだ〳〵頑固な氣風は幾分殘つて居つたが、それが醫者の家だとか、文筆を以て立つ洋學者であると、表面は刀を差しても其實疎に拔きやうも知らぬ連中が多いのだから、家庭の空氣の軟か味が根本に瀰つて居る、吉原との距離の近くなるのも無理からぬ譯である。

維新前の遊蕩氣分といふものは、ザットこんなものであつた。これが維新の大變革で火の消へたやうになつたと思つたのも束の間で、またも遊蕩氣分は濃厚になつて來た。

先づ第一にトコトンヤレ節を歌つて江戸に乘り込んで來た官軍の歌ふ所は

徳川侍、箱詰にして吉原通がして見たい

であつた。隨分捌ひ文句であるが、これが當時の心情であつた。戰勝の勢で花のお江戸へ乘り込んで來て、第一目指す所は吉原であつたのである。斯くいふと官軍は甚だ低級のやうに聞ゆるが、この頃はいろんな事があつたので

民屋町家に立入り亂妨狼籍は勿論押借押買等堅く禁止之事

との制止を見ると、馬賊上りの支那の軍隊のことかと思はれるが、これは明治元年四月大阪行幸のときに下されたのである。

此度御東幸に付御趣意柄厚相心得供奉仕候は勿論に候處昨夜土山宿に於て中には旅館に娼妓呼寄候輩も有之哉に相聞候向後右樣の事有之に於ては無用捨刑官より可召捕候間心得違無之樣此度末々迄可申聞旨御沙汰候事

これは東京へ初度の行幸のとき、供奉軍隊に生じた事柄である。

それから會津戰爭の時、有名な女隊奮鬪の際、中野竹子が力盡きて將に捕へられんとするとき「官兵群リ來リテ之ヲ姦ス」じや。維新史を讀んで此項に至ると實に何んともいへぬ不快の感に打たれる。

これ等は戰爭中だから仕方が無いとしても、

百姓町人之妻娘風儀不宜者間々有之今般京都府ヨリ嚴敷申達候處堂上諸藩幷社寺等之家來兵卒共農商之家に立入用向に事寄婦女ヲ勾引シ或ハ威力ヲ以テ淫ケ間敷振廻致シ候者モ有之哉ニ相聞以之外ノ事ニ候向後右不所業之儀無之樣其主人主人ヨリ嚴重可申付候若シ心得違之

置於有之ハ此度御取礼可被及御沙汰候間此旨兼テ可相心得候事

これは戰時でもない明治二年三月、帝都に於て屢あつた出來事である。

マア當時の軍隊の風紀といふものは、こんなものであつた。それに江戸を始めて見たものも少くはなかつた。舊幕時代には參勤交替に江戸へ出ることが面目で、若し一生に二度も出られたらそれこそ非常に幸福とせられた。江戸といへば吉原といふ目標であつた。その田舍侍が多年憧れた江戸へ、官軍の肩書で錦切レの風を切つて、戰勝の勢で乘込んで來たのだから無理も無い。ゴール蠻族が羅馬への侵入に比すれば怒られるだらう。さりとて高師直が關東の大軍を率いて京都へ乘込んだに喩へたら、稍々叱られるに相違ないが、幾分かそんな氣味もあつたらうといふところで勘辯して貰はう。扨て江戸も愈官軍の手に歸し、諸官省も移つて來て、諸所の戰爭も鎭つてくると、これからが所謂官員樣の黄金時代となるのであるが、官員の遊蕩振りはこれ迄あまりに語り盡されて居るから書くにも及ぶまい。それから維新の大變動は社會的經濟的にも大變革であつて、舊來の町人は悉く倒れたが、之に反して新に身代を起した成金……その頃こんな言葉は無かつたが……は東京にも横濱にも簇出して、これがまた花柳界に豪遊を極めるといふ勢ひ、ドル相場に當つた商人の鼻息も荒い。貿易商といふドカ儲けの商家もる。御用商人といふ奴が勃興する。小野組の番頭が百五十圓のマントを拵へたとて時人を驚かした位物價の安かつた時節だ、持てたも道理だ。

次いで來つた變動は、版籍奉還に廢藩置縣だ、これは政治的にも社會的にも、維新の完成とでもいふべき變革であつたが、個人的に見ると大名も士族も、解放せられて一の自由人となつた上に、祿券となつて金は自由になつたのだからこれまた御多分に洩れず遊蕩氣分に卷き込まれた。此の中でも元來大名なるものは贅澤の標本であり、維新の爲めに敗者の側に立つたものは別として、勝者側にありては、大名自ら戰陣に立つたものは無かつたから、自身はさまで痛苦を感じて居ない。山内容堂が彈正臺へ

一、本供又は忍びにて料理屋へ參り酒食を用ひ候て不苦候哉
一、料理屋へ參り候て不苦候節歌妓呼び寄せ候ても不苦候哉
一、邸内へ歌妓舞女等を呼び寄せ候ても不苦候哉
一、本供にて遊里へ參り候ても不苦候哉又忍びにて參り候節は聊も不苦候哉
右の四件御一新の折柄如何に心得候て宜く御座候哉此段奉伺候　以上

六月（明治一年）日

との句を出したのは、不平もあれば、冷評の意味もあつたのであるが、幾分この頃の大名氣質が窺知される。それが自由の身となつて、金もあれば地位もある仙臺樣が幾人も出來たのであるから、自稱高尾の雲集したのも當然である。此の事に付ては柳北の有名な戲文がある。

十萬石　（若年華族ノ有樣ニ驚ク）

十萬石、廿萬石、領地廣シト雖附合ヒ窄ク。大納言、中納言、雲上遠ク人間ト隔ル。維新誰カ秩序ヲ打ツテ崩スモノゾ。廢藩置縣大變興ル、勝手ニ飛出ス籠中ノ鳥。此勢止マント欲シテ復タ能ハス。獨歩始メテ冷ナリ淺草ノ市、千間忽チ投ズ新橋ノ妓、惡友日ニ勸ム下品の遊、身ヲ忘レ家ヲ忘レ何ゾ耻ヲ思ハンヤ、腹掛股引車夫ヲ學ビ、往來女ヲ載セテ自慢ニ驕ル、舊臣ノ意見御意ニ悖リ、內外任置ス新家扶、窮スレバ則チ金ヲ借リ借レバ則ち遣フ、抵當流レ盡クス不動產、源平藤橘歷歷ノ家、憐ム可シ一朝身代限リトナルヲ。奮發シテ或ハ歐羅巴ニ赴ク、莫大ノ爲替費ヲ奈如セン、留學三年何ノ得ル所ゾ、加非店頭馴染多シ。勉强シテ或ハ學習院ニ通フ、半枚ノ蒙求雀ト嘲リ、金魚花栽雜談譁シ、講堂空シク覗フ教師ノ面。君見ズヤ議院設立爭論ノ騒リナルヲ、一ト曰ヒ二ト曰ヒ互ニ唇ヲ疲ラス、畢竟二院ノ論好シト雖、上院ノ席何人カ座ス（原漢文）

右の文中車夫云々の句は、某華族が車夫の服裝して、女を人力車に載せて挽いて歩いた爲め、時人を驚倒せしめたことがあつたのをいふのである。右の議院論は今日の貴族院改革論と對照すると面白い。

斯ふなると、華族の坊チヤンの遊蕩費を、融通する專門の高利貸が出來る、最も成功の捷徑である。平沼專藏は其の成功者として永く憎まれて居たがこれは同人ばかりの罪では無い。

華族の解放よりも、目新しきは×××の稱號廢止である、何千何百年來の差別待遇が廢せられたる喜びは、先ず第一に吉原目蒐かけて突進した。

先頃武州千住邊ノ商人山谷土手ヲ通行セシニ俳擬（ヒイキ）ノ紺衣裳ニテ駕籠ノ內ヨリ呼止メシ者アリ誰ナラントヨク見ルニ豫テ見知タル元××ノ者ニテアリケリ彼云フ吾等多年吉原樓上ノ宴遊ヲ羨ミ居リシガ此回ノ御仁政ニテ始テ宿志ヲ遂ル事ヲ得タリ已ニ昨夜モ一大樓ニテ頗ル歡樂ヲ極ム今ヤ即チ再盟（ウラ）ヲ尋ントス幸兄ト同伴セハ如何ト商人漸ク事ニ托シテ辭シ去レリトゾ頃日吉原何樓カ知ラス元××ノ者一娼婦ニ通ヒシニ彼テ富有ノ者ナレハ流石ニ娼婦モ一時我身ノ助ケニセント之ヲ騙

シ愛シケレハ誠眞已ニ情アリト思ヒ許多ノ金錢ノ盡ルモ知ラズ衣類迄モ典却シ猶情好ヲ求メシニ娼妓ハ最早是迄ト見限リ愛想容懸ナキノミナラス剰ヘ一首ノ狂歌ヲ讀ミ與ヘシトソ其歌ニ「宿緣カ××ガ狐ニダマサレテ毛物ドコロカ身ノ皮ヲハグ」男モ頗ル洒落モノト見ヘテ其反歌ニ「其昔シ毛物ハギタル報ヒ來テ身ノ皮キリテ肉ニ喰ハルル」、想フニ先日山谷ニテ商人ニ誇リシハ定テ此者ニテヤアランカ（明治四年十月發行新聞雜誌第十七號）

こんな話はいくらでもある。

斯ふいふ譯で、上は華族から下は××に至る迄、公然吉原を目指すといふことは空前の盛擧で、

吉樓ノ等級ヲ知ル歌トテ坊間ニテ云ヒハヤセシ儘戯ニ爰に付ス

玉、華族。金瓶、官員。彥、士族。商賈、品川。卒ハ佐ノ槌。

知事、泉。久喜、參事ニ伊勢、屬。松田、權少。岡田、等外。

甲子、博士。助教、角海老。鶴、得業。通辭、丸熊。書生、岡本。（明治四年十二月發行新聞雜誌第二十四號）

とあるは、單に吉樓の等級といふよりも、右の各階級の遊蕩に付き、自然其樓の階級となつたのである。いふ迄も無く右は吉原各樓の頭字に配したのである。

以て吉原の全盛を窺知するに足るのである

試見都下文明春　事物開化日々新　三千邏卒無長杖
四萬人力飛大輪　電信機將接上海　鐵車道已達橫濱
更有芳原起奇觀　五層玉樓勢嶙峋

これは佐ノ槌樓が五層樓を造り都下第一の建築たる第一國立銀行と壯觀を競ふたのを咏したのである。

邏卒述懷

誰言今日開化春　請見邏卒屈不伸　斷酒禁色眞木佛
櫛風浴雨是乞偷　死生場賴三尺杖　晝夜務仰一朱銀
唯有擧去來中樂　羨殺金瓶樓上人

これは明治五年の狂詩である。吉原の全盛は金瓶樓時代が絕頂と謂つて宜からう。今紫、瀟湘、小太夫等の花魁の錦繪が持て囃されたのも此頃の事である。因に今紫は此中でも最も有名で、其後の境遇も幾變轉したが、晩年淺草や朝鮮にも漂泊して、數年前淋しく世を終つた。

吉原が此繁昌なら他だつて然りである。また其他の花柳界猶の事で、藝者、船宿、待合の賑ひも勿論である。官民共戰後の成金氣分で花柳界を肥したといふ方が解り易い。明治維新はあらゆる舊物を打破したが、此境に丈けは手が附けられなかつ

た。寧ろ吉原に公然赴くことの出來なかつた舊來の法令習慣の一切を打破して、行き易からしめ、剰けに道義、風紀をも破壞し盡して吉原に養したといふてもいゝ位であつた。舊道德すたれて新道德未だ起らざるとき、本能のはけ場所はどうしても、花柳郷で無くてはならぬ。社會が舊套を脫して新生命に移らんとするのとき、動すれば一切の羈絆を脫して、本能に走るの暗黑面の介在するのは已むを得ざるの現象である。

メリヤスも新内も解らず、酔へば唐詩選を歌ふ位が關の山で、直ぐに下がゝつた話に移る田舍侍が、ナニが參議だ、大官だ。とは江戸ツ兒たる柳北の氣焰であつた。コウ云はれて見れば全く一言は無いが、それでも花柳界ではお得意樣であつた。デカンショ丈けでも立派に遊里に游げる現代紳士と同じことで、頽廢したる江戸情緒は解せないながらも之に耽溺したのは何といはれても仕方が無い。大袈裟にいふならば西南諸藩は江戸を征服したが、觀樂には却つて江戸に征服された。江戸の町人の造つた觀樂のお餘りを頂戴したといふ形だ。

嫌でならぬは鍋島薩摩、嫌と○○○○○○○○

これが江戸藝者氣質の氣焰であつた。

また此頃流行つた「漢詩入都々逸」だとか「唐詩選入都々逸」だとかはては「英語入り都々逸」といふの類は、正にデカンショ式の紳士の多かつたのを證據立てゐるが、これは單に無粋だとばかり攻擊するのはちと酷だ。

なにしろ三百年來の爛熟せる文化を武力もて根柢より覆したのであるから、血醒き革進の意氣は溯つて居つた。從つて一面、單純、豪快、簡素、質實といふ武人的氣風が貴ばれ、纖細、微妙、幽玄などいふ文士的感傷は排けられて居つた處へ、維新の原動力なるが如くに肩で風を切つて居つた薩摩人の豪傑らしい言語、態度は其實厭ふべき田舍丸出しでありながら、何かしら清新な刺擊を與へ、戰勝の餘威と共に此氣風は一般に歡迎せられ、甚しきは他藩人でわざ〳〵薩人の聲色を使ふものさへ出て來た程の勢であつた。

こんな氣風であつたから繪畫には怪しげな文人畫が流行し踊といへば劍舞、歌といへば芸耶山耶か唐詩選といふのであつたから、勿論江戸情緒の名殘たる音曲歌舞を味ふにはあまりに神經が粗雜であつた。

滄溟暗處白帆懸　知是載柑南紀船

これは「沖の暗いのに」の漢譯で

吹兮水風　飃兮潴　多情要見舫裏客

これは「吹けよ川風」の詩である。折角の歌もこんな風に漢譯されなければ持てぬので、しかも此詩を知る丈けでも非常な

通人であつた。

例の「醉枕美人膝醒、握天下權」なども、いづれ馬鹿あたりの妓樓で、田舍侍の偶感であつたらう、極めて拙い詩ではあるが、時運は一轉すると、青年の理想の標的となつて、首都を風靡したのだから恐れ入る。

それから序だから餘計な惡まれ口を利くが彼の舊物打破、排佛毀釋で、國寶にも列すべき美術工藝品を二束三文に賣り飛ばし、名勝舊蹟も叩き毀はして桑畑にするといふ無茶とも何とも評しようも無い蠻行も、その由來する所は幾多の理由はあるが、右に述べた當時の氣風も與つて力あることは看却してはならない。

しかし斯ういつて仕舞つてはサツパリ値打は無いが　それでも新政府にも舊幕の遺臣もあれば、生粹の江戸ツ兒もある。どうせ幕臣で新政府に出任するのであるから本來融通が利いて居る者か、然らずんば學問の力即ち前に述べた洋學者である。一時は閉塞して居つても新政府に見出されて得意となると本來の腹の虫が頭を擡げて來る、それに新に入り來れる文明開化風の勢で洋學者の持て方がすばらしく、從つて收入も多くなるから下地は好きな方へ足が向く、江戸本來の通人はこちらで御座ると頭を撫でるといふ勢である。

うしろ髮、ひかるゝ方を眺むれば、駒形あたり有明の、月鳴いたと思ひしは、誰を待乳の山ほとゝぎす、その一聲を聞きたさに、またも乘り込む山谷堀。

これは、舊幕以來の洋學者、柳河春陰が吉原唉美の作で、當時花柳界にもて囃された新曲である、同人には此種の作が頗る多い。滿都の紳士、鴃舌を以て鳴れる中に、此種の作ある正に萬丈の氣を吐くに足る。扨てこんな事をだら〳〵書いて居ると、何んでも箇でも吉原に持つて行かねば承知出來ぬ筆者の性格であらう、マサかそんな甚だしいこともあるまいと、僕迄色情狂者扱ひにされそうであるが、實際は此記事よりも甚だしかつたので、當時は吉原を恥づべき場所と考へず反へつて東京の名所、從つて日本の名所として誇稱せられ所謂ヨシハラなる西語の出來た位であり、繁昌は正に絶頂と見られたが、爭んぞ知らんこれは今日の衰運に踏み込む第一歩であつたのである。即ち吉原の繁昌の原因そのものは一面に於て衰運の原因であつたのである。あらゆる階級が、吉原目がけて突進したときは既に吉原廓內のみの誇なる平等主義は、社會一般の大勢であつたのである。社會が階級制度を撤廢した爲めに吉原行を容易ならしめたときは、平等の理想郷としての吉原は既に其存在の理由を失つたのである。從つてまた藝術趣味の中心としての吉原の色

は薄らいだのである。更に一般の對遊廓思想の變遷しつゝあるのに吉原は之が對策に心附かなかつたのも、社會の大勢に遅れた大なる原因であつた。世の中の秩序は漸次安定し來ると共に各人自省の念も加はつて來た。

何分にも支那流の磊落を氣取て一身の私を愼しむことに氣が付かぬ。動もすれば、酒を飮んで婦人に戯れ肉慾を以て無上の快樂事として居るやうに見へる。家の內外に妾などを飼ふて多妻の罪を犯しながら恥かしいとも思はず、其惡事を隱さうともせずに、橫風な顏をして居るのは、一方に西洋文明の新事業を行ひ、他の一方には和漢の舊醜體を學ぶものと云はねばならぬ（福翁自傳）

その攻撃も成程と首肯される程、道德觀念も高まつて來た。それに一にも西洋、二にも西洋で、西洋でなければ日も夜も明けず、善惡無差別、無我夢中で西洋模倣の時代となつて來ると、良い事には、性道德の嚴肅觀念が這入つて來た。一夫一婦または男女同權論は、生囓りの直譯論ではあつたが、形式丈でも漸次受け容れられた。女子教育の發達から、東洋從來の男女觀は變更を來たした。ところへ更に西洋思想の影響からの大鐵槌たる遊女解放令が出た。これは遊廓にとつては非常の打撃であつた。

遊女解放令は今にして惟ふと、當局者の非常の英斷といはうよりは寧ろ無茶と謂つた方が宜いかも知れぬ。本來人道問題から出たのでは無くて、外交上の必要から出たのであるから、其の法令に「娼妓は牛馬に等し、人から牛馬に向つて返濟を求むるの道理なし」といふので、頭から娼妓を牛馬に等しと認定しかゝつて居る。自體此法令の文句は書生論といはうか放言といはうか、古來幾萬の法令中こんな亂暴な文句を使つたものも無いが、これで以て當時の官場の意氣を察知することが出來る。しかし世の中は當局者の思惟するが如くしかく單純なものでは無い、特に娼妓問題に於ては猶更の事である。當時の廟堂は凡て一號令の下に何んでも社會を根本的に改造する意氣込で、遊女解放令の如きも其一例であつたが、また其效の無かつたことについても著しい事例である。事實は間も無く、貸座敷の名の下に於て依然たる存續を爲し、以て今日に至つたのであるが、當業者に採つては確かに非常の大打撃であつた。此打撃を境とし、吉原は漸次衰運に向ひ、待合全盛時代が之に替るに至つたのである。待合論は之を他日の機會に讓り、なが〳〵しき遊蕩論は是にて擱筆する。

舌の旅・湖水めぐり

松川二郎

霞ケ浦、濱名湖、宍道湖の如き將た河北潟八郎潟の如き、海水のどしどし浸入してくる海水湖にあつては、魚屬は頗る豐富であるが、琵琶湖や諏訪湖のごとく純淡水湖となると、魚屬も淡水魚に限られるから自然その種類は少い。殊に中禪寺湖、十和田湖、榛名湖のごとな排水口に大きな瀑布を有するものは、川の魚が泝上することが出來ない爲、そこには唯だ人工に依て放流せられた僅少な種類が棲むのみである。——何れにしても湖水に産する魚類の大部分は淡水魚、所謂「川魚」に屬するものであるが、川魚のことはたいへんに書きにくい。

何故書きにくいと云へば、川魚に就ては海魚ほどに未だ專門家の研究がすすんで居らぬ、第一名稱の統一からがついて居らぬ、同一の魚でも地方に依つて名を異にし、同時に名が同じくして全然異つた魚もある。方言といふのとはちがふ。例へば濱名湖附近でイセゴイと云ふのはメナダのことであるが、加賀の河北潟ではボラのことをイセゴイと呼んでゐる、かと思ふとサイのことをイセゴイと呼ぶ地方もある。ボラをクロメ、メナダをアカメと呼ぶのは、方言であるが、是は明かに種屬の混同である。メナダは鯔科に屬しメナダとボラとは甚だ酷似してゐるが、サイは鯉科に屬し、似鯉とも呼ばれる位で鯉に似て居り、ボラにも似てゐる。イセゴイは伊勢鯉と書くが、恐らくエセ鯉の轉訛であらう——イセゴイといふ魚は無いのである。ヤマべは山女魚(ヤマメ)の訛つたものと思ふが、霞ケ浦の奥ではアユもオイカワも一緒くたにしてヤマべと呼んでゐる。アユとオイカワとを混同するなどば甚だ聞えぬ話のようであるが、元來湖水産のアユは發育が悪く、且つアユ特有の芳香に缺けてゐるから、實際は左程かけ放れた間違でもないのである。ウグイの小さいのをハエと混同する位は、寧ろ茶常飯の事に屬し、ハエとヒカイとも屢ば混同せられて居る。ゴリやカジカに至つては一層甚だしい。——カジカの小魚を京都でサギシラズと云ふのは、地方的名稱にすぎない。私はさう云ふ點を云ふのではない。

私達が魚の種類を鑑別する方法は、ただ外觀を一瞥するのみであつて、魚學者のように腹側の縱線に沿ふて鱗が幾枚あるだの、體長は頭部及び體高の幾倍で、脊鰭腹鰭の位置がどうだなどと面倒な手續を採るものではない。又實際に、我々「素人魚學」の方からいふと、鱗二三枚の差で所屬と名稱を區別せられるよりも、體の大さ、習性、肉味を異にする川鮎と湖鮎との如きを、明かに區別して貰ふ方が、より必要なのである。海水産の魚でも、同じ魚であつて地方によりシュン（食季）を異にし風味を異にするものあることは、誰でも知つてる處であるが、川魚には特に此差が甚だしい。水質、水溫その他環境の相違が海に比して一層顯著であるからである。僅かな習性の差や、肉味の差でなく、一の變種を作り上げてしまつて居る場合が多い――川魚のことの書きにくい所以である。

が、書きにくい所以は、即て興味のある所以なので、わかり切つてゐるとなら、私は此一篇を書く必要はない。自分の知つてる――と言つてもほんの旅行中に見聞しただけの事であるが――處をさらけ出すと共に、讀者諸君から敎へられたいのである。

琵琶湖

周回七十二里に及ぶ日本一の大湖水であるだけに、淡水湖とは言ひ條さすがに魚屬には豐富で、湖中に棲む魚類五十八種の、爬蟲類のスツポンや甲殼類軟體類は此の計算の外である。淡水湖中、その數に於て第一位を占むるのみならず、名魚の多いことも亦我國の湖水中琵琶湖の右に出づるものは無からう。その名産の第一はヒガイで、次でフナ、コイ、アメゴ、モロコ、ハス、小鮎、スツポン、シジミ……等、等、等。

ヒガイが源五郎鮒を凌いで一躍琵琶湖名物の代表者となつたのは、明治天皇が深く御嗜好あらせられた事などが與つて力あるべく、わざ〳〵△といふ字を作つて當はめた位である。靑白色の何ともいへぬ美しい肉色で、骨も硬いが、肉がよく緊つてゐてしこしこと齒當りがよく、一種の香りさへ秘めてゐる。大きいのは四五寸にも及ぶが、二三寸位のものが最も珍重せられ、骨を拔いて搔揚げなどにしたのは、堪らない程うまく、大きいのは雲丹燒として最も美味である。シュンは春。むかし此魚を日光中禪寺湖に放養したことがあるが、全然失敗に歸し、今日中禪寺湖に行つても一尾のヒガイをすら見ることは出來ない、それはヒガイの暖水魚であることも、中禪寺湖の水溫の非常に低いことも、共に未だ研究せられてゐなかつたからである。その後諏訪湖、今江潟、霞ケ浦等湖沼學上所謂溫帶湖に移殖せられたも

のは大いに成功して、諏訪湖三萬圓今江潟二萬圓霞ケ浦一萬五千圓位の年產額を示し、それ〴〵重要な產物となつてゐるが、その味は琵琶湖產のものに及ばず、ヒガイは依然として琵琶湖の名物である。味が及ばぬのでなく料理法に馴れないのかも知れない。死んだヒガイは骨ばなれが惡く、食味も著しく落ちるので、京津の名ある料理店では惜氣もなく捨てゝしまふ相だが、田舍の料理店には是だけの用意と度胸がない。總じて、琵琶湖の魚が名を得た所以は、山國で海魚に乏しかつたのと、庖丁が冴えてゐるからであると思ふ。それに何と言ても、地方の人々は未だヒガイの味に馴れてゐない、京津地方では此魚の最高價な時に一貫匁二十圓内外にも及ぶが、霞ケ浦附近ではせいぜい一圓內外、最高相場が一圓五十錢位で、眞に十分一にも達せぬ有樣である。その代り、霞ケ浦名產ワカサギを琵琶湖に放養してゐるが、關西の人は關東人の半分ほども、そのワカサギを珍重して居らぬようである。

然しながらヒガイは、必ずしも琵琶湖の特產ではなく、長良川名物サクラバエ、中國地方でいふヤナギバエ、久留米お自慢筑後川のハヤなど何れも同一の魚で、岐阜の人は『琵琶湖のヒガイなど我がサクラバエの敵ではない。全然魚の種類がちがつて居る』といふ、私は未だ櫻バエの味を知らないが、此語を以て、必ずしも岐阜人のお國自慢とのみは見られないかと思ふ。と云ふ譯は、京都の食通は『鯰は宇治川のに限る、琵琶湖の鯰は味が落ちる』といふのである。宇治川は瀨多の下流であるから、其ヒガイも琵琶湖のこぼれが繁殖したものに相違ないが鯉や鮒でも流水に育つた者と湖水產とは味が違ふから、ヒガイとても矢張り川育ちの者の方味がよく、且つ鯰は生きたのを料理する爲料理店では凡て生洲に貯えておくが、宇治の旗亭では生洲を川に設けてあるから、生洲の中では水は絕えず流れてゐる。美味いのは當然である、だが然うした微妙な點に至つては、到底我々通りすがりの旅客の舌では、味ひ分けられないのである。

鮒は古來琵琶湖の產を以て第一とし、源五郞鮒の名は名物鮒ずしと相俟つて頗ぶる聞えたものであるが、是も京都に都があつて、長い間文化の中心地であつた點に基因して居ると、言ふべきであるかもしれない。源五郞鮒一名堅田鮒とも稱し、堅田附近でとれるのを最良としてある。——源五郞鮒に就ては前に書いたとがあるから、玆には重復を避けるが、大形で且つ成育の早い種類である爲に、今日は各地に移殖されてゐる。

アメゴも亦頗る旨い魚である。昨年の初夏の頃瀧田樗陰氏の御馳走で下谷の「ひつじ」といふ家で飲んだ時、近松秋江氏が『珍らしい魚があるね、これはアメゴだらう』と云つた、東京

では餘り使はない魚だ、それを一見してアメゴと觀破したのは偉いなと感心したのであるが、考へて見れば秋江氏は長く京都に住んだことがある人であつた。鮭科の魚で本名はアメマス、田澤湖あたりではアメノヨ（ヨは魚の訛）と呼んでゐる、大きいのは一尺もあるが、京阪地方では三寸位のところを最も珍重するが實は大きいのは漁れないのである爲に、之をマスの子と氣付く人は少からう。琵琶湖の如き溫帶湖に屬し、夏期著しく水溫の昇る湖水は、寒性魚たる鮭科の魚に取ては好棲息所でなく、發育もわるく肉味も上等とはいへない。アメゴは旨い魚に相違ないけれども、東京の料理店が琵琶湖からアメゴを取寄せるに至ては、事些か笑止である。アメマスに鯇の字を當はめる人があり、ヤマメも赤鯇の字を當てられて居る爲に誤られ易く、且ヤマメは鱒の子だといふ說もあるが、アメゴとヤマメは全くちがつた魚で、アメゴは形、色、味、寧ろ甚だイワナに似てゐる。味はヤマメの方が遙かに上等である。

モロコはヒガイに似た魚で、ただ背鰭に黑赤色の斑點が有か無いかぐらゐの差に過ぎないが、味は一寸落ちる。濱名湖・霞ケ浦・今江潟・河北潟どこにも澤山居る魚で、今江潟や河北潟には殊に多く、彼の地方では雜魚の中に加へられて、些かも珍重されない、燒乾しにして山村へ送られるか、細かく碎いて鷄の餌料にされる位のところであるが、琵琶湖では名魚の一に數へられるのは、矢張り庖丁と習慣の力である。

シジミにも種類があるが、琵琶湖名產瀨多シジミと云ふのは、殼が著しく三角形を帶び、殼の輪層が太くて疎なのが特色で、瀨多川の落口から瀨多川にかけて漁れるのが味が良く、これは瀨多川名產と云ふ方が適當である。スッポンも琵琶湖產は品質優良なるを以て聞え、近縣在の沼ものに比して價が高い。そんな事は當然すぎる程當然なことであるが、近年濫獲の結果減切りすくなくなつた。今日では伊庭內湖から僅かばかり產出されて居るのみで、瀨多附近、能登川沖などで時々とれるのは例の「放生丸」といふ奴である。京阪地方ではスッポンの事をまる、スッポン專門の料理店のことをまるやと云ふは御承知の通りで、放生丸とは迷信家が或る願ひ事のために、商人から買取つて湖中に放つたスッポンのことである。

琵琶湖名產にも、時に甚だうまくないものがある。それは小鮎だ。鮎だきの材料としては上等であるが、鮎としては極めてまづい。あれは鮎の子でなくて、彼れよりは最早大きくならない、一の變種なのである。湖中に生れて、湖中で一生を終る、產卵のために海に降るといふ事がなく、河にも泝つてゆかない。濱名湖でも奥の方の細江湖あたりには澤山居るが、漁期は

三月から四月迄の間要、四月後になると自然に死んでしまふものだと漁夫達は云つてゐる。琵琶湖には非常に澤山この小鮎を産するので、も少し何とか味を良くして、高く賣出せぬものかと苦心して居る由であるが、無駄なことであらう。鮎の貴ばれる點は特有の芳香にあるのだが、その芳香は主食物たる植物性のプランクトンに原因するもので、雜食をする小鮎には此芳香がない。湖水育ちの鮎などに旨いものが出來よう理由がないのである。近ごろ聞けば、この小鮎を東京へ輸入して、多摩川へ放流するさうな。多摩川の鮎は不味い點に於て天下無敵である。適材適處の語はかゝる場合にも用ゐつべからん。

琵琶湖畔の料理店で、旨いものを食べさせる家は石場の「魚菩」。申上げるまでもない。

東郷湖・宍道湖

山陰線では、東郷湖の鰻は名物である。燒き方が違ふから好き不好きがあるが、鰻の質は總じて關東地方よりも關西地方の方が良ささうに思はれる。殊に「東郷鰻」の名は聞こえたもので。京阪地方まで輸出せられてゐる。湖畔に東郷温泉あり、その温泉は、私が信州の松原温泉とともに湖畔温泉の双璧となすほど、全く風光明媚な温泉である。繪にもしまほしき風光と、温泉と、鰻と、三者相俟つて東郷湖の名を高からしめてゐる。温泉旅館を養生館と云ひ、東郷湖のウナギは要するに養生館のウナギといふ事に外ならぬのであるが、こゝではウナギを盛るに重箱を用ゐず、長方形の蓋付の陶器に容れて持つてくる、その器物は鰻の冷めないように温めてある。西洋料理には冬季皿をあたためて出すことは普通であるが、日本料理には珍らしい、私は其の細心な用意を快く感ぜざるを得なかつたのである。燒き方も東京流である。

松江の宍道湖は海つづきであるから魚類の豐富なことは言ふ迄もないが、名産と稱すべきはスズキ、コイ、シラウオ、シジミなどである。特にスズキは其の代表的名魚で、支那の松江がスズキの名産地であるに因んで、松江と呼ばるるに至つたとさへ云はれてゐる。が、呉の松江の鱸は所謂『巨口細鱗口似長數寸』日本のスズキとは似てもつかぬ魚であるらしく、三才圖繪の鱸魚の圖を見ればオコゼの一種のように思はれる。スズキは初夏（濱名湖では三四月頃から）河川湖沼等にのぼつて淡水に棲み、秋風とともに去つて海に還るもので、夏季のあらひはスズキに止めを刺す。調味は山葵醬油、生薑酢、蓼酢味噌等。おの〳〵好みに從つて異り、土地によつても異る。支那人が秋風鱸魚之膾と云ひ、鱸、又出鱸鄉蘆葉前、垂虹亭下不論錢と

て、江戸ッ兒がどてらを質において初松魚を賞味したほどの意氣を示したところ、鱸は矢張り我國のスズキに彷彿たるものがある。吸物は「海スズキ」を以て上(じやう)とせられ、中秋以後のもので是は肉よりも雲わたをを珍重する。スズキの雲わたは土(と)地(ち)に依てすすわたとも云ふ、胎わたのことである。

しかし宍道湖のスズキも、嫁ケ島附近に小舟を浮かべ、網を投じて獲たものを直に料理して食べる所に眞の趣きがあるので、味ひの半は彼の繪のごとき風光に在りと言つても過言でない。料理の出來上つた頃には、陽すでに全く落ち太白波に躍つて、明(ほ)月に似たりである。

シラウオを名産とするもの、宍道湖の外に霞ケ浦、河北潟八郎潟等があり、濱名湖でも澤山とれるが、是れはお隣りの豊橋市の前濱「前芝村」が古來有名な産地である爲に氣押されてゐる。紅梅やけふも立寄る白魚賣、白と赤とを對照した幼稚な句ではあるけれど、此句に云へる通り二三月が此魚のシュンで、春未だ淺くして寒風骨を刺す頃、素裸になつて海へ飛込んだ漁夫が、銀の毛簑のように白魚の懸つた刺網を捲いであがつて來る光景は、いかにもすがすがしい心持である。

鯉の細づくりも亦松江市自慢の料理で、松江の料理屋や旅館では、よく之を食はせる。松崎水亭、臨水亭、望湖樓などいふ有名な旗亭は、何れも旅館を兼ね、しかも多くは湖水に枕んで眺望の美に富んでゐる。水都と稱すべきところは少くないが、「繪の如き水都」とは、ひとり松江市にのみ許す得べき形容詞であらう。その宍道湖の風光も スズキのあらひの美味も、遠遠しかれこれ玆に十年 ひたぶるに香の鳴るを覺える。

濱名湖

濱名湖は面積も廣い上に海水湖であるから、魚屬に豊富な點では我國の湖水中一二を爭ふ位置に居る。縣水産試驗場の調査に依れば魚類六十四種、軟體類二十一種、甲殼類三種、合計八十八種を數へてゐるが、尚ほ未調のものがあると云ふから實際は百種を越えるか、若しくはそれに近い數であらう。就中春先のコノシロ、夏のスズキ、コチ、クロダイ、秋のボラ、晩秋から冬にかけてのハゼ、コイ等は最も、旅客の舌を喜ばせるに足るもので、辨天島の風景と湖魚の美味とは、相俟つて、旅客をしてこの湖畔を素通りすることを許さぬのである。

しかしながら夫等多數の魚類の中から、若し此湖の代表的魚(さかな)を求むるならば、其はボラであらねばならぬ。ボラは極めて普遍的な魚で、又これ位いろいろと地方的名稱を有つた魚もないが、當歳子をオボコ、二歳子をイナ、三歳以上をボラと呼ぶ

ことは、殆んど全國的と云つてよい。で假を書いてボラともイナとも、勝手にるびを附ける人がある、ボラとなつた歳の晩秋、産卵のために海へ行くと、もはや湖水には還つて來ない。即ち彼れが滿身に脂肪を貯へて出湖する時が其のシユンで、イナは年中湖水に居るものであるが、是も然しシユンは九月頃となつて居る。日本中で一番イナを珍重する處は名古屋で、その時季にはどこの料理屋へ行つても、又個人の晩餐などに招かれても、必ずやイナ饅頭（イナの腹を割かずに臟物を拔いて、岡崎名産八丁味噌を詰込んで炙つたものである）イナ飯が出る。蓋しイナのしゆんにイナが缺けては、いかなる御馳走も御馳走にならないのだ相で、關門のフグ、水戸のアンコウ、金澤のゴリ、皆同じことである。そのイナは、專ら濱名湖から供給される。

濱名湖のイナは歴史的なもので、昔は寄鯔奉行なるものがあつて、漁業區の取締に任じてゐたと云ふ、今日は組合でやつて居るが、毎年十月一日「圍目網おろし」と云ふ行事が行はれて、それから一般に鯔漁にかゝるので、それ迄は漁獲が禁ぜられてゐる。この圍目網と云ふのは濱名湖特有の網で、非常に面白い。壯觀なやり方である。時季になると要所要所の洲崎に色視と稱する看視人が配置せられて、魚群を發見すれば直に狼煙をあげて合圖をする。と立所に、十數雙の魚船が出動し、圍目網をもつて魚群を包圍する、網は兩袖より成り、片袖の長さ百二十尋、高さ十一尋の長方形で、兩袖一組でやるのを「一もやひ」と稱し、多きときは五もやひに及ぶ。ボラやイナを取る際には垣網に沿ふて刺網を入れ、更に外側には一間ぐらゐの簀網を浮べて置いてどつと一時に舷を叩いて囃立てる、魚群は驚ろき狼狽へて刺網に引かかり跳躍したものは簀網にのぼる眼まぐるつたい程漁れるもので、漁夫は魚の拾收に忙殺される有樣である。この網に圍まれた魚群は殆んど根こそぎ漁獲し悉される處から、一名をネコンザイ網ともいふ。單なる觀覽物としても、鳥羽の眞珠捕りなどに比すれば遙に興味がある。

ボラ漁では、いろ／＼面白い方法が行はれて居るが、河北潟の「卷打」などもその一つであらう、是は投網でやるので、三四十艘ぐらゐの漁船でボラの群を包圍して、ばさり／＼打こむのだ。卷打といふ事は各地に行はれるが、河北潟や今江潟ほど大仕掛にやる處はすくない。馬鹿げてゐておもしろいのは、常陸涸沼（大洗の西南）の『矢鱈漕ぎ』と云ふやつで、これは網も釣道具も持たない、暗夜に小舟を二三雙つらねて、船首に提燈をつけて、えツさえツさと精限り根かぎり舟を櫓いで湖上をはしるのである、するとボラは其の火と音とに驚いて、飛魚の

ごとく跳ねて、自ら舟の中に躍りこむ。それをえいやツと取つて押さへる時の面白さ。空中に飛上がる魚の夥しい割合に、首尾よく——だか悪くだか船の中に入るものは一割にも達せぬが、兎に角、とても痛快な遊びである。ボラは夜間満湖の際は、必ず水の上層に群集してゐる、その特性を利用したのである。

も一つ濱名湖でおもしろいものはエビ漁である。主に車エビ赤足エビの二種であるが、湖内到る處に廣く繁殖して居るらしく、産額もなか〳〵多い。三寸から五寸位に成長した奴は、五月上旬から十月に至る間、夜間退潮に乗じて續々海へ下つてゆく、それを鐵橋下の澪筋に船を連ねて待受け、篝火の光りで水面を凝視しつつ、流れゆく所を急に抄網ですくひ捕るので、自分でやつて見たことはないが、隨分面白いほど捕れるものだ相である。夏、夜行車で濱名の鐵橋を通るとき、橋下に點々として連なつてゐる漁火は、即ち悉く此のエビ漁の船である、小野湖山の濱名八景の中「象島の漁火」も亦之を指してゐる。

志賀矧川先生が濱名湖の蟹を賞美する歌に曰く、

天女州前水如油　海風急動早冷秋
此間清味君看取　右手持杯試蟹螯

天女州とは無論辨天島のことで、その蟹はワタリガニであつたらう。辨天島は湖口の中央に横つて、松が多く、風光の美を有して居るのみならず、鹹淡兩水の相交る所であるから、特に魚屬には豊富で、カキ、ハマグリ、アサリ等も彼の附近では自然生のものが獲られる。

イナダも湖水で捕れたのは味がよく、海でとれた者に較べると、値も倍ほどする、シユンは九十月の交で、大きいのは一尺二三寸ほどある。ウナギも昔からの濱名湖名産で、濱松市には多少その名を知られた専門の蒲燒屋が二軒ほどあるが、然し今日濱名湖には約六十箇處、面積にして一百町歩に餘る養魚場があつてウナギ、コイ、ボラを始めカキ、ハマグリ、アサリに到る迄、盛んに養殖せられつゝあることを忘れてはならぬ。——養殖ものを食はせられて來て、濱名湖の魚はまづいなど言つては、些か濱名湖の魚に氣の毒である故、斯くは申添へる。

霞ヶ浦

霞ヶ浦は我が國第二の大湖で、その面積は濱名湖に五六倍し、且は大利根をもつて太洋につゞいて居るので、魚屬も定めて豊富であらうとは誰しも豫想する所であるが、縣水産試驗場の調査によれば僅かに四十種内外で、石川縣の河北潟にだに及ばず、濱名湖に比すれば半に達せぬ。ちよつと案外な感があ

る。――少いから全部を揭げて見よう。

鯉　科――コイ。フナ。サイ。カマツカ。ウグイ。ムツ。
　　オイカワ。モロコ。ヒガイ。タナゴ。
鮭　科――サケ。アユ。ワカサギ。シラウヲ。
鯔　科――ボラ。
鱸　科――セイゴ。
さより科――モザヨリ。
鰻　科――ウナギ。
鯰　科――ナマズ。ギギ。
鰌　科――ドジョウ。シマドジョウ。
鯊　科――ハゼ。ドンコ。ゴロ。ヤナギバ。
目高科――メダカ。
あみ科――イサザ。
蝦　科――マエビ。スジエビ。ヌマエビ。
蟹　科――モクズガニ。
貝　類――タンカイ。カタガイ。ニシカイ。タニシ。カワニナ。モノアライガイ。シジミ。

殆んど淡水産の魚ばかりである。濱名湖に於てタイ、クロダイ、コチ、カレイ、ヒラメ、コノシロ、イサギ、イナダ、イワシ、アナゴ等の海水魚がどし／＼漁獲されるに較べて、甚しい差である。常陸風土記には、浮島の對岸乘濱附近には盛んに海苔のとれた處であると書いてあり、萬葉集には『常陸なる浪逆の海の玉藻こそ引けば絶えすれ何か絶えせぬ』などいふ歌もあつて、浪逆浦あたりで海草刈の行はれて居たことは明かである。即ちその頃は霞ケ浦は海水湖であつたのだ。鹿島社と神の池との丁度中程の處に鰐川と呼ばれた海峽があつて、外海の潮はその海峽を通つてどし／＼霞ケ浦へ流れ込んでゐた。浪逆の海などいふ名もそこから起つた。利根の下流も『淺の海』であつた。故にその頃は、海魚も豐富であつたし、海草も採れた、沼邊には鹽焚く煙が縷々として昇つてゐたとある。が何時か鰐川は埋まつてしまひ（居切堀といふ細い運河、あれが昔の鰐川海峽の名殘である）、一方利根川はどし／＼河口に土砂を堆積して行つて、霞ケ浦は今日の如き海跡湖と化してしまつたのである。今日では、利根の本流では佐原附近まで、霞ケ浦では潮來附近迄は潮がさして來るが、それから奥には及ばない。霞ケ浦は西浦も北浦も殆んど淡水湖なのである。

霞ケ浦名産の代表格は、何と云つてもワカサギに握られてゐる。出雲、信濃、加賀などではアマサギと云ひ、伯耆ではシラサギと呼ばれ、何處の湖水にも多少は居るものであるが、ワカサギと云へば霞ケ浦を聯想せしめ、霞ケ浦の名は又直にワカサ

ギを聯想せしむる程有名なもので、年々の産額十四五萬貫此價四乃至五萬圓、その産額から云つても亦、カワサギは霞ケ浦の代表者である。之に次でシラヲ、ウナギ、コイ、フナ、先づ此五種は霞ケ浦名産と稱して不可ないであらう。産額から云へばエビ類がワカサギとシラヲとの間に居り、琵琶湖から移殖したヒガイがコイ、フナと肩をならぶるに至つたが、ヒガイは今少しその料理法を教へ、その食味を東京方面に宣傳しなければ、名産とはなり得ないであらう。

ワカサギの魚でんにフライ、生白魚の酢味噌。それから湖畔の料理店の庖丁振等は、昨年の秋採點表迄附けて書いたから、茲には一切重複を避けるが、微を穿ち細に入つて語れば、まだいろ／＼ある。

鯉は全く潮來の名物で、霞ケ浦の中でも利根川寄りの方面即ち潮來、延方附近と、北浦の入口大生原(オーハラ)附近とに於て專ら捕れるもので、湖中到處に分布して居るものではない。霞ケ浦の鯉は即ち利根川の鯉だと言てよい。鯉の産地として古來有名なるもの、九州では筑後川、中部では淀川、關東に於て乃ち利根川で、利根川圖志にも鯉のことは特筆大書されてゐるが、濫獲の結果と、附みたような養殖鯉全盛の折柄とて、今は滅多に「利根川の鯉」は口にしがたくなつた。五月の鯉の吹流しとは「一腹に一物を藏せぬ」といふ譬諭に用ゐらるる言葉で、濃汁(こくしやう)にする鯉は臓嚢のみを取出して、腸も卵巣も一緒に筒切にするもの故、些と平仄が合はぬけれども、その外形は彼の五月(さつき)の鯉幟のごとく圓筒形をしたものが良い、即ち胴の切口は殆ど正圓形、是が自然生の鯉の特色で、養殖ものは如何に肥つてゐても、その切口は楕圓形を成してゐる。――潮來の鯉は、此の圓筒形のやつである。尤、霞ケ浦が水郷めぐりの旅客で賑ふ夏の間は、鯉のシユンを外れてゐるが、あらひの如き、肉味は兎に角、氣分に於てはまさに夏のものである。

セイゴ（蔵兒）はスズキの幼魚で（漁人連はデキと呼んでゐる）、霞ケ浦で捕れるものは最大きなもので一尺位、宍道湖や濱名湖のように二尺三尺といふ大物は決してとれない。是も本浦及び北浦の入口附近にしか居らぬもので、奥の方では捕れない。且盛漁期は十月だから、夏行つても滅多に行當らず、味も東京の川口でとれるものゝ方が上等である。

フナは全湖にまんべんなく分布して居るようだが、ヒラブラと稱する六七寸乃至一尺にも及ぶ大鮒よりも、コブナと稱する小型のものゝ方が味がよい。然し小鮒の一種に、全身に黑色の斑點を有するマツカツブナと云ふのがあるが、是は肉が少くて甚だ不味い種類である。

霞ケ浦でゴロといふのは、ゴリの事で、ゴロ・クロゴロ・トラゴロの三種あり、トラ最も味よくクロ最もまづいと云はれる。ヤナギツパはカジカの一種で、これは甚だ美味である。ドンコも鯊料の魚で體色黑く、大きいのは五六寸に達する、頭と口が馬鹿々々しく大きく容貌頗る滑稽、しかも貪食家で、擧動遲鈍と來てゐるので、加賀ではガンボーグズ、越前ではドンブシ、九州地方ではドン丸郎、伊勢ではドンコツ、到る處似たような難有い名を頂戴してゐる。肉は淡黃色を帶び、二三月頃のシユンには脂肪がのつて居て一寸旨いといふ話だが。どこの國でもとんと珍重せられぬ魚で、僅に佃煮の材料として用ゐられるにすぎない。然し佃煮もドンコなどの交つて居るのは、下等品と極つてゐる。

「湖畔第一勝」天王崎の所在地たる麻布町は、「ごろ佃煮」の本場で、町内に「佃煮創業記」といふ石碑が建つてゐる。その碑文によると、昔はゴロ類は肥料に供せられてゐたらしく、それを明治七年同町の奥村吉郎兵衛と云ふ人が、東京の佃煮を眞似て製造したのが創始で、次で佃島から細川某外數名が此地に移住して、本場養成の腕をふるひ、終に今日の盛業を見るに至つたのだと云ふ。ごろ佃煮は近年東京市内へも侵入してゐるが、主としては長野、栃木、群馬、福島等の山國へ向けて輸せられてゐる。

イサザも佃煮材料であるが、東京では一般にあみと稱して居るコマセとは全く別種で、北浦の特產である。シジミは本浦北岸の高濱附近でのみの名物。タンカイと云ふのはカラスガイのことで、元來旨い貝ではないが、砂底に棲んでゐるのは左程まづくもない。——霞ケ浦は貝類には乏しい湖水である。

「さくらえび」も名產の一。但し東京の人は、煮乾にした赤色の小蝦のことを、櫻えびだと思つて居るようであるが（魚屋も亦さう言て賣つてゐる）、霞ケ浦名產さくら蝦は剝えびのことで、煮乾にして皮殼を除き、肉質のみとしたものを云ふのである。近年その產額は頗る減つた。

蘆の湖・榛名湖・中禪寺湖

箱根蘆の湖にはコイ、フナ、ハエ、ナマズ、ウナギなどを產するが、產額は何れも多からず、又格別に味の良いといふ魚もない。ひとり湖中を横行濶歩して居るものはアカハラで、此魚の漁期たる五月頃には、元箱根などでは殆ど全村を擧げて、男は漁獲に、女子供は串さしと燒き方に、さながら戰場のような騷ぎをやつてゐる。アカハラとはウグイのことで、ハエによく似た魚であるが、大きいものは體長一尺餘に達する（その時

代にはマルタと呼ばれる)、體側に淡紅帶黑色の一線を有し、腹部は著しく紅色を帶びてゐる。故にアカハラと呼ぶのは箱根に限つた譯でなく、ウグイの一般的俗稱と云つてよい。諏訪湖ではアカウヲとも呼ぶ。――然し文德實錄に、

齊衡元年春正月丁亥、太宰府貢ニ赤腹魚一。承前元日貢レ之延至ニ今日一云々

とあるのはマスのことでウグイではなからう。公事根元に「はらあかトハ鱒のコト也」とあり、且は元旦の節會にウグイを使ふといふはあるまじきことである。ウグイは櫻咲く頃がシュンで、肉がしまつてゐるから膾にしても、汁の實としても、煮肴としても、なか〳〵美味な魚であるが、東京の人には甚好かれない。ウグイに限らず鯉と鰻と鮎とを除ては、東京人の舌は川魚に對して頗る鈍感である。それに箱根は山の中とは言ひ條、相駿兩方面から豐富に海魚が輸入せらるゝ爲に、溫泉旅館等では殆んど湖産アカハラを顧るものなく、乙女、長尾の兩峠を越えて御殿場へ送られ、山の人たちの食料となつて居るにすぎないのである。

而して彼の旨くもないマスなどを、却つて蘆の湖名物と稱して自慢にして居る、世はさまざま也けりだ。

マスを名物として居るものに榛名湖、中禪寺湖、及び十和田湖がある。就中榛名湖畔レーキホテルのマスのフライは、寧ろ伊香保溫泉名物として、東京人には最も深い親しみをもつてゐる。溫泉街から湖畔迄は瘦胸峠を越えて二里半の山路、腹をすかせてたどり着いた處が即ちレーキホテルである、所謂空腹にまづい物なし、もう一つ都合の良いことは、何と云つても東京人は未だ生マスの味には馴れてゐない、そこで彼のマスのフライに舌皷をも打つのであるが、實を云ふと餘り上等とは云へない。東京附近でマスの美味いのを食べようと思つたら、中禪寺湖へ行くに如かずである。

蘆の湖や榛名湖のマスの味のまづいのは、水溫がマスには溫かくすぎるのと、餌料に乏しいのが原因らしく、肉の緊り方、脂肪の乘り方、共に宜しくない。殊に湖岸に森林のない榛名湖などは、素人眼にも養鱒の適地でないことがわかる。昔からいふ話がある。水戸藩主光圀が何處かで生マスを御馳走になつて、大いに其の美味を賞し、早速仔魚を取寄せて領内の那珂川に放養した。――それが成功すれば、今日マス料理は、鮟鱇料理を凌いで水戸名物となつて居る筈だが、副將軍黄門の威光を以てしても、那珂川にマスを繁殖せしむる事は出來なかつたのである。

中禪寺湖は、緯度から云へば榛名湖に比して左程北へ寄つて

居る譯でもないが、非常に水深の深い湖水であるだけに、水温が低い。榛名湖の表層水温は、夏の間は大抵、二十四五度（攝氏）から六度位に昇つてゐるが、中禪寺湖は盛夏の候でも殆んど十八度を超えたことがなく、五六十米突以下の水層は年中常に四度を保つてゐる。夏は冷たくて、冬は却つて他の湖水よりも暖かい、我が國の東部で而も海拔一千メートル以上の高距に在る湖水中、冬季結氷しないのは此湖水ぐらゐのものである。且湖畔には森林も相當にあるから昆蟲も集つてくるし、マスの餌料として特に必要なプランクトンに富んで居ることは、彼の湖水の色を見てもわかる。中禪寺の如きは、實に絶好の養鱒場と云はなければならぬ。

マスの外にイワナ、ウナギ、ウグイ及び米國産ホワイト・フイッシユなどが放養せられて居て、魚屬の少い割に珍味に富んでゐる。ガウグイだけは、此處でも相變らず厄介物扱ひにされて居て、中禪寺湖の養魚事業を管理してゐる帝室林野局では、害魚驅除の目的で、年々ウグイを漁獲し、素燒にして拂下げてゐるが、捕る後から後からと繁殖してゆく。繁殖力の旺盛なばかりでなく、かれは頗るの暴食家で先年田澤湖にヒメマスを養殖するため、七十萬尾づゝ二箇年續けて仔魚を放つた處、ぺろりと平げてしまつたと云ふ、恐るべき記録の所有者である。――田澤湖は格別にウグイの多い處ではあるが。

中禪寺湖のマスは、北海道の普通のマスで、ひと頃ベニマスを放養したことがあるが、今日は殆んど見當らぬ相である。しかし日光の奥の丸沼では、專ら米國産ベニマスを放養し、菅沼では十和田産のヒメマスを放養して居つて、其等はいづれも日光町を經て東京方面に搬出せられるのだから、先づ日光へ行けば色色種類の異つたマスを味ふことが出來る。

伊香保は不味くて、十和田は遠い
　　マスを食ふなら中禪寺

だ。食べるばかりでなく、マス釣は頗る面白いものだ相である。歐の湖に於けると同樣、一定の釣魚料を納めれば、漁舟は勿論釣具一式、ユニフオムを着た船夫まで、御料局には準備せられてゐて、誰でもそれを借りることができる。私は釣に就ては全く語る資格のない者であるが、毎夏奥日光で行はれる大瀧川鱒釣大會の說明書を見ると、

釣魚の高尚にして趣味ある清遊なること今更喋喋を要せずと雖、就中擬似針を以てする鱒釣の如きは、實に其尤なるものにして、一度之を試みる時は其趣味津津として盡きざるものあり。歐米諸國に於ては紳士の娛樂中鱒釣を以て最とし……英國ロツクレーペンの如き夏期鱒釣場として歐洲

全土に其名を知られ、遠く諸外國より杖を曳く者多し……白根山の北麓に茂沼・丸沼・大尻沼の三湖あり、その水相連り流出して大瀧川となる、配するに太古の森林を以てし、流れに隨つて奇岩あり、瀑布あり、湖中の鱒族は好んで此川に出て繁殖す　若夫れ綸を垂るれば、潑剌たる尺餘の銀鱗、立所に獲らるべし」云々

とあつて、マスは大物であるだけに、その興味もハゼ釣・フナ釣等の比ではないらしい。

十和田湖・田澤湖

しかし「鱒の本場」といはば、歷史的にも、産額に於ても、十和田湖を推さねばならぬ。今日東京市内の洋食店で使はれて居るマスの大部分は、十和田湖産なのである。此の湖も排水口が銚子の瀧といふ大瀑布になつてゐる爲、古來全くの無魚湖で、徒らに『ゐもりの名所』と言はれてゐたが、今から三十年程以前毛馬内の人和井内貞行氏がコイ、フナ、イワナ等を放養したのが始まりで、次で中禪寺湖からマスの卵を輸入して孵化放養を試みたが、思はしい成績を得られなかつた爲、更に北海道支笏湖からカバチツポといふ種類を取寄せて放流した、是は阿寒湖の原産で湖沼の如き止水に適應した變種であつたから、見事に成功した。ヒメマスとは十和田湖に來てから改めた名で、和井内氏の苦心と功勞とを記念するために、同地方ではワイウチマスとも呼ばれ、生出（おいで）の人工孵化場は十和田名所の一に數へられて、十和田湖に遊ぶ者は皆それを見物にゆく。生出には同家經營に成る和井内ホテルがあり、發荷の十和田ホテルはその支店である。湖畔には七八軒の旅館があるけれども、鱒料理に巧みな家を求むるならば、矢張り此二軒であらう。

何うした譯か、近年ヒメマスの生育が良くないので、目下米國産のベニマスを放流試驗中だといふ。又五六年前八郎潟及び小河原沼から小エビを取寄せて放つたのが、今や湖中一面に繁殖して、奥入瀨（オイラセ）川にまで、溢れ出し、一方銚子の口に魚梯を設けたので、ウナギ、イワナ等がぼつ〳〵泝上して來たといふ話である。奥入瀨の溪流にはヤマメやマスも居る、アユはずつと下流の相坂川と呼ばるる附近に行かないと捕れない。アユつきてヤマメの世界となり、ヤマメ悉きてイワナが棲む、此三者の間には水温に因つて大凡一定の領域が定まつてゐる。

田澤湖にはクニマスと云ふ一種特別な魚が居る、全く同湖の特産で、外國にも類例がないそうである。形は川鱒に似てゐるけれど、尾鰭が割合に大きく、體長は大きいもので一尺餘にすぎない、肉は白色で多少桃色を帶びてゐる、が其の一大特色

は、體の色が普通の鱒のように銀灰色を呈せずして灰黑色を帶びて居る點である。それは全く、田澤湖は四百二十五米突の水深を有する世界有數の深湖で、此鱒は非常に日光を嫌忌する性質を有し、常に日光の透徹せぬ深水部に棲んで居る所爲だらうと言はれる。――田澤湖の水は透明度に於て正に世界一で、その水色はフオレル標準液の第一號に相當し、從つて暗黑限界も驚くばかり深く、凡そ深度百メートル附近と測定されて居るが、クニマスは六七十米突の半暗黑界に棲む『魔の魚』である。

國鱒、一名を木の尻（キノスリ）鱒といふのは、陷落湖である此湖の成因に關する彼の有名な神話……辰子が蛇體となつて湖水の主となつた時、その母は變事を聞いて愕き、夜中にも拘らず松火を振翳して現場へ駈付けたが、湖上に現れ出た辰子の怖ろしい姿を觀て膽をつぶし、手に持てる松火を湖上に投棄てて逃げ還つた。その松火の燃さしの變化したものが、木の尻鱒だと云ふのである。黑ずんだ特異な體の色から思付いて、創作された傳説であるとは、言ふ迄もない。

クニマスは皮膚が厚くて、肉は柔かで、脂肪がすくないから、食味は決して上等とは云へないが、此地方の人達は、古來その腸を酢のものとして珍重し、『國鱒は肉の不味い代りに、わたの味は格別だ、一度口にしたら到底忘れることは出來ない』と言つてゐる。是ぞ田澤湖唯一の珍味といふべきであるが、いかに食道樂の「舌」の旅客でも、此珍味ばかりは、舌をふるつて畏れ且つ呆れる。鮭や鱒には、條蟲及びジストマの寄生が多いから、衞生家は肉さへも生では口にせぬ位である。況や生わたの酢漬！……之を嗅ぐに、一種の芳香がある。それは彼れが餘り雜食をせず、湖中に浮遊せるプランクトンを主食物とせる結果であらう。又土地の人は、クニマスに限つて條蟲などは居らぬ大丈夫だよは〻と、一向おそれる氣色もない。

田澤湖は、山間の湖水としては甚だ魚類に豐富で、クニマスの外姫鱒、鯇鱒、口黑鱒、鯉、鮒、鰍、鰻、八つ目鰻、山女、嘉魚、クキザツコ、春黑、カジカ、ゴリ、ギギ、鯰等約二十種をかぞへる。その内姫鱒は十和田湖から移殖し、鯇鱒は琵琶湖から取寄せたものであるが、その他は凡て古くから此湖に棲んで居る魚だそうである。潟尻川を經て泝上したものであらう。クキザツコと云ふのはウグイのことで、春黑はクキの大なるもの即ちマルタを云ふ。

此湖には、面白いことが二つある。その一は、湖水の主は鐵氣を嫌ふと云つて、漁民は今だに古風な丸木船を使用して居る事で、他の一つは此湖水も溫度が低く、五十米突以下は年中

攝氏四度の常溫を保つてゐる爲、夏の眞中でも、漁獲が少くて町へ搬出するに足らぬ場合には、獲物を容器に入れて、二日でも三日でも湖中に浸けて保存して置く。湖水が冷藏庫の働きをするのである。

八郎潟

十和田、田澤、八郎潟、これを「東北の三湖」と稱するが、此三湖の間に、傳說上の戀愛三角關係が成立つてゐるのは面白い。田澤湖の主は辰子、十和田湖の主は南祖坊、八郎潟の主は八郎である相だが、八郎は元十和田湖畔の山中に住んでゐた樵夫で、丁度辰子が田澤湖のヌシとなつたと同じやうな徑路を經て十和田湖のヌシとなつた。と或る日遣つて來たは一人の行脚僧、名を南祖坊と云ひ辨慶くらへの强い坊主、鐵の草鞋を穿き鐵杖を振廻して、『此湖を素直に渡せばよし、愚頭々々いへば汝の命も一緒に貰つちまふ』と脅迫した、八郎憤然として『何を此乞食坊主め』と、忽ち物凄い大格鬪となつたが、結局八郎の敗けとなつて、這這の態で逃出し、遠く海岸へ落延びて一の湖を見出した。それが今の八郎潟である。さて又八郎と南祖坊は、田澤湖の辰子に懸想して言寄り、今度は戀の戰ひが始つたが、鐵の草鞋も鐵の杖も辰子には何の功もなく、彼女は優さ男(？)の八郎に靡いてしまつた。田澤湖の主が錢を嫌ふのは、かう云ふ譯だそうな。爾來八郎は多く田澤湖の方に滯在して居るので、八郎潟の方は手入も屆かず段々淺せてゆくに引替えて、田澤湖は深くなるばかりだ、とも云ふ。それから十和田湖に魚(うを)が居なかつたのは、元來ヌシが坊主で精進湖だから……はゝゝとう／＼落語になつちまつた。

八郎潟の風光はぼやあとして、何處かピントの合つてゐない如な感じがあるが、海水湖だから魚屬には富んでゐる。殊に八十八夜前後から牡丹の花の咲く頃を中心に、六月の末迄行はれる張切網(ハツキリアミ)といふボラ漁は、この湖の名物である。但し此地方でボラと云ふはメナダのことで、ボラのことはシロメと稱する。張切網は即ちメナダをとる爲の特別の漁法で、湖水の落口たる船越町附近に於て專ら行はれる。漁場は豫め一定して居つて、數百本の杭が打こんである。それに注連繩ようの物を張渡し無論水中にだ、次第々々に魚群を狹い區域に追詰めてくる仕掛で追込まれたメナダはせつぱ詰つて水上に最後の跳躍を試み脫出を圖る。と其處には汽車の網棚の如き簀網が張つてあつて、まんまと捕虜となるのである。濱名湖の閉口網に似てゐるが、彼は動的で此は靜的だ。漁船に同乘して行つて、ハンモツクの夕涼みと洒落れてるメナダを拾ひ取ると、漁夫は直に手料理の

膾を作つてくれる。それを肴に湖上で盃を酌む。又族中の逸興ならざらんや。形類ニ鮮魚ニ頭類レ蛇、滿盤群胳雪交レ霞、城中不レ識江湖味、頓頓羅來爽ニ齒牙ー。——魚の形まで説明してある所至れり盡せりだが、由來ボラと混合せられ易い魚であるから、少しく説明の勞を採る。

メナダは鯔科の鯔屬に屬し、大さ、習性等甚だボラと似て居るが　頭部の馬鹿々々しく小さいのが特色で、尾鰭もボラよりは小型である　鱗は稍大きい　ボラは胸を有つて居るがメナダは有たぬ、ボラは腹底が太つて彎曲してゐるがメナダは胸部が太い、ボラをシロメ、クロメと呼ぶ地方のあるに反して、メナダはアカメと呼ばれる　即ち眼瞼の色がちがふ。——是位異つて居れば間違つこない譯だが　兎角混同され易く、ボラをメナダと呼ぶ處はないがメナダはボラで通つて居る。ボラは東半部に多く、メナダは西半部に多い。土佐名物『湯ボラ』はボラに非ずしてメナダである。鱲（からすみ）はボラの卵巣の煮乾しで通つてゐるが、——專門家某博士の著書にもさう書いてあるが、實はメナダの卵巣である。手づからボラを料理した人は誰でも不思議におもふ『こんな小さい卵巣から、何うしてあんな大きな鱲が出來るのであらう？』と。では同じ程の大さのメナダの腹を割いて見給へ、『成る程』とうなづけるに相違ない。で、メナダの一名をカラスミボラと云ふ中古宮中に奉獻せられたナヨシ（尺素往來に詳しく出てゐる）といふは　此メナダのことであらう。

御專門の書を見ると、メナダは『八九月頃より漸次淡水の混交する港灣河口等に群游し、九十月頃産卵』とあるが、それも必ずしも一定せず、地方によつて多少の相違のあることは八郎潟の例に依つて明かである。

八龍橋々畔の船越町は水都だ。其湖岸にある旗亭惠美壽亭からは、居ながら此張切網漁を眺めることができる。八月から十月に亘つては又毛綱網といふ漁が行はれて、新鮮な、ボラ、コノシロ、セイゴ、サヨリなどが味はれる。毛綱網も底切網（ヘツキリアミ）によく似た漁法であるが漁夫達はてんでに湖上に元始的な漁舍を設け、そこに泊りこんで、日日連續的に大規模に行はれるものである。

諏訪湖・野尻湖

シジミは諏訪湖の名物で、湖畔の温泉旅館の朝飯には、年がら年中蜆汁のつかない日はなく　冬は彼の二尺の堅氷を破つて、諏訪湖獨得の「蜆鈍飯（しじみどん）」といふやつで擬さらへてゐる。その蜆に二種あつて、ドブシジミと云ふのは湖畔の水田、濠渠、湖中では泥質の處を選んで住み、大型で殼の色が黒い、名からして旨さうではない　マシジミは小型で殼は灰色を帶び、湖底

でも特に砂質の處を選んで棲み、天龍川口附近に最も多い、名物と云はれるのは此種である。——然し名ある旅館料理店では客にドブシジミなどを食はせないから御安心あつてよい。

諏訪湖の魚類を列擧すれば、

鯉　科＝コイ。フナ。ヒガイ。モロコ。カマツカ。ウグイ。オイカワ。
鮭　科＝マス。アユ。ワカサギ。
鰻　科＝ウナギ。
鯰　科＝ナマズ。アカゼ。
鰌　科＝ドジョウ。シマドジョウ。
車蝦科＝オホエビ。コエビ。
鯊　科＝ヨシノボリ。
貝　類＝マシジミ。ドブシジミ。ドブガイ。

此以外には居ない。コイはエビ及びシジミと併せて此湖の三名品と稱すべく、藩政時代には毎年十一月「御川投網」と云つて、コイを漁して其の最良なるものを選んで藩主に獻じ、藩主在府のときは江戸迄送屆ける、その行事が終つて始めて、一般に鯉漁が許されたものだ相である。それから十二月に入るとフナ漁がはじまつた。寒鯉、寒鮒を珍重するところは、さすがに山間の民、湖魚の食季を知つてゐた。ただ殘念なことには、賞めてやる様な料理法がない。

諏訪の夏では、どうかすると生マスを食はせることがある。これは湖中に注ぐ戸川、上川などで捕れるので、味は一向に上等でないが、『此の山國で、しかも眞夏……』と一寸うれしい氣がせぬでもない。アユも滅多にはとれないが、是は天龍川から湖上してくるもので、例の湖鮎ではないから味はなかなか良い。

ドブガイは霞ケ浦のタンカイと同じ物で、霞、諏、兩、湖は我國に於ける烏貝の二大産地であるが、餘り自慢になる代物ではない。どうかすると、然り何うかすると、此貝から眞珠がとれる爲、主なる水産の一に數へられて居るけれども、それが爲成金になつたといふ話もまだ聞かない。

此湖では牢屋及び屋塚（ヤツカ）といふ、二つの特別な漁法が行はれてゐる。牢屋は筌の一種で、又出格子とも稱せられるが、一度入つた魚は根輪際出ることが出來ない。コイ牢、ハヤ牢、ウナギ牢、フナ牢の四種ある。近年野尻湖でも此の漁法を眞似てゐるが、野尻では「監獄」と稱してゐる、一層「刑務所」とする方が新しくて宜かつたのに。屋塚は簀の一種で、冬季氷殼を破つて行はるゝ氷上漁法である。湖底に蓆を敷いて石を澤山入れる、魚屬は絶好の棲息所（ベッド）が出來たチエ辱しと此に集まる、それ

を簀で取卷いて、石だけを殘して蓆ともそつくり引揚げる。牟屋よりも遙かに非道なやり方であるが、氷滑黨に取ては此上ない見物ものなのである。

野尻湖の主なる水產。

コイ。フナ。マス。アメマス。ハエ。ワカサギ。エビ。シジミ。カラスガイ。スツポン。

但名物と稱する程に旨い魚は未だない。魚はあつても、それを美味く食べさせるような旅館がないのである。近年此の湖畔には八十餘戸から成る外人村ができて、夏季は殊の外賑ふようになつたが、つい近頃まで、湖畔の旅館では客が泊ると『御飯に致しますか、蕎麥に致しますか』などゝ聞いたものである。一般に蕎麥を名物とする信州の內でも、俳人一茶の鄕里柏原から、この野尻湖畔にかけて一帶の地域は、その本場である。——當分はまだまだ蕎麥饅頭に蕎麥落雁がこゝの名物であらう。

河北潟・今江潟

河北潟は金澤市の水產寶庫である。市街それ自身すでに淺野、犀川兩河に跨つて居るうへに、淺野川尻に此の河北潟を有し、少し離れては北に邑知潟、南に今江、木場、柴山の三湖を控えてゐる舊百萬石の城下、こゝに川魚料理の特別な發達を見たのは、むしろ當然の事と云はねばならぬ。

河北潟は東西五粁、南北は十粁餘を有する一寸大きな湖水で、潟と呼ばれる位だから無論海水湖である。潟と海とを連絡する大野川は、狹い處でも四五十間、廣いところは一町以上もあつて、且つ湖の水位が極めて低いから、海水、海魚の往復には甚便利で、滿潮の際にはずつと奥の方の西荒屋の沖迄ぶかぶかクラゲが浮いて居るし、四五月頃『鰯よん』の時季には、鰯の大群が殺倒して來るといふ有樣である。故に霞ケ浦あたりで捕れる魚貝は、悉く網羅されてゐる上に、黑鯛、イザキ、石鰈、コノシロ、コハダ等の海魚が漁獲される。然し主なるものを云へば、ボラ、フナ、ウグイ、シラヲ、ゴリ、シジミなどである。

ゴリ料理は金澤の代表的名物であるだけに、さすがに、產額も種類も多い。然し個々の名稱に統一は無いようである。實物に就て漁夫に問ひただして見るのに、

河北潟　カハギス・グズ。オホバゴリ。キチゴリ。クロゴリ。

今江潟　グズ。ガンボウグズ。ツユゴリ。トラゴリ。ダンクロ。

雄ゴリと虎ゴリ、黑ゴリとダン黑とは同じものらしく、グズと

云ふのはカジカのことで是は殆んど湖中には棲まず、注入河の河口附近で僅かに捕れるにすぎない。ゴリに比べると、カジカは頗る旨い、仍で金澤でゴリと云ふはカジカの事だなんと言ふ人もあるが、買被つちやいけない。『犀川のゴリ』が珍重せられるのは、カジカが多いからである。金澤ではカジカとゴリを總稱してゴリと云ひ、東京附近では反對に、之を總稱してカジカと云つてゐるのである。

處變れば舌變る、霞ケ浦あたりでは黒ゴリよりも虎ゴリを美味としてゐるが、金澤では是があべこべで、クロはトラよりも常に相場が高い。此又二種の魚を區別して賣買するところは、流石に金澤だね。

白魚は寛永の初頃、江戸から輸入して放養したものだ相であるが、土地の人はシラヲと呼ばないで「メソゴリ」と云ふ、白魚までをゴリと云ふ所、是亦金澤なる哉だね。メソはそうめんの轉訛の由で、それは燈心から思付いたらうと云ふことである。如何となれば、食物本草に曰く『銀魚生二江湖中一、色白如レ銀、無レ骨長二三寸、圓細如二燈心一者乃眞也』と。

加賀にはス・ズの訛りは無い筈であるのに、シジミのことをスズメ貝といふ、雀海中に入れば蛤となるを知らぬと見える。河北潟の蜆に三種ある、眞シジミ、大和シジミ、姫シジミ。蜆は同種のものでも、老幼に由つて殼の色の異るものであるが、棲息場所に依ても亦色を異にし、一見別種の如く思はれる場合はある、河北潟では此現象が最も顯著で、湖畔の漁夫は殼の色を見て産地を鑑別する、即ち其色漆黒なるものは森下川尻、稍褐色を帶べるものは津幡川尻、飴色のものは大野川も粟ケ崎の下流、黒色の上に赤褐色の斑紋を有するものは大野川口、大場川尻、内日角沖と。發育がよく味も佳いのは大野川産飴色である。——少々話が細くすぎるが、遠路折角調べて來たものを書かねば無駄になる。

シジミは今江潟の名物で、特に『今江蜆』と稱し、「剝身二升は白米二斗」に價したものだ相であるが、鑛毒の爲に全滅して、珍味一升十圓を擲つても今は口に仕難し、遺憾々々。

今江の名産はボラ、川キス、フナ、ウナギの四種で、ボラは今江潟にのみ居つて木場潟では更に捕れぬ。而白いのはコイとフナの生活で、彼等は木場潟で生れて、今江潟へ來て育ち、冬が來れば復た木場潟へ歸つて、群集して居る。漁夫は此習性を能く呑込んでゐるから、夏木場へ餌を捕りに行つたり、冬今江へ行つたり、馬鹿氣た眞似はやらぬ。水の關係だ相である。

金澤地方で、寒ブナの珍重されることは非常なものであるが、是は食味のシュンであるばかりでなく、古來婦人の血の道

の妙薬と傳へられる爲でもあるらしい。

今江とつゞいて今一つ柴山潟があるが、こゝは最早海水の浸入を受けず、全くの淡水湖で、從つて魚屬の種類もすくない。コイ、フナ、ウナギにウグイ位のもので、その代りじゅんさい、ひし藻の如き水草が繁茂して居る。片山津温泉に一週間ばかり滯在中、一日女中達は舟を泛べて、菱の實の採取に出かけ、菱餅を作つて御馳走して呉れたことがあつた。菱餅など旨からう譯はないが、珍は即ち珍、些か旅中の無聊を慰むるには足りた。

桂月先生終焉記

田中貢太郎

大正十四年六月十一日午前十一時、私は青森縣北上郡法奥澤村蔦温泉旅館の一室に於て、大町桂月先生の靈に告別してゐた。それは温泉旅館の玄關の左手になつた室で、見附の階子段と並んだ奥の六疊二間になつた所であつた。そこはこの二年間桂月先生が冬籠をした室で、次の室には圍爐裏もあつた。桂月先生は寒い間はこの室にゐて、暑くなると廊下一つ隔てた表の室に移るのであつた。その前日、即ち十日午前九時十五分に僊化した桂月先生は、その圍爐裏のある室の廊下に寄つた方に此方を枕にして永久の眠りに就いてゐた。それは逆屏風に圍はれ、横に据ゑた白木の案には、供物を供へ、線香を燒き、香を燻らし、蠟燭の灯をともしてあつた。もう一晝夜を經過してゐるので、冷たい黄濁色の皮膚の被ふところとなつてゐたが、さすがに爭はれぬ高士の俤があつた。

桂月先生は享年五十七歳であつた。私が桂月先生の最後の音容に接したのは昨年の十二月十五日で、杉浦重剛先生の追悼會の日であつた。私は桂月先生と桂月先生の許から伴れ立つて高等師範前まで歩いた。その時桂月先生は『君も一緒に追悼會に往つてもいいよ』と云はれたが、竹村と云ふ友人がゐたので、別れて二人で酒家に入つたのであつた。その桂月先生は今年の五月にあげる令息だちの結婚式に連ることになつてゐたが、終

にそれを果すことができなかつた。家族の人々とともに桂月先生の歸京を日一日と待つてゐた私は、六月十日の早朝になつて、雑司ケ谷の桂月先生の留守許から呼ばれ、匆惶として駈けつけて往つて、はじめて桂月先生の病氣危篤のことを知つたのだつた。

この時大町邸では令息だちが不安さうな顔をして出發の用意をしてゐた。病氣危篤と云つても一二回酒を病んだ以外、痼疾もなければ、他に疾にかかつたことも聞いてゐない私は、令息だちのさうしてゐるところを見ても、眞箇にすることができなかつた。しかし、その七日、夫人が蔦溫泉に急行したことを聞き、また夫人から令息だちに送つて來た手簡の模樣などを聞くに及んで私ははじめて桂月先生が胃を病んでゐることを知つて驚いた。

私だちはその日の午後一時東北本線の青森行に乘つて上野を出發した。一行は令息芳文君、文衞君、文男君、四郎君。芳文君と文衞君の兩夫人、令孃愛子さん、令孃の夫婿染谷義夫君、及びその嬰兒と私の十人であつた。この五六年、酒を病んだために衰弱はしてゐても、殆んど醫師の藥を喫んだことのない桂月先生のことであるから、一行の前には不安ながらも明るい光があつた。それに、その前日、令息だちで夫人に打電して、看護に往かうと云つてやつたのに對して、來るに及ばないと云ふ返電があつたほどであるから、何人も萬一を豫想する者はなかつた。しかし、それははかない望みであつた。汽車が郡山驛に著くに及んで、東京からの追電で萬事の休したことが判つた。愛子さんはじめ令息だちの隱隱と泣く聲が氣の顚倒してゐる私の耳にも入つた。騒然としてゐた車の中は急に水を打つたやうにしんとなつた。乘りあはせてゐた心なき乘客にもこの一行の涙が見えたものと見える。私は十七歲になる中學生の四郎君が涙を押へて俯向いた容を見るに耐へなかつた。

私だちは桂月先生の親戚朋友の名を思ひ出し思ひ出し訃告の通電を發した。十一日の未明、私だちは尻内驛の霧の中で汽車を乘換へて古間木驛に降り、古間木驛から輕便鐵道で三本木に往き、三本木から自動車で蔦溫泉にと向つたのであつた。蔦溫泉は桂月先生が老後を養ふべくこの三月本籍を移した仙境であつた。

路は十和田湖から流れてゐる奥入瀬川に沿うてゐた。自動車は私だちを燒山と云ふ部落の茶店の前におろした。そこは桂月先生の酒友で法奥澤の村長と縣會議員を兼ねてゐる小笠原耕一君に關係ある家であつた。そこから蔦溫泉に電話することができた。芳文君がそこから蔦へ電話をかけた。電話には桂月夫人

が出た。芳文君は、『あア、あア、あア、』と涙聲で云つてから、やがて、『み、ん、な、きたッ、よ、』と切つて何も云はなかつた。一行の眼には新らしい涙が湧いた。

燒山から蔦までは二里に近い路であつた。それは奥入瀨川の右岸を奥入瀨川の支流になつた蔦川に沿うて往くのであつた。その蔦川の沿岸の地は路が平坦であつたが、川と離れてから二十丁ばかりの間は女の足には險しい山阪であつた。そこは山毛欅の原生林であつた。山阪が盡きると山上の平地で、そこに蔦溫泉の建物が青葉の林を背景にして二棟三棟並んでゐた。そこには八重櫻の白い花が咲き殘り、建物の正面になつた池には、蘆の若葉が靜な山ふところの微陽を吸うてゐた。

明治四十一年桂月先生が烏谷部春汀平福百穗の兩君と十和田湖に遊んで以來の知己で、また桂月先生の保護者であつた『山の神』と渾名のある小笠原松次郎君が、一行の姿を見かけて池の緣にまで走つて來た。まるまるとふとつた木〇そのもののやうな松次郎君は、赭い胸をはだけ、手にした手拭で泣き脹らしてゐる瞼を押へて復た泣いた。私はその松次郎君と一行のあとからあいさつをかはした。

池の見附の玄關の內、右手の勝手の室の廊下になつた所に桂月夫人が坐つてゐた。桂月夫人はさうした中でも先づ愛孫を抱きとることを忘れなかつた。私は、『奥さん、とんだことになりました、』と云つたきり、他に何も云ふことができなかつた。從遊二十年の恩師夫人に對して、恩師を悼む私の詞はそれ以外に出なかつた。愛子さんの我を忘れて泣き叫ぶ聲が室の中に響いた。芳文君の泣きじやくりして遺骸に向つて何か告げる聲が止め途もなく私の涙をさそふた。無心の嬰兒は夫人の膝の上で嬉嬉として手を振り足を動かした。『この人が、一人おもしろさうだ、』と桂月夫人は泣きながら云つた。鹽井雨江先生の令妹で桂月夫人の姉になる稻子女史は、五月中旬からこの旅館へ寫生に來てゐて桂月先生の臨終に逢つたのであつた。『もう、あなたがたに逢ふのが厭だから、でまいと思つてたが、』と云ひ云ひ入つて來たので、また涙が新らしくなつた。鹽井女史は、『田中さんを呼べと云ふから、おせはしいと思ひましたが、』と云ひもした。

前後して松次郎君、旅館の主人の小笠原四郎君、土地の風習で『おつかちアん』と呼ぶ主婦、松次郎君とともに桂月先生に隨從してゐる太田吉次君、及び小笠原耕一君などが入つて來た。桂月夫人は私を耕一君に紹介した。耕一君は桂月先生と酌んだ酒のために體を痛めてその旅館にゐたがために、期せずして桂月先生の臨終に逢つてゐた。それは五月二十三日のことで

あつた。桂月先生は太田吉次君を伴れて、八幡嶽の險を踏破して七ノ戸に遊び、壺の石文の趾を尋ねて、數日同地に滯在し、歸る時、同地の酒造家から一升の生酒をもらつたので、二十八日法奥澤村の村役場に路寄りして、耕一君を拉して燒山に往き、彼の茶店でその酒を二人で飲んでしまつたが、それがために耕一君は蔦温泉に寢込むやうになつた。桂月先生はそれほどでもなかつたが、それでも健康がすぐれず、平生も酒の後でするやうに、二三日ぐうぐうと寢てゐたので、鹽井女史が心配して時々覗きに往つた。

六月になつて桂月先生は、鹽井女史と旅館の敬次郎と云ふ少年を伴はれて、松見の瀧と云ふのを觀に往くと云つて出かけて往つたが、瀧へは往かずに奥入瀨の谷に出て、燒山を經て歸つて來た。燒山では午食を攝つて、桂月先生は一本のビールを飲んだ。その桂月先生は本年に入つてからお粥を喫ひ、蕎麥粉を喫つて、殆んど普通の飯を口にしなかつた。たゞさうした中でも蕨の好きな桂月先生は、毎日のやうに自分で蕨を採つて來て、それを煮てお菜にすることを忘れなかつた。

桂月先生が鹽井女史と山を歩いたのは六月二三日のことであつた。その五日になつて縣から內務屬を案內して來た。それは十和田湖畔一帶の地を國立公園の指定地にしようとすることに關してであつた。桂月先生もその一行と松見の瀧に往くことになつて出發したが、健康がすぐれないのか、路から落伍して歸つて、夕方まで寢、夕方になつて二杯の酒を飲んで寢た。桂月先生は一合位容る鐵葉へセトをひいた器を平生も腰にしてゐた。そして、その夜おそく起きて又勝手に往つて二杯の酒を飲み、まだ飲まうとするので鹽井女史が止めた。桂月先生は平生の癖を出して、『だから稲子さんの綺は拙い、』と云ひだした。

五日の夕方、室蘭中學校の生徒が蔦へ修學旅行に來た。桂月先生は翌朝、その生徒を庭に集めて明治天皇の御詠の話をした。その夜桂月先生はおつかアちやんにこしらへてもらつて、カウセンと云ふ藥草の湯にひたしたのを二杯飲んだが、遲くなつてから大患が發したのであつた。桂月先生は、窓の下にも、便所にも、枕頭の新聞紙の中にも、咯血し、出血した。それでも桂月先生は何人にも知らさずに寢てゐたが、朝になつておつかアちやんが知つた。桂月先生の皮膚は黒くなつてゐた。『先生、』とおつかアちやんが聲をかけた。『面目しだいもない、吐いた、』と桂月先生は眼を開けて云つた。おつかアちやんは湯たんぽを作つて桂月先生を温めた。『僕は大丈夫だよ、』と桂月先生はおつかアちやんに心配させまいとした。

おつかアちやんは應急の手當の後で、醫者を呼びにやらうと

云つた。桂月先生は、『もう二三日待たう、』と云つたが、おつかアちやんは聞かずに三本木から篠田と云ふ醫師を迎へた。醫師は一二回浣腸してから胃潰瘍の疑ひがあるから、絶對安靜にして三日間は何も口にさせないやうにと云つた。おつかアちやんは同時に桂月夫人の許へ打電した。

八日の午後四時頃になつて桂月夫人は蔦溫泉へ著いた。桂月先生は夫人の入つて來るのを見て、『心配したらう、ね、』と云つた。その夜は桂月先生はすやすやと寢た。眼が開くと詩集を手にした。九日の午後から桂月先生は臍の上あたりが苦しいと云つた。桂月先生はその間にも思ひだしたやうに夫人に口を利いた。夫人は絶對安靜と云ふことを守つて自分からは口を利かなかつた。『何か講談のやうなものはないか、』と桂月先生が云ふので、夫人は講談本を見つけて來た。しかし、桂月先生は一二頁見てから手から放した。

その夜十二時頃になつて、桂月先生は、『もう何時だね、』と云つた。傍にゐたおつかアちやんが、『もう十二時でございますよ、』と云つた。桂月先生は『一生のお願ひぢや、何か飲ましてくれ、』と云つた。桂月先生も三日間の絶食を守つてゐたやうであつた。おつかアちやんは夫人たちと相談して鹽湯をこしらへて飲ました。『もう、水が湯のやうに感じる、』と云つた。鹽湯を飲んだ後で桂月先生は三十分ばかり眠つたが、容態は危險になつて來た。おつかアちやんは三本木の醫者へ人をやり、一方で浣腸すると黑い臭い血塊が夥しく出た。

桂月先生は平生の癖で右脇を下にして寢てゐた。その大患の桂月先生の顏がゆとりのある所謂佛顏に見えた。鹽井女史はそれが氣になつた。十日の未明になつて桂月先生の舌が硬ばりはじめた。夫人は葡萄酒を勸めた。二三杯の葡萄酒を飲むと桂月先生の眼は活活として來た。『おいらは、云ふことと行ふこととが違はない、おいらは悠然として酒を飲んで死ぬるのだ、』と云ひだした。桂月先生は夫人には平生もおいらと云つてゐた。夫人はもう夫に遺言をさす時であると思つた。『何か子供に云つておくことはありませんか、』と云つた。桂月先生は平生も酒を飲んだ時にするやうに、兩手をばただたと鳥の羽たたきするやうにして、如何にも面白くてたまらないやうにしてゐた。『小供には平生云つて聞かしてあるから、それを考へるならいい、』と云つた。桂月先生は考への浮ぶままに家庭のことをぽつぽつと話した。桂月先生の心にかかつてゐたのは四郞君の年の往かないことであつた。門下としては私と高木八太郞君のことを口にせられた。

葡萄酒の後で桂月先生は、『何か強い酒はないか、』と云つた。

桂月先生が昨年蔦へ來る時、親類の多賀宗之少將から二本のウヰスキーをもらつてゐたので、夫人がふと、『ウヰスキーがあるはずだ。』と云ふと、桂月先生は、『あれは家へおいて來た。』と云つた。旅館には蝮酒にした燒酎があつた。おつかアちやんがそれを持つて來た『酒がさめると、舌が硬ばる。』と桂月先生が云つた。夫人はそのつど酒をすゝめた。桂月先生は『他に何も思ひ殘すことはないが、甲州の山水と、十和田の山水の完成しないことが殘念だ。』と云つた。桂月先生は甲州の山水、十和田の山水、奧羽の山水、北海道の山水など數冊の遊行記を未完成にしてゐるのであつた。『皆をここへ呼んで來い。』桂月先生は旅館の人人を枕頭に呼ばした。主人も婢も、桂月先生から夜々文字を敎へてゐた十三になる少年も皆集まつて來た。桂月先生はその人々に、『さようなら、さようなら。』と云つて別れの辭をかはした。八時頃になつて夫人が、『何か辭世の句がありませんか。』と云つた。桂月先生は、『いくつもあるが。』と云つて、『みちのくの、とはだのやまに、ちをはきて、そのまましねば、われは、ほんもう。』と吟じてから、『これはまづいから、東京の新聞にはむかんな。』と笑つて、『ごくらくに、こゆるたうげのひとやすみ、つたのいでゆに、みをばきよめて。』と云つた。それを臨井女史が筆記した。

八時半頃になつて醫師が來て注射した。注射してから桂月先生の意識は朦朧となり、その九時十五分從容として大往生を遂げたのであつた。

十二日の夕方になつて桂月先生の遺骸は溫泉の前の開墾地で火にした。村の人々は燃えあがる焰をおさへるために、花の咲い川柳の枝を投げかけ投げかけした。私の悄然として立つてゐる傍には『東奧日報』の郡場秋蝶君が愁然として佇立してゐた。

馬鹿珍傳

大町桂月

一

京都に一市村光恵博士と飲む。武者繪の武者のやうなる豪猛の顔付をなせるが、能く飲み、能く談じ、能く歌ひ、能く踊る。如何なる歌にても、一たび聞けば、直にその節を記憶す。音樂に於ても、一種の天才あり。談郷里の事に及びけるに、高知城の天守閣の最上層の窓より出でて、鯱鉾の上に跨りたることありといふ。何歳の時なりしかと問へば、十六歳の時なりといふ。余驚きて曰く、君は學者かと思ひの外、土佐の所謂馬鹿珍なる哉。馬鹿と言へば、常人の常識より判じて、何處か拔けたる所ある人の事なるが、土佐にては、更に珍の字を付して、馬鹿珍といふ事あり。馬鹿は馬鹿なるが、普通の馬鹿の爲し得ざる事を爲す。而して常人の意想外に出づ。彼の畸人と云ひ、變り者と云ひ、英雄と云ひ、豪傑と云ひ、志士と云ひ、仁人と云ひ、俠客と云ひ、聖人と云ひ、君子と云ふ類の人は、すべて皆常人の常識より云へば、一種の馬鹿珍なり。而して天下の事多くは馬鹿の手に成る。

維新の大業は、薩長の手に成りたるが、薩には西郷隆盛といふ大馬鹿珍ありき。長には高杉晋作といふ大馬鹿珍ありき。土佐は薩長の間にわりこみて、薩長と共に勤王の三藩と云はれたるが、藩主に山內容堂といふ大馬鹿珍あり。下に文の後藤象二郎、武の板垣退助を始め、大小の馬鹿珍多かりしなり。三條橋上泣きて皇居を拜したる高山彦九郎も馬鹿珍に非ずや。荒廢せる御陵を探り廻りし蒲生君平も馬鹿珍に非ずや。藩封を我子に讓らずして、兄の子に讓りたる水戸義公も馬鹿珍にあらずや。父の祿を繼がずして浪人となりたる賴山陽も馬鹿珍に非ずや。安政の獄の志士も馬鹿珍に非ずや。十津川の義擧の志士も馬鹿珍に非ずや。生野銀山の義擧の志士も馬鹿珍に非ずや。長州落

の七卿も馬鹿珍に非ずや。

維新の大業は馬鹿珍の手に成れりと云ても可なるに非ずや。

二

曾て土佐に就いて曰はむに、もと海軍の下士官なりし人、曾て余と語りて、土佐へ水兵を募りにゆきて、大に困りたることありと云ふ。如何なる事にかと問へば、佐官、尉官數名、それに下士の余も加はりて車を馳せけるに、一尉官の車を引ける車夫、年老いて走る事遅し。尉官いらだちて、早く走れといふこと幾回なるを知らざるが依然として早く走らず。尉官終に怒つて、蝙蝠傘にて、車夫の頭をなぐる。車夫激怒す。梶棒をおろして、警察へ訴へる。さア來いといきまく。尉官謝すれども、承知せず。余氣を利かして、その尉官を我車に乘せて、先づ去らしめ、代りて謝すれども、なほ承知せず。賃錢は望み通りに取らすと言へども、なほ應ぜず。困りに困りたり。終に一議を案じて、今夜宿に就かば、君を上座に据らせて、酒を甕せむと云へば、車夫始めて承知したりと云ふ。この車夫の如きも、土佐人を代表せる一種の馬鹿珍なり。佐官尉官を下座に見下して、夜來節でも歌ひしなるべし。

三

昔に溯れば、長曾我部元親が大馬鹿珍なり。岡豐(おかう)の一城主より起りて、土佐を平定するのみならず、阿波に及び、讃岐に及び伊豫に及び、間もなく四國を掌握せり。大馬鹿に非ずんば出來ぬ事なり。或時禁酒令を下せり。馬鹿珍といふものは、思ひ切つた事をするもの哉。當年の酒徒は、さぞや閉口せしことなるべし。上に馬鹿珍あれば、下にも馬鹿珍あり。或人酒樽を提げて、城門の外を行く。重臣の福富隼人見咎めて、禁酒令を知らぬかとなじる。禁酒令を存じ居るなり。酒は一滴も我口へは入れざるなりといふ。さらば酒樽さげて何をしにゆくぞとなじれば、この酒樽を殿樣に獻上したしと思ふなりといふ。殿樣も禁酒令を守り居らるゝぞ。そのやうなものは無用なりとて、酒樽取りあげて、足にて踏み碎きたるが、實は元親禁酒令を下したるものの、自分はひそかに酒を飲み居りしなり。酒樽をもち出したるは、それを諷刺せむとての狂言なり。元親此事を聞きて翻然として悟りて、己れ自身も全く酒を斷てり。これも一時にて、間もなく禁酒令を解きたり。この酒樽の狂言を演じたる人も一種の馬鹿珍なり。常識の常人は、このやうな馬鹿な眞似はせざるべきなり。

酒樽の狂言は、馬鹿珍を實行の上にあらはしたる一例なるが馬鹿珍を詞の上にあらはしたる例は、頗る多し。野中兼山と云へば、土佐の産出したる人間中の偉なるものなり。學あり、識あり、手腕ありて、三十年間も藩政を專斷し、種々の事業を起し、表面上二十四萬石の土佐藩をして、實際はその倍以上の富力を有せしむるに至れり。曾て山田堰を設け、物部川の水を引きて、香長の平野に、數萬石の良田を開きけるが、その工事終りし時工事に預りし上下數百人を集めて、盛宴を開く。宴酣にして、兼山得意の鼻うごめかし、先の國主長曾我部元親は名將と聞きつるが、このやうなる良地を開かざりしは迂濶なり。我が功に及ばず。皆々の意見如何にやと自慢す。一同兼山の威光に壓せられて、然り〳〵と合槌打つ。唯一人馬鹿珍あり。合槌打たず。兼山を見て笑ふ。目さとき兼山之を知りて、其の男に向ひ、我を笑ふは、心得がたし。仔細ぞあらむ。乾度申せといふ。さらば申さむ、田地の御開拓は、某とても恐悦に存ずるなり。されど元親を譏らるゝは何事ぞや。元親は小身より起りて天下に望を掛け、四國を併呑する大事業を成したる程なれば、何ぞ鍬を握りて僅かなる土堀りを爲さむやといふ。一同此直言を聞きて、如何にかならむと、馬鹿珍の身の上を氣遣ひしが、兼山もさるもの、なる程と打頷きて、その場はをさまりたり。されど心中には此の直言の馬鹿珍を快くは思はざりしなるべし。今も土佐には此類の馬鹿珍多し。常人の如く面從する能はず、常人の如く阿諛する能はず、一身の利害を度外に付して、直言して憚らず、世には腹に劍を藏して、口に蜜を含む者多きが、土佐の人は心善良にして口毒惡の人多し。換言すれば、世には僞善の人多きが土佐には僞惡の人多し。爲に仲間や下の受けは好きも、上の受け好からず。折角の才能を有しながら、出世せずに終る例を多く見受くるなり。

四

山内初代の一豐は貧乏侍にて、きう〳〵言ひながら、天下の名馬を購ふとは、これも一種の馬鹿珍なり。二代の忠義はなほ一層上の馬鹿珍なり。二條城にて饗應に預りての歸るさ、裸體になりて乘物の上に跨りて、京の町を通りしこともあり。大馬鹿珍なると共に大酒豪なり。將軍家にて世子を擧げたる祝に招かれて大に醉ひ、式臺まで戻りて嘔吐す。伴の江田文四郎を顧みて、始末せよと云ふ。この文四郎がまた馬鹿珍なり。直に俯して舌を出し、吐きたるものを悉くぺろぺろと我腹に入れ、羽織を脫して其跡を拭へり。如何に忠臣とても、文四郎の如き犬の眞似は出來ざるべきなり。

當時斬罪の場合に諸侯はよく刀を首切役の人に托して利鈍を試みて貰ひたるものなり。首切役の人の中にて、山名嘉右衛門といふ者、最も有名なりき。この嘉右衛門人の首斬ることは上手なるが、心きたなく、賄賂の有無に依りて、刀の利鈍を判す。忠義それとは知らず、一刀を文四郎に投けて、嘉右衛門の鑑定を乞ひしに、賄賂なければ、わざと淺く切り込みて、鈍刀なりといふ。文四郎大に怒り、監督の吏に請ひ、二つの屍骸を重ねて、自分で斬りたるに、見事二つに割れて、なほ刀は一尺ばかりも砂の中に入り込みたり。刀も名刀なり。刀をつかふ人も名手なり。一同あつとばかりに感歎す。かばかりの名刀を鈍刀とは、さても心の曲りたる人かなと、罵りも敢へず、刀を地に投じ、足にて踏み折り、その刀を、恥ぢて赤くなれる嘉右衛門の顔と共に跡に殘して、さつさと歸り來り、斯くと告ぐれば、でかしたり／＼、汝ならではと思ひて、汝を遣はしたるなりとて、忠義大に褒めたり。君臣共に馬鹿珍なる哉。

この江田文四郎の父も同じく文四郎と言ひて、同じく馬鹿珍なり。戰爭に出づることが何よりの樂みなり。秀吉の小田原征伐の際、山内一豐箱根山上の山中城を攻む。文四郎奮鬪して、敵の一將を斬りたるが、その身も數十創を受く。文四郎平氣にて療治もせず。肉爛れ、創膿み、蛆湧きて、臭氣四散す。本人は平氣なるも、側の者堪へられず、幾度も療養を勸むれども、肯んぜず。終に一豐に訴ふ。一豐命じて掛川に歸らしむ。君命如何ともし難く、山を下るには下りたるが、三島まで下りて、鹽にて創をもむこと三日、創癒えたりとて、引返して軍に從へり。文四郎の腕の鹽漬とて、後世の語り草となりたりき。

五

忠義死して、竹巖院雲公龍山大居士といふ法名をつけられたり。これ眞如寺の僧了谷の撰する所なり。了谷の無識も見えて、竹巖と言ひ、雲公と言ひ、龍山と言ひ、よくも拙劣なる法名をつけたるもの哉。瑞應寺の僧蘸的竹巖を松巖と改むべしと言へど、了谷從はず。蘸的怒りて、大に罵る。奉行の佐竹何某和解を試たれど、蘸的應ぜず。果ては藩廳をも罵るに此上はとて、蘸的を獄に下す。蘸的怒ること益甚しく、自ら指を噛み、血を出して、白無垢の小袖に經文の句を書き、舌を噛み切りて戶板に投げつくるなど、見る者をして戰慄せしめたるが、終に絕食して、眼を開きたるまゝにて死せり。蘸的も亦馬鹿珍の一人なり。明治の世になりて、瑞應寺は廢れたるが、舊境內に蘸的の墓存し、神に祀られて、蘸的神祠と稱す。坊主が神に祀られては、魂魄は極樂と高天の原との間にや迷はむ。高知市の內

外、参詣の常に絶えざるは、唯この黨的神社にて、神社は神社ながら、香烟の盛に立昇ること、泉岳寺の四十七士の墓に譲らず。

六

山内初代の一豐は、大通院といふ法名あり。慶長五年土佐の國主となり、同十年に死せり。土佐國主たること僅に五年なり。創業の主なるも、僅か五年間にて、創業を全うする能はず。何にしろ、遠州掛川の五萬石より一躍して、土佐二十四萬石の國主となれり。土佐には長曾我部の遺臣、到る處に散在して、馬鹿珍多し。土佐を統一すること、容易に非ず。二代の忠義は寛文四年に世を去れり。一豐死してより六十年の後なり。德川家にては、家康、秀忠、家光、家綱の四代を經たるなり。德川の天下は家光に至りて完成したるが、山内の土佐統一は、忠義一代にて成れり。忠義は守成の主にして、兼ねて創業の主なり。馬鹿珍を酒に發揮するのみに非ず。國政にも發揮せり。彼は土佐の津々浦々を廻れり。故老に就いて、一々故實を問へり。神社佛閣の境目をたゞしたり。一國の掟を定めたり。庄屋名主には一々手書を與へたり。刀をも與へたり。さすがの長曾我部遺臣の馬鹿珍も忠義の恩威に服せざるを得ざりき。忠義は江戸に出ても、馬鹿珍を發揮せり。寛永十六年、島原の亂の平らぎたる翌年、將軍家にては、安宅丸の乘初の祝とて、諸侯を船内に饗す。諸侯の席順は石高によることにて黒田侯と細川侯と相並ぶ。この兩侯は島原の亂の事に關して、隙あり。如何なる珍事が起らむと、諸侯唯冷汗を握るのみなりしが、そこは馬鹿珍なり。忠義末の方の座を起ち、小身なれども、一國の主なり。目出度き日なり。殊に島原の亂平ぎて、一層目出度き折なり。何か苦しかるべきとて、兩侯の間にわり込み、兩侯にも侑め、自らも大に飲む。風雲急なりし酒座、一變して春風吹けり。

忠義は勇の馬鹿珍なり。大智之に加はる。次の忠豐は仁の馬鹿珍なり。大智之に加はる。非常なる親孝行なり。厚く下をも惠みたり。忠義毎夜大酒して、曉に至る。忠豐は次の間に正座して、夜を徹したりき。或時茶道具の内の銀の水入一つ、銀の文鎭三つ失せたり。掛の役人色々詮議すれども、見出すこと能はず。終に止むを得ず、忠豐に告ぐれば、そは帳面の書違ひならむ。書き直し置けとのみにて、事濟みたり。馬鹿珍の土佐人は多く勇に偏するが、十中二三は、仁の馬鹿珍あり。忠豐の如きは、其一例なり。

七

第十五代の容堂は、忠義にも劣らぬ大馬鹿珍なり。尊王攘夷の論勃興したる際、あはや二十四萬石を棒にふらんとせしが、やつと蟄居にて事濟みたり。或時藤田東湖を招けり。東湖も大馬鹿珍なり。今頃の大名は、どんな事をすべきやとの問に、御謀叛々々々々と事もなげに答ふ。さすがの容堂も舌を捲く。談、戰國の事に及べるが容堂顧みて、我れをば當時の誰に比すべきと問ふ。小南五郎右衛門答へて、毛利元就なるべしといふ。容堂不滿にて、吉田元吉ならば、織田信長に比するならむとて、怒れる樣子なり。東湖見兼ねて、お若い〱と、馬鹿珍を發揮すれば、何に若いとや、一つ腕角力を爲さむ。いざ來れといふ。愈々出でて、愈々馬鹿珍なり。腕角力を挑まれて、東湖思案す。わざと負くべきには非ず。勝たば、馬鹿珍揃の土佐侍、主君の爲めに、どんな馬鹿珍な事をするかも圖られず。如何にせんと首を傾けしが、終に思ひ切つて、お相手仕らむといふ。小南五郎右衛門屹と東湖を見て、今日先生を御招き申したるは、國家の大事に就いて教を受けむとてなり。腕角力の如き兒戯を爲さるゝとは、何たる事ぞやと云ふ。大出來々々々と、一座腹の中にて感服す。東湖手をつきて謝す。一座しらけたり。東湖紙筆を請ひて、『容衆人君之德也』と書す。馬鹿珍同士の會合は、奇拔なる喜劇を演ずるもの哉。容堂の號は之より出でたり。後年容堂は東湖を偲びて、五絶を作れり。

容ㇾ衆人君德
大聲向ㇾ我言
其人今安在
一逝杳英魂

八

武市半平太の土佐人に於ける、西郷隆盛の薩摩人に於けるが如く、また吉田松陰の長州人に於けるが如し。いづれも大馬鹿珍なり。半平太は薩長の志士と相談して、發言すらく、我等草莽の志士如何に切齒扼腕したればとて、天下の大事はならず。天下の大事を成さむには國主を動かし、國を擧つて起たざるべからずといふ。一同其理に服し、國を擧ることを誓へり。半平太國にかへりて國主を動かさむとして百方心を碎きけるが、吉田元吉といふ邪魔物ありて、何とも致し方なし。止むを得ず、部下と相圖りて、之を斬れり。斯くて國主始めて動けり。土佐は勤王の三藩となるを得たり。其後藩論また動きて、半平太等の身危くなれり。衆みな長州に脫走せむことを勸む。半平太肯んぜず。終に獄に下されて、勤王の犧牲となれり。その部下の中岡愼太郎や、坂本龍馬や、多く長州に脫走せり。

幕府の末に當りて、土佐藩の大立物は後藤象二郎と板垣退助となり。この二人は大馬鹿珍なるが　大祿の家に育ちて、下情に通せず。薩の西郷隆盛、大久保利道、長の木戸孝允　大村益次郎などに比して、ちとお坊ッちやんなり。それを補ふには中岡、坂本の二雄あり。中岡は坂垣と意氣投合し、坂本は後藤と意氣投合す。後藤、板垣は藩士の雄なり。中岡、坂本は鄕士の雄なり。鄕士とは長曾我部の遺臣にして山内の祿を受けず、農を業とするも、一刀を帶せる武士なり。後藤、板垣、中岡、坂本あれば、土佐は他に對してひけを取らざるが、惜しや、中岡、坂本は一時に暗殺せられたり。この後藤、坂垣、中岡、坂本の四人に、岩崎彌太郎を加へて、土佐の五傑と云はむか。この五傑の後、土佐はこの五傑ほどの大馬鹿珍を出さず。

土佐出身の軍人として、海軍にては島村元帥傑出し、陸軍にては山路中將傑出せり。山路中將は中將にて終りたるが、今少し命長からば、大將となり、更に元帥となるべき人なり。維新の際、始めて洋靴を穿きて、殘念だ／＼といふ。何事かと問へば、豆だらけなり。西洋人も矢張り豆を生ずるものと思ひたりけむ、毛唐人は平氣なるに、神州男兒痛くて堪へ難し。さては殘念と云ひけるなり。亦馬鹿珍なる哉。馬鹿珍は馬鹿珍を知る。山路將軍は乃木將軍を引立てたり。乃木將軍は何人にも服せざるが、山路將軍のみには服したりと聞く。

九

命も要らず、金も要らず、名も要らずといふ人は始末し難きが、斯る始末し難き人にして、始めて大事を成すとは、西郷隆盛の言へる所なり。これやがて馬鹿珍の贊辭なり。常人は誰も命が欲しい。金が欲しい。名が欲しい。まだその上に爵位が欲しい。女が欲しい。常人に比して、馬鹿珍は何處か缺けたる所あり。

その代りに、何處かまた餘れる所あり。

土佐に月峯といふ馬鹿珍の僧ありき。江戸に下りしに、誤つて路を失ひて、濂幕松林の中を行く。盜賊數人現はれて、金を出せと迫る。馬鹿珍の僧なれば、盜賊などに屈するものに非ず。これを拾へとて、經文を入れたる三衣袋を投げ出す。盜賊ども拾はむとて地に俯す。月峯手早く杖にて一々痛く頭を叩き、氣絕せしめて、直に疾走す。遙か落ち延びて一家に投じ、食を乞ひて、未だ一椀を喫し終らざるに、こゝの主人氣絕せり。早く來れと告ぐるものあり。一家擧つて、あわてゝ出でゆく。さては賊の家なり。長居は無用と、又も駈け出して、無事なるを得たり、僧に似合はぬ豪の者なる哉。或時。枚方より大阪へ

とて、淀川下りの舟に乘る。同行の僧、濡れたる草鞋を解きしに、其雫散りて、一士人の裾にかゝる。士人怒り、罵り責めて止ます。頭を下げに下げ、詫びに詫びて、漸く許されたり。月峯三衣袋より剃刀取り出して、同行の僧の頭を剃り、自分もその僧に剃つて貰らへり。其剃刀頗る銳利なり。さきに罵りたる士人、我月代を剃つてくれといふ。月峯さらばとて、半ば剃り砥石にて磨く風をして、わざと剃刀を水中に落す。士人怒れども、何とも詮方なし。當時宿屋にては、半剃の人を宿さぬ定めなれば、わざと半剃にして士人を苦しめて、さきの怒罵に報ひたるなり。僧に似合ぬ惡戲をするもの哉。月峯は安藝郡淨貞寺の住持となれり。有名なる大寺にして、末寺多し。多くの僧來りて法論をたゝかはすに、誰も月峯に敵するものなし。月峯は僧としての素養も傑出せるが、唯錢勘定を解せず。大阪の人に返すべき金ありければ蔵德屋利左衞門の家に行きて、便船あらば知らせよといふ。我方に大阪の人より受取るべき金あれば、便換にすべしと受合ひて、其事を濟ましたり。少許の金なれば、月峯に催促せず。催促せざれば、金を出すを要せずと思ひ込みたるこそ馬鹿珍なれ。其後金を大阪に送らむとて、幸便を求むる人あり。月峯聞いて、それは蔵德屋に賴むべし、便換といふものにして、一文も出さずして濟むなりといふ。馬鹿珍なる哉。一年の秋、商人來りて寺の柿の實を買はむとす。寺男柿の實一つ一文半に定めて賣れり。月峯は一文半の半は一文の錢を半分にするかと思ひしにさることなかりければ、怪みて問ふ一文半を二つ合すれば、三文なり。柿二つにて三文になるなりと教ふれば、汝は數術に達すとて感服せりとは、あまりに馬鹿珍なり。月峯の如きは、あまりに極端なるが、概して馬鹿珍は寡慾なり。世にありあまれる我利々々亡者と其選を異にす。論語に、小人は利に喩り、君子は義に喩ると云へり。いつの世とても、我利々々亡者は利に喩る。馬鹿珍は君子ならずとも、義に喩るなり。

一〇

谷時中は南學の祖なり。その門より野中兼山出でたり。兼山の門より山崎闇齋出でたり。

闇齋は土佐の產にあらざるが、幼時土佐へ來りて、吸江寺の小僧となりたりき。兼山見て、異とし、漢學を敎ふ。闇齋僧となることを止めて、儒となれり。時中も、もとは僧なり。眞乘寺の住持たり。藩主の忠義折り〳〵長濱に遊びけるが、近路なるを以て、往復ともに眞乘寺の境内を通り拔く。或時戻りに通り拔けむとす。日暮れて、門閉ぢたり。忠義臣下をやりて、門を開かしむ。時中應ぜず。こゝは我寺なり。妄りに人の通行す

べき處に非ず。通行すべき路は彼處にありとて官道を指す。理の當然に、藩主もこの馬鹿珍を如何ともする能はざりき。時中師を以て自ら任じて、眼中に王侯もなく、何人に對しても、態度横柄を極む。こゝに又一人の馬鹿珍あり。時中の横柄なるを憎み、辨すつもりにて、一と狂言を演じたり。不意に講席に來りて、時中を押倒し、刀を拔きて、其胸に擬し、汝は平生士大夫に對して無禮なれば、刺殺さむといふ。驚くかと思ひの外、一向平氣にて、殺したければ殺せ、殺したる後に、汝は如何になるかを考へよといふ。固より殺す心なければ、感服して去り、請ひて門人となれり。土佐にはこのやうな馬鹿珍が多きやうなり。己れの勇を恃みて、他を勇なきものとし、蔑して見て、勇なければ、益之を侮る。されど根が正直なり。他の勇を認むれば、一も二もなく心服するなり。

馬鹿珍にも大あり、小あり、善あり、惡あり。大にして善なる馬鹿珍こそ面白けれ。大にして善なる馬鹿珍ならば、物欲に累せられずして、事理に徹底す。勇に徹底し、智に徹底し、仁に徹底し、學問に徹底し、技術に徹底し、何事にも徹底す。大にして善なる馬鹿珍あれば、社會振ひ、國家勃興す、常人は草木と同じく朽つ。人間の歴史は、やがて馬鹿珍の歴史なり。

〔編者附言〕　大正七年六月初旬・朝八時前桂月翁俥を驅りて予の家を訪れ、門前にて「瀧田先生、〳〵」と大聲に連呼す。予出でて迎接すれば「お願があつて來た。」と云はる。朝からプン〳〵よき臭ひす。そこで予も氣轉を利かせ、座に招じて、冷やの一升瓶と筍の煮たのを出す。翁曰く「筍は大好物なり、賴山陽も好きであつた。それで山陽が歸郷すれば、お母ッさんは久太郎は筍が好きぢやつたと云つて筍を喰はせる。それで山陽に「阿娘知二我性一」といふ句がある。俺れの好きな食物をお母ッさんがよく知つて居るといふのだ。阿娘とはお母ッさんの事だ」といふやうな講釋があつて「サテお願といふのは斯う云ふ譯ぢや」と多少容を改められて話された。

「大町桂月は今日何人によつても一個の村夫子と思はれてゐる。僕も實際三十年村夫子を以て任じて來たかの觀がある。併し桂月には村夫子でない他の一面がある。今まで拔いた事は無いが、實は腰に一本差してゐるんだ。そこで今度は此腰のものを思ひ切つて拔いて見ようと思ふ。土佐に馬鹿珍と云ふ言葉がある。馬鹿は馬鹿だが只の馬鹿ではない。何でも思ひ切つた事をする奴で、思ひ込めば生命も惜しくないと云ふ奴だ。況して金とか名譽とかには眼をくれぬ。西郷南洲も云つた。生命も金も欲しくない奴には手がつかぬと。それだ。さう云ふ男だ。「論語」にある郷愿といふ字にアタル意味だ。土佐には其馬鹿珍が隨分多い。此桂月も實は其馬鹿珍の血を多分に有つてゐるのだ。然し今までは其れを出す機會がなかつた。が、今度は思ひ切つて其馬鹿珍を發揮して見ようと云ふのだ。それで第一の血祭りには、大隈だ！　彼奴は怪しからん奴だ。それから澁澤だ！此奴も怪しからん奴だ。それから和田垣だ！こいつも怪しからん奴だ。先づ第一回に此三人を血祭りにしようと思ふ。それを「中央公論」に書かして貰ひたい。御迷惑ぢやあり

ませんか」といふのだ。

僕は「それは面白いでせう。是非お願いたします」と頼んだ。それから夏目漱石は印税が澤山入るさうだから、やつつけても遺族が困らぬやうなら、やつつける。高山樗牛もやつつけたいが、遺族が困まるなら見合はさうなど、醉つても漱石に「世帶」に思ひ遣りのある態度で、管を捲かれて歸られた。處が其途中で、氣が變になられて、土佐に樂書をされたりして、其れから間もなく巣鴨 腦病院に入られることになつたのだつた。

それから數回お目にかゝつても、つひに馬鹿珍の事には、お互に觸れた事はなかつたが、先生の絶筆が「馬鹿珍傳」で而かもそれが本誌に掲げられることになつたのは、一種の因縁と云ふべきであらう。先生自身も恐らく土佐が産した最大の馬鹿を以て任じて居られたゞらうと云ふ事に、今此「馬鹿珍傳」を讀んで深く思ひ合はされる。茲か此文に關する因縁談を記して讀者の參考に供する。



學生のカフエー入りとカフエー女給の研究

カフエーの今昔

宇野浩二

此間も廣津和郎と話し合つたのであるが、カフエーの元祖はどこだらうといふ話が出て、僕はパウリスタだらうといふと、彼はプランタンだらうといつた。その時は僕が主張を通して勝つたつもりでゐたところが、二三日後に又彼に會ふと、彼は松山省三から聞いたといつて、矢張りプランタンの方が一二ケ月先だといふことで、僕の負けになつた。

勝ち負けは冗談だが、もつとも案外別なところに元祖のカフエーがあるかも知れないが、兎に角あのプランタンやパウリスタが出來初めの頃は、僕には愉快な記憶である。但、僕はプランタンのことは知らない。何故といつて、プランタンは僕のやうに酒を飮まない、貧乏な學生には寄りつけない所のやうな氣がしたからだ。それに、もう一つ、あそこには當時賣り出しの(スバルとか、三田文學とかに關係の深い)青年文士たちが集まるといふ噂だつたから、一層恐れをなして足踏みをしなかつたからである。そこへ行くと、パウリスタは五錢の珈琲と五錢のドーナツとで事が足りた。當時のパウリスタは待合を買ひとつて、それを改造したものだといふので、西洋風にはしてあつたが、妙なところに袋戸棚があつたり、押入がついてゐたりする、幾つかの小部屋に分れてゐた。丁度「青鞜」といふ雜誌の出たのがその頃で、あそこでよくその同人の人たちと顔を合は

した。僕の友人にその青踏社に戀人のある男があつた關係から、僕もその社の二三の人たちに紹介せられた。それが皆パウリスタの二階だつた。その中で最も僕の記憶に殘つてゐるのは尾竹紅吉女史である。五尺五寸以上あるかと思はれる女史は、いつも變つた色の袴を穿いてゐた。その女史の大きな身體が、緑色のカーテンなどで裝飾してある、待合の部屋を直したその洋室の隣室の中から現はれた。で、一層部屋が小さく、女史が大きく見えたものである。

その時分のパウリスタのドーナツといふものは實にうまかつた。中頃その味がすつかり落ちて、以前のやうなものはどこにも見當らなくなつたが、今、神樂坂の山本カフエーで出すドーナツが多少それに近い。山本のドーナツと初期のパウリスタのドーナツとが似てゐてうまいといふ話が、今でも同宿の三宅周太郎氏との間によく出る。珈琲だつてもあの頃はうまかつたやうな氣がする。もつとも、珈琲の方は僕など殆どあの時分に初めてその味を知つたやうな譯で、その後口が肥えたから、今あの頃の通りのものを飲まされても、うまいかどうか保證は出來ない。

それがすつかり改築されて、二階なども普通の廣間になつた時分に、僕はあそこの珈琲沸しの係の名はも忘れたが、給仕の監督のや

督をしてゐる舊友を見出した。舊友の名は宮本卯三郎といつて、僕の大阪の小學時代の友人なのだ。僕の家と彼の家とは向ひ同志だつた。が、僕が中學一二年の頃、彼の家が引越して行つたので、その時彼と會つたのは六七年振りだつた。彼は學問が嫌ひだといふので、小學校切りで止めたといふことを聞いたが、その後何をしてゐたのか僕は聞かなかつた。けれども、少年の頃の記憶に依ると、彼が學校に行くのを厭がるので、彼の父と母とが彼の頭と足とを擔いで、家から一町ばかり泣き叫ぶ彼を運んで行つて、途で學校の鞄と一緒にほうり出しておいて歸つて來るのが常であつた。そんなにされても彼は中々學校の門をくゞらなかつた。そんな少年であつたから、多分不良少年になつてゐるだらうと想像してゐたのに、僕はそこで給仕の監督をしてゐる彼を見出したのである。その時、彼は僕に御馳走してくれた。いろ／＼話して見ると、當年の學校を嫌つた面影などはすつかりなくなつて、彼のいふ事や、考へてゐる事がまつたく大人になり切つてゐるのに、僕は少なからず驚かされた。何故といつて、少年の頃秀才だつた僕がその頃は學校などまるで休んで、下宿屋でごろ／＼寢轉んでゐた時だからである。果して、その後彼は神田に出來たパウリスタの副取締のやうなものになり、今は本郷に行つて同じ名前のカフエーを經

學生のカフエー入りとカフエー女給の研究

カフエーの今昔

宇野浩二

此間も廣津和郎と話し合つたのであるが、カフエーの元祖はどこだらうといふ話が出て、僕はパウリスタだらうといふと、彼はプランタンだらうといつた。その時は僕が主張を通して勝つたつもりでゐたところが、二三日後に又彼に會ふと、彼は松山省三から聞いたといつて、矢張りプランタンの方が二三ケ月先だといふことで、僕の負けになつた。

勝ち負けは冗談だが、もつとも案外別なところに元祖のカフエーがあるかも知れないが、兎に角あのプランタンやパウリスタが出來初めの頃は、僕には愉快な記憶である。但、僕はプランタンのことは知らない。何故といつて、プランタンは僕のやうに酒を飲まない、貧乏な學生には寄りつけない所のやうな氣がしたからだ。それに、もう一つ、あそこには當時賣り出しの（スバルとか、三田文學とかに關係の深い）青年文士たちが集まるといふ噂だつたから、一層恐れをなして足踏みをしなかつたからである。そこへ行くと、パウリスタは五錢の珈琲と五錢のドーナツとで事が足りた。當時のパウリスタは待合を買ひとつて、それを改造したものだといふので、西洋風にはしてあつたが、妙なところに袋戸棚があつたり、押入がついてゐたりする、幾つかの小部屋に分れてゐた。丁度「青鞜」といふ雜誌の出たのがその頃で、あそこでよくその同人の人たちと顔を合は

した。僕の友人にその青踏社に戀人のある男があつた關係から、僕もその社の二三の人たちに紹介せられた。それが當パウリスタの二階だつた。その中で最も僕の記憶に殘つてゐるのは尾竹紅吉女史である。五尺五寸以上あるかと思はれる女史は、いつも變つた色の袴を穿いてゐた。その女史の大きな身體が、綠色のカーテンなどで裝飾してある、待合の部屋を直したその洋室の隣室の中から現はれた。で、一層部屋が小さく、女史が大きく見えたものである。

その時分のパウリスタのドーナツといふものは實にうまかつた。中頃その味がすつかり落ちて、以前のやうなものはどこにも見當らなくなつたが、今、神樂坂の山本カフエーで出すドーナツが多少それに近い。山本のドーナツと初期のパウリスタのドーナツとが似てゐてうまいといふ話が、今でも同宿の三宅周太郎氏との間によく出る。珈琲だつてもあの頃はうまかつたやうな氣がする。もつとも、珈琲の方は僕など殆どあの時分に初めてその味を知つたやうな譯で、その後口が肥えたから、今あの頃の通りのものを飮まされても、うまいかどうか保證は出來ない。

それがすつかり改築されて、二階なども普通の廣間になつた時分に、僕はあそこの珈琲沸しの傍の台に凭れて、給仕の監督をしてゐる舊友を見出した。舊友の名は宮本卯三郎といつて、僕の大阪の小學時代の友人なのだ。僕の家と彼の家とは向ひ同志だつた。が、僕が中學一二年の頃、彼の家が引越して行つたので、その時彼と會つたのは六七年振りだつた。彼は學問が嫌ひだといふので、小學校切りで止めたといふことを聞いたが、その後何をしてゐたのか僕は聞かなかつた。けれども、少年の頃の記憶に依ると、彼が學校に行くのを厭がるので、彼の父と母とが彼の頭と足とを擔いで、家から一町ばかり泣き叫ぶ彼を運んで行つて、途で學校の鞄と一緒にほうり出しておいて歸つて來るのが常であつた。そんなにされても彼は中々學校の門をくゞらなかつた。そんな少年であつたから、多分不良少年になつてゐるだらうと想像してゐたのに、僕はそこで給仕の監督をしてゐる彼を見出したのである。その時、彼は僕に御馳走してくれた。いろ／＼話して見ると、當年の學校を嫌つた面影などはすつかりなくなつて、彼のいふ事や、考へてゐる事がまつたく大人になり切つてゐるのに、僕は少なからず驚かされた。何故といつて、少年の頃秀才だつた僕がその頃は學校などまるで休んで、下宿屋でごろ／＼寢轉んでゐた時だからである。果して、その後彼は神田に出來たパウリスタの副取締のやうなものになり、次は[illegible]に行つて同じ名前のカフエーを經

營した。今でも日本中のパウリスタを名乘るカフエーで、彼の經營してゐる名古屋のそれが最も成功してゐるといふのは嘘ではない。彼は大阪にゐる、その昔頭と足を捥がれた兩親はいふ迄もなく、數多い兄や姉たちに、今では悉く經濟上その他の扶助をしてゐるといふ話である。

東京のパウリスタと殆ど同じ時分に、大阪の道頓堀にカフエー、パウリスタといふものが出來た。同じ時分——といつたが、若しかすると半年か一年後だつたかも知れない。名前は同じだつたが經營者は別だつた。東京のパウリスタは悉く男の給仕だつたが、大阪の方はそれが女だつた。もつとも、その頃の女給には今日の女給のやうな、どこか新味のあるハイカラさなどはなかつた。殊に場所が大阪だつたから、藝者と女中と合の子のやうなもので、唯年の若いのが取得ぐらゐのものだつた。だが、藝者や女中とは緣の遠い我々貧乏學生にとつて、五錢の珈琲を飲みに入つたら、女と話が出來るといふだけでも十分歡迎すべき價値があつた。藝者が紳士や若旦那の友で、女中が職人や番頭の友なら、こゝに現れた女給はたしかに我々學生の友だといふ氣がした。實際、その頃のカフエーの客といふものは學生上りの階級に限つてゐた。殊に初のうちは學生の中でも、文學青年とか畫青年とかが主であつた。これは東京も大阪も同じだつたと思ふ。だから、たまに職人などが入つて來ても、僕等は妙に勝手が違つたやうにおづ／＼してゐるばかりで、女給が傍に來て注文を聞かれても、暫くもぢ／＼してゐた後で、やつとミルクをくれないかなどと小さい聲でいふ程度だつた。

僕の友人で死んだ今井白揚といふ詩人が、その頃學校の夏休で、國の鹿兒島に歸る途中大阪に寄つて、半月ほど遊んでゐたことがあつた。僕は彼と毎日その出來初めのカフエー、パウリスタに出かけた。僕等の外に大阪の何人かの友人たちも始終そのカフエーで落合つた。僕は朝の八時頃から、夜の十二時まで坐つてゐることが珍しくなかつた。その家は徹夜營業だつたので、そこで夜明しすることも珍しくなかつた。さすがに夜が更けると、客足は少なくなり、女給も交替で、一二人位に減つてしまつて、それも夜中になると客がまるでなくなるので、彼等は退屈ざましに晝間使つたナイフやフオークを磨いてゐた。そんな中に交つて、僕はそれ等の女給たちのフオーク磨の手傳ひなどをしてやつた。女給たちはフオークを白い粉でこすりながら、二上り新内とか、春雨などをうたつた。今なら「籠の鳥」とか「ドナウの漣」といふところであらう。そんな風で、僕たちはその家を寄り合ひ場所か事務所のやうに心得て、前記今井白揚が愈々國に向つて立つ時なども、それを外の仲間に知らせる

のに、そのカフエーの黑板を利用して、「今夜十一時、今井たつ」などと書いたものだ。

ところが、この「今井たつ」に就いて次のやうな愛嬌話が持上つた。といふのは、このカフエーの女給の中で一番美人の評判の高いおつたさんといふ女があつた。美人だつたが、人形のやうな顏をしてゐた代りに、少し頭の働きが鈍いやうに思はれた。それとも、餘りみんなに持てはやされるので、そんな風にぼんやりしてしまつたのかも知れない。無論、多分貧乏人の娘で、工場へでも行く筈になつてゐたのが、突然そんな新職業を見出して、華やかな空氣の中で立派な男たちにちやほやされたので、多少のぼせた氣味になつたのだらう。その女が今いふ黑板に書かれてある字を見て、

「おや、今井たつ、今井たつ……」とくり返し首を傾けながら讀んでゐた。そして、口の中で「をかしいわ、をかしいわ」と呟いてゐるのである。

といふのは、彼女はこのカフエーのスターである自分の名を誰かゞこの黑板に書いたものだと思ひ込んだのだ。どういふ譯か知らないが、外の人の名なら兎に角、自分の名がそんな風に書かれるのは當然のことだと思つたのだ。しかし何の爲に「つた」といふ自分の名を「たつ」とあべこべに書いたのだらう、あわてたのか知ら、それとも何かの暗號でゞもあるのだらうか？と自惚れ切つてゐる彼女が考へたのも無理のないところがあつた。といふのは、今井といふのが偶然彼女の姓だつたからだ。――

このパウリスタがひどく繁昌してゐるらしく見えたので、かういふ種類の投資の好きな大阪人は、早速眞似であちらにもこちらにも何々カフエーといふのが出來た。だが、場所の關係があるし、設備の點もあるし、それはまだカフエーの客といふ人種が今日ほど多くなかつたので、それらの群小カフエーは中々客足がつかなかつた。すると、それ等のカフエーの主人は聞きつたへて、僕を招待に來た。僕に來てもらつたら、僕の友達が大勢出入りするだらう、そしたら、僕等からは利益を得られなくても、店が賑かになつて、自然繁昌の元になるだらうと考へたものに違ひない。しかし、實は元祖のパウリスタでさへ、結局客は僕たちが主なものであつた證據に、一年後には外の經營者に讓つてしまつた位だから、他の僕たちに援助を求めたカフエーなどは間もなく店を閉ぢたものが多かつた。氣の毒なことだつた。大阪でも東京でもさうだが、カフエーの發達を考へて見るのに、さういふ草分けの時代があつて、それから一時影をひそめたやうにはやらなくなる時が來て、その後何年かしてか

ら今日のやうな隆盛を見るに至つたのである。その時分の僕などは一日朝から晩まで坐つてゐても、唯珈琲と紅茶を十杯から十五杯ばかり飲む切りで、外のものは殆ど食はずに過ごした。もつともその頃は珈琲でも紅茶でも、沸し器のまゝで持つて來たので、一人分二三杯あつたし、紅茶などは一度とると、後は湯ばかり貰つて、色が出なくなる迄飲んだものだ。

その初代のパウリスタが他の經營者に讓られると共に、前の時代の女給の中での主た、美人の女給たちは大方姿を消してしまつた。といふのは、彼女等をブルヂョアの友でなく、我々學生の友だと思つたのはあやまりで、後で聞くと、その二代目の經營者たち（株式組織だつた）の主なものが、みんなそれ〴〵籤を引くやうにして、（乾度價が安かつたらうから、）妾にしてしまつたといふのである。そのカフエーの持主が變つた初の時分、よく新しい株式會社の支配人格の連中だらう、四十がらみの、下品な、大阪風の實業家型の男たちが、帳場や女給の溜りのところへ來ては、ぶら〳〵と客や女給たちを物色するやうな目で見てゐた。彼等が多分以前の、ゐなくなつた女給たちの旦那になつたのだらう。でなければ他の者に先を越されたので、新しく探しに來てゐるのだらう、どうだあの恰好は、それに人相といひ、金持ちかは知らないが、まるで牛買か馬買ひかの市場にでも出入してゐる男のやうな風采ぢやないか、と我々學組の常連は憎しみと輕蔑の目で見返してやつた。國畫創作協會の野長瀬晩花君などもその時憤慨した一人だつた。

その時分から思ふと、今の女給諸君は餘程ハイカラになつたやうに思ふ。それはもつとも女給諸君だけがハイカラになつた譯ではなく、時勢と共に一般の女たちがハイカラになつたといふ方が適當だらうが、兎に角、女給といふ新しい階級を造つたことは確だ。現に我々小説家にしても、藝者を題材にするより女給の方が書きよくもなつたし、當り前になつてしまつた位だ。まつたく以前の女給と違つて、今のは生れながらの女給といつた風な感じがある。どうか、以前のやうに牛買ひや馬買ひ型の金持などの友にならないで、大いに若い新時代の青年の友になつてほしいものである。

一口にカツフエーといつてもいろ〳〵だし、本場の外國のカツフエーといふのがどんなものかさへ知らないが、僕は先にいつた初期のパウリスタのやうなカツフエーが一番好きである。つまりうまい珈琲と、うまいドーナツと、それから幾時間でも腰かけて居られる椅子と卓子、それだけで澤山である。美しい女給が居れば申分ないが、それはどちらでもいゝ。僕はその初期のパウリスタの出來た時分（これは東京の方のことである。）甚口に三

十錢ありさへすれば、友人の鍋井克之を尋ねて、彼と僕との電車賃を除いて、互に珈琲とドーナツ一皿の代十五錢づつ持つてゐることを確めると、實に二人で喜んで銀座に乘り出すのが常であつた。そして、十五錢で二時間から三時間位坐つてゐて、やがて電車に乘つて各々の下宿に引上げるのである。その時分の嬉しさは今でも昨日の經驗のやうに思ひ出すことが出來る。

　それから六七年後のことだ。僕が麹町の中坂の下宿にゐた頃、(その時分にはもうパウリスタには寄りつけなかつたし、又そこへ行く電車賃が惜しかつたので)僕は矢張り十五錢持つと、中坂から神樂阪まで歩いて行つて、山本カッフェーで二杯の珈琲と一皿のドーナツを食べに行くことに、同じ樂みを見出した。その頃は相手がなかつた。そして、七年前の學生時代と違つて、自活をしなければならなかつたか、而も殆ど無收入の極貧時代だつたので、その十五錢をひねり出すのに實にいろ〳〵な苦心をした。まつたくそれは人が女に入れ上げると同じ種類の熱心さで、その爲に僕は幾度友達から古雜誌や古本を貰つたり、借り放しにして賣りに行つたり、又行李の底を探しては浴衣や襯衣を質屋に運んだか知れない。だが、それだけの勞に十分報いられると思ふ程、あの山本の珈琲とドーナツを食ふことは、うまくて樂しかつた。

もつとも、山本カッフェーはその時分は出來たてゞ、今でも餘り整頓してゐないが、狹くて、ごた〳〵して居て、女給らしい女給も居ないし、殺風景な家だつた。孤兒院から呼んで來たやうな子供の男や女が、山出しの女中がするやうな仕方で皿やコップを運んで來るだけである。今でも多分その通りだらう。だが、先にもいつたやうに、こゝのドーナツは初期のパウリスタで食はしたのと同じやうなうまいドーナツを食はせることで、東京中に無比である。これも今でも多分その通りだらう。それにしても、うまい珈琲とうまいドーナツは、美しい女給の敵であるのだらうか。私の經驗ではこの二つのものが兩存してゐる家を見出さなかつた。

　僕が廣津と毎日三時間から五時間、時に依ると半日位も、カフェーの卓子で差向ひになつて暮したのは、この山本カフェーの時代の一年程後のことである。その時分も、僕たちは主に珈琲と菓子で過ごした。もつともこの頃は女給のゐる家を選んだし、少しづつ珈琲の外に飲食もするやうになつた。が、そんなに三時間も五時間も二人で坐つて何を話してゐたかといふと、大方文學の話ばかりだつた。文學の話と、文學者をそしることとだつた。これは最もカフェーに適當した樂みだと思ふ。熊澤蕃山が今日生きてゐたら、多分豆を煎る代りに、カフェーに出

入りしたことだらう。女給もよし。豆を煎ることもよし。まつたくカフエーは僕等のやうな酒を飲まぬものには、(飲むものにもだらうが)、いゝ所だと思ふ。

カフエーよ、益々榮えなさい。女給よ、益々奇麗になりなさい。

カフエーの女に對する哀感

小川未明

カフエーの女給が、白粉を濃く塗つた顏で客に對する時も、その眼の中にさびしい影の含まれてゐるのを私は、感ぜずにはゐられません。

彼女等は、かうして、いろ／＼の客に侍つて、機嫌を取らなければならぬのかと、私は、無產階級の娘を心に深く憫れまずにはゐられないのです。

もし、世間に、藝妓や、娼妓を、一圖に風俗を害する女達だといつて、擯斥するものがあるなら、なぜ、その人達は、かくの如き制度に對して反對し、また、彼女等を金によつて自由にする輩を憎まないのであらうか。すべてに於て、客を相手にする女達は、たゞ受動的な地位に置かれてゐるにすぎません。要するに、彼女達の家庭が貧しかつたがために、他の有產者の家庭にある娘達のやうに、上品であり堅實である生活の道が踏めなかつたのによるものです。

カフエーの女給はかうした、無產階級の娘達です。なかには、自からこの境遇に落ちて來たやうなものはあつても、現在はみな金のために働いてゐるのであります。こゝを門出として、この後、彼女等の身の上が、いかに轉々として行くべきかは、けだし心ある人をして、悲しましめずにはゐないでせう。「北は西比利亞、南はジヤバよ」といふ句のある、あのさすらひの唄を、彼女等が好んで、よくその唇から洩らすのを聞いた時は、唄そのものが、彼女等の運命をシムボライズしてゐるやうに思はれて、一種悲壯の感を覺えさせられるのでした。世界のどこに行つても至るところに、日本から流れて行つた女がゐ

て、異郷の酒場にいろ〳〵な人を相手として、荒んだ生活を送つてゐるのです。この女達にも、曾ては若やかな、人前に出るのを羞かしがつた時代があるにちがひありません。また、はじめのうちは、このあたりの町のカフエーにたま〳〵見るやうな、まだ少女心を失はない時代もあつたにちがひありません。

さう考へると、不幸な彼女等を、憫れまずにはゐられないのでした。今日の貨幣經濟制度の及ぶかぎり、彼女等の運命は、金によつて、左右され流浪しなければならぬと言はるべきです。

獨り、金の力によつて、いろ〳〵にその境遇が變らなければならぬのは、獨り、彼女等だけではないが、うら若い娘等だけに、殊に、哀愁が覺えられるのでした。

カフエーの女給は、これまでは、藝妓や、娼妓などと異つて、客を相手とする職業の中では、最も、意志の自由を認められてゐたので、近代的であるといふことが出來たのです。

もとより、比較的、人格を重んぜられ、また、意志の自由を認められるやうな、境遇に置かれるとしても、自から無節操であるがために、もしくは、金の誘惑によつて、救ひのない底の社會に陷入つて行くものに對しては、これをどうすることもできないのでした。

また、職業といつても、生産的のものではない。しかし、自分の勞働に對して、正當の報酬する要求をせずに、客の思召で金をもらふことは、彼女等を卑屈にし、墮落せしめた原因にちがひありません。そして、自然、その人格を下劣ならしめ、金次第にて、客に對する待遇を變へれば、親疎を異にする、かういふことは、誠實を害する。正當な職業としてといふことから遠ざかつて、享樂階級の附屬物の如くにしてしまつたことです。さもなくば、自からの賤性を恣まにして、好きな男に對する場合だけは眞實を盡すといふやうなことことが、いつしか、その職業の獨立性をすら危ふからしめんとしたのです。

かりに、彼女等の仕事が、客の煙草にマッチを擦つて、火を點ずるためであり、戲談の相手となるためであり、唄をうたふためであつても、職業たることにはちがひありません。(同じ意味に於て、鳥屋や、小料理屋の女中も、またさうであるが)正當に受くべき報酬を、チップ制に依らずに、一時間までは、幾何、一時間半までは、幾何、二時間までは、幾何といふ風に、あらかじめ受持の女の坐席を定めて置いて、その席に着いた客から、席料を取り、それをもつて原女の給金としたらば、正當の職業に從事しながら、客の顏色を覗はなければならぬやうな卑屈なことをしなくてすむからです。

入りしたことだらう。女給もよし。豆を煎ることもよし。まつたくカフエーは僕等のやうな酒を飲まぬものには、(飲むものにもだらうが)、いゝ所だと思ふ。

カフエーよ、益々榮えなさい。女給よ、益々奇麗になりたま

カフエーの女に對する哀感

小川未明

カフエーの女給が、白粉を濃く塗つた顏で客に對する時も、その眼の中にさびしい影の含まれてゐるのを私は、感ぜずにはゐられません。

彼女等は、かうして、いろ／＼の客に侍つて、機嫌を取らなければならぬのかと、私は、無産階級の娘を心に深く憫れまずにはゐられないのです。

もし、世間に、藝妓や、娼妓を、一概に風俗を害する女達だといつて、擯斥するものがあるなら、なぜ、その人達は、かくの如き制度に對して反對し、また、彼女等を金によつて自由にする策を惜まないのであらうか。すべてに於て、客を相手にする女達は、たゞ受動的な地位に置かれてゐるにすぎません。要するに、彼女達の家庭が貧しかつたがために、他の有産者の家庭にある娘達のやうに、上品であり堅實である生活の道が踏めなかつたのによるものです。

カフエーの女給はかうした、無産階級の娘達です。なかには、自からこの境遇に落ちて來たやうなものはあつても、現在はみな金のために働いてゐるのであります。こゝを門出として、この後、彼女等の身の上が、いかに轉々として行くべきかは、けだし心ある人をして、悲しましめずにはゐないでせう。

「北は西比利亞、南はジヤバよ」といふ句のある、あのさすらひの唄を、彼女等が好んで、よくその脣から洩らすのを聞いた時は、唄そのものが、彼女等の運命をシムボライズしてゐるやうに思はれて、一種悲壯の感を覺えさせられるのでした。世界のどこに行つても至るところに、日本から流れて行つた女がゐ

て、異郷の酒場にいろ〳〵な人を相手として、荒んだ生活を送つてゐるのです。この女達にも、曾ては若やかな、人前に出るのを羞かしがつた時代があるにちがひありません。また、はじめのうちは、このあたりの町のカフエーにたま〳〵見るやうな、まだ少女心を失はない時代もあつたにちがひありません。さう考へると、不幸な彼女等を、憫れまずにはゐられないのでした。今日の貨幣經濟制度の及ぶかぎり、彼女等の運命は、金によつて、左右され流浪しなければならぬと言はるべきです。

獨り、金の力によつて、いろ〳〵にその境遇が變らなければならぬのは、獨り、彼女等だけではないが、うら若い娘等だけに、殊に、哀愁が覺えられるのでした。

カフエーの女給は、これまでは、藝妓や、娼妓などと異つて、客を相手とする職業の中では、最も、意志の自由を認められてゐたので、近代的であるといふことが出來たのです。

もとより、比較的、人格を重んぜられ、また、意志の自由を認められるやうな、境遇に置かれるとしても、自から無節操であるがために、もしくは、金の誘惑によつて、救ひのない底の社會に陷入つて行くものに對しては、これをどうすることもできないのでした。

また、職業といつても、生産的のものではない。しかし、自分の勞働に對して、正當の報酬する要求をせずに、客の思召で金をもらふことは、彼女等を卑屈にし、墮落せしめた原因にちがひありません。そして、自然、その人格を下劣ならしめ、金次第にて、客に對する待遇を變へれば、親疎を異にする、かういふことは、誠實を害する。正當な職業としてといふことから遠ざかつて、享樂階級の附屬物の如くにしてしまつたことです。さもなくば、自からの野性を恣まにして、好きな男に對する場合だけは眞實を盡すといふやうなことことが、いつしか、その職業の獨立性をすら危ふからしめんとしたのです。

かりに、彼女等の仕事が、客の煙草にマッチを擂つて、火を點ずるためであり、戲談の相手となるためであり、唄をうたふためであつても、職業たることにはちがひありません。(同じ意味に於て、鳥屋や、小料理屋の女中も、またさうであるが)正當に受くべき報酬を、チップ制に依らずに、一時間までは、幾何、一時間半までは、幾何、一時間までは、幾何といふ風に、あらかじめ受持の女の坐席を定めて置いて、その席に着いた客から、席料を取り、それをもつて婦女の給金としたらば、正當の職業に從事しながら、客の顏色を覗はなければならぬやうな卑屈なことをしなくてすむからです。

今や、時勢は、必要に迫まられて、かうした階級の婦人達にも、職業組合が議されんとしてゐるのをきゝました。もし、これによつて、組合員の生活の上に、革新が期されたならば仕合です、そして、彼女等がよく團結をして、組合精神を重んじて、行動を一つにすることができたならば、社會的の誇りであるは勿論のこと、獨り經濟的に於てばかりでなく、道德的にも向上されることゝ考へてゐます。

この二つが、期待されることによつて、はじめて、彼女等は、全く、其時、享樂階級の附屬物から獨立した時であります。そして、無產階級の生活意識に目覺めた、つゝましやかな職業婦人となつた時であらうと思はれます。

カフエーの數は、どの巷にも約十數軒毎には見られるやうに、その數を增加し、從つて女給の數は、また夥しいと思はれるのです。けれど、近事は、會社や、銀行や、商店では女を使用するので、この方の人員は一層夥しく、女子の職業として遙かに、女給よりは、高尙のものに見られてゐます。また、この方は、月給制や、日給制のものが普通であるために、立派な職業の形をなしてゐます。そればかりでなく、智識の程度からいつても女學校を出たものが、多いがために、より近代的の色彩に富んでゐるやうであります。これに較べれば、カフエーの女が男達の眼を惹いたのも、すでに一時代前であつたやうにさへ思はれる。たとへば、丸ビルにつとめてゐる女給等が、一つの風俗を造り、文化的にも、やがて、そこから流行を世間へ生まんとしてゐるなども、まことにこのことを證するものであります。そして、カフエーの女給には、樣子にどことなく廢頽的のところが見らるゝけれど、所謂、街頭の會社や、商店に働く職業婦人には、一種、時代にふさはしい、淸新な美があるのを認めずにはゐられません。

しかしながら、カフエーの女給にのみ、貞操觀念がないとは言はれない。女店員の風儀も、やうやく亂れんとしてゐるやうだからです。原因は、同じく、いまだ完全に女子の獨立權が擁護されないからであるが、直接には金が、すべてに於て禍をするものと見るべきである。殊に、有閑階級の奢侈は、彼女等の風俗を亂しまた、有閑階級の子弟等の不道德は、彼女等の貞操を蹂躪せずには置かないからである。

この頃、學生の風紀の亂れたのも、その一端は、カフエーの女給等の罪に歸せんとしてゐます。或は、さうした幾つかの場合はあつたであらうが、それは枝葉の一現象に過ぎずして、その重なる原因は、反つて、ブルジョアが社會の健全性を傷つたことに歸せなければならない。ブルジョアの女達は、華美、放

縱、あらゆる虛飾を施して人目を惹かんとし、ブルジョアの男等は、一擲千金、倖射心を呼ぶやうな行爲をして、堅實なる勞働の貴さを知らしめず、金があり、閑があるまゝに、快を盡し、歡樂に日を送れるがためであります。

青年男女の墮落は、社會の責任に歸さなければならない。そして、哀れな、彼女等を責めることの酷たるを誤れりと言はなければならない。彼女等も同じく人間の子供であるがためです。

學生のカフエーに入り浸つて、身を誤るのも、一は、その責任は家庭にあり、一は、今日の教育及教育家が、人を造る上に於て、瞭然として、理想を有しないがためである。

今日の如く、家庭的にも、もしくは社會的にも慰籍を得る道を有たない青年等が、最も自由に異性と交際し、談笑することを得るカフエーに趣くのは、不思議はないことです。

たゞ、これをば防止するものは、獨り、青年自からが理想を有し、向上的の感激を有しなければならない。しかるに、今日の教育では、指示すべき理想の何たるかをさへ生徒等に、教へるには至らない狀態にあるのであります。

粗暴にあらざれば、柔弱の風が、一般の學生の傾向であることも、時勢の頽廢せるを示してゐる。しかし、これを法律によつて、取締らんとする前に、深くよつて來るところを考へなければならない。そして、根本的の對策を講ずるにあらざれば、効果のないことゝ考へられるのであります。

——六月一五日——

カフエーと學生

谷崎精二

私たちの學生時分にはカフエーと云ふ樣な物は殆ど市中に見當らなかつた。銀座のパウリスタと、台灣喫茶店は或ひは其の頃既にあつたか知れないが、はつきり覺えて居ない。但し普通の洋食店なら無論其の頃澤山にあつたし、其れからミルク、ホ

ルが方々にあつた。學生が散歩に出て休息する爲めにはミルク、ホールへはいる位なもので、牛乳と菓子以外、もつとサブスタンシヤルな食物を欲する場合は洋食店か、蕎麥屋へでも行くより仕樣が無かつた。

洋食店にはウエイトレスが居たが、ミルク、ホールには無論そんな者は居なかつた。(唯飯田町の北辰社のミルク、ホールには美しいウエイトレスが居て、學生が多勢やつて來ると云ふ評判だつたが、私は行つた事が無かつた。)牛乳は其の頃一合四錢で、牛乳一杯にカステラでも一つ二つ食べて出て來ればいゝので、無論チツプもいらなかつた。

十八世紀にイギリスでコツフイーハウスがはやり出した時、ロンドン市中で忽ちに二千軒からのコツフイーハウスが出來たと言ふ事だが、東京市中にも今其の位は屹度あるだらう。神保町に空家が出來ると皆古本屋になり、銀座通りに空家が出來ると皆カフエーとなる。』と云はれたものだが、其の神保町通りにさへ、震災後は本屋の領分を大分カフエーが冒す樣になつた。場末の町へ行つても、カフエーは煙草屋と同じ樣にさらに眼に着く。

先月號の文藝春秋に私のカフエーの思ひ出をちよいと書いたが、私がカフエー通ひを始めたのは廿五六歲の頃で、廣津和郎君と連立つてよく散歩に出かけては方々のカフエーの軒を潜つた。永遠の青年である廣津は今でもカフエー步きを續けて居るらしいが、いつの間にか中年者になつてしまつた私は、もうカフエーの空氣が何となく自分の氣持にそぐはなくなつて、近頃は餘り足を向けない。

紳士向と學生向と、大體に於いてカフエーをさう二つに分ける事が出來る樣に思ふ。銀座邊のカフエーは前者であり、本郷や早稻田附近のカフエーは後者である。無論此の二種のどつちに屬するか判明しないカフエーも澤山あるし、其れから土地の色彩に應じてそれ〲の特色を帶びた店もある。淺草の如きは場處の雰圍氣が最も著しくカフエーに影響を與へて居ると云つていゝ。

そして此の紳士向のカフエーと云つても、其等の紳士は大部分學生上りの人が多い樣だから、結局カフエーの最大得意は學生だと云はれるかも知れない。

學生が何故そんなに足繁くカフエーを訪れるか？

結局カフエーがあるから行くだけの事である。必要は發明の母なりと云ふ言葉があるが今日のカフエーは學生が發明したものでなく、カフエーの『發明』が逆に學生に『必要』と感じさせたまでゞある。弊害と云ふ點からのみ觀察したら無論學生の

カフエー通ひに弊害が無いとは云へまい。だがこれはカフエーに限つた事でなく、芝居、活動寫眞、其の他近代の都會生活の享樂設備にして弊害の絶對に伴はないと云ふ物は殆んど無いと云つてい〻。電車が出來た爲め都會人は足が弱くなつた。電燈が設けられた爲めに夜更け迄起きて居る癖がついた、凡そ文明の設備は一面に弊害を伴ふかも知れない。

私たちの學生時代に比して今日の都會の學生にはかなりさまざまの生活享樂の機關が惠まれて居る樣だが、それにしても彼等の日常生活が毎日仕事を持つて働く大人の生活に比してかなり自由で、責任のない物であるだけ、彼等は退屈で苦しめられる時間が多い事は確かである。都會は人を餘りに孤獨にさせる。そして青年に孤獨程堪へ難い物はないだらう。樂しい笑ひ聲、賑かな物音、さうした物の中に孤獨を忘れようと彼等が街上に出で、カフエーに入る。カフエーへ通ふ目的が一杯のコフイーや、一皿のアイスクリームにあるのでないのはわかりきつた事だ。

私がカフエーへ通つた頃も、行きつけのカフエーへ行つて誰か友達と會ひ、一言でも二言でも話をしたいと云ふのが第一の望みだつた。實際私は獨身者の時分、朝から晩迄、誰とも一言も口をきかない日があつた。そんな時、日がとつぷり暮れて書齋の窓から明るい街の火をぢつと見て居ると、譯のわからない淋しさが胸にこみ上げて來て、どうしても家を飛び出さずに居られなくなる。曾て廣津が一月に廿三回義太夫を聞きに行つたと云ふ話をしたが、私も其の頃月に十日位は淺草へ行つて活動寫眞を見て暮した。晩飯を食べると直ぐ家を飛び出す。そして電車へ乘る途中、近所の煙草屋で煙草を買はうとして、『敷島を一つ。』と云ひながら、それが朝から自分が口に出した最初の言葉だと思つたりした事もあつた。

だからカフエーへ行つても、いつもよく落合ふ知人の顏が一つも見られないと、どんなに物足りなく感ずるだらう。少し誇張して云へば世界の凡ての人から見捨てられた樣な氣さへする。紅茶を何杯も飲んで、もう五分、もう五分と、待ちながら到頭誰も來ないのですご〳〵歸つて行く時の淋しさは、私の樣な淋しがりやだけしか感じない氣持だらうか？

地方から出て來た學生が、下宿のまづい晩飯を食べた後で、一人ぼんやり部屋の中に閉ぢ籠つて居るのは隨分淋しいものに違ひない。暇があれば本ばかり讀んで居ると云ふのは無理な注文である。彼等が一杯のコフイーを啜りながら親しい友人と樂しく談笑する爲にカフエーへ出かけて行く事は、唯其れだけの

目的ならば決して咎むべきでない。

だがカフエーには年若な、美しい、(全部美しい譯ではなく、寧ろ醜い方が多いかも知れないが)ウエイトレスが居る。彼の女等と學生が接觸する事が學生のカフエー通ひの弊害として非難されるのであるらしい。

私は外國へ行つた事が無いので、外國のカフエーの實状を知らないが、あゝ云ふ女性の給仕人を置いて、一杯十錢の紅茶のお客に迄愛嬌を振り撒かせるのは日本のカフエーの特色かも知れない。おそらく何事にもよく氣がきく日本人が、カフエーのお客の多くが飲食よりも寧ろ樂しい談笑に氣分の休息乃至慰安を求める爲めに集まるのだと云ふ事を察して、孤獨なお客の爲めに樂しい談笑の相手として若い婦人を店に置く樣になつたのだらう。(チツプを澤山撒くと云ふのも、此のよく氣がきく、親切な日本人氣質の現はれと思はれる。)市内電車の女車掌は見た眼にもかなり不愉快なものだが、カフエーの女給仕は必ずしも不愉快な存在ではない。

カフエーで働く若い女はどう云ふ種類の者が多いか?

彼の女等が多く貧家の生れである事は確かだし、其の大部分がカフエーを訪れる男性と、永々にか、一時的にか同棲する樣になるのも事實らしい。だが其れだからと云つて彼の女等が悉く不品行で、男を誘惑する事を目的として居るとは斷言出來ない。勿論中にはさう云ふ事を直接の目的としてカフエーに勤めて居るプロスチイチユートに近い婦人も居るか知れないが、さうした女はカフエーから追ひ出されゝば又他の場所に現はれるだらう。彼の女等を求める青年もカフエー入りを禁ぜられゝば同じ樣に又他の場處に姿を見せるだらう。若しかうした種類の婦人の實状を知つて、而かも此の種の婦人だけを集めて店に置くカフエーがあつたなら其れは論外だが市内のカフエーでそんな店は餘りあるまいと信ずる。

最近私の知つて居る或る青年が、或るカフエーの女に戀して結婚を申込んだ。先方の女は其の青年の眞面目な氣持だけは信じる事が出來たらしいが、其れだけでは不安なので、誰か相當な人を連れて來て、其の人に青年の將來の行動を保證して貰へれば、其の申出を聞いてもいゝと云ふ返事をしたので其の青年から私は一緒に行つてくれる樣にと賴まれた事がある。私はこの青年の輕跳な氣質を知つて居たので、一緒に行く事を斷つたが、此の例を見てもカフエーの女が凡て不眞面目だとは斷定出來ないと思ふ。若し其れ彼の女等がカフエーへ出入する若い青年と屢々戀に落ちると云ふ事は、必ずしも非難され得ないかも

知れない。貧しい家に生れ、カフェー女の境遇に落ちた彼の女等が、樂しい結婚をして幸福な境遇へ浮び上らうとするのは極めて自然な望みなのだから。さうした望みは奬勵すべきでないと同樣に、又禁止すべきでもない。彼の女等も、青年も、正しい理性と情熱とを持てばいゝのだ。

お客が世間を知らない學生であり、給仕人が無垢の少女だつたら、カフェーはおそらく害毒を流さないで濟むだらう。中年の男と、世間ずれのした給仕女との集まるカフェーこそ、いろ〳〵の意味で醜聞を醸し易い。そして事實さうしたカフェーの方が世間に多くつて、其れが世間の年若い學生の父兄を寒心せしむるのかも知れない。前に話したカフェーの女に戀した、私の知つて居る青年と云ふのは、學校を中途で退學した、のらくら者の文學青年であつて、私はカフェーへ出入する凡ての學生が輕跳浮薄だとは信じない。(文學青年とカフェーとはつき物だが、それは文學青年が人一倍孤獨に敏感なのと、彼等が談笑好きである爲めらしい。)

私の知つて居る或る小さなカフェーに主人の姪に當る美しい少女が居た。主人は彼の女の一擧一動にいつも嚴重な監視を怠らず、店へ來る若いお客などが彼の女にからかつたりすると、苦りきつた顏を示した。或る時瀟洒たる洋服を纏うた若い二人連れの紳士が此のカフェーへ來て、少女に頻りに話しかけ、媚びの視線を送つて居た。すると主人は突然姪の名を呼びかけ、『奥へおはいり。』と鋭どい語調で叫んだので、少女はすご〳〵奥へ引込んでしまつた。そして二人の若い紳士は極り惡るげにこそ〳〵出て行つてしまつた。

丁度其の場に居合せた私は、私たちに對していつも愛想の好い主人が、姪の美しい少女にからかうお客に對してはそんなにも手嚴しい態度を執るのを案外に思つて眺めて居た。實際私が氣の毒になつた程、其の二人の男は消然としてカフェーを立ち去つた。

だが其れから暫くたつて、私の知人がやはり其のカフェーへ行つて居ると、みすぼらしい服裝をした一人の學生が微醺を帶びてやつて來て、一杯のソーダ水を飮み、少女の名を聞いて、(彼は始めて其のカフェーへ來たのらしかつた。)『さあ、握手しませう。』と云ひつゝ手を差出した。少女がはにかんで逃げようとすると、其の樣子を見て居た主人が、『折角さうおつしやるのだから握手しておあげ。』と笑ひながら勸めた。『有難う。』と快活に云ひながら青年は少女と握手して出て行つたと云ふ話を聞いた。お客がちよいと冗談を云つてさへ顏を顰める嚴格な主人が、よく少女に握手を許したものだと私は思つた。そして心よ

い感じにうたれた。其の青年の態度がそんなにも自然で、邪氣が無かつたに違ひない。

此の小さなエピソートからも、學生の方が所謂紳士よりももつと純な心の持主である事が察せられると思ふ。そして放縱な空氣の漲つたカフエーへ學生が出入するのは避くべきだが、一方學生の爲めに上品な、家庭の爐邊の樣な親しみを催させるカフエーが出來る事が望ましい。

世の父兄よ、徒らにカフエーを怖るゝ勿れ。カフエーに伴ふ位の弊害は、青年がこれから世に出るに當つて、隨處に見出されるものと覺悟しなければならない。カフエーで墮落し、カフエーで一生を棒に振る樣なたわいのない青年だつたら、如何に嚴重に教育したところで將來役に立ちさうもない。私は今日の多くの青年がもつと正しい理性と情熱とを持つて居る事を信ずる者である。

カフエの女給

長山秀雄

明治の末年、私たちが、少年情痴の夢にまかせて、爛醉して歩いてゐた時分までは、まだカフエと名のつくものは、わづかに銀座のライオンかプランタン位のものであつた。したがつて、女給も、まだ、現今のやうに社會的な存在にはなつてゐなかつた。

それが、大正の始から次第に增へて、殊にこの大震以來、殆んど、街といふ街にカフエの看板を見ない處はないと云ふ有樣である。いかにカフエが現代の人たちの時好に投じたかは、この事實によつて證明されてゐる譯である。

人間の生活は、これを文明史的にまとめてみると、一つの偉大な渦卷のやうな物である。原始の時代の生活は、云はゞ、渦卷の外邊のきはめてゆるやかな流れである。世が進み文化が爛熟するに從つて生活は渦卷の中心に近づく。即ち、次第次第に加速度によつて旋轉が烈しく早くなつてくる——現代は、まさ

に渦の中心に立つてゐるかとも思はれる位私たちの生活は眼まぐるしく動いてゐる。

見給へ、街上を走る自働車を、そして、その上に乘つてゐる紳士や勞働者を——彼等は殆んど生活の渦卷に醉つて、物に憑かれたやうに喘ぎ走つてゐるではないか。

無限の慾望、過勞、神經衰弱が、現代人の生活の全部であると云つても差支はない——現代人は全たく生活に引づられて疲れはてゝゐる。しかも、享樂を希ふ心は、餘裕のない生活とともに、ますます深刻になつてゐるのである。

珈琲一パイ、氷菓一皿で、街頭に電車を待つ間に女の巧笑をかち得るカフエの出現はけだし現代の人たちの要求を巧みに迎へたものと云ふべきである。

水茶屋、揚弓場に女を漁つた昔の若者たちは、何と云つても時間に餘裕があつた。それだけ、彼等は呑氣だつた。澁茶一パイで半日を駄洒落に暮らすところに彼等の生活があつたのであつた。

カフエに通ふ人たちを見るに、多くは學生である。でなければ、獨身の會社員、新聞雜誌記者官吏など、經濟的にあまり惠まれない生活をしてゐる人たちである。彼等は藝者遊びをする資力はなく、それかと云つて、赤電車で吉野橋まで行つて、吉原で越後なまりのメリンスの長襦袢をきた女工上りの華魁を買ふ時間と蠻勇のない連(てひ)である。

彼等の趣味から見ると、吉原はあまりに因襲的である。華魁はあまりに無教育である。明治の青年は、まだ、徳川時代の華やかな吉原の夢を抱いて華魁遊びをしたが、大正の現代、殊に地震後の吉原は、古の花街の夢を追ふには、あまりに殺風景である。

女の容姿、風俗に對する趣味は、時代とともに變化してやまない。昔は、細腰にして、雙眼が細長く、足の親指のそつた面長の美人が一般の男の趣味であつたが、今は肉置(ししおき)厚く二重瞼のパツチリ丸い豐頰の女が時代の標準美人である。

水髮の銀杏返しに黃揚の横櫛を自棄(やけ)にさした素足の伊達姿は、もはや現代の青年の心をそゝらない。雲髮に燒鏝をあて、尻下りの畫眉、こつてりとした厚化粧で日傘をかざす女こそ現代好みである。カフエの女給と、女事務員との風俗はけだし大正の女性を代表してゐる觀があるではないか。

カフエが全盛をきはめ、女給の風俗がますます濃艶になつてゆく傾向を見ると、私は、これこそ來るべき時代に、散娼制度が行はれなければならない前提のやうに思はれるのである。

救世軍、婦人矯風會の人々が、いかに街頭に叫んでも、現在

の經濟制度と社會制度が行はれる内は、決して廢娼は實行されないのであらう。

現代の青年男女の惱みは結婚難である。成程、時勢は移つた、男女の交際は以前からみると、餘程、自由になつたには違ひない。それと同時に生活が困難になつて來た。そして、家庭を持つ事は現在の日本では、三十二三歳以前では無理である。つまり學校を出て少くとも七八年は、獨身の生活をつゞけなければならない譯になるのである。

既に成熟したしかももつとも官能の鋭敏な青春時代の男性が、配偶者なしに暮らして行かなければならない―即ち彼等が異性を求めるためには、先づ娼婦に走しるのが一番近道である。

廢娼運動は即ち天下數千萬の獨身青年を性的飢渇におとし入れる譯である。

然らば女性はどうであるか。

女性もやはり同じ事である。男より性的にははるかに早く成熟する女性の多くが、經濟的事情と現在の社會の習慣で婚期を失してゐるのである。

結婚が出來ない位であるから、彼等はどうしても自分で食つて行かなければならない。女事務員や、女給が立派な社會的存在になつたのは、この爲めである。

苦悶の惱みと經濟的に虐げられた青春の女性は、無意識の内に、彼等の娼婦性を發揮する。言葉は少しばかり矯激であるが、現在の女事務員の一部の者と、カフエの女給とが、極端に娼婦的であるのは事實である。

この頃新聞でみると、カフエや丸ビルに巣喰ふ不良少年や不良少女狩が行はれ、ダンス場の取締りが嚴重になるとの事であるが、如何に法を以つて禁じても社會の大勢が、彼等をそこにおとし入れやうとしてゐる以上、決して行はれる氣づかひはないと私は思ふのである。

見給へ。近い將來に於て、銀座はピカデリイになり、深夜街上に娼婦の姿が隱見するやうになるであらう。その時こそ、徳川以來の傳統を保つた吉原が滅亡して、カフエの女給は娼婦の鑑札を政府から授けられるであらう。

現在のカフエの女給は、日本が散娼制度に移りゆく過渡期の産物である。

昔の日本人は娼婦を一種の藝術品としてみてゐた。松の位の太夫とたゝへて、實用よりもむしろ社會の裝飾として利用した。吉原は一面當時の華やかな社交場であつたのである。

娼婦は世が進むに從つて墮落した。

カフエの女給は決して、昔のやうに粋人たちの華奢風流な遊

びの相手ではない。彼等の将來はやがて街上の娼婦である。極端に云ふならば即ち生きた便所である。

カフェーの分科

豊島與志雄

「カフェーは街路の休息所であつてほしい。ぶらりぶらりと歩を運んでるうちに、ふと足を止めて腰を下す、さういふ安樂な場所であつてほしい。」

夏ならば、こんもりと茂つた木影、暑い空氣と埃との中に靜に落ちてる涼しい木影、自然と行人の足を止めさして、清涼な一杯の飲物を與へ、うつとりとした夢想を起させる、さういふ場所であつてほしい。冬ならば、風の當らない靜かな日向、片隅に赤々とした火が燃えてる物蔭、自然と行人の足を惹きつけて、身體を温め瞑想を誘ふ一杯の飲物を與へる、さういふ場所であつてほしい。そして夜遅く、寂靜まつた街路の一隅に、明るい燈火と歡待とで、歸り後れた行人の足を休ましめ、美しい色の一杯の液體で、その喉の渇きを醫さして、新たに談笑を催させる、さういふ場所であつてほしい。」

然るに東京のカフェーは、何かしら一種の妙な空氣を持つてゐて、「カフェーにはいる」といふ或るこだはつた心構へを客に起させる。道を行きながら、木影に立寄つたり焚火に近寄つたりする、さういふ自然な無關心さとは、よほど違つた心遣ひを客に起させる。

それは重に、女給のせいだと思はれる。

夏の木影、冬の日向、夜更けの燈火、さういふところにふと足を休める行人には、煩はしい蠅の群は禁物である。たゞ歡待の空氣だけで澤山である。一杯の飲物を取るにしても、それを差出してくれる白い手先だけで充分である。手先だけでは化物の様だといふならば たゞにこにこ微笑んでる顔だけで充分である。そこで、理想的なカフェーの女給を求めるならば、いつも笑顔を見せてくれる唖の女といふことになる。明るい燈火、白

い卓子、淡色の襟、そして、善良な微笑を顔にたゝへてゐる啞の女、それだけで、最も安樂な街路の休息所が出來上るではないか。

然し實際はそれと次第に遠ざかつてゆく。カフエーの女給の間には、或るドミモンデーヌ式の風潮がしみこんでゐる。彼女等はカフエーの中の空氣を、蠅のやうにかき亂す。ぺちやぺちやとよく饒舌る。ぢろぢろと流し目を使ふ。そして、娼婦式の冗談で客をあやなすことを、唯一の職務と心得てるかのやうである。何の結果も齎さないさういふ冗談口を煩さがつて、つんと澄して夢想に耽つてる客があれば、それを却つて野心家と見做したり野呂間と見做したりする。

勿論、たゞ微笑んでゐるだけの女給ばかりでは、カフエーの中は餘りに淋しいかも知れない。けれども、饒舌を求め、冗談口を求め、性的遊戲を求むる、さういふ人もしくはさういふ氣分にとつては、他にいくらも適當な場所がある。三味線の女もあれば窓の女もある。それが餘りに臆劫だといふならば、或る特殊なカフエーを、賑かな娯樂專門のカフエーを、拵へ出してもいゝだらう。街路の休息所たる凡てのカフエーの中に、蠅を飛び廻らせるには及ばない。

然しながら、身心ともに強健な、そして情意ともに貪慾な、多くの若い學生にとつては、街路の休息所などゝいふ老人ぢみた混亂的なカフエーは、必要でないかも知れない。蠅の群の中に身を投じて踊りはねることが、愉快でもあれば有效でもあるだらう。なぜかなれば、さういふ情意の運動が、彼等の心を爽快になすからであり、さういふ無結果の遊戲が、彼等にとつては一種の安全瓣となるからである。時には有結果となることもあらうけれど、それも三味線の女や窓の女を相手にするよりは、遙に安價であり遙に安全である。

そこで、カフエーの分科が肯定されてもよい。それはたゞに學生にとつてばかりではなく、一般のカフエー出入者にとつて便利である。人は常に一定の落付いた氣持でばかりゐられるものではない。時には無結果な遊戲を安價に欲することがある。さういふ時、さういふ專門の女給のあるカフエーがあれば、多くの人が便宜を得るわけだし、又、さういふ專門になつて初めて、無結果の遊戲が有結果の逸樂に堕する危險は、取除かれる筈である。

多くの客は、それから賢明な青年は、微笑の啞の女給がゐるカフエーに、散歩の足を靜に休めてゆくだらう。氣紛れの客は、それから過多の血液を持つてゐる青年は、蠅の羽音の騷々しいカフエーに、無結果な遊戲を樂しんでゆくだらう。カフエーも公然と堂々と分科するがよい。

何事も公然と堂々と爲されるがよい。



縁談窶

里見弴

最初の六號二段組の分は、本誌四月號に既載のものなるも、四月號を讀まざりし讀者の爲めと、著者の希望とにより、再びこゝに別組として錄することとなしぬ。讀者之を諒せよ。(編者しるす)

一

「小父さん」

子供からの馴れで、さう云つて阿野を呼びかける都留子の調子には、少しも不自然な感じはなかつた。心からの信頼が、それを覗ひ隠さうとさせたり、控え目にさせたりするやうな邪氣なしに、ぞんざいと云つてもいゝほどの露骨さで見え透いてゐた。

「小父さん、お酌してあげませう」

暫く話が杜切れてゐたあと、だしぬけにさう云つて、隅を切つた長方形の、平ペッたい急須のやうな、錫製の酒器を把りあげ、眞正面の席から身を乗り出して來て、その時都留子は、やつと晴々として微笑ひ顔を見せた。脣より、寧、ぢッと見詰めた大きな目もとで笑つてゐた。

日本のより、西洋のより、一番好きな老酒を、その、一合たつぷりはいる錫の容器で、一杯半

ほどあける間、すまして見てゐた娘が、話の杜切れ目とは云へ、急に酌をしやうと云ひ出したり、思ひもかけない烏晴の笑ひを見せられたりして、阿野は、(へーえ、都留ちやんでもね……)と云ふやうな氣持で、默つて支那燒きの盃を突き出して注がせた。

「少いのね」

珠を踏まへた唐獅子のちよッぽりを摘んで蓋をとり、なかを窺き込みながら、「あら、でももうたんとないわよ」

「なけれア、手をたゝいて、あとをさう云つといてくれりアいゝぢやアないか」

「いやだわ、あたし」

「何故、何がいやなのさ」

「あたし、手なんぞたゝいたことないわ」

お酌をしたことで、――と云ふより、さう思ひ立つた瞬間を境として、明かに娘の氣分は一變してゐた。雨に早く暮れた夕方、ぱッと電氣が來た時のやうに、急にどこもかも生々として來た。――阿野も、それにつれて、氣分を明るくしてゐた。氣分ばかりではなかつた。荷厄介にしてゐた思考の上にも、おかげで一道の光が落ちて來た。

……阿野は、その日、娘の母親である川島の未亡人勝子からの、またしても「都留子の緣談についていろ〳〵御相談申上げたく」の手紙に促されて、度々のことに、今ではもう一向氣乘りのしないのを、ほかにもちよつとした用事を兼ねて、不承不精ながら、態々湘南の住居から上京して來たのだつた。まつたく、それは、何遍目か、初の頃のは、そろ〳〵もう忘れかけるほど、出來かゝつては破れ、出來かゝつては破れした揚句だつたが、然しその度數の多さ、年月の永びきだけだつたら、別にさう(復かい!)と云ふやうな氣持で、おのづと眉根がより、聞かない先からくさ〳〵させられて了ふやうなこともなかつたのだらうけれども、この半年ばかりのうちに、續け樣に起つた三つ四つの話が、うまくいきかゝつては、急にまたひどく風向きが惡くなつたりして、結局一つ殘らずこはれて了つたのなどは、――十分察しはつくとしても、大部分は母なる人の、焦慮れば焦慮るほど氣迷ひが多くなり、神經質になりすぎて、ほんの一時の氣分に拘泥つて行つた結果に負ふところが多かつた。娘はどこまでも相談に逆ひないのだけれど、要するに肚の底には、女らしい頑迷さでちやんときまつて了つてから話を打ち切るまでの經緯に、いろ〳〵と尤千萬な理屈やら、纖細な心理の動きやら、洞察やら、不平やら、一通りも二通りもあつて、その胸のうちを洗ひ浚ひ氣持よく吐き出さうと云ふ時に、きまつて聞き役に撰まれる自分なのだ、と解つて來ては、いかに無職徒生の阿野でも、さう〳〵はいゝ顏ばかりもしてゐられなくなることがあつたのだ。

「然しまア、結局は當人の心掛次第さ」

はなのうちは、頻りにそれを云つてみた。が、母親一人の、假す

ざるほどの手元で、二重三重の箱に入れられて育つて來たやうな、その上、通つてゐた學校が、舊教の尼さんを校長に頂いてゐやうと云ふのだから、自然今もつて朝晩の祈禱を怠らないやうな、さういふおとなしやかな都留子にとつては、親の意思に逆つてまでも、といふほどの「當人の心持」なんぞ事實あらう筈もなかつたのだ。母親の心持の動く通りを、ごく内輪に、寧ろ微に、敷寫しになぞつてゐるやうな頼りなさだつた。そのくせ、最後の決定となると、母親は、逆に相手の武器を取り上げた恣で「第一には、當人もあんまり進んでゐなやうですし……」と云ふ言葉で、他人の阿野なぞには、二の句をつがせなかつた。結局、馬鹿のやうに、たゞフン〳〵云つて聞いてゐるか、さもなければ、「おゝアまア、貴方のいゝやうにすればいいぢやありませんか」とでも云つて、つッぷくれて歸つて來るよりほかには、どうにもあがきのつかない立場だつた。

けれども阿野は、一度も本氣で腹を立てたりしたことはなかつた。とゞの詰りは解つてゐながら、お愛嬌でもおべんちやらでもなく、手紙で云つてよこす相談にはすぐ返事を書くし、來てほしいと云はれゝば東京まで出向いても行くし、度々見合のやうな場合に立合つたこともあるし、――一つには、日暮しに困るほど暇だつたせいもあるが、持つて生れた親切氣に、ともすれば一時の腹立たしさなどは忘れて了ふ性だつたから、ぶつ〳〵呟くやうな氣持も、實は、それほど惡からと云ふわけではないのだつた。それに、川島とは、小學校時分からの舊い友達で、今年二十三になる都留子が、やつとよち〳〵步きかける頃、急性の盲腸炎で亡るまで、かれこれ二十年近い友情は、さう云ふ早い死によつて、寧ろ一層色濃くされてもゐた。無論死水もとつてやり、引き續いて葬式萬端の指圖から、都留子には一つ違ひの兄にあたる總領の貫一の敎育、時にはまた財政上の相談など、田島家のことゝなると、殆ど習慣的にも、わが身に引うけて世話をやく氣になつてゐた。

未亡人の脇子に對しても、結局の好意は捨てられなかつた。父親のないあと、幼少な三人の子供たちを一身に引うけて、二十年が間、まづ〳〵瑕瑾なく育てあげたほどだから、實際野性には逃ひないとしても、言語動作がいやにぎすついて、だん〳〵女學校の舍監じみて來るのなどは、阿野の好みから云へば、「いや、とてもやりきれねえ」とでも呟きたいところなのだが、然し舊い馴染で、性分の奥底の馬鹿正直や一徹や涙脆さも知つてゐるだけに、表に現はれたところばかりで、易くその氣になるやうなことはなかつた。今度の縁談についても、つゞまるところは、あまり自己本位な考へ方をするところから、たまには皮肉の一つも云つてやつたり、不愉快さうに押し默つて了つたりしたこともあるけれど、それもほんの一時の氣分で、大根の好意に變りはなかつた。あとで思へば、「いかにもあの人らしい」と云ふやうなことで、微笑ましく、時には涙ぐましくさへなつて、綺麗に忘れて了へた。また年齢から云つても、經歷

から云つても、さうあつていゝ筈の阿野だつた。明治初年からの、船具一切の大問屋に生れて、なんの某を落籍せたの、どこそこでどういふ大した催しをしたのと、そんな、これぞと目にたつやうな使ひ方はしなかつたけれど、それでゐてかれこれ百萬近い金子を、だらしもなく酒と女でなくして來たのだから、せめてはすなほに人の心持が讀めて、氣をゆつたりと落ちついてゐられでもしなければ、放蕩冥利にも盡きようと云ふものだつた。おまけに、それほどの放蕩の揚句には、大抵の人が陷らなければならな、筈のところからも、仕合と彼は救はれてゐた。先代の一方ならぬ愛顧をうけた番頭が、今時には珍らしい、正しく死を決しての諫言に、法律では兎も角も、事實上は現在の雇人から隱居を仰せ附かつた態で、業務はもとより、家計一切その男に任せ切つて、それ以來もう十年近い川介住居だつた。細君は、夙の昔に愛想をつかして、さつさとひまを取つて、故家へ歸つて了つたし、子供はなかつたし、一時は阿野もしよんぼりしてゐたが、何人でも手當り次第に囲つて置いた女たちの、それ〴〵利口に身の振り方をつけて行つたあとに、最後まで踏み止まつたお藤と云ふのが、いつからともなくづる〳〵べつたりに鎌倉の住居に一緒になつて、今では夫婦同樣に暮してゐた。水の手が切れたあとまで、まごついてゐたやうな女だけに、お藤は、さう云ふ堅い暮しには向いてゐた。一年二年と、阿野の氣持も、靜寂や簡素に馴れて、くすみ、錆びて來た。交際はうるさく、東京の街は目まぐるしく、酒も、晩酌の一本を持てあますほどの、昔、夢にも思ひ及ばなかつたやうな不思議なことになつて來て、それを今ではもう「不思議」とも感じなかつた。盛りの頃の、一晩の小遣にも足りない五百圓といふ金子が、月々店から届いて來るのを、多くも少くも思はずに、女中とも三人口の一家、たゞもう安穩に暮してゐた。――そんな風だつたから、自然、丁度成金の可厭味と對になる、あの假貧乏の萎縮や猜疑や負惜みなどにも陷らないで、くすみはすんだなりに、以前の寛濶が保たれてゐたのだ。と同時に、所謂苦勞人らしく、卑屈なまでに自分と云ふものを搾りへらしてもゐなかつた。まだ〳〵どこやらに若旦那氣が殘つてゐて、――つまり云へば、うつかり相手に吊り込まれて了ふやうな、尻の輕いところがないではなかつた……。

「然しね、お都留ちやんを見てゐると、なんだかから、可哀想になつて來て仕樣がないね……」

今日の午後も、亡友の書齋だつた二階の八疊間で、勝子と差向ひに、いろ〳〵と今度新たに起つて來た緣談の話最中、ふとこんなことを云ひ出したりした。

「何が？ どうして？」

「どうしてつて、貴方みたいに毎日ずうッと續けて見てゐたら氣がつかないかも知れないけれど、この頃……たつてもう一二年この方のことだけれど、お都留ちやんを見るたんびにさう思ふよ。――だ

ん〱から元氣がなくなつて　て……、この頃はまためつきり顏色も惡いし、痩せたし……」

「それア、貴方、年齡のせいよ」

「年齡のせい？　冗談いつちやアいけない。二十二三と云つたら、花で云へば眞つ盛り……」

「ですからさ、その盛りの過ぎないうちに、……一體云へば、普通よりもう三四年はおくれてゐるんですからね、それであたしも……」

「それア、おくれてるとも！　一體貴方があんまり考へすごすのがいけないんだよ。なんでも物事は、かうこじらせちまつちやア駄目だ。明けても暮れても緣談々々で、三年も四年もせ　通されてみなさい。どんなに快濶な娘だつても、いゝ加減痩せ　ちまはアね。年ごろの娘に緣談と來れア、ちよいと考へると猫に木天蓼だが、こいつが、存外素人考へかも知れないて」

「そんなに云ふほど、何も、弱　てやアしませんわ」

「弱つてますとも！　あんなに無邪氣な快濶な娘だつたのが……」

「ですからさ、それは、貴方、年齡の加減ですよ。いくら都留子がおてんばだつて、二十三にもなりやア、少しは貴方……」

「いゝえ、それアそれとして、あの衰弱は、また別ですよ。あれア全く緣談窶だね。一生の大事だと思やア尙更、うかつにどれがどうと、云へやアしないからね。……可哀想だよ、全くあれア可哀想ですよ。今日の容子を見て、あたしアつく〲氣の毒になつたね」

「だつて、結局は當人次第だつて云ふのが、前々からの貴方の持論ぢやありませんか。さうとすれば、どうしたつて當人の意思を纏めてみるよりほかに……」

「それア無論當人次第さ。親次第や他人次第でよからう筈はないにきまつてるけれど、そこはなんだよ……」

「そこはどうなんですよ」

「そこは、ほんとのことを云ふと、貴方が惡いんだよ。貴方があんまり突つ込んで考へすぎるから、當人の考へてみる餘地なんぞなくなつて了ふし……」

「だつて、それア親ですもの！　貴方なんぞ、子供をもつてみたことがないから……」

「それを云はれりやア一言もないんだが、……それアもう親としてどこまでも心配するのは當り前のことだし、また至極結構なことでもあるんだが、そこが中々むづかしいところでね……」

「えゝ、全くむづかしいわ」

「つまり、なんだア、露骨に云つちまへば、貴方のは、少し自分の考へを喋りすぎるんだよ。自分の考へは考として、出來るだけ當人には云つて聞かせない方がいゝと思ふね。さもないと、あゝ云ふおとなしい娘のことだから、知らず識らずの間に、すつかり貴方の考へ通りになつちまふんだからね。さうすれアつまり、當人次第と云ふじよう、矢ッ張り貴方次第になつちまふわけなんだから……」

「まア、なんてんでせう！ 貴方も隨分出鱈目ね！」
「えッどうしてさ」
「どうしてつて、さうぢやありませんか、……たつた今貴方は、あア云ふ年齡のいかない者に、一生の大事がさうはつきりきめられるものぢアない、それを無理にきめさせやうとするから拗るんだつて、さう仰有つたばかりぢアありませんか」
「然しそれア……」
「ですからあたしが、あの娘の參考にもと思つて……」
「ところがね、その參考つてやつがね、うまく參考だけですんでくれりア世話アないんだけれどね……」
「なんぼ都留子がぼんやりだつて、もうそれくらゐなことは、貴方……」
「いゝえさ、決してさう云ふつもりで云つたんぢやないが、……つまり考へと云ふやつが、考へとしてだけ話せるわけのもんぢアないんで、自然そこに話してゐる人の氣持がはいつて行くからね、そいつが大きいんですよ。今度の話には、馬鹿に阿母さんが乘り氣になつてゐるとか、それほどでもなささうだとか、先達までは乘り氣だつたがこの二三日あんまりよく思つてゐないらしいとか、そんな風に、貴方の氣持が、一々お都留ちやんの方へ映つて行くんだからね。考へとか參考とか云ふやうなものなら、それアまたお都留ちやんはお都留ちやんで、相應しつかりした見識をもつてるかも知れないけれど、阿母さんの氣持、と云ふことになつて來れば、これにやア手も足も出せまいからね。みすみす阿母さんが可厭がつてるところへ、自分から進んで行きたいとは、ちよつと云ひ出せまいからね」
「それぢア一體どうすればいゝつて云ふの？」
「さあね、……ところで、一體貴方は、御自分の時にはどうしたんだい」
「あたしなんぞは、今とは時代も違ふし、無論兩親の云ひなり放題になつちやつたんだわ」
「ぢアまア、矢つ張りその流儀でやつとくより仕方あるまいね。ほかにもまだいろいろ流儀はあるけれど、兎角人間てえやつは、自分のやつて來た方法が、一番間違ひないやうに思ひ込んでるもんでね、中々容易なこつちア他流へは變れないさ」
「ぢア、もしも貴方に娘さんがあつたとしたら、どう云ふ流儀で結婚させるつもり？」
「それアもう大した新しさだね。――絶對自由だ。自由戀愛、自由結婚！ 親爺は絶對放任主義さ」
「なアんて！ 實際になけれアどんな口でも利けるわね」
「いゝえ、全くだよ。自分の娘を自分で探し出せないやうな男や、自分の亭主を自分でつかまへて來られないやうな女ぢア、とてもこれからの世の中で、一人前の働きが出來ッこありアしないよ。早いためしがあたしだ。親爺任せで貰つた娘、自分からさつさとおん

出て行つちまうし……」

「お金の力でつかまへといた女たちは……」

「や、仰有る通り！……金の切目が縁の切れ目さ。……そこへ行くと貴方なんざア大出來の部だ」

「だつて、今更出て行かうにも、引取りてがないぢアありませんか。それとも、貴方にでもお願ひして置いたら、大金持の御隠居さんかなんか探して來てくださる？」

「ちげえねえ！ それよりいつそ新しく、若き燕なんざアどうです」

「えゝ、結構！ こつちは老いたる鴎かなんかでね」

それで笑ひ話になつて了つたのだが、阿野が、即席の造語で「縁談窶」と叫んだ都留子の陰翳には、實際しんみりした同情がもてた。結婚と云ふ、一生涯のうちで一番華やかな、晴がましい事實を前にして、若い娘が、まづ事の重大さに氣壓され、母親の氣持に影響されて、思考の自由を缺き、感情の潑溂を失つて、——おまけに、どれもこれも、次から次と破談になつて了ふのに、心持は益々消極的に、否定的に傾いて行くばかりで、少し大袈裟に云ふなら、仕舞には縁談で命をとられはしまいかと案じられるほど、身も心をも傷めつくしてゐるのが、哀にもいぢらしかつた。せめては、その誰にも云へないことを、こつちから氣輕く指摘してやつて、ほんとうにさうなの！ もうこの頃では、縁談と聞いたばかりでぞうツとするわ！」くらゐの本音を吐かせ、凝りきつた氣持を揉みほどしてやりたかつた。そこへ行くと、同じことでも、母親の態度や心配には、少しも同情がもてなかつた。この方には、どこかに享樂的な感じがあつた。今度こそ、今度こそ、と決定をあせつてゐる心の陰には、この永の年月つゞいて來た心配と、綺麗さつぱり手を切つて了ふ淋しさが、早くも朧げな脅威の姿を現して來てゐることも、思ひやるにさして難くはなかつた。「邪推すれば」と云ふ前置をつけて、憚りなく無禮な想像を働すなら、それは、寡婦の抑壓された性慾から來る、陰忍性の現れだとも、云つて云へないことはないくらゐだつた。——兎も角、母親には、苛立ちながら、心配しながら、それでどこかに樂しんでゐる氣持が見えた。全く反對に、娘は、寧ばふとしながら、そわそわすべき筈だと感じながら、それでだんだん氣が滅入るばかりだ、といふ風だつた。——その點に關する考察が、積り積つて來て、今日と云ふ今日は、半ば世を捨てた氣持の阿野も、柄になく、義憤めいた胸の熱さを抑へかねた。笑ひながらも、冗談口を叩きながらも、幾度となくそこへ觸れて行かうと試みたが、然し、灸所を抑へて、身動きのならないやうにして置いて、その上でかれこれ云ふとなれば、無論勝子は、かんかんに怒つて了ふに違ひなかつた。さうかと云つて、遠卷きに寄せて行くのでは、鰻にぬめりを與へた神様が、女に授け給ふた自衞本能で、閃轉洒脱・無碍自在な没論理を揮ひ、辯舌さはやかに、うまくぬるりとぬけられて了ふのがおちだつた。それでも、幾度かさう云ふ失敗を

「まア、なんてんでせう！　貴方も隨分出鱈目ね！」

「えゝ、どうしてさ」

「どうしてつて、さうぢやありませんか、……たつた今貴方は、ああ云ふ年齢のいかない者に、一生の大事がさうはつきりきめられるものぢアない、それを無理にきめさせやうとするから捩るんだつて、さう仰有つたばかりぢアありませんか」

「然しそれア……」

「ですからあたしが、あの娘の參考にもと思つて……」

「ところがね、その參考つてやつがね、うまく參考だけですんでくれりア世話アないんだけれどね……」

「なんぼ都留子がぼんやりだつて、もうそれくらゐなことは、貴方……」

「いゝえさ、決してさう云ふつもりで云つたんぢやないが、……つまり考へと云ふやつが、考へとしてだけ話せるわけのもんぢアないんで、自然そこに話してゐる人の氣持がはいつて行くからね、そいつが大きいんですよ。今度の話には、馬鹿に阿母さんが乘り氣になつてゐるとか、それほどでもなささうだとか、先達までは乘り氣だつたがこの二三日あんまりよく思つてゐないらしいとか、そんな風に、貴方の氣持が、一々お都留ちやんの方へ映つて行くんだからね。考へとか參考とか云ふやうなものなら、それアまたお都留ちやんはお都留ちやんで、相應しつかりした見識をもつてるかも知れないけれど、阿母さんの氣持、と云ふことになつて來れば、これに手も足も出せまいからね。みすみす阿母さんが可厭がつてるところへ、自分から進んで行きたいとは、ちよつと云ひ出せまいからね」

「それぢア一體どうすればいゝつて云ふの？」

「さあね、……ところで、一體貴方は、御自分の時にはどうしたんだい」

「あたしなんぞは、今とは時代も違ふし、無論兩親の云ひなり放題になつちやつたんだわ」

「ぢアまア、矢つ張りその流儀でやつとくより仕方あるまいね。ほかにもまだいろいろ流儀はあるけれど、兎角人間てえやつは、自分のやつて來た方法が、一番間違ひないやうに思ひ込んでるもんでね、中々容易なこつちア他流へは變れないさ」

「ぢア、もしも貴方に娘さんがあつたとしたら、どう云ふ流儀で結婚させるつもり？」

「それアもう大した新しさだね。――絶對自由だ。自由戀愛、自由結婚！　細君は絶對放任主義さ」

「なアんて！　實際になけれアどんな口でも利けるわね」

「いゝえ、全くだよ。自分の嬶を自分で探し出せないやうな男や、自分の亭主を自分でつかまへて來られないやうな女ぢア、とてもこれからの世の中で、一人前の働きが出來ッこありアしないよ。早いためしがあたしだ。親爺任せで貰つた嬶が、自分からさつさとおん

出て行つちまうし……」

「お金の力でつかまへといた女たちは……」

「や、仰有る通り！……金の切目が緣の切れ目さ。……そこへ行くと貴方なんざア大出來の部だ」

「だつて、今更出て行かうにも、引取りてがないぢやありませんか。それとも、貴方にでもお願ひして置いたら、大金持の御隱居さんかなんか探して來てくださる？」

「ちげえねえ！ それよりいつそ新しく、若き燕なんざアどうです」

「えゝ、結構！ こつちは老いたる鴎かなんかでね」

それで笑ひ話になつて了つたのだが、阿野が、即席の造語で「緣談宴」と叫んだ都留子の陰翳には、實際しんみりした同情がもてた。結婚と云ふ、一生涯のうちで一番華やかな、晴がましい事實を前にして、若い娘が、まづ事の重大さに氣壓され、母親の氣持に影響されて、思考の自由を缺き、感情の潑溂を失つて、——おまけに、どれもこれも、次から次と破談になつて了ふのに、心持は益々消極的に、否定的に傾いて行くばかりで、少し大袈裟に云ふなら、仕舞には緣談で命をとられはしまいかと案じられるほど、身をも心をも傷めつくしてゐるのが、哀にもいぢらしかつた。せめては、その誰にも云へないことを、こつちから氣輕く指摘してやつて、「ほんとうにさうなの！ もうこの頃では、緣談と聞いたばかりでぞうツとするわ！」くらゐの本音を吐かせ、凝りきつた氣持を揉みほごしてやりたかつた。そこへ行くと、同じことでも、母親の焦慮や心配には、少しも同情がもてなかつた。この方には、どこかに享樂的な感じがあつた。今度こそ、今度こそ、と決定をあせつてゐる心の陰には、この永の年月つゞいて來た心配と、綺麗さつぱり手を切つて了ふ淋しさが、早くも朧げな脅威の姿を現して來てゐることも、思ひやるにさして難くはなかつた。「邪推すれば」と云ふ前置をつけて、憚りなく無禮な想像を働すなら、それは、寡婦の仰壓された性慾から來る、慘忍性の現れだとも、云つて云へないことはないくらゐだつた。——兎も角、母親には、苛立ちながら、心配しながら、それでどこかに樂しんでゐる氣持が見えた。全く反對に、娘は、喜ばふとしながら、そわ／＼すべき筈だと感じながら、それでだん／＼氣が滅入るばかりだ、といふ風だつた。——その點に關する考察が、積り積つて來て、今日と云ふ今日は、半ば世を捨てた氣持の阿野も、柄になく、義憤めいた胸の熱さを抑へかねた。笑ひながらも、冗談口を叩きながらも、幾度となくそこへ觸れて行かうと試みたが、然し、急所を抑へて、身動きのならないやうにして問いて、その上でかれこれ云ふとなれば、無論勝子は、かん／＼に怒つて了ふに違ひなかつた。さうかと云つて、遠卷きに寄せて行くのでは、鰻にぬめりを與へた神様が、女に授け給ふた自衛本能で、圓轉滑脫・無碍自在な没論理を揮ひ、辯舌さはやかに、うまくぬるりとぬけられて了ふのがおちだつた。それでも、幾度かさう云ふ失敗を

重ねた揚句、たうとう都留子の陰鬱と衰弱だけは是認させることが出來た。――と、思ふと、すぐもう話は、思ひもかけない方角へ逸(そ)れて行つて、

「いえね、それについても、實は、貴方に御相談ねがはふと思つてたことがあるんですがね」

と、未亡人は一膝のり出し、俄に聲をひそめて、「まア、萬が一そんなこともあるまいとは思ふんですけれど、あゝしてこの頃すつかり元氣がなくなつて了つたところから、ひよいとわたしの胸に浮んで來たことなんですがね、――なんかから、自分一人で考へ込んでるやうなことでもあるんぢアないでせうか」

「と云ふと、つまり、なんですか、惚れた男でも……」

「えゝ、まアさうですね、……もと〳〵あゝ云ふ晩熟(おくて)の方ですから、まさか學校へ通つてゐた時分には、そんな氣もなかつたらうと思ふんですし、それから後(ご)は、たまさかどつかへ出かけるつたつて、わたしか兄貴殿か、……まアめつたに一人で出してやつたことはありませんから……」

いつまでも都留子が、子供のやうに思はれてならない阿野としては、ついに一度そんな疑ひをもつたこともなかつたのだけれど、もの〳〵しげに聲をひそめたり、どこまでも身贔負な考へ方をする母親に對しても、一口に「そんな馬鹿なこと！」とは云ひ消したくなかつた。他人の口からそれを云はせて、自分の安心を堅めたい意圖が、露骨に見え透いてゐるだけに、それまで一度も思ひ浮べたことのない事實の方へ、却つて、一足飛びに突きやられた態(かたち)だつた。

「さアねえ……」

「と云つたところで、勿論、何も疑はしい事實なんぞはないんですけれど、たゞあんまりしよんぼりしてゐますからね」

「それアまア、あたしも、大抵大丈夫だらうとは思ふけれど、こればかりは、いくらはたから嚴しくしたつて、――よしんば貴方が、つきッきりにそばにくつついてゐたつて、見る目かぐ鼻の取締りまではつかないんだから、惚れたとなれア遠慮なく惚れるでせうがね……」

「それだつて、どこの誰それとも判らない人なら……」

「いや、判つてる場合だつていくもあるでせう。昔のお姫様ぢアあるまいし、お輿(こし)の簾ごしに見初めるばかりが見初とは限らないんだから」

「それアさうだけれど、うちなんぞぢア、めつたに若い男が出這入りするやうなこともないんだし……」

「貴一の友達だつて遊びに來るでせう」

「あの兄貴殿と來たら、貴方も御承知の通りの變人で……」

「兄さんのお友達……なんて、小說にだつてよくある筋ですぜ。それに第一なんだア、今時の娘さんたちは、西洋の活動役者、――誰だかシイツだかの上に映つてる、それこそほんとうの幻(まぼろし)みたいなも

のにも惚れるつて云ふし、さつかと思ふと、恐多くも雲井の上の御方をお見初め申して、昨年の×××當時なんぞは、本國に亘つて數十萬の失戀者を出したつて云ふくらゐだから……」

「冗談は冗談として、ほんとにどうでせうね」

「それアあたしンだつて判りアしないやね。そんな無理な……」

「いゝえ、それアさうだけれど、一度貴方から、それとなく訊いてみて頂いたらどんなもんでせう。却つてまた、藪をつゝ突いて蛇を出すやうなことになつても困ると思つてるんですけど……」

「おん婆さんの役だね？　だけど、あたしだと、男はよし、ぐッと若く見えるから、はたからぢア、お尻でのの字を描きながら、娘の方で口説いてるとことしか見えまい。そいつが辛いて」

「まア呆れた！　ほんとに貴方は、いつまで經つても馬鹿ね」

「年齢をくふたんびに利口になるもんなら、貴方なんぞもういゝ加減……」

「うるさい人ね！　いゝわ、なんでもさうして茶化して了ふんなら、もう決して相談なんぞ頼まないから」

「たすかる！」

そんなことで、然し結局阿野は、その「おん婆役」を引きうけ、うちでも揃からうと云ふので、散歩を名として、夕方から、都留子をおもてへつれだしたわけだつた。

それは、三月にはいつて間もなくだつた、午ごろ、阿野が新橋におりる時分から吹きだして、麻布市兵衛町の高臺にある田島の二階では、硝子戸の響で、どうかすると相手の言葉も聞き消ふほどの南々風になつたやつが、いゝ按配に、出かける頃にはぱッたりと凪いで、塵を吹き拂はれたあとの空が馬鹿に美しく、氣温も穏かに、散歩にはもつて來いの夕方になつてゐた。

「あゝあ、あゝ！」

さう云ふ氣持のいゝおもてへ出て行つてみて、却つて阿野は、あたまとも體とも云へない勞れに氣がついた。兩肘を折り曲げ、うんと胸を開くやうに空を振り仰いで、聲に出して大きな溜息をついたりした。

「夕空の色なんぞが、もうどことなく春めいて來たね」

「えゝ、これからだん／＼鎌倉はよくなりますわね。もうぢき摘草でせう？」

「さう／＼、摘草なんてことがあつたね。もうちつと暖になつたら、一遍みんなで出かけておいでな。あつちも、地震後はすつかり汚くなつちまつたがね」

「矢つ張り、どこもかもバラックなんでせうね」

「街はもと／＼汚いんだから、新しく建て變つて、却つていゝくらゐなもんだけれど、木や草がね、地震後急に埃ッぽくなつたやうな氣がするよ。山なんぞ見ても、あつちこつち禿だらけでね」

「さうですかね」

「でも、東京よりはまだましだよ。ほんとに遊びにおいでな」

止むを得ない急ぎの用事で、勝子は二三度尋ねて來たことがあつたけれど、息子や娘には、たゞの一度でも阿野のうちへは寄りつかせなかつた。無論それは、性の知れない女が一緒に往んでゐるからで、例の賢母式教育法から出てゐることゝは知れてゐたが、別に苦むほどのことではなし、こつちからも、ついに一度遊びに來いと誘つたりしたためしはなかつたのだけれど、ふとした調子で、なんの拘泥もなく、無論お世辭でもなく、すら／＼とそんな言葉が出て了つた。

「えゝ」

頸の上まで、毛糸の襟卷を掻き合せながら、娘は、反跳のない、曖昧な返事をした。

「女は、お嫁に行つて、子供でも出來ちまふと、なんにも出來なくなるから、お前さんなんぞ、今のうちに、摘草でもなんでも、せい／＼したいことはして置くんだね」

「えゝ」

相變らずの返事だつた。尤も、氣がついてみれば、今時の娘が、摘草なんぞ、何がしたいことなもんか、と我ながらその迂濶さ加減が可笑しかつた。それから延いて、もう一つ心に浮んだのは、鎌倉の春を思ふと同時に、すぐ摘草を云々したこの娘も、よつぽどおくれてゐる、全く今時には珍しいねんねえだ、と云ふやうなことだつた。

「一體お都留ちやんは、どんなことが好きなんだい。阿母さんがあゝ云ふ風だから、芝居や活動なんぞ、めつたに見せて貰へないんだらうね」

「えゝ、三遍かしら、四遍かしら、……數へるほどしかつれてつて貰つたことないわ。……でもね、あたし、さう見てみたいとも思はないの」

「へえ、そいつは珍しいね。女の好きなものツてえば、芝居、蒟蒻、蛸、芋、南瓜つて、昔から大抵相場がきまつたもんだがね」

云ひきらないうちに、都留子は、顏半分襟卷のなかに埋めて、くツくと笑ひ出した。二三歩行くと、立止つて了つて、腰をかゞめ、膝をもんで可笑しがつた。

「なアんだい」

阿野も足をとめ、微笑ひ顏を振り向けて、「何がそんなに可笑しいんだよ」

「な、な、なんですつて？」

こみ上げて來る笑ひに遮られながら、「も、も、もう一度云つて見て頂戴」

「芝居、蒟蒻、蛸、芋、南瓜……かい？」

それでまた新たに笑ひ崩れたが、やつと、帶の上から横腹を叩き叩き歩き出したと思ふと、もう一度ぷッと噴き出して、

「なんですつて？　芝居、芋、鮒……？」
「いゝえ、芝居、蒟蒻だよ、芝居、蒟蒻、鮒、芋、南瓜さ」
「あら、さうかしら、あたし、お芋なんぞ大嫌ひだわ」
「さうかね。然し、なにしても、女つてものは、よつぽど食ひ意地が張つてゐるんだね。それだけの中で、食べられないものつたら、芝居ひとつツきりぢやないか」
「ほんとね。でも、それア昔の女だからよ」
「ぢア、今の女はなんだい」
「さうねえ、――テニス、編物……」
「なんだ、體裁のいゝことばかり云つてるぜ！」
　ところが、ぶら〳〵虎の門まで歩いて出て、阿野が好物の支那料理を食べやうと云ふことになつて、そこの、甚く冷たい食卓に差向ひに腰を卸してから、こゝ十日ばかりのうちに、馬鹿に進みかけてゐる縁談の方へ、話の筋道が向いて行くと、人が變つたやうに、忽ちまた都留子の快濶が失はれて了つた。伏目でゐるとか、そつぽを向くとか、始終、少しも阿野へは目をくれずに、「えゝ」と「いゝえ」を微に呟くばかりで、折角の御馳走にも、碌すツぽ箸をつけやうとはしなかつた。それは、幾度観察し直してみても、決して昔風の

合點やきまり悪さからではなかつた。今迄のがうまくいつて、いよ〳〵話がきまつたとしたところで、別だん嬉しくもないし、大抵は、またいつものでんで、途中でこはれて了ふんだ、そんな風に、たかをくゝつて、少しの希望も興味もないばかりか、一度々々頑れ幾りの感じを強められて行く苛立や屈辱で、もうその話は一切聞きたくない、とでも云ひたげな、少し言葉を強めれば、不貞腐れた態度さへも仄くのだつた。それでも、いつものやうに、母親の前だと、まだいくらか遠慮もあるのだらうけれど、なアに、阿野一人なら構ふもんか、の氣持か、今夜はそれが、殊にはなはだしかつた。
　引づり込まれて、阿野も、陰氣な、重ッ苦しい氣分になり、結婚とか、結婚生活とか云ふものに對して、懐疑的な、寧ろ虚無的な思索に耽りながら、機械的に、時折盃を脣へ持つて行くばかりで、やゝ暫く話が杜切れてゐたのだが、そこへ、突然「小父さん、お酌してあげませう」だつた。さうして、雨に早く暮れた夕方、ぱツと電氣がついた時のやうに、急にどこからどこまで生々と、華かに明るい娘の笑顔を、眼前咫尺の間に見出したのだつた。
（さうだ〳〵、それでこそ嫁入前の娘だ！）

阿野には、その晴々しさが馬鹿に嬉しかつた。同情は同情として、好みから、陰氣臭くじめ〳〵したことや、あんまり理屈ツぽくこねくり廻すやうなことは、眞ツ平御免と云ひたい方の性分だつたから、その點からも、年が年ぢう緣談々々で、それぱかりを苦に病んでゐるやうな母親の態度がいかにも馬鹿らしく思へてならなかつたところへ、娘のさうした明るい笑顏を見せられたので、これでどうやら娘を、そのあり形の姿に見出したやうに思へたのだ。母親の惡い影響のもとから、強て明るみに引つ張り出せたやうな氣がしたのだ。

（ざまアみろい！　嫁入前の娘なんて、そんなもんぢアないんだから！）

遠くにゐる母親の方へ、肚のなかで、そんな惡態を投げつけてやりたいやうな、やつと溜飲のさがつた氣持だつた。

その嬉しまぎれから、

「どうだい、お都留ちやん」

と、顏ぢう笑み皺めて、酒器の鉉を把ると、いきなり娘の鼻のさきへ突きつけるやうにして、「お前さんも一杯お飲み！　なアに、構ふことがあるもんかね。お前さんとこのお袋なんぞ……、あれアまア寄宿舍の舍監みたいな婆さんだから、あんなもんの云ふことを、一々さう眞正直に聽いてたひにやア、人間、見てるまに凋びちまうばかりだ。さア、一杯飲んでごらん」

「可厭な小父さんねえ！」

顎を引き、眼を可怕らしくして、娘は、窘めよ！と云ふ心持に睨め据ゑたが、然しその効果は、却つて相手を、それとは全く反對の方角へ押しやるやうなものだつた。

「何が可厭なもんか。……そら、そこにある氷砂糖を入れて、溶して飲むんだから、甘くつておいしいよ。一杯やつて

ごらんな」

「嘘ばッかり」

「嘘なもんかね。態々そのために出してある氷砂糖ぢアないか」

「だつて、小父さんは、先刻ツから一つも入れやアしなかつたぢアないの？」

「それア、小父さんは、甘いのが嫌ひだからさ。お前さんは……」

「わたし、これだけ頂かう」

半透明な結晶體を、ひよいと摘みあげて、擲り込むやうに口へ入れた。

「馬鹿だね、こんなうまいものを……」

阿野も、諦めて、手酌で自分の盃を滿して銚子を置いたが、そのさばき方には、內心すくなからず感服させられて了つた。堅ツ苦しく、開き直つて斷りでもすることか、相手を少しもてらさずに、うまくひよいと躱した手際は、――無論、手際と呼ばれるほど、意識的なり、或は練磨的な感じのものではなかつたけれど、――その輕さが、遲鈍なうまれでは、十年茶屋奉公をした揚句でも、易くは出せない味に行つてゐたのに、（へーえ、都留ちやんも、なか〳〵これで才女なんだなア）と云ふやうな感慨を喚び起され、思はず識らず改めて顏がうちまもられた。――楕圓形に口をあけて、肉の薄い頰を一層細長くし、頸の下をぷくりとふくらませて、すまして舌の上で氷砂糖を弄んでゐる。齒に觸れて、カチヤ〳〵と音がする。……やゝ褐味を帶びた細い毛を、無雜作な束髮にまるめあげたのが、自然の癖で、前髮に緩い波がうつて、色つやの惡い額に亂れかゝつてゐる按配と云ひ、なんとなく阿野は、大患の快復期に、三日目、五日目と、だん〳〵食べものゝ數を許されて行く時分に、今日からドロツプくらゐしやぶつてもよからうと云はれて、その最初の

一つを口に入れた娘の子でも眺めてゐる父親の、同じ可愛いゝと云ふうちにも、いとしらしさの深い氣持が、――自分には子供のコの字も覺えはないのだけれど、靜に、と云ふよりはへんに寂しく、ぢツと胸に滲み亘つて來た。

（……成程なア……）

明けても暮れても縁談々々で騷ぎ廻つてゐながら、いざとなると、ひどく引ツ込み思案になり、意地惡根性か、吝嗇(けち)ン坊の物惜みにも似通ふほどの頑迷さで、なんのかのと相手に難くせをつけては破談にして了ふ母親の氣持も、それにつれて、なんとなく頷けるやうな氣がして來た。すまし込んで、口のなかで氷砂糖をカチャつかせてゐるやうな子を、嫁にやると云ふことが、いかにも、ちよいと無慘な感じがしないでもなかつた。

「あゝ、氣がつかなかつたが、サイダアかなんか、飲みものを貰つてあげるんだつたね」

「いゝえ、要らないわ」

「なんにも手をつけないぢアないか。支那料理、嫌ひなのかい？」

「でも、さうおかづばかり食べられやアしないわ」

「あゝ、さうか！」

馬鹿々々しいほど感に堪へたうけ答へをして、「成程！ 酒を飲まないと、おかづばかりぢやうまくないんだねヽ……そいつアどうもお氣の毒だつたね。遠慮してゐずに、早くさう云やアいゝのに……」

「でも、いゝわ、待つてるわ」

「待つてゐられちア、こつちの酒に味がなくなるよ」

「いゝぢアないの？ ひとのことたんと構はずに、御飯めしあがれなね」

「その間、氷砂糖をしやぶりながら見物してゐてくれるかね」

「あら。どうして？　これ、食べちア可笑しいの？」

「何も可笑しいこたアないさ。昔は、これでも、なか／＼贅澤なお菓子だつたんだぜ。キヤラメルやドロツプの親爺が金平糖なら、こいつはそのまた先代ぐらゐなところかな。お前さんなんぞ、金平糖の味だつて、碌すツぽ知つてやアしまい？」

「知つてるわ。今だつて、駄菓子屋へ行けば、硝子の瓶に入れて賣つてるわよ」

「あゝ、あんな細いやつぢやアないんだ。もつと、……さうさな、丁度小指の先ほどあつて、それで、あんな、色なんぞつけてありやしなかつた。そいつをね、振出しと云つて、口の大さが、丁度一つだけ轉げ出るくらゐに出來た瀬戸の容器なんぞに入れてね、逆にカチヤ／＼振り出しちやア食べるんだ。なかにやア、白磁の素張しい陶器に、臘塗の蓋なんぞついた、それア上品な振出しがあつたもんだよ。今ぢア古道具屋を探したつて、容易なこツちア手にはいらないかも知れないが、つまりまアそれくらゐ大切にして食べたもんさ。氷砂糖となると、喘息の藥だなんて、有難さうに煎じて飲んだりしたもんだ。どうだい、いはれを聞けば、なか／＼これで大した御馳走だらう？」

「一體小父さんは幾つなの？」

「だしぬけにそんな失禮なことを訊くやつがあるもんか。西洋ではね……」

「知つてゝよ、そんなこと！　……うちの阿父様とおない年ぐらゐなんでせう？」

「まアそんなところかね」

「さうすると、明治三年？　四年？　怙からうちの阿父様は、三年で、午の歳だつたわ」

「いや、小父さんはもつとずつと若いさ。だけど、そんなことより、そのうち一度、ほんとに鎌倉へ遊びにおいでな。お前ンとこの舎監婆さんはね、お前さんたちをうちへよこすと、碌なことは見習つて來ないと思ふもんだから、それで一度だつて遊びによこしてくれないんだけれど、なアに、決してそんなこたアないよ。いろ〳〵とまたなんだア……」

「金平糖のお講釋？」

「冗談いつちやいけない。人の一生と云ふことについてだね、すこぶる有益な……」

「小父さん……」

話なかばに、ひよいと呼びかけて置いて、都留子は、それきりふと口を噤んで了つたが、見ると、目のふちをぽうッと赤くしてゐた。僅な間あとを待つてから、

「なんだよ、さきをお云ひなね」

と、促した阿野には、掛で、どうやらお藤のことを云ひ掛けたらしく察しられたが、「ひとを呼んどいて、それツきりあとを云はないなんて、それこそ大した失禮だよ」

「いゝわ、よすわ」

「なアに云はないたつて、小父さんにやア大抵わかつてるけれど」

「ぢアいゝぢアないの」

「だけど、そんなこと、まさか阿母さんが喋つて聞かせるわけでもあるまいが、よく知つてるね。誰から聞くんだい」

「わたし、あの人知つてるわ。いつゥか、まだ子供の時分に、銀座通りで、小父さんと一緒に歩いてたところへぶつかつちやつたことがあるぢアないの」

「へーえ、そんなことがあつたかしら」

「あつたわよ。そのあと、小父さんがうちにいらつしやつた時に、阿母さんにさんざなんか云はれて、困つていらしつたわ。だから、名前だつて知つてるわ。お藤さんて云ふんでせう？」

「さうかねえ、そんなことがあつたつけかねえ」

「その時分にはね、まだ藝者だつたのよ。だもんだから、わたしたちに氣がついて、小父さんが挨拶をなさると、急にすうッとそばから離れて、つれでないやうな顔をして、どつか、唐物屋だかなんだつたかの店へはいつちまつたのよ。わたし、遠くから、――阿母さんなんざまだ氣がつかないでゐるうちから、ちやんと見てゐたから、いまだに姿や着てたものまですつかり憶えてるけど、あれは、たしか袷時分だつたわ。髪は島田に結つて……」

「いや、どうも、痛み入るな。そこまで憶えてゐられちやア……」

「丈はあんまり高くなかつたけれど、撫肩で、すらりつと見えるやうな人だつたわ。今でも、あんなにお綺麗？」

「どうもはや、お都留ちやんにまで冷かされるに至つちア、小父さんも形なしだな」

「冷かすんぢアないわ。ほんとうに綺麗な人だつたわ」

「有難う。さうして憶えてゐてくれる娘さんがあると云つて聞かせたら、嬉しがつたり氣まりを惡がつたりで、やつこさん、どうしていゝかわからないだらう」

近所づき合さへしない、まるで世捨人のやうな、女の今の境遇が、ふと、もの哀れに心に思ひ浮べられた。長火鉢に手をかざして、大きく目を瞑いたまゝ、ぢつとさしぐんで了ふ樣子まで、あり〳〵と眼前に見るやうだつた。勢、阿野は、子供のおたまの印象ぶかくも、個々さうした記憶を保つてゐたと云ふだけのことに對して、心私に、感謝と云つて

もいゝほどの好感を贈り返さずにはゐられなかつた。母親の勝子などに會つたひには、互に口を利き合つてさへ、そこが、どうもさうさらりとは行きにくかつた。なんとなく拘泥つてゐるところがあつて、――無論それには、お藤の方で、とてもあたしなんぞ……の、全く皮肉でも反感でもない卑下した氣持から、二三度の來訪の折にも、お役目に茶や菓子を持つて出るなり、一時もそこへ座り込むやうな親しみは見せず、たゞもう臆々と含羞んでばかりゐたせいもあるのだけれど、然し大體に於て、眼中にも置かないと云ふやうなあしらひをうけた。どこまでも隠女に對する態度で、姿扱にすら至らないくらゐだつた。それが、今の都留子の口吻には、よしんば好奇心はあつても、世間並な反感や輕蔑などは、樂にしたくも見出せなかつた。子供心にも綺麗だと感じられた人に、今もつて輕い好もしさが殘つてゐるだけのことなのだが、それでも阿野にとつては、十二分の嬉しさだつた。

「あの時には……」

と、都留子は、生意氣に、ものを思ひ出す上目使ひをして、「隨分大人の人に見えたけれど、今から思ふと、きつとまだ二十歳か、さうはなつてないくらゐだつたんでせうね。この頃のことにすればなんでもないけれど、あの時分としちア、可なり目につくほど華美な風をしてたから、……さうだわ、きつと今のわたしなんぞより、四つか五つくらゐ若かつたんだわ。ねえ、さうでせう？」

「矢つ張り女の子だね。そんなことまで氣をつけて見てゐたのかねえ。一體それア、いつ頃の話なんだい？」

「もう十年も前のことよ」

「さうすると、お前さんは、十二三かい？　呆れたもんだね、そんな時分から……。第一、よく藝者だなんてことがわかつたもんだねえ」

「そりアわかるわ。それに、その後に見えた時に、小父さんが御自分で、いろんなことをぺら／＼喋つてたから……」
「お前さん、それをすつかり聞いてたのかい」
「えゝ、聞いてたわ。だつて、お茶の間にゐたんですもの、いやでも聞えて來るぢやアないの」
「いやはや、押しの利かねえことおびたゞしいもんだね」
「え？」
「いゝえさ、子供と云ふやつア、うつかり油斷がならないつてことさ」
都留子は、ニヤリと笑つて、
「でも、御幸福だわね」
「え？　誰が？」
「小父さんだつて、あの方だつて」
「御幸福は恐れ入つたな」
と、苦笑ひで、「然し、男と女が一緒に住んでれア、それで御幸福と思へるくらゐが花かも知れないよ。小父さんも、もう一度さう云ふ氣持になつてみたい」
「あら可厭だ！　さうぢやアないけど……」
「いゝよ、わかつてるよ。……ところでさ、西洋の諺に、……小父さんだつて、かう見えて、洋書の一冊や二冊は讀んでるんだからね、そのつもりでお聞きよ、ハツピイネス・イズ・ハツピイ・エキスペクテエション、――幸福とは、樂しき豫想なり、――かね、さう云つた意味のことが書いてあつたつけが、全くその通りだね。『樂しき豫想』よりほかに、『幸福』なん

せものはありやアしないんだね。嫁入り前の人を捕へて云ふのは少し慘酷かも知れないけれど、お前さんなんぞ、せめては今のうちに、うんとその『樂しき豫想（ハッピー・エキスペクテーション）』をやつとくこつたね。どうもさう、いつもくよ〳〵してちやア仕樣がないぢアないか」

「あら、ちつとも、くよ〳〵なんぞしてやアしないわ」

「だつて、このごろ、一向元氣がなくなつちやつて……」

「可厭だわ、そんなこと……」

「顔の色つやだつて、前のやうぢアないし、慥に弱つてるよ。……それアね、お前ンとこのお袋みたいに、あゝどうも朝から晩まで、縁談々々で攻めつけるんぢア、誰だつて仕舞にやアまゐつちまうだらうけれどさ、そこをだね、もつと暢氣に、あゝまた始つた、くらゐに、――阿母さんの口癖だ、くらゐなことに、輕く聞き流しときアいゝんだよ。一々あれを、本氣にうけて、そのたんびにやきもき思つてたひにやア、とてもお前、やりきれるもんぢアありやアしないやれ。それでなんだア、自分で行きたいところでもあるんなら、遠慮なくさう云つて、うんと一つ頑張つてお了ひよ。もし直接阿母さんに云ひにくいやうなら、いつだつて小父さんが聞いてあげらアね。あんな、阿母さんみたいな人に任せといたら、いつまでたつたつて埒アあきアしないよ。よさゝう話ならよさゝうな話で、餘計また迷ふんだもの。あゝどうもこねくり返してばかりゐたんぢア。仕舞にやア人さんだつて相手にしてくれなくなつちまうからね」

いつの間にか、都留子は、すつかりまた悄氣込んでゐた。伏目に、膝の上で、手巾の角を、十二單衣の襟もとのやうに、幾重にも折り重ね折り重ねしてゐた。その容子を見やりながら、阿野は、最後の一滴まで盃のなかに切つた。

「どうしたんだい。あんまり阿母さんの惡口ばかり云つたんで、ちつと御機嫌を損じたかな？」

「いゝえ、そんなこと……」

むツつりと、低聲に答へた。

「それとも、お前さんの、是非行きたいと云ふやうなさきでもあるんなら、丁度いゝ折だから、遠慮してゐずに、すつかり小父さんに打明けて云つてごらんな。どんな話でも、決して悪いやうには取り計らはないから。何しろ、さう云ふことにかけたら、小父さん、少しさばけすぎてるくらゐさばけてるんだから……」

ますく不愉快さうに、都留子は默り込んで了つた。折角のいゝ目もとさへ、おつと伏せたきりでゐる故いか、容子が、急に、どことなく病弱らしく、或は生來の遲鈍とさへ見えた。氷砂糖を口へ擲り込んだ才女ぶりなどは、所謂想像にも及ばないほどの重さと鈍さとは、目見えに來た山出しの下女を思ひ出させられるくらゐで、寧ろ腹立たしかつた。

「ねえ、云つてごらんな。何も必ずしも、今までに、阿母さんから出た話のうちに限つたことたアないんだぜ。そのほかで、阿母さんの知らない話だつて、ちつとも構やアしないんだから……。つまり、自分一人で思つてゐるやうな……」

「そんなことありませんわ」

やつと引き出された言葉は、いやに冷たく、他人行儀だつた。さうかと云つて、飽まで隠し通さうと思ふことが、胸の底に蟠つてゐる容子でもなかつた。矢つ張り、前から想像してゐた通り、さう云ふ話は一切ごめん、と云つた氣持らしかつた。

「さうかい。ぢアまア、もしさう云ふ場合が來たら、いつなんどきでも、腹藏なく云つて貰ふことにして……、あゝ、さうく、すつかりまた飯を云ふのを忘れちまつてた。……おい、ちよいと姐さんく」

氣忙しなく手を叩き立てゝ、女中を呼び、飯を云ひつけてから、先刻綺麗にからにして了つた銚子をもう一度把りあげて、執念く注いでみて、一滴も出ないのにしやゝ手持無沙汰の態で、ふと、古ぼけた菓大將紙の二つ折りの目に、女

持の金時計をちよいと引き出して見ながら、「かうつと、これから飯を食つて、何時の汽車に乗れるかな」
「こゝから、すぐもう御歸りですか」
「あゝ、さうしよう。……お前さんは俥で送らせるよ」
「いゝえ、よござんすわ。近いんですから……」
「どういたしまして！　夜道を、一人で歩かせて歸したりしてごらん、あとで舍監に、目のくり玉が飛び出るほど叱られなきアならない。とんでもないこつてす！」
「ほんとねえ」
　と、やつとニツコリ笑ひ顔になつた。
「さうだらう？　お前さんだつて、ちつたア馬鹿々々しいと思ふだらう？」
「えゝ」
「構ふこたアないから、これから、もつとなんでも、自分の思つた通り、ガン／＼やつてやるがいゝんだ。あんまり云ひなり放題、なア／＼云つて聽いてると癖ンなるよ！」
　馬鹿に威勢よくさう云つて、阿野は、自分で、さも面白さうにくツ／＼と笑つた。
　やがて食事がすむと、汽車の時間が半端になつたから、一緒にもうちつと歩いて、タタシイの空車でも拾つて、市兵衛町まで送つて行かう、と云ふことになつて、八時をちよつとすぎたころ、二人は、ぶらりとそこを出た。
　そとは、靜な、どことなく春の訪れが感じられるやうないゝ晩だつた。二重廻しの前をかけずに、阿野は、少し足もとのひよろつくほどの微醺機嫌で、先に立つて、ゆつくり／＼溜池の方へと歩いて行つた。

二

大へん貴方に誘はれたとか、おまけに自分でも行きたいらしい都留子の口吻ゆゑ、そのうち一度御邪魔に伺はせるかも知れない。何しろ、どこへでも、自分から進んで出かけてみたいやうに云ふなどは、こゝ何年にも覺えのない、それは〱珍しいことで、先夜の支那料理は、よつぽど御馳走だつたとみえる。——こんな風に諧謔をまぜて、母親からの禮手紙のうちに云つてよこしてあつたので、阿野は、待つともなく心持にしてゐたが、天氣都合もわるく、かれこれするうちに月が變つた。お藤も、十年も前に銀座通りで行き逢つた時のことを、今もつと憶えてゐるといふ話を聞かされて、「あらまアいやだ。……へえ、さうですかねえ」などゝ、努めて平氣らしくみせてはゐたが、以來、見も知らないよその娘に對して、今が今まで夢にも思ひもそめなかつた好感情を、むづ痒く胸の奥に潜めてゐるらしく、或る朝なども、庭の隅で見つけたと云つて、黑土だらけにした手の平に、生々と露をふくんだ白綠の蕗の薹を二つ三つ載せて來て、緣先に立つて見せながら、

「もうそろ〱土筆ン坊も出てるかも知れませんわね。……どうなすつたんでせう、この頃うちに早くいらつしやればいゝのにねえ」

などゝ、だしぬけで誰のことゝも見當をつけかねるやうな口を利いたりした。

「お都留ちやんかい?」

色氣もなく鼻の穴へ指先を突ツ込んで、鼻毛を采つては引きぬき、引きぬき、膝の上に擴げた新聞紙へ、パラ〱拂ひ落してゐた阿野は、さも興もなげに、「なアに、來るもんかね。第一お袋が、自分でさへ寄り附きたがらないところへ、

大事な娘を一人でよこす氣遣はありやアしないよ」

「それアお一人ぢア……」

「いゝえさ、いづれ女中なり、兄貴殿なり附けてよこすにしたところでさ……、兄貴は尚更のことよこしたがるまいから、……矢ツ張り、自分が一緒に來るんでもなけれア不安心なんだらう」

「そんなら別に……」

「來て貰ひたくもない、か?」

「そんなこと云つちア悪いけれど、なんだかあたし、あの方ばかりは氣づまりで……」

「どの方だつて、あんまりさうさら〳〵ツともいかないくせに……。然し、それアさうだ、あの方が御一緒なら、俺だつて、どつちかと云やアお斷り申したいね」

「女中さんでもおつれンなつて、氣輕に出ていらつしやればいゝのにねえ」

「嫁入前の體だ、假令一日でも半日でも預つたとなりやア氣骨の種だよ」

そんな風に云ふ肚は、阿野の方が一層待ちくたびれて、しびれをきらして了つて、——けれども、そこは男だけに、どうとも勝手にしやアがれの氣持だつた。「それより、早速そいつ一つ煮て食はせないか。うまさうだ」

「へんねえ、どうしてこんな苦ツぽろいものがおいしいんでせう」

それから四五日してからの日曜が、カラリと晴れて、いかにも春めいた穏かな日になつた。ぼんやりうちにくすぶつてゐるのが勿態ないほどの陽氣だつた。

「八幡様の櫻がチラホラ咲き初めましたつて。……ちつと散歩でもしていらつしやいましなね」

「うん。……いま考へてるところなんだがね、ちよいと東京まで行つて來やうかと思つてゐるんだ」

「なんか御用？」

「いや、用つてほどのことでもないんだが、上野の××亭で濱野先生や小林君の作つた小唄の披露があるつてえから、……濱野先生から態々案内狀を貰つてるから、ちよいと顔だけでも出しとかないと悪いかと思つて……」

「ぢア、行つてらつしやいましよ」

「下谷のお峯が手をつけたんぢア、大抵ほどは知れてるがね……」

「なんのかんのつて、このごろ、いやにお尻が重いのねえ」

「お年齢の加減かな？」

納戸から薄いインバネスを出して來させたりして、十二時の汽車にゆつくり間に合ふやうに、早めに扇ケ谷の住居を出て、長閑にぶら〳〵歩いて行つた。成程、山の上の別莊の庭に、いつの間にかもう櫻が咲きそめて、陳腐ながら、三日見ぬまの輕い驚きもわるくはなかつた。さう云へば、めき〳〵と麥も伸びてゐたし、小松の綠も立つて來てゐた。陽の道が大ぶん高まり、暖かさうな空の色だつた。

壽福寺の踏切近くへ來かゝつた時に、丁度下りの列車が、小川を隔てた彼方の土手の上を、遮二無二と云ひたい勢で、大地を搖つて走り遠ざかつて行つた。その、二等車の青筋を見ると、ふとそこに都留子が乘つてゐさうな氣がした。さう云ふ直感を、迷信的に、すぐ信じ込んで了ひたがる質の阿野だつた。

（行き違ひになつちアつまらないぞ）

と思ひながらも、停車場を表口におりても、裏口に出ても、或る牛肉屋の角からこつちは、どつちにしろ一本道なの

で、――いつかもう自分の東京行きなどは二の次の、初ツから出迎にでも來たやうな氣になつて、上りの發車時間には頓着なく、一層歩度を緩めて、いやに若々しい、ヒョロ長い姿を運んで行つた。が、その牛肉屋の角まで行き着く間には、今の汽車で着いて來たらしいのは――たぶん香風園の客だらう、男女四五人づれの、ぎつちり詰つた自動車に行き合つたばかりだつた。時計を見ると、まだ五分やそこらまご〱してゐても、自分の乘らうといふ汽車に間に合はないことはなかつた。有繋に、そこまで來てみると、そんな、なんの根據もないあてずつぽうのために、みす〱一汽車おくらせるのも馬鹿らしかつた。裏停車場へ出た方が近いのだけれど、初めてゞは、十中八九そこへ氣のつく筈はないから、きつちり五分といふ時間を切つて、こゝらをぶらつきながら待つてみて、それで來なかつたら、表口の方へ廻つて行かう、と心をきめたが、今日東京へ出ると、きつとその留守に、入れ違ひにやつて來さうな氣がしてならなかつた。

――待つてみると、五分といふ時間はなか〱永かつた。それが、ゆくりなくも、阿野の心に、痴情の限りを盡した昔日の思ひ出を喚び起して來た。……三日三晩ひと間に籠りきつて、食べるものも碌に食べず、たまに執る箸も、寢床の上に腹ン這のまゝといふやうな爲體でゐながら、その四日目の午後、妓が髮を結ひに行つてゐる間、ちやぶ臺に頬杖をついて、ぢッと時計のセコンドを睨めたツきりで過ごした一時間あまり、……今、髮結さんが、紐で腰にぶらさげてゐる鋏で、パチリと根の元結を切つた。……今、あの澤山ある髮を梳せながら、目尻を吊しあげて、薄目使ひに鏡のなかを見てゐる。……今、前髮をとつた。……今、鬢を出した。……今、手鏡をかざして、髱の出具合を見ながらなんか文句を云つてゐる。……今、鏡の前を立つた。……今、むき出しのまゝ懐に差し込んでゐた敷島を……、あゝ、煙草なんぞ歸つて來てからゆつくりのめばいゝのに！……今、上り口へ出て來た。……なんと云ふ澤山な下駄だ！　どれでもいゝぢアないか、いゝ加減に突ツかけてさつさと歸つて來れば！……ガラッ、さア格子戸をあけた。……今、一足。……

今、二足。……こゝまで、百歩とはあるまい……。——目に見えず、耳に聞えず、手に觸れられない女の一擧一動を、寸分の誤りなく思ひ計らうとして、尺蠖のやうにぴツたり〳〵と、青白い時計の指針面に心を吸ひつけ、伸びつ、縮みつ、じり〳〵と迫りよつて行つた一時間あまり！——今から思へば、我ながら薄氣味わるいほどだが、時を待つ氣持が、ふと、そんな二昔も前の、一生人にも話せないやうな記憶まで揺り醒して來たのだ。

（あの女もどうしてゐるか……）

陽の翳るやうに、寂しく心が暗もうとした時に、表停車場の方からの踏切を、日よけだけに幌をかけた俥が、横切り近づいて來た。馬鹿に眼性のいゝ阿野には、片手を輕く幌の骨にかけて、すましこんで乘つて來るのが、紛れもなく、一目で都留子と知れた。

（やア、來た！　來た！）

子供の無邪氣さで、思はずニコ〳〵顏になつてゐた。見事に直覺のあたつたことと、五分といふ時間を切つて待つてみただけの甲斐があつたこと、それは、すぐにも人に喋つて聞かせたいやうな、得意な氣持で、喜びを二倍にも三倍にも大きくした。俥で近づいて來る僅か半町たらずの間が待ちきれない思ひで、自分の方からも歩みよらうとしたが、よして、丁字形に交はる街角の、突き當りの眞正面に、兩手を重ねてついたステッキの上に、やゝ猫背にこゞみかゝるやうにして立つてゐた。さうしてゐれば、眞正面を向いて來る都留子の瞳のまん中に、いや應なしに映る筈だつたから、默つてそこに突ツ立つたまゝで、先方から聲をかけさせてやらうと思つた。

外の光があまり明るすぎるためか、都留子は、薄く眉間に八の字をよせ、目を細くして、ガクン〳〵俥を揺ぶらせながら近づいて來た。もう見つけるだらう、もう氣がつくだらうと思ふと、自然笑ひ顏になり、歯が見えさうになるのを、

むッと唇を結んで見詰めてゐたが、どこまで近づいて來ても、都留子の表情になんの變化も起らなかつた。たうとうつい鼻のさきへ來て、右へ梶を切らうとして、往來の窪みにゴトンと俥が揺れた拍子に、眼氣ざすほどいゝ心持さうに細めてゐた眼を、ぱツと瞬き、同時にそこに突ツ立つてゐる男の姿だけは認めたらしかつたが、すぐ梶の向はふとしてゐる方角へ視線を外らして了つた。洋銀鍍金をした泥よけに陽が輝いて、俥も梶を轉じやうとした。阿野は、默つてステツキを擧げると、幌の横を、ボン／＼と輕くたゝいた。と、波形に切つた幌の裾へ、白い指がかかつて、眼が一つ覗いた。

「おい」

「あら！」

「俥の上で居眠りなんぞしちァみつともないよ」

「あら、小父さん！　ちつとも氣がつかなかつたわ」

「こゝに立つて、遠くツから見てゐたんだのに、コツクリ／＼……」

「いやァよ！　寢てやァしないわ！　……えゝ、いゝの、おろして頂戴」

俥夫が前掛をとる間も押搭しげに、フエルトの草履で輕く降り立つと、腿に洋傘を横たへ、胸でお辭儀をして、笑顔を小搖りにゆすりながら、「こんにちは。先達はどうも……」

「よく來たね、一人かい？」

「いゝえ、兄さんと」

「へえ、貴一君と……。それで……？」

「テニス……。どつか、お友達ンとこにコオトがあるんですつて……」

「それで、停車場で別れちやつたのか。……なアんだい、兄貴のやつも、ちよいと顔ぐらゐ見せに來れアいゝのに」

「わたしのおかげで一汽車おくらしちやつたなんて、ぶつ／＼云つてたくらゐですもの、送つてなんぞ來るもんですか」

「さうかい。まアいゝや。……俥を歸さう」

「えゝ」―

と、板のやうにピッタリ合せた胸もとへ手をやらうとするのを制めて、手早く腰さげの銀貨入れから五十錢丸を摘み出して拂ひ、偕てぶら／＼歩き出しながら、

「さうかい。然しまアよく出かけて來たね。口ばつかりで、とても來やアしまいと思つてたんだ」

「あら、そんなことないわ。……小父さん、いやにおしやれして、どつか出かけるとこぢアなかつたの？」

「實ア、東京へ行つて來ようかと思つて出かけたところなんだがね……」

「あら、そいぢア惡かつたわねえ」

「なアに、いゝんだよ、別にさう大した用事でもないんだから。……それより、ひとのことを云ふけれど、お前こそいやにめかしこんで來たんだね。第一、鎌倉ぢア、まだ一人だつて洋傘なんぞさして歩いてる人ありアしないぜ。……ちよいとお見せ」

革の組紐で、手頸にかけてぶらさげてゐたのをうけ取つて、「なんだい、これア、……紤ざツぽうみたいなもんだね。……これが今年の流行なのかい？」

「あんなこと云つて……、早い人は、もう一昨年あたりから持つて歩いてたわ」

「少し、どうも、惡趣味だね」

むッと唇を結んで見詰めてゐたが、どこまで近づいて來ても、都留子の表情になんの變化も起らなかつた。たうとうつい鼻のさきへ來て、右へ梶を切らうとして、往來の窪みにゴトンと俥が搖れた拍子に、眠氣ざすほどいゝ心持さうに細めてゐた眼を、ぱッと瞬き、同時にそこに突ッ立つてゐる男の姿だけは認めたらしかつたが、すぐ梶の向はふとしてゐる方角へ視線を外らして了つた。洋銀渡金をした泥よけに陽が輝いて、俥も梶を轉じやうとした。阿野は、默つてステッキを擧げると、幌の横を、ポン〳〵と輕くたゝいた。と、波形に切つた幌の裾へ、白い指がかかつて、眼が一つ覗いた。

「おい」

「あら！」

「俥の上で居眠りなんぞしちァみつともないよ」

「あら、小父さん？　ちつとも氣がつかなかつたわ」

「こゝに立つて、遠くッから見てゐたんだのに、コツクリ〳〵……」

「いやァよ！　眠てやァしないわ！　……えゝ、いゝの、おろして頂戴」

俥夫が前掛をとる間も牴牾しげに、フエルトの草履で輕く降り立つと、腿に洋傘を横たへ、胸でお辭儀をして、笑顏を小揺りにゆすりながら、「こんにちは。先達はどうも……」

「よく來たね、一人かい？」

「いゝえ、兄さんと」

「へえ、貴一君と……。それで……？」

「テニス……。どつか、お友達ンとこにコオトがあるんですつて……」

「それで、停車場で別れちやつたのか。……なアんだい、兄貴のやつも、ちよいと顔ぐらゐ見せに來れアいゝのに」

「わたしのおかげで一汽車おくらしちやつたなんて、ぶつ／＼云つてたくらゐですもの、送つてなんぞ來るもんですか」

「さうかい。まアいゝや。……俥を歸さう」

「えゝ」——

と、板のやうにピツタリ合せた胸もとへ手をやらうとするのを制めて、手早く腰さげの銀貨入れから五十錢丸を摘み出して拂ひ、偕てぶら／＼歩き出しながら、

「さうかい。然しまアよく出かけて來たね。口ばつかりで、とても來やアしまいと思つてたんだ」

「あら、そんなことないわ。……小父さん、いやにおしやれして、どつか出かけるとこぢアなかつたの？」

「實ア、東京へ行つて來ようかと思つて出かけたところなんだがね……」

「あら、そいぢア惡かつたわねえ」

「なアに、いゝんだよ、別にさう大した用事でもないんだから。……それより、ひとのことを云ふけれど、お前こそいやにめかしこんで來たんだね。第一、鎌倉ぢア、まだ一人だつて洋傘なんぞさして歩いてる人ありアしないぜ。……ちよいとお見せ」

革の組紐で、手頸にかけてぶらさげてゐたのをうけ取つて、「なんだい、これア、……新ざツぽうみたいなもんだね。……これが今年の流行なのかい？」

「あんなこと云つて……、早い人は、もう一昨年あたりから持つて歩いてたわ」

「少し、どうも、惡趣味だね」

「だつて、これ、小父さんの御贔負の佛蘭西製ですよ」
「それア、お前、丈のシュウツと高い異人の女が持つて歩いてたら、まだどうにか見られるかも知れないけれど、日本人の女が……」
「いゝことよ！」
と、奪ひ返して、「小父さんみたいな時代おくれに何がわかるもんですか」
「折角さうして、重い思ひをしてぶらさげて來たもんだ、さして行つたらいゝぢアないか」
「どうだつていゝわよ！」
「それとも、近頃世の中が物騷だつてんで、護身用に携帶してゐる新ざツぽうかな？」
「えゝ、さう！　小父さんみたいな不良老年が、四角に立つてゝ、いきなり俥の幌なんぞたゝくから……」
「それア、かう見えたつてそのくらゐの親切はあるよ。あん時おこしてやらなきア、尻の皆に俥からほツぽり出されてらアね」
「わたしね、ほんと云ふと、大ぶん眼が近いらしいのよ」
さう云つて、何が可笑しいのか、一人でくツくと忍び笑ひをして、「學校に行つてる時分、お教室で　先生が黒板に書く字が見えなくつて困つたわ」
「そんならそれで、ちやんと度の合つた眼鏡をかけれやアいゝぢアないか」
「いやアよ、眼鏡なんぞ！……だから、それを云ふと、きつと眼鏡をかけさせられると思つたから、阿姉さんにも誰にも云はずに、たうとう見えず仕舞でおし通しちやつたの。白狀するの、今が始めてだわ。隨分でせう？」

「そんなことして置いたひにやア、だん〳〵度が進むばかりだし、第一神經衰弱になるつて云ふぜ」
「先刻もわたし、ほんと云ふと、遠くに誰か立つてるやうだと思つたから、初めの間、一生懸命見てたのよ」
「あゝ、それであんなに、額に八の字をよせて、薄目を使つてたのかい」
「えゝ、さう！」
「馬鹿だね」
なんと云ふこともなしに、阿野は聲を立てゝ笑つた。
「馬鹿だつてしようがないわ。……でもね、あたしが近眼だつてこと、誰にもお喋りしちやアいやよ」
空を突いて立つた壽福寺の杉木立の影に、遠く踏切が見えて來た。その暗さのなかに、丁度旗竿のやうに白と黒とに塗つた棒が、グウッとおりて來るのが、へんにはつきり見えた。上り勾配を、喘ぐやうに黒烟を吐き立てながら、汽車が通り過ぎて行つた。
「あれ、あれで小父さん、東京へ行くつもりだつたんだ」
それから、先刻同じ踏切の近くで、下りの列車を見ると、なんとなくそれに都留子が乘つてゐさうな氣がしたことや、ゆつくり時間があつたので、どつちの道から來てもいゝやうに、あの街角で待ち合せてゐたのだ、といふやうな話をして聞かせて、「どうだい、まるで千里眼だらう？」などゝ戯れた。口でこそさう輕々しくは云ふものゝ、阿野がその直覺を喜んでゐる氣持は、實はもう少し本氣だつた。もしあすこで、そんなよしない空想には一顧も與へずに、どん〳〵東停車場の方へ行つて了つたとすれば、丁度都留子を乘せて來た俥夫が、あの白と黒とに塗つた通せん棒に遮られて、立ちどまつて額の汗でも拭いてゐる時分に、その鼻のさきを轟々と走り過ぎて行く汽車のなかには、彼自身が、なんに

も知らずに新聞でも擴げてゐるところだつたのだ。それを思ふと、——少し大袈裟に云ふなら、自分の力で、或る程まで運命を支配し得たやうな、可なり得意な氣持にもなり、同時に、さようにして危く逢ひ得たこの訪問者に對しては、へんな勿態がつき、愛着が深くされた。——けれども、それをそのまゝ語れる相手ではなかつた。これが、若い頃、ひや〳〵するやうな、むづかしい逢瀬を樂しんだ相手の女でゝもあつたならば、どんなに繰り返し繰り返し、自分の勘のよさ加減や、行爲の親切さ、丹念さを、自慢したり、恩に着せたりして、その一晩中の語り草にするか知れないところなのだが……、などゝ、そんなことも考へられて、ひとり笑したい氣持だつた。

「可なり遠いんですのね」

「うん、もうぢきだ。………うちのが、大へんなお待兼だつたよ」

「あら、さう？……でも、なんだかわたし、具合が惡いわね」

「一緒に摘草をするんだつて、ひどく樂みにしてゐたから、お茶漬でお午飯をすましたら、一つみんなで出かけるかね」

「お午飯いゝわ。朝がおそかつたから」

「こつちも、大船の鯛飯かなんかですまさうと思つて、實アまだなんだから、なんにもあるまいけれど、まア仕様かない、お午飯はお茶漬にしとくんだ。その代り、晩にはなんか御馳走するよ」

「御馳走なんか澤山よ。……あら、嬉しいわねえ。わたし、摘草なんて、ずゐぶん暫ぶりだわ」

「珍しい天氣だから、兎も角ちつとおもてを歩つてみようよ」

「いゝわねえ！……あら、田舍の匂がして來たわ」

もの珍しげに鼻をすか／＼云はせた。

「どうなつてゐんだい、歸りは？　貴一が誘ひに來ることになつてるのかい？」

「えゝ、たぶん夕方よつてくれるでせう」

「よけれア、お前さんは、二三日泊つて、ゆつくりして行つたらどうだい」

「さうねえ、ほんとにさうしたいわねえ。……わたし、それア田舍が好きなのよ」

「ぢア、貴一が來たら、僕からさう云つて……」

「駄目よ、そんなこと！　どんなに叱られるか知れアしないわ！」

とんでもない！　といふ顔つきをしてみせてから、いやに早熟くさつた調子になつて、「ほんとに、小父さん、暢氣だわねえ」

「あゝ、だいぶ暢氣ンなつたよ」

いつになく阿野は、茶化したり、冷かして了つたりする氣になれなかつた。先方の云ふ意味とは大ぶんづれて、――安心立命を得ての、ほんとうの氣安さ、さういふ境地へ近づかうとし、まただん／＼に近づいて行けさうにも思はれるこの頃の感慨を、相手に通じやうと通じまいとそんなことには頓着なく、たゞふわりと口にしてみた。

「いゝわねえ」

「なアに、お前さんだつて、さうなりたいと思へば、今すぐにだつてなれるんだけれど……」

それから先は、故意と控えた。その「いゝわねえ」が、雲を掴むと云ふのよりも、更に頼りないくらゐ漠然とした憧憬で、慾からいゝとも、從つて外にさうなりたいとも思つてゐるわけでないことは明かだつた。またそれでいゝので、

さうでなくてはいけない、とさへも云へさうだつた。たゞ、嫁入前の今を眞盛りの年齢ごろで、假定漠然とでも、さういふ、人生の寂しい一角を覬望する念のほの見えるのがいぢらしく、もの哀れだつた。

都留子が、そんなところまで突ッ込んで感じたり考へたりしてゐやうとは思はれなかつたが、こつちの調子に吊り込まれてか、存外しみ〲と、濕りをもつて、

「さうねえ、なれるんだわねえ」

と、呟いた。これが、阿野には、「小父さん、いつそのこと、わたし、尼にでもなつて了ひたいわ」と云はれたのよりも、遙に深くこたへた。顔も見やらず、無論返事もしずに、ステツキを振り振り歩いて行くうちに、義憤、といふやうな、胸の熱さが、感じられて來た。……一體親たちは、自分たちの娘等をどうしようと云ふのだ！ どうしたら氣がすむと云ふのだ！ また娘たちも娘たちで、どうされたいと云ふのだ！ どうされゝば嬉しがり、有難がるのだ？ ――さう思つて見渡すと、誰にも彼にも、まるツきり意思といふものが失はれてゐるやうな氣がした。凡そ氣まぐれといつて、ぐうたらといつて、こんな巫山戯た話ツてえがあるもんか！ とでも怒鳴りつけてやりたかつた。みんなが馬鹿に見えて、馬鹿に見えて、いかにも腹が立つてやりきれなかつた。思はず足早になり、たうとうそこからは、一言も口を利かずにうちへ歸つて來た。

三

景清土牢の跡と立札をした岩山の裾を、だん〲奥へはいつて行くと、道幅はたつぷりあるが、つゞら折りの、可なり急な阪にかゝる。これをあがり切つたところで、二岐路を右にとり、ちよつとした山の分水嶺に添つてうねつて行

く道が、豫てから阿野の氣に入つてゐた。白ッぽい、粘りけの强さうな土が堅くしまつた上に、心あつて振り撒いたやうに、いつも、程よく茶色の松葉がこぼれてゐた。兩側の、灌木の間からすく／＼と幹をぬいてゐる松の太さも、疎さも、いかにも手頃な感じで、左に遠い海の眺望を妨げもしず、また餘りにしまりのない眼界をおッぴろげてもゐなかつた。あちこちの段畑や農家の屋根を見おろす淺い山の感じも親しみ易かつた。大體の見當で、たぶん大船の方へ出て行く道らしく思はれるのだが、何度通つてみても、殆ど人に出合つたことがなかつた。そのせいか、よく鵯や鵙のやうな小鳥の啼聲を聞いたり、枝から枝へ飛び移る姿を見かけたりした。うちを出て、十町も歩くか歩かないで、さう云ふ、どう考へても鎌倉らしくない景色のところへ出て來られるのが嬉しかつた。度々行つて、その「鎌倉らしくない」感じを失つて了ふことが惜まれて、謂はゞ取つて置きの散歩道にして、よほど大切に用ゐてゐたが、然し、珍しい今日の客の待遇ぶりには、喜んでそつちへ案内して行つた。ひどく初づき合の惡いお藤も、ちやんと胸に用意されてゐた好感情のためか、忽ち仲よしになつて了つて、二人肩を押し並べて、何が面白いかと思はれるやうな、いかにも取留りのない女らしい話題を、さも面白さうに、それからそれへと引き續けながら、阿野の、折角心入れの道案内も、なんの氣にもとめずについて來た。あまりの張合のなさに、足をとめて待ち合せて、

「どうだい、ちよいといゝだらう」

と云つてみたが、それで話しやんで、俄にあたりを見廻して、

「……えゝ……。海が見えるわねえ」

などと、めつたに東京を離れたことのない都留子でさへ、一向氣のない返事をしてゐたくらゐで、お藤などは、おやおや、いつの間にか、へんな、山ンなかみたいなところへ來て了つた、とでも云ひたげな、怪訝な顏つきをしてゐた。

（とてもいけない！）

さう思ふと、自分で自分の心使ひが、可笑しく顧られて、諄く云ふ氣もなくなつて了つた。で、やがて道を左に切れ込んで、佐助の谷戸の方へおりて來た。その途中には、錢洗井戸と云ふのがあつて、辨財天が祀つてあつた。つい近年からのことだが、そこに湧いてゐる清水で金子を洗つて行くと殖る、つまり金持になる、と云ふ迷信が行はれだして、御緣日には、東京や横濱あたりからも、可なりの參詣者が出かけて來るやうになつてゐた。中には、紙屑同様になつて了つた泡沫會社の株券などを持つて來て、ざぶ／＼やつて行くのもあるといふに至つては、いつそ御愛嬌だつた。停車場からの近道の、崖のやうになつたところへ、荒削りの大谷石を十二三段重ねたのにさへ、「錢洗辨天參詣者寄附」と立札がしてあり、泉のそばには、無論型の如く奉納の金額と名前とを誌した木札が、可なり澤山打ちつけてあつたが、然しその二十疊ばかり敷ける洞窟のなかには、龕に嵌めこんだ小さな祠があるきりで、社もお堂もあるわけではなく、從つて堂守もゐなかつた。御緣日だけに出張して來るのだらう、普段は床几を積み重ねたりした掘立小屋の茶店が一軒たつてゐた。それだけのことで、參詣者の慾張つてゐるわりには、まださう俗ツぽく荒されてもゐなかつた。

辨天様の御緣日といふのが、月の幾日かも知らなかつたが、いゝ按配に、阿野は、まだ一度もさう云ふ日に出逢はなかつた。いつ行つて見ても、深閑として、人ツ子一人ゐなかつた。歩くと汗になるやうな季節には、その洞窟へはいつて一休みして行くによかつた。――が、それでも兎に角名所だつた。山の上の、松の疎林のなかの道では、なんの感興をも催さなかつた女連を、そこでなら、少くとも目的地へ着いたと云ふ、輕い滿足だけでも與へることが出來ようと思つた。道々、阿野は、株券を洗ひに來る話などもして聞かせた。

「へえ？　さうを、それアあたし初耳だわ」

お藤の方が餘計興味をもつて、そんな風に云つた。「ぢアあたしも一つ、お金子を洗つてみようかしら」

「前にもいらしたことあるんでせう？」

「いゝえ、驚て。……あたし、鎌倉にゐても、八幡様に大佛様に、長谷の觀音さん、それくらゐよりほか、どッこも知りませんの。ちつともおもてへ出ないんですもの」

「あら、さうですか？、御一緒に散歩なんぞなさることないの？」

「いゝえ、ちつとも一緒につれて歩いてくれないんですのよ」

「さうを？……小父さん、貴方ひどいのねえ」

「ふゝん」

阿野は、たゞ鼻のさきで笑つてゐた。なんぼなんでも、さういふ會話には加つて行けなかつた。

祠の前には、小さな蠟燭が箱ごとあげてあり、いつぱい蠟涙のこびりついた、横に十本ほどづつ三四段、一度に澤山灯をともすことの出來る燭臺なども供へてあつた。袂を索つてマッチを取り出し、慰みに一本蠟燭をつけてあげたのが、悪戯氣のもとになつて、その火を移しては隣へ隣へと、四五本ばかりも立て並べた時に、お藤が氣がついて、

「あらまア、何をしてるのかと思つたら、あんな悪戯をして！」

「あゝ、綺麗だわ！　もつといつぱいおつけなさいよ」

「まア、貴方まで！」

と、笑ひ顔で睨んでみせてから、「およしなさいましよ。そんなに、矢鱈にお蠟を使つて、悪いわ」

「いゝわよ！　お代をあげて行けばいゝんでせう？」

「まア、都留子さん！　貴方一本いくらなのか御存知？……もういゝわ。ほんとに貴方、もうおよしなさいましよ。罰があたるわ」

「お蠟をあげたり、罰にあたられたりしてたまるもんかい」

「だつて、默つて使つて……」

「斷らうにも、だアれもゐないんぢや仕樣がないさ」

「ですからさ、だから惡いぢやないの？」

「よし！　ぢやアこれだけにしとこう。いくつだ？　ひい、ふう、みい、よう、いゝ、むう……」

鼻の頭で數を讀んで、「はゝア、十六本か。數が惡いな。序のことに、あと四本あげて……」

「およしなさいつてばね！　冗談半分そんなことしちア駄目よ！　罰があたつたつて知らないから」

「よし、これでおしまひ！　二十本……、いくら置いてつてやるかた？」

「まア、置いてつてやる……だつて！」

賽錢箱に、手早く五十錢玉をほうり込んで、

「おつりは要りませんよ」

「一體、いくらあげたの？」

「五十錢」

「あら、高いお蠟ねえ」

「ぢアいゝわ」

と、都留子がしやしやり出て、「今度はわたしが、も十本ばかりこつちのへつけてあげよう」

「まア、貴方もずいぶん茶目さんねえ。もうおよしないましよ」

「構ふもんですかね！　二十本五十錢なんて高すぎるわ」

さう云つて都留子が、箱のなかからカチヤ〳〵と蠟燭を拾ひあげて、別の燭臺に、一本々々灯をともしては並べ始めた。淺い洞窟だつたし、おまけに、震災で、突當りの天井に大穴があいて、そこから春らしい陽影が落ちて來てゐたりしたから、小さな灯の色は、さして冴えもしなかつたけれど、それでもちよつと綺麗だつた。井戸といつても、祠のすぐ前に、僅か疊半帖かそこらの、人工らしい溜に、澄明な淸水が湛へられてゐるのだつたが、阿野は、笑ひながら出て來て、そこへチラ〳〵と火影を映して眺めた。

「綺麗だ、綺麗だ」

ゴブラン織を裏から見たやうな、はつきりしない柄の、紫ツぽい袷に、とび〳〵に紅のはいつた帶を小さくしめた後つきは、痩せてすらりとしてゐるだけに、いかにも女らしく、――といふのは、生娘らしくなく、あたりのほの暗さのなかに浮びあがつて見えた。思はず、阿野は、自分のことを「小父さん」などと云つて呼びかけるやうな、さういふ年のいかなり娘に向けるべきでない眼つきを、その肩や腰に射つけてゐた。漁色にも飽き果てたやうな、五十何歲かの男が、或る一人の女を、特に女として見やる眼つきには、ちよつと銳いところがあつた。阿野とも思へない、へんに生々しい感じがあつた……。

そこを出たところに、杉だか檜だかの苗畑があつた。苗は、一尺四五寸から二尺ばかりで、これでつくのかしら、と危ぶまれるやうな貧弱さ加減だつた。ふとお藤が、そこへはいつて行つて、小腰をかゞめてあたりを見廻してゐたと思

ふと、

「あら、あつてよ、あつてよ！」

と、仰山らしく呼びかけた。

「なアに？」

都留子も足をとめて、陽を眩しがるやうな細眼をして見やつた。

「土筆ン坊、澤山あるわ！」

「あら、さうを？」

「もう駄目だよ」

いざとなると、摘草の御相伴は、阿野にとつてはちつと迷惑だつた。「もうお前、すつかりほうけちやつてるだらう？そんなもの、出たてでなくつちア甘かアありやアしないよ」

「いゝえ、まだ大丈夫ですとも！　こら、こんないゝのがあるわ」

跼んだまゝ、お藤が、遠くから一本振つて見せた。

「あゝあるわ！　とつてきませうよ。小父さんもいらつしやいね、澤山あるから」

都留子もさう云つて誘ふので、厄介なことになつた、と思ひながら、阿野が小戻りして、茶店の蔭で小用を足し、清水で手を洗つてから、苗畑の柔い土を踏んではいつて行つた頃には、もう二人とも、左の手の平からはみ出すほどとつてゐた。

「成程、こゝはたんとあるな」

「ね、こんないゝのがあつてよ」

都留子が、手を伸して渡してよこすのを受けとつてみると、太短く、袴が上から上へと重り、細な龜甲に組み合はされた頭も堅く締つて、みづ〳〵してゐた。

「うん、かういふのなら甘い」

「小父さん、どうして召上るの?」

「三杯酢でもいゝけれど、矢つ張り鹽く煮て、飯の菜にした方が甘いね」

「それにやア、うんと取つてかなくつちやア駄目よ。ずゐぶん澤山のつもりでも、煮ると、ほんのこれンばかりになつちまふのね」

「へえ、よくそんなこと知つてるね」

「そのくらゐのこと、誰だつて知つてるわよ。小父さんが、知らないと思つてる方がよつぽどどうかしてるわ」

「さうかなア」

と、まだ腑におちないらしく、「この頃の人は、摘草なんて悠長なまね、……第一、とてもそんな暇がありさうにも思はれないぢアないか」

「あら、そんなことないわ。いくら世の中が忙しくなつたつて、女の人なら、一度や二度摘草に行つたことがないなんて、そんな人ゐないと思ふわ」

「へーえ、さうかなア。いつの間にそんなことするかなア」

「そんなこと云へば、小父さんこそ、いつの間にそんなこと覺えたの?」

「それアお前……」
「そらごらんなさいな。……誰だつて、いつとはなしに知つてるもんよ」
「ふーん」
「つまんないこと感心してばかりゐないで、小父さんもちつと手傳つて頂戴なね」
「よし、ぢア一つやるかな」
阿野もそこに蹲んで、枯草の間にニヨキ〳〵と頭を出してゐる瓢軽な、そのくせどことなく品のいゝ、一種趣のある草を摘みにかゝつた。都留子に云はれて氣がついてみると、成程人間には、いつどこでともなく知つて了ふことが澤山あつた。世の中が忙しければ忙しいなりに、さういふことは餘計ふえて行くらしく思はれた。
(えらいもんだ!)
どんな負擔にも堪へ得る人間のあたまの出來に對してとも、または次から次へ續いて來る時代々々の進歩に對してとも、そこまではつきりとは意識しなかつたけれど、たゞ漠然とした驚異や頼もしさの混り合つた感じが胸へ來た。
(いつどこでともなく、……こいつが大きい。これがなければ、人間の行き着くさきも、凡そ知れたものなんだけれど、この手で、前の時代までのことなら、なんでも、知るともなしに知つて了ふんだから、どこまで大きくなつて行くものか、まるであてもつきやアしない……)
そんな風な、業大的な希望に充ちた氣持になり、自分のやうな無爲放慢な一生などは、なんの役にも立つてゐないやうに見えても、矢つ張りそつくり取り除いて了ふことの出來ない一つの存在だ。少くとも、或る時代のいくつかの新し

い仕事を、林檎かなんかに見立てれば、それを次の時代まで持ち運ぶための、錯胼の役は勤めてゐるのだ。いくら出來がよくつても、林檎だけでは困るのだ。――この平凡な思考を、平凡を承知で、樂しく考へ續けた。人力、といふよりも、寧ろ自然の力の大さ、その可能性の極のなさ加減、さういふものを、目にこそたゝないが、いつもじり〳〵と動いてゐる親車の廻轉のやうに思ひ描くことは、軈てそこから動力を得て、目まぐるしくコチヨ〳〵と刻んでゐるやうな、一小さな一個人の歯車にさへ、馬鹿にならない値打を與へるのだ……。

阿野は、なんとなく、上が向きたくなつた。少し窮屈になつて來た腰を思ひきり伸し、土のついた手を打ち合せながら、山懐の上に廣がつた青空をふり仰いでみた。いゝ氣持だつた。

「どうしたつていふんだ。また馬鹿によく晴れたもんだな」

ひとり言の氣持だつたが、自然と聲は大きくなつてゐた。二人とも、發生した土筆の導くまゝに、いつかあちこちへ、十間も、それ以上も離れてしまつたが、都留子が、遠くから、何事が起つたか、といふ風に振り向けた顔が、いやに黄色ツぽく見えた。空の色を見詰めてゐた眼を、すぐに移したせいだな、と思ひながら、

「實に綺麗な空だよ。泥ばかり見てないで、たまにやア上を向いてごらん」

返事はしなかつたが、蹈んだまゝで、首を擧げ、心持胸を起したと思ふと、眼に見えない指先が、その額を突きでもしたやうに、コロリと、他愛なく尻餅をついて了つた。

「どうしたんだい、馬鹿！」

笑ひながら、揶揄つてみたが、默つて、崩れるやうに、横につツ伏したので、阿野は、聲も立てられないほど吃驚して、跳ぶやうに驅けより、うしろから抱き起した。青い顔がぐたりと、……目は輕くつぶつてゐた。

「お都留ちやん、どうした、しつかりおし！」

そこへすぐお藤も駈けよつて來た。

「どうなすつて？」

手のつけやうもない、と云ふやうに、眼を据ゑて、そこに棒立になつてゐるのに、

「ぼんやりしてないで、お前、足をお持ち！　兎も角日陰へつれてこう」

「大丈夫、なんでもないの」

額際から、玉のやうな汗だつた。

「あゝ、脳貧血でせう？」

「なんでもいゝから、早く足を持てよ！　あの茶店まで擔えて行かう」

「いゝえ、自分で步けますわ」

助け起すと、ぐつたり身をよせかけながらも、足は運べた。

「ぢアお前は、先へ行つて、あすこの床几にねかせられるやうにしとけよ」

「はい」

お藤はそばをすりぬけて、茶店へ馳けつけて行つた。

「なんでもない。すぐよくなるから安心しといで！」

「えゝ。……御心配かけてすみません」

「なアに、そんなこと……」

「一體、わたし、今日はちつと無理だつたの。……體の加減が……」
「それに、普段、あんまり始終うちンなかにばつかりゐるからさ」
茶店へ來てみると、お藤が、上に載せ重ねた床几をわきへおろさうとして、眞つ赤になつて働いてゐた。
「早くしろよ」
「さう仰有つたつて、中々これ重いのよ」
そばへ行つて片手ですけてやり、すぐそこへ腰をかけさせた。
「有難う」
前にかゝらうとするのを、さゝへ制めて、
「うつ向いちアいけない！　構はないからねなさい、ねた方がいゝ！」
云はれるまゝに、身を横たへたが、
「小父さんたち、あつちへ行つてゝ！　なんだか胸がむか〳〵して來たから」
「そんなこと、ちつとも遠慮することアないから、構はずお吐きよ」
「いやだわ！　どつか見えないとこに行つてゝ」
そのとき氣がつくと、都留子の左の手には、土筆を、一杯はみ出るほどくるみ込んだ手巾が、しつかり握られたまゝになつてゐた。騷ぎのなかにも、阿野には、それがひどく可笑しかつた。
「これはまア、おはなしなね」
と、手を持ち添へると、都留子も、ほんの微に口もとで笑つて、

「あら、ちつとも知らずにゐた」

「欲ばつてるから、一度握つたものは、死んでもはなさない氣だらう」

「あゝ丁度それがいゝ」

お藤が、そばからうけとつて、「何か枕になるものはないかと思つて探してたんだけれど……」

「枕はしない方がいゝんだ。支ふなら足の方へかつておやり。それから、帶をゆるめて、ちつと胸をあけてやるといゝんだ。……だアね、小父さんはあつちへ行つてるから、吐きたいだけ心置きなく吐くといゝや」

そのまゝ、阿野は、亞鉛屋根の茶店を出て、まづこれで一安心、といふやうな折の、特別味の深い煙草に火をつけながら、少し離れた岩角へ行つて腰をおろした。騒々しいほど藪鶯が囀り交して、山間の空氣は、たて切つた部屋のなかほど動かず、紫がかつた烟の、たゆたひながら、靜にのぼつて行くのも長閑だつた。

(緣談實だ)

ふと、いつぞやの即席の造語が、その時とはやゝ違つた色合を帶びて、あたまに浮んで來た。今の感じでは、それは、母親との交渉やなぞよりも、もつと餘計自然の力に動かされて來てゐるものゝやうだつた。あてのない、そして同時に意識しない戀の病とも云へやうか、體のなかに籠つて來てゐる自然の力が、形をとつてそこに現はれる道がないために、却つて我が身を損めてゐる、――さういふ風に觀るやうになつて來た。これもまた、緩やかな親車の廻轉から、一つの小さな齒車へ傳つて來る力だつた。その止めても止まらない動きを、一時たりとも靜止させて置かうとするのは、どういふ意味から云つても、いゝことゝは思へなかつた。

(誰でもいゝんだ、俺だつていゝんだ)

眞面目にそんな不思議なことを考へた。「俺だつて」といふ考へ方が、すぐ「俺が」になり、續いて、「誰よりも一番俺が」まで行つて了つた。そこまで行く間、少しも肉情的な慾望などには手傳はれず、どこまでも生眞面目に、相手本位に考へ進んだことに、ふと氣がついた時には、阿野も、もう少しで噴き出しさうになつた。然し、その眞面目くさつた滑稽は、我ながらいゝと思つた。ちつとも拵へたところのない愛嬌に、人間ばなれ、と云つては大袈裟すぎるかも知れないが、少くも男ばなれのした感じがあつて、ひどく阿野の好みにかなつた。

暫くすると、お藤が、小屋から姿を現して、

「もういゝの」

と、遠くから聲をかけ、すぐまた引つ込んで了つた。立上つて、二つ三つ尻をはたいてから、阿野は、ゆつくりゝゝ戻つて行つた。

「どうもすみません」

都留子は、後向に、丁度背負揚げをしてゐるところだつたが、さういふ聲音は、もうしつかりしたものだつた。

「そんな、立つたりして、いゝのかね?」

「えゝ、もう大丈夫」

「でも、すぐよくなつてよかつたね。……吐けたかい?」

「いゝえ、胸のむかゝゝするのも、小母さんに帶をゆるめて頂いたら、すぐなほつちやつたの」

「そりアよかつた。……然しちよつとおどかされたぜ。湖の上にいきなりコロツとねちまうんだもの」

「わたしだつて吃驚したわ。小父さんが空を見ろつて云ふから、上を向くなり、クラゝゝつとした思ふと、そこらぢう

一面に眞つ黄色になつちまつて……」

意味のない笑聲で遮つて、

「槃てかね？」

「えゝ、……隨分いやな氣持のもんね。なんだかかう、地の底へめり込んで行くやうな、とても欝陶しい氣持だつたわ」

「さうだよ、小父さんも、若い時分馬術の稽古をしてゐて、はつと思ふ間に、へんにあたりが暗くなつて來て、ヅルヅルヅルツと、たわいもなく馬からおつこつちまつたことがあるがね。馬場のなかだつたし、いゝ按配に並足の時だつたから、別にどこも怪我はしなかつたけれど、驚いたねえ。おつこつてからも、まだ、一體何がどうしたんだか、皆目自分でわけがわからなかつたつけ」

「さうね、全く早いわね、あら〳〵ッと思ふ間に來ちやうのね」

「へーえ」

と、お藤が感嘆して、「一體どうなるでせうね」

「頭の方へ血が通はなくなるのさ」

「あら、さうですか。あたしなんぞ、普段から至つて血のめぐりのよくない方なんだけど……」

「あんまり悪すぎるんで、腦貧血の方で愛想づかしをして、よりつかうともしないんだらう」

「そんなことかも知れないわね」

笑ひながらお藤は、うしろへ廻つて、都留子の襟もとや、背筋の皺を按配してやつた。阿野は床几に腰をおろし、そ

こへ置いてあつた半巾包を把りあげて、

「とんでもない餘興で、土筆ン坊なんぞ、どつかに飛ばして來ちまつた」

「えゝ、あたしも。そのくせ、半巾だけは持つて來てるのよ」

「みんな慾張つてやアがる。それぢア、折角とつた土筆ン坊を、どつかに振り撒いて來ちまつたんだね！」

「えゝ、きつとさうなんでせうね。憶えてないけど」

「俺は半巾だと、そつくりあすこへ置いて來た」

それを拾つて來てから、めい〱清水で手を洗つて、もしこれで、お金が殖えるやうに手が殖えたらどうだらう、三十三間堂へ行つて、千手觀音の仲間入りでもしなくつちやならない、などと戯れたりして、やがて作助の谷戸を町の方へおりて行つた。

四

同じ年の秋、ぱた〱と話が運んで、都留子は、名古屋の素封家の悴で、慶應の理財科を出て、三菱に勤めてゐる三十一歳の青年と結婚した。帝國ホテルで、二時から式、五時から披露と、萬事手つ取早くすますと、そこからすかに東京驛に乗りつけて、長途の旅に堪へないほどの老齢で、郷里の方に殘されてゐる新郎の祖父母を尋ね、旁々濟都あたりに樂しい新婚の日を送らうとして、八時半の急行でたつて行つた。

阿野は、どつちみち鎌倉へ歸る身ゆゑ、兩家の近親四五人や手傳の男たちと一緒に、汽車の動きだすまでプラットフオムに立つてゐて、一旦みんなと出口へ出たが、そこで別れを告げて、もう一度きた、一人で發車驛の方へ戻つて來

た。次の横須賀行までは、たつぷりまだ四十分ばかりも間があつたので、腹はくちかつたけれど、少し飲み足りない氣持から、食堂にはいつて時を消さうとした。

「野菜サラダかなんかで、……かうつと、日本酒は貰へませんかね？」

それから、バアの上の電氣時計を氣にしい〳〵飲み始めた。甁詰の酒が、肉食のあとの舌に粘りつくやうで、あんまりうまくもなかつたが、それでもよさうといふ氣にはならなかつた。味は二の次の、なんとなく醉ひがほしかつた。小さな凜附のコップで、慌しくあほりつけて、二合瓶一本綺麗にあけて了つたが、まだ時間が十分ばかり半端に殘つたので、今度はウイスキイを貰つて飲んだ。

街へ揚子でそこを出た時には、電燈のまわりに、チカ〳〵光る針のやうなものが映るほどで、自分でも眼つきの變つてゐるのがわかつた。紋のついた羽織の肩を滑りたがる二重廻しの袖を、掻きよせ掻きよせ、もう一度プラットフオムへあがつて行つたが、自然先刻の急行と思ひ比べられるせいか、どの客車もどの客車もがらあきに見え、見送人の影などは一つもなく、いやにあたりが深閑としてゐた。おまけに日曜で、景氣のいゝ若干の勤人たちが、半分はもう我が家へ歸りついた氣持で、傍若無人にワヤ〳〵と乘り込んで來るやうなこともなかつた。阿野は、長いボーギー車の片隅に、つまらなさうにぽつねんと腰をおろした。

（しまつた、夕刊を買つて來るんだつけ）

さう思つたのは、讀むものでもないと、ぐつすりねこんで了ひさうな氣がしたのだ。草履をぬぎ、いやにガサ〳〵仰山らしく鳴る袴の膝を胡座に組んで、ふか〳〵とクッションによりかゝつた。

たうとう四五人しか乘らないで發車して了ひ、新橋でも、幾人も殖えなかつた。つれもなく、讀みものもなく、一人

ぽつねんとしてゐたけれど、然し豫期された眠氣は來なかつた。却つてあたまがへんに冴え返つて、つい一時間ほど前に、東京驛の出口で、一番仕舞に、吻子と挨拶を取り交した時の有様などが、はつきり思ひ描かれて來た。

「どうも、なんともお禮の申しあげやうも御座いません。何から何までお世話頂きまして、……いづれ改めて、鎌倉の方へお禮には伺ひますけれど……」

　そんな風な、いつにない鄭重さが、とは云へ決してよそ〳〵しくは感じられなかつた。

「段々と、貴方もさぞお勞れでせう。……もう、ホテルの方は、萬事内村さんと柳君とでやつてくれることになつてますし、それに貴一君もゐますから、早くお歸ンなすつて、今夜はまアゆつくりおやすみなさるんですね」

「いゝえ、わたくしなんぞより貴方こそ、先達中から、いろ〳〵あちこちして頂きまして、さぞ……。ほんとにお構ひさへなければ、うちへいらしつて、今夜はゆくりおやすみくださるといゝんですけれど……、これからまた鎌倉までお歸りンなるんでは、大へんぢア御座いませんか」

「なアに、馴れてますから」

「さうですか。それぢアまアこれで失禮いたしますが、……ほんとうに有難う御座いました。どうぞ、おうちへもよろしく仰有つてくださいまし。わたくしも、いづれ兩三日うちにはお伺ひいたすつもりで居りますけれど……」

「どうぞもうそんな、……遠方のところを態々いらしつて頂いたりしては……」

　さういふ堅苦しい、他人行儀な挨拶のすぐ裏に、却つてお互の氣持はヒタと潜み隠れて、いやになるほどよく解つてゐた。もしも、いつもの調子でものを云ひ合ふとすれば、あまり感情がむき出しになりすぎて、どうしたつて、つい涙を誘はれて了ひさうなところだつた。それを、言葉のしかつめらしさで、どうやら心を甲つて、そのまゝ別れて來たの

だが、甲はれただけに、その奥の心は寂寞たるものだつた。それは、酒でもほぐれなかつた………。

ふと阿野は、小さんの「饂飩屋」といふ落語を思ひ出した。市井の男が、婚禮の歸り道に、夜泣饂飩を捉へて、罪のないぐだをまく情景で、ほんの夜更けの街のスケッチといつた風なものだつたが、醉漢らしく幾度も同じことを繰り返して、「おめえ、仕立屋の太兵衛を知つてるだらう。世間のひれエ男だ」と云ひ、そこの久しく見なかつた娘が、今夜婿をとつたが、自分の前にピタリと兩手をついて、さて小父さん……、と呼びかけたのが、なんとも云へず嬉しかつたものとみえ、「俺のことを、小父さん、小父さんてヤアがるんだ。どうでエ饂飩屋！」などと、たゞもうたわいもなく悦に入つてゐるあたり、なか／＼人情の機微を穿つてゐた。云ふまでもなく、今日の都留子は、「さて小父さん……」どころの騒ぎではなく、呉服屋の飾窓の人形よろしくで、カチ／＼に堅くなつて、始終うつむいたきりでゐたけれど、阿野の心の奥は、饂飩屋の屋臺に首を突つ込んで、たわいもないくだをまく男と、大した變りはなかつた。たゞその市井の男のやうに、何ひとつ阻まれるものもなく、自然に流露さすことが出來ないだけのことだつた。「俺のことを、小父さん、小父さんてやあがるんだ」のなかに含まれた殉情主義は、そのまゝ阿野のものでもあつた。從つて、娘の上よりは、母親の氣持の方へ心が向いて行き、そつちには、まざ／＼とした同感が感じられた。

むづかしく額に八の字をよせ、きつと唇を結んだ自分の顔が、向側の硝子窓に映つたり消えたりした。胸に高く腕を組んで、造りつけたやうに、阿野は、ぢつと空を見詰めてゐた……。

表停車場に出て、俥でうちへ歸り着いたのは、十一時半ごろだつたが、玄關のあく音に、お藤はすぐ跳んで出て來た。

「お歸ンなさいまし」

「フム」――

ひどく不機嫌に、鼻音で答へて、阿野は外套をかなぐり捨てた。

「いかゞでした。御無事におすみなさいまして？」

「あゝ」

「それアまアお目出度う御座いました。さぞ、お嫁さん、お綺麗だつたでせうね」

「うん」

長火鉢の前に坐つたが、いつも東京から歸つて來た時の、あの、なんとも云へない氣安さや落つきは感じられなかつた。それどころか、紫檀のちやぶ臺でも、その上の卷煙草入れや夕刊でも、座布團でも、茶簞笥でも、電燈でも、總て部屋のなかのものが、いつも在るべきところから、一分一厘はづれずに、きちんと置かれてゐるが、なんといふこともなくもの寂しく、氣が沈んだ。

「どうなすつたの？　馬鹿に元氣がないぢアありませんか」

微笑ひ顏で、お藤もそこへ來て坐つた。

「勞れた！」

調子よく出たその言葉ほどには、勞れが感じられてゐるわけではなかつたけれど、それよりほかに、元氣の惡からう理由とてもなかつたのだ。

「さうでせうとも！　先達中から、ほんとに貴方も、お大抵ぢアありませんでしたわね。それに、こんなことつて、すつかりすんじまつたとなると、氣のゆるみで、急にぐつたりと勞れが出るもんですから……。でも、ほんとうに結構で

したわ。何しろ、この四五年越し、なんていふとは、貴方もおかゝり合ひで……」

「なんのこたアない、自分の娘をかたづけてやつたやうな氣持だ」

「ほんとうに、あたしでさへ肩の荷が卸りたやうですわ」

「あゝ」

返事とも溜息ともつかない深い息を吐き出して、阿野は、兩手の中で顔ぢうやけにこすり廻した。老人らしく、眼の玉の奥が、グル〳〵ツと音をたてた。

「あゝ、さう〳〵」

と、お藤は思ひついて、「お風呂が沸いてますよ」

「なんだ、今時分まで……。無用心ぢアないか」

裏山の松は唸つてゐた。雨戸の隙を洩れて、硝子戸が、つゝましやかに鳴るほどの風になつて來てゐた。

「いゝえ、もう疾に燠になつてますから……。さツと浴びていらしてからおやすみンなつた方が、ずツと勞れがとれますよ」

はいらうか、よさうかを考へるでもなく、暫くぽかんとしてゐたが、

「あのお袋も、あれで存外氣のいゝ人さ」

と、だしぬけに、とんでもないところへ話を飛ばした。

「どなた？」

新しく淹れた番茶を、大きな六兵衛の湯飲に注いで、火鉢の上から手渡しながら、「都留子さんの阿母さんですか？」

「可なり念の入つたわからずやだけれど、あれで、矢つ張り、子供は可愛いゝんだね」
「それア、貴方、當り前ぢアありませんか」
「いや、時にやア、それがどうだか解らなくなるやうなむちやも云ふ人だがね」
「でも、今日はさぞお喜びでしたでせう？」
「うん、それアね……」
喜しさうよりも、寂しさうなところが、阿野の心には深く觸れてゐるのだが、然し、そこまで立ち入つて話して聞かせるほどの氣持もなかつた。それで、少時話が杜切れた。阿野は、鼻の上に海老皺が出るほど堅く眼をつぶつて、熱い熱い茶を、音をたてゝ少しづつ啜り込んでゐた。
「お姈さんは、和服でしたの？……洋服？」
それには、和服？　と云ふ問ひに首を振つて見せただけで、何うまさうに茶を啜り續けてゐたが、鼻の頭を掠める湯氣をむづ痒さうに、ブルンとやつて、
「まア、然し、お都留ちやんも、これからだよ。これから先の永い間には、いろんなことがあるんだ。嬉しいことや悲しいことや、泣いても笑つても追ツつかないことや……」
「さうねえ」
お藤も茶を飲みながら、阿野に惹き込まれてか、沈んだ調子で、ぢいと火鉢の火を見詰めながら云つた。
「人の一生つてものは、なか〳〵これで大へんなもんだ」
「でも、いろ〳〵浮いたり沈んだりがあるんでいゝんでせうねえ」

「むづかしいやうな、陽氣なやうな、……へんなもんさ」

「お婿さん、よささうな方ですか」

「まアよささうだがね。それア人間だから、いゝとこも惡いとこもあるだらう。何しろ、お都留ちやんにも、これから
いろんなことが起つて來るんだ」

縁の下で蟲が鳴きだした。何か、火鉢のそばへでもよつて來たさうな、枯々とした、心細い聲だつた。お藤は、小さく欠伸を嚙み殺してから、ふと柱時計をふり仰いだ。

「どうなさるの、お風呂？」

「さうさなア」

「やがてもう一時ですからねえ」

「明日の朝、起きぬけにはいれるやうに焚きつけさせといて貰はふか」

「えゝ、ぴツたり蓋をして置いて、明日の朝、ぼうツとひとくべしたら、すぐはいれませうよ。……ぢア、お召換なさいませんか」

「あゝ、ねよう、勞れた、勞れた！」

今度こそ、ほんとうに芯から勞れた氣持だつた。口に出してさう云ふと、急にもう矢も盾もたまらなくなり、羽織袴のまゝで、いきなりそこへ横にならうとした。

「あゝ、いけません、いけません！」

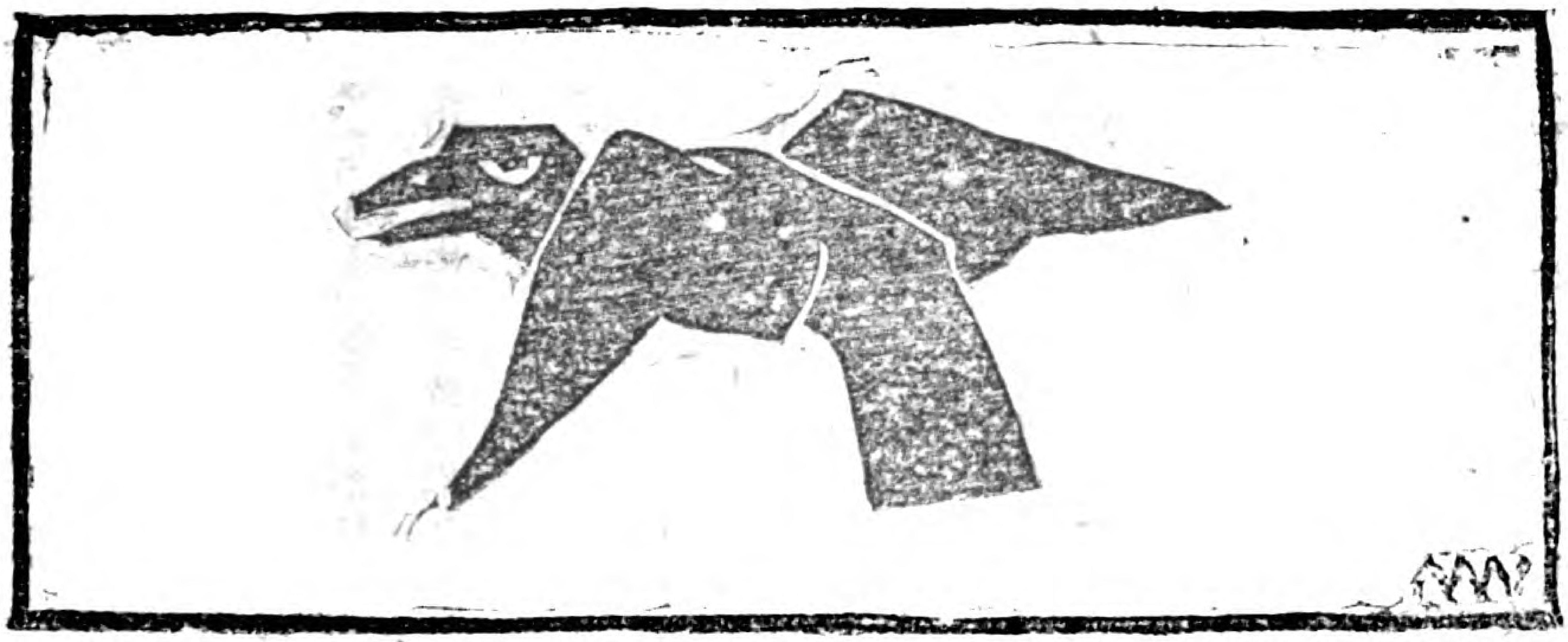
お藤が慌て立つて行くと、手早く、莫蓙の上に出してあつたフランネルの寢間着の襟もとを捌いてハラリと廣げ、長

長と足を投げ出して、後手に、やつと上半身だけを支へ起してゐる阿野のそばへよつて來た。「さア、ちやんとお召換なすつて……。そこでごろねをされちやつたひには大騷動だ」

「よいしよ！」

かけ聲かなんかで、威勢よく身を起したが、足もとがヒョロついて、お藤の肩につかまり、やつと踏みこたへて、阿野は、うーん、と、いかにも元氣のよい唸り聲をあげた。

裏山の松に、疾風のやうな風が亘つて、それがすぎると、急にあたりがしんとした。



『ふぉつくすとろっと』

諏訪三郎

1

ダンスの先生である園部銀子の家庭へ、どうして私が出入するやうになつたか？百姓型（ファマアタイプ）の野暮臭い私を知つてゐる人達は、さぞ、花簪をさした猿の如くユーモアがあり過ぎると笑ふであらう。しかし、これはたいしたことではないのである。友人のMがその家に下宿してゐるからなのだ。それよりも奇怪なのは、このMである。Mは、我が日本の文壇の生んだ珍らしい幻想的作家として有名であるばかりでなく、三十にもなるこの年まで彼が、大の女嫌ひであるといふので友人間の評判者なのである。そのMが、こともあらうに若い女が始終出入して、毒草園のやうに悪どい色彩と、蒸せ返るやうな脂粉の香とで埋められてゐる園部銀子の家庭へ下宿したといふのは、いつたいどうした物好きからなのであらう。そのことについてMは、

頰を赤めながらいろいろと辯解するのである。しかしMの理由とするものには、どれも必然性がない。どうやらMの女嫌ひといふのも、當にならなくなつたのである。だが、そんな詮索は、この際どうだつていゝことなのだ。女嫌ひだといつて、女の側へ寄つていけないといふ苦もないのだから。Mは、銀子の家庭にあつて、――彼女はまだ獨身者であつたし、中學へ通つてゐる弟と、叔母さんだといふ出戻りの女との三人ぐらしのところへ、殆ど家族同樣に棲んでゐた。

「淳子さんがね。……」

そのMがあるとき、私に耳打ちした「……そら淳子さんさ、知つてるだらう。」

Mは、銀子の家へ出入りする女たちとも、すぐ知合になつてゐた。私も、その中の――おそらく文學に趣味をもつてるらしい幾人かの女に紹介されたことがあつたが、それきり言葉も交さなかつたし、淳子といふ女は記憶になかつた。

「淳子さん?」

私がかう訊きかへすと、

「うん。ほら、スペインの女の……」

Mは、淳子といふ女を私に思ひ出させようとして説明した。

さうか。」

――あの女か! 第一、あの女をスペインの女といふからしてMは、女の正しい批判家ではなかつた。あの女を、なにもわざわざ外國の女に喩へる必要などは少しもないのである。なるほどその女は、よく赤いマントでからだを裹んでゐた。大胯のステツプは、リズミカルに彼女を跳躍さしてゐた。然しそれらは、彼女のほんの上衣に過ぎないのである。彼女の性格的なすべてのものは、ありきたりの日本の女に過ぎなかつた。

「あの女がどうしたのだい?」
「君にね、頼みたいことがあるのだつて。」
「僕に!?」
百姓型の私は、女に對して全然己惚れがなかつた。あの赤いマントの女が……私は、ちよつと意外だつた。
「なにを頼もうとするのだい?」
「僕もそれは知つてるがね。」Mは、私の氣持を見拔いて、からかふやうに笑つた。……しかしそれは、淳子さんからぢかにきゝたまへよ。今晩にでも逢つてくれろ? あの女はいま、君にも話したつけね、R橋のところにある表現派のカフエ・トルラアな、あそこにゐるんだよ、あの女がミストレスなのだ。」
私は、淳子が表現派のカフエを經營してゐるなどゝいふことを、つひぞMから聞いたことがなかつた。おそらくこの女嫌ひだといふMは、彼のいふスペイン女の話を、友人といふ友人に、片端から吹聽し廻つてゐるので、私にもそれを聞かしてあるものと感違ひしてゐるらしかつた。それに、表現派のカフエなどゝいふのも、淳子をスペインの女といふ程度のMの幻想なのであらう。で私は、そのことをあまり問題にしなかつた。
「それは、逢つてもいゝが。」
「淳子さんはね、君の家へ伺つてもいゝかつて、云つてゐたがどうする?」
「僕の家? 少々いやだな。」
「そんなら、君の方でトルラアへ出かけてくれる?」
「先方でかまわないのならね。」

「淳子さんは、どつちでもいゝのだよ。」
「そんなら、さうしよう。」
そのカフエといふのは、R橋へ行けばぢきに分ることであらう、私はふと、まだ時間もあるところから、顔でも剃つて出かけようかと思つてゐる自分に氣づいた。そして、むせかへるやうに噴き出してしまつた。
「なぜ、笑つてるのだい？」
Mが、變んな顔をしてきいた。
「いや、なんでもないのだ。見合ひなら、少しおめかしをしようかと思つてね。」
「フンフンフフフ。」
Mは、嬉しさうに笑ひ出した。

2

カフエ・トルラアの二階、桃色の笠のついたスタンドを間に置いて淳子と私とは向ひあつてゐた。淳子は、夜の化粧を、いつもより濃く奇麗にしてゐたが、面窶れのした痛々しい神經が、淋しさうに漾つてゐた。
――淳子が私への頼みといふのは、當時私がある婦人雜誌に關係してゐたところから、一つの情話を、その雜誌にのせて貰ひたいといふのであつた。（M君！　こんな雜用をなぜ君はあんな思はせ振りないひ方をしたのだ。そのために僕は、他に用事もあつたのを、わざわざ淳子のところへ行つたのだに。）――材料だけは極めて豐富なのである。だが淳子には纏つた文章は到底書けない、だから、その材料を供給するから私に書いてくれといふのであつた。

「……こゝに、洋行歸りの、それァ容子のいゝ青年紳士がゐるの。背がすらりとしてゐてね、顏などもギリシャ型で上品で立派だわ。ある貿易商館の秘書役をしてゐるのだが、外國語はむかふの人そつくりで達者だし、どんな仕事だつて出來ないものはないし、それに重役と顧客とには從順だといふので、ビヂネスマンとしても最上級の人よ。だから、勤め先の信用はあつて、重寶がられてゐるの。しかしこの紳士にとつて情けないことは、收入がほんのちよつぴりなの。その癖この紳士は、非常な見榮の好きな人で、たとへば妻と話をすることだつて、今日は警視總監と昔飯をして思はぬ散財をしたとか、明晩は德川公爵のお茶に招待されたのだが、なにを贈物したらいゝだらうとか、そんなことばかり話して、一方では、自分の實際の收入を瞞着しようとしてゐるの。住宅なども、まるで身分相不應のものなのだわ。もとSの公使館であつた屋敷をね、尤もそれは重役の方が買ひとつたのを安く借りたのですが、そこに住んでゐるの。塔に昇つて行くやうな螺旋狀の階段がありましてね、その二階には、舞踏室さへあるのよ。……」

かういひながら淳子は、淋しさうな瞳をだんだん潤澤のあるものにさせながら、笑ひ出した。

「……こんな廻りくどい云ひ方はよしませうね。その青年紳士といふのは、三好なのですわ。」

「三好？」

情話製作を依頼されるなどゝいふことは、恰も吐き出された食物の臭氣をかゞされてゐるやうなものである。いかなる高價な犧牲がそこに拂はれてゐようと、また嘗つてはそれらのものが彼等の食膳を如何に賑はしたものにしろ、それとはなんの關係もない情話作家にとつては、吐瀉物に過ぎないものである。これァ、ひどい役目にひつかゝつたものだ！さう思つて、最初から厭氣のさしてゐた私も、場合によつては、依頼者の註文とは全然別な讀物が出來るかも知れない、といふ雜誌記者としての職業的な興味が少しづゝ湧いて來てゐた。

「……三好、……わたしの良人であつた人ですわ。」

淳子が急に萎れて云つた。

淳子が人妻であつたとは！　あの娘々した赤いマントの女が！　そろそろ妻君を物色しようとしてゐた頃の私であつたから、ひどく驚いた。―私に、普通の娘と、人妻との見境がどうもつかなくなつたのは、このときからのことである。

淳子の話によると、彼女は、W大學教授の媒介で、三好と正式に結婚したのださうである。たゞある事情から籍だけは入れてなかつた。男はそれをいゝことにして、この頃は彼女を家庭から追ひ出して、新しい愛人と同棲してゐるといふのであつた。

「……三好は、ひどい色魔ですの。」

淳子は、かういふことを、さう興奮もせず、また羞(はぢ)らうともせずに語り續けた。「……三好は、私の前に家庭をもつたことがあるの。女には子供さへあつたのを、洋行するときに足手纏ひになるからつて、無理矢理別れてしまつたのです。歸朝後、私と一緒になつてからもその女は、子供をつれて二三度訪ねて來たことがあるわ。そして泣きすがるやうにして子供の振り方を相談するのだけども、三好は實に冷淡にそれを突つ離したのよ。いま一緒に棲んでゐる女だつて、戀愛からでないことは私にはちやんとわかつてゐます。第一、綺麗好みの三好が、あの女(ひと)を心から好いてる筈はない。ほんの一時のなぐさみものなのだわ。すぐ捨てられるにきまつてますの。だからわたし、自分が馬鹿をみたのは仕方がないとして、今度の女(ひと)にまで、私のやうな悲しい思ひをさしたくないと思つて、こないだもわざわざあの女(ひと)の實家へ行つて來たの。そしてお父さんだといふ人にお逢ひして、なにもかも三好のわるいところを話してしまつたの。ところがどうでせう、先方では親たちまで三好に、もうすつかりまるめられてゐるらしく、私の話など碌すつぽ聽きもしな

いのよ。そして、二人が同棲してゐるのも見て見ぬ振りをしてゐるのです。そしたらほら……」淳子は、用意してあつた或る新聞の婦人欄を私の前に展げて、結婚披露の寫眞を指し示した。「よくも洒蛙洒蛙として、こんなものを載せたものね。女のことを××男爵令孃だなんて、まつかな嘘よ。三好の家で頼んだことのある派出婦なのですもの。お父さんて人は、區役所の小役人なの。だから、三好の出鱈目に第一親達がすつかり乘り氣になつてゐるのだわ。……で、わたし、どうしてもこのことを雜誌に書いていたゞきたいの。あなたなどの眼から見れば、いくらも問題があるでせう。だから、いゝやうにこれを纏めて書いて下さらない？わたし、三好なんて男も社會から葬つてやりたいの。しかし問題は、そればかりでないと思ふわ。」

「なるほど、問題にはなりますね。」

――だが、淳子のこれだけの話のまゝでは、それこそ、氣の利かない情話に過ぎなかつた。そして雜誌記者としての私は、もうこの種の情話なら、書き飽きたほど書かされて來てゐた。で私は、自分のある想像をたしかめるつもりで云つた。

「あなたと三好さんとは、どういふ關係から結婚したのですか？」

「わたしですか……」淳子は心もち頬を染めて云澁つた。「…わたし、そのことはあまりお話したくありませんのよ。」

「それなら、結婚前のあなたの生活は？」

「たゞ、私のお話したことだけで纏めていただきたいのだわ、わたし。」

「そんなら、どうしてかう云ふカフヱなどをおやりになつたのですか？失禮ですが、その資金は？」

「いけませんわ。だつてそんな私、個人のことまで他人が立入ることは、わたしの氣持が許しませんもの。」

「さうですか。」

私は、淳子のずるさが不愉快になつたので、そつぽの方を向いて默つてしまつた。隅の卓上におかれたシクラメンの鉢を私はみつめてゐた。淳子も、なにか頭のなかで思ひ描いてゐるやうであつたが、にはかに、爽かな春風にゆらめいたチューリップのやうに、彼女は微笑んで來た。

「女が三好のやうな男にだまされるのは無理もないのだわ。それア素的なのですもの。モーニングが一番三好には似合ふの。とりすましたペンギン鳥のやうにね。」

淳子の唇になにかゞ觸れて來たらしかつた。彼女の薄手の唇が、恍惚の中で蠢り出した。

「まア考へて見ませう。」

私は自棄に、ソーダ水を喫んだ。慘めな情話作者よ！　私はもう今後、いくら職業だからと云つて、情話なんか書きはしないだらう、――と私はいきまいた。考へてみると云つたのは、無論その場の口實に過ぎなかつた。

3

私は、もう一年近くも園部銀子の家庭へ出入りしなかつた。Mが、支那へ遊びに行つたので、その家庭に用事がなくなつたからである。

――かういふと私が、いかにも園部銀子の家庭に、少しの未練ももたないやうに聞えるかも知れないが、それは誤りなのである。しよざいのないとき、いや、激しい情熱に魂が燻し出されてもがいてゐるやうなときなぞ、私の頭には、園部銀子の家庭が、花園の魅力をもつて浮び出されてくるのである。銀子の家へ行けば、そこにはきまつて一人二人の

若い女が、麝香鹿の如く匂を放ちながら、肥えふとりゆく肢體をたるましてゐた。……私にそんな妄想が起るだけに、Mの居なくなつた銀子の家へ私は、自分から出入が出來なくなつてゐた。淳子とのいつかの話も、無論それきりになつてゐたのである。

ところが、最近になつて私は、旅行先のMからの手紙で、閨部銀子の家を訪問した。旅行先で買つたものを銀子のところへ送るついでに、私にもなにか送つて寄越したから、銀子の家までそれをとりに出かけてくれといふのであつた。

私が、銀子の家をたづねて行くと、彼女の弟が玄關に出て來た。

「どなた？」

銀子の聲が、茶の間の方でした。

銀子のアクセントは、私と同じ東北人特有な、變んにきゝとれない訛りがあつた。Mは、その訛りさへ、永くアメリカにゐたので、日本語が話せなくなつたのだと、私にいつか紹介したことがあつた。(私の親しい幻想的作家のMよ！まるで君は、現實に對しては色盲だぞ！)

銀子の家の玄關には、いつものやうに踵の高い女の靴や駒下駄などに男の履物まで混つて、一杯脫がれてあつた。夕方であつたから、近くにあるダンスホールへ行く前にこゝに寄るものが多いのであつた。

銀子の聲のする部屋へ、私は入つて行つた。

いきなり、むうツとしたほてりと匂とが私の顏をうツた。そこはまるで、オペラ女優の樂屋だつた。公開を禁止された風俗壞亂のフイルムの一場面だ！　私は思はず一歩を室外へ退いた。

「おほゝゝゝ」銀子が、なんでもないやうに笑つた。「……ごめんなさいましよ。」

「あつちへ行きませう。」
私はもぢもぢしながら、Mの借りてゐた部屋へ行かうとした。
「かまひませんの、こちらへお入んなさい。」それから銀子は、慌てゝ私をとめた。「そつちこそいけませんよ。」
女たちが、くすくすと笑ひ出した。
銀子は、腰のあたりにちよつとしたものを卷きつけたまゝ、からだ一杯に、白粉とクリームとをふりかけてゐた。銀子のすぐ側には、ひとりの美しい女が、堅い帶をときかけてゐた。羽二重の長襦袢がまつかに燃え出した。私は、いま着物を脫がうとしてゐるこの女を知つてゐた。宮中顧問官である或る華族の一人娘で、保守主義な父親がどうしても許してくれない洋服を、無性に着たがる女であつた。帝大出身の秀才だといふ點で父親が選んでくれた良人と家庭をもつてゐるのであつたが、彼女はその秀才をいゝ加減になだめすかしては、よくダンスホールに出かけて來た。彼女は、銀子のところへ幾組かの洋服を預けておいて、そこで着換えをしては、ダンスホールへ、夜の銀座へと姿を現すのである。ダンス仲間で彼女の身分を知つてゐるものは、殆ど居なかつた。銀子が口止してゐるからである。私はMから非常な秘密を打ち開けるやうにして敎えられたのだが、大抵の人々は、彼女が人妻であることも知つてゐなかつた。それも決して無理ではないのである。結婚した女なら、あんな風に誰にでも嬌羞を送つたり大膽に步くものでないと人々は思つてゐるからである。
着換えをしてゐる女から少し離れて、喉にくまを入れてゐる洋裝の女があつた。鏡にうつてゐるその顏で、私はそれが淳子であることをすぐに知つた。私の顏も彼女の鏡の中にうつつたらしく、鏡の中の彼女が、につこり笑ひながら、
「しばらく。」

と、台詞のやうに落ちついて私に挨拶した。

「この前にお願ひいたしましたこと、考へておいて下さいまして？」

鏡の中の顔が、媚びるやうに私に云つた。

――おや、この女はまだあんなことを考へてゐるのかしら？　いや、たしかに戯談を云つてゐるのだ、と私はそのとき思つた。その諧謔には、彼女の顔には、以前のやうな面窶れのした淋しさがどこにもなかつた。彼女の瞳は幸福をはらんでいきいきと輝いてゐた。彼女はおそらく、あんなことを私に訴えた自分を、いまではをかしく思つて、こんなことを云つてゐるのだと私はひとりできめてしまつた。

「えゝ、考へておきましたよ。」

私はなんて馬鹿な巫山戯方をしたのだらう。

「さう、どうも難有う。是非お願ひいたしますわ。検事さんもね、さういひましたわ。……」

彼女から、こう乗り氣になつて、まじめに云はれたとき、私は返事にまごついてしまつた。

「検事さん？」

私は、しかたなしに、こんなことを云つた。

「さうでしたわね、あなたはその後のことをお知りなさらないのだわね。あの事件をわたし、裁判所へ訴えたのよ。結婚不履行、慰藉料請求の問題で。辯護士もたのんであるのだが、係りの検事さんが私に同情してくれてますので、わたし、自分で一昨日も昨日も裁判所へ喚び出されて行つて來たの。明日も行くことになつてるのだわ。それでその検事さんもね、さういふ三好のわるいことを雑誌にでも出れば、非常にいゝ参考になつて、わたしに有利だつて、云つてゐた

わ。」

淳子は　勝ち誇つたやうに云つた。さういふ彼女の態度が私に、淡い不快さを與へた。いゝ都合であつた。

「僕は本當のところ、もうさういふものを書きたくないのです。」

さうきつぱりと斷ることが出來た。

「えゝ、それはなにもあなたに限りませんから、よござんすわ。」

淳子は不機嫌さをあからさまに現はして、あつさりとしてゐた。これでは情話作家が、先方から斷はられたやうなものであつた。私は思ふさま淳子を罵倒してやらうかと思つた。そこへ、銀子が口を挾んだ。

「淳子さんは、それでは明日も歸りがおそくなるのね。」

「たぶんね。」

「皆さんが大勢集るといふのに、あなたがゐないと困るわ。どう？　その檢事さんに、事情を云つて早く歸して貰ふわけにゆかないの。」

「それは、わたしから賴めば、どうにでもなるわ。」

それから淳子は、誰にといふでもなしに、自分勝手に話し出した。「昨日なども、夜遲くまで濟みませんつて檢事さんが、頻りに詫びを言つてゐたわ。そしてね、親切な方よ。日比谷公園の方はいま下水工事をしてゐて歩きにくいし、櫻田門の方へ出るには途中が眞暗で婦人ひとりでは危險だから、少し遠くとも虎の門の停留場から電車にお乘りなさいなんて云つてくれたわ。それよりもをかしかつたことはね、その檢事さんは若い方だから顔を眞赤にして、こんなことを御婦人にお伺ひするのは甚だ無躾なのですが、參考にまでお訊ねするのですから、惡しからずに遠慮なくお答へ下さ

いなんて、怯づ怯づしながら、それァ突つ込んだことを訊くのよ、おほゝゝゝ。」

壁側に並んでゐた女たちが聲を出して笑つた。淳子は、私の方を振りかへつて云ひ出した。

「……そのとき私が檢事さんにお答へしたことを、あなたにも申上げれば、この事件に興味をもつていたゞけるのだわ。」

彼女はをかしさうにまた笑ひ出した。「聽きたくない！」私は表情でかう拒んだ。

「……なにしろ三好は、今度の女と結婚する朝まで、私と逢つてゐたのですからね。その前の晩だつて私のとこへ來て、涙を流しながら、どんなことがあつてもお前と別れる氣にはなれない、弱い男だと思つて、暫らく忍んでくれなんて、わたしを……」

彼女は嬉しさうに笑ひ出した。——少しも興味なんかもてない！——私のかういふ反感を彼女は、やうやく氣づいたと見えて、まともに私を見てゐた顏をくるりと鏡の方へ向き直すと、アカンベーをするやうな手つきで片方の瞳を大きくくるくると動かしながら、くまをいれはじめた。

「なんでもいゝや、なにも怖くないんだ。檢事だつて裁判所だつて少しも怖くなんかない。」

淳子は、勝ち誇つたやうにいふと、鏡面にうつる自分の艶やかな顏が、媚惑的に笑ひ崩れて來るのに心を躍らしながら、『ふおつくすとろつと』を晴れやかに口ずさんだ。

——私のすぐうしろの襖が開いて、一人の青年が顏を出した。私が「入つてはいけない」と銀子から云はれたMの部屋から出て來たらしかつた。私はさいぜんから、その部屋の氣配が、變んに氣になつてゐた。

「先生、どうもお邪魔いたしました。」

さう云つてゐる青年を、女たちは偸見した。

「もうおかへり。」

襖間がまた閉められて、青年の妻がかくれたとき、銀子は大きな聲で青年の名を呼んだ。

「××さん、あなたこれから、どこへいらつしやるの。」

襖間の外から咎めだてられたものゝ遠慮がちな返辭があつた。

「ホールへ行きます。」

「いらつしやつてもかまひませんが、あの女をひつこぬくやうなことはお斷りいたしますよ。」

「なんのことですか？」

「しらばくれちやいやよ。×××プロダクションの方よ。あたし、あの方を無理に來ていたゞいてゐるのだから、ほんとにばかなことをしないで下さい。」

襖間の外の聲は、臆病であつた。

「大丈夫ですよ。」

襖間の外の聲は、小さくふくれながら、外へ出て行つてしまつた。女たちが、くすくすとまた笑ひ出した。

「あの子供は、誰にでも手を出すのだから、油斷がならないのね」

草色の、ほつそりした洋服に着換えてしまつた――華族の若奥様だといふ――女が、ちよつとあしらつた。

「えゝえ、しようのないボーイですわ。」

銀子は、ぷりぷり慍つてゐた。

いなんて、怯づ怯づしながら、それァ突つ込んだことを訊くのよ、おほゝゝゝ。」

壁側に並んでゐた女たちが聲を出して笑つた。淳子は、私の方を振りかへつて云ひ出した。

「……そのとき私が檢事さんにお答へしたことを、あなたにも申上げれば、この事件に興味をもつていたゞけるのだわ。」

彼女はをかしさうにまた笑ひ出した。「聽きたくない！」私は表情でかう拒んだ。

「……なにしろ三好は、今度の女と結婚する朝まで、私と逢つてゐたのですからね。その前の晩だつて私のとこへ來て、涙を流しながら、どんなことがあつてもお前と別れる氣にはなれない、弱い男だと思つて、暫らく忍んでくれなんて、わたしを……」

彼女は嬉しさうに笑ひ出した。——少しも興味なんかもてない！——私のかういふ反感を彼女は、やうやく氣づいたと見えて、まともに私を見てゐた顏をくるりと鏡の方へ向き直すと、アかンべーをするやうな手つきで片方の瞳を大きくくるくると動かしながら、くまをいれはじめた。

「なんでもいゝや、なにも怖くないんだ。檢事だつて裁判所だつて少しも怖くなんかない。」

淳子は、勝ち誇つたやうにいふと、鏡面にうつる自分の艶やかな顏が、媚惑的に笑ひ崩れて來るのに心を躍らしながら、『ふおつくすとろつと』を晴れやかに口ずさんだ。

——私のすぐうしろの襖が開いて、一人の青年が顏を出した。私が「入つてはいけない」と銀子から云はれたMの部屋から出て來たらしかつた。私はさいぜんから、その部屋の氣配が、變んに氣になつてゐた。

「先生、どうもお邪魔いたしました。」

さう云つてゐる青年を、女たちは偸見した。

「もうおかへり。」

襖間がまた閉められて、青年の姿がかくれたとき、銀子は大きな聲で青年の名を呼んだ。

「××さん、あなたこれから、どこへいらつしやるの。」

襖間の外から咎めだてられたもののゝ遠慮がちな返辭があつた。

「ホールへ行きます。」

「いらつしやつてもかまひませんが、あの女をひつこぬくやうなことはお斷りいたしますよ。」

「なんのことですか？」

襖間の外の聲は、臆病であつた。

「しらばくれちやいやよ。×××プロダクションの方よ。あたし、あの方を無理に來ていたゞいてゐるのだから、ほんとにばかなことをしないで下さい。」

「大丈夫ですよ。」

襖間の外の聲は、小さくふくれながら、外へ出て行つてしまつた。女たちが、くすくすとまた笑ひ出した。

「あの子供は、誰にでも手を出すのだから、油斷がならないのね！」

草色の、ほつそりした洋服に着換えてしまつた――華族の若奥樣だといふ――女が、ちよつとあしらつた。

「えゝえ、しようのないボーイですわ。」

銀子は、ぷりぷり惱つてゐた。

「いたづらされる女の方も、どうかしてるのだわ。わたしだつたら、こつぴどい目に逢はしてやるのに。」

淳子は、征服者のやうに、蹴散らすやうに朗かに云つた。

壁側にゐる女達は、お互のからだに絡みつくやうな身振りで調子をとりながら、『ふおつくすとろつと』を口ずさんでゐた。

4

いつたい私は、ダンスといふものを好きでなかつた。男女の間の秘すべきことを、公然とやつてゐるやうな氣がするからである。

ダンスホールの空氣は、さらに厭はしいものであつた。濟しこんだ女の顔は、嬌慢な征服者の凱歌である。約ましやかな娘の表情は、賣春宿の斷面だ。男たちは、女主人のもすそをかぎ廻る意氣地のない番犬。……それだのに私は、Mがゐた當時は、踊りこそしないがよくこのホールへ足踏みした。春が過ぎようとするのに花咲かぬ薔薇の憂欝……どうもこればかりは、理窟や感情だけではどうすることも出來ないらしい。だから、私だつてどうかした拍子に、格好な相手がみつかつたならば、心を顰めながらも息苦しいまでに亂舞するかも知れないのである。いや、それは私に限つたことでもないらしい。ダンスを踊る人々の中には、男だつて女だつて、さうだ男だつて女だつて心を顰めながらも内に燃える魂の病熱のために息苦しいまで亂舞してゐるものも多いことであらう。………

銀子の家を訪ねた夜、誘はれるまゝに私は、こんなことを思ひながら一人おくれてダンス場の扉をあけた。

蓄音機から賑やかな音樂が、渦巻きながら流れてゐた。四五組の男女が、廣いホールで踊つてゐるきり、多くの人々

は、壁側に並べられた椅子に憩んでゐた。男女がさゝやきあつてゐるのも幾組かあつたが、多くはなにか重苦しさうに、男は男、女は女とかたまつて、たゞ心臓だけがものいひたげな瞳をして喘えてゐた。私は銀子に會釋すると、そのひとかたまりになつてゐる男たちの側に腰をおろした。銀子の家で問題になつた×××プロダクションの女といふのを、ちよつと眼でさがしてみたが、かう女が大勢ゐては、私にはどれもこれもプロダクションの女に見えて、どの女がそれだか、はつきりわからなかつた。

「なぜあなたは踊らないの？」

つい近くで女の私語く聲がした。その方を振り返つてみると、すつかり美しくなつてゐる淳子であつた。

「…………」さう云はれた青年は、金釦をつけた學生であつたが、なにかわからぬことを、口の中でむぐむぐ云つてゐた。

「こんなに女がゐるのが、あなたには分らないの？」

淳子が、からかふやうに云ふと、その青年は腹立しさうに云つた。

「女がゐるくらゐは、分つてます。」

「理窟を云ふものでないわ。さア。」

淳子は、誘ふやうに手を出した。

「――理窟でない。僕に男と女の見境ひがつかないやうな云ひ方をするからさ。」

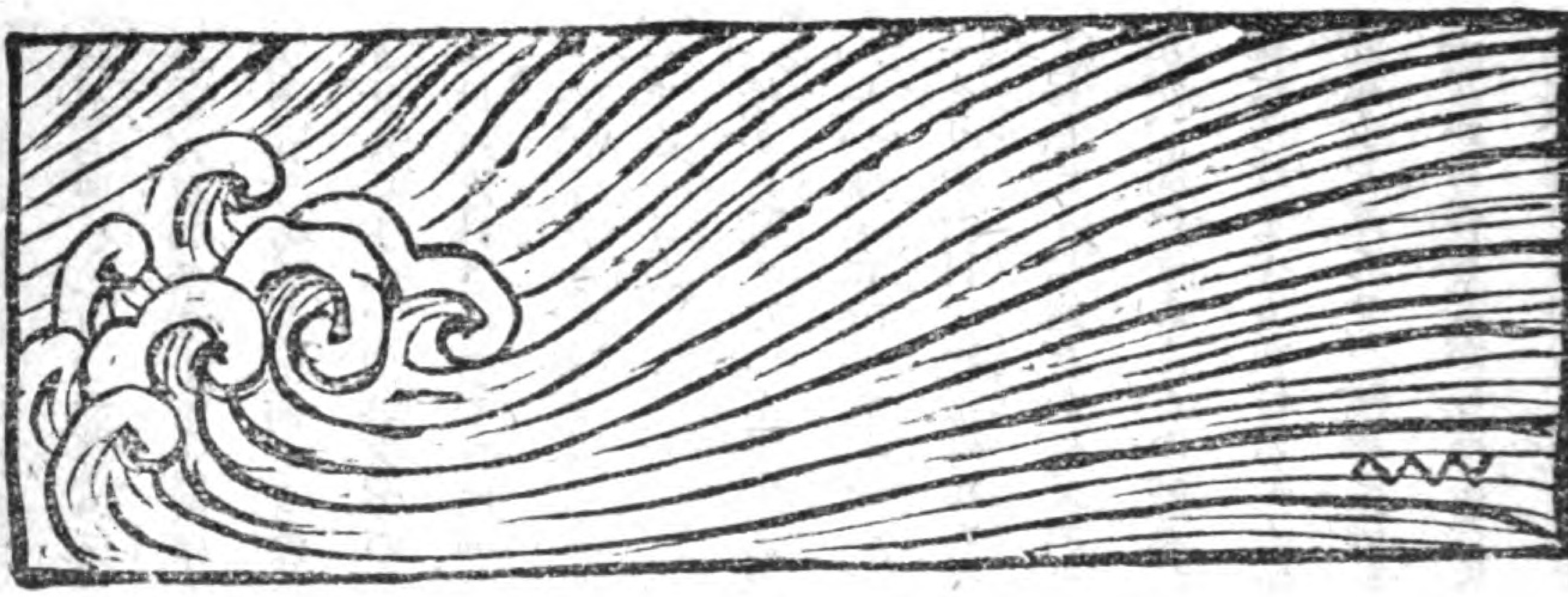
「それが理窟よ。見境ひがつかないくらいが可愛らしくていゝの。さア、わたしがお相手になるわ。」

青年は、不精無性立つた。だが、なにかゞ輕くなるのを感じてゐるらしかつた。

淳子と一靑年との一組と前後して、幾組かの男女も、音樂の支配するリズムと情熱の渦中にまきこまれて行つた。『ふおつくすとろつと』を踊つてゐるのである。たゞ一人私は、呆然とした氣持の中に、變んに心が歪められて來た。

……いつたい淳子などゝいふ女は、どういふ氣持ちから私に情話などを賴んだのだらう？　さういへば、裁判に訴えたのさへ分らなくなつて來た。もし、情話作家と檢事とが、彼女の註文と訴へとに忠實であり、愚直であつたならば、この世の中を晴れやかな舞踏場として、その若さの續く限り、『ふおつくとろつと』を踊りぬく彼女の裳裾にかゝる塵拂ひの役目を勤めることになるのだ――といふやうなことが、私には皮肉に考へられて來た。

――完――



あら磯

室生犀星

姉は小聲で、「好きなやうにさせて置けばいいんだからお前は何も言はないでゐてくれ。」と耳近く囁いて、小用に立つた弓島のうしろに尾いて來た。廊下づたひに庭のへりに並べられた西洋草花の鉢が、古い苔の生えた庭と不釣合に半ば枯れ込んで眺められた。

「春に送つた分ですね。」

「何しろ潮風が荒いもんだから折角の花も枯れてしまつてね。」

姉は病人の慰さめにと此の春、弓島のゐる市街（まち）へ注文して送らせたベコニヤ、西洋葵、などに、早や濱邊に立ちそめた秋風の色をそれとなく見つけた。

「いつでもああいふ調子ですか。」

「ええ、この頃はすつかり身體の方がいいもんだから、ああして飲みはじめてゐるんだけれど、しまひにぶり返さないかとそれが氣懸りになつてね。けれど矢張り好きにさせて置いた方がいいんです。」

去年の春から、ずつと二年、まるきり足腰が立たなくなつて、氣ばかり昂ぶつて今の商賣の料理屋の方も營まなければなるまいかと、能登の兄や、近隣の親づきなどと談合した上、やつと離れへ病室を移して醫科大學の博士やその他できるだけの治療をしたあげく、依然足腰は立たなかつたけれど、どうやら神經だけはやや鎭めることができた。しかしどうかすると急に何でもないことに昂奮して、もとどほりに狂れ出したのではないかと思はれるくらゐ、二階の客の聲が大きいとか、内藝者がのらくら遊んでゐるとか言つて、大聲に怒鳴り出すことなどがあつた。

「けれど姉さんのやうに何んでも好きにさせてゐては、あとで困るやうなことができはしないかな。」

「さうしといた方がらくなんですよ。まる一日もちやんと座らせてゐられちや耐らないからね。」

「まる一日といふと……」

「傍から離さないんですよ。用事はなし、同じことばかり聞かされるんだもの。」

「いい加減に立つてしまへばいいぢやないんですか。」

「そりや駄目、寢る外はちやんと座らせて置くんだから。」

弓島は午后過ぎから又酒をはじめた姉の夫の神崎が、珍らしく内藝者を前に座らせ、何か絶えず彈かせてゐるのを見たが、聞けばこんどの病氣が少し快くなつた時分から、絶えず誰かを座らせて彈かせるらしかつた。つまりその間だけ姉はそばをすり拔けることができたが、反對に彈く方は先刻弓島がこの町へ着いてから、もう三時間あまりも經つのに傍に女を座らせ三味線を彈かせてゐた。その間ぢう神崎はちび飲みの唇を濡して拙さうに酒を飲んでゐた。

「だから彈きながらみんな居睡りなんかするの。」

「ただ彈いてゐては飽きるだらう。」

病氣前は料理屋稼業の主人らしい神崎が無駄口一つ利かないで、ただ飲酒に耽けつてゐるくらゐに考へてゐたが、足腰も立たなくなり生死の境を通り越したので、どこか心根がさびれて來てゐるのだらうと思つた

「花がいるやうだつたら送つてもいい。」

弓島は部屋の中で眺める溫室物を頭で思ひ描いて、姉も好きなのなら捜して見てもいいと思つた。

「好きだか嫌ひだか分らないからそんな心配はしないでください。」

姉はさう言つてもうそんな事に興味を感じてゐないらしかつた。三年に近く看病やつれのした姉の顏は、永い間の寢不足のためにうだ腫れて張りもつやも失つてゐた。そればかりではない、家の經濟の遣り繰りさへも生優しい氣苦勞ではなかつた。四年前に神崎の兩親が續いて亡くなり、仰山な葬らひばかりでもかなりの冗費であつた。内藝者が六人、女中と小女とで四人、ばあやと板前の三人、その間に頭を疲らせて切り廻しをしてゐる姉の髮容につやのないのも、何となく溜息を吐いて口說かれるよりも、默つてゐる姉だけに氣の毒に思はれた。

「とにかくお前が來てくれて姉さんもほつとしましたよ。」

廊下づたいの離れの席へもどると、まだ久龍といふ女が低い調子で爪彈きをつづけ、神崎はあぐらを搔いて物憂さうに脇息に凭れて杯を舐めてゐた。女の顏いろには明らかな倦き切つた表情が投げ出されてゐた。何代となく續いたこの湊の古い料理屋の、血統的なみだらな日本酒にひたつてゐる顏付が、弓島の顏をいつになく堅苦しくさせた。

「すこしおやすみなね。」

「ええ。」

しびれの切れた肥えた膝をずらした久龍は、そこそこで襖のそとへすべり出た。神崎はやはり物憂さうな眼づかひ

で眺めてゐたが、べつに何とも言はなかつた。こんな病人が飲酒することが弓島にはふしぎに思はれるほど甚へて目た。

「いつ來たんです。」

神崎は先刻着いたときに挨拶したことを忘れてゐるのか知らと思つた。

「そこにある菓子をもらひましたの。先刻ゐらしつたぢやありませんか。」

姉は弓島の顏をちよつと見て、菓子折を夫の前へずらせて見せた。

「さうでしたな。」

神崎はさういふと菓子折を見て、そして一口どうかと言つた。このごろ飲まないといふとそれきり杯を手もとへ引いた。姉が默つて酌をした。ああいふときに注がないと機嫌が惡いのだなと弓島は思つた。姉はたえず神崎の表情に注意深く神經を注いで、眉の毛の動きにも何ものかを讀むことを怠らなかつた。醉ふと火箸でなぐるといふ神崎のことを思ひ出し、弓島は不安がちな氣もちだつた。

濱邊ゆえ庭は松ばかりだつた。苔と石とがいい工合に古さがついて、初秋の波の音も穩やかに松が枝を滑りぬけては聞えてゐた。「折角見えたのだから何かごちさうをしたらいいだらう。」と神崎は言つて、

「からださへよければ船でも出すといいんだが……」

と、姉をかへり見た。

「何かとりものをしませうか。」

「ん、好きなものを言つてもらつてあげるとよい。」

姉はそんな話の間にも神經質に夫の顔いろをよみ込んでゐるのが、痛々しく弓島にはこたへた。これは姉の方がさきに氣苦勞であたまが變になるだらうと思つた。酒はよくないだらうといふと、

「赤玉ポートワインを初めましてね、それからまたむかしどほりに遣るやうになりましたよ。」

と言つた。

「久龍を呼べ。」

と神崎は突然に言つた。

「あの子はつかれてゐるでせうから、誰かほかの子にしませう。」

「いや、あいつを呼べ。」

姉は仕方なしに立つて襖の外へ出て行き、間もなく久龍といふ女をつれてきて坐つた。大柄な、どこかつンとしたところのある女だつたが、ふつくりと座つた姿のよい女であつた。神崎は默つて久龍を見てゐたが杯を一息に干した。かの女は注がうとしなかつたので姉が注いだ。何か彈けと神崎は言つた。姉が色の強い西洋花をならべる心もちを、姉自身はほんとに知つてゐるのか知らと弓島は思つても見たりした。

久龍は默つて彈き出した。あらはな振舞ひの上に倦怠が見えてゐても神崎は無頓着らしく、姉もそんなことに氣をつかつてゐないやうであつた。弓島にはその女の態度がひしひしと感じられた。何を彈いてゐるのか分らないが、汽車でゆすられて頭の疲れてゐる弓島には、なほ一さうがちがち胸がわるくなるやうな氣がしてならなかつた。だるい手つきの女の顔を露はな庭明りに透し見てゐたが、昔のらふそく火を見るやうな物佗びしい氣がして、色白で肥つてゐるに拘はらず寂しかつた。久龍は平凡な、何ものにも關係のない顔貌で機械のやうに彈いてゐた。そのそばに姉もまた置もの

のやうな單調さで座り込み、神崎は杯を舐めるほかは脇息に靠れたまゝ、むしろ憮然として坐つてゐた。こんな日が毎日つゞいてゐたのかと、一度姉のところを訪ねてくれと言つた母の言葉を眞に受けて出て來た自分を弓島はいまいましく思ふた。姉もこの樣子だと病人よりもつらいことだらうと思つた。

この離れとはもう一つ向ふの離れに、よこに長い支那風な小鳥籠が吊してあつて、黄色の小鳥が籠の目の間をチィチィ鳴きながら透いて見え、消えるに迅い鳥かげを上や下の籠の目にとどめてゐた。ああいふ鳥籠がこんな田舍にもあるのか知らと不思議に思ふた。退屈な三味線がいつまでも續いて頭は霞網(かすみあみ)をかぶせたやうにぼォとしてしまつた。

「それは番小屋町の石屋さんのことですよ。」

弓島は漸と思ひ出した。

「へえ、そして……。」

「墓石ばかりでも千倆はするんです。そいつを建てるんです。」

「それを番小屋町のおぢさんが建てるんですか。」

弓島はこの家の親戚にあたる番小屋町のおぢさんが石屋で、それに儲けさせるために父母の墓を建てるといふ神崎の言葉を注意深くきいた。この不景氣と物入りのつゞいた姉の家に、石材ばかり千圓もする墓は亂暴だと思つたが、わざと默つて聞き流してゐた。こんなことをしてゐる間に家の根石がゆるみはしないかと思はれ、氣のせいか、種々な物入り續きのやけくそから、つい思ひ立つたやうに父祖の墓碑を築くらしく思はれた。六十三になつても子供一人ない番小屋町のおぢさんは、儲けの荒い墓石の文字彫りが巧(うま)く、少し金が手に這入ると未だに遊里(いろざと)通ひの止まぬ老人であつた。こんどの話も番小屋町に纏めた金を手に入らせ、いくらか身の廻りを小綺麗にさせやうといふ姉の心づくしが加はつてゐ

たらしかつたが、結局は姿とも老妻ともつかない川端のいかさまな女に入れあげるに決つてゐると、弓島はいつも姉のすることが頓珍漢な結果になるのを抵梧かしがつた。さう言へば何時だつたか母のところへ來て、茶話をしたあとで、

「電話一つかけさへすればすぐ纏まる金はあるんですがね。」

と、何時ものかれらしくもなく、氣の荒い調子で金をかりに來たが、これまでも度々酢を飲まされた弓島の母は、これも利かぬ氣性で、ではその電話をかけたらいいだらうと言つて、いまは子息がかりで金も儘にならぬからと斷つた話を思ひ出し、あの時分からこの墓碑の話があつたのだなと思つた。年寄つても身よりもない放埒な暮しをつづけてゐる番小屋町のおぢさんも、まる六年ばかり芝に住んだことがあり、そこで二十も違つた妻に逃げられた苦い經驗を持つてゐるだけに、東京といふところが身震ひするくらゐ嫌ひであつた。弓島と東京の話をしてゐるときは、有繋に東京の風物を懷しがつた口吻を漏らしはしたものの、實際は全く夢にも見たくないにがにがしい土地らしかつた。

「それで今のところ明達寺の境内でわたしのうちの墓くらゐな立派なものはない筈ですよ。」

神崎は客のあるたびに言ひそやすらしい慣れた口調で言つて、何しろ一と箱だから、しかもそれの仕上りは二た組になるだらうと言つた。弓島は何度もその話に聞き飽きが來て、何となく淺間しげな氣もちにさへなつたが、口前ではそれとなく

「立派なものですね。」

と相槌を打つてゐた。景氣のよい時分に儲けた金も大袈りな病氣の費用や、兩親の葬式やで散じてしまつてこの頃では手元も豊かでないのではないかと、弓島はそんなことを考へた。先刻、藏の入口に積んであつた北海道物の乾鮭の買入れなどを見ても別にさういふ考へは湧かなかつたが、家の手入れも今年の夏はしてないらしく、離れの廻りの板が

こひも雨風に傷んで朽ち落ちてゐた。

「濱の方へでも出て見たらどう？——」

姉はさう言つて退屈さうにしてゐる弓島を返り見た。

「それよりも裏の家へ行かう。」

裏の家といふのは、神崎の妹夫婦のゐるすぐ海べりの家だつた。弓島はそこで神崎の妹のおにいさんに會つた。一度嫁に行つて出て來たおにいさんは、町のものを養子に貰ひ、その男に嫁を取つてやり、今年二つになる赤ん坊が生れてゐた。さういふ養子夫婦の面倒を見てやるには若過ぎた色の白いおにいさんであつたが、氣性が溫和で圓く納まつてゐた。

「僕はこちらの二階でねますよ。」

さういふと、あちらは騷々しいからこちらでおやすみと言つて、一枚だけ金齒を覗かしたおにいさんは屈托なささうに、十燭光の來てゐる裁ち板の上で、養子夫婦が向ひ合せに座つて仕立物をしてゐるのをのんびりと眺めた。赤ん坊はえんこをして何かセルロイドの玉を口でしやぶつてゐた。浪の音が裏戸に迫つてゐたが話しごゑは聞き取れた。

「兄さんにはこまりますよ。しかし諍らつたらまた氣でもふれはしないかと思ひましてね。」

「まあ、あのままにしておくんです、その方が無事ですよ。」

「ええ、あんな人のことで屈托するよりかかうして暢氣にしてゐた方がいいと思つてゐましてね。」

「それ、それ、それに限ります。」

弓島はおかしさうに言つたので、若い養子夫婦はくつくつ笑つた。かれらはしかし一言もいはないで仕事に忙しかつ

た。静まり返つた電燈の色にも田舍の穩やかな夜があつた。それほどよくない綺倆の女であつたが、何故か弓島は好意に滿ちた心もちで仕事にいそしんでゐるかれらを見た。

「しかしよくお溫和しくひとりで遊んでゐますね。」

「馴れてゐるんでございます。わたくしたちが宵つぱりなものですから。」

若い妻君はさう言つて烏渡子供のあたまを弄つて見た。あるじは愛想笑ひを無口者らしく漏しながら、紙切れのやうなものをぽんと子供に投げ與へた。

「では二階にお床を取つてをきますよ。」

おにいさんは立ち上つてさういふと、妻君はいいえわたくしがお取りしませうと言つて立つた。

「弓島さんはむづかしいんだから、――」

おにいさんは梯子段を上つて行つた。

若い夫婦は默つて仕事をしてゐて、弓島は所在なく時世後れのこの古い版畫を見つめてゐた。

「浪の音が耳につくかも知れませんよ。」

「さうですね。」

二階から下りて來たおにいさんの言葉で、なにげなく浪の音をまた耳に入れた。庭つづきの敷石に緣下駄の音がした。誰か來たなと思つた。

「弓島はこちらで寢るんですか。」

姉のこゑが暗い庭の中でした。

「ええ、こちらは靜かだから……。」

「その方がいいわ、たばこがなかつたら持たせてよこしますよ。」

「たばこはあるよ。」

「ではおやすみ。」

しばらくしてまた庭石の上に緣下駄の音がした。それが遠のいて默つてゐるみんなへ波の音が一と萎りつゞいて聞えた。おにいさんは茶を入れながらあの人もなかなか大變だと言つた。ええ、しかしそりや當り前なんですよと弓島は答へた。

「オーイ。」

といふ聲が裏戸の濱にきこえた。

「船が出るんです。」

「何の船です。」

「さあ、——。」

「オーイ。」

法螺貝のやうな聲だつた。弓島は二階の寢床へ上つて行つた。障子と雨戸とのそとは荒海だつた。

弓島の眼を覺したところは海づらが嘘のやうに靜かで、何ものか巨大なものを蓋してゐるやうだつた。かれは二三町先きの松並木のある、漁船の着いた方へ歩き出した。濱の女らは笊を持つて漁船から魚の買ひ出しに群れてゐた。漁夫は自分の家の前まで魚の這入つてゐる籠を搬んで、そこで女らに魚を分けてやつてゐたが、肌の赤い何といふ魚

か知らないが、その魚を賣らないで、低い藁屋根の奥の間と言つても、すぐ見透かされる方を向いて、
「オイ、これはそつちへ持つて行くんだ。」
と言つた。
「乳の出る魚だよ。」
買入れに群れてゐる女のひとりが左ういふと、「ふくれてゐるべい――。」と、も一人の女がさう言つた。そこへ若い漁夫の妻が默つて笊を持つて出て來て、その肌の赤い魚を入れて無言で這入つて行つた。物憂さうな物腰ではあつたが、がつしりした肌組みが弓島の朝爽やかな眼に映じた。
「近い中に出きるんじやないか。」
「ん。」
漁夫は機嫌よくこたへた。
「乳の出る魚ばかり引いてゐちや商賣になるまい……。」
女どもはさういふと一齊に笑ひ出した。
弓島は活きてゐる鯛を見てゐるとほしくなつて來て二枚買つた。背中のひれが刺々しく色といふ色がさまざまに吐き出され、紅い肌に藍いろの斑點がうつくしかつた。まるで鐙のやうな頭の雜作がぎしぎし軋むやうで、手帕の中で思ひ出したやうに動いてヘネテゐた。そのくせ鯛といふものは活きてゐるうちは、こんなに肌の柔らかいものかと、見たことのないだけに感心した。
「歸へると若い女だちは此の活きてゐる鯛を珍らしがつた。姉も初めてだと見え、」

「みんなが朝寝坊だから鯛の生きてゐるのなんぞ見られないんだよ。」

と言つた。

氣がつくと、どの女の顔も生白くだるげに鯛のはねるのを見戍つてゐた。時々、アスパラガスのやうな白い指先きが鯛の肌をつツついたが、二三度尾をハネルとそれきり鯛はうごかなかつた。

「お起きなさいましたよ。」

ばあやの聲がさう注意すると、女だちは受持ちの掃除をするために散つてしまつた。神崎は離れの方で起きて不機嫌な生唾を吐きつけ、げえげえ喉の音をさせた。弓島は漁夫の指に射しつけた朝日の色を目に描いた。姉は夫の方へ馳けつけた。この家のものは神崎の眼のとゞかぬところを隠れて歩いてゐるやうだつた。

昨日離れの方から見えたも一つの離れの方の鳥籠に、朝の餌をやつてゐるらしい女のうしろ姿が見えた。腕がなよらしく古い籠にうごいてゐた。

「何といふ鳥かね。」

「聞いたんですけれど忘れてしまひましたの。」

黄ろい羽根に朱の斑點をもつてゐたが、弓島にもよく分らなかつた。或る船員が籠とともに持つて置いて行つたのであるが、そればかりではない、何かあの子と約束事でもしたらしいんですよと、姉は久龍のゐないときに鳥籠の說明をした。

「君がその世話をしてゐるのかね。」

「ええ。」

無愛想なこの女は、水を汲みかえ、栗箱をあらたに入れかえてやつたり、まめまめしく手をうごかしてゐた。弓島は三角帆が風を切つてゆくのを屋根の上の方に描いて、この女のする事を熟々と見てゐた。小島は能く馴れてゐるが生意氣さうに女の方を見て、柔らかい桃のやうな糞を垂れた。

「中々手がかかるでせう。」

と言つても久龍はむつつりして大したことはないと、すぐ鳥籠から隔れた離れの掃除をはじめた。肥つた女の無愛想なのには、弓島は或る考へを挿しはさんでむしろ悲哀に似た同情を感じた。

しばらく小鳥を見てゐるうち、掃除しながら女も小鳥に眼をくれてゐるのに氣がついた。神崎の部屋へゆくとかれは冷淡な、むしろ陰明してゐないやうな顔付でまじまじと弓島の顔を見た。

「何時來たんです。」

「昨日……」

弓島は呆れて神崎の顔を凝見めた。しかし故意と言つてゐるらしい様子も見えなかつた。姉もそれとなく神崎を見た。

「春はいろいろ花をありがたう、何しろ潮風だからすぐ枯れてしまふ……。」

「まだ要るやうでしたら送りませう。」

「何しろ世話をするものがゐないし、手がないものですからね。」

弓島はこの様子なら何んでもないと考へた。そこへ裏の家の養子がひよつこりと這入つて來て、みんなに朝のおじぎをした。仕立職人らしく顔色は不良かつたが、角帯姿できりつとした容子だつた。

「みんなが朝寝坊だから鯛の生きてゐるのなんぞ見られないんだよ。」

と言つた。

氣がつくと、どの女の顏も生白く、だるげに鯛のはねるのを見戍つてゐた。時々、アスパラガスのやうな白い指尖きが鯛の肌をつツついたが、二三度尾をハネルとそれきり鯛はうごかなかつた。

「お起きなさいましたよ。」

ばあやの聲がさう注意すると、女だちは受持ちの掃除をするために散つてしまつた。神崎は離れの方で起きて不機嫌な生唾を吐きつけ、げえげえ喉の音をさせた。弓島は漁夫の網に射しつけた朝日の色を目に描いた。姉は犬の方へ馳けつけた。この家のものは神崎の眼のとゞかぬところを隠れて歩いてゐるやうだつた。

昨日離れの方から見えたも一つの離れの方の鳥籠に、朝の餌をやつてゐるらしい女のうしろ姿が見えた。腕がなよらしく古い籠にうごいてゐた。

「何といふ鳥かね。」

「聞いたんですけれど忘れてしまひましたの。」

黄ろい羽根に朱の斑點をもつてゐたが、弓島にもよく分らなかつた。或る船員が籠とともに持つて置いて行つたのであるが、そればかりではない、何かあの子と約束事でもしたらしいんですよと、姉は久龍のゐないときに鳥籠の説明をした。

「君がその世話をしてゐるのかね。」

「ええ。」

無愛想なこの女は、水を汲みかえ、栗箱をあらたに入れかえてやつたり、まめまめしく手をうごかしてゐた。弓島は三角帆が風を切つてゆくのを屋根の上の方に描いて、この女のする事を熟々と見てゐた。小鳥は能く馴れてゐるが生意氣さうに女の方を見て、柔らかい桃のやうな爽を垂れた。

「中々手がかかるでせう。」

と言つても久龍はむつつりして大したことはないと、すぐ鳥籠から隔れた離れの掃除をはじめた。肥つた女の無愛想なのには、弓島は或る考へを挿しはさんでむしろ悲哀に似た同情を感じた。

しばらく小鳥を見てゐるうち、掃除しながら女も小鳥に眼をくれてゐるのに氣がついた。神崎の部屋へゆくとかれは冷淡な、むしろ豫期してゐないやうな顔付でまじまじと弓島の顔を見た。

「何時來たんです。」

「昨日……」

弓島は呆れて神崎の顔を凝見めた。しかし故意と言つてゐるらしい樣子も見えなかつた。姉もそれとなく神崎を見た。

「春はいろいろ花をありがたう、何しろ潮風だからすぐ枯れてしまふ……。」

「まだ要るやうでしたら送りませう。」

「何しろ世話をするものがゐないし、手がないものですからね。」

弓島はこの樣子なら何んでもないと考へた。そこへ裏の家の養子がひよつこりと這入つて來て、みんなに朝のおじぎをした。仕立職人らしく顔色は不良かつたが、角帯姿できりつとした容子だつた。

「この男はまだ半人前ですよ。」

神崎はにはかに話題を見付けたやうに飛びかかつてかういふと、昨夜灯の下で小さくなつてゐた男は、一さう縮こまつて頭を掻いてほくそ笑んだ。しかし食ふことだけは一人前なんですと言ふと、養子はきまり悪げに膝を浮かし、そこそこに離れを出て行つた。默つて電燈の下で仕事をしてゐるかれとかれの妻の暮しが、やはり神崎の方からの仕送りはあづたやうなものの、君、その蝸牛の殼をいづるなかれと弓島は心で呟き考へ、廊下から庭へ下りてゆくかれの姿を見てゐた。

弓島は時折神崎の眼を見てゐるうちに、これはやはり一度氣のふれた人だと思はれる、或る濁りを感じた。水の上に浮くぎらぎらを見るやうな濁りと曇りとを感じ、それがいかにも不安だつた。弓島はこの樣子で酒を飲んで行つたらきつと又もと通り暴れ出すことがあるかも知れないと思つた。

午后過ぎになると神崎は酒をはじめ、久龍が昨日と同じいやうに天井を見ながら、じやん、じやんと三味線を掻き鳴らしてゐたが、弓島はさういふ離れの光景を見るとこんなに退屈以上の退屈が在り得るかといふことに惘れ返つた。しかもそれらの有樣は版で刷つたやうに松が枝を透いて、黄ろい疊の上に映つて見えた。繰人形のやうなかれらの姿がまるで動かないで靜乎としてゐるやうな瞬間に、弓島は恐怖に似た氣もちさへ感じた。女といふものの忍耐の强さ、辛抱づよい、ねばりこさにはほとほと見てゐるだけでも憊れてしまつた。かれらは唯あきらめてゐるやうで自分を不死身のやうに無感覺にしてゐた。

「ご飯はどちらになさいます。」

庭をあるいてゐる弓島に、養子の妻君が白い前垂れに赤い手をついて左う言つた。やはり妻の家にしよう、弓島はさ

う思つて、

「お宅でします。」

と言つた。

朝の鯛がうまかつた。若い妻君がこんなことを言つた。

「漁師が沖で自分だちだけ食べる沖煮といふものがございますの。網でとれたのをすぐ煮てたべるんですが、それはおいしうございます。」

弓島は俳句の季題に沖膾といふものがあるが、あれだなと思ひ、この妻君も漁家あたりの娘であつたらうと考へた。

「それはうまさうですね。」

とにかく裏の家には物の清さが目立つて感じられると思つた。養子は胸を折つて裁ち板の上へかゞみ込んでゐた。見れば女物ばかりで奈何にもそんなものを仕立てるに相應はしい男らしかつた。

「けふもまた遣つてゐるらしいのね。いやな兄さんだ。」

おにいさんは遅漬の香のものを搬びながら、いやらしさうに眉をしがめた。そばかすの多い顔立ちだつたが、それが氣質のやさしさを小じんまりと現はしてゐるやうなところがあつた。

「おにいさんが少し言つてあげればいゝのに……。」

弓島は微笑ひながら言つた。

「わたしなぞ言つたつて何んになるものですか、寺島のお上人さんに來て貰つたつて駄目ですわ。」

おにいさんは笑つてあの飲む方さへよしてくれゝばいゝのにと言ひ、町端れの小さいうなぎ屋風情さへ一かどの料理

屋になつたが、そんなところに氣のつく人でないと言ひ、はじめの内は齒がゆかつたが、このごろはどうでもなれといふ氣になつたと、氣樂さうに金齒をのぞかせて言つた。

「先刻もちよつと行つて半人前をやられてしまつた。」

養子は思ひ出して皓い齒を出して笑つた。妻君もおかしさうにしてゐるのを見ると、しよつちう半人前をやられてゐるんだなと、さういへばどこか半人前らしく見えるこの男を見た。

「兄さんにかかつちや誰だつて頭から叱られるんですもの。」

おにいさんは併しこの前、飼犬に死なれてそれから氣鬱病になつたやうな田舍新聞の通信員だけには例外に同情して、せめて東京あたりの俳句の大家の悼句でも貰つたら慰さめになるかも知れないと、一度自分の家の客となつた人を思ひ出して托んで見たりしたことがあつたと言つた。

「その悼句が來ましたか？——。」

「それが面白いの、あたまから斷はられてしまつたんです。あとで人の家でさんざん御馳走になつて俳句一つ書いてよこさないなんて怒つてゐましたよ。」

おにいさんは膳に坐つて食事をはじめた。「あのひとの怖いのは新聞社の人だけですよ。」おにいさんは可笑しさうに箸を口の端へ持つて行きながら言つた。養子夫婦も雜炊ではあるが甘美さうに食べてゐた。この人らはこんなにうまさうに飯を食つてゐると、飯の不味い弓島は羨しく感じた。

庭の敷石に音がして姉が裏の家へ來た。弓島を見るとすぐ、

「たまには母屋の方でご飯をたべてもいいぢやないの。まだ一度も食べてくれないんですもの。」

姉は微笑ひながら言つた。
「手が懸ると思つてね。」
「あんまり酷いわ。お前のやうだや……。」
横合からおにいさんが、「こちらがおいしいんだとさ。」と言つた。
「それなら仕方がないけれど、あちらだつて御馳走がありますよ。」
姉は微笑つて言つた。弓島は半ば辨解をするやうに言つた。
「あちらは騒がしいから遠慮してゐるんだ。どちらだつて僕は關はないけれど……。」
「それもさうね。」
姉はさういふと、「こちらはお前の氣性に合つてゐるからね。」と言つた。
「あちらだと兄さんと一緒でせう、だから弓島さんは厭なんですよ、あんなしつこい兄さんと一緒に食べたらどんなおいしいものだつて不味くなる。」
おにいさんは開けすけにさう言つて、わたしにしたつてまつぴら御免だわと言つて微笑つた。弓島はひとりでくすくす笑つた。
「わたしそれには氣がつかなかつた。」
姉は最もらしい目をして一人だけ食べるやうにしてあげるからと言つた。
「それにしても少しからだを關はなすぎるのね、おのぶさんは？――」
おにいさんは身體の着つけなどに少しもめかさない姉を、も少しどうにかしたらどうかと言つた。髮の間にちりほこ

屋になつたが、そんなところに氣のつく人でないと言ひ、はじめの内は齒がゆかつたが、このごろはどうでもなれといふ氣になつたと、氣樂さうに金齒をのぞかせて言つた。

「先刻もちよつと行つて半人前をやられてしまつた。」

養子は思ひ出して皓い齒を出して笑つた。妻君もおかしさうにしてゐるのを見ると、しよつちう半人前をやられてゐるんだなと、さういへばどこか半人前らしく見えるこの男を見た。

「兄さんにかかつちや誰だつて頭から叱られるんですもの。」

おにいさんは併しこの前、飼犬に死なれてそれから氣鬱病になつたやうな田舍新聞の通信員だけには例外に同情して、せめて東京あたりの俳句の大家の悼句でも貰つたら慰さめになるかも知れないと、一度自分の家の客となつた人を思ひ出して托んで見たりしたことがあつたと言つた。

「その悼句が來ましたか？――。」

「それが面白いの、あたまから斷はられてしまつたんです。あとで人の家でさんざん御馳走になつて俳句一つ書いてよこさないなんて怒つてゐましたよ。」

おにいさんは膳に坐つて食事をはじめた。「あのひとの怖いのは新聞社の人だけですよ。」おにいさんは可笑しさうに箸を口の端へ持つて行きながら言つた。養子夫婦も雜菜ではあるが甘美さうに食べてゐた。この人らはこんなにうまさうに飯を食つてゐると、飯の不味い弓島は羨しく感じた。

庭の敷石に音がして姉が裏の家へ來た。弓島を見るとすぐ、

「たまには母屋の方でご飯をたべてもいいぢやないの。まだ一度も食べてくれないんですもの。」

姉は微笑ひながら言つた。

「手が懸ると思つてね。」

「あんまり酷いわ。お前のやうぢや……。」

横合からおにいさんが、「こちらがおいしいんだとさ。」と言つた。

「それなら仕方がないけれど、あちらだつて御馳走がありますよ。」

姉は微笑つて言つた。弓島は半ば辨解をするやうに言つた。

「あちらは騷がしいから遠慮してゐるんだ。どちらだつて僕は關はないけれど……。」

「それもさうね。」

姉はさういふと、「こちらはお前の氣性に合つてゐるからね。」と言つた。

「あちらだと兄さんと一緒でせう、だから弓島さんは厭なんですよ、あんなしつこい兄さんと一緒に食べたらどんなおいしいものだつて不味くなる。」

おにいさんは開けすけにさう言つて、わたしにしたつてまつぴら御免だわと言つて微笑つた。弓島はひとりでくすくす笑つた。

「わたしそれには氣がつかなかつた。」

姉は最もらしい目をして一人だけ食べるやうにしてあげるからと言つた。

「それにしても少しからだを關はなすぎるのね、おのぶさんは？——」

おにいさんは身體の着つけなどに少しもめかさない姉を、も少しどうにかしたらどうかと言つた。髮の間にちりほこ

りの見えるのはともかく、女中同樣に扮裝に粗末なところがあつた。弓島にも氣がついてゐたものの、細かい用事が次から次へと追つてゐる家ゆゑ關つてゐられないのだらうと思つた。

「何しろああして引寄せて動かさないんですからね。そりや少しは髮も結ひたいんだけれど全くのところそんな暇なんてないんですよ。そんな事をしてゐたら用事の方が遲れてしまふし……」

姉は眞顏になり髮の根に指をつッ込んで、「この髮だつて何時上げたんだか分らないくらゐですもの。」と眞に寂しい顏をして見せた。

「さうね、やはり暇なんてないやうね。これはすこし言ひすぎたやうね、わたしのやうに暇がありすぎる人の言ひ分かも知れない――。」

「それにもう朝から寢るまでちよつとの間も身體を休めることだつて出來はしないんですからね。臺所の方だけでもお茶碗がならべられてゐるのを見るだけでも、お茶の心やりだけにしても頭がいたむくらゐですよ。」

姉は顏艶の悪い顏をすこし上氣させ、わたしなんかどうでもいいんだけれど、家の方がうまく切り廻しがついて吳れればいいと言つた。

「兄さんのお酒のせいですよ、お母さんのゐる間にお酒を禁めるんだつてよく明達寺へ願をかけたりしたが、兄さんがああして飮むものだから、却つて神罰があたらないかと願を下ろしに出かけたりしたもんだがお酒つてなほらないものね。」

「だからわたし好きなだけ上げてゐるの。その方が叱られないだけでも、よほど樂なんですもの。」

姉もおにいさんも匙を投げ出しゐるのが、弓島にはいかにも左うある事のやうに思はれた。どんなに智慧をめぐらし

ても對手が對手ゆゑ叶はないでゐるところが、いかにも暗澹な宿命的なものだつた。

「死んだお父さんだつてあのとほりだつたから何と言つたつて仕方がないんですよ。」

おにいさんは父のゐる間は、三度づつの酒が夜中まで續いて母自身さへその酒の香に浸つて、母の着物にもさういふ匂ひがしたと言つた。

「おのぶさんに子供がないのもやはりそのせいですよ。」

「ええ、わたしもさう考へてゐるんだが、もう何を言つたつて仕方がないのね。もうこんな話はよしませう。」

姉は話に釣り込まれて身を悶くやうにしたが、弓島にはこれも因縁づくに定められたやうなもののやうに思はれた。

「こんなことにくさくさしてゐては、一日だつて面白く送れないわけですからね。」

おにいさんらしく左ういふと、茶菓子を持ち出した。姉は姉で、

「わたしなんか一日としてほつとしたことがない。」

と言つた。

「だからこちらへ來て少しはあぶらを賣るんですよ。」

「まさかね。」

快活なおにいさんに較べると、姉は暮しの垢やゴミに染み込んで、水端に尾や鰭を吸はれてゐる鯉のやうに元氣がなく、泥やあぶくを吐いてゐるやうだつた。さうかと思へば番小屋町のおぢさんのやうな六十を出ても、まだ遊里に通ふ人もある、あの人なんか骨の髓まで達者なんだね、全くあの人の健康な顔を見てゐると腹が立つくらゐだよ、生きて恥多しといふことがあるが、あの人なんぞまつたく生き恥ぢをまざまざと若いものの前で晒してゐるやうなものだ……

…………

「一體姉さんがあんな人に仕事をさせるから惡いんだ、その金がいつでも惡い方にばかり使はれてしまふから面らない……」

弓島はかう言つて何となく忌々しげに姉に打つかつた。そんな氣はなかつたけれど、なぜかさう自然な勢ひを感じた。

「姉さんだつて他人に仕事をあげるより増しだと思つて、番小屋町さんに賴んだんですよ、そりやあの人の道樂はわたしだつて厭だけれど、ご覽、他人よりかよほど增しぢやないか、あの人が樂になれば子息の方にかからなくていいし、まはりのものが皆らくになるわけだから――。」

「ところがそれが却つてわるくなつてゐるんですよ、こんどの墓の金が入らなかつたらちやんと家に坐つてゐる筈の人が、かいもく家にゐないさうです、子息の喜太郎は大濘しに言つてゐましたよ。喜太郎の妻君にしたつてあんな仕事がなかつたら落着いてゐたらうにと、まるで姉さんを陰から怨んでゐるやうな口吻だつたから、あまり結にさわつたので今からでも仕事の話はコワせるんですと言つて遣つたんだ。」

「ぢや、まるでわたし一人が損をしてゐるわけね、折角いいあんばいになるだらうと思つてしたことが、そんな風になつてはやりきれないのね。」

「とにかく姉さんは人がいいんだかどうだか分らないけれど、あとでいつも莫迦を見る損な役廻りですよ。」

「それもこれも生れつきだから仕方がない。」姉は妙にさびしい顏をした。

「しかしこんどの事は弓島さんはああいふけれど、おのぶさんが肝煎をしてくれたんであの人も大助りなんですよ、

でなかつたら隨分困つてゐたかも知れないの。いろいろな紛紜があつたやうだから……だからわたしはいい事だと思つてゐるんです。」

おにいさんのこの言葉に姉は元氣がついて。誰がわるいやうにと思ひますものかね。そのときの運次第なんだからと言つた。弓島はときどき腑拔けのやうになつてゐる姉を刺戟して見たものの、やはり利目がなかつた。人がいいのか、ぼんやりなのか見當のつかない女だつた。

「とにかく一家のものがそれぞれ旨くやつてゆくのはいいが、一人でもしくじつてゐるとあとの者がこまりますからね。」

おにいさんは左う言つて姉の肩を持つやうにした。

「いまのところでは自家が一番金車ですよ。」

姉はさう言つて席を立つた。ひどく疲れて見えた。

「とにかくおのぶさんがしつかりしてゐてくれるから。わたしは何もしないで樂をしてゐるんです。」

「ええ、おにいさんはらくをしてゐらつしやい。」

姉は笑ひながら庭づたひに裏の家を出て行つた。弓島は年よりも老け、老けてゐるよりも暮しの垢の染みてゐる姉を氣の毒げに見送つた。

あとでおにいさんは。

「おのぶさんのゐる間はあそこの家も大丈夫ですよ。あれで中々の働き手だし。第一自分のものなぞ作らうといふ氣のない人だから。それだけでもよかつて行くわけですからね。」

さう言つて姉をねぎらうた。

「さうですかね。」

弓島は裏戸をあけ、夕方の荒磯へ出て、頭のつかれたのを吐き出さうとした。兄貴も不幸だが姉もあまり仕合せではない、弓島兄姉はみんな片いぢに暮してゐる、――かれは防波堤の上から、波に蝕はれたコンクリイトの破片を惨めに又た空恐ろしく眺めた。これだもの、こんな堤も波に食はれてしまふ。弓島は感心したやうに秋風の沁みる堤の上を青年の意氣を髣髴しながら元氣にあるいた。かれは二三町ばかり歩いてゐるうちにあんなに銷沈してゐるやうな姉の姿が、次第に勇敢に目に映つてくることを不審に思はなかつた。あの女のちからで暮しを支へてゐる。あれはつッかい棒のやうなものだ。あれがなければあの家はぐつしやりと潰れてしまふに決つてゐる。さうすると……姉をみじめに眺めることはよくない、それどころか何かとひそかに戰つてゐるやうなところがある。……

「どうして中々立派だぞ。」

弓島は一道のあかりを見つけたやうに、ほそぼそとした姉に勇ましい姿を見出した。つまり女はああいふ風に戰ひ、いつも下積みに踏みしだかれながら、不拔な仕事を築き上げてゐるやうなものだと弓島は考へながら歩いた。

夜になつて茶の間に、女らが集まりながら肌寒の長火鉢の前に坐つてゐた。姉も久龍もゐた。四五年前に來たときとは女の顔振れが違つてゐたが、柱時計の下にゐる色の悪い女だけが、どうも見覺えが殘つてゐるらしく向ふも何となくさういふ氣振りを見せた。

「いま時分螢がゐるなんて氣味がわるいやうね。」

松枝といふ女が前の小川のへりにゐたのだと言つて、痩せた手のひらに、微かにひかる一匹の螢を乘せて見せた。衰へた小さい秋の螢であつた。

「それでも光るわね。」

震災後流れ込んだ大勢の女の、みんな田舍を打止め引上げたのに遲れた東京ものが、それを覗き込んで哀れがつた。

「ちよつとお見せ。」

煙管を投げ出した土地のものらしい色のくろい女が、これも手のひらに乘せながら、小さく明滅する蟲けらを譯なく哀れがつた。かれらは同樣にそれを見たが久龍は別にそれさへ珍らしさうにしないで、椽側へ持つて出てゝ手の平の上をふつと吹き飛ばし螢を草の間に落した。弓島はそれを心に殘し眺めた。そのうち松枝と久龍とが二階へ飯をくひに上つた方へ招ばれ、きうきう鳴る帶を姿見の上にさらした。弓島は秋冷をかんじながら女らが次から次へ茶の間から去つてゆくのを見てゐた。

「この前ゐらしつたときとはお痩せになりましたわね。」

「さうか知ら?」

柱時計の下の女は弓島にさう言ひかけた。しかもこの女だけ誰からも招ばれないで、もう九時だのに舌の上に苦い味のする煙草を服み飽きてゐるらしかつた。すると四五年前からこの女だけが殘つてゐるわけだと、榮えない顏立ちの女を弓島は無理もないことに感じた。友明がみな出て行つたあとに徒らに更けてゆく時計を見上げ、

「あ、もう九時か?」

と言つて煙草を飲む女をにくむ氣にはなれなかつた。女といふものの損德繁榮が對き介つてゐるうち、無言のまゝ打

つて來て弓島の心を憂鬱にした。時計は進んで姉は計算的でない頭で何かを帳面に照し合せ、小机で算盤をはじいてゐた。その音だけが弓島のあたまにひびいた。女は讀むではなし又た考へ事をするでもなく、招かれぬこの世の的もない人間をぐずりぐずりと待ちくたびれてゐた。何といふ世のありさまであらう、弓島はこの女をどこへか連れて行つて一杯飲みたいやうな或る反抗をさへ感じた。淺猿しいものに泥み合ふ淺猿しさであつた。

「姉さん、あすの朝僕はかへりますよ。」

弓島は突然から言つた。

「もつとゐる約束ぢやないの、やつと昨日來たばかりなのに。」

「もう澤山、……」

「どうして？」

姉は小机から伸び上つて弓島が抱膝をしてゐる、徒然な姿を目に入れた。

「何んだか詰らない、――。」

「こんな田舍でございますからね。」

女は横から口を入れたが弓島は返辭をしなかつた。近間の溫泉へでも行つて見たらどうと姉は言つてくれたが、弓島は頭を振つて見せた。見るものが陰鬱である、その柱時計の下にゐる奴だけでも、大した陰鬱を吐き出してゐる。弓島は取り殘されてゐる女の面白がるやうなことを言つて見たい氣になつたが、そんなことは考へつきさうにも思はれなかつた。

「誰か居らんか。」

神崎の聲が廊下を隔てた離れの方にすると、姉はすぐ立つて行つた。そして又歸つて來て、

「お前にゐらつしやいと言つて待つてゐますよ。」

「僕に。」

「ええ。」

「厭だな。」

弓島は露骨な厭情でさう言つて離れへ行つた。神崎はだいぶ廻つてゐるらしい醉を吹いて、退屈だから一杯つき合つてくれぬかと言つて杯をさした。弓島は頭をふつて飲けないとこたへた。鮓のものの匂ひが淡々しい夜の頭を刺戟した。

「わたしも今度は墓の方も建てることができるし、これで落着いたといふものですよ。」

神崎は墓石の圖面を取り出し、どういふ書體がいいだらうか一つ考へて下さいと言つた。僕には分りかねますがね、しかし今時にそんな大きいものなぞ建てたつて仕方がないといふやうな意味のことを言つて、

「僕なら小ぢんまりしたものを建てますね。僕らの祖先は大した人間でもなかつたのですからね。」

弓島はいくらか諷刺まじりにさう言つて詰らなさうな顔をした。

「わたしはさうは思ひませんよ。われわれ子供は親の眠るところくらゐは立派にしてあげたいですよ。」

「しかし場所をひろびろとした清閑な土地に選んで、却つて墓石は小さくした方がおとなしくていいんですよ。明達寺のやうな寺領で一坪いくらといふところに建てるのは、僕には不贊成ですね。あそこは却つて八釜しくてねむれませんよ。それよりか松の多い山なんかに建てるといいんですがね。」

「さうかね、しかしそんな山の中では寂しいでせう。」

どうせ彼のひと達は寂しいところが好きなんだらうと言ふと、神崎は大きな聲を立てて笑つた。

「しかしあの人達でもやはり賑やかな人家に近いところが好きかも知れませんよ。」

「あなたならさうかも知れないが、僕ならそんな人間のゐるところなんか御免の方ですね。」

「いや、わたしでも寂しいところは好きです。去年は全くダメだと思ひましたがね、しかし墓のことは考へませんでしたよ。」

弓島は神崎が死んだら墓のまはりで三味線でも彈いてゐたらいいのだらうと思つた。足腰の立たない神崎が時々こんな墓のことなぞ考へるのには、何か心の弱つてゐるものがあるに違ひないと思つた。

「わたしは發作中に何べんも色々な人をつかまへ、氣が變になつてゐるやうに見えるかと能く聞いたさうですよ、そのたびに誰一人あつて笑つてくれた人はなく、みんな眞面目な顔付を急によそほふてそんなことがあるもんですかと、叱りつけるやうに言つてゐましたが、しかしそれだけは何一つ覺えてゐない時にも、今だにちやんと覺えてゐるからふしきですね。も一つはみんながわたしに隱れてはこそこそ囁いてゐたのが、うるさく忘れないんです。」

「僕はあなたの發作を見たことがないから分らないが、一體に非常に明確した意識が突然に針路を失ふやうな時に起るものが發作らしいんですね。たとへば中途で電話を切られたやうな氣のするときに起るものらしいんですね。」

「成程、電話を切られた時のやうな氣もちかも知れません。しかしわたしの經驗では頭がもやもやになつて了つたときに、あはてて元どほりの事を考へやうと焦るほど頭が呆けてしまふときが、いまから考へると一番恐ろしいときだと思ひますね。わたしは何度も自分の考へてゐることの聯絡を取らうとしては失敗しましたよ。その失敗が看護婦の眼

付にすぐ反射してしまつて、そこからも發作の誘惑を感じるんです。或時など看護婦の顏を見てゐるうちに氣がぼやけたことがあるんです。あんまり看護婦がわたしの眼付に注意をしすぎて息苦しくなりましてね。」

「そんな動機は澤山ありませう。しかしそれはあなたならあなたの病的なるものが、既う發作するまでに準備されてゐる時なんですよ。」

「人はさう言ひますが、醫者などもその筆法だが、しかしわたしは準備されてゐる病的なものはあるにはあつても、それを誘ひ出すことさへなかつたら、それきりに出ずに終るやうな氣もするんです。」

神崎は蒼い皮膚にいらいらしい疲れを表はしながら、冷い杯をひとりでに飲みつづけた。弓島は例令それを誘ひ出すものがなくとも、病的なものはそれ自體の生活をやめないし、そのまゝ成長してゆくばかりだから、やはり準備されてゐるものだといふ意味のことを言つた。たとへばここに一人の男がゐて理由なく突然に狂氣したとすれば、誘致したものよりも貯蓄された病的なものが一時に破裂したといつていいでせう、この間もそんな例はありましたがね。

「十三人殺したといふんでせう。」

「もつとも二人だけは死にましたがね。」

弓島は姉が來てから、姉の顏に夥しい驚きの色があつたので、きふに控え氣味に話を切りあげやうとした。しかし神崎にはその心持ちがすぐ見え透いたと見え、明らかに不快な表情をした。

「もつとその話をしてくれませんか。ここにはわたしの病氣に關はつたことを話してくれる人なんてゐたいんですから、――」

「いや、だいぶ違いやうですからそれに眠いんです。」

弓島は正直に眼をこすつて見せた。神崎は夜はあまり眠られないからわたしに遠慮してくれるなと言つて、姉に酒を取らせに座を立たせた。そしてあごで姉のうしろ姿をしやくつて見せ、

「いま妻がここへ這入つて來たときに、何かあなたに目で合圖をしたんでせうね、そしたらあなたは急に話の腰を折つておしまひなすつた。さういふ些かなことがわたしには犇々とこたへてくるんですよ。わたしはまだ充分でないだけではなく、何となく皆から危險がられてゐることが解つて來て耐らないのです。それをあなたまでが、ちやんと承知してお默んなすつた、それは罪なことですよ。」

「それは姉としては仕方なく左うやつたのでせうし、あなたから言へば不愉快なことです。しかしあなたはそんなことくらゐは氣にかけないでゐたらどうです。」

弓島は話が淵のやうな深さへ次第に追ひ込められて行き、そこを切り上げやうとしても猶落ち込む一方だつた。姉がそんな話は止めてくれるやうにと眼で合圖をする前から弓島はこの話を打切りたいと念つてゐた。しかも神崎自身が自分で話をしながら泳ぎの知らない男が、泥水を飲んであぶあぶしてゐるのが眼に見えて來てならなかつた。が、弓島は行きがかり上、どうにもならずにゐた。それに神崎は苛立たしい昂奮の中で、ひどく何か新しい自分の考へを押し建てやうとしてゐたからであつた。

「いや、わたしには何も彼も解つてゐるんですよ。わたしはまだ當り前並みの取り扱ひを受けてゐないことは無論ですが、何時どうなるか分らないといふ危險がられてゐるのが、いやはや實に心外なんですよ。愉快に、こだはりなく話してくれるものがゐないといふことは、すくなくとも今のわたしには氣もちを沈めるのです。腹臓なくといふ言葉がありますね。わたしはさういふ氣もちで話したいのです。」

「僕はあなたを危險視してゐたら最初から話なんかしませんよ。それだけは考へないで下さい。」

「それはさうですが僕としては疑はざるを得ないのです。昨日から考へてゐたことですが、あなたはつとめてわたしと二人きりでゐることや、またわたしと話をすることを避けてゐましたね。わたしはちやんとそれは見拔いでゐたんです。なぜ君がさういふことをなさるかといふことに、わたしはすぐ自分の立場、――自分の病氣のことを考へましたよ。そしたらなほあなたがわたしを避けてゐることがはつきりと分つて來たのです。」

「妙な誤解です。僕はそれほど意識的にはあなたを避けてなんかゐませんよ。それはつまり誤解です。」

「誤解かも知れないが併しその中にいくらかの本統のものがありますよ。わたしはあなたに會ふことが嬉しかつたのです。そしていろいろ話をして見たいといふ考へを持つてゐたのです。」

神崎は姉を見て、そして帳場の方へ行くやうにと言つたが、もぢもぢしてゐた姉は、弓島の顏をちらりと見てやはり先刻と同じいやうに對手になつてくれるなといふ表情をして見せた。それに神崎は昨日からまだ見たことのない鋭い輪廓の顏立ちになつてゐた。

「あなたはかうしてわたしが毎日坐つてゐるのが、自業自得だといふふうにお思ひでせう。そしてあれ程苦しんだ酒をやめないどころか、朝も晩も飲んでゐることにさぞ因業な奴だと思つてゐるでせう。實際、わたし自身ですらがこんなに酒をのんでゐては、きつと病氣が盛り返してくるだらうといふ恐怖があるのです。しかしそれだからなほ飲むやうになるのです。一時わたしは病氣中酒を見ることもいやでした。これは全く不思議でしたね、臺所で客のあるたびに樽から拔く酒の音がしても、身ぶるひするくらゐ厭でした。それがこの頃になつて酒なしにはどうしても退屈でゐられないのです。こんなことになつてからまる二年と少しになります。わたしには永いと言つていいかさへはつきり

しないくちゐです。まるで四十幾年も坐り込んでゐるやうな氣がするのです。」

神崎はこんな座行をしてから何人かの人死を聞き、そして世の中が不景氣になつたりしたことを言ひ、全くこの二年半の間に世の中がすつかり變化つてしまつたことまで言つた。たとへばこの春大火があつてから町の樣子がどんな風に變遷つたかも知らない。子供の時から每朝見た汽船の姿をも二年間はまるで見ないと言つた。しかしわたしはもうそんな事を考へてゐる間だけでもうんざりして、もう町や世の中はどうでもいいとさへ考へるやうになつたのです。わたし自身さへどう變るか明日にさへ分らない病氣なんですからね、さうですね、全く病氣をそとにしては何も考へることができないくらゐです。

「これは是非おききして置きたいことですがね。わたしが女らに座つて貰つて時々何か彈かしたりしてゐるのを、あなたは厭な顏をして見てゐましたね、すくなくともわたしの左ういふ詰らない道樂をあなたは見るに耐えない風をしてゐらしつた。わたしにはそれがよく分つてゐたんです。あなたばかりでなく家中のものが厭がり、あの女さへ時々居睡りをするくらゐ退屈してゐました。わたしは家中のものから厭がられてゐるほど、全く商當と言つてもいいくらゐに誰でもそばに居てもらひたかつたのです。若しわたくしが默つておとなしくしてゐたら、手のかからない病人だとしたら誰一人としてわたしのそばに居てくれはしなからうと思ふんです。家の中は忙しいし全くわたしは何時でもこにぽかんとしてゐなければならなかつたのです。それゆえわたしは誰でもできるだけ居て貰つてなるべく皆の仲間入りをしてゐたかつたのです。實際わたしはみんなから毛蟲のやうに嫌はれてゐますからね。」

弓島は神崎をさいぎつて、「あなたを嫌つてゐるといふことはないが、なるべくあなたを靜かにしてをきたいといふつもりだつたのでせう。あなたがさうして座つてゐる間にやはり考へが歪むことも考へなければなりませんね。」

「それは全くです。しかしわたしは自分ばかりが邪推してゐたりしてゐるものだとは思ひたくないのです。わたしはまだ何年もかうしてゐなければならないかも知れません。さう思ふと最う少しわたしはどうにかうまくこんな暮しを固めたいのです。」

弓島は次第に神崎が話し疲れて來て、言ふことが分らなくなることを感じた。これはよくない、成るべく早く此部屋を切り上げたいと思つた。それに神崎の目付が先刻ほどの鋭どさが失はれて、にぶい、瞳孔のひらいたやうな茫やりしたことを感じたからである。もし此上あと二十分も話し込んでゐたら神崎自身はへとへとに疲れてしまつて或ひは變な風になるかも知れないと思つた。も一つは弓島自身もひどく草臥れてしまつて早く寢床に就きたいものだと思つた。何のためにこんなに話をずるずるに引摺つて行つたかといふことに後悔を感じた。姉は姉で一言もいはないで凝然と神崎の目色を覗き込んで、慣れた調子でどういふふうに神崎が變化るかと、何氣ない風で注意を怠らなかつた。弓島は睡さうにして座を立つた。

「もつと話をして呉れませんか、ここで話をしてくれるのは君だけですから。」

「僕はすこし眠たくなつたものですから……。」

弓島はやつと部屋を出て、ほつとした。姉があとから、

「大變機嫌がよかつたのですよ、けれどもそのあとがいけないの、何時だつて左うなの。」

「中々しつかりしてゐるね、あの樣子なら大したことはないね。」

弓島は姉に別れ裏の家へかへると、おにいさんも手傳つて仕立物を急いでゐた。すぐ寢るには惜しい氣がして、渚の方へ出て見やうと思つた。

「でも兄さんとは話をしない方がいいんですよ。まだすつかり癒つたといふわけぢやないんですから、――どこか氣味のわるいところがあつたでせう。」
「いや、さうは思はなかつた。」
「わたし、兄さんの顏を見てゐると、これが兄妹かと思はれるくらゐ氣味の惡いことがあるんですよ。」
弓島は眉をしがめたおにいさんの顏をまじまじと見た。
「どうしてです。」
「あの眼で見られると、何とも言へないぞつとするものを感じるんです。兄妹だからひよつとしたらわたしにもあんな病氣が起りはしないかと思ひましてね。」
「そんなことがあるものですか。兄さんのは酒のせいですよ。」
弓島はいつになく薄暗い眼付をするおにいさんに笑つて見せて、つまらないことを氣にしてゐますねと言つた。
「けれども氣になりますわ。わたし時々かつとするときなぞ、すぐ兄さんの顏を思ひ出してあれだなと寒くなつてしまふんです。」
「妙に神經質ですね。そんな風には見えないが……」
「わたしこれでゐて神經家よ。」
さう言つておにいさんは、後家によくある若い聲で笑つて見せた。養子夫婦もそばで笑つた。しかし若しあぶないとしたら姉の方が氣もちの上で、變になつてもおにいさんは大丈夫ですよといふと、さうでせうかと安堵したやうに言つた。

「だから母屋へはよくよくの用事がなければ行かないんですよ。」
「その方がいいんですね。」
弓島は裏戸から濱へ出やうとすると、暗いから危なくないかと、小用に立つた若い妻君が裏戸から海の方を見て言つたが、波がしらの明るみが星ぞらに透いてそんなに暗くもなかつた。
海へつき出た料理屋の二階の障子が開け放たれ、飲んでざれ唄をうたつてゐる客の姿があらはに見えた。あたりの穏やかな靜かさを打壞して、女のきいきいうたふ聲が波の上に落ちて沈んで行つた。弓島は海の上にひびくそのざれ唄がなぜか身に沁み、あらはな電燈の下にゐる男女の姿を見つめた。姉、神崎、おにいさん、養子夫婦、さういふ人々の顔が交る交る眼に浮んで、防波堤を行く闇の中に消えて行つた。白いコンクリイトの上に暗い波が卷き返つてゐるのを、弓島はしやがんで氣の遠くなるまで眺めた。
翌朝、下枯れの胡瓜畑を弓島は姉に見送られながら、ふたりとも默つて歩いた。弓島は別に何も言ふことがなかつた。
「折角來つてもらつて却つて厭な思ひをさせたくらゐね。」
姉はおみやげの煎餅を買ふんだからと言つて、停車場への町すぢへ曲つた。
「そんなことはない。まあ、大切にするんですね。」
「ええ、ちよつと待つてゐて下さい。………」
姉は名物の煎餅屋へ這入つて行つて、包みをいくつも拵へさせた。弓島は低い湊の町並みの家を見てゐると、向ふから、見覺えのある女の顔が浮いて見えた。蜜のあかりでも色のいい久龍だつた。
「いまおかへりでございますか。」

久龍はまぶしく顔をあからめて言つた。

「ええ、どうもいろいろ……」

「またどうぞ入らしつて。」

久龍はさういふと姉が店の中にゐることを知らないで、べつに愛想笑ひもしないで別れて行つた。弓島は何となく振りかへつて女のうしろ姿を眺めた。

文士の眞蹟十二

文士の眞蹟十二ヶ月短册、頒布會

今回「文士の眞蹟十二ヶ月短册頒布會」を催します。之は我文壇の第一人者たる、左記十二先生に上等の短册へ俳句を揮毫して頂き、それを十二ヶ月に組合せ特別低廉の會費にてお頒けするので御座います。どうぞ左の趣意及び規定を御らんの上御入會下さいまし。

尾崎紅葉、正岡子規、夏目漱石諸先生の遺墨は非常に珍重され、短册一枚が六七十圓と云ふよい價であるのみならず却々得られません。只値が高いだけなら宜敷いが、さうなると必ず僞物が澤山出來まして、無辜の愛玩者を大にわざはひ致します。此の間も德田秋聲先生のお話しでありましたが、紅葉山人の短册なりと稱するものを見るに百枚の中九十九枚までは僞物だとのことでした。

全く人格者の筆蹟程高雅なものはありません。殊に色紙や短册へ和歌又は俳句を淸楚に書きましたのは、何とも云ひ譬せない趣がありますから、數寄者は非常に愛好致します。左れど何人も不用意で、それ等の先生が在世中は强ひてお願ひしやうともせず、一度故人となると皆樣が其の筆蹟をあさり出すゆゑ、忽ち前記の如く破格の價を生じ、隨て僞物贋物が無數に出るので御座います。

此の苦い經驗に鑑みて、是非現今の諸大家には御健在中に出來るだけ多く書いて頂き、之を眞の愛好家にお頒けして、幾何なりとも後世の同じ憾みを減じたいと思ひ、諸先生にお願ひ致しましたが、煩はしい揮毫などはいやだと申し、却々應じて下さいませんでした。然し前に述べたやうな眞面目な趣意により是非共御承諾願ひたいと、再三再四懇請致しまして漸く短册の揮毫を承知して頂き、此の會を催したので御座います。

此の如く我文壇の驍將ばかりが揃つて贊成して下さつたのは空前のことにて、將來のため誠に喜ぶべきであります。折角諸先生の諒解を得たのですから、當中央美術協會は所期の目的を達成すやう最善の力を盡します、短册は模樣も色も總て吟味して古代趣味の最上品を十二種作り、各月共續つたのへ揮毫して頂くことにしました。この十二先生のを一枚宛十二ヶ月に組合せますと非常に風雅なよいものになります。

頒布の方法は、毎月二枚宛配布し六ヶ月で十二枚全部配布濟みとなるやうにしました。一枚々々丹念に揮毫する肉筆をお頒け致すのでありますが、全く營利的計畫でないゆゑ會費はかやうに低廉なのです。

若し此の機會を逃すると五六年經たない中に又一枚何十圓と云ふ高價になり容易に需められなくなりませう。御希望の方は左の規定により至急御申込み願ひます。

ケ月短冊頒布會

規定

一、本會の筆者は左の十二先生なり（いろは順）

泉　鏡花先生　德田　秋聲先生　小山内　薫先生
上司　小劍先生　永井　荷風先生　長田　幹彦先生
室生　犀星先生　久米　正雄先生　久保田万太郎先生
芥川龍之介先生　佐藤　春夫先生　里見　弴先生

二、會費、毎月（二枚分）　金八圓　送費（内地五十錢 海外八十錢）

但し毎月二枚宛（即ち二先生分）配布するゆゑ、十二枚即ち十二ヶ月（十二先生分）全部の配布は六ヶ月間を要す。尚ほ一回に全部配布希望の方は其の旨申込み書に記入を乞ふ。此の場合は會費内十八圓送費九十錢也

三、申込金等一切不要會費及び送費は揮毫出來たる分より毎月二枚宛代金引換郵便にて送附し現品と引換へに頂戴す。東京市内は郵便によらず毎月御屆け致し其節會費を頂戴す。

四、短冊は、特別上製のものにて、各先生が得意の俳句を揮毫し、それを適宜に組合せたる十二ヶ月（十二枚）なり。此の十二ヶ月は必ず前記十二先生の筆各一枚を以て組合せたるものなり。

五、此の短冊は、短冊帖に挾むもよし、屏風、襖等に貼合せ又茶掛の小幅に仕立つるもよろし、尚ほ短冊掛に入れる時は毎月一枚宛掛替へて丁度一年中架まる。短冊帖及び短冊掛は普通品、上等品等各種あり。御希望の方には實費にて御頒けす。

六、申込み期日は、七月七日限りとす。但し期限内と雖も申込み餘りに多數なる時は謝絶することあるべし。

七、短冊は申込みを受けたる月より揮毫出來順に配布す發送の際は毎回必ず書面を以て御案内す

八、申込みは、普通の葉書又は手紙に『文士の眞蹟十二ヶ月短冊頒布會に入會す。揮毫出來の分より毎月二枚宛代金引換郵便にて送附相成度申込み候』と記し住所姓名を明細に記入、なるべく姓名の下に認印を捺して（東京市麹町區元園町中央美術協會）宛投函のこと

別に印刷せし趣意及び規定書あり。希望の方は郵券二錢封入御申越下さらば送呈す。

東京市麹町區元園町一ノ一九
中央美術協會
電話四谷五一九二番
振替口座東京二九七番

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區通神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　本郷區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛社
京都市七條停車場前	共盛社
同　新町通七條南入	大盛社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◉定價　金八拾錢郵税金貳錢五厘（海外郵税貳拾八錢）

冊數＼國別	内國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
	以上郵税共	

▲但し新年號春秋二期附録號増刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は内國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂　萬年社　告天社
正路喜社　豐國通信社　日本廣告社
信頼社　金蘭社　一星社

一誌代郵税　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一振替貯金　口座番號は東京三四番　長野三二〇五番なり

一郵券代用　は謝絶す　但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず

一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す

一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず

　一金二圓以上五圓迄　金七錢（集金委託料及發送料共）
　一金拾圓迄　金八錢

一中央公論及婦人公論　代金取纏め御拂込みの場合には各誌割當にて金額御指定を乞ふ

一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正十四年六月廿五日印刷納本（禁轉載）
大正十四年七月一日發行

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木鳥三

發行所　東京市丸ノ内ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話　長丸ノ内三〇二（當分不通）
牛込　五〇八九
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社秀英舍

央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區通神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　本鄉區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛社
京都市七條停車場前	共盛社
同　新町通七條南入	大盛社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◉定價　金八拾錢郵税金貳錢五厘（海外郵税貳拾八錢）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七冊分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

一 **誌代郵税** は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一 **振替貯金** 口座番號は東京三四番　長野三二〇五番なり

一 **郵券代用** は謝絶す　但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるるを拒まず

一 **代金引替** 小包の取扱は一切謝絶す

一 **集金郵便** 御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず

　一金二圓以上五圓迄　金七錢
　一金拾圓迄　金八錢
　（集金委托料及送料共）

一 **中央公論及婦人公論** 代金取纏め御拂込みの場合には各誌割當にて金額御指定を乞ふ

一 **受領證請求** は必ず返信料を要す

大正十四年六月廿五日印刷納本
大正十四年七月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木鳥三

發行所　東京市丸ノ內ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話　長丸ノ內三〇二一（當分不通）
牛込五〇八九
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社秀英舍

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

東京小石川研精社印刷